

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

— 佐原地区(1) —

1 9 8 8

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 千葉県文化財センター

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

— 佐原地区(1) —

1 9 8 8

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

東関東自動車道の横断する下総台地北部は、北方を利根川が東流し、派生する幾筋かの小河川によって刻まれた台地です。この地域は、昔から自然環境に恵まれていたとみえ、河川沿いの台地上には多くの遺跡がみられます。

ところで、東関東自動車道（市川～潮来間）は、全国的な高速自動車国道網整備の一環として計画されたもので、成田～潮来間（30.2km）の工事の延長に伴い、千葉県教育委員会では、同事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、日本道路公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。その結果、路線の変更等でできるだけ保存の方向をとりましたが、やむを得ず路線内にかかる遺跡については、発掘調査による記録保存の措置をとることで協議が整い、昭和53年4月より（財）千葉県文化財センターが発掘調査を実施してまいりました。

調査は昭和59年3月に終了し、計57ヶ所の遺跡から多くの貴重な資料を得ることができました。現在はこれらの各遺跡の整理作業を実施しており、成田地区と大栄地区については既に「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」として刊行しております。

このたび、佐原市に所在する15遺跡の整理作業が終了し、「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」として刊行する運びとなりました。本書に収載した遺跡のうち、小六谷台遺跡では古墳時代中期から後期にかけての住居跡群と良好な土器群、中山・馬場・東野遺跡では、平安時代の住居跡群とともに多くの墨書土器が検出されました。特に馬場遺跡の墨書土器は、当時の社会を解明する上で非常に貴重なものです。他に、中山遺跡では旧石器時代の石器集中地点6ヶ所、縄文時代早期の豊富な土器群、馬場・天王宮遺跡では縄文時代晩期の土器群等おおくの良好な資料が調査されました。

本書が学術資料としてはもとより、歴史に対する理解を深める資料として広く活用されることを望む次第です。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで種々御指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、日本道路公団東京第一建設局、佐原市教育委員会、地元関係諸機関各位の御指導、御協力に御礼申し上げますとともに、酷暑酷暑の中、調査に協力された多くの調査補助員の皆様から謝意を表します。

昭和63年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 山本孝也

凡 例

1. 本書は、日本道路公団東京第一建設局による東関東自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本道路公団東京第一建設局の委託を受け、千葉県教育委員会の指導を受けて財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 本書に記載された遺跡は、深沢遺跡、深沢第1遺跡、深沢第2遺跡、小六谷台遺跡、小六谷台第1遺跡、小六谷台第2遺跡、山王遺跡、中山遺跡、馬場遺跡、天王宮遺跡、ソウナ遺跡、東野遺跡、鳥ヶ丘第1遺跡、鳥ヶ丘第2遺跡、鳥ヶ丘第3遺跡の15遺跡である。
4. 整理作業および報告書の作成作業は、調査部長鈴木道之助、堀部昭夫、部長補佐岡川宏道、古内茂、班長高橋賢二の指導のもとに主任調査研究員栗田則久、藤岡孝司、調査研究員岡田光広、鈴木文雄、新田浩三、石橋宏克が行った。なお、発掘作業担当者は別記による。
5. 本書の執筆は、中山遺跡の石器を新田が、縄文時代を石橋が担当した。その他の執筆および編集は栗田が行った。
6. 発掘調査から報告書刊行にいたるまで、下記諸機関、諸氏の御指導、御協力をいただき、深く謝意を表す次第であります。千葉県教育庁文化課、日本道路公団東京第一建設局、同佐原工事事務所、佐原市教育委員会、平川南氏、金子真土氏、酒井清治氏、原田享二氏、郷堀英司氏、小倉均氏、野内秀明氏、原田昌幸氏、喜多圭介氏

目 次

序 文	
凡 例	
序篇	
第1章 地理的環境	3
第2章 調査概要と調査方法	5
第1節 各遺跡の調査概要	5
第2節 調査方法	7
第I篇 小六谷台遺跡 (No.26)	
検出された遺構と遺物	13
第1節 縄文時代	13
第2節 古墳時代	20
第II篇 中山遺跡 (No.30), 馬場遺跡 (No.31), 天王宮遺跡 (No.32)	
検出された遺構と遺物	72
第1節 旧石器時代	72
第2節 縄文時代	86
第3節 奈良・平安時代	114
第III篇 ソウナ遺跡 (No.33), 東野遺跡 (No.34)	
検出された遺構と遺物	161
第1節 縄文時代	161
第2節 奈良・平安時代	184
第3節 馬土手	214
第IV篇 深沢遺跡 (No.23), 深沢第1遺跡 (No.24), 深沢第2遺跡 (No.25)	
検出された遺構と遺物	219
第1節 深沢遺跡	219
第2節 深沢第1遺跡	223

第3節 深沢第2遺跡	224
第V篇 小六谷台第1遺跡 (No.27), 小六谷台第2遺跡 (No.28), 山王遺跡 (No.29)	
検出された遺構と遺物	229
第1節 小六谷台第1・第2遺跡	229
第2節 山王遺跡	238
第VI篇 鳥ヶ丘第1遺跡 (No.35), 鳥ヶ丘第2遺跡 (No.36), 鳥ヶ丘第3遺跡 (No.37)	
検出された遺構と遺物	243
第1節 鳥ヶ丘第1遺跡	243
第2節 鳥ヶ丘第2遺跡	245
第3節 鳥ヶ丘第3遺跡	245
終篇 考察	
第1章 縄文時代	249
第1節 中山遺跡出土の三戸式土器について	249
第2節 馬場・天王宮両遺跡の縄文時代晩期土器について	256
第2章 古墳時代—小六谷台遺跡の検討	259
第1節 土器	259
第2節 住居跡群の変遷	262
第3章 奈良・平安時代	263
第1節 佐原南部地域における土器様相	263
第2節 墨書土器の様相	266
1. 各遺跡出土の墨書土器	266
2. 出土状況よりみた墨書土器の機能	268

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	遺跡周辺地形図	4
第3図	グリット分割と確認調査設定図	7
第4図	小六谷台遺跡地形図	11
第5図	小六谷台遺跡遺構配置図	12
第6図	グリット出土縄文土器(1)	17
第7図	グリット出土縄文土器(2)	18
第8図	グリット出土縄文土器(3)	19
第9図	グリット出土石器	20
第10図	001号住居跡	20
第11図	002号住居跡	22
第12図	004号住居跡	23
第13図	004号住居跡カマド	24
第14図	005号住居跡	25
第15図	006号住居跡	26
第16図	007号住居跡	27
第17図	008号住居跡	29
第18図	009号住居跡	30
第19図	010号住居跡	31
第20図	011号住居跡	32
第21図	012号住居跡	33
第22図	012号住居跡カマド	34
第23図	013号住居跡	35
第24図	出土土器分類図	36
第25図	住居跡出土土器(1)	40
第26図	住居跡出土土器(2)	41
第27図	住居跡出土土器(3)	42
第28図	住居跡出土土器(4)	43
第29図	住居跡出土土器(5)	44

第 30 図	住居跡出土土器 (6)	45
第 31 図	住居跡出土土器 (7)	46
第 32 図	住居跡出土土器 (8)	47
第 33 図	住居跡出土土器 (9)	48
第 34 図	住居跡出土土器 (10)	49
第 35 図	住居跡出土土器 (11)	50
第 36 図	住居跡出土土器 (12)	51
第 37 図	住居跡出土土器 (13)	52
第 38 図	住居跡出土土器 (14)	53
第 39 図	住居跡出土土器 (15)	54
第 40 図	住居跡出土土器 (16)	55
第 41 図	住居跡出土土器 (17)	56
第 42 図	住居跡出土土器 (18)	57
第 43 図	住居跡出土土器 (19)	58
第 44 図	住居跡出土土器 (20)	59
第 45 図	住居跡出土土製品・石製品	60
第 46 図	101号土壌	61
第 47 図	102号土壌	62
第 48 図	101号土壌出土土器	62
第 49 図	103・104号柵列状遺構	63
第 50 図	グリット出土土器 (1)	64
第 51 図	グリット出土土器 (2)	65
第 52 図	中山・馬場遺跡地形図	69
第 53 図	中山遺跡遺構配置図	70
第 54 図	馬場遺跡遺構配置図	71
第 55 図	基本層序	72
第 56 図	旧石器時代調査範囲 (上段)・旧石器時代遺物分布図 (下段)	73
第 57 図	1・2 ユニット器種別分布図	74
第 58 図	3～6 ユニット器種別分布図	75
第 59 図	背面構成	76
第 60 図	出土石器 (1)	77
第 61 図	出土石器 (2)	78

第 62 図	出土石器 (3)	79
第 63 図	出土石器 (4)	80
第 64 図	出土石器 (5)	81
第 65 図	旧石器時代遺物分布図	84
第 66 図	出土石器	85
第 67 図	グリット出土縄文土器 (1)	86
第 68 図	グリット出土縄文土器 (2)	88
第 69 図	グリット出土縄文土器 (3)	90
第 70 図	グリット出土縄文土器 (4)	91
第 71 図	グリット出土縄文土器 (5)	93
第 72 図	グリット出土縄文土器 (6)	94
第 73 図	グリット出土縄文土器 (7)	95
第 74 図	グリット出土縄文土器 (8)	97
第 75 図	グリット出土縄文土器 (9)	98
第 76 図	グリット出土石器	99
第 77 図	グリット出土縄文土器 (1)	102
第 78 図	グリット出土縄文土器 (2)	104
第 79 図	グリット出土縄文土器 (3)	105
第 80 図	グリット出土注口土器	106
第 81 図	グリット出土縄文土器 (1)	108
第 82 図	グリット出土縄文土器 (2)	110
第 83 図	グリット出土縄文土器 (3)	111
第 84 図	グリット出土縄文土器 (4)	112
第 85 図	グリット出土石器	113
第 86 図	001～003号住居跡	115
第 87 図	004～006号住居跡	117
第 88 図	007～008号住居跡	119
第 89 図	009～010号住居跡	120
第 90 図	011～012号住居跡	122
第 91 図	住居跡出土土器 (1)	124
第 92 図	住居跡出土土器 (2)	126
第 93 図	住居跡出土土器 (3)	127

第94図	住居跡出土土器（4）	128
第95図	住居跡出土土器（5）	129
第96図	住居跡出土土器（6）	131
第97図	住居跡出土土器（7）	132
第98図	住居跡・グリット出土鉄製品・土製品・石製品	139
第99図	掘立柱建物跡	140
第100図	掘立柱建物跡出土土器	141
第101図	101～103号土壇	142
第102図	104～106・110・111号土壇	143
第103図	201・203・206号土壇	144
第104図	土壇出土土器	144
第105図	グリット出土土器	145
第106図	001・002号住居跡	149
第107図	003・004号住居跡	150
第108図	住居跡出土土器	152
第109図	004号住居跡出土墨書土器	153
第110図	住居跡出土紡錘車	154
第111図	土壇	155
第112図	ソウナ・東野遺跡地形図	159
第113図	ソウナ・東野遺跡遺構配置図	160
第114図	101・102号土壇	161
第115図	東野遺跡出土土器時期別割合	162
第116図	前期末～中期初頭無文土器口唇部形態模式図	162
第117図	グリット出土縄文土器（1）	165
第118図	グリット出土縄文土器（2）	167
第119図	グリット出土縄文土器（3）	168
第120図	グリット出土縄文土器（4）	169
第121図	グリット出土縄文土器（5）	171
第122図	グリット出土縄文土器（6）	173
第123図	グリット出土縄文土器（7）	174
第124図	グリット出土縄文土器（8）	176
第125図	グリット出土縄文土器（9）	177

第126図	グリット出土縄文土器 (10)	179
第127図	グリット出土縄文土器 (11)	180
第128図	グリット出土土製品	181
第129図	グリット出土石器 (1)	182
第130図	グリット出土石器 (2)	183
第131図	001号住居跡	185
第132図	002号住居跡	186
第133図	003号住居跡	187
第134図	004号住居跡	188
第135図	005号住居跡	189
第136図	006号住居跡	190
第137図	007・008号住居跡	192
第138図	009号住居跡	193
第139図	010号住居跡	194
第140図	住居跡出土土器 (1)	197
第141図	住居跡出土土器 (2)	198
第142図	住居跡出土土器 (3)	199
第143図	住居跡出土土器 (4)	200
第144図	住居跡出土土器 (5)	201
第145図	住居跡出土土器 (6)	202
第146図	住居跡出土土器 (7)	203
第147図	住居跡出土土器 (8)	204
第148図	住居跡出土支脚・石製品	212
第149図	住居跡・グリット出土鉄製品	213
第150図	グリット出土土器	213
第151図	馬土手	215
第152図	深沢遺跡遺構配置図	219
第153図	001～003号炉穴	220
第154図	グリット出土縄文土器	222
第155図	深沢第1遺跡遺構配置図	223
第156図	001・002号土壌	224
第157図	グリット出土石器	225

第158図	小六谷台第1・第2遺跡遺構配置図	229
第159図	001号住居跡	230
第160図	001号住居跡出土土器	231
第161図	グリット出土縄文土器	232
第162図	グリット出土石器	232
第163図	002号住居跡	233
第164図	003号住居跡	234
第165図	003号住居跡出土土器	236
第166図	101・102号溝状遺構, 103・104号土壇	237
第167図	グリット出土縄文土器	239
第168図	グリット出土縄文土器	244
第169図	グリット出土石器	245
第170図	馬土手	246
第171図	各遺跡出土の三戸期太沈線文土器	252
第172図	底部付近文様としての太沈線文	253
第173図	太沈線文土器に施文される文様の例	254
第174図	馬場・天王宮遺跡の晩期土器群分布状況	257
第175図	中山・馬場・東野遺跡出土土師器杯分類図	263

図 版 目 次

- 図版1 小六谷台遺跡
1. 遺跡遠景
2. 001号住居跡
- 図版2 小六谷台遺跡
1. 002号住居跡
2. 004号住居跡
- 図版3 小六谷台遺跡
1. 004号住居跡カマド
2. 005号住居跡
- 図版4 小六谷台遺跡
1. 006号住居跡
2. 007号住居跡
- 図版5 小六谷台遺跡
1. 008号住居跡
2. 009号住居跡
- 図版6 小六谷台遺跡
1. 010号住居跡
2. 011号住居跡
- 図版7 小六谷台遺跡
1. 012号住居跡
2. 013号住居跡
- 図版8 小六谷台遺跡
1. 101号土壇
2. 103・104号柵列状遺構
- 図版9 小六谷台遺跡
グリット出土縄文土器
- 図版10 小六谷台遺跡
住居跡出土土器
- 図版11 小六谷台遺跡
住居跡出土土器
- 図版12 小六谷台遺跡
住居跡出土土器
- 図版13 小六谷台遺跡
住居跡出土土器
- 図版14 小六谷台遺跡
住居跡出土土器
- 図版15 小六谷台遺跡
住居跡出土土器
- 図版16 小六谷台遺跡
住居跡出土土器
- 図版17 小六谷台遺跡
住居跡出土土器
- 図版18 中山遺跡
1. 遺跡遠景
2. 旧石器時代第1・第2ユニット石器出土状況
- 図版19 中山遺跡
1. 001号住居跡
2. 002号住居跡
- 図版20 中山遺跡
1. 003号住居跡
2. 005号住居跡
- 図版21 中山遺跡
1. 006号住居跡
2. 007号住居跡
- 図版22 中山遺跡
1. 007号住居跡遺物出土状況
2. 008号住居跡

図版23 中山遺跡

1. 008号住居跡カマド左袖上土器出土状況

2. 009号住居跡

図版24 中山遺跡

1. 010号住居跡

2. 011号住居跡

図版25 中山遺跡

1. 012号住居跡

2. 掘立柱建物跡

図版26 中山遺跡

1. 101号土壇

2. 110号土壇

図版27 中山遺跡

旧石器時代出土石器

図版28 中山遺跡

グリット出土縄文土器

図版29 中山遺跡

グリット出土縄文土器

図版30 中山遺跡

住居跡出土土器

図版31 中山遺跡

住居跡出土土器

図版32 中山遺跡

住居跡出土土器

図版33 中山遺跡

住居跡出土土器

図版34 中山遺跡

墨書土器（赤外線テレビ撮影）

図版35 馬場遺跡

1. 遺構状況

2. 001号住居跡

図版36 馬場遺跡

1. 002号住居跡

2. 003号住居跡

図版37 馬場遺跡

1. 004号住居跡

2. 004号住居跡カマド内土器出土状況

図版38 馬場遺跡

グリット出土縄文土器

図版39 馬場遺跡

住居跡出土土器

図版40 馬場遺跡

墨書土器（赤外線フィルム）

図版41 天王宮遺跡

グリット出土縄文土器

図版42 ソウナ遺跡

1. 遺跡（馬土手）全景

2. 馬土手断面

図版43 東野遺跡

1. 遺跡遠景

2. 001号住居跡

図版44 東野遺跡

1. 002号住居跡

2. 003号住居跡

図版45 東野遺跡

1. 003号住居跡遺物出土状況

2. 004号住居跡覆土中遺物出土状況

図版46 東野遺跡

1. 004号住居跡

2. 005号住居跡

図版47 東野遺跡

1. 006号住居跡

2. 006号住居跡炭化材・土器出土状況

図版48 東野遺跡

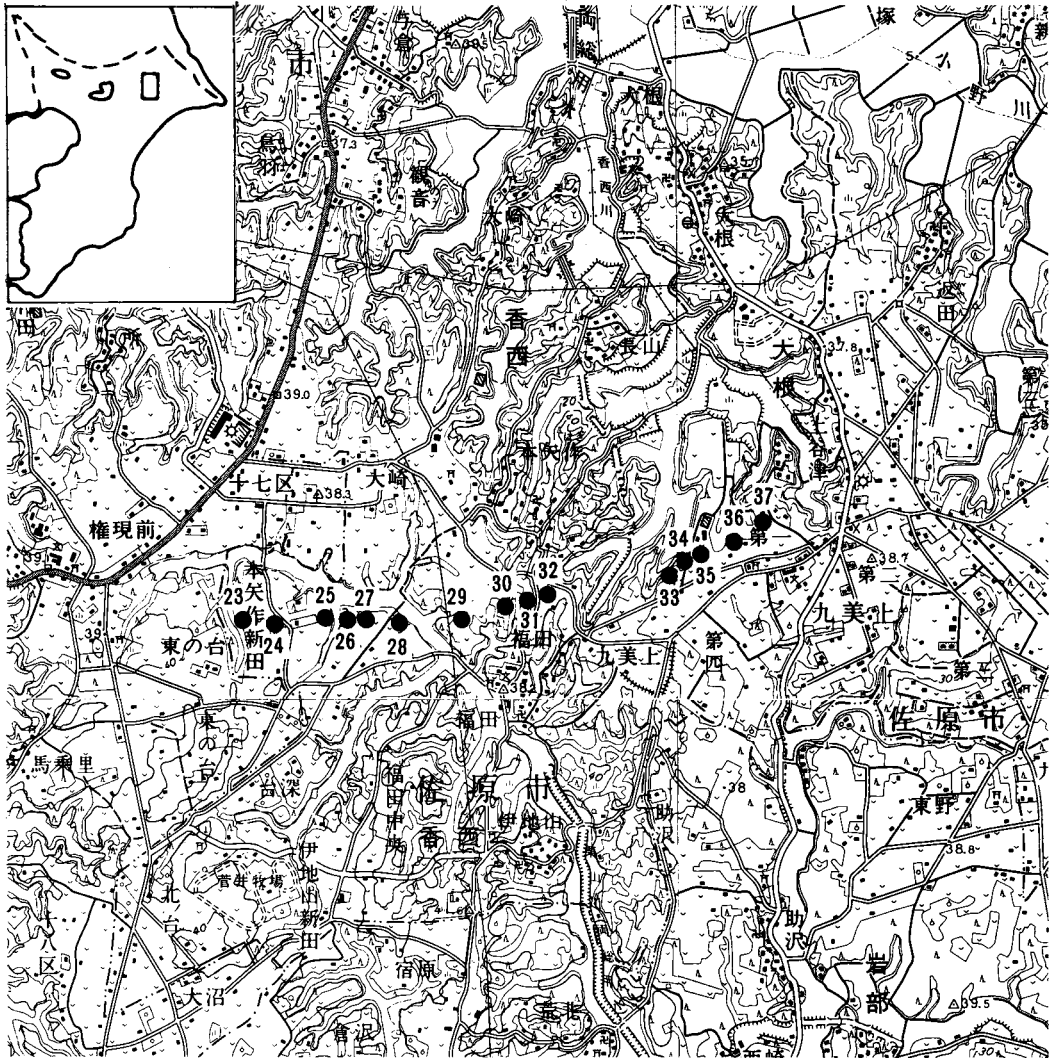
1. 007号住居跡
 2. 007号住居跡遺物出土状況
- 図版49 東野遺跡
1. 008号住居跡
 2. 009号住居跡
- 図版50 東野遺跡
1. 009号住居跡炭化材・土器出土状況
 2. 010号住居跡
- 図版51 東野遺跡
- グリット出土縄文土器
- 図版52 東野遺跡
- グリット出土縄文土器
- 図版53 東野遺跡
- グリット出土縄文土器
- 図版54 東野遺跡
- グリット出土土製品・石器
- 図版55 東野遺跡
- 住居跡出土土器
- 図版56 東野遺跡
- 住居跡出土土器
- 図版57 東野遺跡
- 住居跡出土土器
- 図版58 東野遺跡
- 墨書土器（赤外線テレビ撮影）
- 図版59 深沢遺跡
1. 遺跡全景
 2. グリット出土縄文土器
- 図版60 深沢第1遺跡
1. 遺跡全景
 2. グリット出土石器
- 図版61 深沢第2遺跡・山王遺跡
1. 遺跡全景（深沢第2遺跡）
 2. 遺跡全景（山王遺跡）
- 図版62 小六谷台第1・第2遺跡
1. 遺跡遠景
 2. 遺構状況
- 図版63 小六谷台第2遺跡
1. 001号住居跡
 2. 002号住居跡
- 図版64 小六谷台第2遺跡
1. 003号住居跡
 2. 住居跡出土土器
- 図版65 鳥ヶ丘第1・第2遺跡
1. 遺跡全景（鳥ヶ丘第1遺跡）
 2. 遺跡全景（鳥ヶ丘第2遺跡）
- 図版66 鳥ヶ丘第3遺跡
1. 遺跡全景
 2. 馬土手断面

序 篇

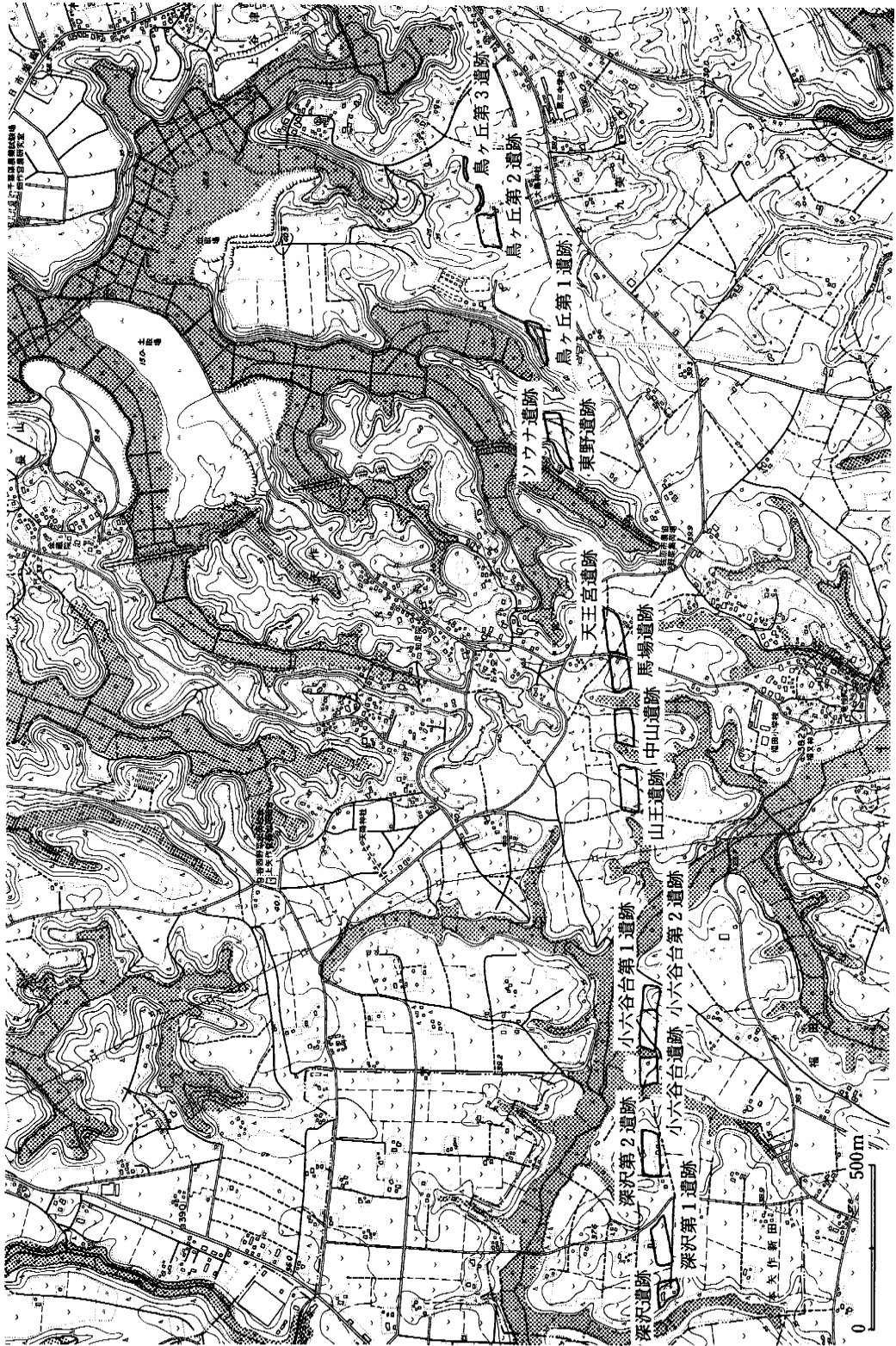
第1章 地理的環境

佐原市の所在する下総台地北東側は、標高40m程と下総台地のなかでも比較的高い。この地域は、利根川に流入する大小河川により複雑に開析された小規模な台地が展開し、その台地上に多くの遺跡が営まれている。

今回報告する小六谷台遺跡他14遺跡は、佐原市の南西側に位置する。現利根川より7km程南側に入った台地上に占地しており、利根川に流入する小野川の支流香西川と太平洋に注ぐ栗山川の分水嶺付近となる。各水系に分けるならば、深沢遺跡から天王宮遺跡までは栗山川水系、ソウナ遺跡から鳥ヶ丘第3遺跡までは香西川水系となろう。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 遺跡周辺地形図 (1/20,000)

第2章 調査概要と調査方法

第1節 各遺跡の調査概要

深沢遺跡は、昭和54年5月2日より5月31日までと昭和57年6月15日から6月30日までの二次にわたって調査された。対象面積は各々1604㎡、2500㎡で、確認調査のみで終了した。その結果、57年度調査分で炉穴が3基検出された。遺物はあまり多くないが、子母口式土器を主体とする。

深沢第1遺跡は、対象面積4500㎡で昭和56年4月1日より5月23日まで実施した。20%の確認調査の結果、土壌2基と包含層中より若干の石器と土器片が検出された。土器片は縄文時代前期浮島式土器である。

深沢第2遺跡は、対象面積5170㎡で昭和57年7月1日より7月31日まで実施した。10%の確認調査の結果、土壌6基が集中して検出された。遺物は縄文土器が若干出土したのみである。

小六谷台遺跡は、昭和57年8月1日より11月30日まで対象面積3760㎡を調査した。確認調査の結果全面に遺構が確認されたので、そのまま本調査に移行した。検出された遺構は、古墳時代中期から後期にかけての住居跡が12軒（003号住居跡は欠番）、土壌1基、外柱穴をもつ土壌1基、柵列状の遺構が2条検出された。台地先端部より伸びる2条の柵列状遺構に囲まれるように集落が展開しているが、調査区域外の先端部にさらに住居跡群が営まれているようである。上層遺構の調査後下層の確認を実施したが、遺物は検出されなかった。包含層中には、縄文時代早期前葉の燃糸文系土器群、中葉の沈線文系土器群、後半の条痕文系土器群を主体に比較的良好な縄文土器が出土した。

小六谷台第1遺跡は、対象面積6340㎡で昭和57年11月1日より11月30日まで実施した。10%の確認調査の結果遺構は検出されず、表土中より若干の縄文土器が出土したのみである。

小六谷台第2遺跡は、第1遺跡と並行して昭和57年11月1日より11月15日まで対象面積1920㎡の10%の確認調査を行った。その結果、住居跡及び周溝状遺構等が検出されたため、若干期間を置いて昭和58年2月16日より2月28日まで728㎡の本調査を実施した。検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡1軒、弥生式時代終末から古墳時代にかけての住居跡2軒の他に、古墳時代と思われる周溝が1基と若干の土壌である。

山王遺跡は、対象面積5950㎡で昭和57年12月1日より12月28日まで実施した。10%の確認調査の結果、時期不明の土壌2基と縄文時代早期を主体とした土器片が若干検出された。

中山遺跡は、昭和57年1月7日より3月31日まで対象面積4560㎡を調査した。2月15日まで環境整備及び10%の確認調査を行い、住居跡の遺構を確認した。2月16日より遺構調査に移行

序 篇

し、平安時代の住居跡12軒、掘立柱建物跡1棟、土壌等を検出した。住居跡は後世の攪乱により良好な遺存ではないが、比較的多くの土器を出土した。特に、墨書土器は多くの住居跡より検出されており、「成」・「郡上」は本遺跡を特徴づけるものとして注目される。3月16日までに上層遺構の調査を終了し、下層の調査に移行した。下層からは旧石器時代のユニットが6ヶ所確認された。包含層中より、縄文時代早期の土器を主体に比較的多くの土器が出土しており、特に沈線文系土器群は良好な資料である。

馬場遺跡は、昭和57年2月1日より2月27日まで対象面積5000㎡のうち1000㎡の確認調査を行った。調査中の中山遺跡と谷を挟んで向かい合っている台地のため入念に確認したが、住居跡4軒と若干の土壌を検出したにとどまった。確認調査の結果を基に、昭和57年5月1日より6月30日まで3000㎡の本調査を実施した。検出された遺構は、平安時代の住居跡4軒と時期不明の土壌4基である。住居跡内の遺物は多くないが、004号住居跡はきわめて小規模な住居跡でありながら、注目される墨書土器を含む杯が豊富に出土している。旧石器時代の調査は、上層遺構の調査と並行して行い、フレイクのみで構成されるユニットを1ヶ所検出した。包含層中からは縄文時代早期から晩期にいたる多くの土器を出土した。

天王宮遺跡は、馬場遺跡と同一台地上に占地するためその関連性が予想されたが、馬場遺跡と同様の確認調査を行った結果、関連する遺構は確認されなかった。確認調査は、昭和57年3月1日より3月31日まで対象面積5500㎡のうち1100㎡を実施した。検出された遺構は、土壌と溝が若干であるが、きわめて新しい時期の所産と考えられる。包含層中より、縄文時代晩期の土器を主体に良好な資料が検出されている。

ソウナ遺跡は、後述の東野遺跡と同一台地上にあり、台地縁辺部を巡るように高さ1.1m、幅3m程の馬土手が構築されている。調査は、昭和57年4月1日より5月31日まで調査区にかかる長さ170m分を実施した。

東野遺跡は、昭和57年5月1日より8月26日まで対象面積3600㎡を調査した。約1ヶ月を要して10%の確認調査を実施した結果、住居跡及び土壌等が検出されたので、そのまま調査区全域の本調査に移行した。検出された遺構は、平安時代の住居跡10軒と縄文時代の陥し穴2基である。住居跡内より土師器・須恵器の他に墨書土器及び二彩の火舎片が出土している。包含層中からは縄文時代早期から中期にいたる多量の土器片が検出された。

鳥ヶ丘第1遺跡は、対象面積4410㎡で昭和57年8月16日より8月31日まで行った。10%の確認調査の結果、遺構は検出されず、若干の縄文土器が出土したにすぎない。

鳥ヶ丘第2遺跡は、対象面積6000㎡で昭和57年9月16日より10月2日まで行った。10%の確認調査の結果、遺構は検出されず、若干の縄文土器と石斧が1点出土したにすぎない。

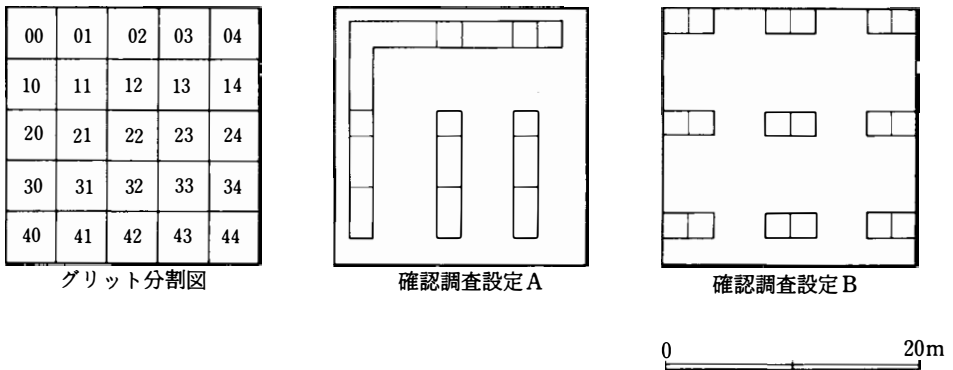
鳥ヶ丘第3遺跡は、台地縁辺部を高さ0.7m、幅3m程で巡る馬土手である。調査は昭和57年

4月1日より5月31日まで調査区にかかる長さ170mを実施した。遺物の出土はまったくみられなかった。

第2節 調査方法

発掘調査は、対象となる調査区をすべて包含できるように公共座標（第IX系）を基準とした20m方眼の発掘区を設定して実施した。この発掘区は、西から東に向けて順にA・B・C…、北から南に向けて順に0・1・2…とし、それぞれA1・B2等と呼称した。さらに20m方眼を4mごとに分割して小グリットを設け、第3図のように00～44までの番号を付した。

確認調査にあたっては、トレンチ（第3図A）及びグリット（第3図B）の両者が採用されているが、これは昭和56年度中に担当調査員の協議によりAからBへ移行した結果である。すなわち、A方法は深沢・深沢第1遺跡、B方法は深沢第2遺跡から鳥ヶ丘第3遺跡までとなる。なお、馬場遺跡と天王宮遺跡については4×4mのグリットを全掘しており、20%を越す確認調査となっている。



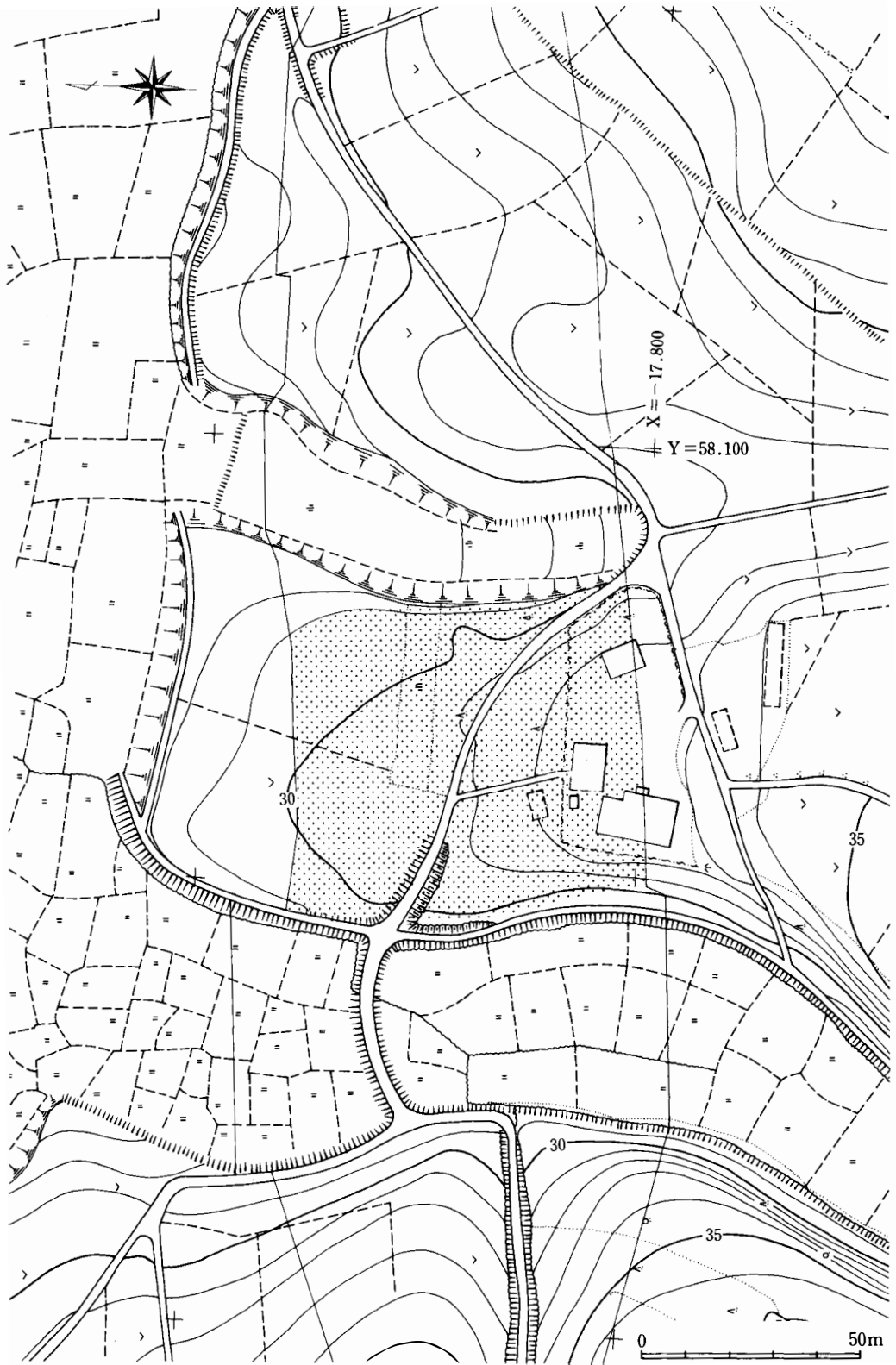
第3図 グリット分割と確認調査設定図

第 1 篇

小 六 谷 台 遺 跡 (No.26)

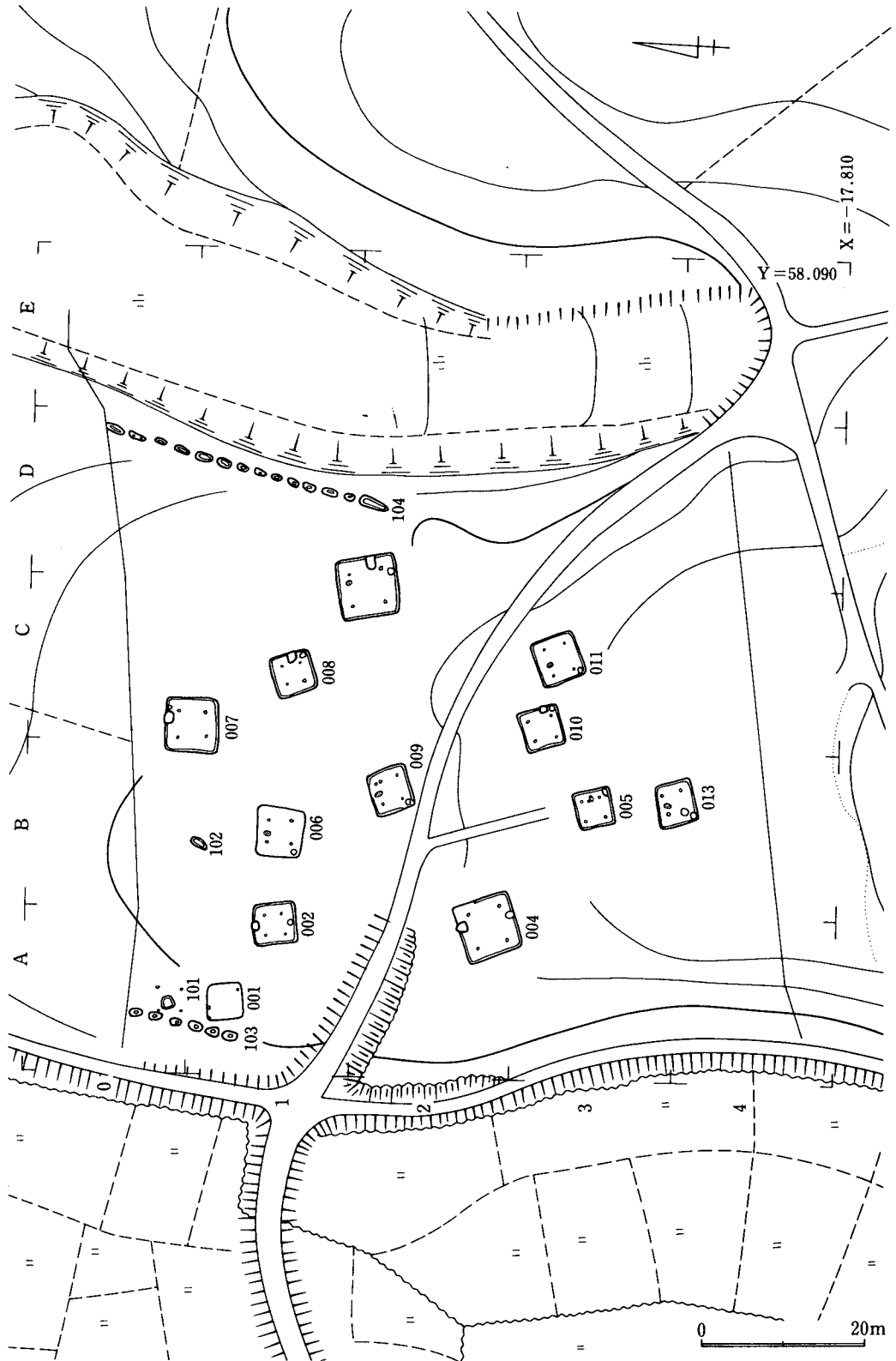
遺跡コード 209-012

調査担当者 高橋博文, 岡田光広



第4図 小六谷台遺跡地形図

小六谷台遺跡 (No.26)



第5図 小六谷台遺跡遺構配置図

検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

本遺跡より出土した縄文時代の遺物はすべて包含層出土のもので、当該期の遺構は検出されなかった。

グリット出土縄文土器（第6～8図，図版9）

縄文式土器は、早期前半の撚糸文系土器群を主体に、早期中葉の沈線文系土器群および後半の条痕文系土器群、また数点ではあるが前期，中期，後期のものもみられる。

第I群土器

本群は早期前半の撚糸文系土器群である。主として文様要素の観察から以下のように分類できる。

第1類（1，2）

口縁部が外反し，口唇端部に縄文が施されるものである。1はわずかに外反する口縁部を呈し，口唇端部および頸部に単節縄文（RL）を施す。2は口縁部が肥厚し，外反する。口唇下および頸部に施される縄文原体はいずれも単節縄文（RL）である。1・2とも胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。内面はナデによる調整が施される。

第2類（9，23）

口縁部がわずかに肥厚・外反し，頸部および口唇部に撚糸文（R）が施されるものである。9，23は同一個体と思われる，補修孔を有す。胎土に白砂粒を含み，焼成良好。内面は指ナデによる調整痕を横方向に残す。

第3類（3～8，10～15，21）

撚糸文または縄文を比較的強く施文するもので，条間隔の密なものがほとんどである。3～7は口縁部がわずかに外反しながら開く器形を呈す。口唇部は肥厚せず，撚糸の施文は口縁直下から行われている。胎土中には多量の白砂粒と少量の小石粒が認められ，1・2類土器の胎土に比べ粗いものである。10はやや丸味を帯びて直立する口縁部である。撚糸が口唇部にかかって施文されている。11はやや外反する口縁部であるが，口唇部は肥厚しない。胎土に白砂粒・小石粒を少量含む。焼成良好。12～15は胴部片である。施文される撚糸の原体は14のみL，他はRである。いずれも胎土に白砂粒・石英粒等を含み，荒れた感を呈する。21はやや外反する口縁部で，原体はLR縄文が施される。胎土に砂粒を多く含み，器面は荒れている。

第4類（16～20）

撚糸文または縄文が浅く施されるものである。全体に口唇部の断面形は丸味を帯び，頸部よ

り厚みを増す。16は原体Rの捺糸を一旦口縁直下に軽く施文し、胴部には捺糸の方向を若干変えて施文している。胎土に石英粒を含み、内面はよく研磨される。17は捺糸原体Lを口唇直下から施文する。口唇部は平坦で、内面はよく研磨される。胎土に石英粒を多く含み、焼成は良好である。18・19は口唇部の丸味が顕著なもので、捺糸原体はいずれもRである。内面はよく研磨される。20は口唇部にかかって縄文が施されるものである。胎土に小石粒・石英粒を含み、焼成は良好である。本類は全体に焼成が良好で、内面もよく研磨される。

第5類 (22, 24～35)

口唇直下に無文帯をもつものである。22は口唇直下に狭い無文帯を有し、原体Rの捺糸が施文される。胎土に白砂粒を多く含み、内面は横ナデにより調整されている。焼成は良好である。24は口縁断面が緩やかに内湾するものである。施文される捺糸原体はRで、内面は横ナデ調整を施す。胎土に砂粒を含む。25は胴部片で、24と同一個体と思われるため本類に収めた。26～28は条間隔の広い縄文が施される。施文原体は26・27がLR, 28はRLである。いずれも胎土に白砂粒を多く含み、内面はよく研磨される。29・30は口唇直下の無文帯の幅がやや広いものである。条間隔の狭い縄文が施され、原体はいずれもRLである。胎土に白砂粒を多く含み、内面はよく研磨される。31・33は口唇直下の無文帯幅が狭く、縄文の条間隔が比較的粗いものである。原体は31がRL, 32・33がLRである。胎土にはやはり白砂粒を多く含み、内面は研磨される。34・35はともに器面の荒れた土器で、原体Rの捺糸が施文される。胎土中に白砂粒を含み、34には石英粒も多く含まれる。内面はいずれも横ナデ調整を施す。

第II群土器

本群は早期中葉の沈線文系土器群である。

第1類 (36～45)

比較的細く浅い平行沈線により文様の描出がなされるものである。36は直立する口縁部で、口唇部断面は平坦である。横位の細沈線間に右傾・左傾の細沈線を連続的に施文する。胎土に白砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。37・38も横位と斜位の細沈線を併用したものである。37では縦位の細沈線も認められる。いずれも胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。39～41, 43は細沈線と刺突文が併用されるものである。細沈線と刺突文の施文は同一工具による。いずれも胎土に白砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。44・45は細沈線の方向の不規則なものである。いずれも胎土に白砂粒・小礫を含み、焼成はやや不良である。本類は全体に細沈線を多用するもので、その間隔は密である。

第2類 (46～53)

太沈線を主体に文様が施文されるものである。46は横位と縦位の太沈線が施される。胎土に白砂粒の混入が目立つ。47・50は縦位の太沈線、49・52・53は太沈線に加え、刺突文が施文さ

れるものである。51は角頭状を呈する口縁部で、口唇直下に2条の細沈線が巡り、以下は縦位の太沈線と短沈線を矢羽状に施文する。本類は全体に赤褐色に近い色調のものが多い。胎土に砂粒を含み、焼成はすべて良好である。

第3類 (54・55)

細沈線の間隔をやや開けて施文されるものである。54・55はいずれも胎土に砂粒を含んでいる。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈す。細沈線の施文はやや雑な感を受ける。

第4類 (56～62, 65)

貝殻腹縁等の圧痕文が施されるものである。56は細い粘土紐を貼り付けた隆帯上に貝殻背圧痕がみられる。隆帯に沿って沈線文も施され、下方では曲線状の平行沈線文が描出される。57・59は横位の平行沈線文を主文様とし、沈線間に貝殻腹縁文を施す。58は逆に平行沈線の外側に貝殻腹縁文を配する。60は平行沈線と結節沈線が併用され、貝殻腹縁文は結節沈線を区画文とした中に充填されるものであろう。61・62は平行沈線文が直線状・曲線状に描出されて文様を構成する。65は波状口縁の頂部で、波頂部を中心に縦位・斜位の貝殻腹縁文を施す。以下は三角形の結節沈線文が方形の文様を構成すると思われる。本類はすべて胎土に微量の繊維を含んでおり、焼成の良好なものが多い。

第III群土器

本群は早期後半の条痕文系土器群である。

第1類 (63・64)

円孔の施されるものである。63・64はいずれも波状口縁を呈するもので、口縁部に器表側から円孔を施す。円孔は貫通するものとしなないものがあるが、両破片をみる限り貫通しないものの方が多い。胎土に微量の繊維を含み、表裏面ともに横位の擦痕が残る。

第2類 (66～68)

隆帯上に絡条体圧痕を施すものである。66～68はいずれも胎土に含まれる繊維の量が多い。口縁直下にタガ状の隆帯を配し、口唇部およびタガ状隆帯上に絡条体圧痕を施すものである。

第3類 (69)

表裏ともに条痕文を施すものである。69は条痕を横位・斜位に施す。胎土に繊維を多く含み、焼成は不良である。

第IV群土器

前期の土器を一括した。

第1類 (70・71)

胎土に繊維を含むものである。70・71ともに多量の繊維を含み、施文される原体は、70が複節RLR, 71が単節RLである。

第2類 (72~78)

いわゆる貝殻波状文を施すものである。72・73は比較的大形のハマグリ等の貝殻腹縁をやや雑に施す。74も同様の貝殻腹縁であるが、整然とした波状文を描出する。75~77はサルボウ等の放射肋を持つ貝による波状文が描かれる。78はわずかに外反する口縁部で、口唇部と口唇下部に短沈線による刻目列を加える。

第3類 (79~82)

無文地に刺突文を加えたもので、79~81は刺突と同時に隆起部を形成する。いずれも輪積痕を残し、接合部に刺突文を施す。施文工具は多載竹管であろう。82は多載竹管を深く刺突し、器面は研磨整形される。

第4類 (83)

平行沈線による区画文の内側を貝殻腹縁文で充填するものである。器面はよく研磨され、焼成も良好である。いわゆる磨消貝殻文を施すものである。

第V群土器

中期の土器群である。

第1類 (84・85)

結節縄文により羽状縄文を構成するものである。84は折り返し口縁を呈し、上帯LR、下帯RLの羽状縄文が施される。85も同様である。

第2類 (86~91)

86はわずかに波状を呈すると思われる口縁部で、隆帯により渦巻状の文様を描くものであろう。口縁部文様帯内はLR縄文を横位に回転施文する。87~90は磨消縄文帯の垂下する胴部片である。原体はすべて単節RL縄文である。

第VI群土器

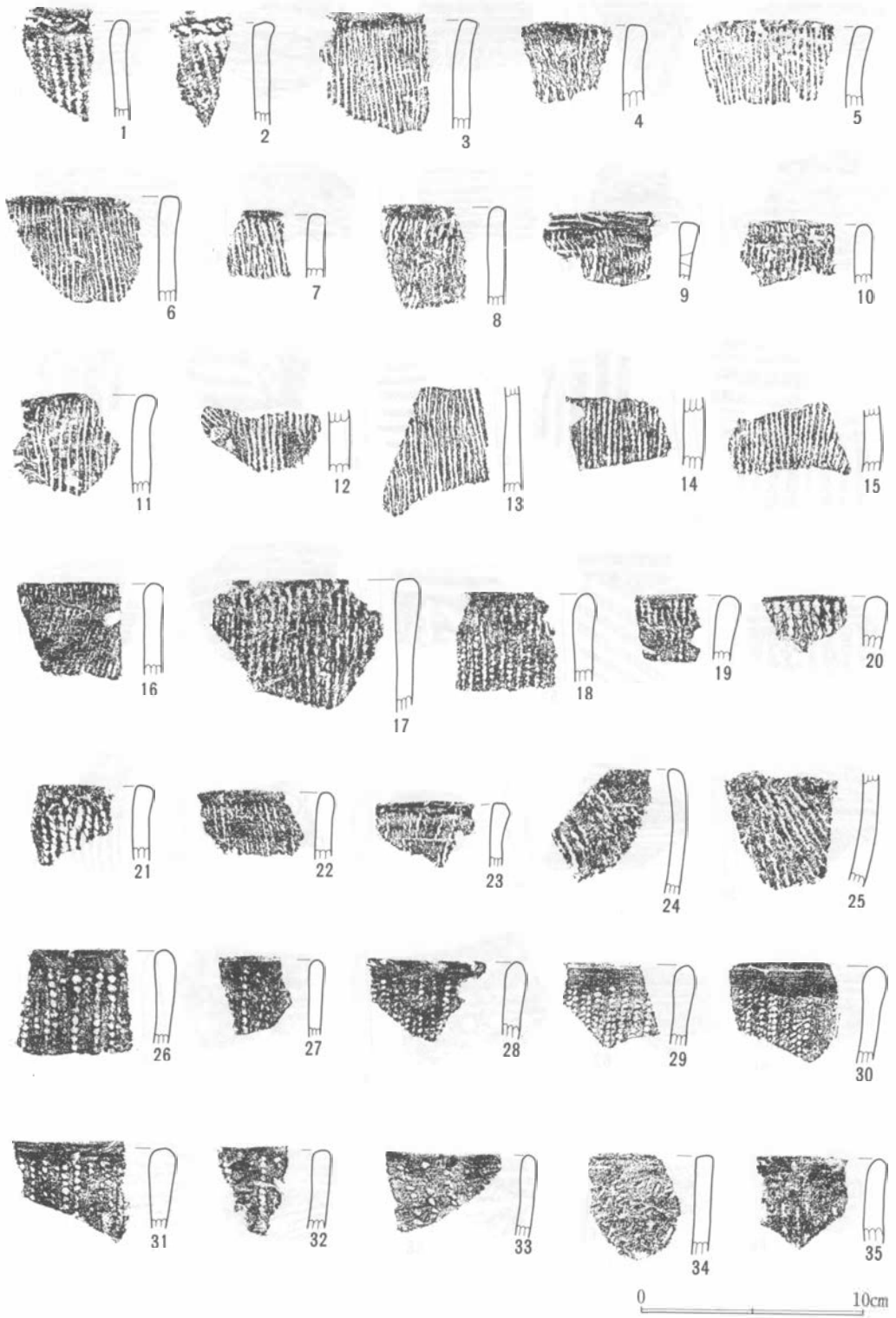
後期の土器を一括した。

第1類 (92~94)

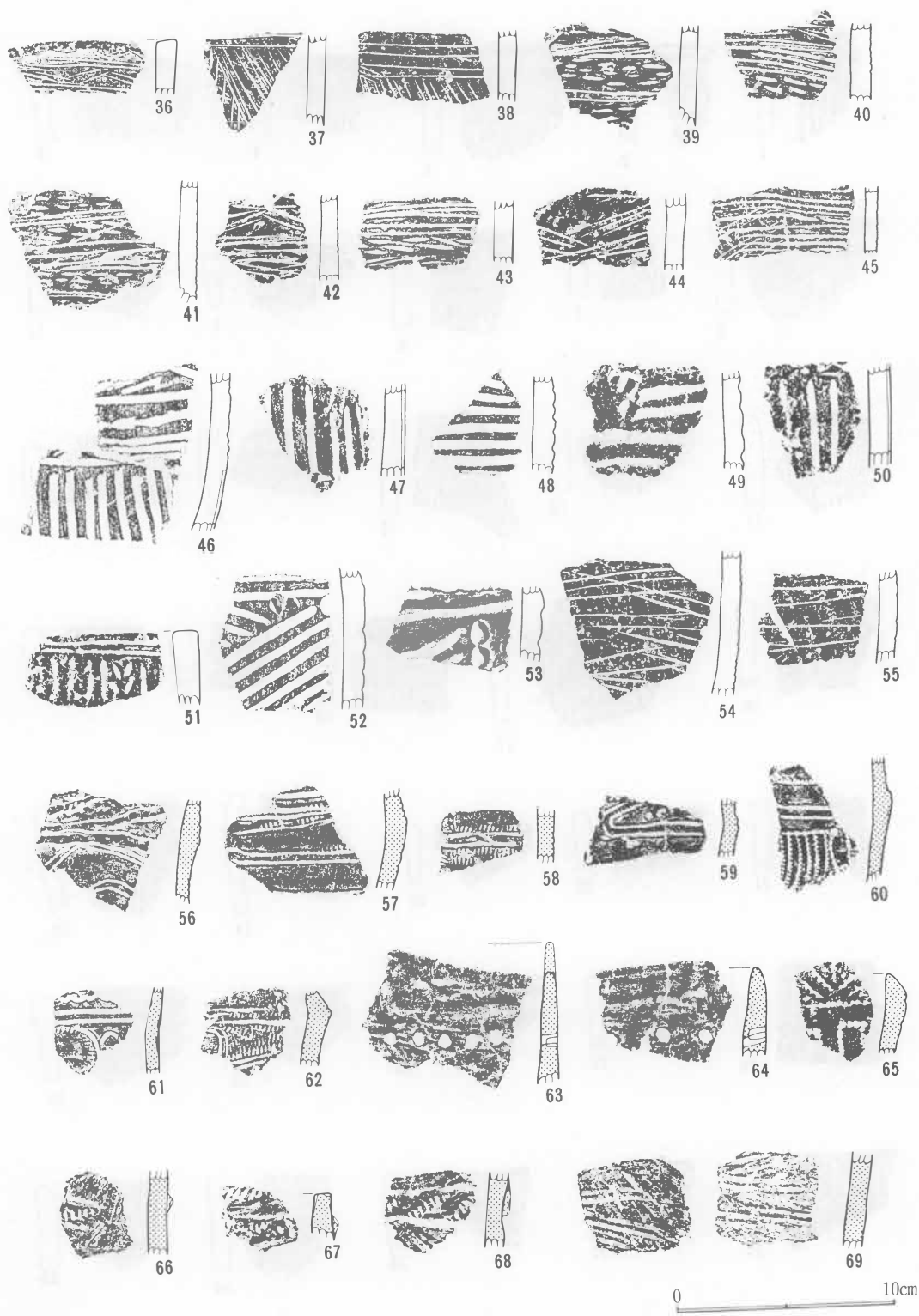
92は緩やかな波状口縁の頂部付近に横位2連の円形刺突文を有し、さらにそこから1本の沈線が垂下する。縄文は横位に回転施文し、原体はLRである。93・94は蛇行垂線の施される胴部片である。

第2類 (95・96)

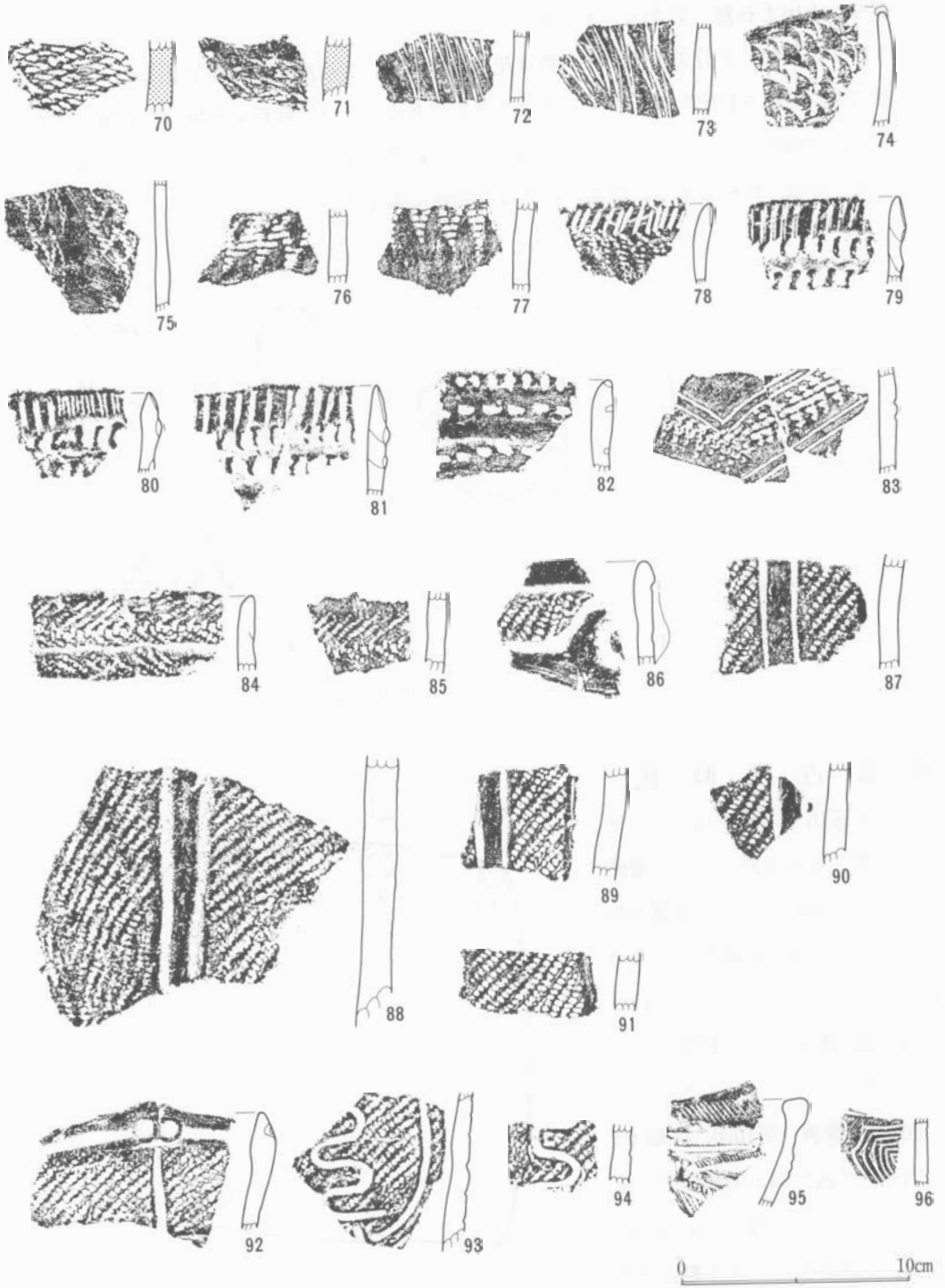
95は隆起帯縄文と隆線上に刻目を施すものである。96は幾重もの沈線により幾何学的な文様が描かれる。いずれも縄文の撚りは細かく、95がRL、96がLRの縄文原体を用いる。



第6図 グリット出土縄文土器(1)



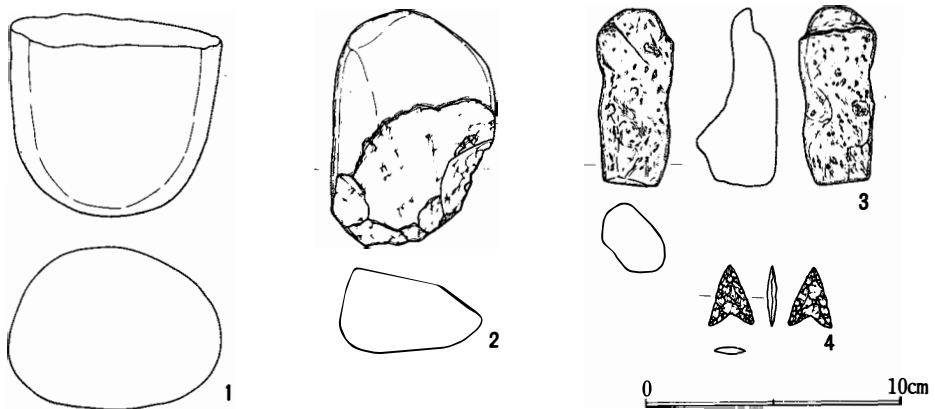
第7図 グリット出土縄文土器(2)



第8図 グリット出土縄文土器(3)

グリット出土石器 (第9図～1～4)

1は、磨石で、半分欠損する。石質は花崗岩である。2は片刃の礫斧である。一方向からの打撃により刃部を作出している。石質は玄武岩である。3は、軽石を利用した石製品である。全面的に使用痕が認められ、幾筋もの線が認められる。4は、チャートを用いた石鏃である。形態は二等辺三角形を呈し、細部の調整は両側縁に集中する。



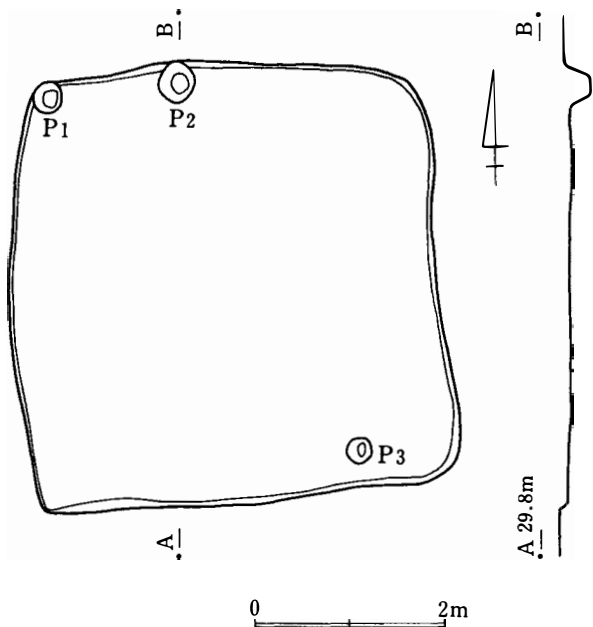
第9図 グリット出土石器

第2節 古墳時代

北側に突出した狭少な舌状台地上に位置する本遺跡には、古墳時代中期から後期に亘って集落が形成される。台地の両肩部に2条の柵列が設けられ、その内側に12軒の住居跡が配置される特徴的な状況が認められる。

001号住居跡 (第10図, 図版1)

調査区の西北隅, 103号柵列の東側に近接する。規模は4.6×4.5mを測り、平面形はやや不整な正方形を呈す。掘り込みがきわめて浅く、壁は確認面より3～15cmを残すのみである。床面はソフトロー



第10図 001号住居跡

ム中に形成され、踏み固められた状況は認められない。柱穴は3か所検出されたが、 P_2 は全体に軟質で疑わしい。平面形は略円形を呈し、深さは $P_1 \cdot P_2$ が22cm、 P_3 が33.5cmを測る。炉・カマド等は検出されなかったが、床面上に若干の焼土の散布がみられた。

遺物はほとんど出土しなかったが、小形の埴1点のみ実測できた。本跡に伴うかどうかは不明である。

002号住居跡（第11図，図版2）

A1区，001号住居跡の南東4m程に位置する。規模は5.0×5.1mを測り、平面形は正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50cm前後を測る。周溝はカマド部分も含めて全周し、幅15～20cm、深さ5～7cmを測る。床面はハードローム中に形成され、平坦で堅緻である。特に柱穴間は良好である。柱穴は対角線上に $P_1 \sim P_4$ の4本を検出した。径20～30cmの小規模な円形を呈し、深さは50～60cmを測る。 P_1 内に径15cm、現高22cm程の柱と思われる炭化材が遺存する。南壁沿いに径80cm、深さ32cm程の不整なピット P_5 が附設される。粘土が若干みられることより、貯蔵穴の可能性も考えられる。

カマドは北壁のほぼ中央に位置する。壁外に幅60cm、長さ20cm程で半円状に掘り込み、煙道部は燃焼部より急激に立ち上がる。燃焼部は長形状を呈し、壁より1m程内側に径70cmの円形プランを呈す焚き口部が設けられる。床面より10cm程掘り込まれる。袖は砂質粘土を部材とする。天井部は崩落しており、底面近くに厚さ10cm程で焼土が堆積する。

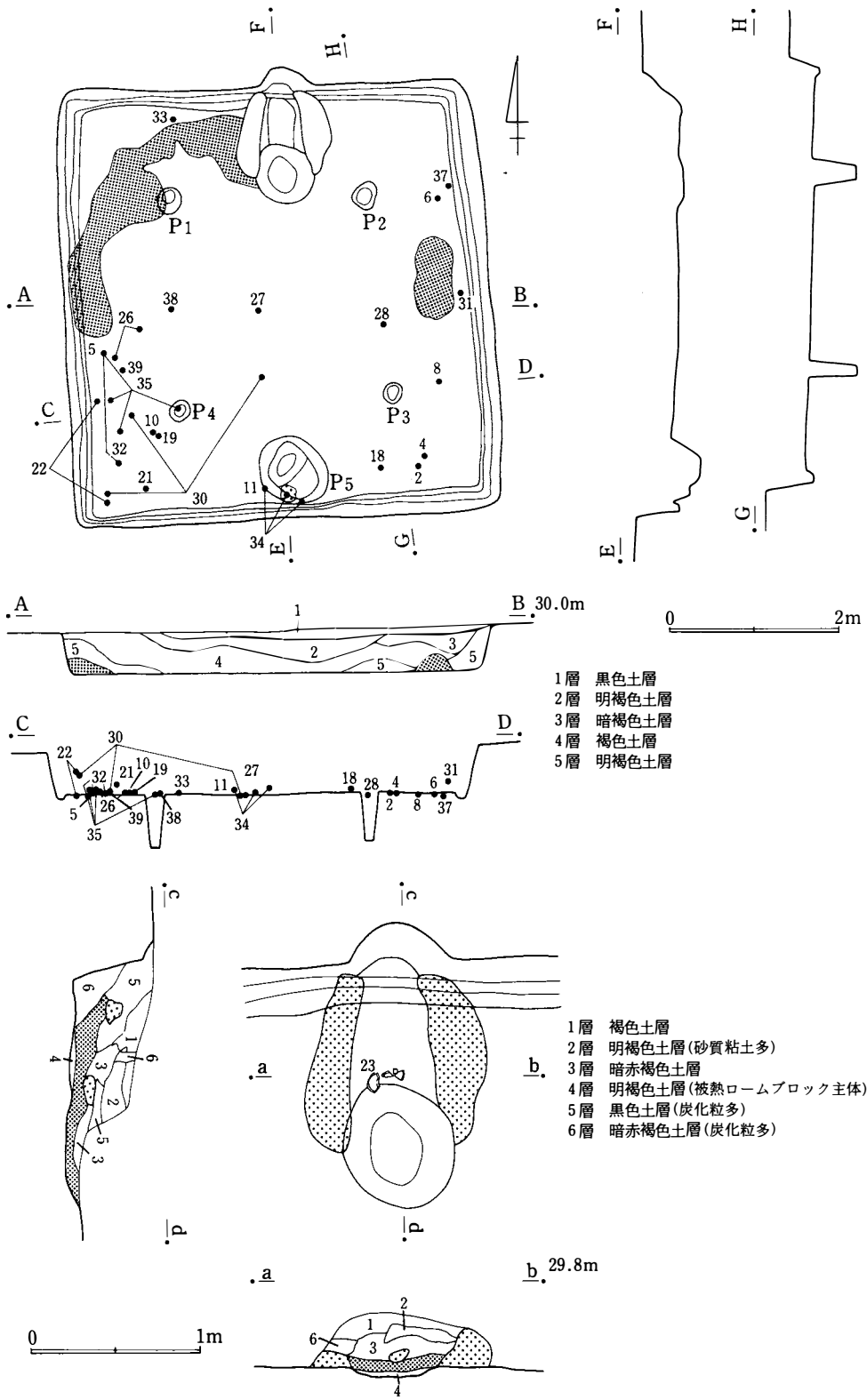
遺物は、住居跡南半部、特に南西コーナー付近に多く検出された。図示した土器の多くは床面上の出土である。

004号住居跡（第12・13図，図版2）

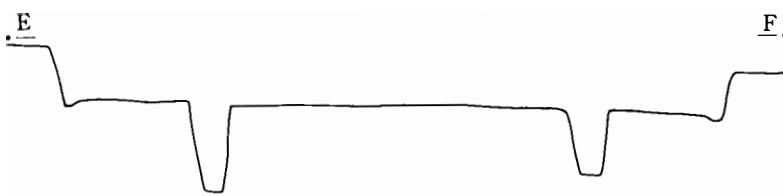
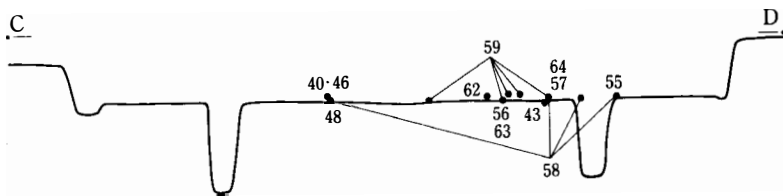
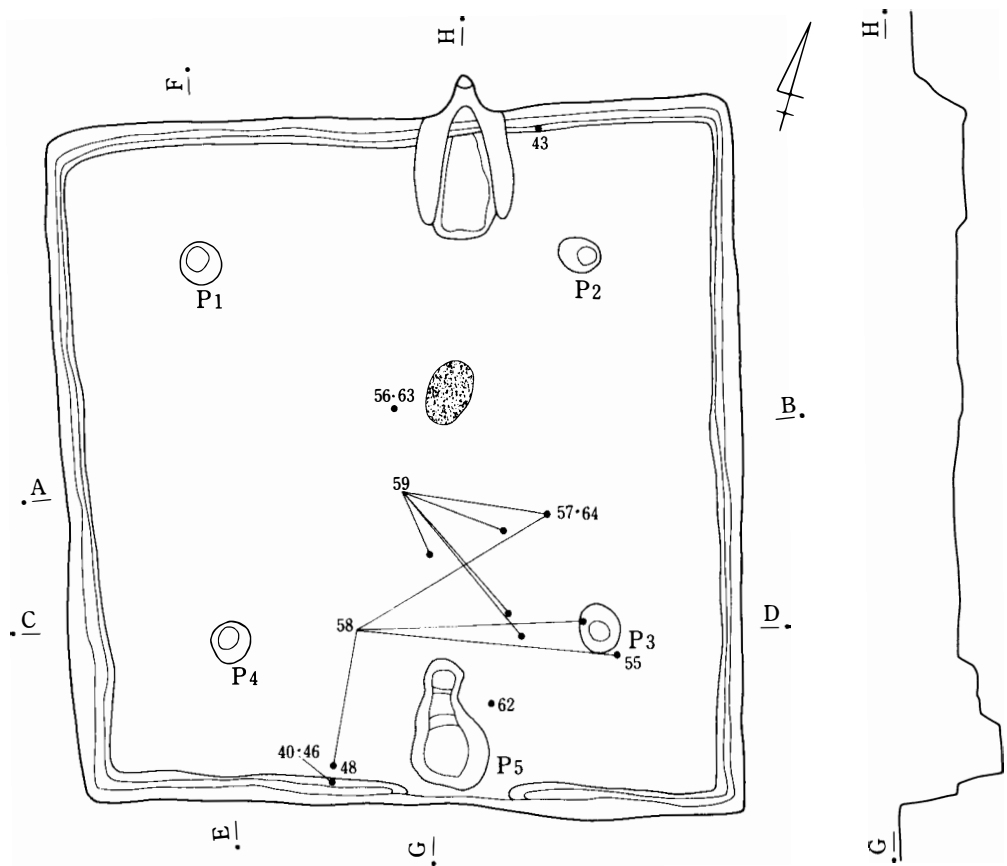
A2区南東端に位置する。規模は7.1×7.1mを測り、平面形は正方形を呈する。本集落の中では大形の住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50～60cmを測る。周溝は P_5 に面する部分を除き全周し、幅20～40cm、深さ5cm前後を測る。床面はハードローム中に形成され、ほぼ平坦で、堅緻である。柱穴は対角線上に4本検出された。径40cm前後の略円形を呈し、深さは、 P_1 が最浅66cm、 P_4 が最深86cmを測る。掘り方は若干外傾する。南壁中央部に接するかのよう長軸1.3m、短軸0.8mの不整なプランを呈す P_5 が設けられる。最深47cmを測り、内側に向かって階段状に浅くなる掘り方を有す。

カマドは北壁の中央やや東寄りに構築される。壁外に幅1m、長さ0.8m程で三角形状に掘り込み、煙道部は燃焼部より42°の角度で立ち上がる。燃焼部はカマド下の周溝より長三角形状に長さ2.2m、深さ0.2m程で掘り込まれる。焚き口部が最も広くなる。袖は砂質粘土により構築されるが、基底部にはローム粒を含む茶褐色土が敷かれる。天井部は崩落しているが、煙道部を形成する部分が一部残存する。焼土の堆積はほとんど見られない。カマドの前面1.5m程の床

小六谷台遺跡 (No.26)



第11図 002号住居跡

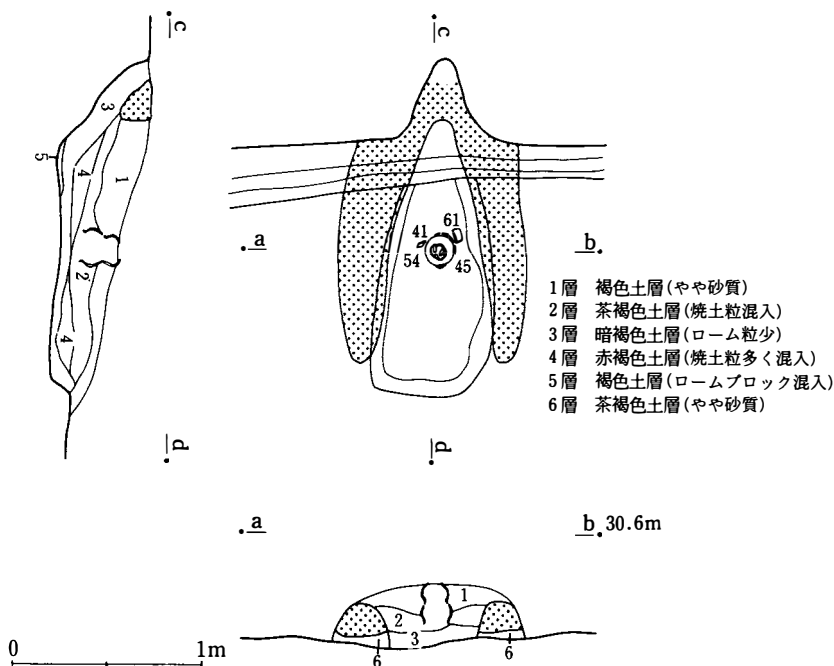


第12圖 004号住居跡

小六谷台遺跡 (No.26)

面上に70×46cmの規模を測る焼土遺構が検出された。楕円形プランを呈し、床面より10cm掘り込まれる。底面が熱を受けている状況より炉と考えられる。

遺物は南東側を中心に、床面上より出土する。杯と甕が主体を占める。南壁に接するように土玉が1点検出されたが、小片のため図示し得なかった。カマド内からは、底部を打ち欠いた2個体の小形甕が倒位に重ねられた状況で検出された。54が上、61が下である。



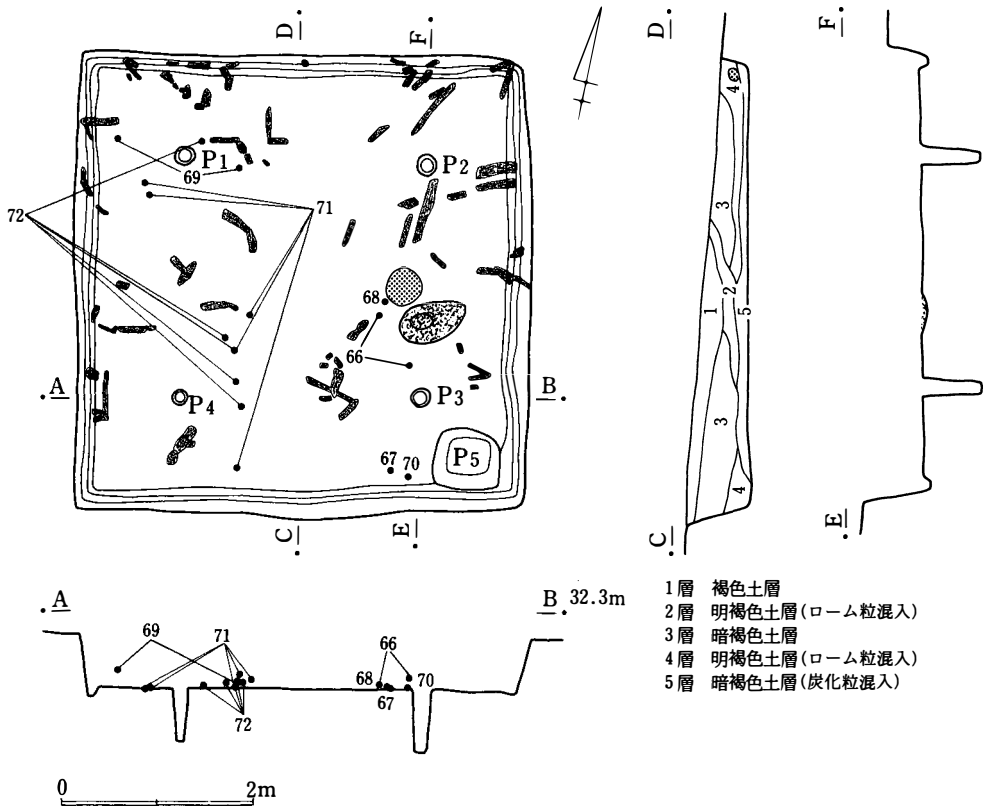
第13図 004号住居跡カマド

005号住居跡 (第14図, 図版3)

B3区, 004号住居跡の南東16m程に位置する。規模は, 4.8×4.8mを測り, 平面形は整美な正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 北側に若干傾斜する位置にあるため, 壁高は南壁で68cm, 北壁で28cmを測る。周溝は, 幅10cm前後, 深さ8cm程で全周する。床面はハードローム中に形成され, 平坦で堅緻である。特に柱穴間は良好である。柱穴は対角線上に4本検出された。P₁~P₄とも径15~20cmと小規模である。深さは, P₁が76cm, P₂・P₃が62cm, P₄が54cmを測る。南東コーナーの周溝に接する位置に, 70×60cmの方形を呈する貯蔵穴が設けられる。覆土中に炭化材・焼土粒を若干含む。

炉は, P₂・P₃間のややP₃寄りに位置する。長径70cm, 短径40cmを測る楕円形プランを呈し, 床面より10cm程皿状に掘り込まれる。内部に焼土が充満し, 底面はかなり強く火を受けている。

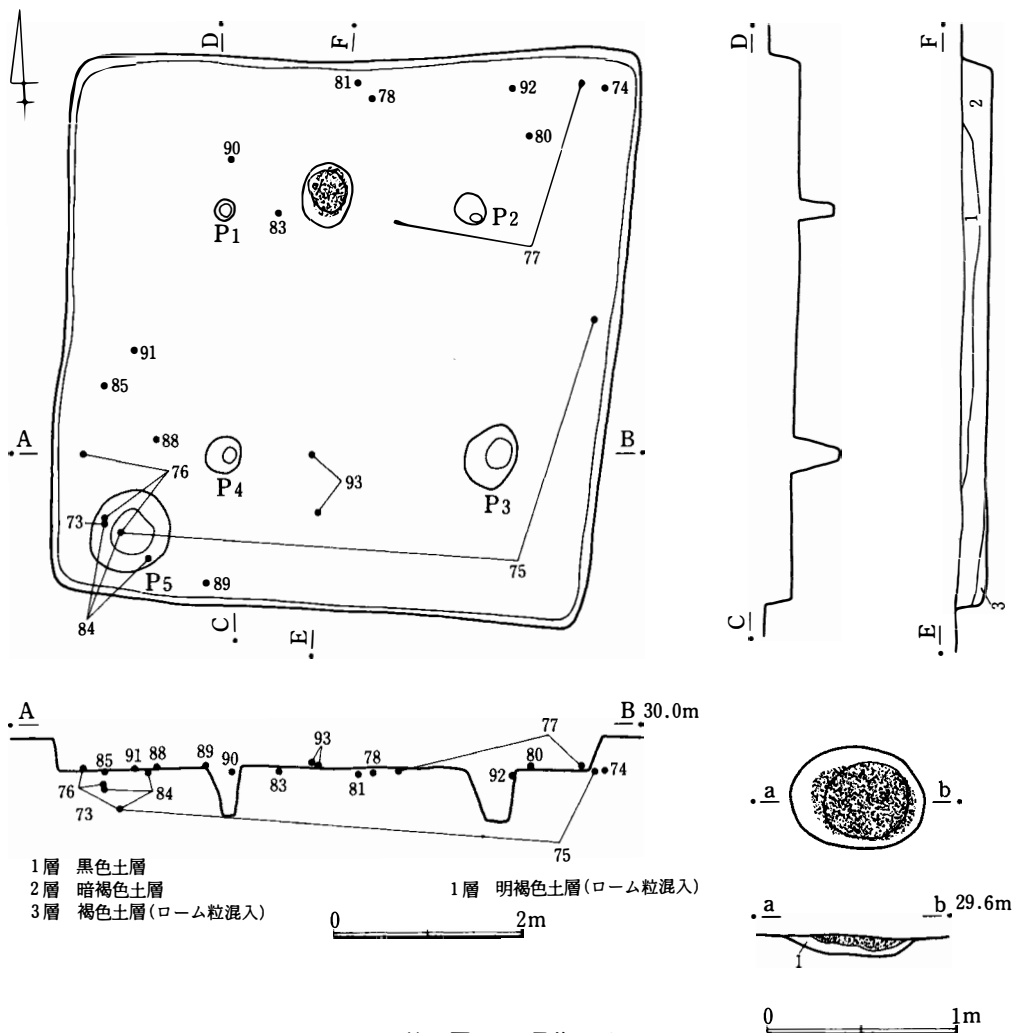
床面全体に構築材と思われる炭化材が遺存する。ほぼ床面直上の出土状況であるが、壁際で若干浮いている。炭化材の状況より焼失家屋と考えられるが、焼土の堆積が少ない点と、遺物がそれほど出土していない点、通常とは若干異なる様相である。



第14図 005号住居跡

006号住居跡 (第15図, 図版4)

B1区, 002号住居跡の東側7mに位置する。規模は南・西辺5.5m, 北・東辺6.0mを測り, 平面形はやや不整な正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 壁高は30cmを測る。周溝は検出されなかった。床面は平坦で比較的堅緻であり, 特に南西コーナーの貯蔵穴付近はきわめて堅緻で, 若干高くなる。柱穴はほぼ対角線上に4本検出された。壁より1~2m程離れており, 中央に偏って設けられる。規模にばらつきがあり, P₁が径20cm, P₂・P₄が35cm, P₃が70cm程である。深さは, P₁が37cm, P₂が61cm, P₃・P₄が53cmとなる。南西コーナーの壁際に径80×90cmの略円形を呈する貯蔵穴が穿たれる。深さは47cmを測る。覆土は自然堆積の状況を呈する。



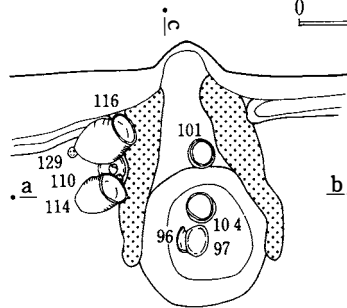
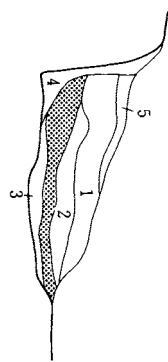
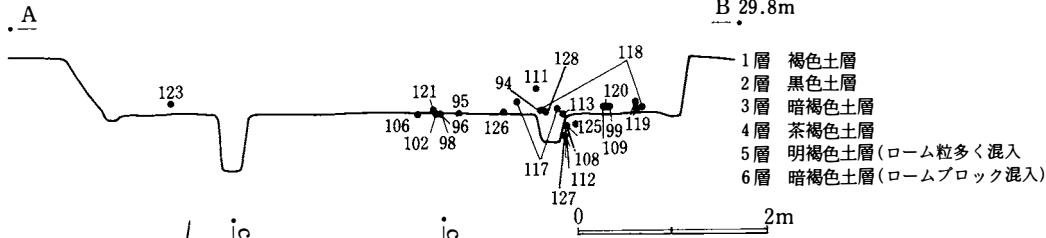
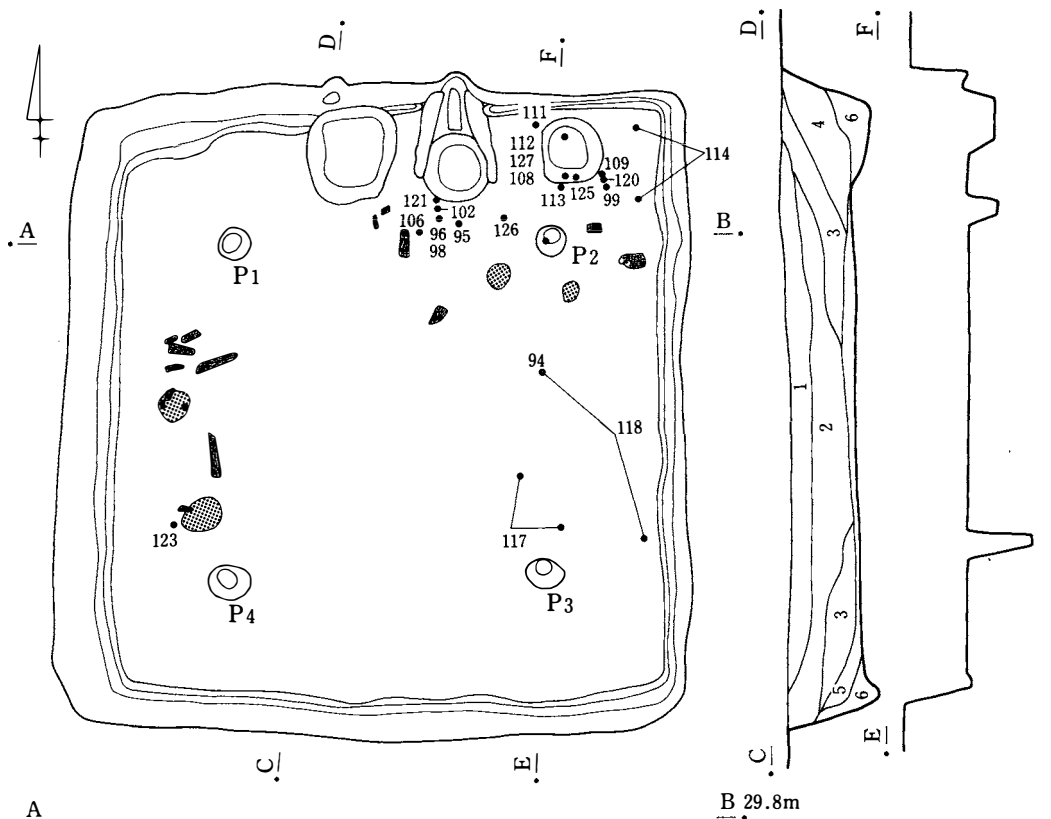
第15図 006号住居跡

炉はP₁・P₂間のややP₁寄りに位置する。長径70cm, 短径53cmを測る楕円形プランを呈する。床面より20cm程皿状に掘り込まれる。焼土は底面より若干浮いて堆積する。焼土および底面の状況よりそれほど使用されたものではないと思われる。

遺物は比較的多く出土し、貯蔵穴付近および北壁に沿って集中する傾向が見られる。貯蔵穴内からは、高杯2点と埴1点が出土している。器種として高杯・埴・壺・甕が見られ、杯は含まれていない。

007号住居跡 (第16図, 図版4)

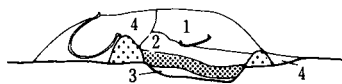
C0区, 006号住居跡の北東8m程に位置する。規模は6.6×6.6mを測り, 平面形はやや不整な正方形を呈する。東壁はほぼ垂直に立ち上がるが, 他の壁は西側に移行するに従い斜位の立ち上がりとなる。西壁はかなり外側に傾斜する。壁高は60~80cmを測る。床面はハードローム



- | | |
|----|--------------------|
| 1層 | 褐色土層 |
| 2層 | 暗赤褐色土層(焼土ブロック若干混入) |
| 3層 | 暗褐色土層(炭化粒多く混入) |
| 4層 | 褐色土層(焼土粒若干混入) |
| 5層 | 灰褐色土層 |

a. b. 29.8m

0 1m



第16図 007号住居跡

小六谷台遺跡 (No26)

中に形成され、ほぼ平坦で堅緻である。周溝は幅20cm、深さ5～10cm程でしっかりと掘り込まれる。カマド部分を除き全周する。柱穴は対角線上に4本検出された。径30～40cmの円形を呈し、深さは、 P_1 :55cm、 P_2 :30cm、 P_3 :67cm、 P_4 :51cmを各々測る。 P_2 内には、図示していないが、調査時に柱の炭化材が検出されている。カマド右側には、60×70cmの略方形プランを呈する貯蔵穴が設けられる。深さは32cmを測り、内部に炭化材が含まれる。住居跡の覆土は自然堆積である。

カマドは北壁中央部に2か所(A・B)設けられるが、Aカマドは掘り方のみの遺存であり、Aカマド廃棄後Bカマドを構築したことは明らかである。また、Aカマドの燃焼部の床面レベルには貼り床が認められる。Aカマドは壁を若干掘り込んで煙道部とし、0.9×1.0mの方形を呈する燃焼部を有する。貼り床下には若干の焼土が含まれる。Bカマドも同様に壁を若干掘り込んで煙道部を形成する。煙道部の立ち上がりはほぼ直立に近い。燃焼部は、径1.4m程の円形プランを呈する。袖は砂質粘土で構築されるが遺存は不良である。天井部は崩落している。焼土は底面より若干浮いて比較的厚く堆積している。

遺物はBカマドおよび貯蔵穴付近に多く出土する。カマド左袖外側より甕2個体と高杯・手捏ね土器・支脚、燃焼部内より杯が4個体検出された。貯蔵穴内では甕・鉢が見られる。床面には部分的に焼土および炭化材が散在する。

008号住居跡 (第17図、図版5)

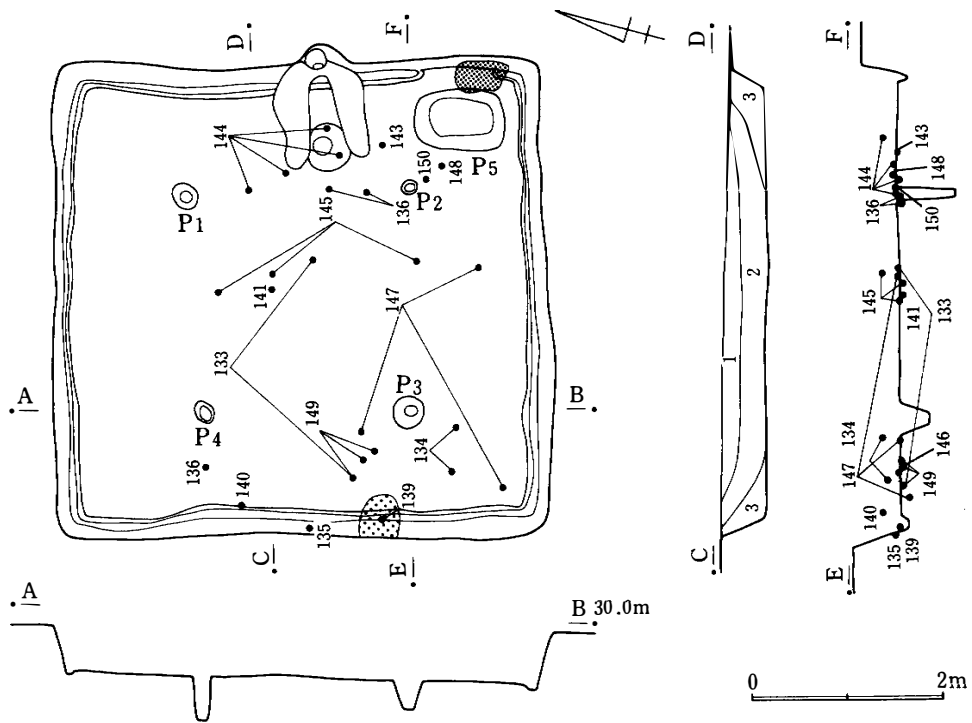
C1区、007号住居跡の南東10m程に位置する。規模は5.0×5.2mを測り、平面形は正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50cm前後を測る。周溝はカマド部分を含めて全周し、幅10～15cm、深さ5cm前後を測る。床面はハードルーム中に形成され、平坦で堅緻である。柱穴は対角線上に4本検出された。 P_1 、 P_3 は径30cm、 P_2 、 P_4 は径15cmと小規模である。深さは P_1 が31cmで、 P_2 ～ P_4 は60～70cmと深くなる。南東コーナー部に94×63cm、深さ72cmを測る長方形の貯蔵穴が設けられる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。壁外に幅60cm、長さ23cmで半円状に掘り込み、煙道部は緩く立ち上がる。燃焼部の掘り込みは明瞭でなく、壁より1m内側に径50cm程の焼き口部が設けられる。袖は砂質粘土で構築され、天井部は崩落している。焼き口部に焼土が厚く堆積する。

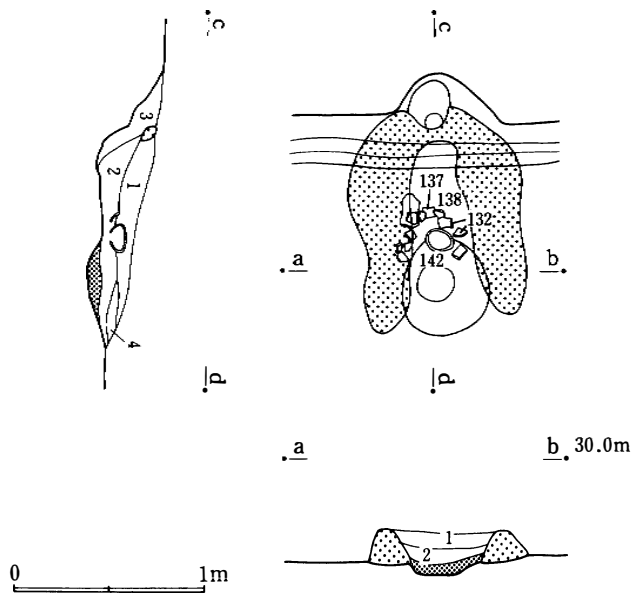
遺物はほぼ全体に散在する。142の赤彩の埴がカマド内に倒位で置かれている点注目される。

009号住居跡 (第18図、図版5)

B2区、006号住居跡の南東に位置する。規模は5.2×5.2mを測り、平面形は正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30cm前後を測る。周溝は幅10cm程で部分的に途切れる。掘り込みは浅い。床面はハードルーム中に形成され、平坦で堅緻である。柱穴間は特に堅緻であ

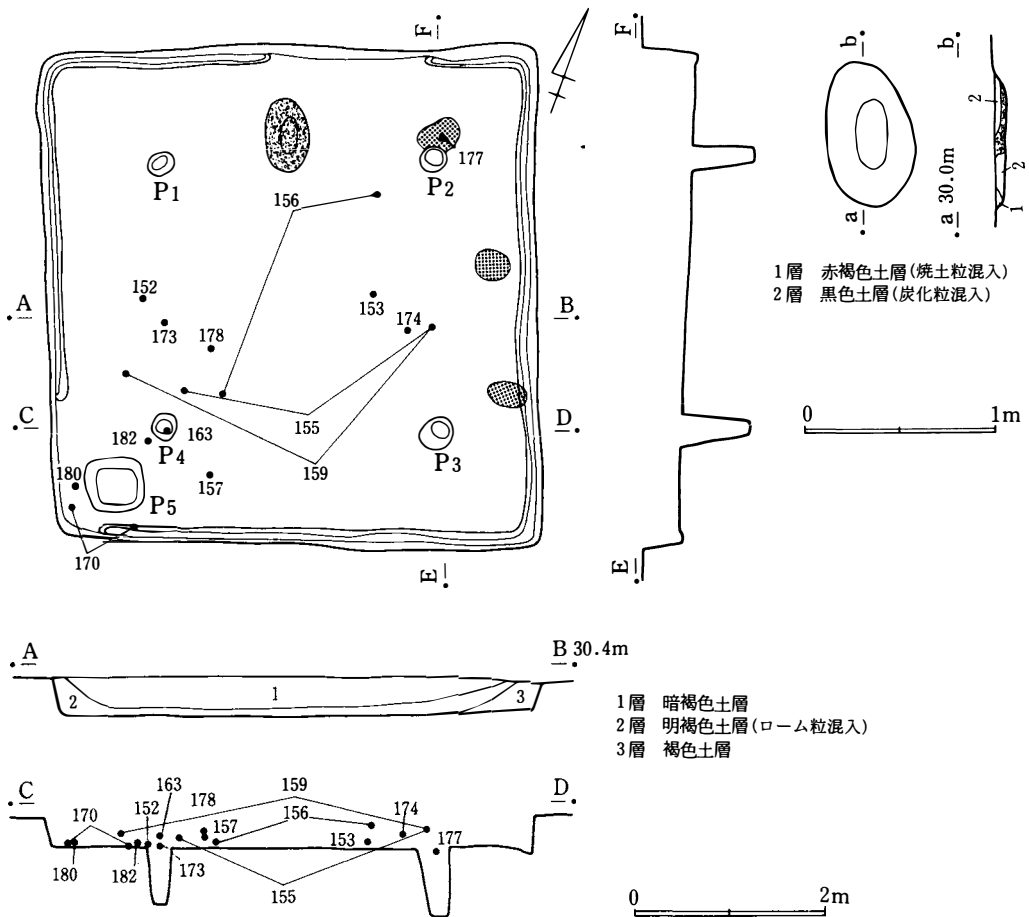


- 1層 暗褐色土層
- 2層 明褐色土層(ローム粒混入)
- 3層 褐色土層



- 1層 茶褐色土層(砂質)
- 2層 赤褐色土層(焼土粒多く混入)
- 3層 褐色土層(砂粒混入)
- 4層 灰褐色土層(砂質)

第17図 008号住居跡



第18図 009号住居跡

る。柱穴は対角線上に4本検出された。径20~30cmと小規模で、深さは60cm前後を測る。南西コーナー部に50×60cm、深さ35cmの貯蔵穴が設けられる。内部に焼土粒・炭化粒が若干含まれる。

炉は北壁寄りのP₁・P₂間に位置する。76×46cmの楕円形プランを呈し、床面からの掘り込みは7cm前後である。焼土は良好に遺存し、底面は強く熱を受けている。

遺物は、杯類を主体に柱穴間に多く遺存する。

010号住居跡 (第19図, 図版6)

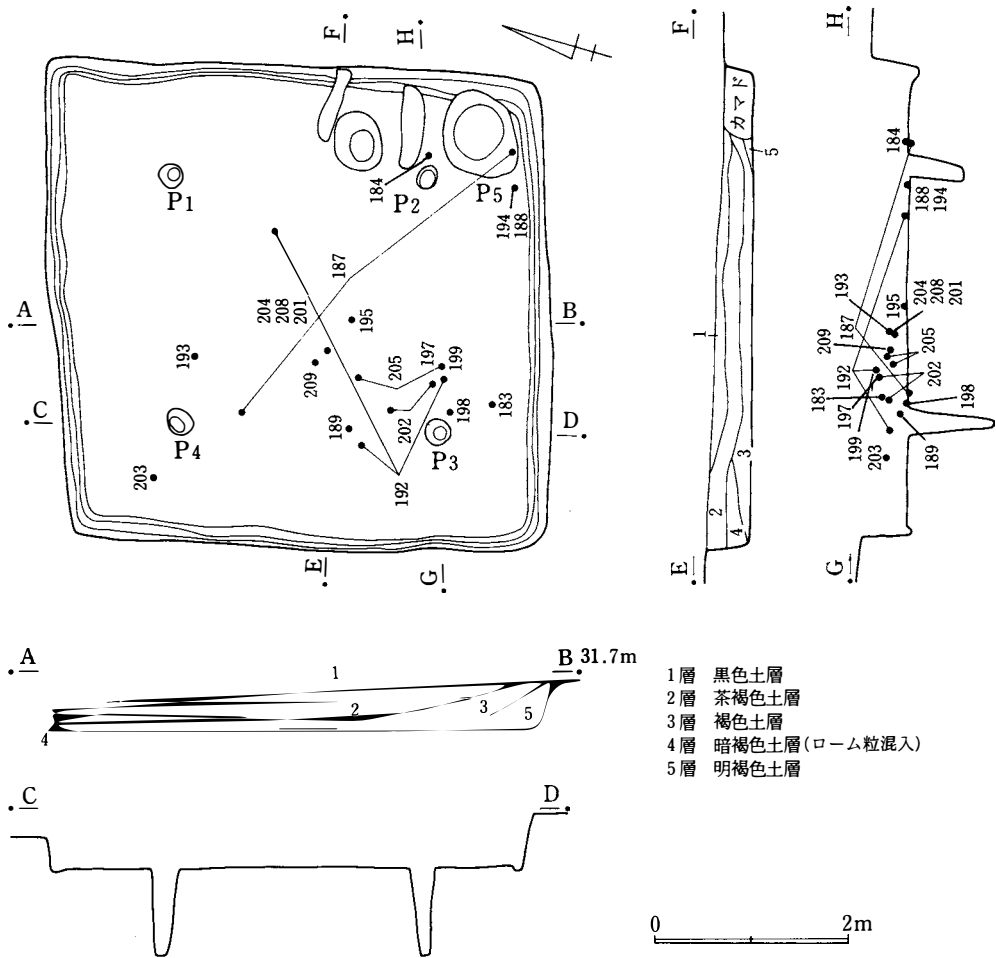
C3区に位置する。規模は5.0×5.0mを測り、平面形はやや不整な正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30~50cmを測る。周溝はカマド部分を含めて全周する。幅15cmで、掘り込みはきわめて浅い。床面はハードローム中に形成され、平坦で堅緻である。柱穴は対角線上に4本検出された。径20~30cmで、深さはP₁・P₂が60cm、P₃・P₄が85cmを測る。カマド

小六谷台遺跡 (No.26)

右脇コーナー部に、径80cm、深さ45cm程の不整円形を呈する貯蔵穴が設けられる。内部に炭化粒等はほとんど検出されなかった。

カマドは東壁の南側に寄った位置に設けられる。遺存はきわめて悪く、袖の基部と焚き口部が検出されたのみである。焚き口部内にかんがりの熱を受けた焼土が堆積する。

遺物は甕を主体にP₃付近に集中する。カマド内に遺物はなく、支脚が床面中央部で検出された。



第19図 010号住居跡

011号住居跡 (第20図, 図版 6)

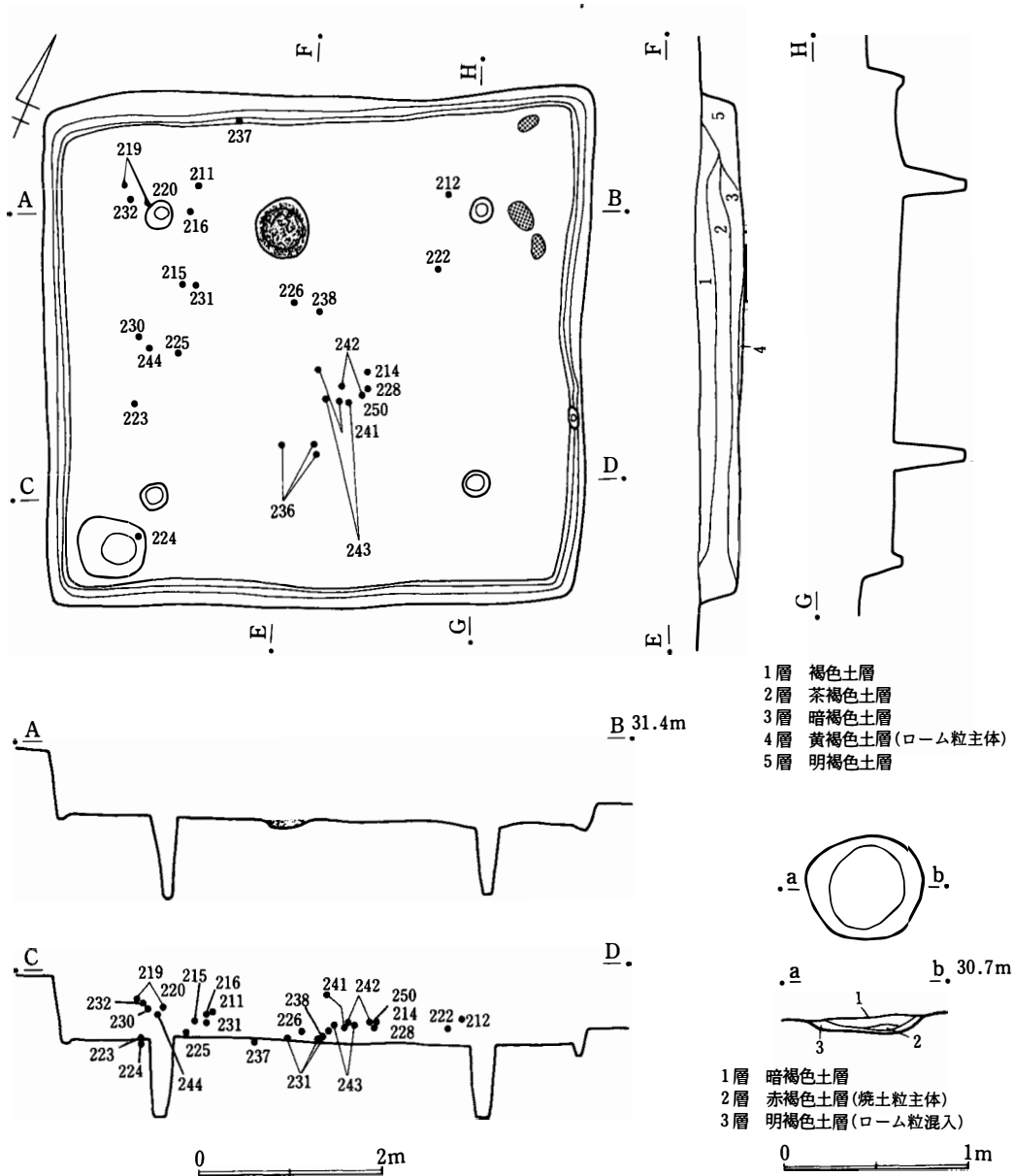
C 3 区, 010号住居跡の東 2 m程に位置する。規模は6.0×5.4mを測り, ほぼ正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 壁高は西側で60cm, 東側で20cmを測る。周溝は幅15cm, 深さ10cm程で全周する。床面はハードローム中に形成され, 平坦で堅緻である。柱穴は対角線上に 4 本

小六谷台遺跡 (No.26)

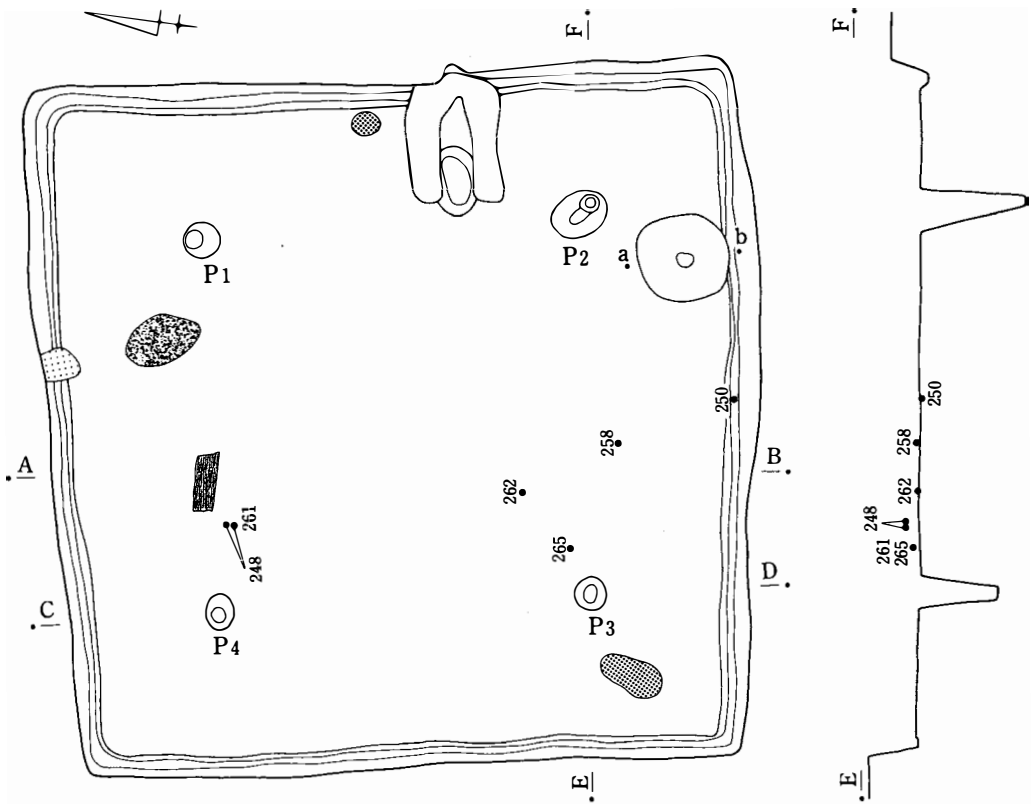
検出された。径25cm、深さ80cm前後である。P₄外側コーナー部に72×60cm、深さ30cmの貯蔵穴が設けられる。内部に炭化材が若干遺存する。

炉はP₁・P₂間のややP₁に寄った位置に設けられる。径60cmを測り、床面より10cm程掘り込まれる。焼土はやや浮いた状態で若干検出された。

遺物は、中央部およびP₁周辺に集中して出土する。杯・高杯・埴・椀・鉢・甕・壺とバラエティーに富む器種で構成される。



第20図 011号住居跡

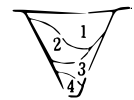


- 1層 茶褐色土層
- 2層 褐色土層
- 3層 暗褐色土層

B. 29.8m

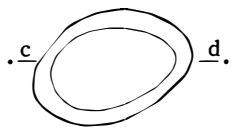


a b 29.3m

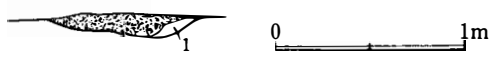


- 1層 暗褐色土層
- 2層 黑色土層
- 3層 明褐色土層(ローム粒混入)
- 4層 褐色土層

0 2m



c d 29.3m 1層 明褐色土層(被熱ローム粒)



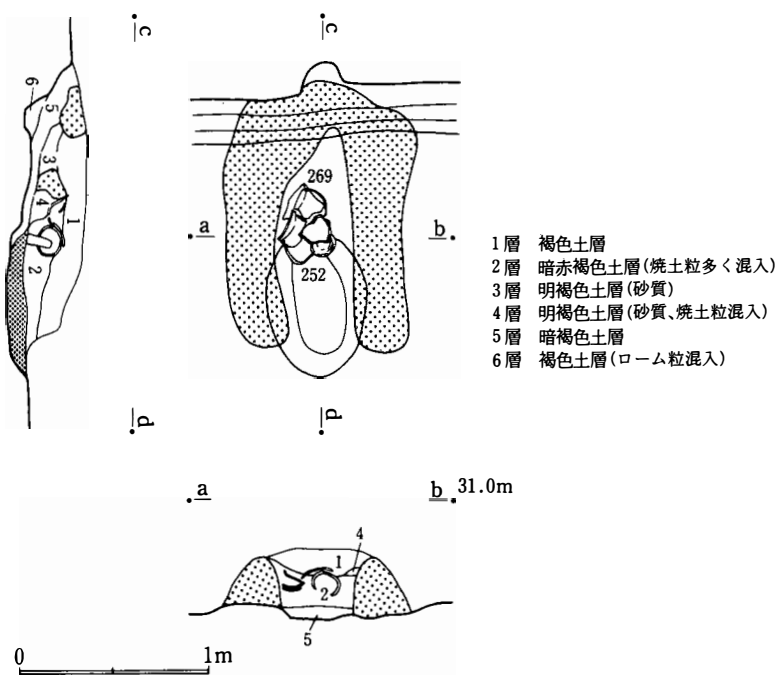
第21図 012号住居跡

012号住居跡 (第21・22図, 図版7)

C 2区, 集落の東端に位置する。規模は7.6×7.2mを測り, 東壁がやや広がる正方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 壁高は40cm前後を測る。周溝は幅20cm程で, カマド部分を含めて全周する。床面はハードローム中に形成され, 平坦で堅緻である。柱穴は対角線上に4本検出された。径30~40cm, 深さ60~110cmを測り, 底面は堅緻である。P₂には, 抜き取りの痕跡が窺える。P₂南側の壁沿いに径95cm, 深さ90cmの円錐形を呈するピットが設けられる。その位置より貯蔵穴と考えられる。

カマドは東壁のやや南側に寄った位置に検出された。壁を長さ15cm程で半円状に若干掘り込み, 燃烧部より急激に立ち上がる。焚き口部は壁より70cm離れた位置に, 径75×55cmの楕円形プランで掘り込まれる。焼土は焚き口部に厚く堆積する。袖は砂質粘土で構築され, 天井部は一部を除き崩落する。北壁P₁寄りに径75×60cmの楕円形プランを呈する炉が設けられる。内部に焼土が充満する。

遺物は, 本集落の中では少ない出土量であるが, カマド内に据えられた支脚の上半を覆うように椀の完形品が倒位で置かれている。



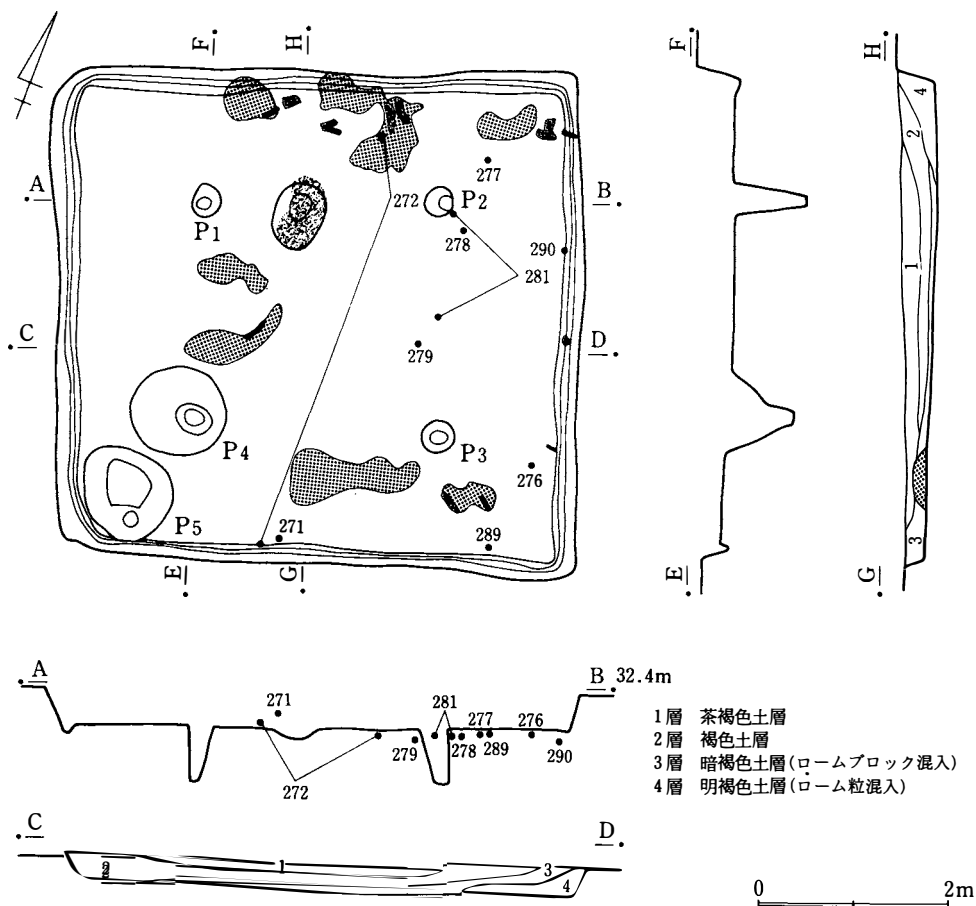
第22図 012号住居跡カマド

013号住居跡 (第23図, 図版7)

B 4 区, 調査区最南端に位置する。規模は5.5×5.1mを測り, ほぼ正方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 壁高は北側で40cm, 南側で20cm程を測る。周溝は小規模で全周する。床面はハードローム中に形成され, 平坦で堅緻である。柱穴はほぼ対角線上に4本検出された。径30cm, 深さ70cm前後である。やや内傾する掘り方を有す。P₄は上半が広く掘られており, あるいは柱を抜き取った跡かもしれない。P₄外側のコーナー部に深さ38cmの不整なピットが設けられる。貯蔵穴となるのであろうか。

炉はP₁・P₂間に位置する。床面より20cmの掘り込みで, 焼土を充満する。底面はよく焼けており, 特に北側は良好である。

遺物の出土量はあまり多くないが, 東側に集中する傾向が見られる。焼土・炭化材が散在しており, 焼失した家屋かもしれない。

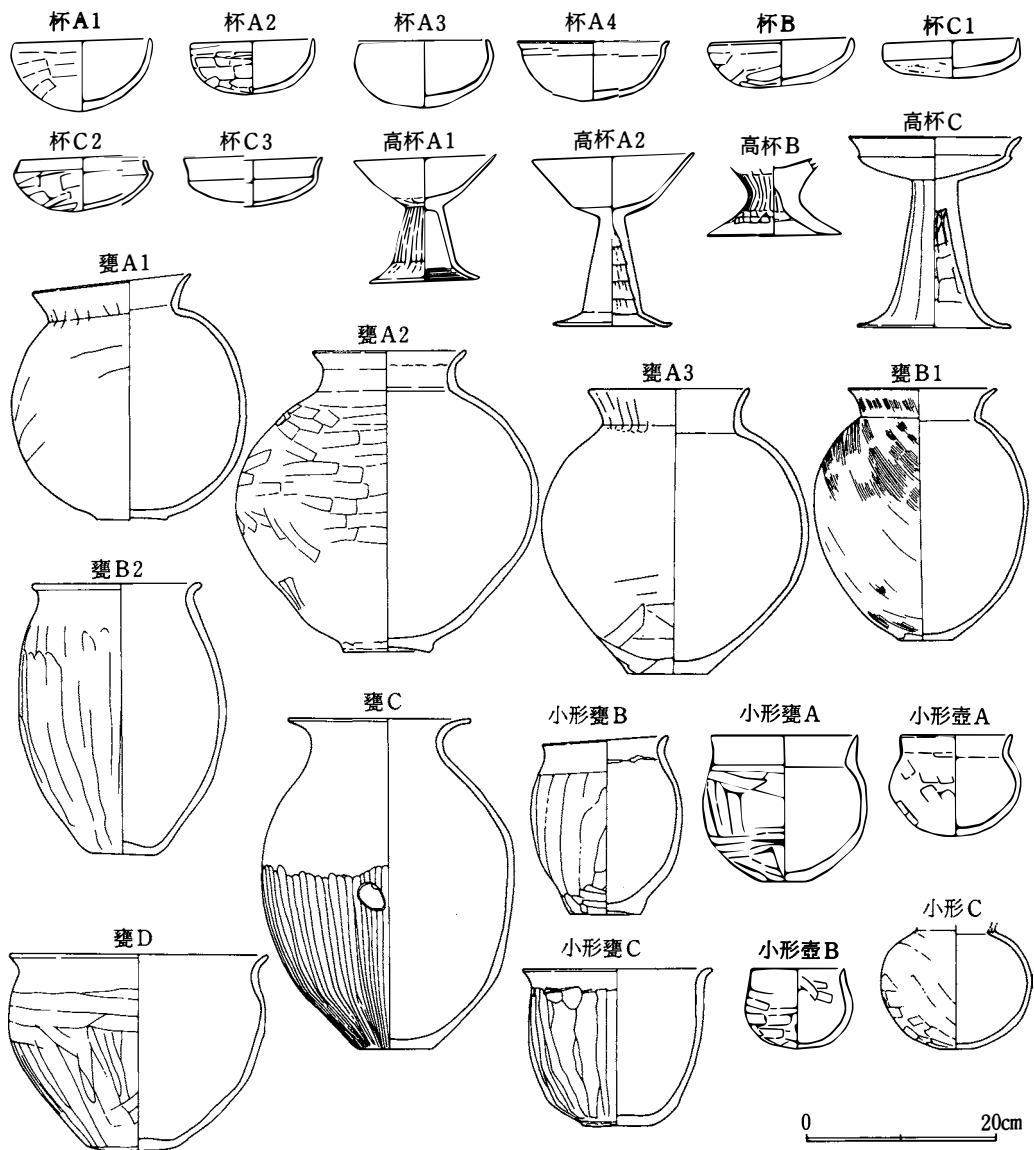


第23図 013号住居跡

住居跡出土土器 (第24~44図, 図版10~17)

本調査区内では12軒の住居跡が検出され, それに伴出する土器は比較的多量で, 古墳時代中期から後期の状況を良好に描出する資料である。以下で遺構ごとに説明するが, 繁雑を避けるために器種ごとに分類基準を設定し(第24図), これに基づいて述べていく。なお, 他の遺構及びグリット出土土器もこれに準ずる。

杯 A-全体に半球形を呈し器高の深いもの (口縁部形態1:そのまま開くもの, 2:直立



第24図 出土土器分類図

するもの、3：内傾するもの、4：外傾するもの)。B-体部に稜を持たず、全体に扁平となるもの。C-体部に明瞭な稜を持つもの(口縁部形態1：直立するもの、2：内傾するもの、3：外傾するもの)。

高杯 A-長脚となるもの(杯部形態1：体部無稜、2：体部下端有稜)。B-短脚となるもの。C-長脚で杯部がC3タイプを呈するもの。

甕 A-球形胴を呈するもの(口縁部形態1：くの字状、2：コの字状、3：直立及び緩く外反するもの)。B-長めの胴を有するもの(口縁部形態1：くの字状、2：短頸)。C-胴部下半に粗いヘラミガキを施す常総型の甕。D-口縁部に最大径を有するもの)。

小形甕 A-球形胴。B-長胴。C-口縁部に最大径を有するもの。

小形壺 A-丸底で球形胴を呈し、口縁部が緩く外反するもの。B-腕に近い形態で、短い口縁部が外反するもの。C-球胴を呈し、口縁部が外反するもの。

002号住居跡(2~39)

器種として、杯・甕・高杯・壺・手捏・甑で構成される。杯はA1(2~10)を主体とし、A2(11~15)、A3(16~18)が認められる。他にC3(19,20)が客体的に存在する。9,15を除き赤彩が施される。22~24は高杯Bの脚部片で、23,24に赤彩が認められる。25~32は甕である。すべてA1タイプに含まれるであろう。29,30の頸部に縦位の粗いヘラミガキが施される。33,34は小形壺Aである。口縁部がほぼ直立する。35は有段口縁を呈する壺である。口唇部はややつまみあげられ、受け口状を呈する。37,38は手捏で、底部に木葉痕を残す。

004号住居跡(40~65)

本住居跡では、杯・高杯・甕・ミニチュア・手捏が出土する。杯はA1(40~46)を主体とし、A4(50)・B(47)・C3(49)が各1点認められる。50以外はすべて赤彩が施される。51は高杯Bとなろう。小形壺は、A(54)、B(53)の2点である。いずれも赤彩され、54は底部が意識的に打ち欠かれているようである。甕は、A1(56~58,62)・A2(55,59)の2タイプが認められる。55は胴部が強く張りだし、胴下半にススが付着する。56の口縁部には縦位の粗いヘラミガキが施される。61は小形甕Bであろう。63は単孔の甑である。胴上部に最大径を有する。64は鉢のミニチュアである。比較的丁寧に整形され、底部に木葉痕を残す。

005号住居跡(66~72)

本住居跡出土土器はきわめて少なく、杯・高杯・壺・甕の計7点が実測できたのみである。杯はB(67)、C2(66)の2点で、赤彩は見られない。68は高杯Aの脚部片であろう。小形壺はB(69)、C(70)タイプが認められる。いずれも赤彩される。71,72は甕Aの胴下半部である。

006号住居跡 (73~93)

本住居跡の出土土器量は比較的少ないが、器種構成上他の住居跡とは異なった様相を呈する。杯は破片で若干認められるものの、実測できるものは皆無である。一方、他の住居跡ではあまり見られない高杯が10点含まれる。他に椀・壺・甕が認められる。高杯はA 1 (73~75), A 2 (76~78) がみられる。79~82の脚部片はいずれもAタイプに属するものであろう。赤彩は75のみに認められる。83は椀で、体部外面に刷毛目痕が部分的に残る。84は内外面ともに丁寧に調整された埴である。底部はやや平底状となる。85~89は小形壺Cである。85, 87, 88は口縁部を欠損するが、86のような口縁部形態を呈すると思われる。89はAタイプの様相も窺われる。90は小形甕Aで、刷毛目整形が部分的に観察される。91は棒状突起を貼り付けた壺の口縁部であろう。92, 93は甕Aである。胴部外面に刷毛目整形を施しており、93の胴部下半には縦位のヘラミガキが加えられる。

007号住居跡 (94~131)

本住居跡出土の土器は、杯16点、高杯1点、甕14点、甌1点、鉢1点、壺1点、手捏3点と豊富で、セットとしてきわめて良好な資料である。94~109は杯である。94は小形で、口縁部が直立するものの全体に半球形を呈する。96は杯Bで、赤彩が施される。106, 107は杯C 1で、きわめて扁平となる。106は赤彩される。95, 97~105は杯C 2である。95, 97のようにやや大形で、器高の深いものもみられる。100のみ赤彩される。108, 109は杯C 3である。109の口縁部は外湾気味に外反する。杯16点のなかで赤彩されるものは3点のみで、他の住居跡に比してきわめて低い割合である。110は高杯Cで、特徴的な形態を呈する。杯部はC 3タイプで、脚はかなり長くなる。杯部は内面黒色処理されるが、脚部の赤彩は認められない。胎土中に長石等の白色粒子を多く含む。112~114, 116, 117は甕B 2で、このタイプは本住居跡のみに認められる。胴部形態にややばらつきがあるものの、口縁部が短く外反する点共通する。111, 115は甕Cで、「常総型」と呼ばれる特徴的な甕である。胎土中に石英・長石・雲母粒を多く含み、胴部下半にヘラミガキが施される。頸部は強くすぼまり、口縁部が大きく外反する。口唇部は丸く仕上げられる。胴部はやや球形状を呈し、ほぼ中位に最大径を有する。111の胴部中位には、焼成後意識的な穿孔が施される。119は甕Dで、1点のみ実測できた。小形甕は、A (118), B (121), C (120) の3タイプが認められる。125は鉢となろう。内面が丁寧にヘラミガキされる。126は甌で、形態的に小形甕Cに似る。127は器種不明であるが、刷毛目整形で赤彩が施される。128は特異な形態を呈する小形壺である。

008号住居跡 (132~151)

本住居跡の土器の出土量はそれほど多くないが、甕の割合がやや多くなる。杯は、A 1 (134), A 3 (132, 133), C 3 (135~137) の3タイプがみられる。バラエティーが多いものすべて

赤彩が認められる。140は小形壺Bである。142は丁寧なヘラケズリを施した埴で、口縁部を欠損する。長石等の小砂粒を多く含み、赤彩される。甕にもバラエティーがみられる。144・146がA 1, 145がA 2となろう。145の口縁部は内外面ともヘラミガキが施される。147はやや長胴を呈し、Bタイプの範疇であるが、胴部外面および底部には丁寧なヘラミガキが施される。ススが多量に付着する。

009号住居跡 (152~182)

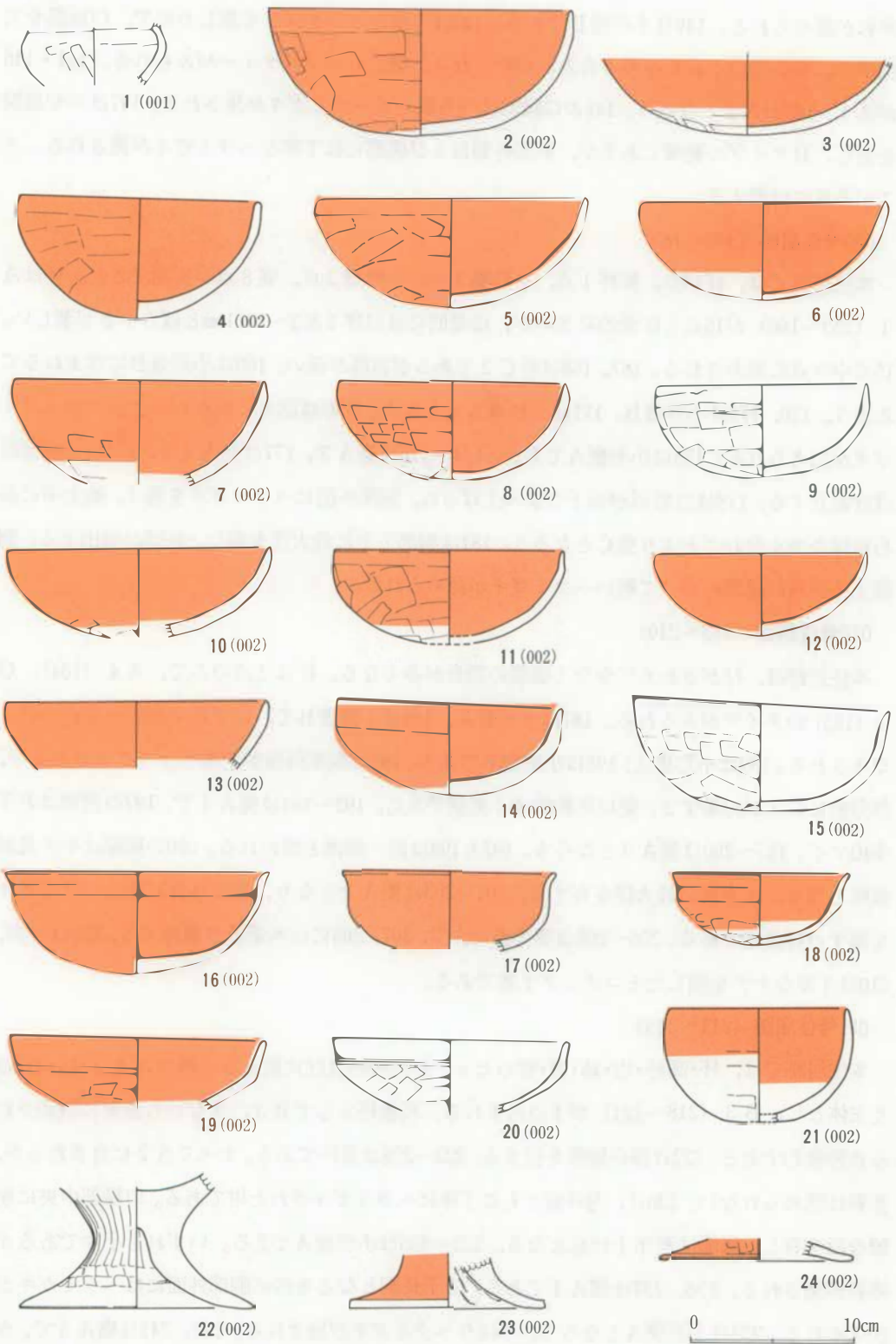
本住居跡では、杯18点、高杯1点、小形甕1点、小形壺3点、甕8点が実測できた。杯はA 1 (152~166) が15点と圧倒的に多いが、法量的には口径18.3~12.1cmとばらつきが著しい。15点中9点に赤彩される。167, 168は杯C 2であるが器高が深い。169は小形壺Bに含まれるであろう。170, 172は小形壺B, 171は小形壺Aとなろう。赤彩は認められないが前者にはヘラミガキが加えられる。173は小形甕Aである。174~176は甕A 3, 177は甕A 1で、175の口縁部はほぼ直立する。178は口唇部が若干つまみ上げられ、胴部外面にヘラミガキを施す。胎土中に長石粒等を多く含むことより甕Cとなろう。181は胴部下半に最大径を有し、底部が突出する。胴部上半から口縁部にかけて粗いヘラミガキが認められる。

010号住居跡 (183~210)

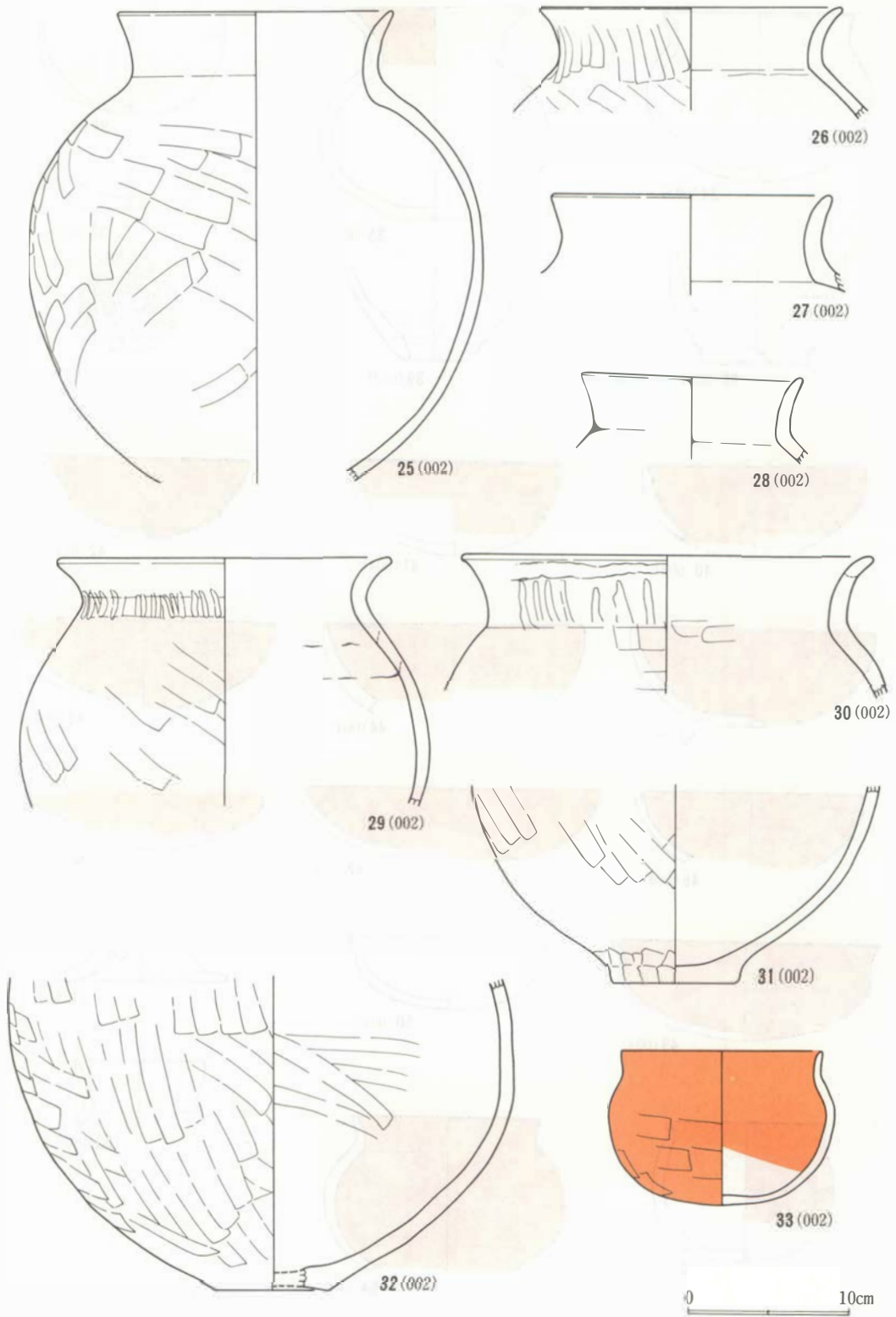
本住居跡は、杯がきわめて少なく甕類の割合が多くなる。杯は2点のみで、A 4 (184), C 2 (183) のタイプがみられる。187は小形壺A, 188は小形壺Bで、いずれも胴部外面がヘラミガキされる。189は小形甕A, 195は小形甕Bである。195は胴部外面が全面ヘラミガキされるが、部分的にススが付着する。甕は比較的多く実測できた。192~194は甕A 1で、192の底部は若干突出する。197~200は甕A 3となろう。197と198は同一個体と思われる。200の胴部はやや長胴気味となり、上半部に最大径を有する。201~203は甕A 2となり、胴部外面に粗いヘラミガキを施す点特徴的である。206~208は甕の底部片で、207, 208には木葉痕が遺存する。209は手捏、210は丁寧なナデを施したミニチュア土器である。

011号住居跡 (211~245)

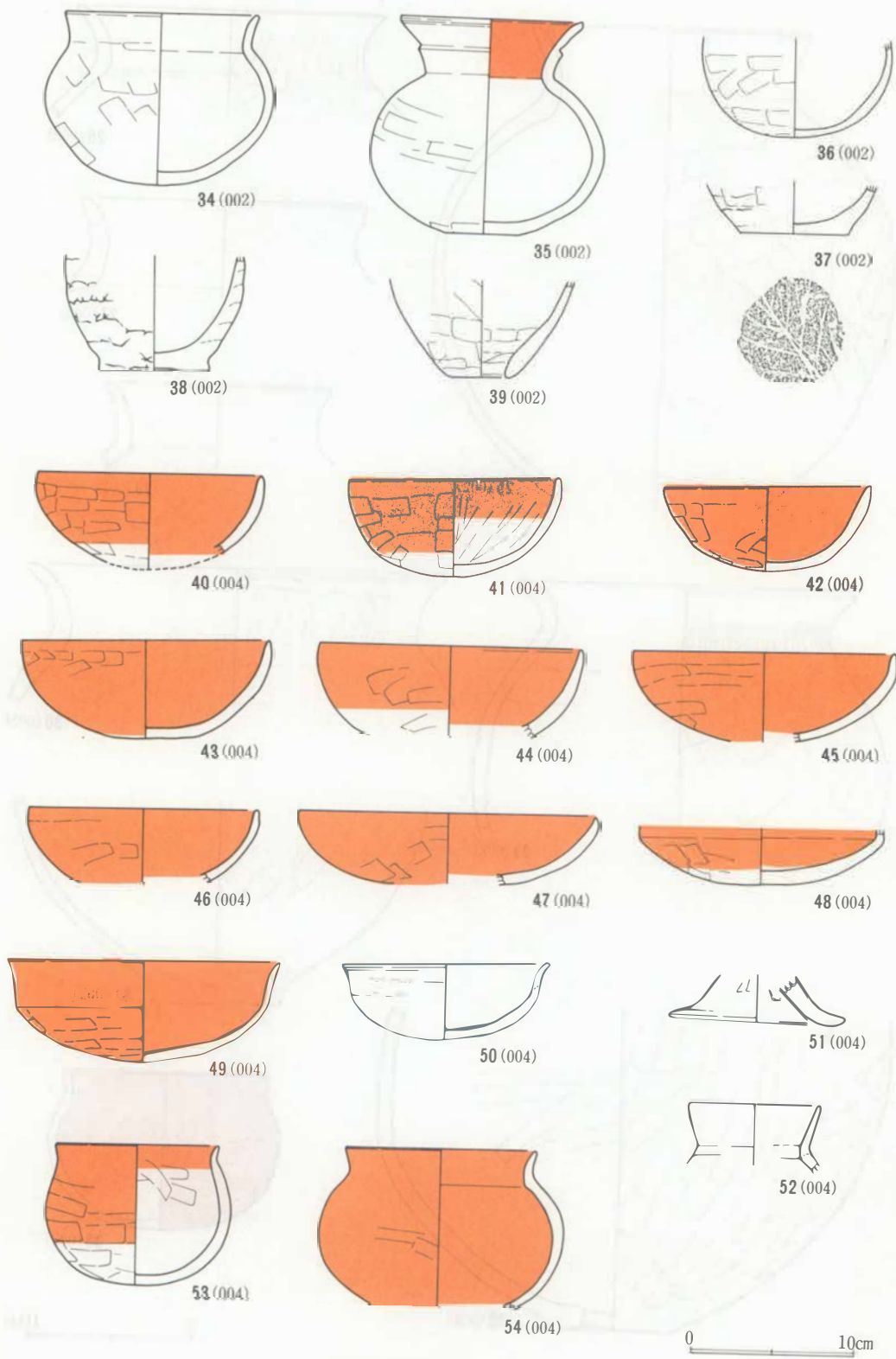
本住居跡では、杯・高杯・埴・鉢・壺・甕のセットが比較的良好に窺える。杯はA 1 (211~217) を主体とし、B 3 (218~221) が4点含まれる。模倣杯としてB 3, すなわち蓋形に限定される点特徴的である。222は深い椀形を呈する。223~228は高杯である。すべてA 2に含まれるが、赤彩は認められない。230は、内外面ともに丁寧にヘラミガキされた埴である。口縁部中央に明瞭な段を有し、底部は若干上げ底となる。232~235は小形壺Aである。いずれも小片であるが赤彩が施される。236, 237は甕A 1である。若干長胴となるものの胴部外面にはヘラミガキが加えられる。238は小形甕Aとなろう。やはりヘラミガキが施される。242, 243は甕A 3で、かなり大形となる。244は小形甕Aであるが、胴部外面に刷毛目痕を明瞭に残す。



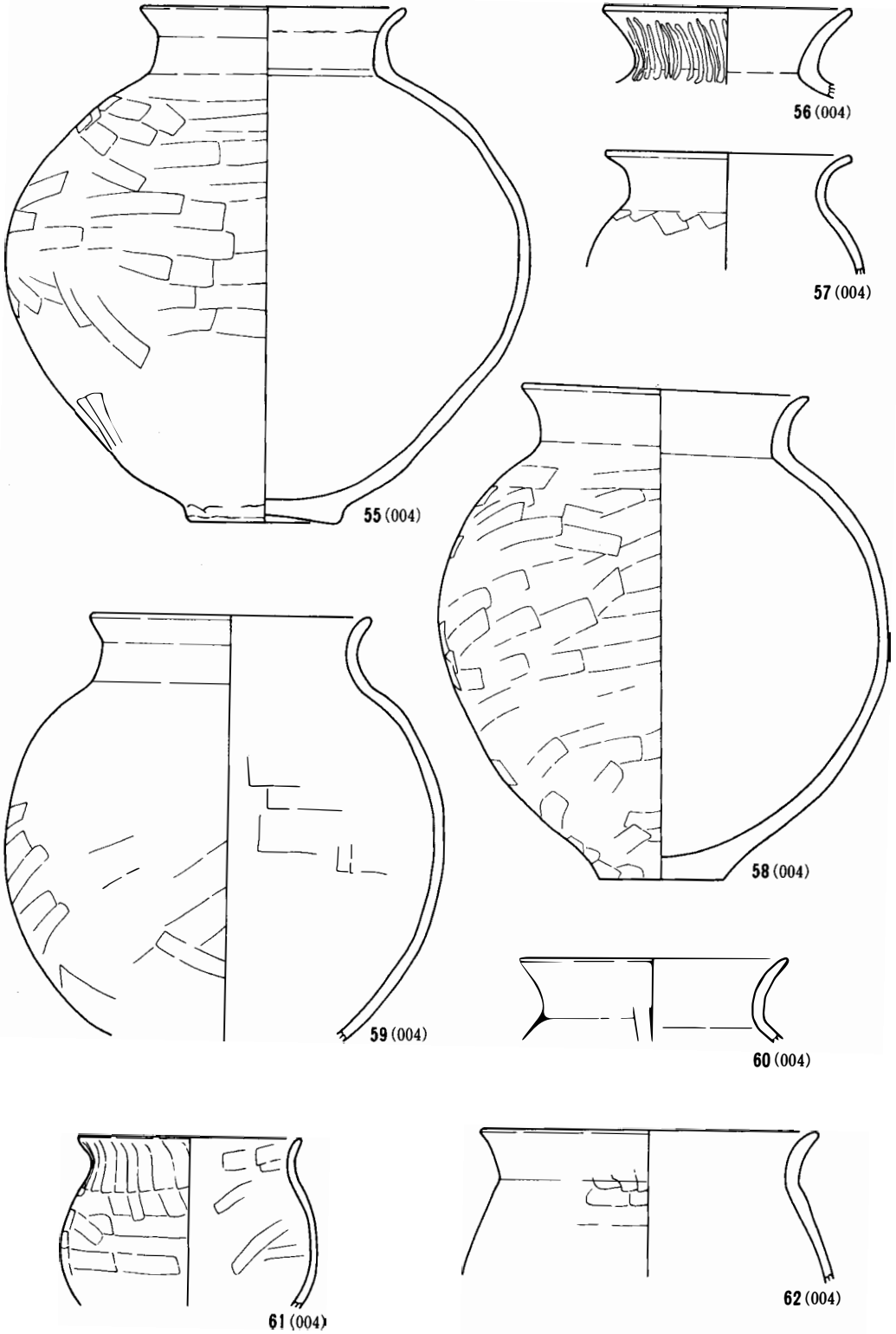
第25図 住居跡出土土器(1)



第26图 住居跡出土土器(2)



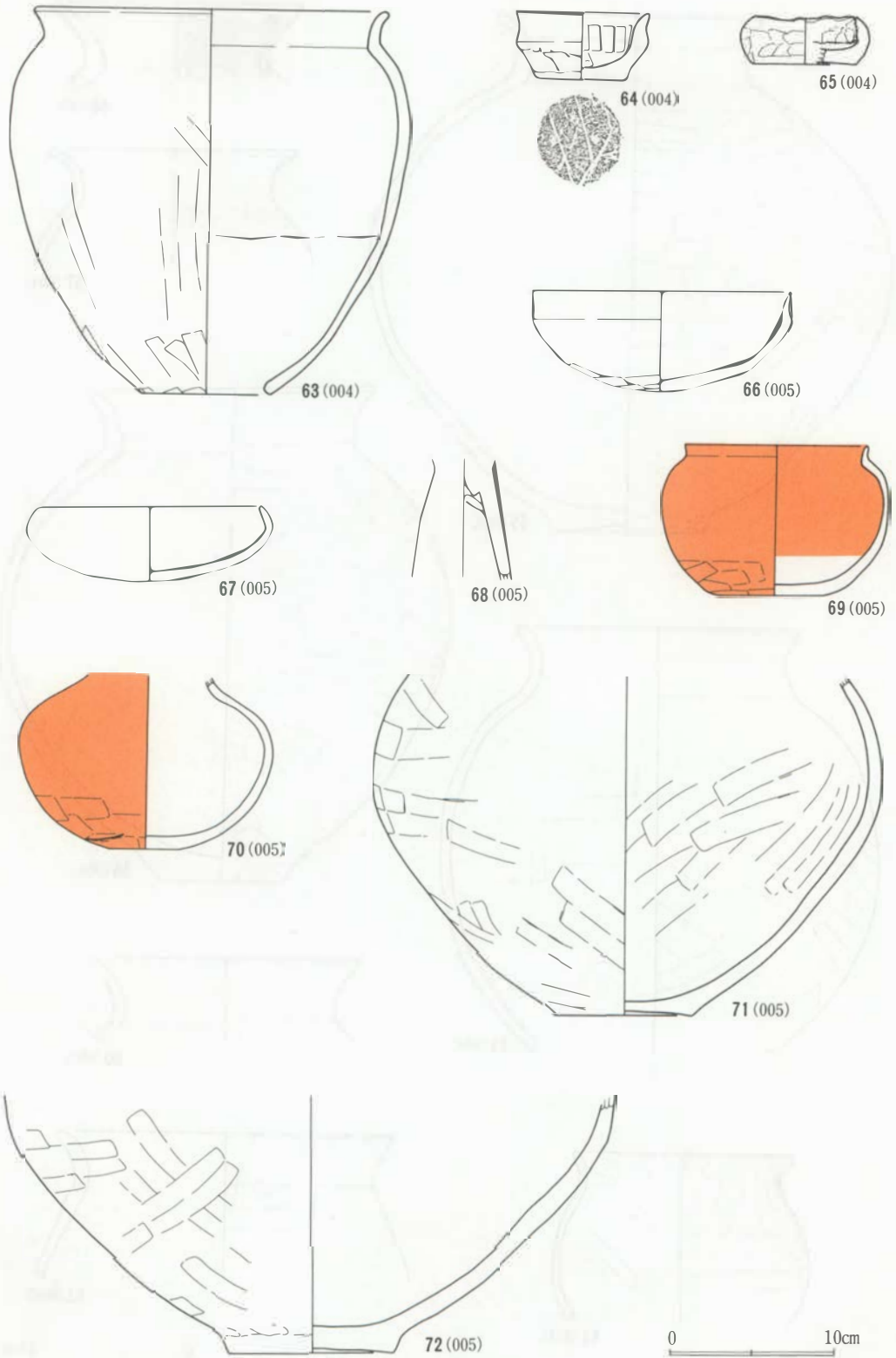
第27図 住居跡出土土器(3)



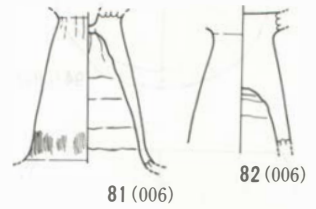
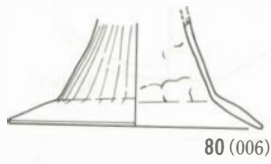
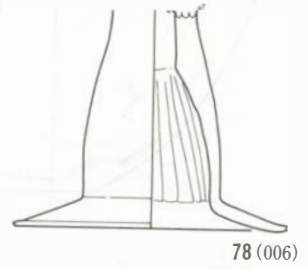
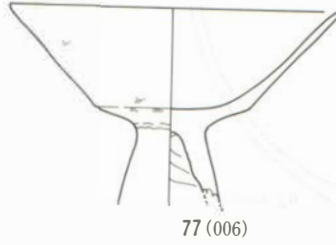
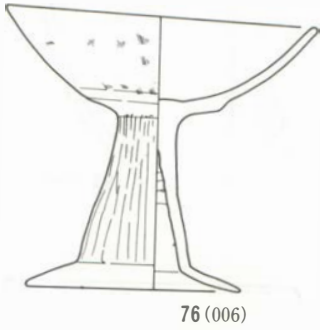
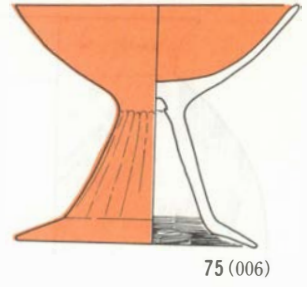
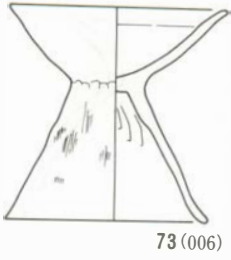
0 10cm

第28図 住居跡出土土器(4)

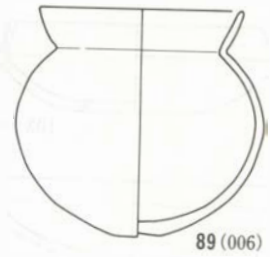
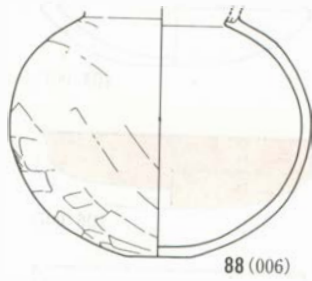
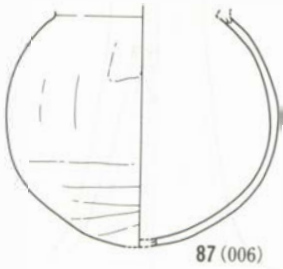
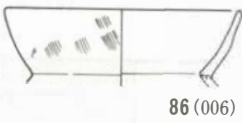
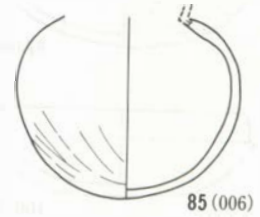
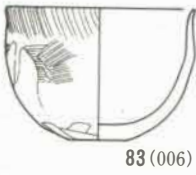
小六谷台遺跡 (No.26)



第29図 住居跡出土土器(5)

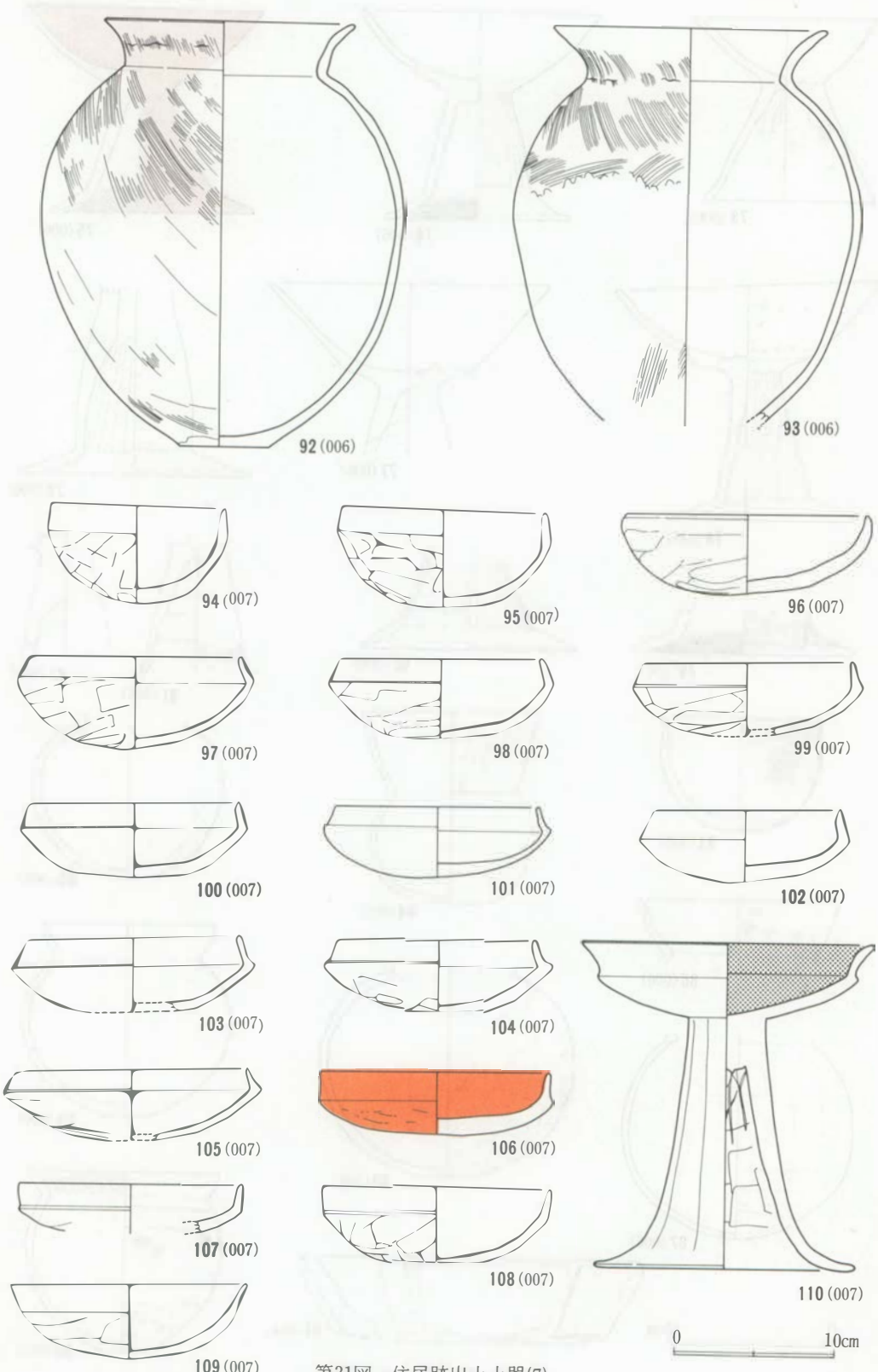


82 (006)

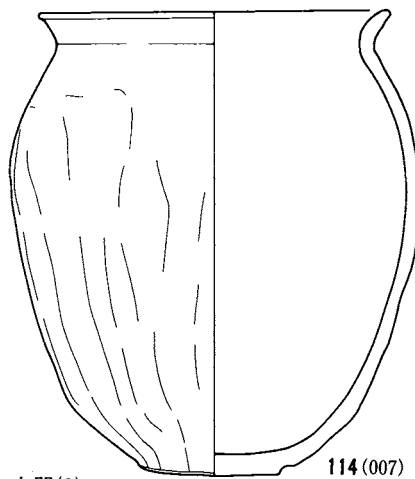
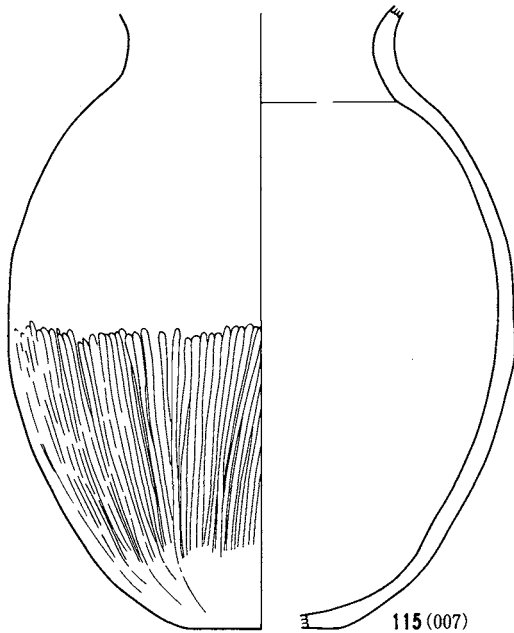
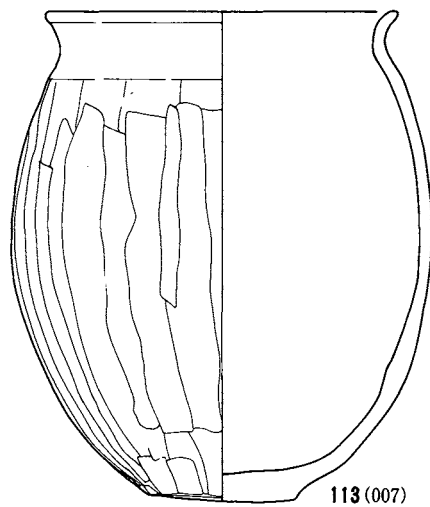
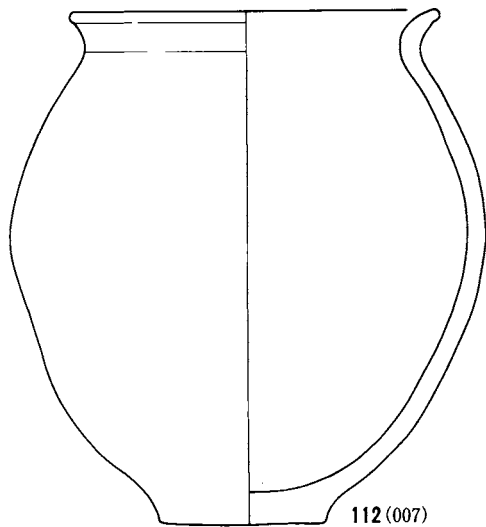
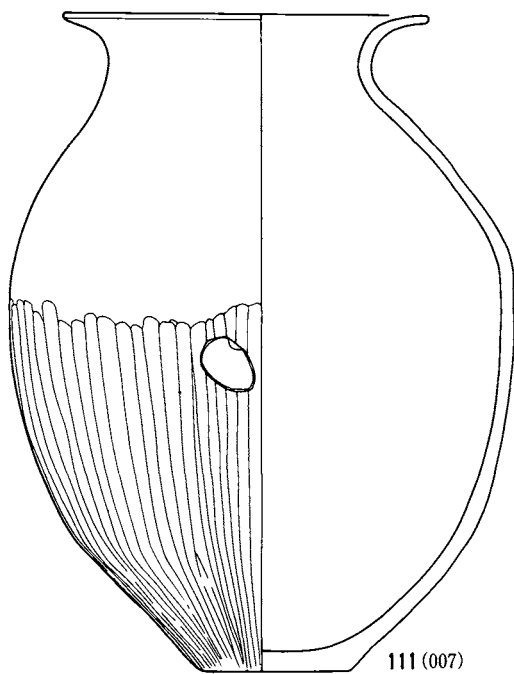


0 10cm

第30图 住居跡出土土器(6)

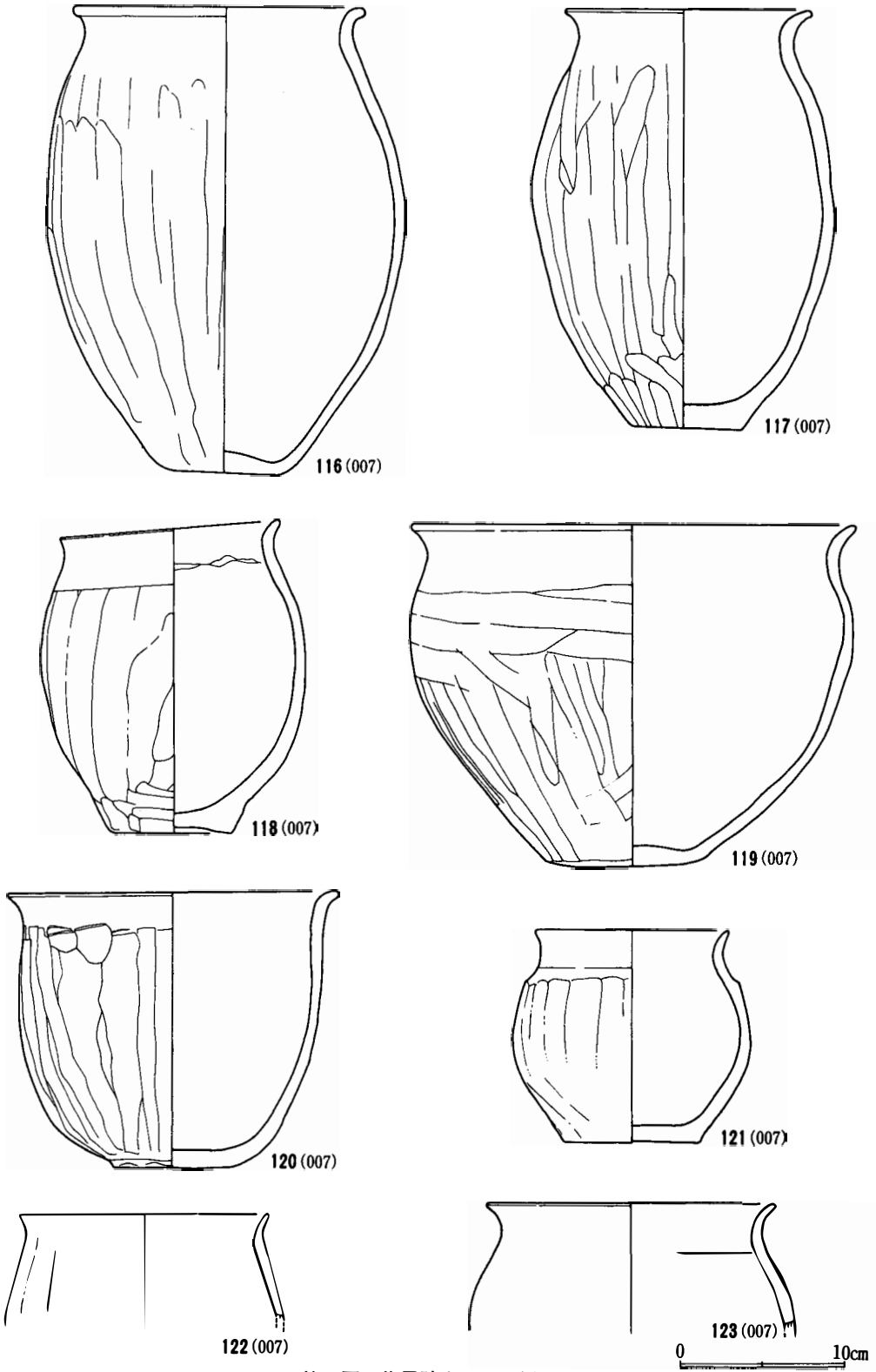


第31図 住居跡出土土器(7)

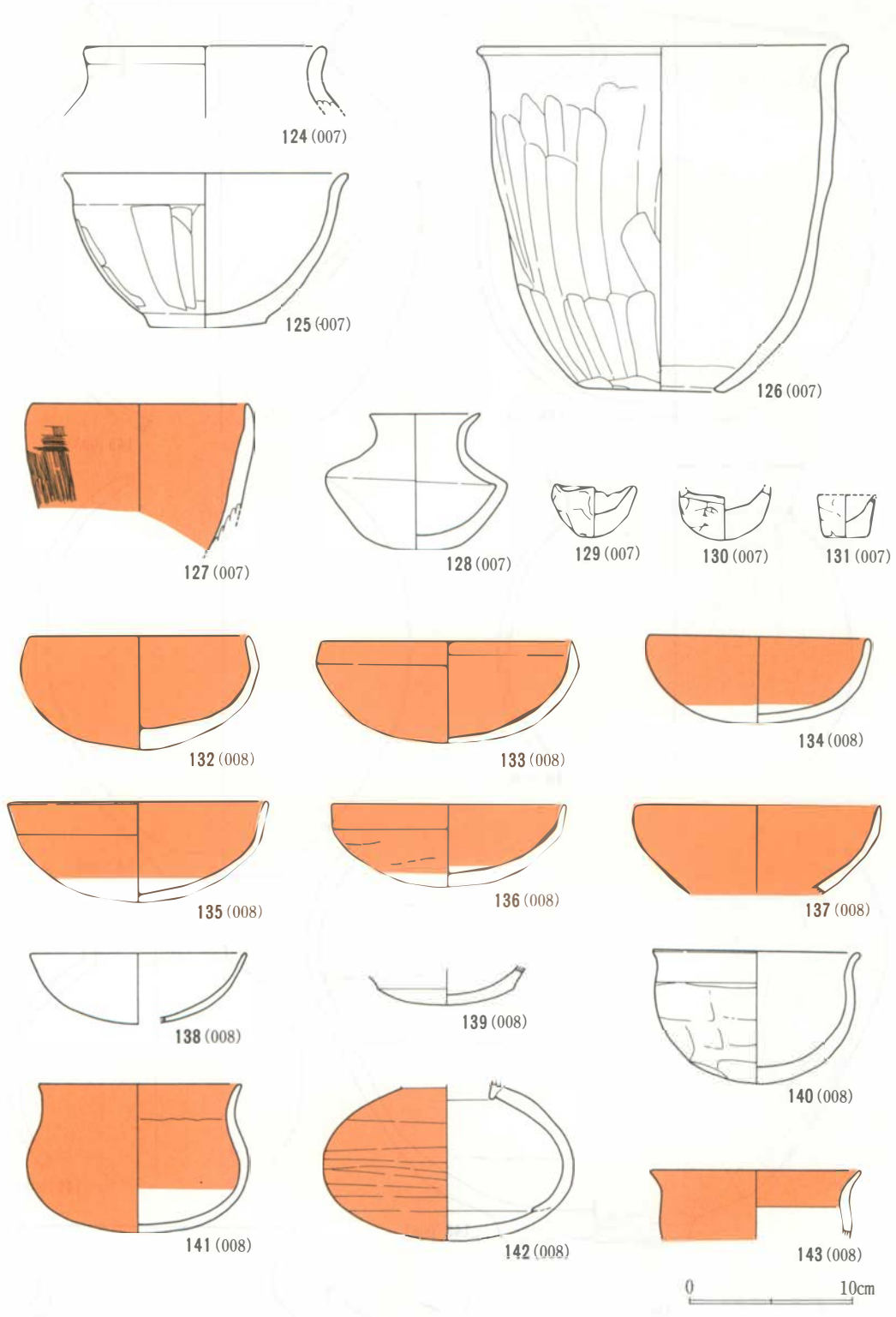


0 10cm

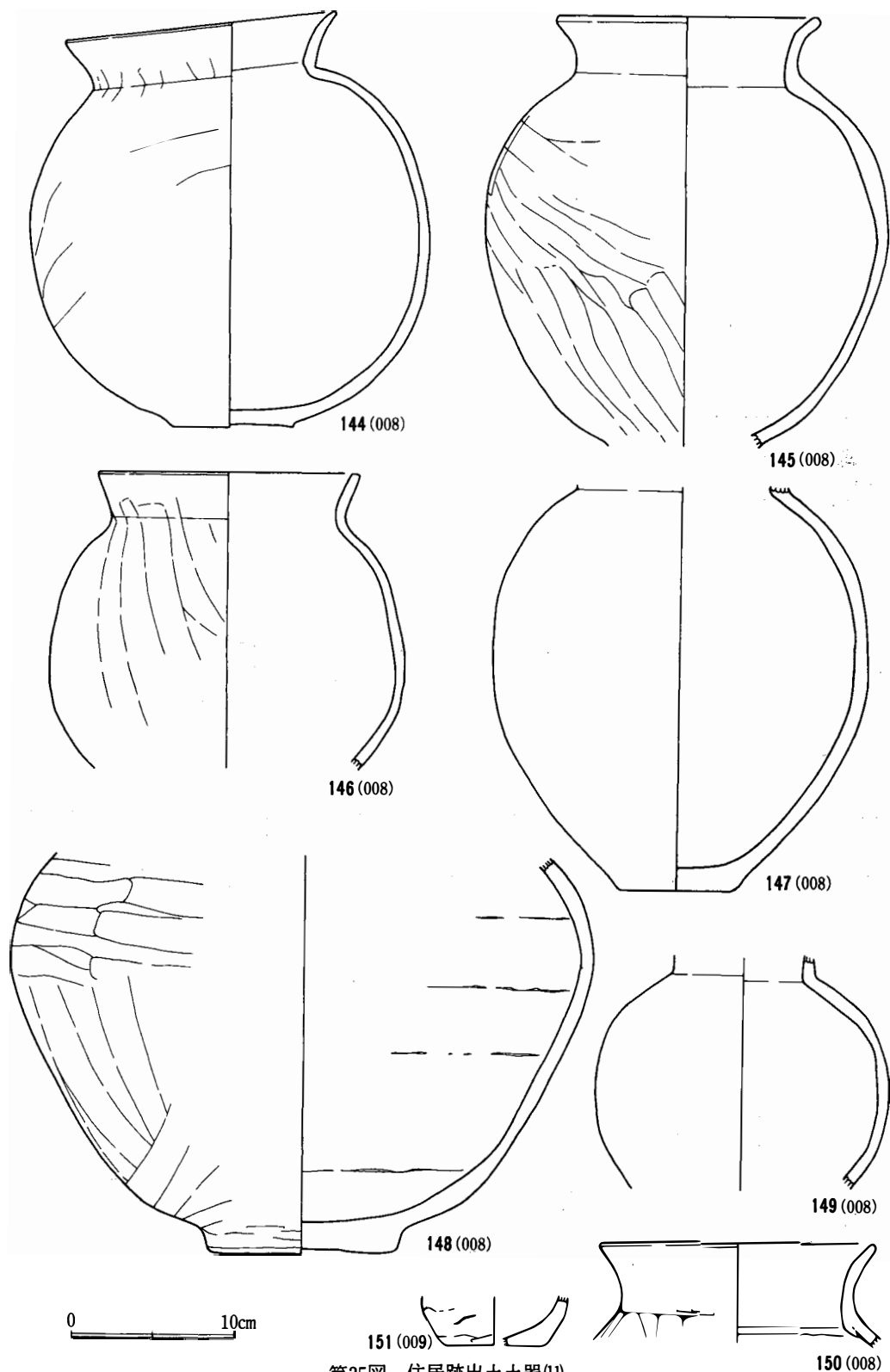
第32图 住居跡出土土器(8)



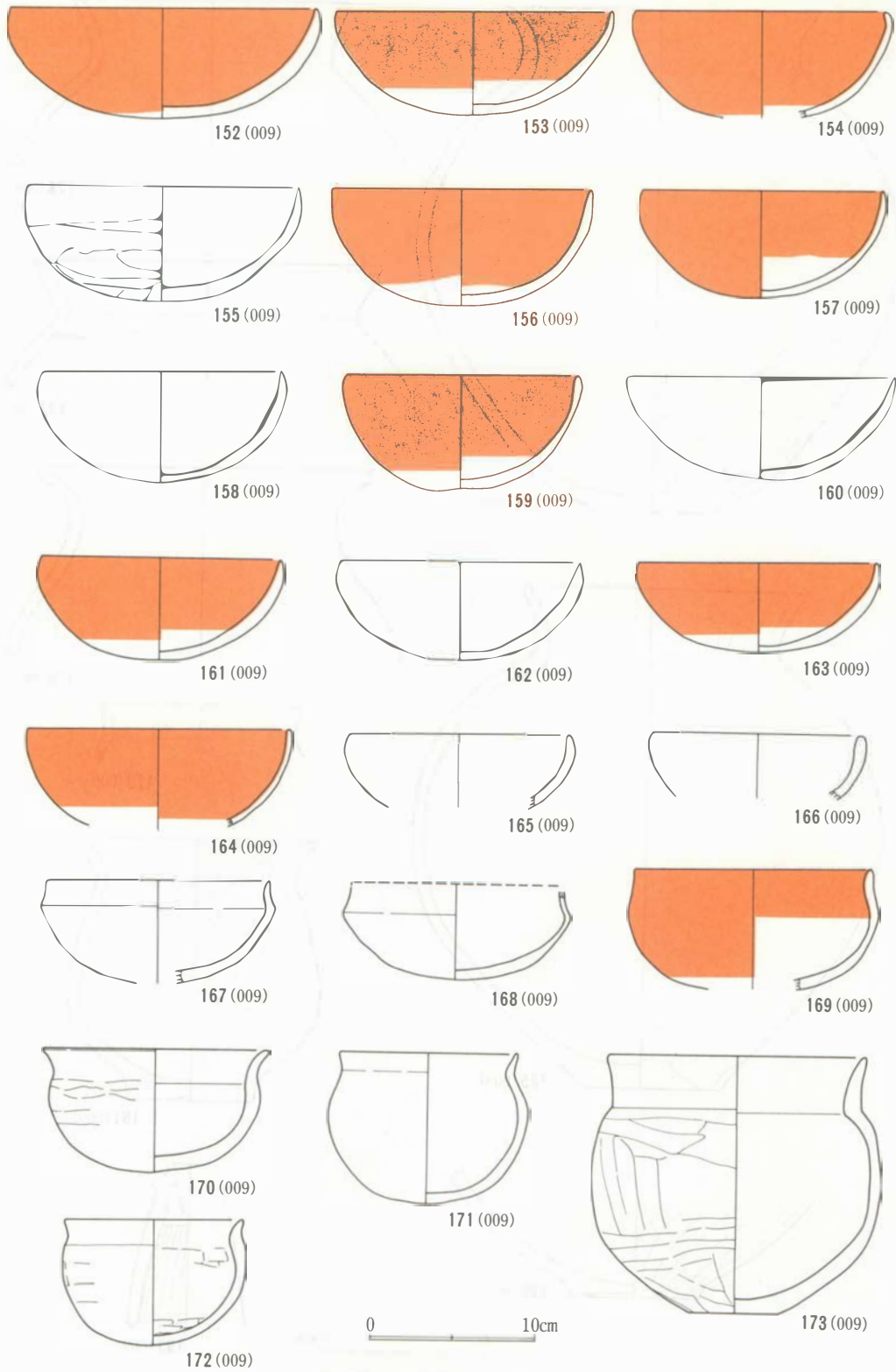
第33図 住居跡出土土器(9)



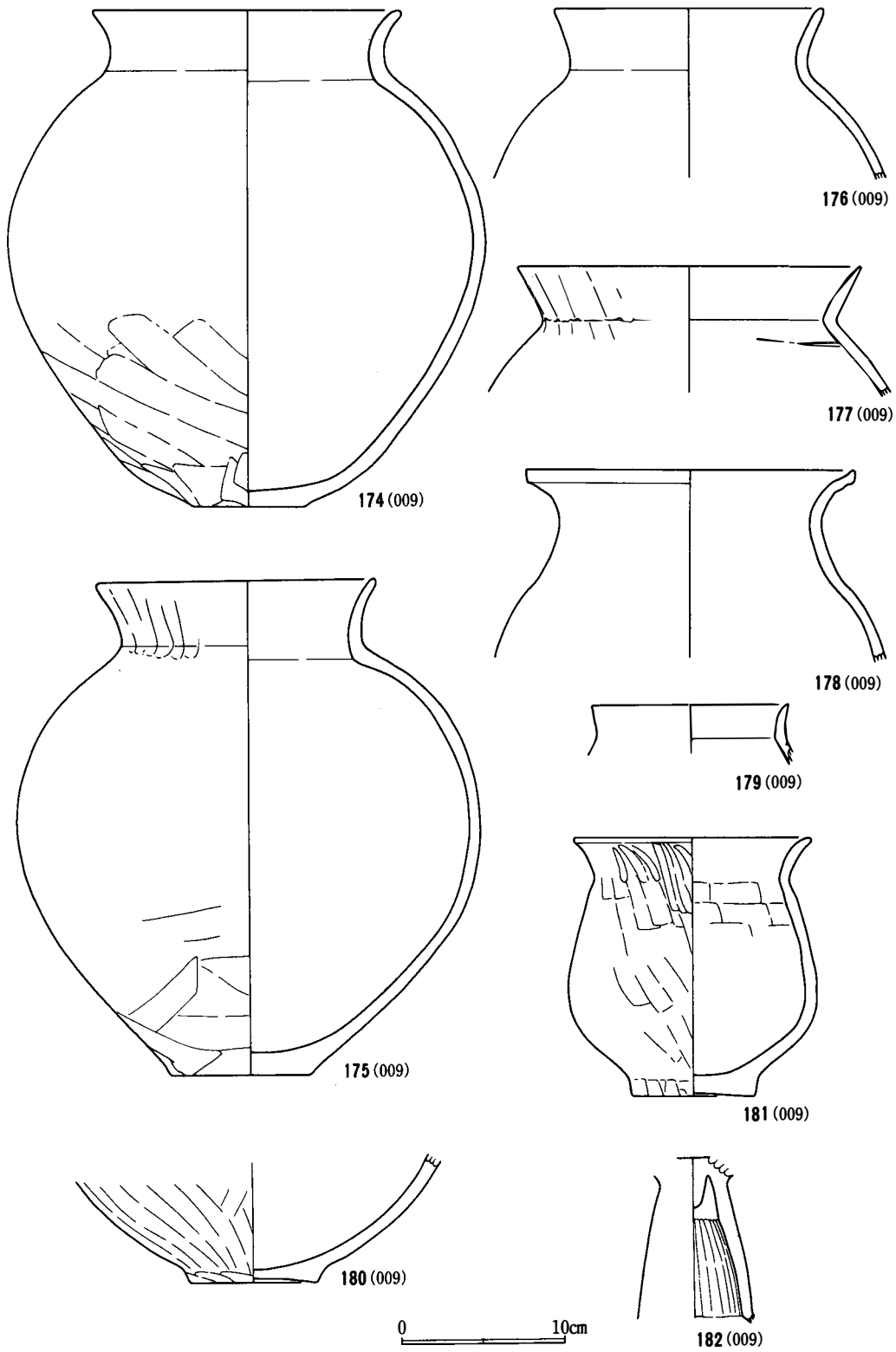
第34图 住居跡出土土器(10)



第35図 住居跡出土土器(1)

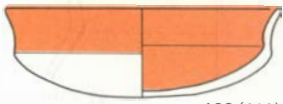


第36图 住居跡出土土器(12)

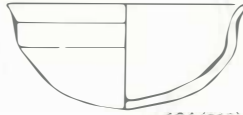


0 10cm

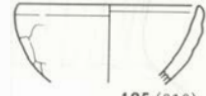
第37図 住居跡出土土器(13)



183 (010)



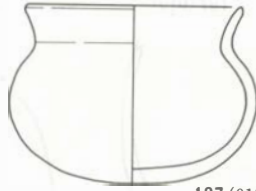
184 (010)



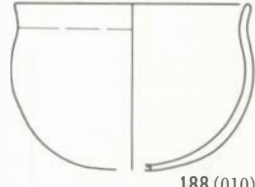
185 (010)



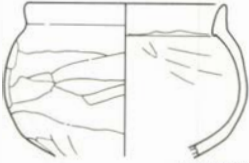
186 (010)



187 (010)



188 (010)



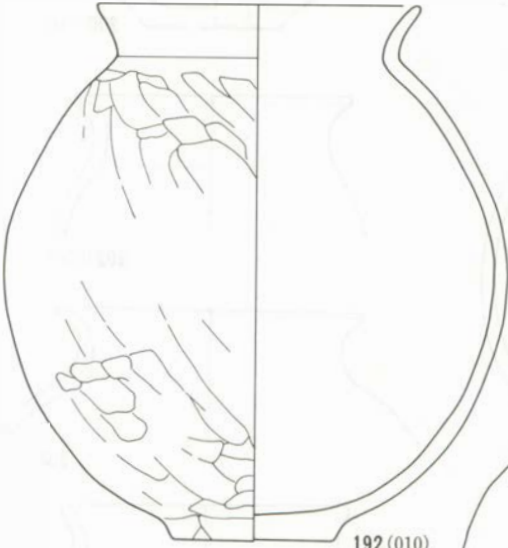
189 (010)



190 (010)



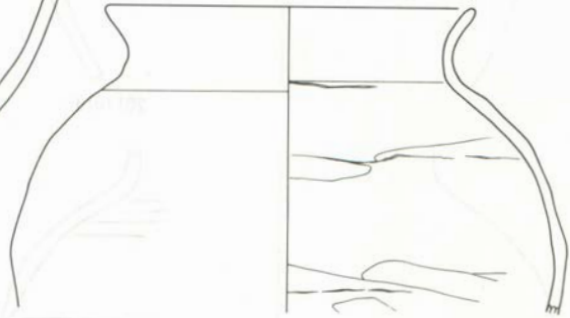
191 (010)



192 (010)



193 (010)



194 (010)



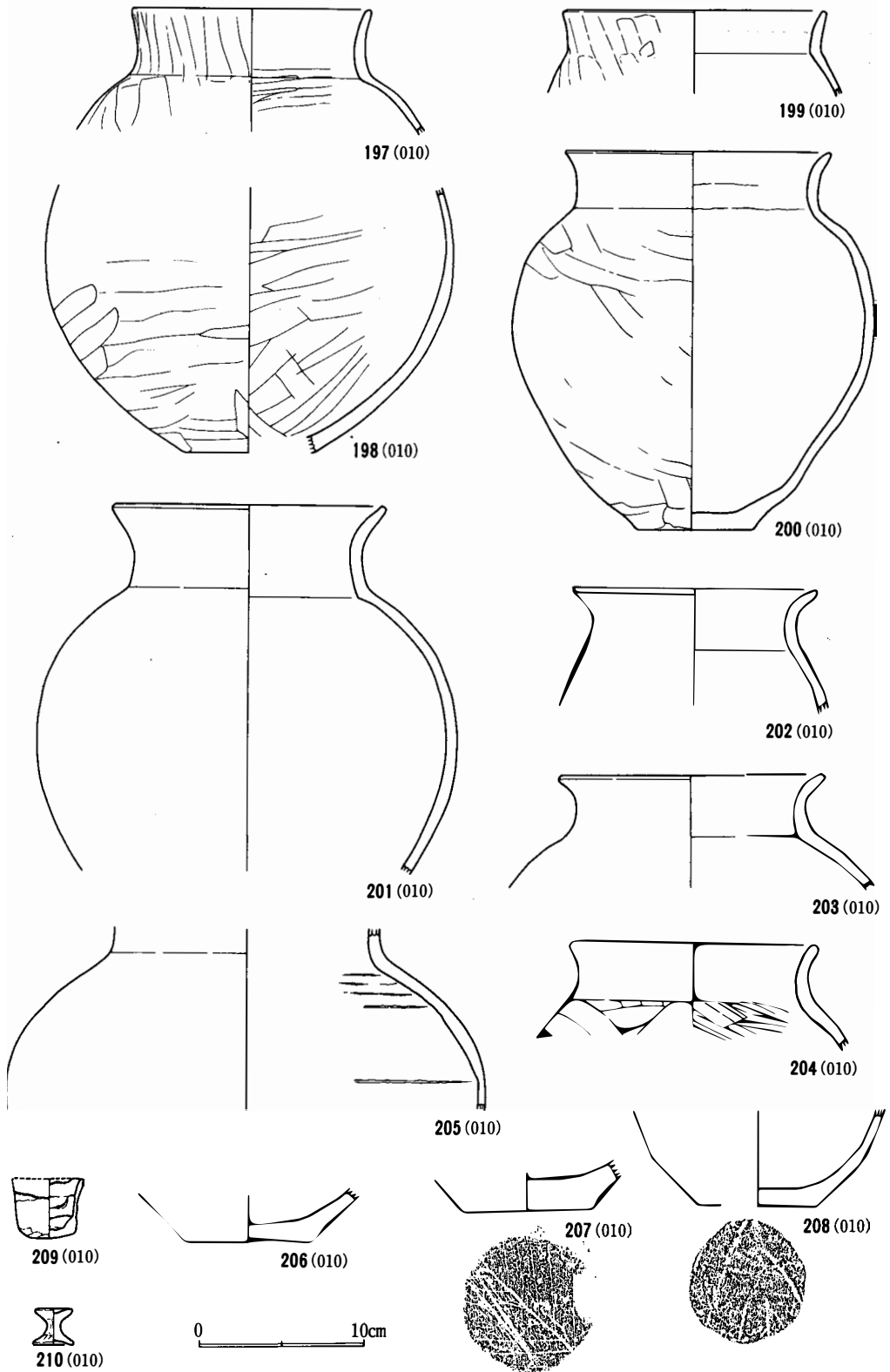
195 (010)



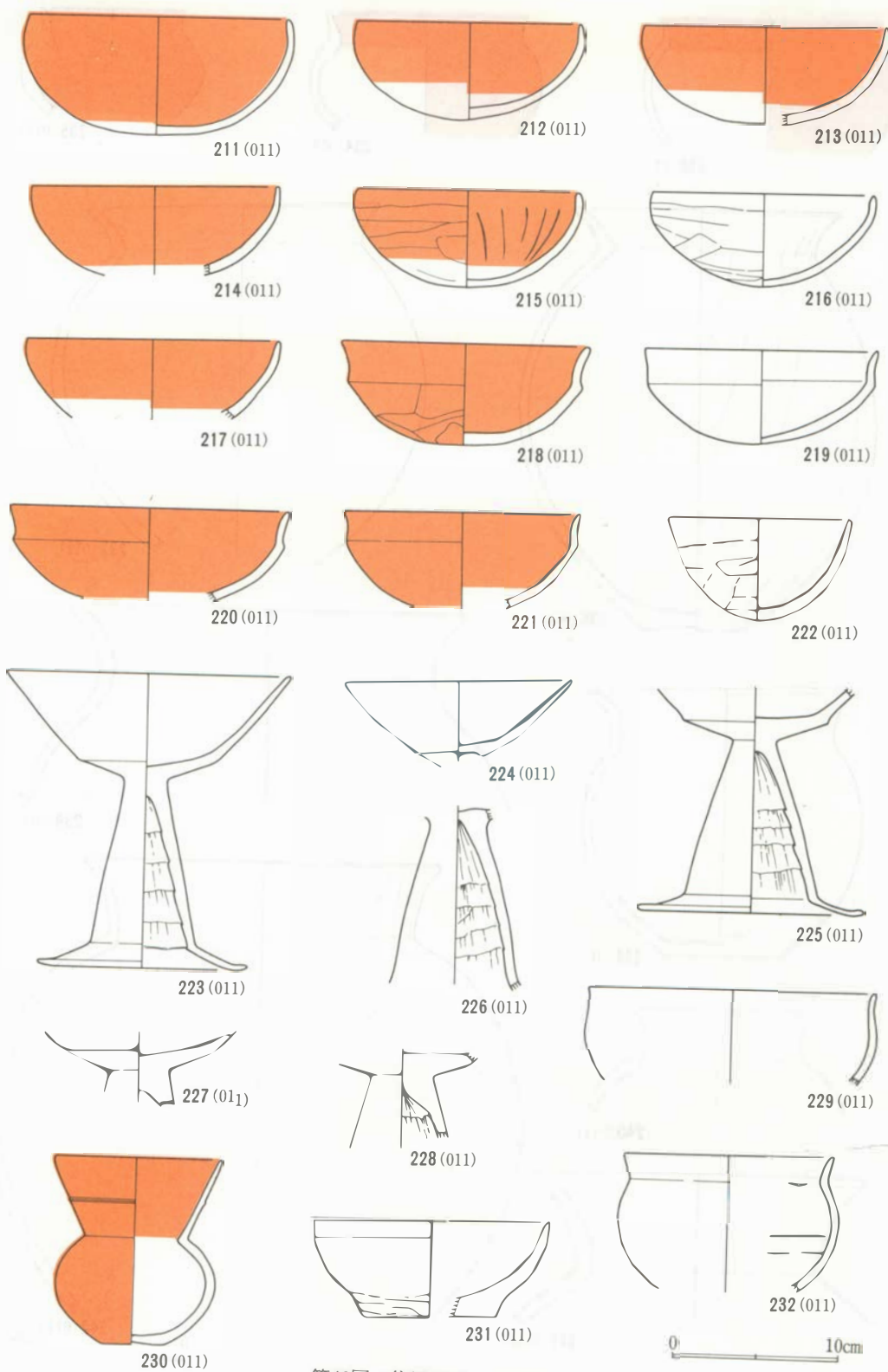
196 (010)



第38図 住居跡出土土器(14)

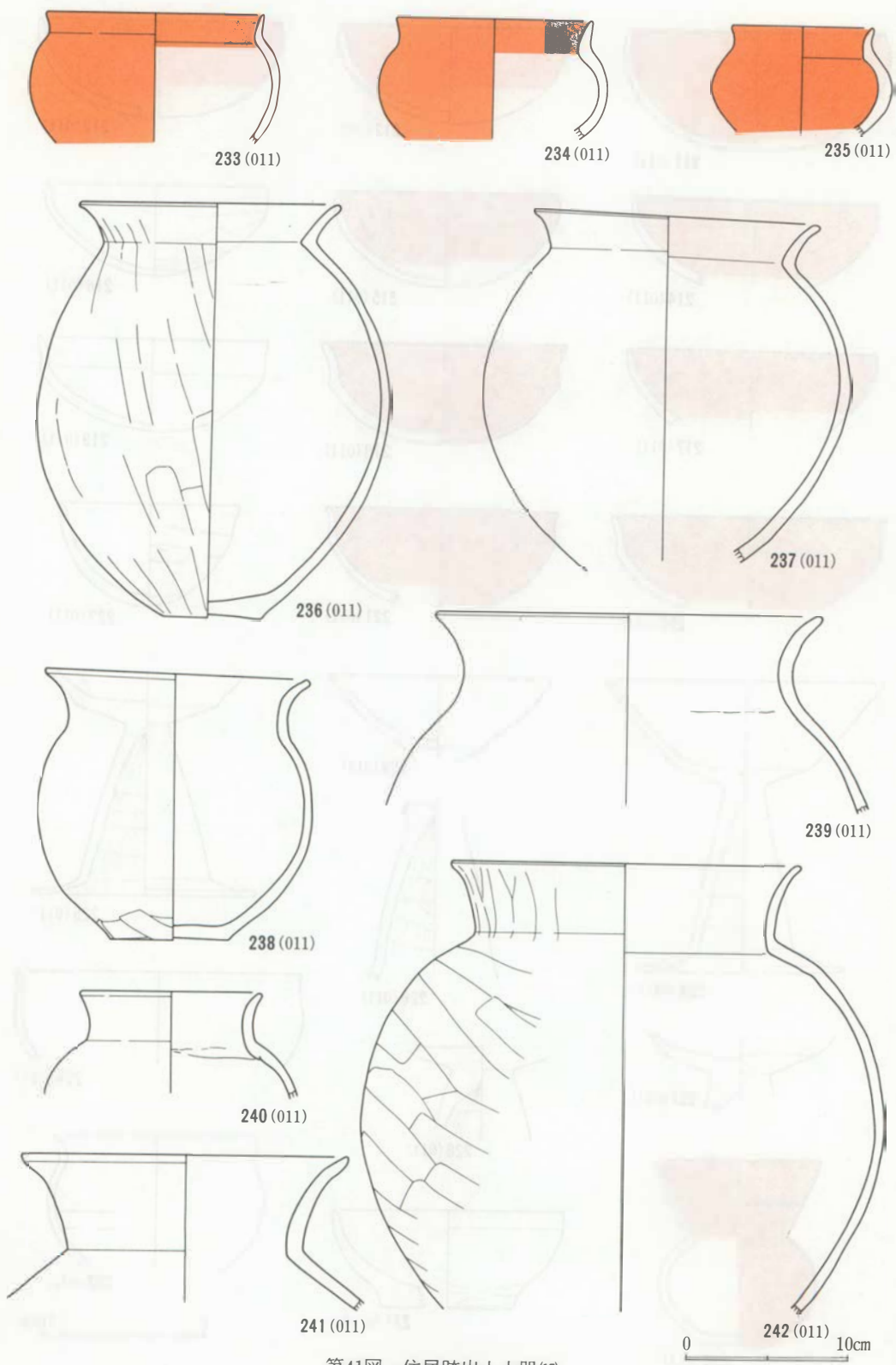


第39図 住居跡出土土器(15)

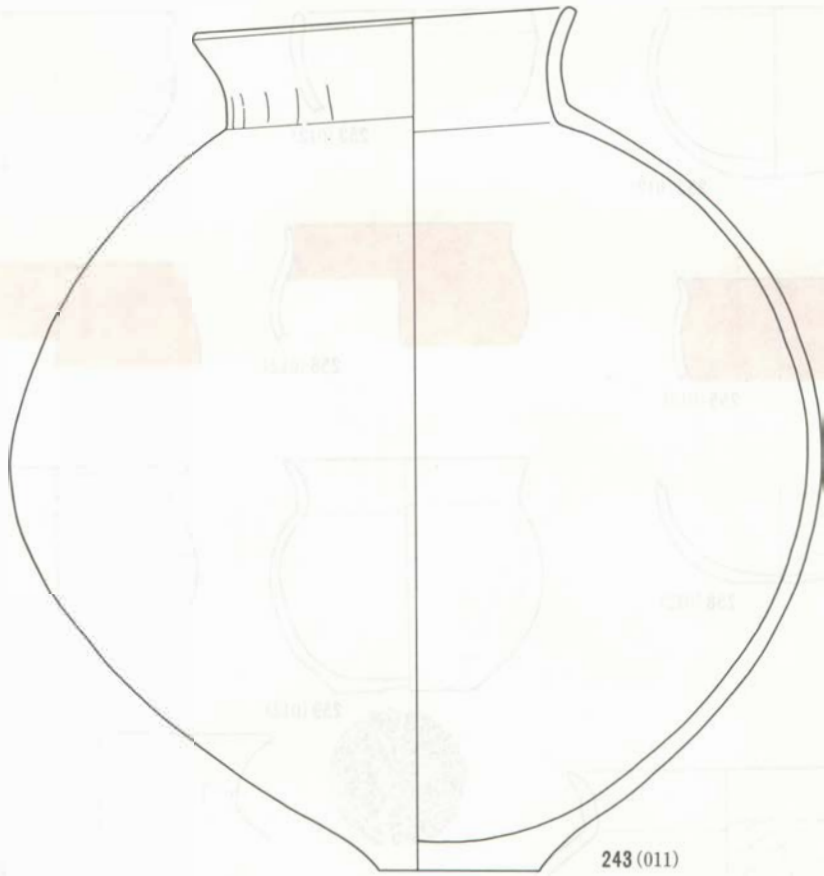


第40图 住居跡出土土器(16)

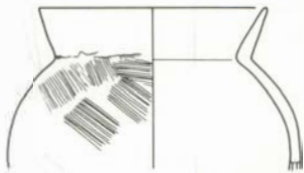
小六谷台遺跡 (No.26)



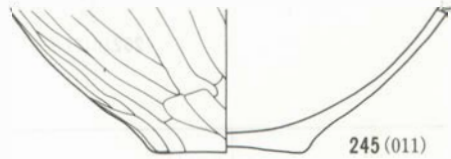
第41図 住居跡出土土器(17)



243 (011)



244 (011)



245 (011)



246 (012)



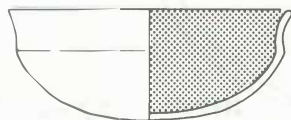
247 (012)



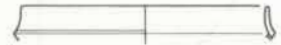
248 (012)



249 (012)



250 (012)

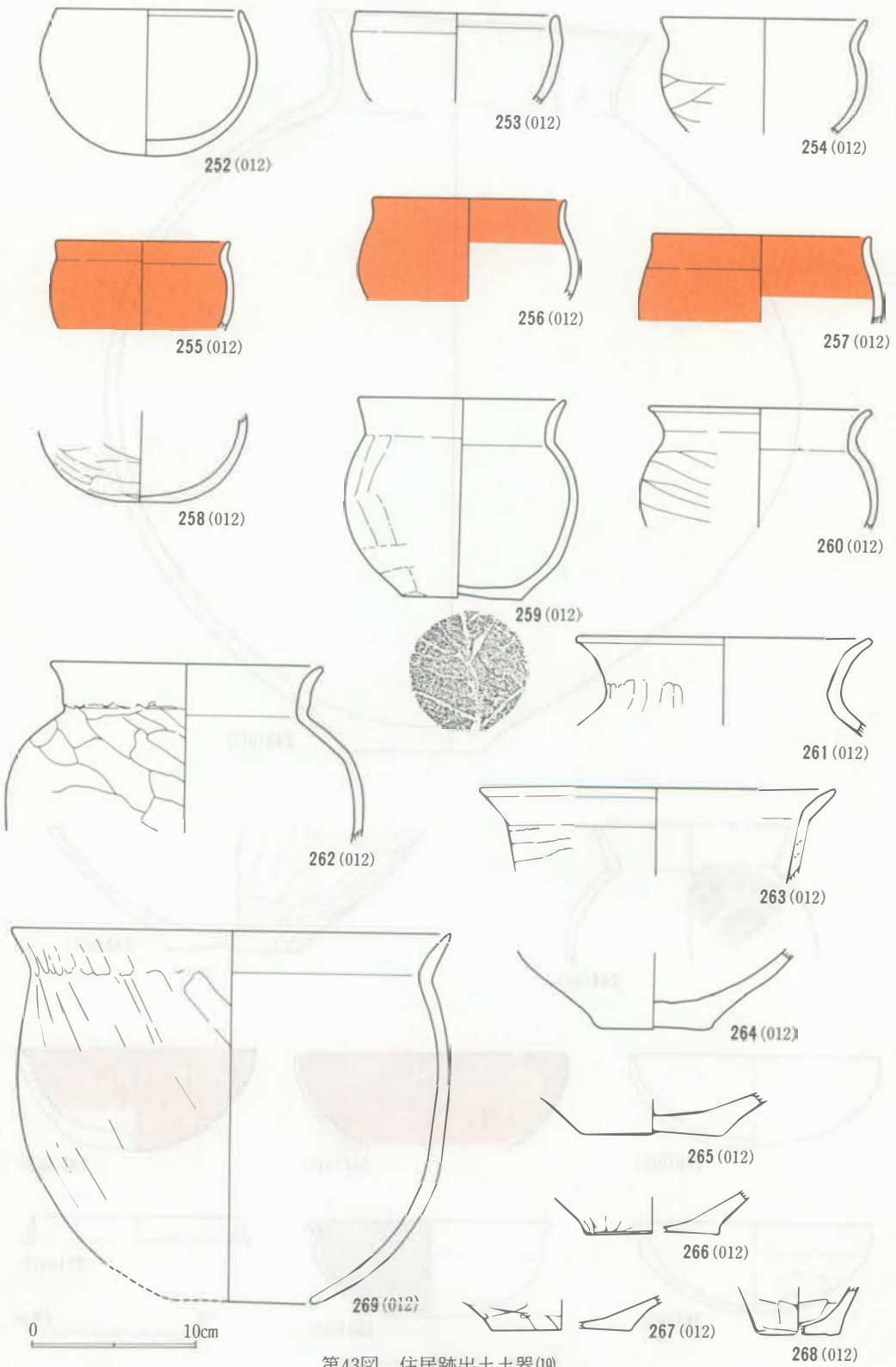


251 (012)

0 10cm

第42図 住居跡出土土器(18)

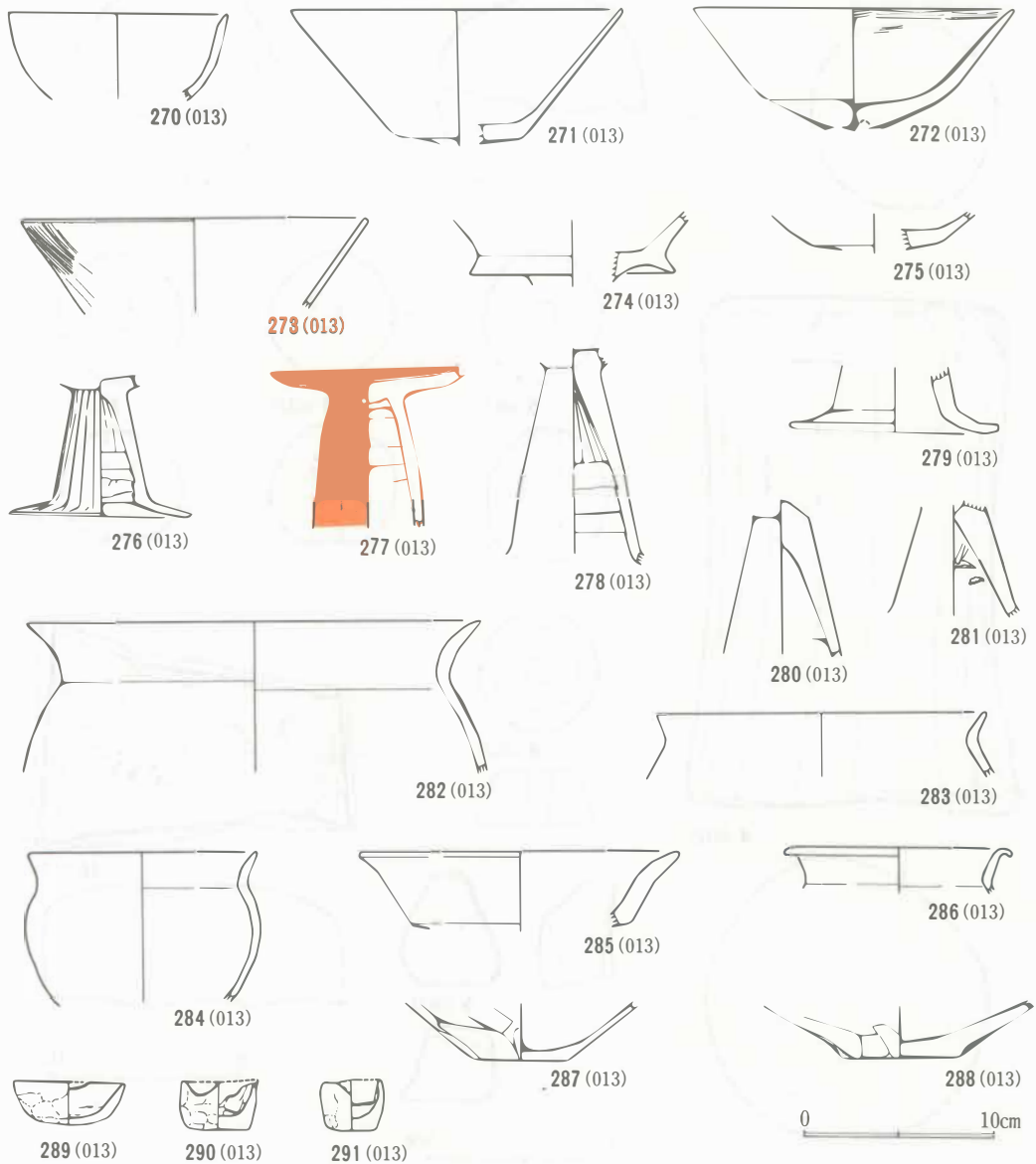
小六谷台遺跡 (No.26)



第43図 住居跡出土土器(19)

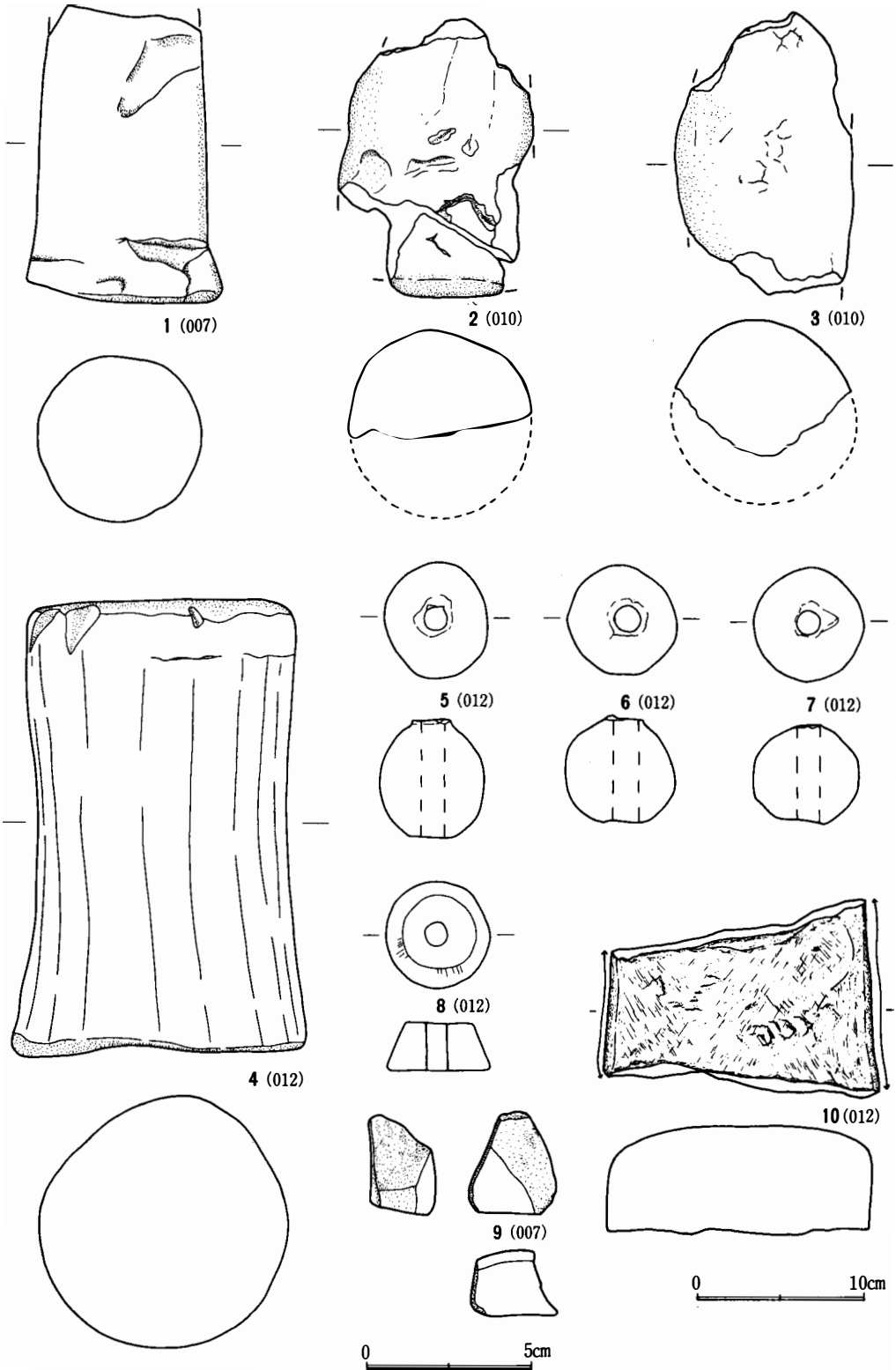
012号住居跡 (246~269)

本住居跡の出土土器はそれほど多くないが、小形の甕・壺の割合がやや顕著である。杯はA 1 (246~248) とC 3 (249, 250), C 2 (251) の3タイプがみられるが、形態的にややばらつきが窺われる。250の体部内面には黒色処理が施される。252は全体的に球形を呈する椀である。254は小形壺A, 255~257は小形壺Bで、後者はすべて赤彩される。259, 260は小形甕である。259の底部には木葉痕が残る。269は甑で、口唇部が尖がり胴部は丸味を帯びる。甕の底部を欠いたような形態を呈する。



第44図 住居跡出土土器(20)

小六谷台遺跡 (No.26)



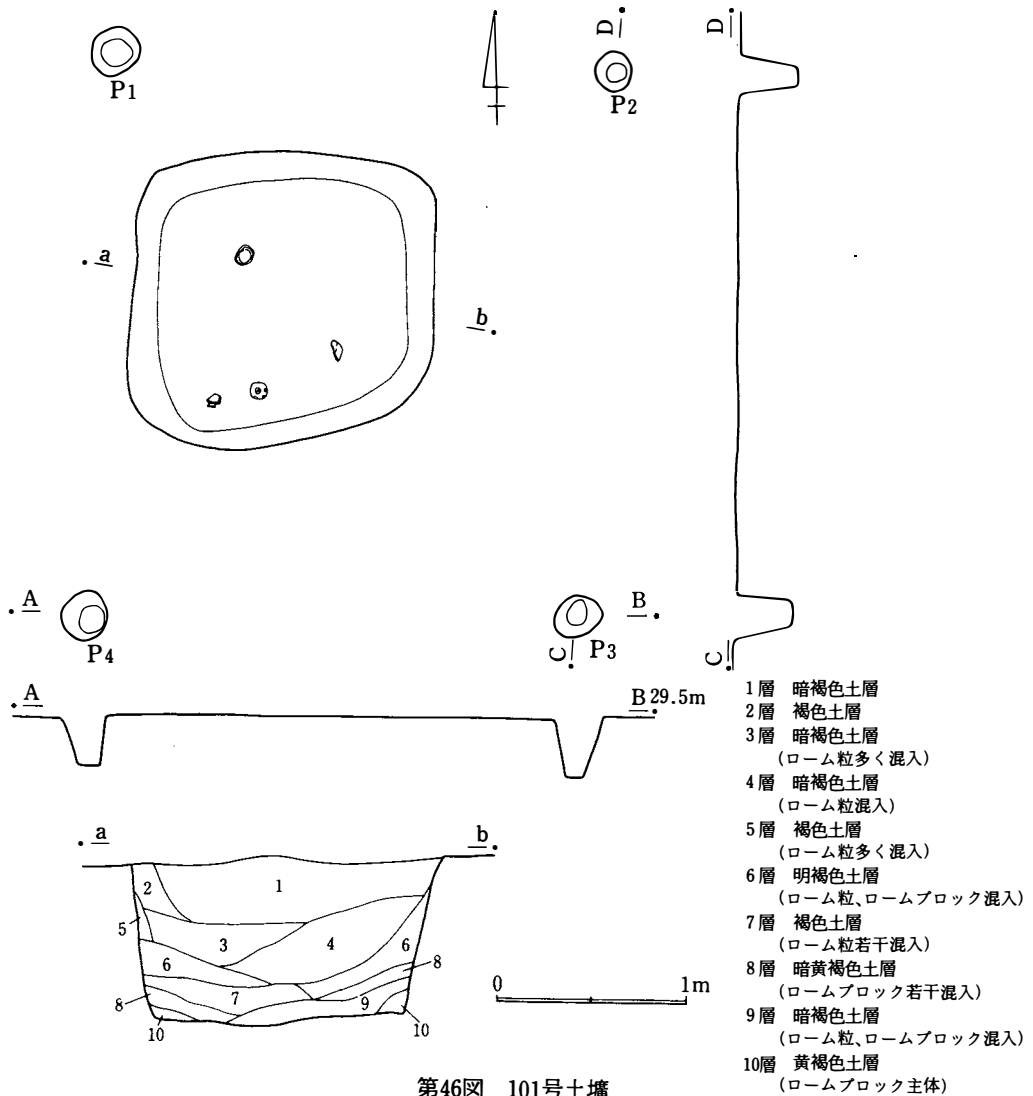
第45図 住居跡出土土製品・石製品

013号住居跡 (270~291)

本住居跡の出土土器は少なく、しかも小片が主のため様相は明らかでないが、高杯の占める割合が多いようである。270は杯A 1で、口唇部が若干外反する。271~281は高杯で、すべてAタイプに含まれるであろう。杯部はやや深くなる。274の体部下端は明瞭に外側に突出する。赤彩は277のみに施される。284は口縁部および胴部外面がヘラミガキされる小形壺Aとなろう。289は丁寧にナデが施される杯のミニチュア、290、291は手捏である。

住居跡・グリット出土土製品・石製品 (第45図)

1~4は土製支脚で、007(1)・010(2,3)・012(4)号住居跡よりそれぞれ出土している。その出土状況は、4のみカマド内に正置されており、他はすべて床面上に遺存していた。ただ



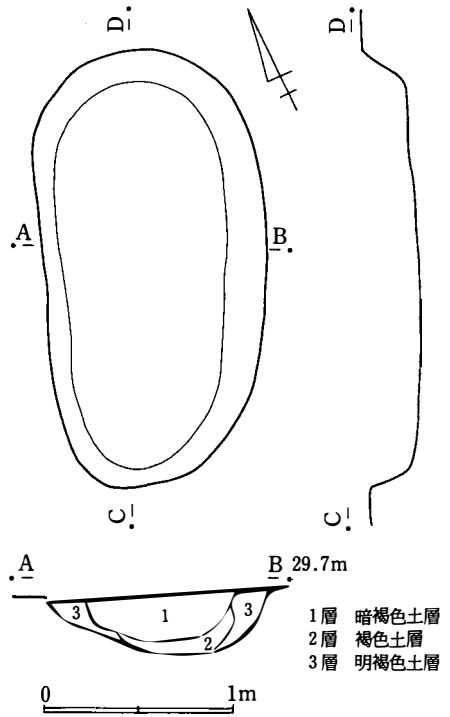
第46図 101号土壌

4にしても252の椀を頭部にかぶせており、その使用状況を示すものではない。1は頭部を欠損し、底部が若干広がる形態を呈する。2、3は同一個体と思われる。4は中央部がやや狭くなる円柱形を呈し、外面が丁寧にヘラケズリされる。すべて胎土中に小砂粒を多く含む。5～7は土玉である。5のみ010号住居跡、他はグリット出土である。5は3.4×3.5cm、重量33.6g、6は3.3×3.2cm、重量30.0g、7は3.3×3.0cm、重量26.4gを測る。いずれも穿孔時の粘土突出が片側に残る。胎土中に長石を主とする小砂粒を多く含む。8は003号住居跡の覆土中より出土した滑石製の紡錘車である。上径2.2cm、底径3.1cm、器高1.4cm、重量23.7gを測る。上面・底面とも丁寧に研磨され、側面には縦位の細かい研磨痕が残る。9は007号住居跡出土の砂岩製の砥石片である。3面に使用痕が認められる。

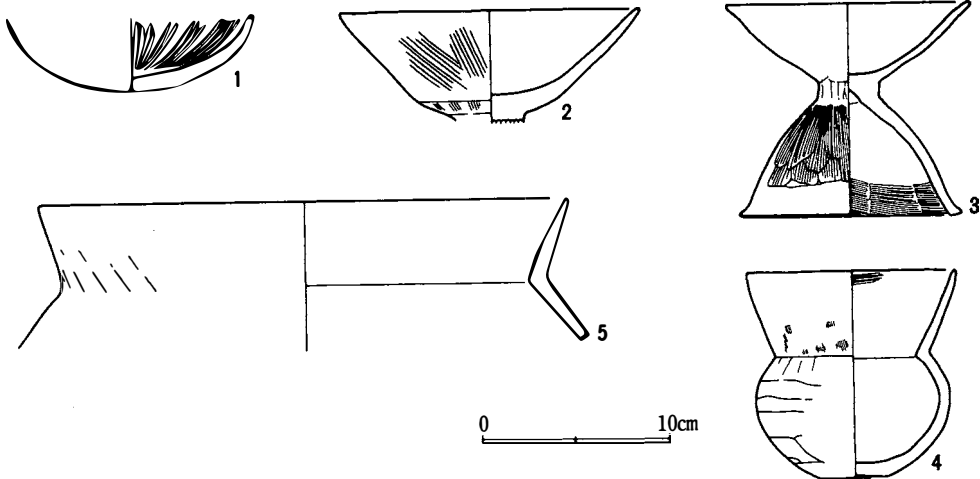
土壌

101号土壌 (第46図, 図版8)

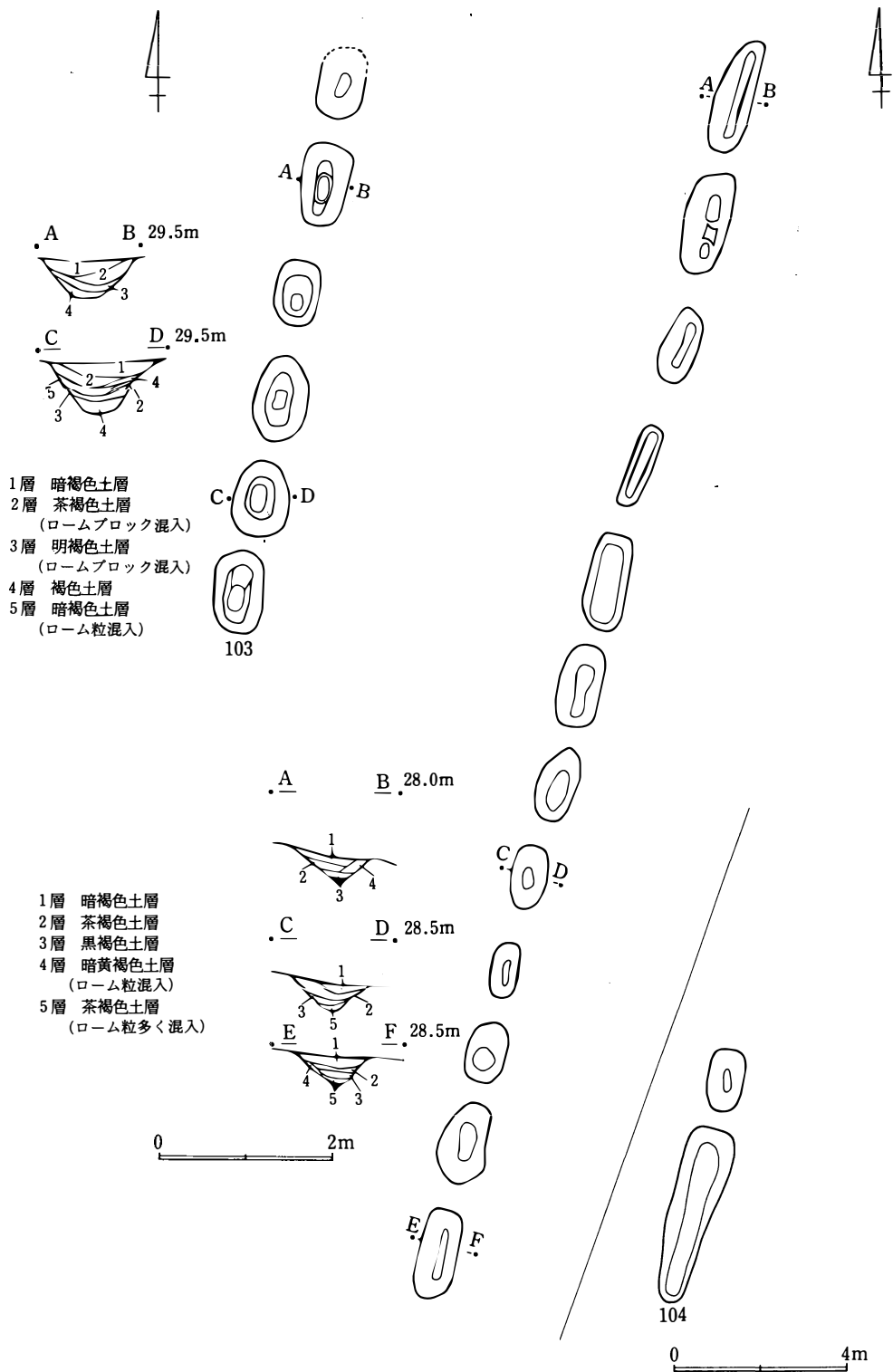
A 0区, 103号柵列状遺構の東側に接するように位置する。中央部に設けられる土壌は、1.6×1.5mの略正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.8mを測る。墳底は粘質土層中にあり判然としない。土壌の周囲には、付随すると思われるピットが4本検出された。径20～25cm、深さ27～23cmを測



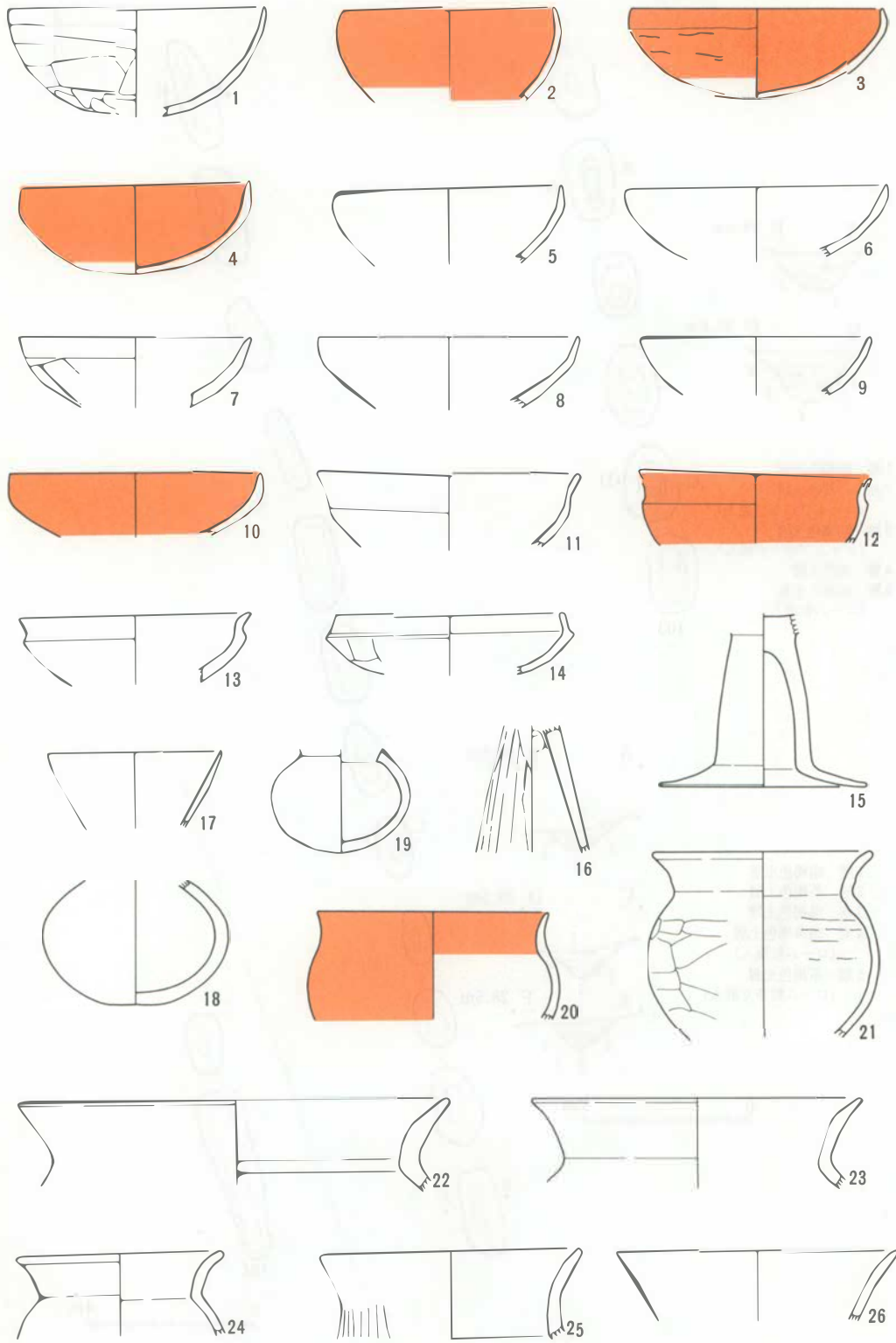
第47図 102号土壌



第48図 101号土壌出土土器



第49図 103・104号柵列状遺構



第50図 グリット出土土器(1)

る。土壌中の覆土にはローム粒を多く含み、人為的に埋め戻された可能性が強い。遺物は、覆土の中層から上層にかけて出土している。

本遺構は、土壌の周囲に4本のピットを持つことより、上屋構造を有する状況が窺える。

102号土壙 (第47図)

B1区, 006号住居跡の北側3m程に位置する。規模は2.3×1.2mを測り、楕円形プランを呈する。壁はなだらかに立ち上がり、深さは30cmを測る。遺物の出土はなかった。

出土土器 (第48図)

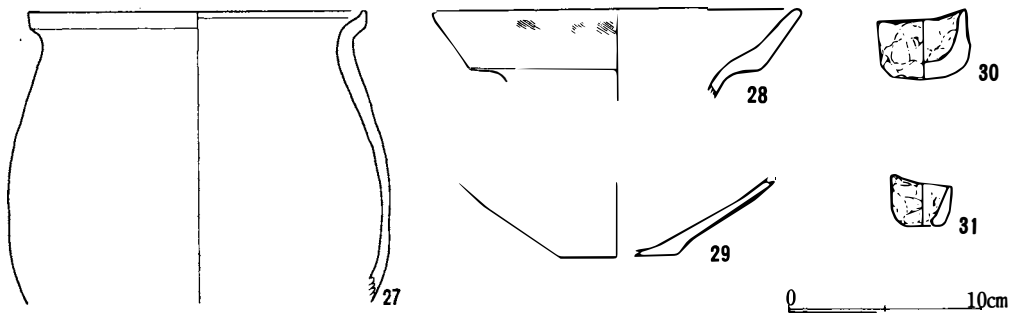
すべて101号土壙の覆土中より出土している。1は杯で、口縁部を欠損する。2は高杯A2, 3は高杯A1となろう。3は鼓形状の特異な形態を呈する。4は埴で、胴部がやや強く張り出す。底部は若干上げ底となる。5は広口の甕となろうか。本遺構で赤彩はみられなかった。

103・104号柵列状遺構 (第49図, 図版8)

台地両肩部に、集落を区画するような状況で設けられる。西側の103号遺構は調査区内で6本のピットを検出した。深さ40~50cmで、底面・壁とも堅緻である。底面はいずれも長方形を呈する。覆土中にはローム粒を含み、底面近くでは炭化粒も若干認められる。東側の104号遺構は調査区内で14本のピットを検出した。西側に比べて形状に一定性がなく、深さもやや浅くなる。覆土中に炭化粒及び山砂を含む。いずれにも遺物の出土はなかった。

グリット出土土器 (第50, 51図)

杯は14点実測できた。小片がほとんどであるため全様は不明であるが、かなりバラエティーがあるようである。17~19は埴である。18の底部は小さい平底を呈する。20は小形壺A, 21は小形甕Aとなろう。27は口唇部が上方につまみ上げられ、胎土中に長石粒等を多く含むことより甕Cとなろう。胴部外面は磨耗のため詳細は不明であるが、おそらくヘラミガキ調整が施されているよう。30, 31は手捏である。31は底部を形成せず全体に筒状を呈する。



第51図 グリット出土土器(2)

第 II 篇

中山遺跡 (No.30)

遺跡コード 209-005

所在地 佐原市福田字中山394他

調査担当者 高橋博文, 羽二生 保

馬場遺跡 (No.31)

遺跡コード 209-006

所在地 佐原市福田字馬場258-2他

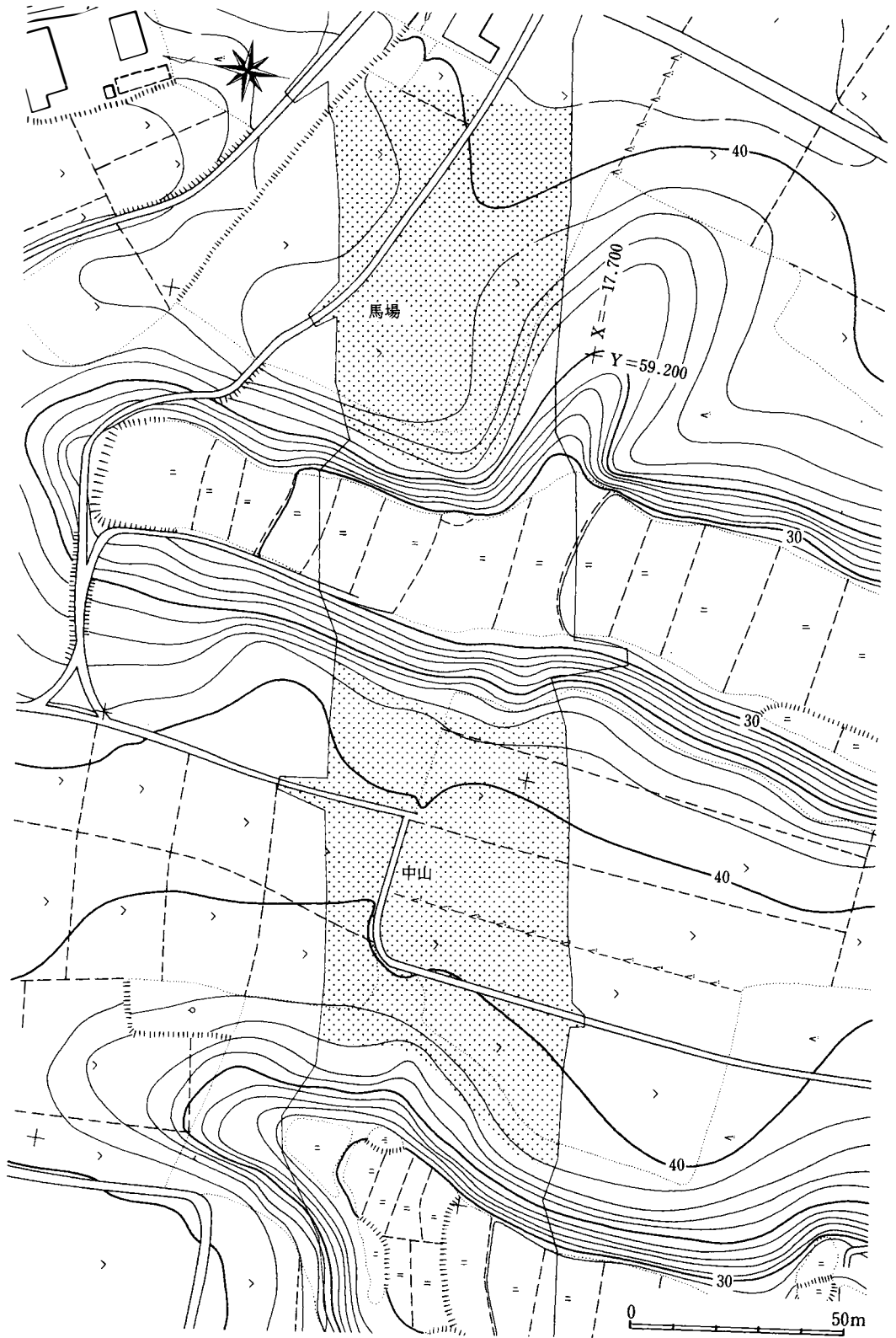
調査担当者 池田大助, 岸本雅人, 岡田光広

天王宮遺跡 (No.32)

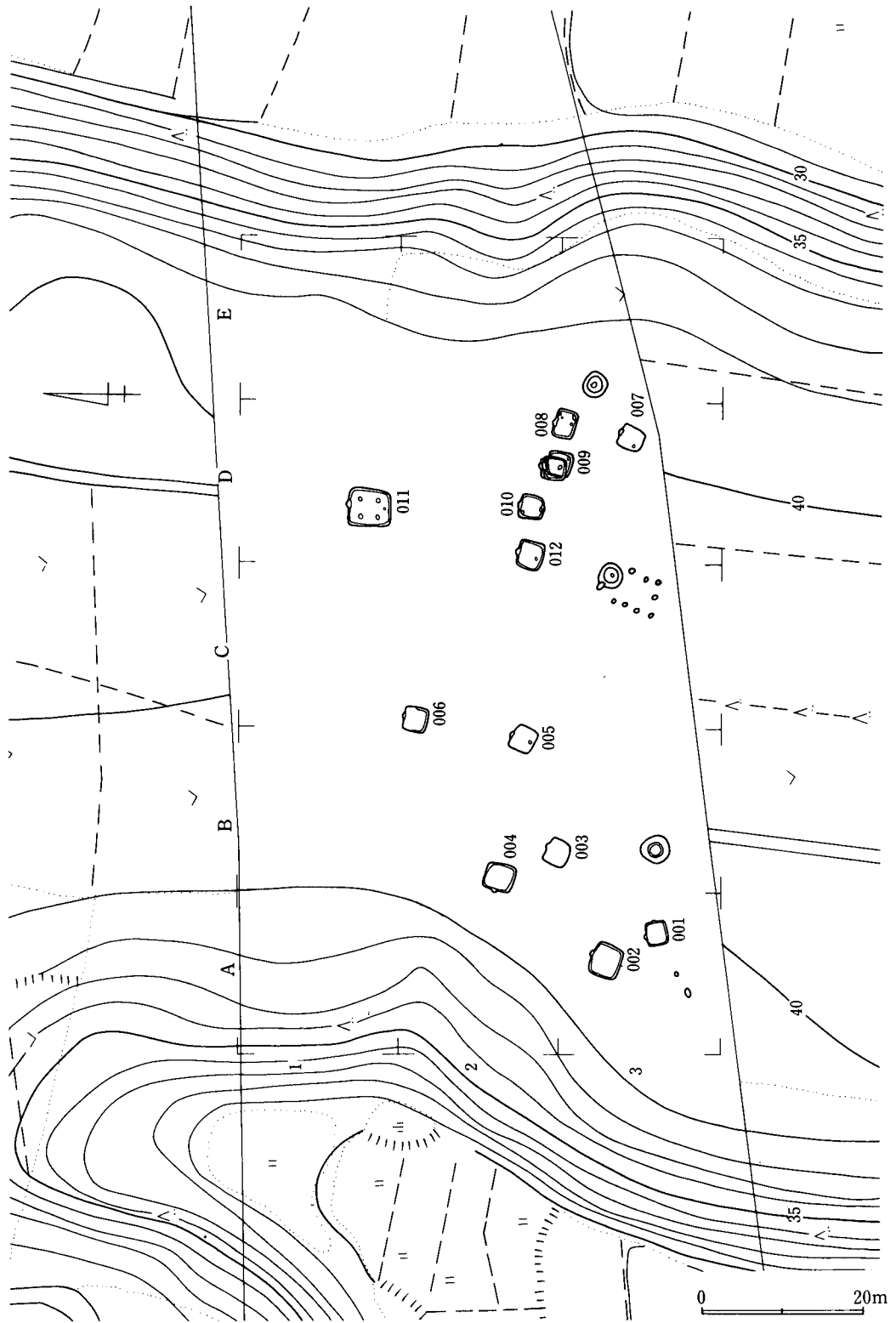
遺跡コード 209-007

所在地 佐原市矢作字天王宮509-1他

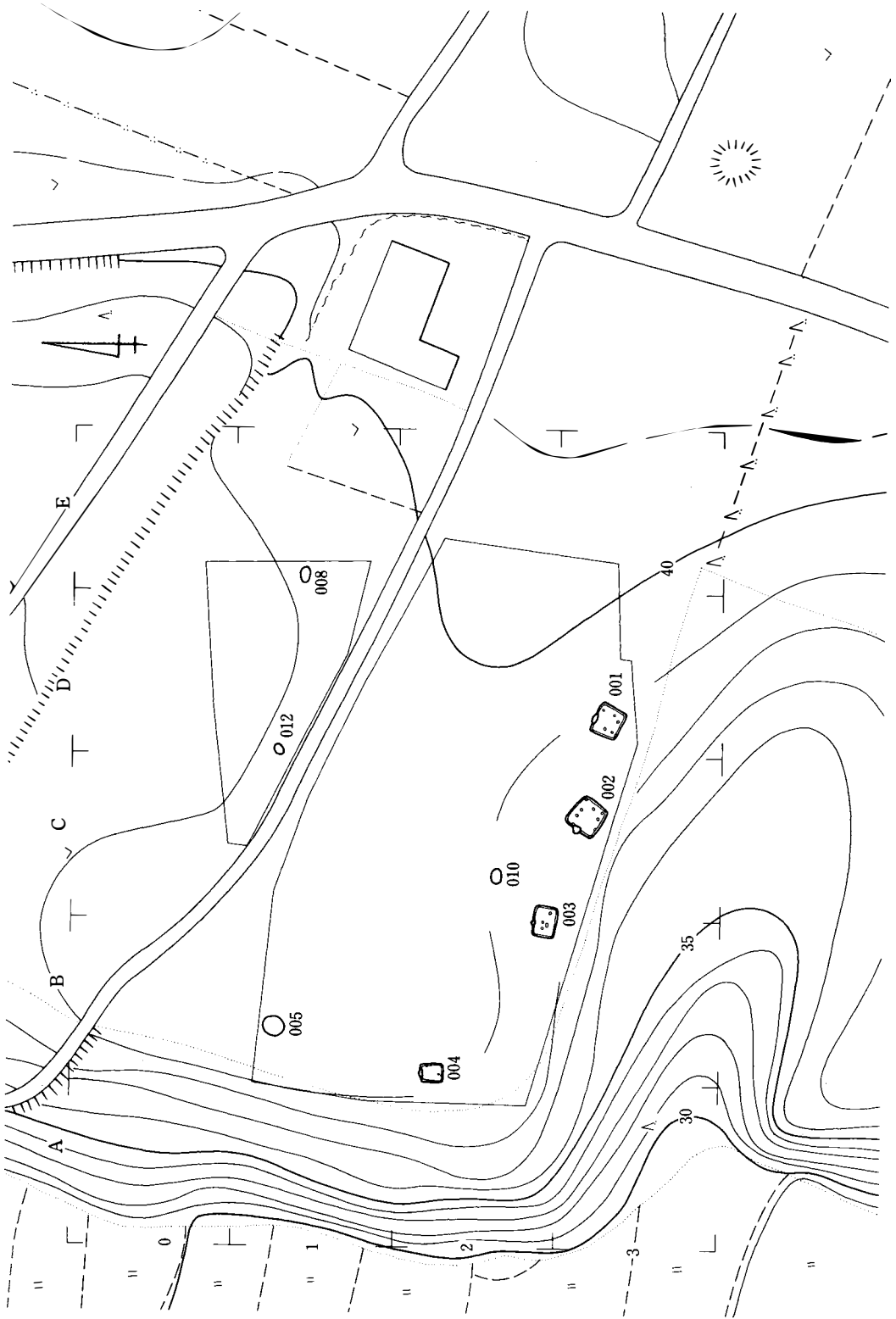
調査担当者 池田大助, 岸本雅人



第52図 中山・馬場遺跡地形図



第53図 中山遺跡遺構配置図



第54図 馬場遺跡遺構配置図

0 20m

検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代

1. 中山遺跡

1. 層序区分 (第55図)

I層 暗褐色土層。表土層である。

II b層 黄褐色土層。いわゆる「新期テフラ」と呼ばれている層である。

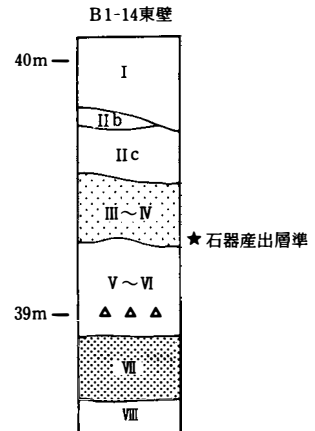
II c層 暗褐色土層。ローム粒を多く含む。

III～IV層 黄褐色土層。いわゆるソフトローム層とハードローム層に対応する。IV層までソフト化されており、III層とIV層の識別が困難である。石器産出層準はこの層の下部にあたる。

V～VI層 始良T n火山灰が検出された層である。

VII層 第2黒色帯に相当する層である。

VIII層 立川ローム層の最下部にあたる。



第55図 基本層序

2. 出土状況 (第56～58図)

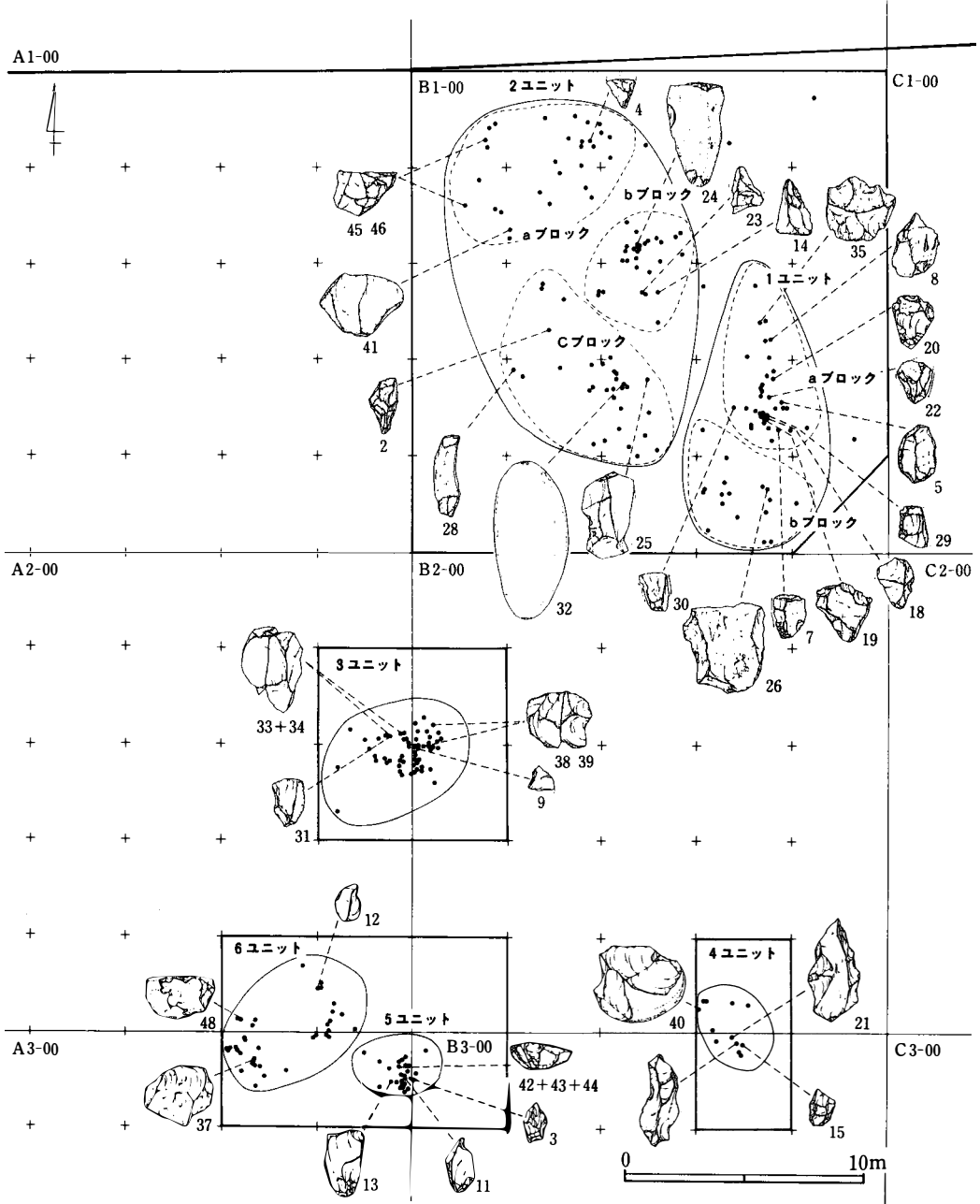
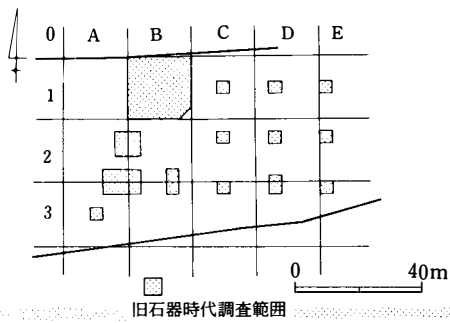
石器の産出層準はIII～IV層の下部にあたる。平面分布・垂直分布・石器製作技術・石材からみて同時期の所産であり、IV層下部に生活面をもつ石器群と思われる。

石器集中地点は9ヶ所検出され、B1グリット東側の2つの集中地点とB1グリット西側の3つの集中地点は平面分布状況・器種組成・石材組成から有意的なまとまりとして捉えられることよりそれぞれ1ユニット・2ユニットと設定した。1ユニットは南北に細長く分布し、比較的密な集中である。2ユニットは楕円形に分布し、集中は粗である。3・5ユニットは密な集中で小範囲に分布し、4・6ユニットは粗い集中である。ユニット内の接合はみられるが、ユニット間ではみられなかった。

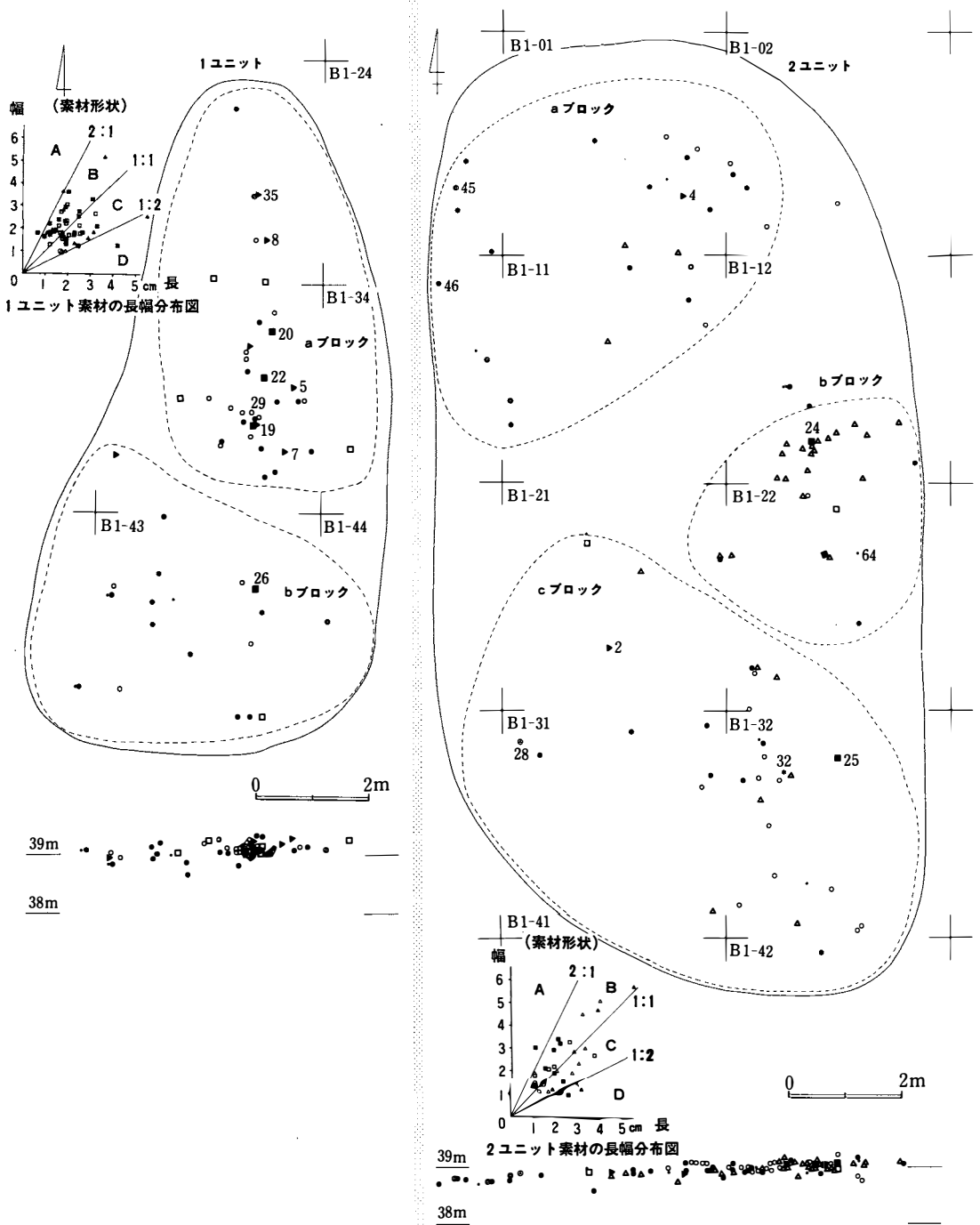
3. 出土遺物

(1) 石器組成

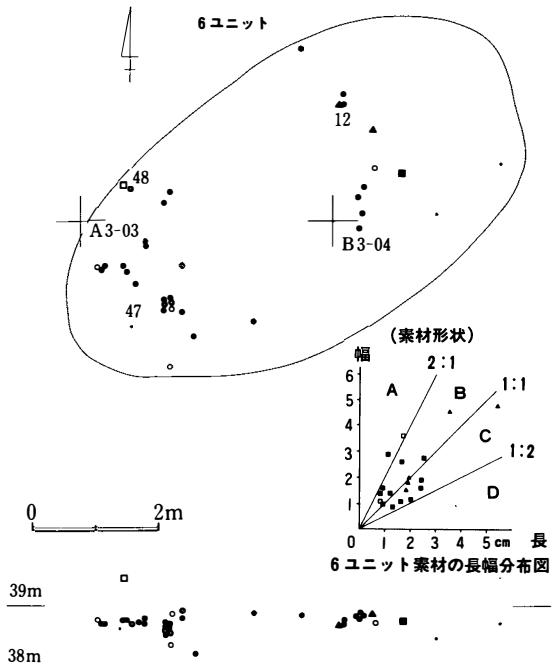
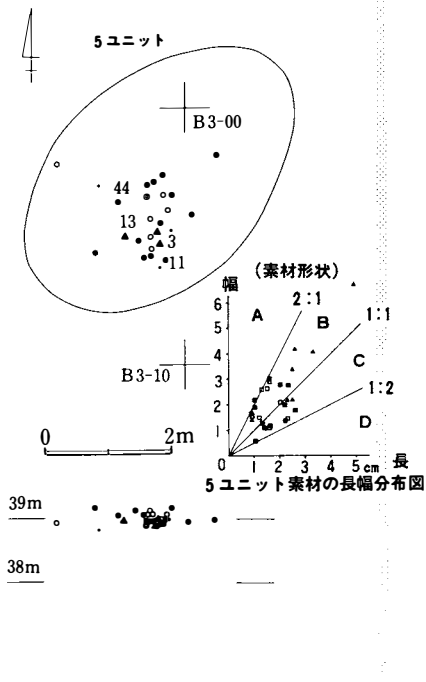
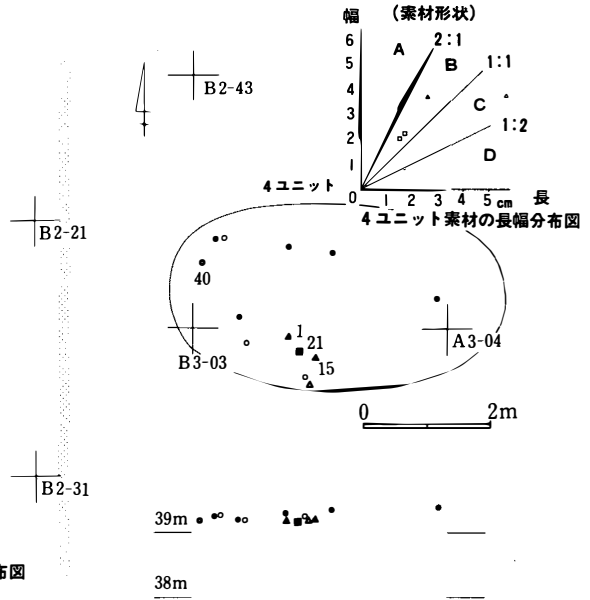
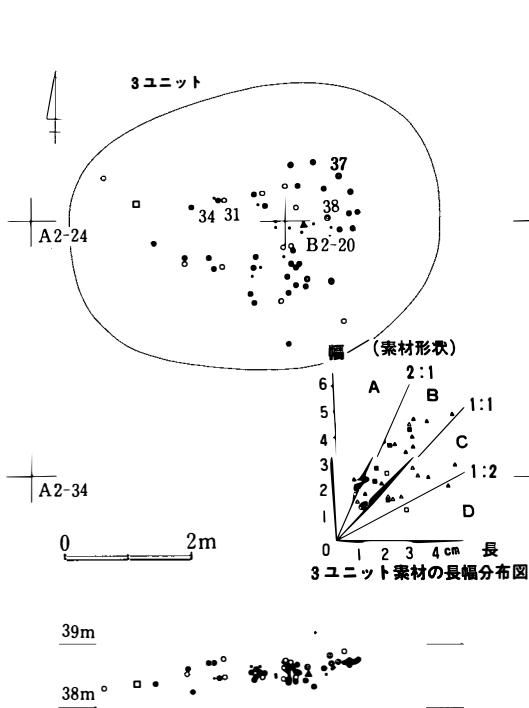
検出された石器の総数は296点である。ユニット別の器種組成は、1・2・5ユニットにおいてナイフ形石器・削器・使用痕のある剥片の割合が高い。また、2ユニットでは礫の割合が極端に高く、3・6ユニットでは石核・剥片・碎片の割合が高い。石材組成は、黒曜石が半数以上(61%)を占めるのが特徴で、各ユニットをみても黒曜石の割合が高い。玉髄は1～3ユニットで多くみられるが、4～6ユニットではほとんどない。



第56図 旧石器時代調査範囲〔上段〕(1/2,400)
旧石器時代遺物分布図〔下段〕(1/300)



第57図 1・2ユニット器種別分布図 (1/120)



第58図 3～6ユニット器種別分布図 (1/120)

旧石器時代器種別器種組成

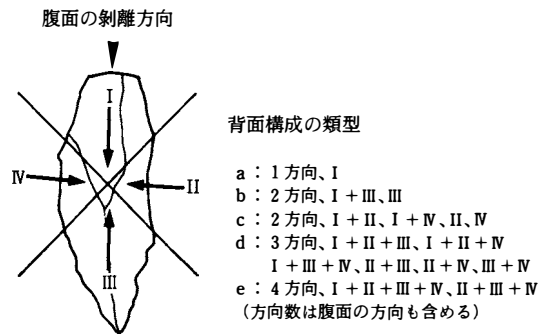
器種	ユニット						計
	1	2	3	4	5	6	
ナイフ形石器	6	3	1	2	5	1	18
削器	4	3		1	1		9
楔形石器		1					1
敲石		1					1
二次加工のある剥片	1						1
使用痕のある剥片	5	2	1			1	9
折断剥片	20	18	11	3	8	2	62
石核	2	3	4	1	2	2	14
剥片	24	22	30	5	20	16	117
砕片	5	5	13		4	2	29
礫	2	28	1	1		2	34
不明		1					1
計	69	87	61	13	40	26	296

旧石器時代石材別組成表

器種	ユニット						計
	1	2	3	4	5	6	
黒曜石	54	29	30	8	32	17	170
玉髓	9	24	28	2			63
粘土岩			3	1	4	3	11
チャート	3			1	3	3	10
礫	2	28	1	1		2	34
その他	1	3	1	1	1	1	8
計	69	87	61	13	40	26	296

(2) 石器製作技術 (第59図)

個体別資料属性表によって素材の生産技術を復元してみる。平坦打面で、打面調整を行わないのが共通した特徴である。頭部調整は、黒曜石の個体が比較的頻繁に行うのに対して玉髓の個体が行わない傾向がみられる。背面構成は、腹面の方向を含めて剥離方向が3方向のもの(類型d)が最も多く、4方向のもの(類型e)がある(個体別資料番号2・12・23・29・38)のも特徴である。これらのことから、打面転移の頻繁な素材の生産技術が想定される。これをユニット別にみても偏りのある特徴がなく、素材の生産技術からも各ユニットは同時期の所産と考えられる。

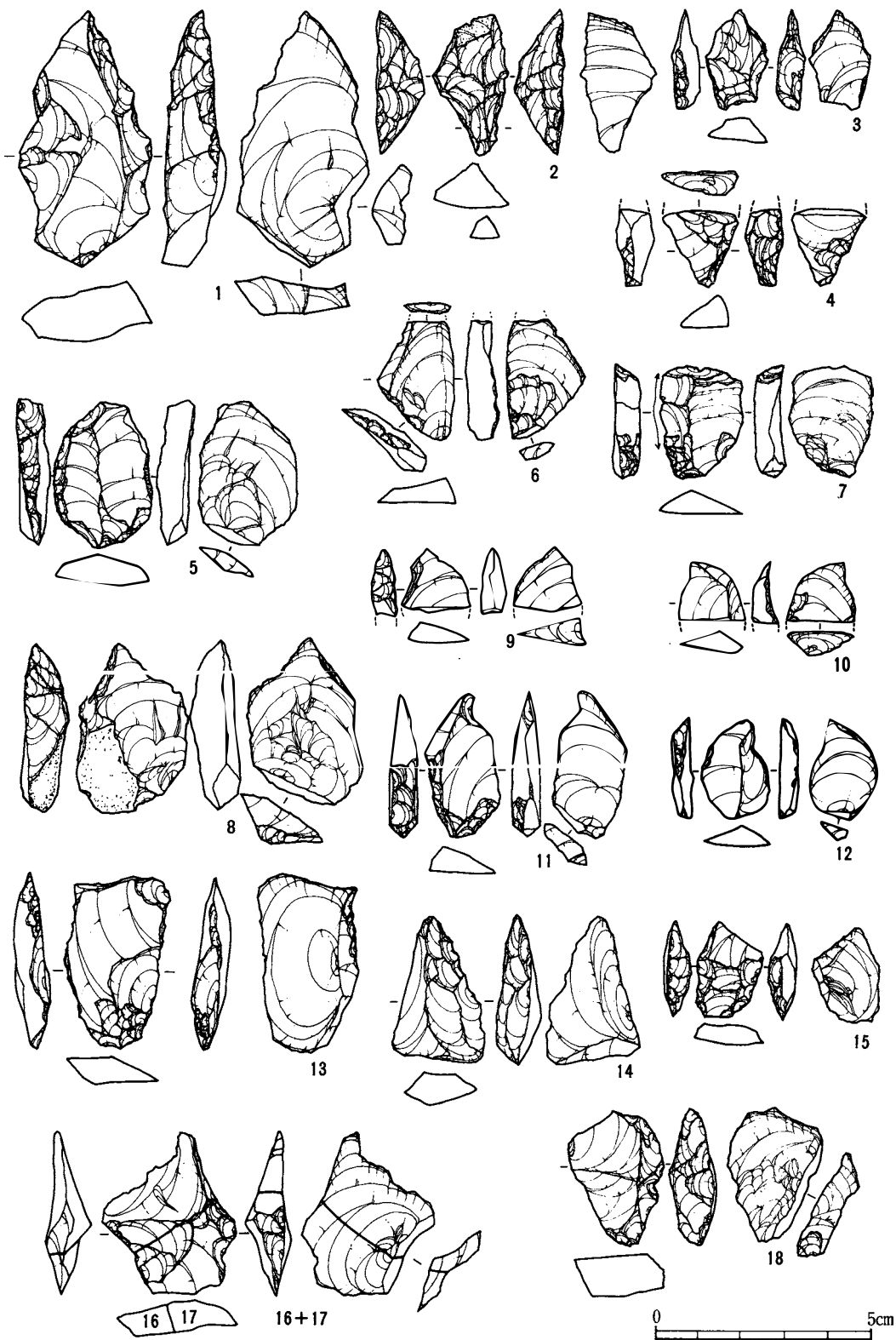


第59図 背面構成

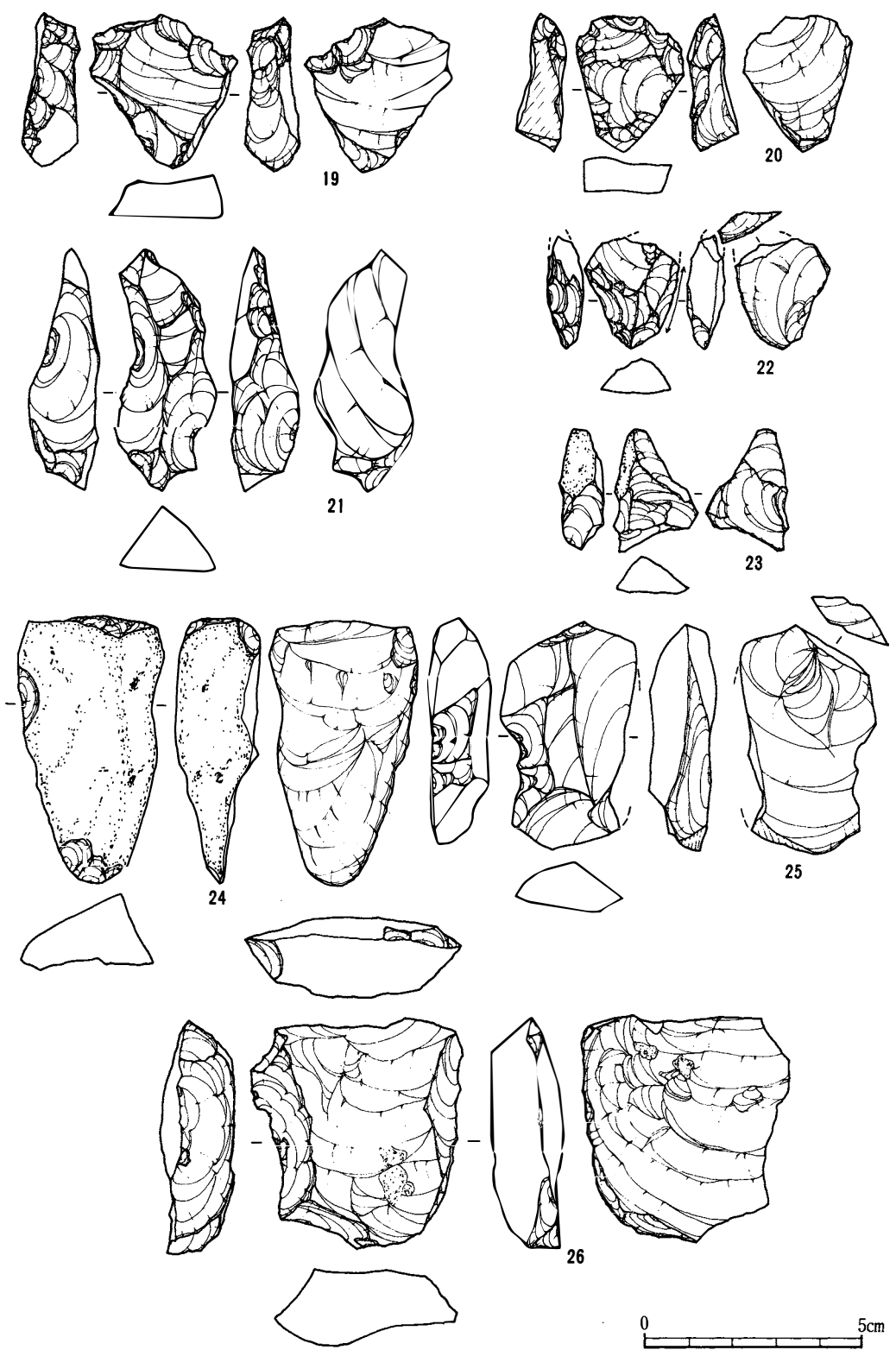
(3) 出土石器 (第60~64図, 図版27)

ナイフ形石器 (1~18)

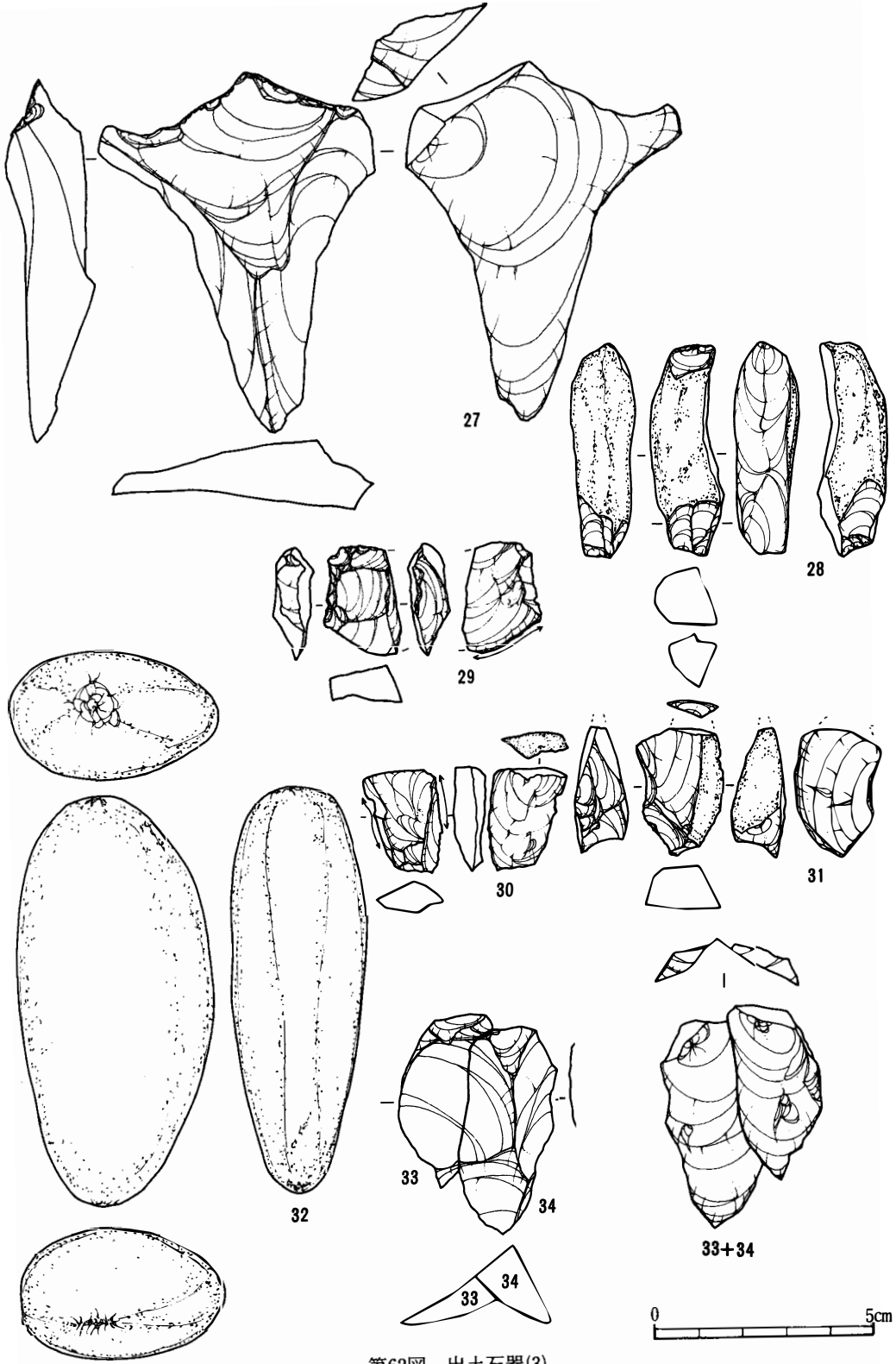
ナイフ形石器の素材生産技術の特徴は、素材形状Bの縦長剥片を素材とするもの(1~12)と素材形状Cの横長剥片を素材とするもの(13~18)に分かれる。残存するものの打面はすべて平坦で、打面調整は13・18を除いて行われぬ。頭部調整は、施すもの(1・5・11・15~17)と施さないもの(6・8・12~14・18)がある。ナイフ形石器の素材生産技術は、石器群全体の素材生産技術と一致する。1~4は鋸歯状の調整を二側縁に施し、素材の形状を大きく修正している。5~12は急角度の細かな調整を一側縁に施し、素材の形状を保持的に保っている。



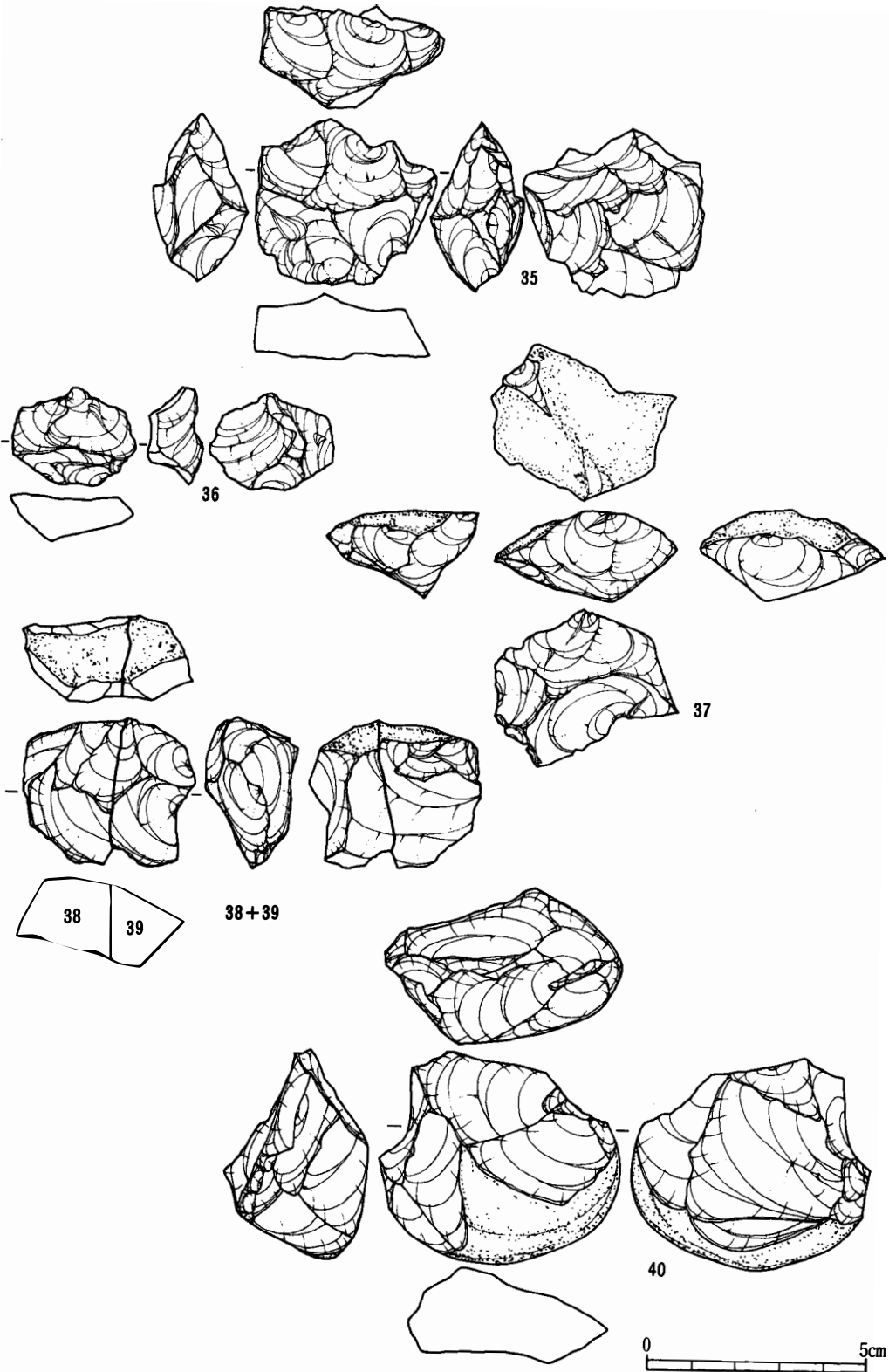
第60图 出土石器(1)



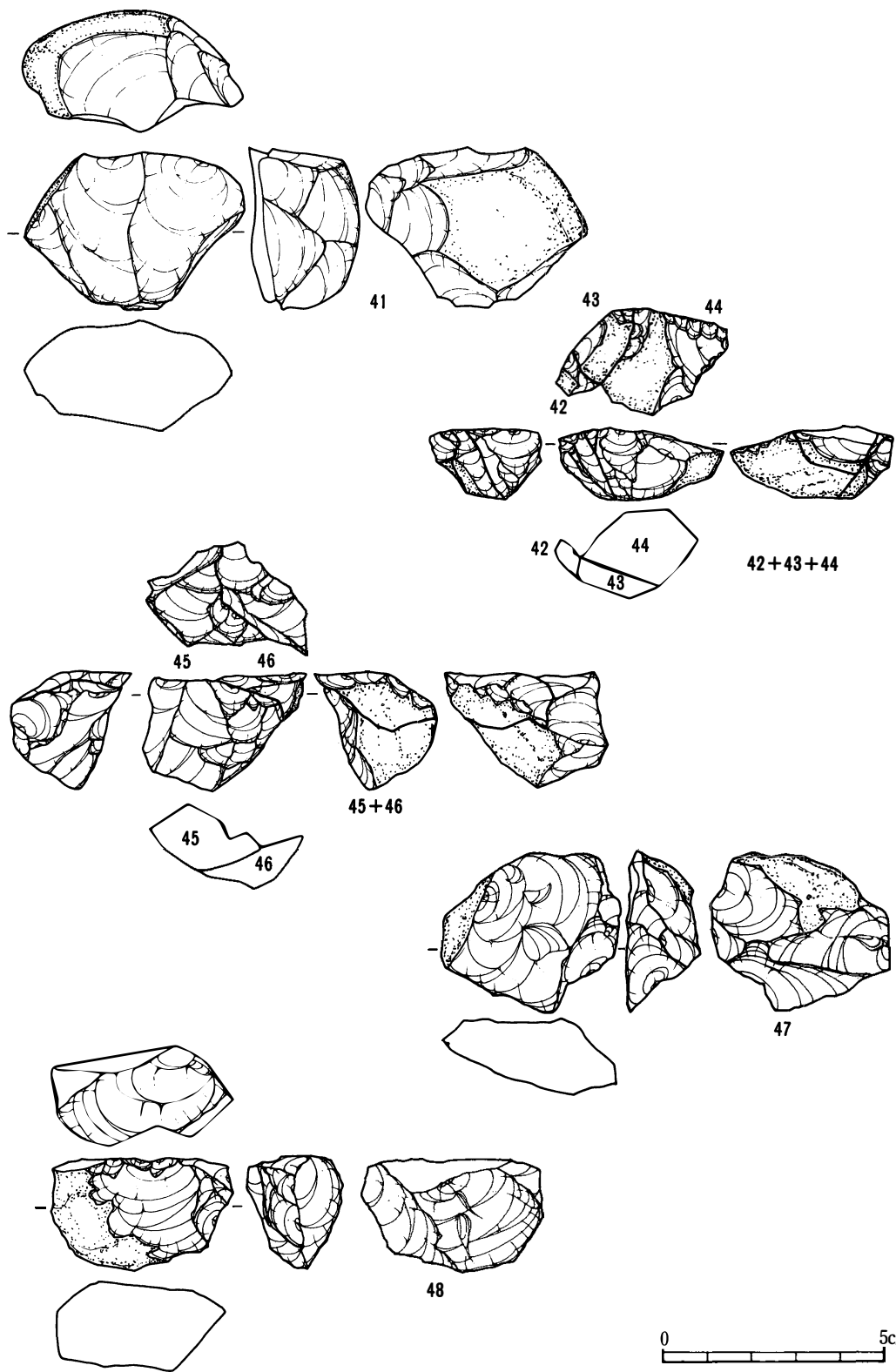
第61図 出土石器(2)



第62图 出土石器(3)



第63図 出土石器(4)



第64图 出土石器(5)

旧石器時代出土石器属性表

図版 番号	器 種	大 き さ (cm)			重 量 (g)	打面 の 種 類	打面 調 整	頭部 調 整	背 面 構 成				打角	素材 形 状	登 録 番 号	個 体 別 資 料 番 号	石 材		
		長	幅	厚					I	II	III	IV						C	類 型
1	ナイフ形石器	59.6	39.3	11.7	20.01	平	×	○		1		1	1	d	116	B	4U-4	32	玉 髓
2	〃	33.0	16.8	9.5	3.88	—	—	—	1		1	1	1	d		B	2U-23	12	黒 曜 石
3	〃	22.9	14.0	6.3	1.44	—	—	—		3		1		d		B	5U-10	35	〃
4	〃	16.6	16.3	7.6	1.52	—	—	—	2					c		B	2U-65	11	〃
5	〃	33.0	22.4	6.5	6.98	平	×	○	2					a	110	B	1U-28	2	〃
6	〃	26.6	16.4	5.1	3.98	平	×	○	1		1			b		B	1U-61	3	〃
7	〃	25.1	19.9	5.8	5.12	—	—	—	2					a		B	1U-15	1	〃
8	〃	37.8	24.2	9.4	10.13	平	×	×	1				1	a	115	B	1U-39	3	〃
9	〃	14.9	14.8	4.8	0.74	—	—	—	1					a		B	3U-33	22	〃
10	〃	15.5	15.2	4.8	0.69	—	—	—		1		1	1	d		B	2U-70	11	〃
11	〃	26.8	16.4	6.8	2.85	平	×	○	2	1				c	110	B	5U-22	36	〃
12	〃	22.4	16.0	4.9	1.39	平	×	×	1		1			b	104	B	6U-24	47	チャート
13	〃	26.9	39.1	8.0	6.89	平	○	×				2		b	126	C	5U-23	36	黒 曜 石
14	〃	20.8	32.9	9.4	4.12	平	×	×		1	1	1		e	111	C	1U-33	2	〃
15	〃	14.7	21.0	6.0	1.53	平	×	○	2					a		C	4U-2	29	〃
16	〃	16.3	28.4	9.0	2.99	平	×	○	1	1				c	120	C	5U-27	37	〃
17	〃	17.9	24.6	5.1	2.69	平	×	○	1					a	120	C	5U-1	〃	〃
18	〃	21.0	30.6	9.7	7.20	平	○	×		1		1	1	d	90	C	1U-25	1	〃
19	削 器	33.8	29.6	12.0	10.67											B	1U-48	2	〃
20	〃	31.4	23.5	7.5	5.87	—	—	—		2	多	多		e		B	1U-34	〃	〃
21	〃	21.8	55.2	15.7	12.08	—	—	—	1	1	1	1		e		C	4U-3	29	〃
22	〃	19.6	24.8	7.3	4.56	—	—	—		2				b		C	1U-29	3	〃
23	〃	18.3	27.1	7.7	2.87	平	×	×	2		1			b	102	C	2U-31	12	〃
24	〃	59.0	33.3	13.8	27.69	C	○	×					1	—	90	B	2U-49	13	〃
25	〃	46.2	35.1	13.9	11.75	平	×	○	3			1		C	101	B	2U-6	—	流 紋 岩
26	〃	50.4	48.6	14.0	38.12	—	—	—	4					a		B	1U-10	1	黒 曜 石
27	〃	81.7	62.9	14.3	41.29	平	×	○	4	1				b	116	B	5U-34	40	玄 武 岩
28	楔 形 石 器	46.6	14.6	11.9	11.88	線	—	—	多	多			1	b		A	2U-22	13	玉 髓
29	二次加工のある剥片	17.3	23.9	7.6	5.41	平	×	○	3					a	108	C	1U-47	1	黒 曜 石
30	使用痕のある剥片	23.6	16.4	6.9	4.82	平	×	×	4					a	95	B	1U-19	〃	〃
31	折 断 剥 片	12.6	28.0	11.3	5.00	—	—	—	1	1	1			d		D	3U-24	21	〃
32	敲 石	97.5	45.0	30.0	180.00											A	2U-8	19	砂 岩
33	剥 片	37.8	21.8	8.6	6.83	平	×	×	2		1			b	114	B	3U-25	21	黒 曜 石
34	〃	43.8	29.4	11.4	10.63	多	×	×	1	1	2			d	110	B	3U-23	〃	〃
35	石 核	41.6	38.0	21.2	26.73												1U-40	3	〃
36	〃	26.2	20.5	11.7	4.77												2U-43	10	〃
37	〃	40.8	29.0	15.6	14.96												5U-38	35	〃
38	〃	22.9	30.5	17.0	12.75												3U-43	21	〃
39	〃	14.5	27.1	18.0	7.91												3U-41	21	〃
40	〃	57.0	46.5	34.5	45.00												4U-6	34	砂 岩
41	〃	49.5	37.5	24.0	46.85												2U-59	20	粘 板 岩
42	剥 片	18.5	10.1	6.0	0.95	c	×	○	1	1			1	c		B	5U-13	35	黒 曜 石
43	〃	11.5	14.1	7.6	1.50	平	×	×	2					a		C	5U-4	〃	〃
44	石 核	31.3	24.9	14.8	11.32												5U-21	〃	〃
45	〃	34.5	23.7	26.1	13.54												2U-79	14	玉 髓
46	剥 片	12.0	32.6	14.3	3.36	平	×	×	2		1			b		D	2U-74	〃	〃
47	石 核	42.5	36.3	14.8	18.65												6U-176	44	黒 曜 石
48	〃	42.4	25.2	18.8	20.65												6U-7	〃	〃

※ 平……平坦剥離面, 多……多剥離面, C……自然面, 線……線状

○……行なう, ×……行なわない

素材形状(長:幅) A……~2:1, B……2:1~1:1, C……1:1~1:2, D……1:2~

旧石器時代個別資料属性表

個別資料番号	石 材	資料総数	器 種 組 成	打面の種類	打面調整	頭部調整	背面構成の類型	打角平均	素 材 形 状	図 版 番 号	関連ポイント
1	黒曜石	17	ナ2, 削1, 二1, 使2, 折4, 剥4, 砕3	平	△	△	a, b	90	B, C	7, 18, 26, 29, 30	1
2	〃	28	ナ2, 削2, 使2, 折9, 剥11, 砕2	平	×	△	d, e	108	B, C	5, 14, 19, 20	〃
3	〃	8	ナ2, 削1, 核1, 折4	平	×	×	a, b	115	B, C	6, 8, 22, 35	〃
4	〃	1	剥1	—	—	—	—	—	D		〃
5	チャート	1	剥1	多	×	×	a	128	C		〃
6	〃	2	剥2	平	×	×	b	112	C		〃
7	玉 髓	1	剥1	平	×	×	b	107	B		〃
8	〃	8	核1, 使1, 折2, 剥5	平	×	×	a, b	116	B, C		〃
9	玄武岩	1	剥1	平	×	○	a	112	C		〃
10	黒曜石	9	核1, 使1, 折3, 剥3, 砕1	平・多	×	×	d	103	B	36	2
11	〃	7	ナ2, 折4, 剥1	平	×	○	a, b	111	B, C	4, 10, 23	〃
12	〃	12	ナ1, 削1, 折3, 剥6, 砕1	平・多	×	△	d, e	98	B, C	2, 24	〃
13	〃	1	削1	C	○	×	—	90	B	28	〃
14	玉 髓	8	核1, 使1, 折3, 剥3	平	×	△	b, c	92	B, C	45, 46	〃
15	〃	14	折4, 剥7, 砕3	平・C	×	×	d	98	B, C		〃
16	〃	1	楔1	線	—	—	b	—	A		〃
17	〃	1	不明1	—	—	—	—	—	—		〃
18	玄武岩	1	折1	多	×	○	a	94	B		〃
19	砂 岩	1	敲1	—	—	—	—	—	—	32	〃
20	粘板岩	3	核1, 剥2	平	×	×	C	93	B		〃
21	黒曜石	15	核2, 折3, 剥9, 砕1	平	×	△	d	107	B, C	31, 33, 34, 38, 39, 41	3
22	〃	15	ナ1, 折2, 剥1, 砕11	平	×	×	d	—	B	9	〃
23	玉 髓	19	核2, 折4, 剥12, 砕1	平	×	△	d, e	111	B		〃
24	〃	3	剥3	平	×	△	d	111	B		〃
25	〃	3	折1, 剥2	平	×	×	d	90	B, C		〃
26	〃	3	折1, 剥2	平	△	×	d	—	B, C		〃
27	頁 岩	1	使1	C	×	×	a	102	B		〃
28	粘板岩	1	剥1	C	×	×	—	—	C		〃
29	黒曜石	5	ナ1, 削1, 折2, 剥1	平	×	○	d, e		B, C	15, 21	4
30	〃	3	折1, 剥2	平	△	○	a, c	92	B, C		〃
31	チャート	1	剥1	多	×	×	C	96	C		〃
32	玉 髓	1	ナ1	平	×	○	d	116	B	1	〃
33	〃	1	剥1	多	×	×	a	94	C		〃
34	砂 岩	1	核1							40	〃
35	黒曜石	15	ナ1, 核2, 折4, 剥8	平	×	×	d	107	B, C	3, 37, 42, 43, 44	5
36	〃	3	ナ2, 折1	平・線	△	△	C	118	B	11, 13	〃
37	〃	14	ナ2, 折3, 剥6, 砕3	平	×	○	a, c	109	B, C	16, 17	〃
38	チャート	2	剥2	平	×	△	d, e	122	B		〃
39	〃	1	剥1	平	×	×	b	118	C		〃
40	玄武岩	1	削1	平	×	○	b	116	B	27	〃
41	粘板岩	4	剥3, 砕1	平	×	×	a, b	108	B		〃
42	黒曜石	7	使1, 剥4, 砕2	平	×	○	a, b	109	B		6
43	〃	1	剥1	—	—	—	—	—	C		〃
44	〃	9	核2, 折2, 剥5	平	△	△	d	101	B, C	47, 48	〃
45	チャート	1	剥1	平	×	×	a	96	B		〃
46	〃	1	剥1	平	×	○	a	—	C		〃
47	〃	1	ナ1	平	×	×	b	104	B	12	〃
48	玄武岩	1	剥1	C	×	×	—	150	A		〃
49	粘板岩	3	剥3	平	×	×	b, d	107	B, C		〃

※ ナ……ナイフ形石器, 削……削器, 楔……楔形石器, 敲……敲石, 二……二次加工のある剥片, 使……使用痕のある剥片
 折……折断剥片, 核……石核, 剥……剥片, 砕……砕片
 平……平坦剥離面, 多……多剥離面, C……自然面, 線……線状
 ○……行なう頻度が高い, △……行なう頻度が低い, ×……行なわない
 素材形状 (長:幅) A……2:1, B……2:1~1:1, C……1:1~1:2, D……1:2~

13～15は素材の末端部を断ち切る形で急角度の調整を施している。16+17は正面左下側縁に奥まで入る調整がなされる。18は正面右側縁に比較的奥まで入る階段状の調整によって素材の形状を大きく修正している。

削器 (19～27)

19～23は板状の剥片を素材とし、打面部側を断ち切る形で鋸歯状の調整を施している。24は末端部と左側縁に部分的な調整が施される。25は左側縁中央部に抉状の調整を施す。26は左側縁に大きな調整を数回行う。27は打面部左側に細かな調整がみられる。

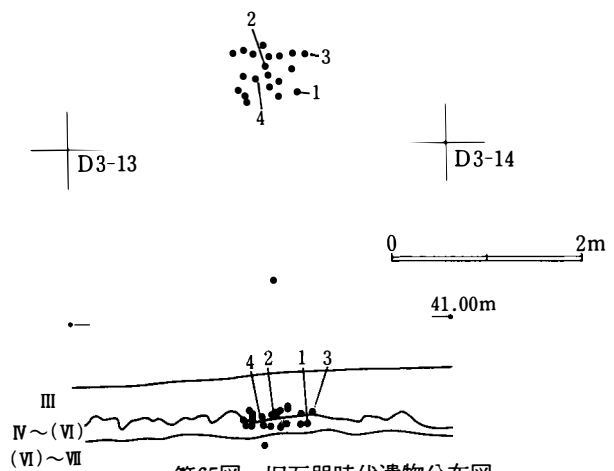
その他 (28～48)

28は楔形石器である。上下両端を固定し数回両極剥離を行う。29は打面部を切断した後に細かな調整を施す。30は両側縁に微細剥離痕がある。31は打面部を切断した切断剥片である。32は長楕円形の礫を素材とし、上下両端に敲打痕のある敲石である。33・34は縦長剥片の接合資料である。平坦打面で頭部調整を行う。35～48は石核と剥片の接合資料である。35・36は打面をサイコロ状に転移する多面体石核である。37・38+39は、剥片を素材とし、腹面側から求心的に剥片を生産している。40はチョッピングツール状に打面を入れ変えて剥片を生産する。41～46は数枚の剥離面を打面とし、打点を順次移動して剥片を生産している。47は剥片を素材として末端部側から剥片を生産する。48は一枚の大きな剥離面を打面として打点を順次移動して剥片を生産している。

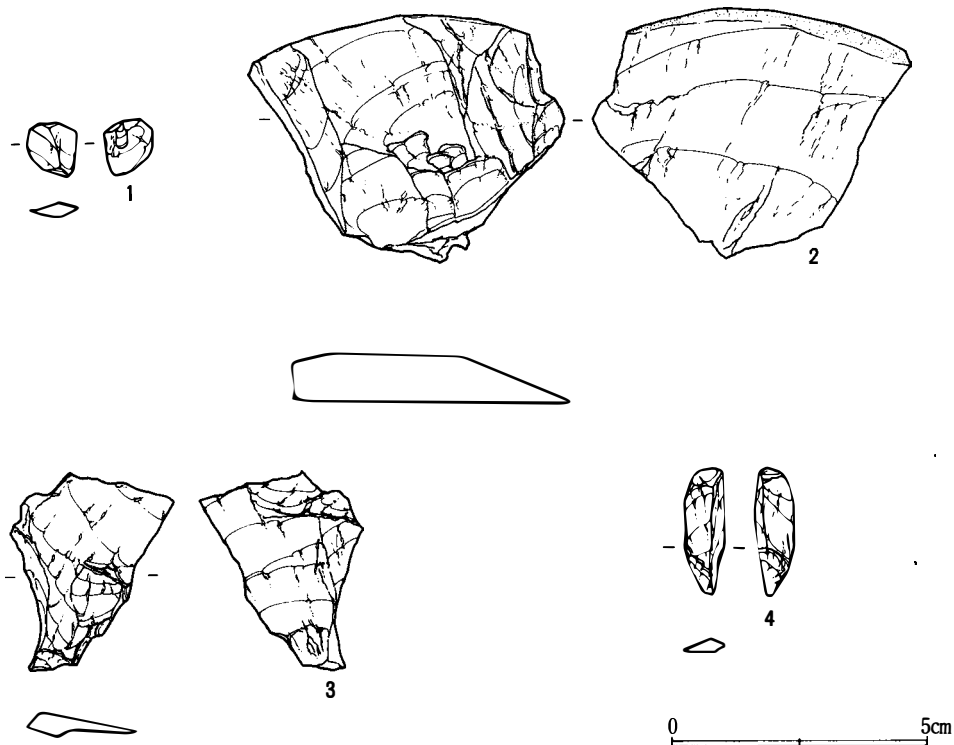


2. 馬場遺跡

調査区南側D3-03区を中心として出土した。旧石器時代の遺物は剥片16点、小礫5点の合計21点であった。出土層位は第IV層中である。遺物の分布は直径70cm程の狭い範囲である。北及び東方向に調査区域を拡張したが新たな石器群の検出はなかった。剥片中の石材は頁岩1点、粘板岩15点である。石片の大部分は粘板岩であり、石器の素材としては不適応なものと考えられる。図示した4点はすべて剥片である。



第65図 旧石器時代遺物分布図



第66図 出土石器

ユニット出土石器観察表

挿図番号	器種	法量 (cm, g)				石 材	調 整	出 土 位置	遺物番号
		長さ	幅	厚さ	重さ				
1	チップ	10.00	9.65	2.40	0.2	頁 岩	裏面にバルブ痕を残す。	D3-03	0018
2	フレイク	48.60	61.60	9.45	33.5	粘 板 岩	一部に自然面を残す。節理での剝離が多く見られる。	D3-03	0011
3	フレイク	39.35	31.10	4.15	3.3	粘 板 岩	タールの付着が認められる。	D3-03	0020
4	フレイク	24.50	8.10	2.30	0.5	粘 板 岩	縦長の剥片である。	D3-03	0005
	フレイク	23.70	16.25	1.45	0.6	粘 板 岩	節理で剥がれた剥片である。	D3-03	0001
	チップ	11.90	5.30	1.45	0.1	粘 板 岩		D3-03	0002
	チップ	9.90	8.95	1.35	0.1	粘 板 岩		D3-03	0003
	フレイク	27.85	9.75	2.55	0.6	粘 板 岩	縦長の剥片である。	D3-03	0004
	フレイク	39.25	18.15	1.80	1.5	粘 板 岩	節理で剥がれた剥片である。	D3-03	0006
	小 礫	6.50	12.20	5.40	1.2	砂 岩	焼成を受けている。	D3-03	0007
	フレイク	35.40	12.00	1.20	0.7	粘 板 岩	縦長の剝離である。節理で剥がれている。	D3-03	0008
	小 礫	24.10	19.25	9.90	7.5	チャート		D3-03	0009
	小 礫	37.75	23.55	17.50	16.6	岩	焼成を受けている。	D3-03	0010
	フレイク	16.60	8.30	1.65	0.3	粘 板 岩	0013と接合。節理で剥がれた剥片である。	D3-03	0012
	フレイク	35.95	30.45	3.15	3.4	粘 板 岩	0012と接合。節理で剥がれた剥片である。	D3-03	0013
	フレイク	21.80	16.50	1.55	0.7	粘 板 岩	タールの付着が認められる。	D3-03	0014
	フレイク	20.35	17.65	8.50	0.3	粘 板 岩		D3-03	0015
	フレイク	27.40	14.70	1.85	0.8	粘 板 岩		D3-03	0016
	フレイク	22.15	14.40	1.00	0.3	粘 板 岩		D3-03	0017
	小 礫	31.25	15.80	8.15	3.6	チャート	一部に剝離の痕が認められる。	D3-03	0019
	フレイク	16.40	15.90	2.30	0.5	粘 板 岩	一部に自然面を残す。	D3-13	0021

第2節 縄文時代

1. 中山遺跡

グリット出土縄文土器 (第67~75図, 図版28, 29)

本遺跡出土の縄文土器は、早期の沈線文系土器、条痕文系土器を主体とし、後期までの土器を出土した。

第I群土器 早期前半の撚糸文系土器

第II群土器 早期中葉の沈線文系土器

第III群土器 早期後半の条痕文系土器

第IV群土器 前期の土器

第V群土器 中期の土器

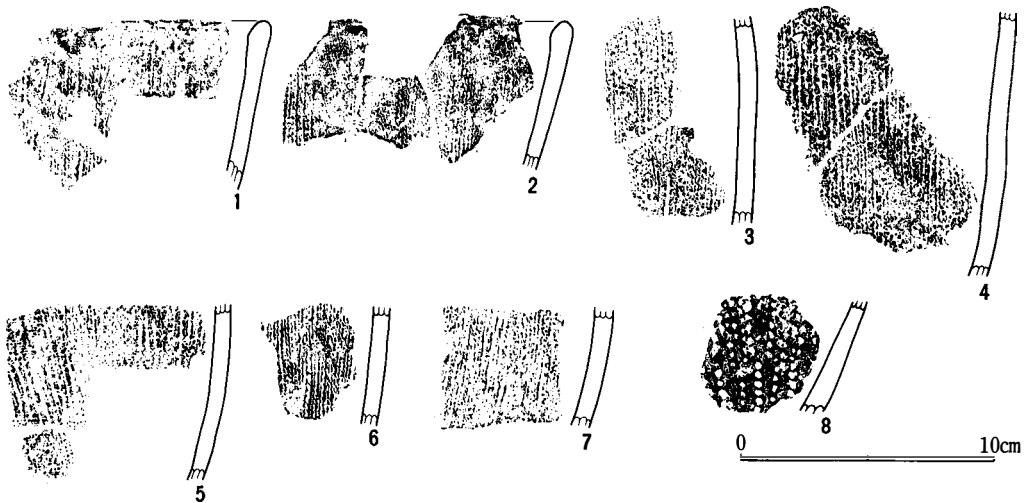
第VI群土器 後期の土器

第I群土器 (1~8)

縄文時代早期前半の撚糸文系土器である。1, 2は口縁部の破片で、口縁部から底部へ直線的に移行する器形を呈する。口唇部形態は丸頭状を呈し、わずかに内側が肥厚する。口唇部及び口縁部付近を中心に研磨される。文様は撚糸(R)を縦位に施文する。3~7は胴部破片で同一個体と考えられる。8は単節縄文(LR)を縦位に施す。底部付近の破片であろう。

第II群土器 (9~71)

縄文時代早期中葉に位置づけられる沈線文系土器群を一括した。沈線文系土器は、その名の通り細沈線や太沈線を主体的な文様とし、貝殻文や刺突文等の付属的な文様を用いて幾何学的な文様を作出する土器群である。一方、文様要素として口縁部付近、胴部付近、底部付近では



第67図 グリット出土縄文土器(1)

全く異なった文様をとる場合が多く、分類が非常に難しい。しかし、細部の観察を通して全体的な文様を考えれば比較的容易に区別することができる。以下3類に分けて説明を加える。

第1類(9)

沈線文系土器前半期の土器群を一括する。9はC1-00・01区を中心に出土する。口縁部がやや外反し、ゆるやかに胴部へ移行する。胴部からやや膨らみを持ちながら鈍角な尖底部に至る。尖底部の角度は約90°である。いわゆる砲弾型の形態を呈する。口縁部は平縁で、角頭状を呈する。胎土中に大粒の長石・石英粒を多量に含む。外面の整形はケズリ、内面はミガキである。文様は、器外面をケズった後口縁部直下から底部に至るまで横位に太い沈線を巡らすものである。この沈線は、半截竹管などの工具を用いて器肉を浅くえぐるように施文されている。いわゆる“凹線文”と呼ぶ文様であるが、ここでは太沈線文土器として統一する。底部付近は整形時に横位のケズリを施している。その一面は磨きによりケズリを消し、器面を丁寧に仕上げた後、細沈線による帯状格子目文を施す。一部欠損しているため全体的な帯状格子目文の構成は判然としないが、やや不規則ながらも菱形をイメージする文様が窺える。また、明瞭ではないが部分的に赤彩の付着が認められる。従来、太沈線文土器は口縁部から底部に至るまで同一の太沈線が施され、他の文様は施文されないと考えられてきたが、本資料は今後の沈線文系土器研究に重要なポイントを与えるであろう。口径35.2cm、器高42cmを測る。

第2類(10~31, 72)

沈線文系土器中葉の土器を一括する。文様等の諸特徴から3種に分類する。

第1種(10)

10は底部付近の破片で、器面に縦位、斜位の不規則な条痕が施される。胎土中に砂粒子が含まれる。三戸式土器あるいは田戸下層式土器の古い段階に位置づけられよう。

第2種(11~29, 72)

細沈線文・太沈線文を主体的な文様とし、付属的に刺突文・貝殻腹縁文を施すものである。内外面ともに丁寧なミガキが加えられ、胎土中に多量の砂粒子を含む。11は尖頭状の口唇部形態を呈し、口縁部直下から【状の刺突文・横位平行細沈線文・【状の刺突文・幾何学文・【状の刺突文・横位平行細沈線文・【状の刺突文・縦割文(縦位・横位太沈線)という文様構成をとるものである。幾何学文帯は破片が少ないため全様は窺えない。文様要素から考えると2~3本の斜位細沈線を一つの単位とし、変形菱形文を構成すると考えられる。細沈線間には規則的に貝殻腹縁文が施される。12は口縁部がやや外反し、外そぎ状の口唇部形態となる。文様は、口縁部直下から2条の横位太沈線文・縦位太沈線文・2条の横位太沈線文・4条の横位細沈線文・半月状の刺突文・2状の横位太沈線文・幾何学文(不明)・横位太沈線文・縦割文(縦位・横位太沈線文)が施される。底部は平底である。胴部との接合がないため確実とは言えないが、胎



第68図 グリット出土縄文土器(2)

土・整形・焼成等から同一個体と考えられる。田戸下層式土器の底部は、72にみられるように天狗の鼻状の尖底が一般的で、平底の確認は本資料がはじめてとなろう。底面はケズリによる調整が施され、内面は丁寧にミガキが加えられる。13, 14は口縁部の破片で太沈線文を主文様とするものである。16, 17, 20～24は胴部幾何学文帯の部分的な破片で、太沈線文を主体とし、弧線文(16)、刺突文(22, 23)、細沈線文(20, 21)が認められる。15, 18, 19, 25～29, 72は底部付近である。横位細沈線文(18)、横位太沈線文(15・19)、縦位太沈線文(25～28)、斜位太沈線文(29)、無文(72)等がある。

第3種(30, 31)

口縁部直下から無文となる土器を一括する。30は口縁部が外反し、角頭状を呈する。31は口縁部がやや外反し、丸頭状を呈する。胎土・整形等から本種とした。

第3類(32～71, 73～86)

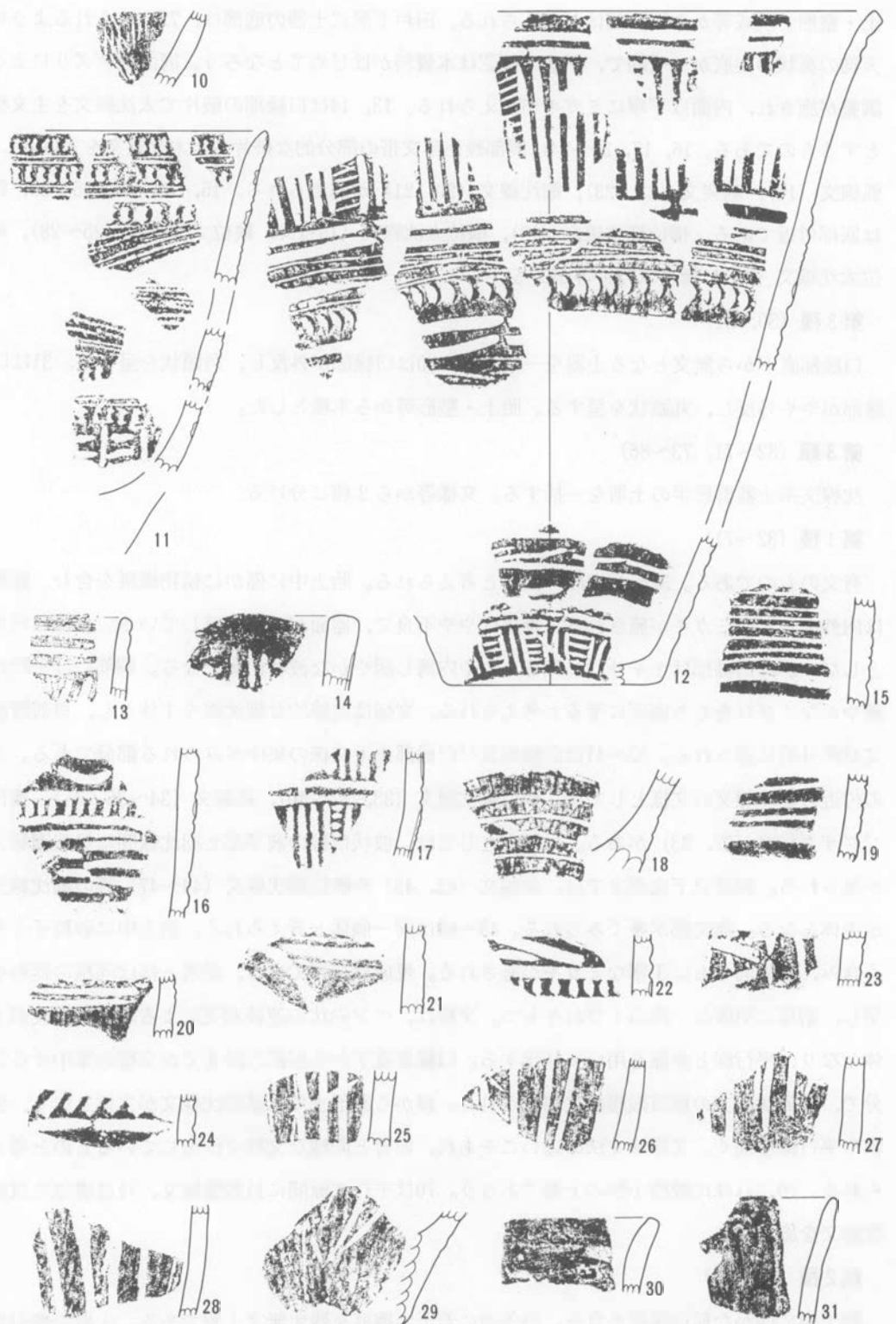
沈線文系土器群後半の土器を一括する。文様等から2種に分ける。

第1種(32～71)

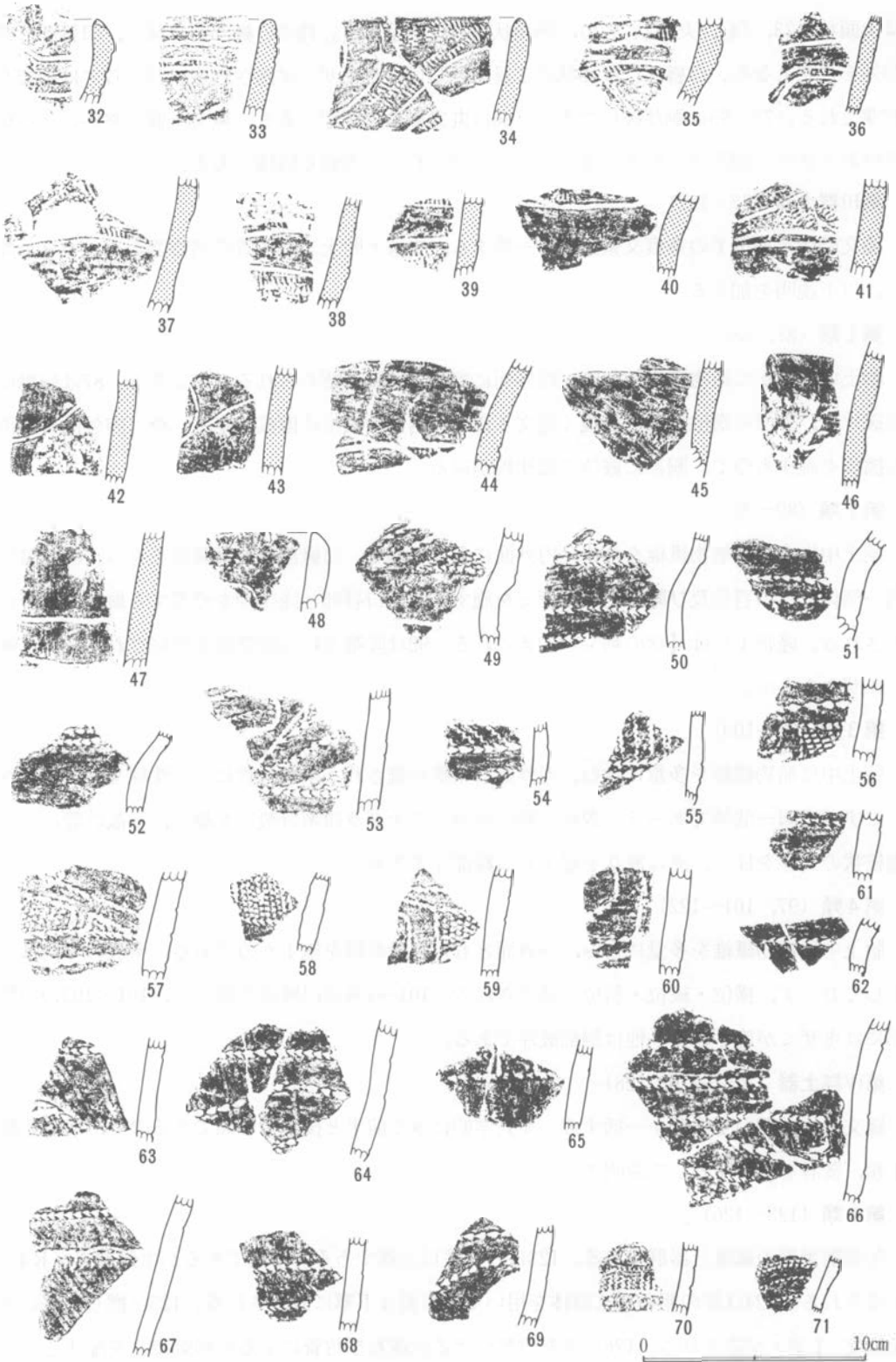
有文のものである。32～47は同一個体と考えられる。胎土中に僅かに植物繊維を含む。整形は内外面ともにミガキが施される。焼成はやや不良で、器面がザラザラしている。全体は判然としないが、口縁部はキャリパー気味にやや内湾し緩やかな波状口縁となる。胴部には一段の緩やかなくびれをもち底部に至ると考えられる。文様は曲線的な細沈線を主体とし、貝殻腹縁文が部分的に施される。32～41は口縁部及び口縁部直下文様の集中がみられる部分である。この付近の細沈線文の文様としては、横位細沈線文(33, 37～40)、曲線文(34～36, 41)、横位ジグザグ状文(32, 33)がある。貝殻文としては、波状口縁の波頂部と細沈線間に貝殻腹縁文が施される。胴部以下底部までは、曲線文(42, 43)や横位細沈線文(44～47)等の細沈線文が主体となる。無文部が多くみられる。48～69は同一個体と考えられる。胎土中に砂粒子を多く含み、内外面ともに丁寧なミガキが施される。焼成は良好である。前者とほぼ同様の器形を呈し、胴部に明確な一段のくびれをもつ。文様は、ペン先状の連続刺突による結節沈線文が主体となり、平行線と曲線を用いて作出する。口縁部直下から胴部の段までが文様の集中する部分で、結節沈線文の他貝殻腹縁文が施される。段から底部までは結節沈線文が主体となり、曲線や平行線を描く。文様施文法の違いこそあれ、前者と同様な文様を作出しているものと考えられる。70, 71は比較的小形の土器であろう。70は平行沈線間に貝殻腹縁文、71は横位に貝殻腹縁文を施す。

第2種(73～86)

胎土中に僅かな植物繊維を含み、内外面に若干の擦痕を残す無文土器である。土器の類似性から本種の一部とした。73～77は口縁部の破片である。75を除き口縁部が直行し、口唇部形態



第69図 グリット出土縄文土器(3)



第70図 グリット出土縄文土器(4)

は尖頭状 (73, 74), 丸頭状 (76), 角頭状 (77) を呈する。75は口縁部が外反し, 口唇部形態が外そぎ状となる。口唇部には棒状の工具を押し付けたキザミが施される。76, 77には補修孔が穿たれる。78~85は胴部破片である。86は丸底風の尖底部である。無文土器の整形は, 口縁部付近で横位, 胴部から底部は縦位にナデが施される。内面も同様である。

第Ⅲ群土器 (87~122)

縄文時代早期後半の条痕文系土器を一括する。文様・胎土・整形等の諸特徴から4つに分類し, 以下説明を加える。

第1類 (87, 88)

胎土中に僅かに植物繊維を含み, 内外面に擦痕・条痕が認められるものである。87は口縁部の破片で, 外面に横位の条痕が浅く施文される。内面は横位に擦痕が走る。88は内外面に斜位の擦痕を施すもので, 胴部に縦位の短沈線が巡る。

第2類 (89~96)

胎土中に多量の植物繊維を含み, 内外面に条痕を施す。口縁部下には隆帯をもつ。89~91は同一個体で, 口唇部及び隆帯上にキザミを施す。93は口唇部と隆帯間を分帯する縦位の隆帯が付される。隆帯上には【状の刺突が加えられる。92は隆帯上に貝殻腹縁文が施される。94, 96はキザミをもつ。

第3類 (98~100)

胎土中に植物繊維を多量に含む。内外面に条痕が施され, 半截竹管による沈線文が加えられる。すべて同一個体であろう。表裏に粗い条痕(アナグラ属系貝殻)を施し, 半截竹管により樹枝状の文様を描く。98は波状を呈する口縁部片である。

第4類 (97, 101~122)

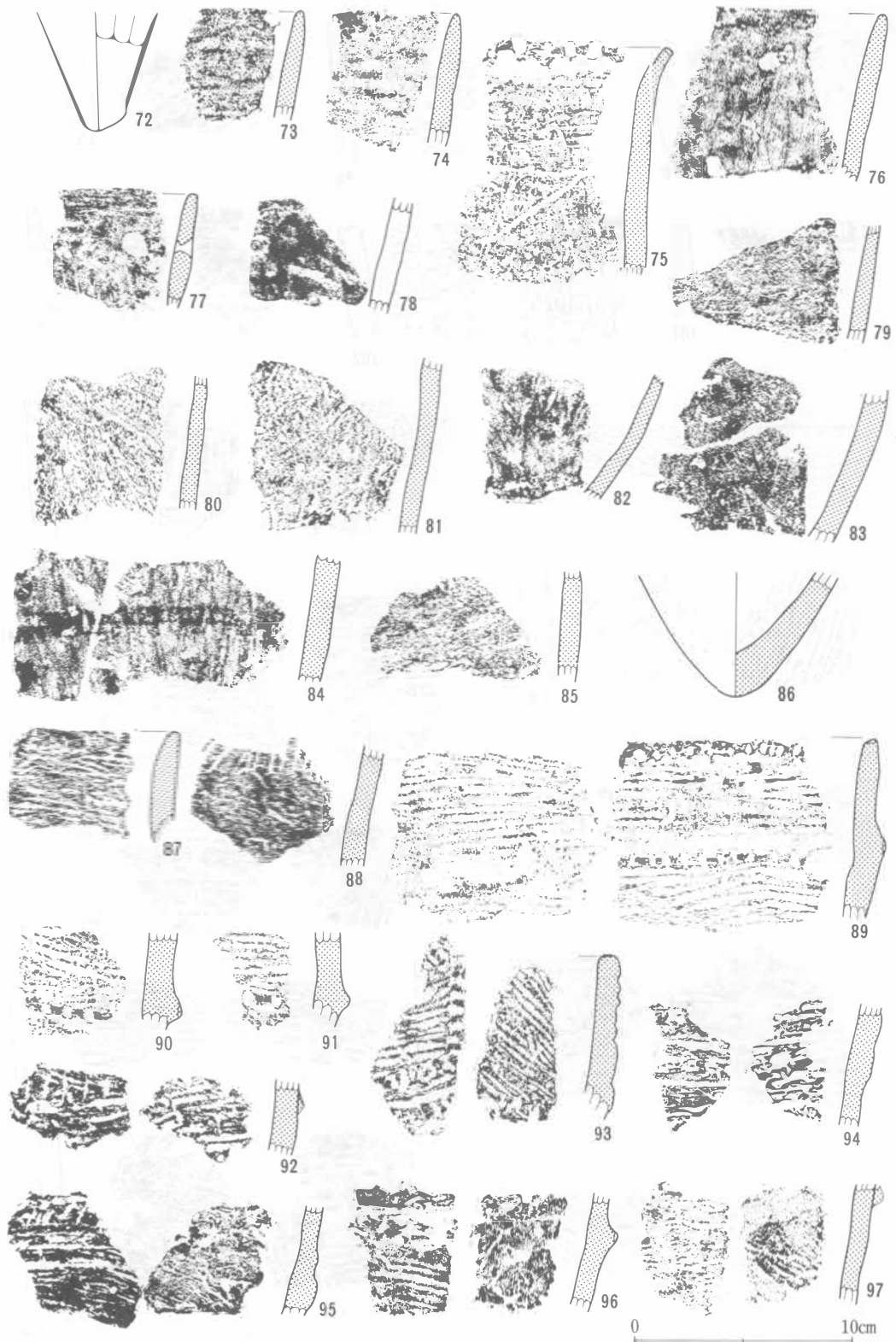
胎土中に植物繊維を多量に含む, 内外面ともに貝殻条痕を施すものである。条痕の方向は一定しておらず, 横位・縦位・斜位に認められる。101~104は口縁部の破片で, 101~103の口唇部にはキザミが施される。他は胴部破片である。

第Ⅳ群土器 (123~126, 128)

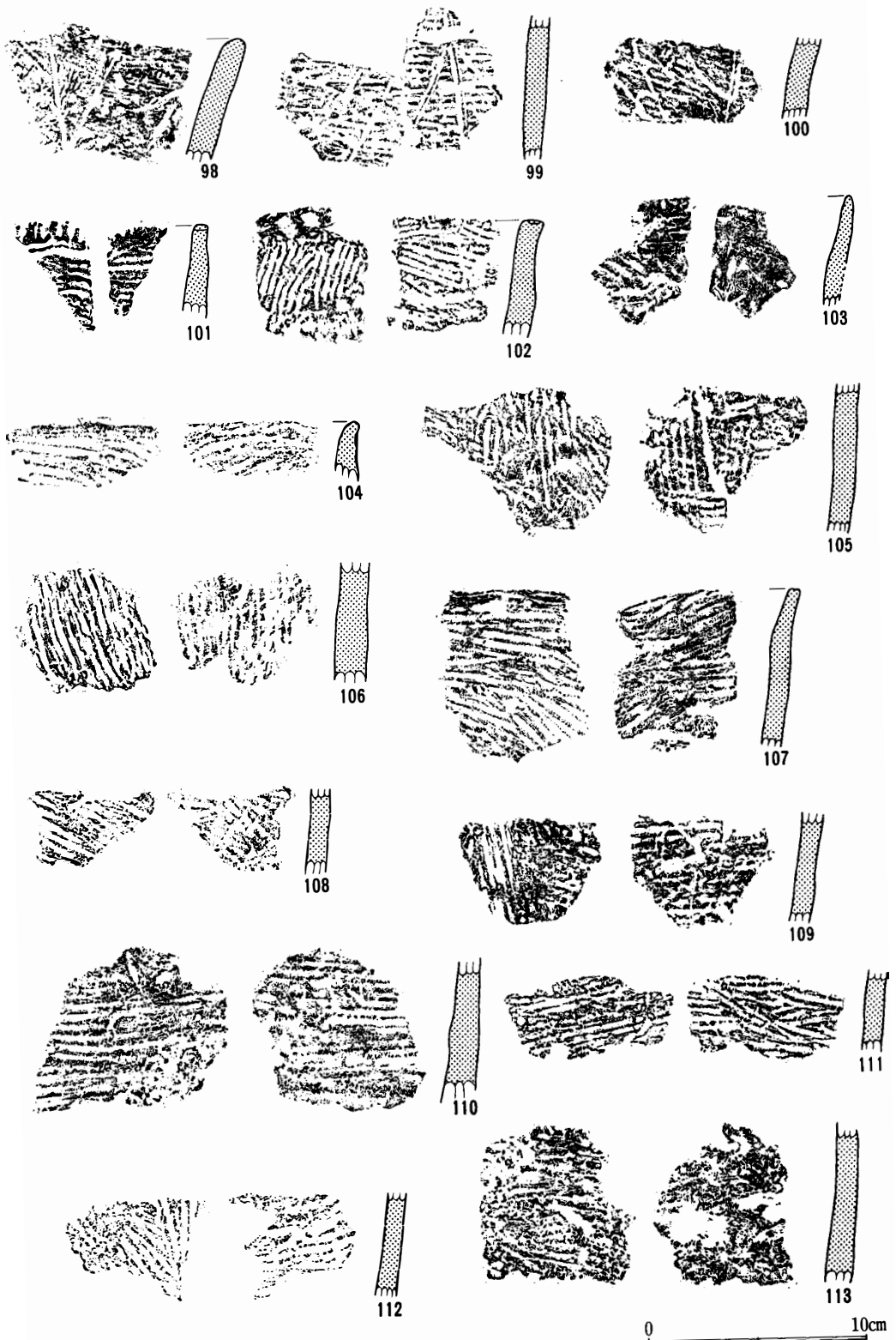
縄文時代前期の土器群を一括する。型式学的にみて前半と後半に分類できるので, 前者を第1類, 後者を第2類として説明する。

第1類 (123~126)

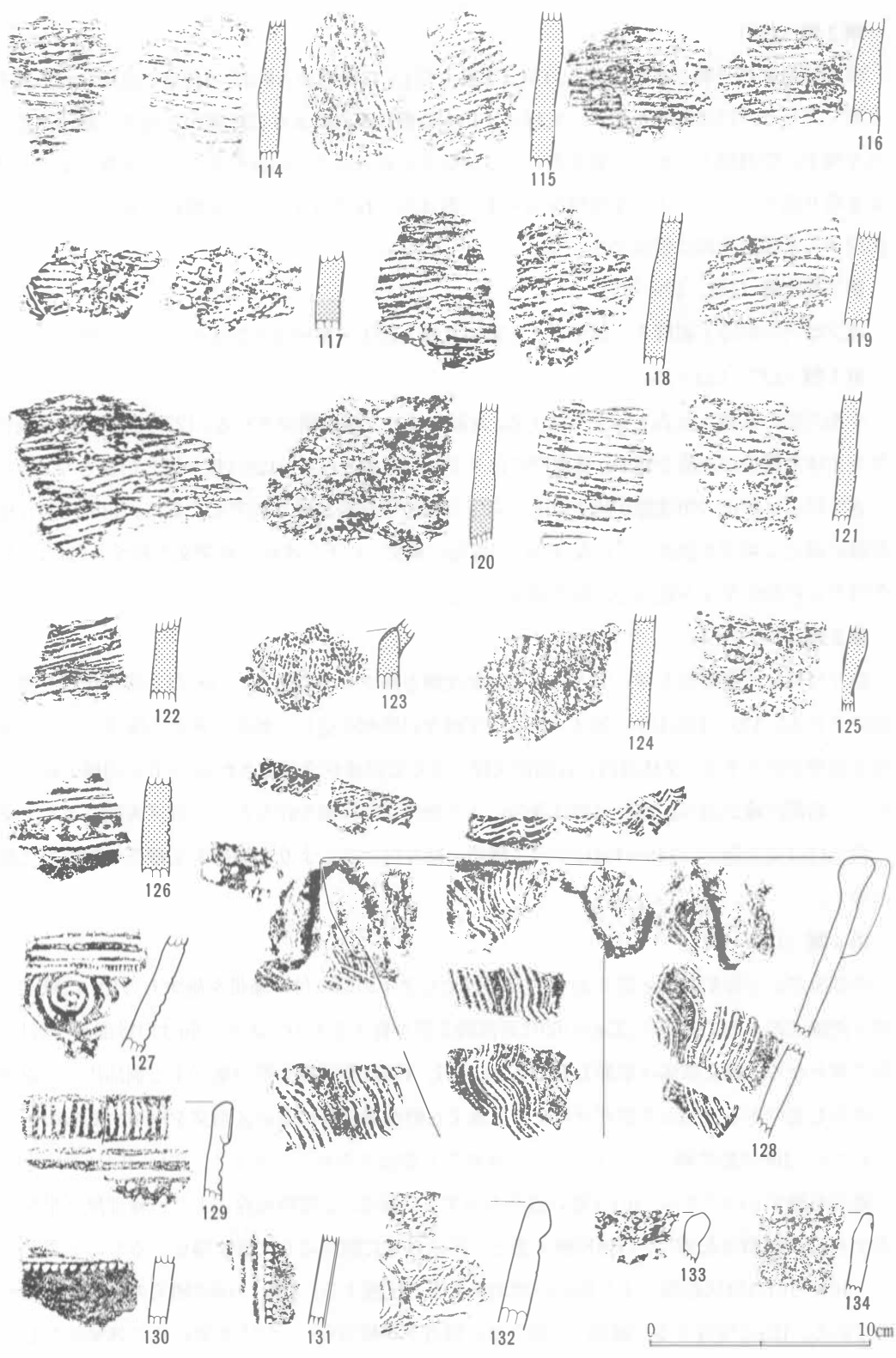
前期前半期の繊維土器群である。123は片口注口土器である。小片であるが単節縄文(RL)が施される。124は節の粗い縄文原体を用いる。内面は丁寧に研磨される。125は撚りの緩い単節縄文(LR)が施される。126は半截竹管による沈線及び竹管による円形刺突文を配する。いずれの土器も胎土中に植物繊維を多量に含む。整形は丁寧に, 特に内面は入念に磨かれている。



第71図 グリット出土縄文土器(5)



第72図 グリット出土縄文土器(6)



第73図 グリット出土縄文土器(7)

第2類 (128)

前期後半期の土器を本類とする。128は平縁を呈し、口縁部から約45°の角度で底部に至る鉢形土器であろう。口径26cmを測る。文様は、10本の櫛状工具により口縁部から底部へ縦位の波状文を施す。口唇部上にも同一施文具による波状文がみられる。口縁部直下には隆帯による波状文を貼り巡らす。このような隆帯を巡らす土器は知られていないが、文様からみると前期末に出現する条線文土器に類似する。

第V群土器 (127, 129~171)

縄文時代中期の土器群を一括する。土器の文様・胎土・整形等を加味し4つに分類した。

第1類 (127, 129~134)

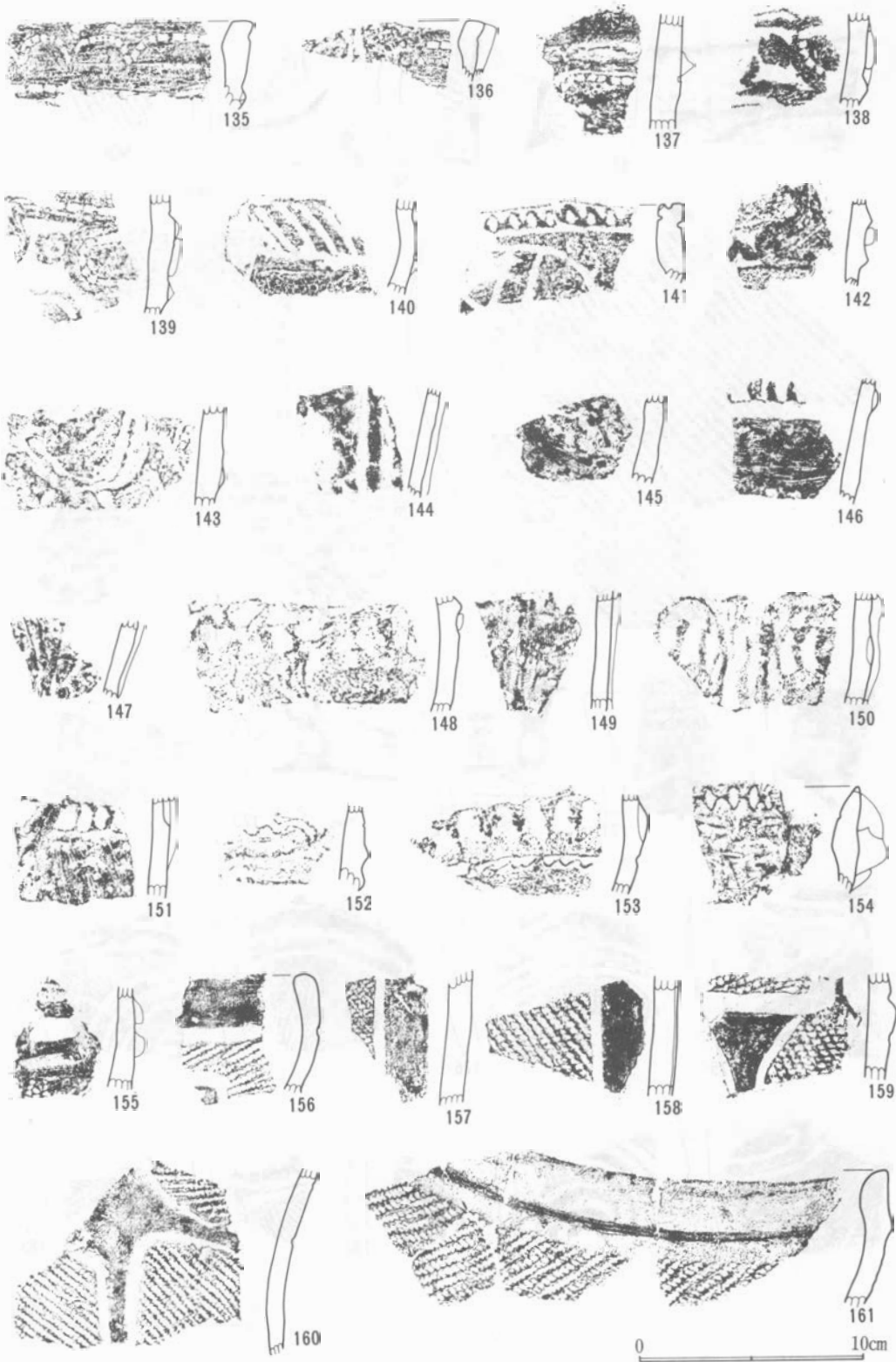
中期初頭の五領ケ台式土器を一括する。沈線により文様が構成される。127は曲線による渦巻文を主体に横位の沈線を施す。沈線間にはキザミが充填される。129は折り返し口縁となり、折り返し部には縦位の短沈線が施される。以下は横位平行細沈線と刺突文である。130, 131は細沈線の縁辺に刺突を加える。132, 133は口縁部に縄文、以下に沈線や刺突文を施す。134は口縁部直下に円形刺突文を巡らし、以下無文となる。

第2類 (135~154)

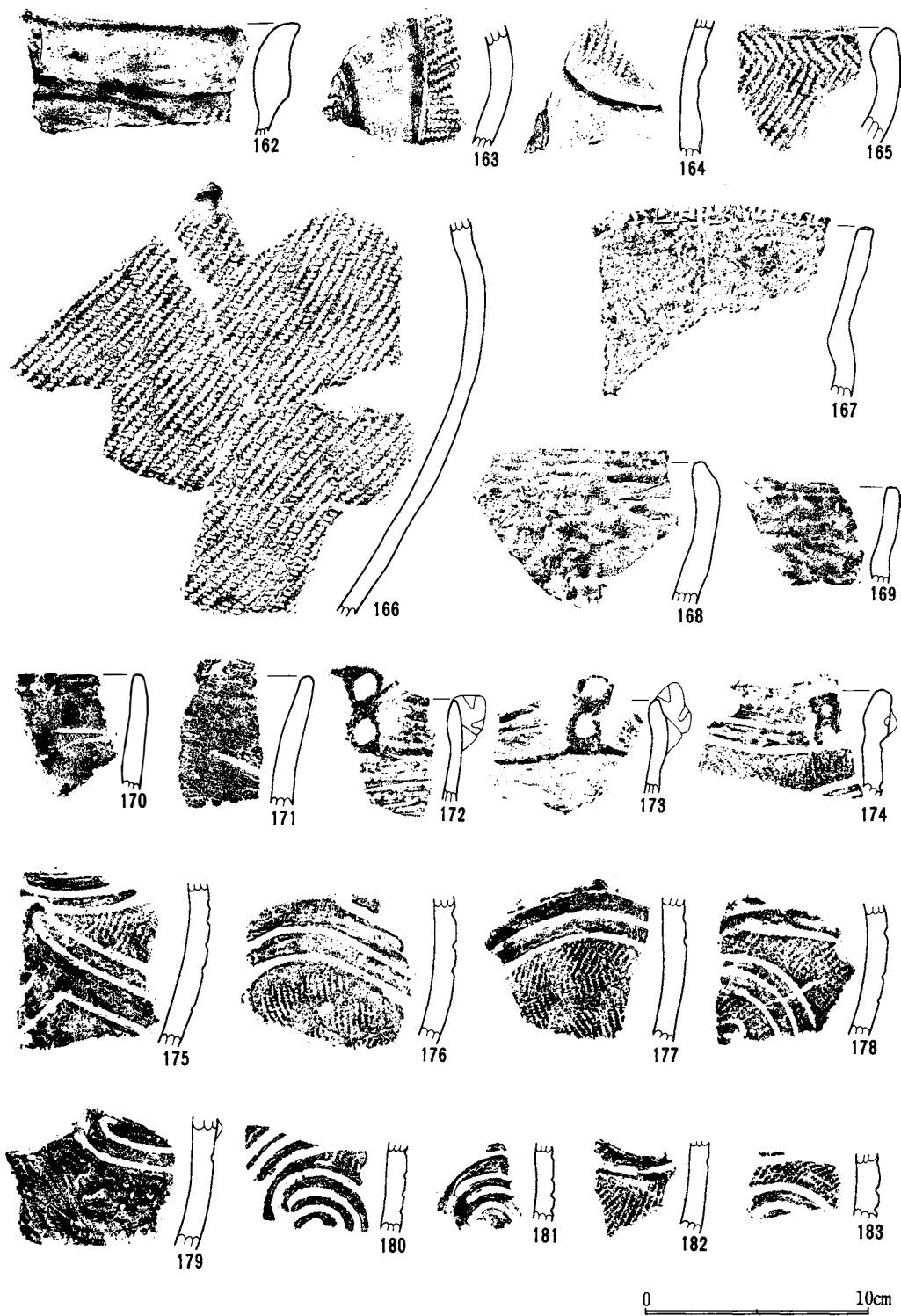
貼り付けによる隆帯と押し引きによる結節沈線を施すものである。いわゆる阿玉台式土器に比定される。135, 136は同一個体である。平坦な口唇部を呈し、断面三角形の隆帯により口縁部文様帯を区画する。文様帯内には結節沈線による変形波状文が施される。137も同様の隆帯を有し、結節沈線が沿う。138, 139は隆帯により楕円状の区画を作りだし、両区画間にボタン状の貼り付け文を施す。140~154はすべて隆帯の貼り付け文により口縁部の文様帯や胴部の文様を描く。

第3類 (155~171)

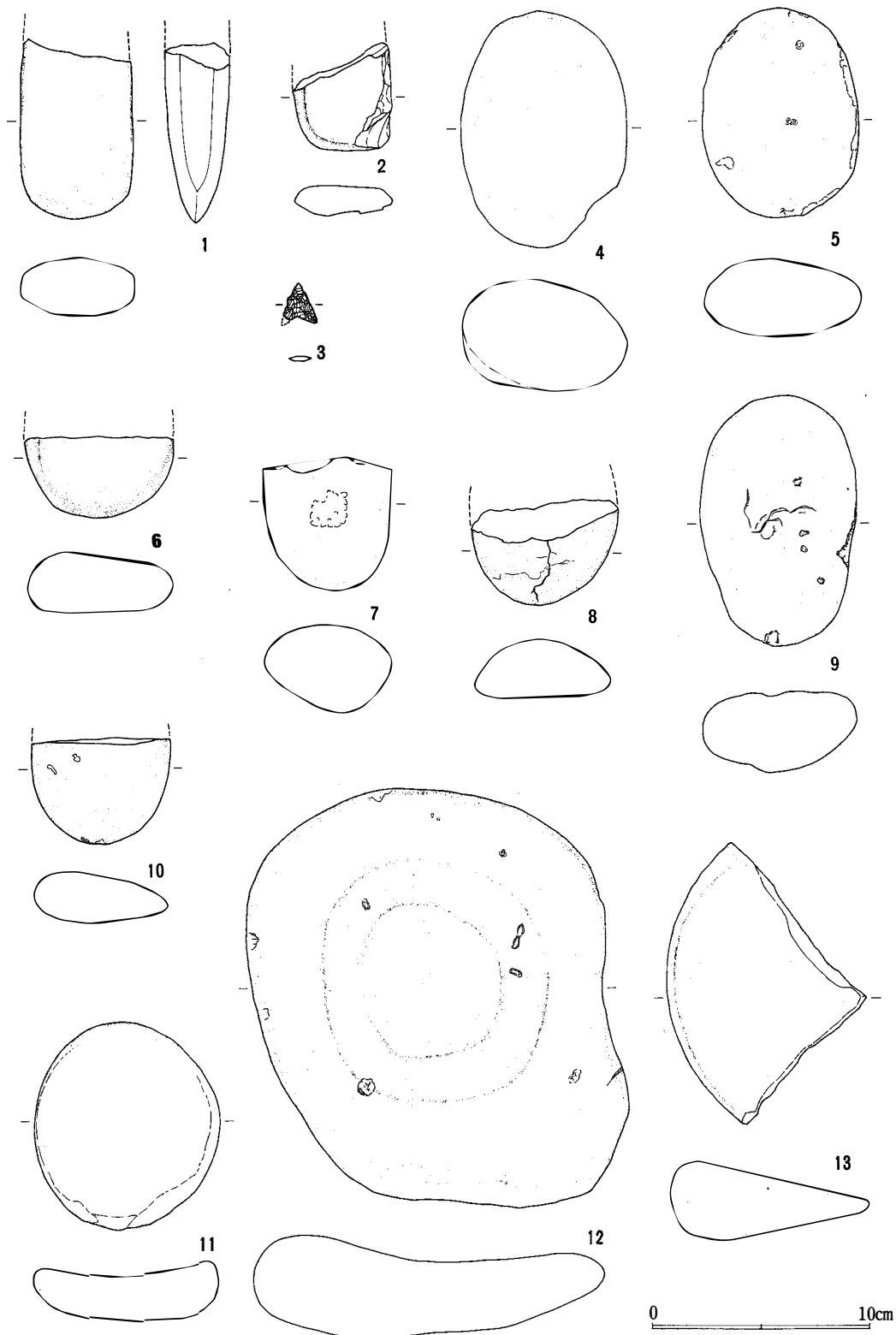
中期後半の加曾利E式土器である。155は横位に2条の貼り付け隆帯を施すもので、口縁部文様区画線文の一部であろう。156~160は磨消縄文帯を有するものである。156は口縁部が内湾し、無文帯となる。縄文原体は単節LRである。157, 158は磨消縄文帯の垂下する胴部片で、原体は単節LRである。159は沈線だけによる区画文と磨消縄文帯による区画文を併用するものかもしれない。160は磨消縄文帯により方形の区画文を描出するものでであろう。161~164は微隆起状の隆帯を施すものである。161は緩い波状を呈する口縁部で、微隆起線により口縁部無文帯を区画する。162の微隆起線は、口縁部無文帯との区画以外に胴部にも文様を描出するものと思われる。163, 164は微隆起線により胴部の磨消縄文帯と区画する。165, 166は縄文のみ施されるものである。165は内湾する口縁部で、縄文は口唇直下を横方向に、以下を縦位に原体単節RLで施している。166はキャリパー形深鉢の胴下半部で、全面に単節RLを施す。167~171は無文と



第74図 グリット出土縄文土器(8)



第75図 グリット出土縄文土器(9)



0 10cm

第76図 グリット出土石器

なる。167は頸部のくびれる深鉢土器で、口唇部にはキザミを施す。168は内湾する口縁部で、外面はナデ、内面はミガキによる調整が行われる。169は頸部がくびれる器形を呈し、内面は丁寧に研磨される。170, 171は内外面ともに横ナデ調整される。

第VI群土器 (172~183)

後期の土器群で、すべて堀之内式に比定できる。172, 173, 179は地文が無文となるものである。172, 173は8の字状の貼り付け文のみ付されたものであるが、全体的な文様は不明である。179は沈線により曲線的な文様を抽出する。174~178, 180~183は磨消縄文により文様を構成する。174は地文に単節LRを施し、沈線区画の磨消縄文帯を描出するが、区画文となる沈線は3条1単位である。175~178は曲線的な沈線を主体とする。180, 181は渦巻状の沈線を施す。縄文原体は単節LRである。

グリット出土石器 (第76図1~13)

本遺跡の包含層からは縄文時代の石器が断片的に出土している。

磨製石斧 (1, 2)

1は定形磨製石斧で全面を丁寧に調整している。基部を欠損する。2は磨製石斧の未製品であろうか?。図上右側縁部に打撃痕が認められ、更に一部に研磨が施される。

石鏃 (3)

えぐりがやや大きく二等辺三角形を呈する。最終的な調整は両側縁に集中する。

磨石 (4~10)

4~10は楕円形を呈する自然石を用い、両面を磨石として使用したものである。また側縁は敲石として使用されている。4, 5, 9は完形品、その他は欠損品である。7は上端部に凹部が認められ使用された痕跡を残す。

石皿 (11~13)

11は小形の河原石を用いて台石とし、木の実等を潰したのだろうか?。断面が皿状に窪んでいる。石皿としてはやや不適當である。12は平偏な河原石を用い中央部を中心に使用している。裏面の使用はない。13は両面の中央部を中心に使用する。原形の $\frac{1}{4}$ を残す。

2. 馬場遺跡

グリット出土縄文土器 (第77~79図, 図版38)

本遺跡からは縄文時代早期中葉に位置づけられる沈線文系土器群を中心に早期から晩期までの各期の土器片が断片的に出土している。以下、第I群から第V群まで群別を行い若干の説明を加える。

第I群土器（1～48）

縄文時代早期の土器群を一括する。沈線文系土器群を第1類、条痕文系土器群を第2類とする。

第1類（1～37）

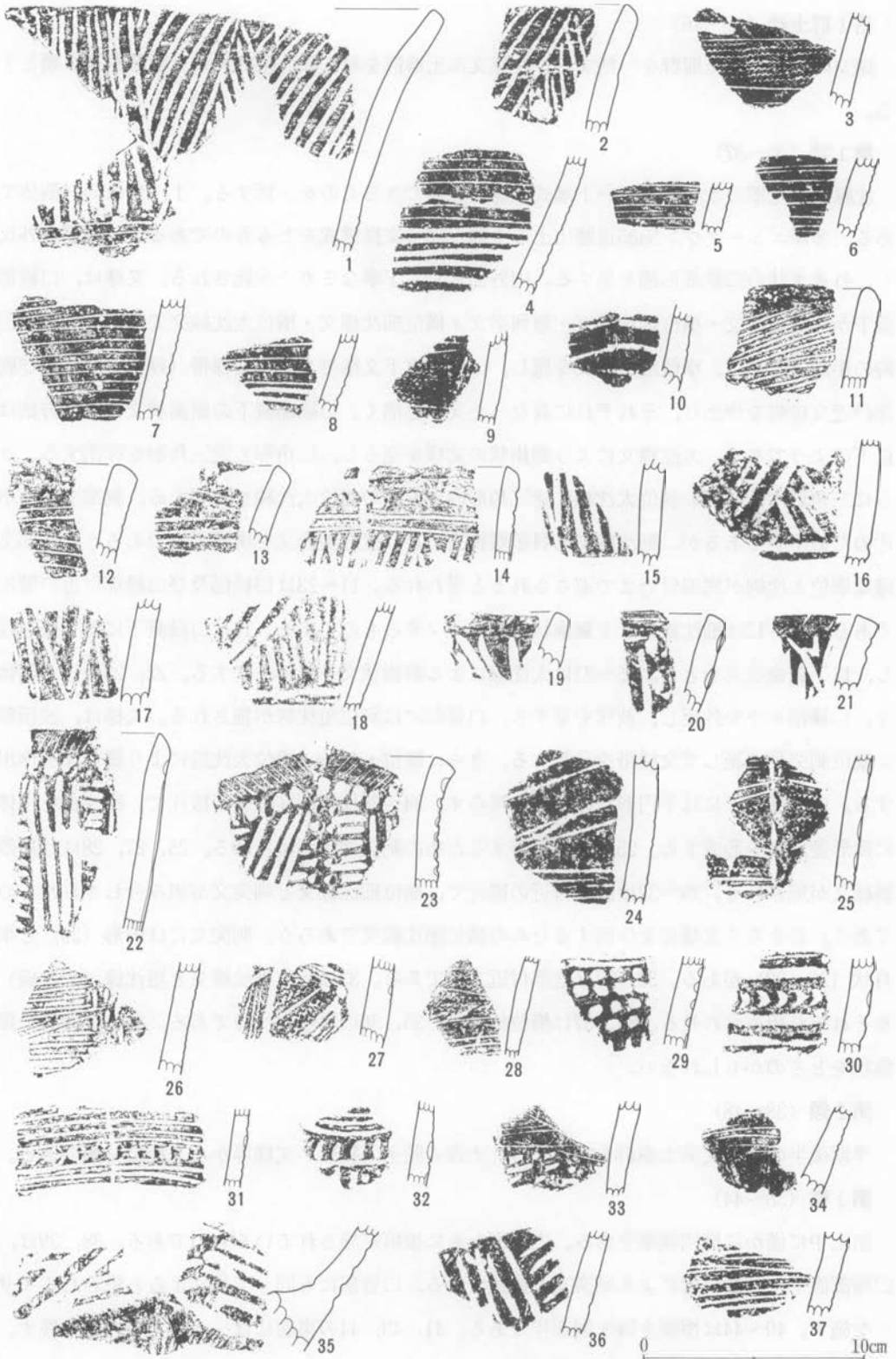
沈線文系土器のうちで、田戸下層式土器に比定できるものを一括する。1～10は同一個体である。多摩ニュータウンNo.35遺跡出土の土器と同じ文様構成をとるものである。口縁部は外反し、外そぎ状の口唇部形態を呈する。内外面ともに丁寧なミガキが施される。文様は、口縁部直下から鋸歯状文・横位細沈線文・幾何学文・横位細沈線文・横位太沈線文である。文様作出時の手順としては、横位細沈線文を施し、口縁部直下文様帯と胴部文様帯（幾何学文）及び底部付近文様帯を作出し、それぞれに異なった文様を描く。口縁部直下の鋸歯状文の施文方法は以下のものである。太沈線文により鋸歯状の文様を巡らし、三角形と逆三角形を作出する。さらに三角形内は右傾の斜位太沈線、逆三角形内は左傾の斜位太沈線を充填する。胴部文様は小片のため不明であるが、細沈線文と貝殻腹縁文により変形菱形文を構成するであろう。底部文様は横位太沈線が底部付近まで巡らされると思われる。11～23は口縁部及び口縁部付近の破片である。11～13は細沈線により鋸歯状をモチーフするものである。14は口縁直下に無文帯を残し、以下鋸歯状文をとる。15～21は太沈線による鋸歯状文をモチーフする。22、23は同一個体で、口縁部がやや外反し、波状を呈する。口唇部には斜位短沈線が施される。文様は、波頂部に縦位刺突列を施して文様帯を分帯する。さらに縦位・斜位・横位太沈線により縦割文を作出する。口縁部直下には半円形状の刺突を巡らす。24～28は胴部文様帯の破片で、細沈線を主体に変形菱形文を形成する。25、26は分帯するための刺突列が認められる。25、27、28には貝殻腹縁文が施される。29～32は底部付近の破片で、横位細沈線文と刺突文が組み合わせられたものである。おそらく文様帯を作出するための横位細沈線文であろう。刺突文には円形（29）と半月状（30～32）がある。33～37は底部付近文様である。33は斜位細沈線文と短沈線（太沈線）をそれぞれ組み合わせる。34、37は横位細沈線、35、36は斜位太沈線である。36は全体的に鋸歯状をとるのかもしれない。

第2類（38～48）

早期後半の条痕文系土器群を一括する。土器の胎土・整形・文様等から2種に分類できる。

第1種（38～44）

胎土中に僅かに植物繊維を含み、内外面ともに擦痕が施されているものである。38、39は、口縁部直下に半截竹管による刺突文を連続させる。口唇部にも同一工具によると思われるキザミを施す。40～44は擦痕を残す胴部片である。41、43、44の裏面にはヘラ状工具の跡を残す。いずれも子母口式土器に比定されよう。



第77図 グリット出土縄文土器(1)

第2種 (45～49)

胎土中に多量の植物繊維を含み、表裏ともにアナグラ属系の貝殻を用いて条痕文を施すものである。45～48は口縁部片，49は胴部片である。口縁部付近での条痕は表裏ともに横位である。広義の茅山式土器に比定できよう。

第II群土器 (50～54)

縄文時代前期の土器を一括する。

第1類 (50)

胎土中に植物繊維を多量に含み、内面が丁寧に研磨される。斜位沈線を格子目状に施す。

第2類 (51～54)

胎土中に砂粒子を多く含み、焼成良好である。51，52は僅かに外反する口縁部片である。いずれもサルボウ貝等のアナグラ属系の貝殻を用いた波状貝殻文を施す。浮島II式土器に比定できよう。

第III群土器 (55～58)

縄文時代中期の土器を一括する。

第1類 (55)

比較的節の大きな単節縄文(L R)を横位に施すものである。撚紐の一端を結び結節させたS字状結節文が横走している。焼成良好である。前期末から中期初頭にみられる縄文土器で、いわゆる下小野式土器に比定されよう。

第2類 (56～58)

56は隆帯により渦巻文が描かれる口縁部で、口縁部文様帯内に単節縄文(L R)が施される。57には隆帯による区画文と単節縄文(L R)がみられる。58は単節縄文(L R)を地文として2条の沈線が曲線的に垂下するものである。加曾利E I式土器の新しい段階に位置づけられよう。

第IV群土器 (59～64)

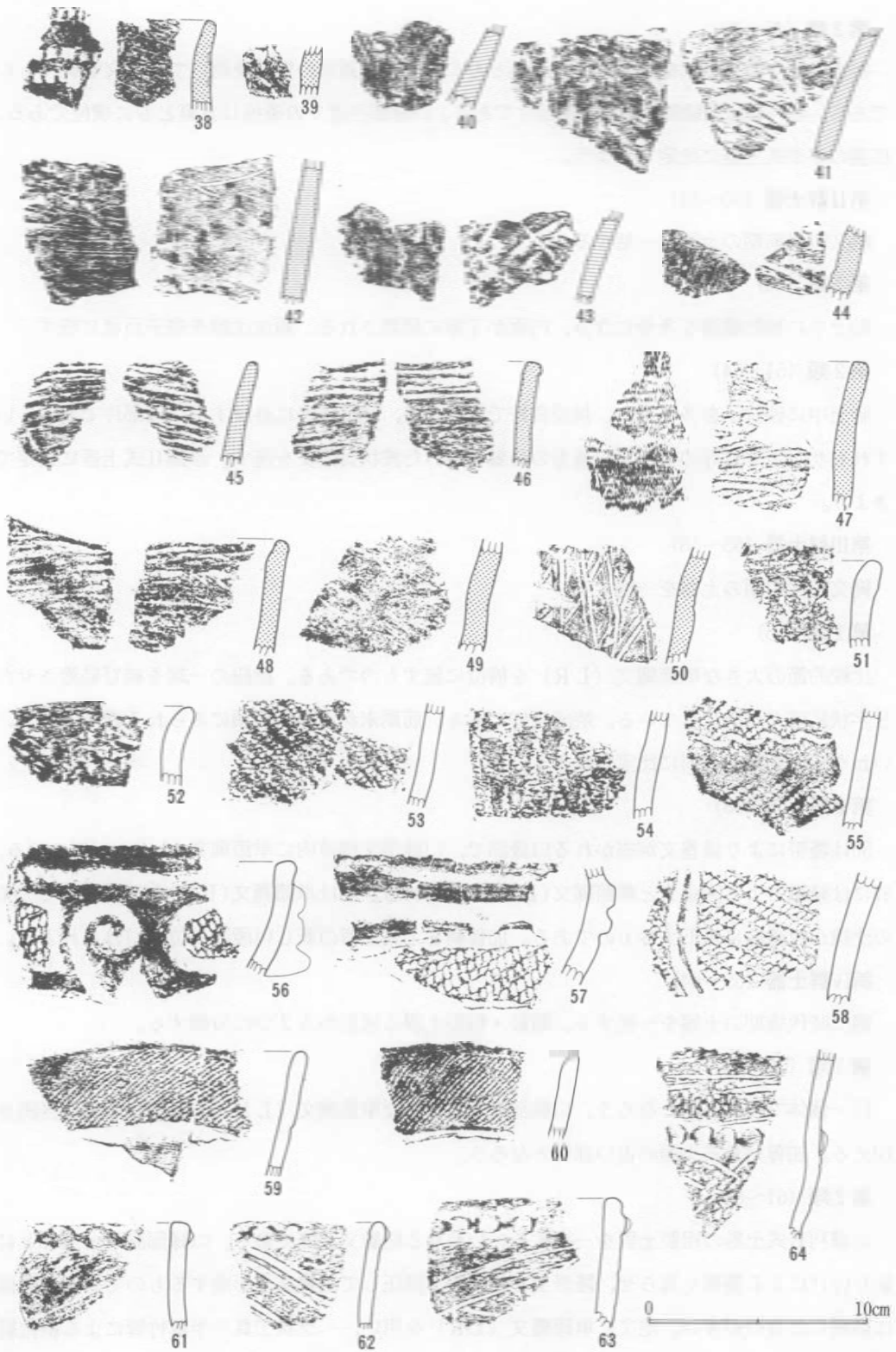
縄文時代後期の土器を一括する。精製・粗製土器の区別から2つに分類する。

第1類 (59, 60)

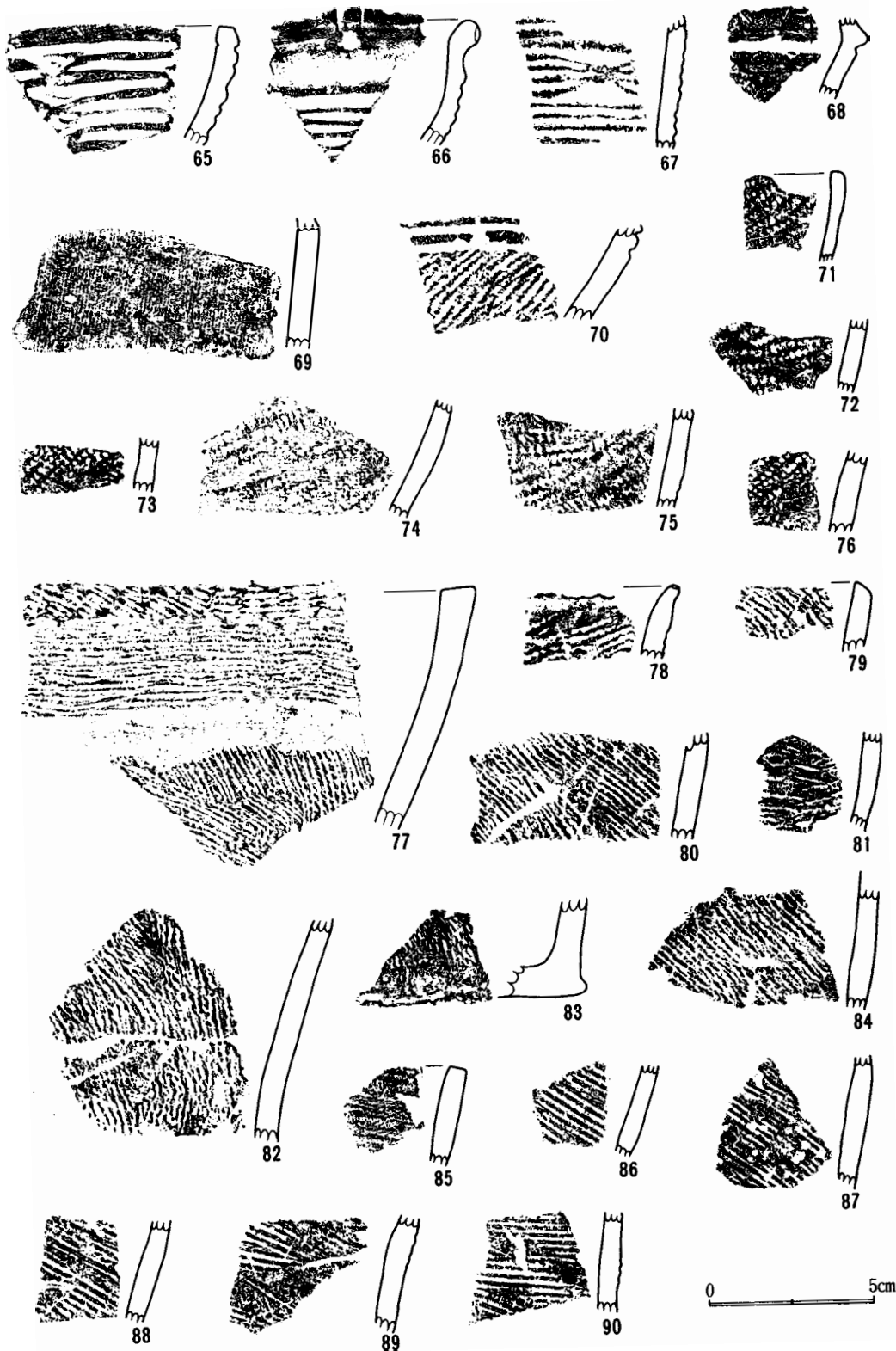
同一個体で浅鉢土器となろう。口縁部直下に細かな単節縄文(L R)を施した後沈線区画を加える。加曾利B式土器の古い部分となろう。

第2類 (61～64)

加曾利B式土器の粗製土器を一括する。いわゆる紐線文土器である。口縁部直下と胴部とに貼り付けによる隆帯を巡らせ、隆帯上を指頭等で押圧して紐線文を形成するものである。器面は磨滅したものが多。地文に単節縄文(L R)を用い、ヘラ状工具や半截竹管による斜位細沈線を施す。



第78図 グリット出土縄文土器(2)



第79図 グリット出土縄文土器(3)

第V群土器 (65~90)

縄文時代晩期後半の土器群を一括する。文様等の特徴から5つに分類し説明を加える。

第1類 (65~67)

浮線網状文をもつものである。65は角頭状の口唇部形態を呈する浅鉢土器であろう。沈線により網状の文様を作出し、浮線化する。浮線部は平坦である。66は口縁部が部分的に緩やかな波状を呈し、口縁直下でくびれてなめらかに底部へ移行する浅鉢土器である。波頂部には半月状の刺突が施される。文様は沈線による浮線網状文である。67も同様に浮線網状文を施す。工字文を意図したものであろう。

第2類 (68~70)

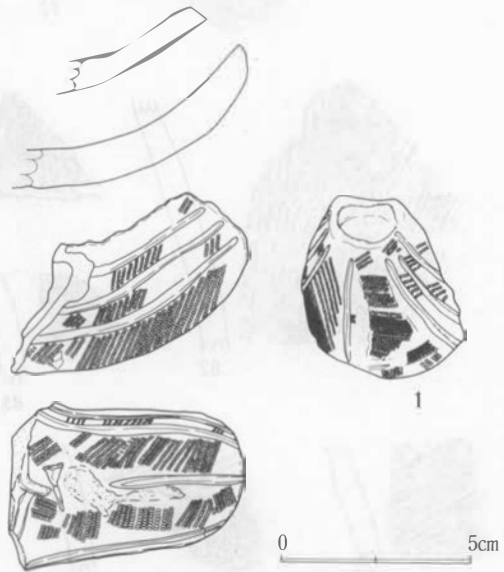
平行沈線文をもつものである。68は胴部がくの字状にくびれる深鉢土器であろう。くびれ部に一条の沈線が巡ると思われる。69は胴部片で、図上端に沈線が認められ、以下は無文となる。70は浅鉢土器の胴部片であろう。口縁から沈線により工字文等の文様を作出し、胴部から底部に至るまで単節縄文 (LR) を施すものと考えられる。

第3類 (71~84)

縄文あるいは撚糸文により口縁部直下から底部に至るまで同一文様を施すものである。71~76は縄文となる。71は単節縄文 (LR) を施した口縁部片である。73~76は胴部片で、すべて単節縄文 (LR) となる。器面に炭化物の付着が認められる。77~82は撚糸文を施すものである。77は口唇部形態が内そぎ状になり、口唇上には絡条体圧痕を加える。口縁部直下には撚糸文 (R) を横走させる。胴部には縦位と斜位の不規則な撚糸文が認められる。78は口唇部形態が尖頭状となりやや外反する。口唇上にはキザミを施す。原体は撚糸文 (R) である。79は外そぎ状を呈する口唇部形態である。80~83, 84は胴部片で撚糸文を縦位に施すもの (82), 斜位に施すもの (80, 84), 横位に施すもの (81) がある。原体は81が撚糸文 (L), その他は撚糸文 (R) である。83は底部片で、撚糸文 (R) が底部直上まで施文される。

第4類 (85~90)

器面に条痕文を施すものである。85は角頭状を呈する口縁部片である。条痕が斜位



第80図 グリット出土注口土器

となる。86～90は胴部片である。90は横位条痕であるが、86～89は斜位となる。

以上、文様要素を第1類から第4類まで分類した。これらの土器は、焼成が良好で比較的薄手のものが多い。器面の整形は丁寧である。第1・2類は精製土器、第3・4類は粗製土器と考えられる。

注口土器（第80図，図版38）

全面に単節縄文（LR）を施す。横面から下面にかけて、2条の沈線を1つの単位とした沈線文が4ヶ所に施される。後・晩期に出土する注口土器は、無文で直線的に立ち上がるものが多い。本資料は、下面に丁寧な縄文と沈線を施し、上面は雑な縄文が認められる。内面は雑な整形である。基部から緩やかにくびれる形態を呈する。ここでは一応注口土器と考えたが、施文方法及び形態等より別の器種（土偶？）の可能性もある。

3. 天王宮遺跡

グリット出土縄文土器（第81～84図，図版41）

本遺跡から出土した縄文時代の土器は、縄文時代早期から晩期に至るまですべて認められる。出土量は非常に少ないものの、晩期の土器が主体となる。以下説明を加える。

第I群土器（1～8）

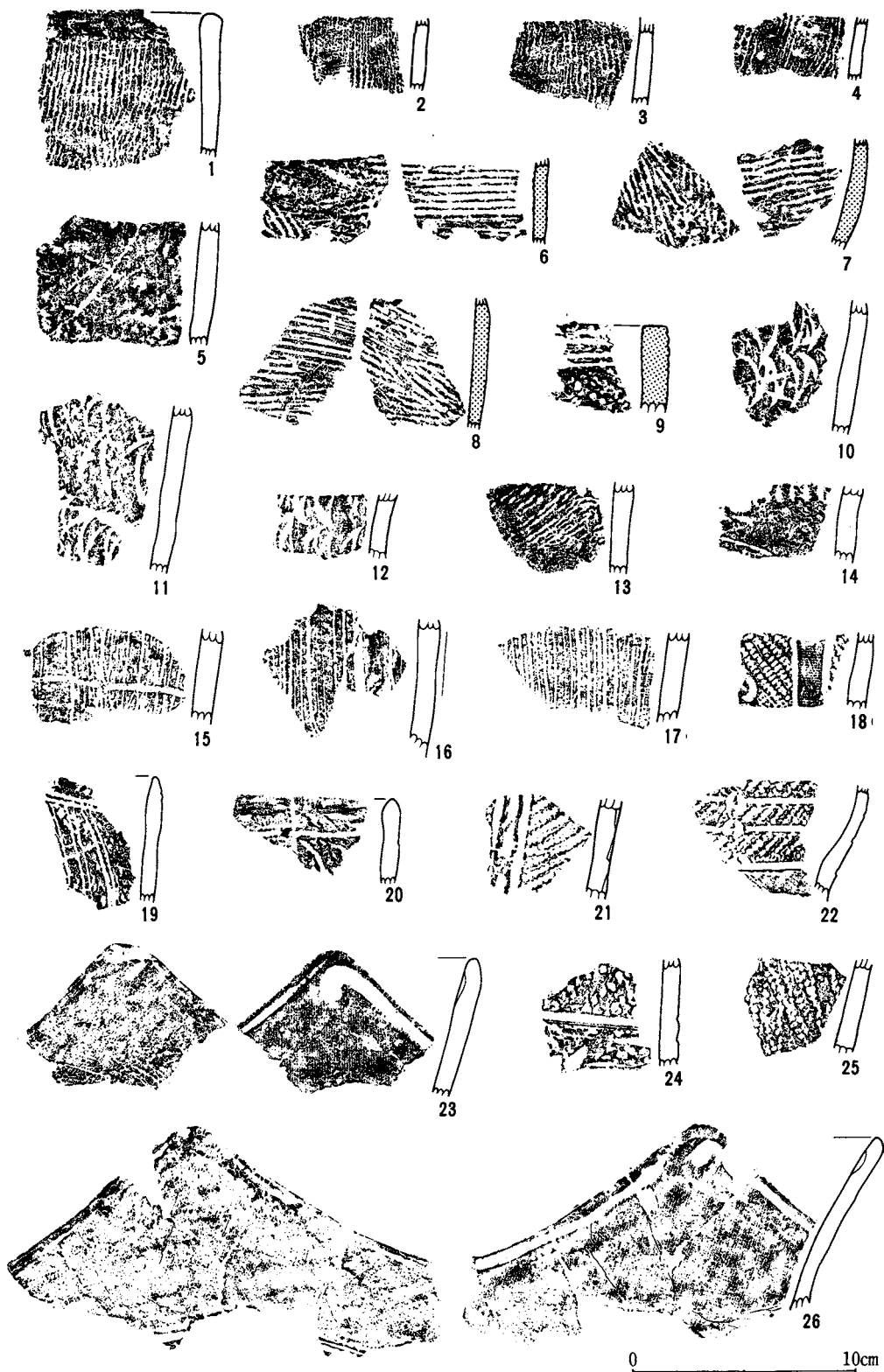
1～4は撚糸文系土器である。1は口縁部片で丸頭状を呈する。文様は、口縁部直下から縦位の撚糸文（R）が施される。胴部も同一の文様となろう。2～4がそれにあたる。夏島式土器に比定されよう。5は無文土器である。胎土中に砂粒子を多く含み、整形は表裏ともに縦位のケズリが行われている。有文の土器が出土していないため判然としないが、沈線文系土器群中の無文土器に類似しているため一応沈線文系土器と考えたい。6～8は早期末葉の条痕文系土器である。表裏ともにアナグラ属系の貝殻を用いて横位、縦位、斜位の貝殻条痕文を施すものである。胎土中に微量の植物繊維を含む。

第II群土器（9～13）

9は胎土中に植物繊維を多量に含む。内面は非常に丁寧に磨かれる。口唇部形態は角頭状を呈する。文様は、器面全体に単節縄文（RL）を施し、口縁部直下から4条の平行沈線を加える。黒浜式土器に比定されよう。10～12は波状貝殻文を器面全体に施すものである。前期後半の浮島II式土器である。13は縦位の単節縄文（LR）が認められる。前期末から中期初頭に位置づけられる下小野式土器に比定される。

第III群土器（14～18）

14は図上部に爪形状の連続文が認められる。胎土中に雲母粒子を多量に含む。阿玉台式土器となろう。15～17は同一個体で、17のように縦位の条線が無数に施文される。15には一部に沈



第81図 グリット出土縄文土器(1)

線がみられる。16には隆帯が縦位に付けられ、隆帯の両側にナデ状の沈線が巡らされる。胎土中に多量の雲母粒子が認められる。18は単節縄文（RL）が施され、縦位の沈線により縄文を磨き消している。加曾利E式に比定できよう。

第IV群土器（19～26）

19, 20は口縁部片で、口縁部直下に沈線を巡らす。以下曲線的な沈線を施す。19は半截竹管による沈線文である。21は地文にRLの単節縄文を施し、2条の沈線で分帯する。沈線間には列点状の刺突文を施す。堀之内式土器に比定できよう。22, 23, 26は同一個体で、口縁部が波状となる。内面に口縁部を巡らす沈線が加えられ、波頂部でへの字状となる。文様は口縁部が無文となり、胴部にLRの単節縄文帯をもつ。底部は無文となろう。縄文帯には平行沈線が数条施文され、沈線上には「の」の字状の文様が縄文帯を分帯する。加曾利BI式に比定できよう。24, 25は縄文を地文とし、数条の沈線を加えたものである。加曾利B式土器の粗製土器である。

第V群土器（27～102）

晩期末葉の土器群である。文様等の諸特徴から5つに分類できる。

第1類（27～64）

精製土器を一括する。さらに文様の特徴から3つに分類できる。

第1種（27～37）

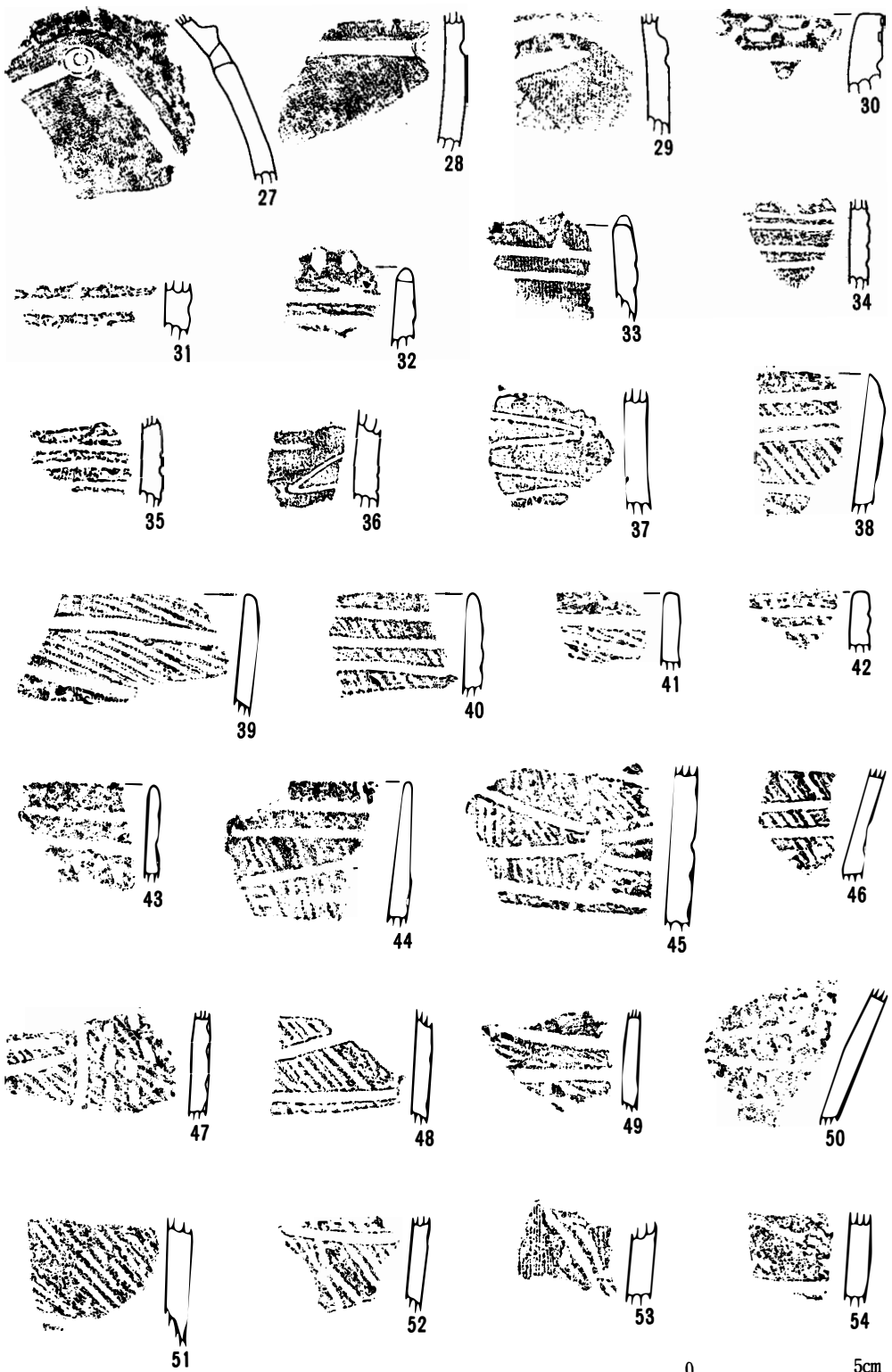
沈線文を主文様とするものである。器形を窺えるものはない。27～29は太沈線文を施すものである。27はへの字状に太沈線が施され、波頂部に孔が穿たれる。沈線に沿って段を有する。壺形土器であろう。30, 31は同一個体である。口縁部直下に横長の刺突文を2段形成し、以下横位細沈線を施す。32, 33は口縁直下に沈線を加える。32は口唇部にキザミをもつ。33は一部緩やかな波状を呈する。34, 35は横位細沈線を施す胴部片である。36, 37は同一個体で、浮線網状文を沈線化した網状文が認められる。

第2種（38～59）

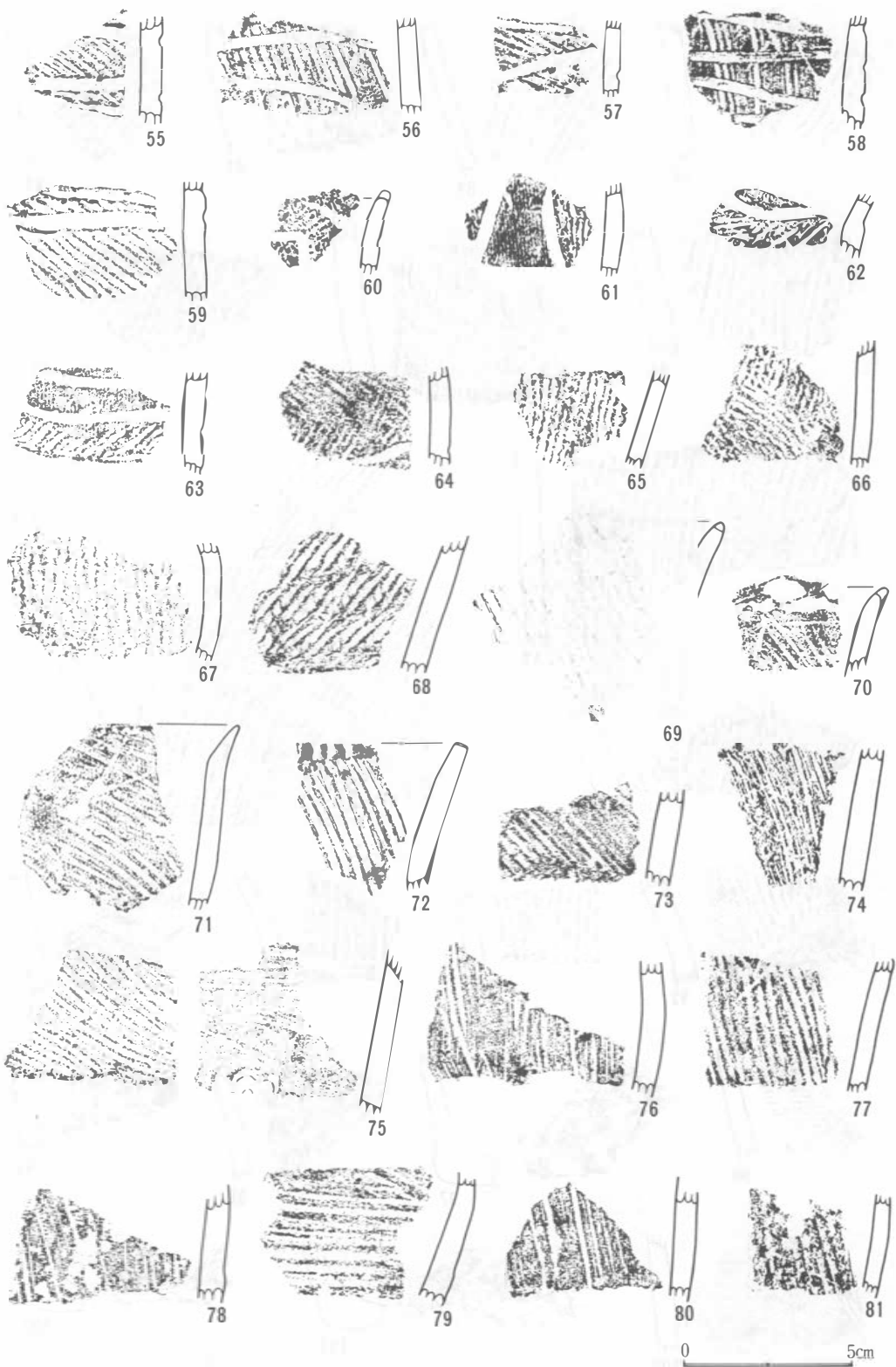
条痕文を地文とし、沈線により主文様を構成するものである。38～44の口縁部片にみられるように、口縁部直下に1～3条の横位太沈線を巡らす。胴部は、44, 45にみられるように、胴部文様帯を刺突文により分帯し、三角連繫文を意匠とする文様を施す。一部には47のように片突きの列点文を加えると思われる。胴部文様以下底部までは条痕文と思われる。

第3種（60～64）

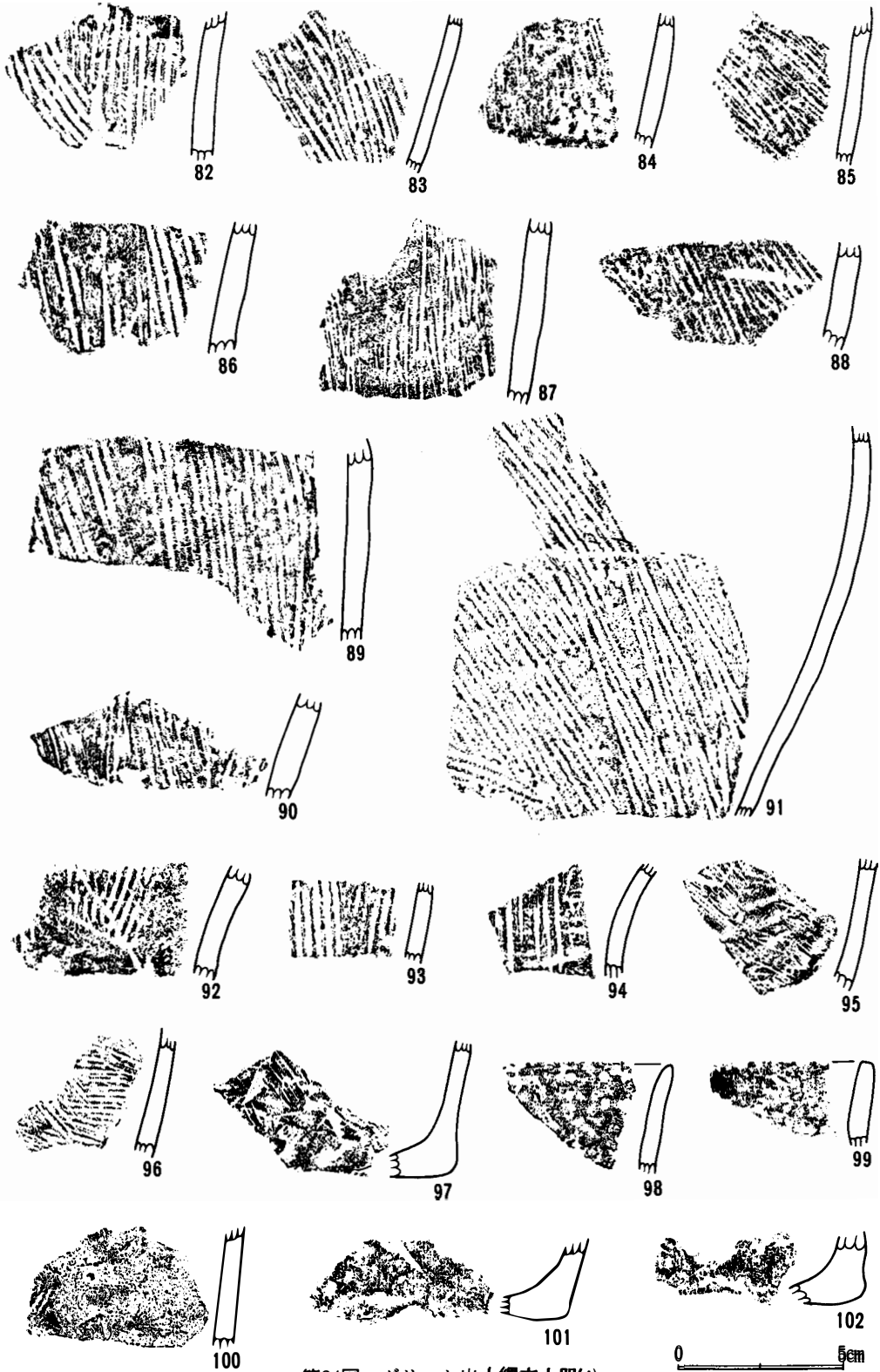
縄文と沈線を組み合わせた文様を構成するものである。60は緩やかな波頂部をもつ口縁部で、器面に単節縄文（LR）を施す。口縁直下には∟状の沈線を加える。62～64は横位沈線間に単節縄文（LR）を充填する。62は壺形土器の頸部であろうか。64は単節縄文（LR）と異方向に条痕文が認められる。



第82図 グリット出土縄文土器(2)



第83図 グリット出土縄文土器(3)



第84図 グリット出土縄文土器(4)

第2類 (65~102)

粗製土器を一括する。文様の諸特徴から3種に分類する。

第1種 (65~68)

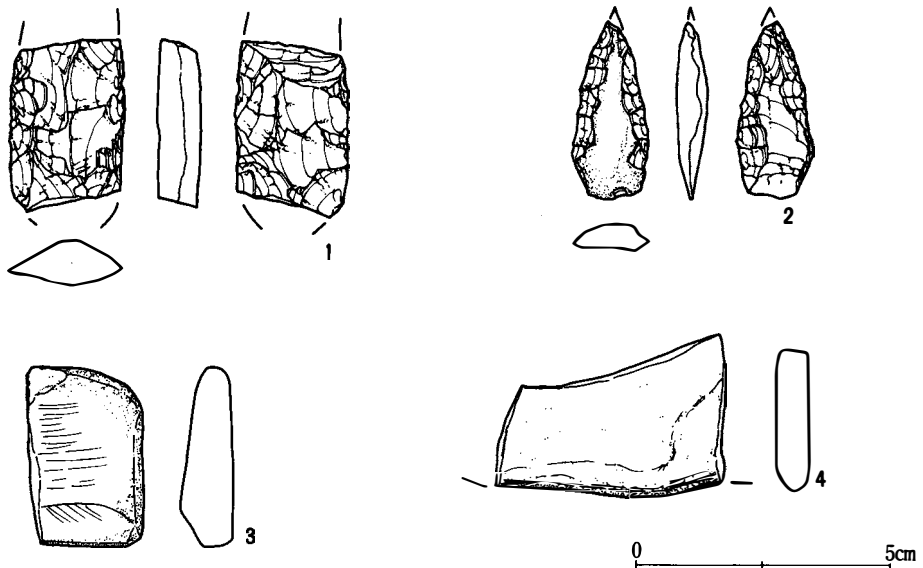
縄文・撚糸文が施文されるものである。65, 66には撚糸文 (R) が認められる。67は単節縄文 (LR) である。68には無節縄文 (R) がみられる。66は雑な施文であるが、その他は一定している。

第2種 (69~97)

条痕を器面全体に施すものである。69~72は口縁部片で、口唇部形態が尖頭状を呈するもの (69~71) と角頭状を呈するもの (72) がある。69, 70, 72の口唇部にはキザミがみられる。器形は、口縁部が外反し、胴部で緩やかな膨らみをもつ深鉢形土器であろう。71は口縁部直下の内面でくの字状にくびれる。いずれも条痕が斜位に施される。73~96は胴部片である。条痕の施文方向は、斜位 (73~75, 83, 85, 91, 95, 96), 横位 (79), 縦位 (76~78, 80~82, 84, 86~90, 92~94) とあり、縦方向が多い。75は一部に補修孔があり、内面にまで擦痕状の条痕が認められる。97は底部片で、斜位の条痕が認められる。

第3種 (98~102)

無文土器である。98, 99は口縁部片で、内外面とも丁寧なミガキが施される。98は尖頭状, 99は角頭状の口唇部形態を呈する。100は胴部片, 101, 102は底部片で、文様がないため本種に分類したが、あるいは胴部に文様が施されているかもしれない。



第85図 グリット出土石器

中山遺跡 (No.30)

石器 (第85図)

1は先端部及び基部を欠損しており、全体の形状は不明であるが、残存する部分から察すると有舌尖頭器であると考えられる。両側縁からの細部剝離により調整を施す。石質はチャートである。残存長32.8mm、幅23.3mm、厚さ8.3mm、重さ8.9gを測る。2は先端部を欠損する。図左側に自然面を残す。細部調整は両側縁に集中する。基部調整は認められない。石鏃あるいは尖頭器の未製品であろう。石質はチャートである。長さ33.6mm、幅15.5mm、厚さ5.2mm、重さ2.7gを測る。3～4は砂岩製の砥石である。かなり入念に使用され薄くなっている。3は長さ36.1mm、幅23.6mm、厚さ10.3mm、重さ11.7g、4は長さ31.3mm、幅43.7mm、厚さ6.0mm、重さ13.3gを測る。

第3節 奈良・平安時代

1. 中山遺跡

本調査区は、南側に舌状に伸びる台地の基部付近である。集落は調査区の南側に集中し、調査区外に展開する状況が窺える。検出された遺構はほぼ平安時代に含まれる。

住居跡

001号住居跡 (第86図, 図版19)

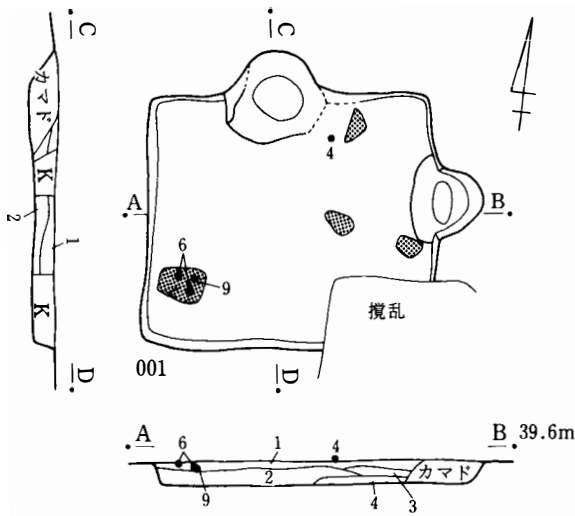
本住居跡は、調査区西端A 3区に位置する。床面にまで及ぶ攪乱が著しい。規模は2.9×2.6mを測り、略正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20cmを測る。床面は攪乱により不明である。周溝・柱穴等は検出されなかった。カマドは北壁及び東壁に2ヶ所構築されているが、遺存はきわめて不良である。ただ、袖の状況からすると北壁のほうが後出のものと考えられる。北壁カマドは床面より15cm程掘り込まれ、焼土が厚く堆積する。遺物の出土は少なく、ほとんど覆土上層中である。カマド内に杯が若干みられる。

002号住居跡 (第86図, 図版19)

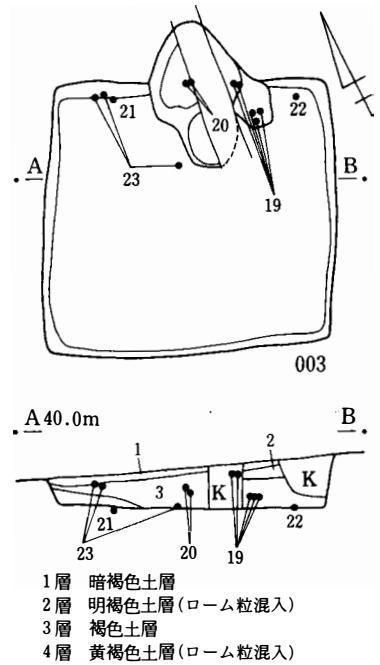
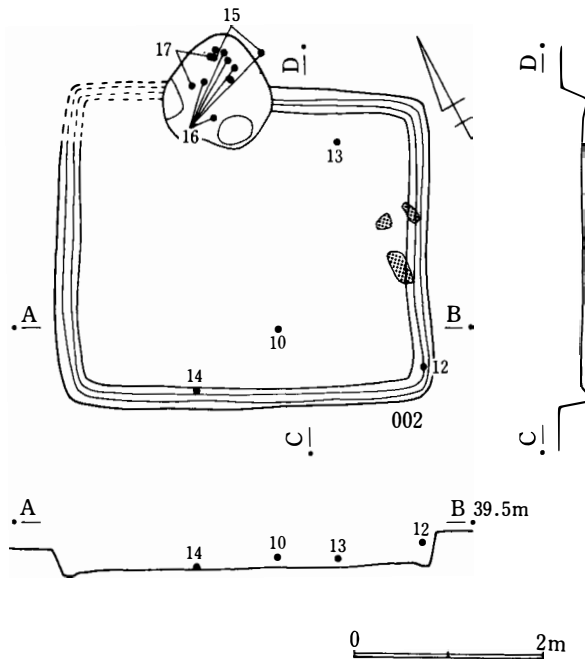
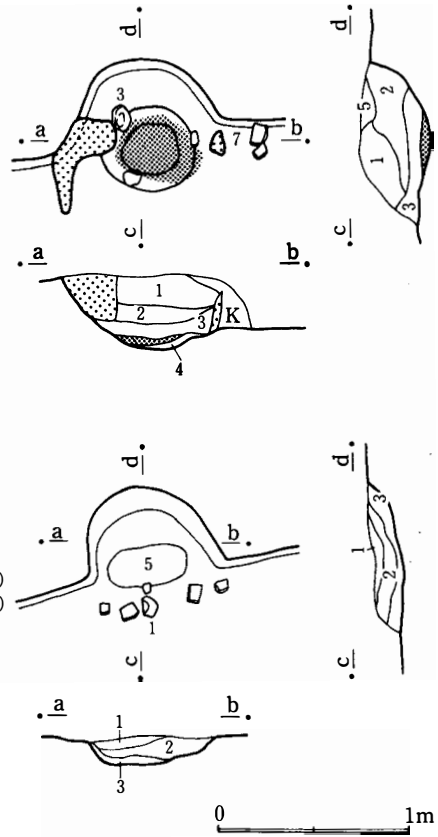
A 3区, 001号住居跡の北西4m程に位置する。攪乱が著しい。規模は3.9×3.3mを測り、略正方形を呈する。新期テフラ上面より掘り込まれる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20cmを測る。床面は暗褐色土中に形成されるが攪乱が著しい。柱穴は確認されなかった。周溝は、カマド部分を除き、幅15cm程で全周する。カマドは北壁やや西側寄りに位置する。遺存はきわめて不良である。全体に三角形を呈し、床面からの掘り込みは浅い。遺物はカマド内及び南壁沿いに集中する。カマド内には須恵器の甕が主体となる。床面上には、攪乱が激しいものの全体に焼土・炭が堆積する。その状況から、本住居跡は焼失したことが窺える。

003号住居跡 (第86図, 図版20)

B 2区南西端に位置する。新期テフラ上面より掘り込まれ、規模3.0×2.8mを測る略正方形



- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1層 暗褐色土層 | 1層 褐色土層(砂質) |
| 2層 褐色土層 | 2層 暗褐色土層(焼土粒混入) |
| 3層 山砂層 | 3層 赤褐色土層(焼土粒主体) |
| 4層 赤褐色土層(焼土粒多く混入) | 4層 ロームブロック土層 |
| | 5層 暗褐色土層 |



- | |
|------------------|
| 1層 暗褐色土層 |
| 2層 明褐色土層(ローム粒混入) |
| 3層 褐色土層 |
| 4層 黄褐色土層(ローム粒混入) |

第86図 001~003号住居跡

中山遺跡 (No.30)

を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最高50cmを測る。床面はソフトローム中に形成され、中央部が比較的堅緻である。柱穴及び周溝は検出されなかった。カマドは北壁中央に位置する。攪乱が著しい。三角形の掘り方を呈するが、内側に浅い焚き口部を付設する。焼土は底面より若干浮いて厚く堆積する。遺物はカマド内及びその周辺に集中する。

004号住居跡 (第87図)

B 2 区, 003号住居跡の北側 4 m程に位置する。新期テフラ上面より掘り込まれ、規模3.5×3.3mを測る不整な正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最高40cmを測る。床面はハードローム中に形成され、堅緻である。周溝はカマド及び南側コーナー部を除き全周するが、掘り込みは不規則である。柱穴は検出されなかった。カマドは西壁中央に位置する。攪乱が著しい。楕円形の掘り方を呈し、燃烧部は床面より15cm程掘り込まれる。焼土は底面より若干浮いて厚く堆積する。遺物はカマド周辺に集中する傾向が強い。

005号住居跡 (第87図, 図版20)

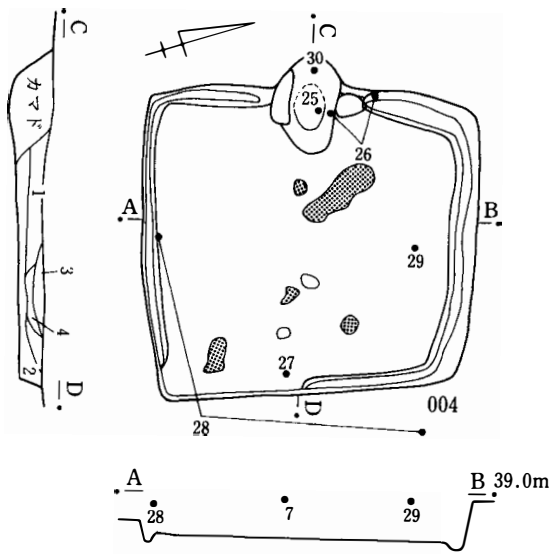
B 2 区に位置し、新期テフラ上面より掘り込まれる。規模は3.2×2.9mを測り、略正方形を呈する。壁はやや斜位に立ち上がり、壁高は30~40cmを測る。床面はソフトローム中に形成されるが攪乱が著しい。周溝は検出されず、柱穴が南壁側に1本設けられる。深さは26cmである。カマドは北壁中央に位置する。遺存はきわめて不良である。全体に楕円形状に掘り込み、床面からの深さは7cmである。焼土は底面よりかなり浮いて堆積する。遺物はカマド内に集中する。31の墨書土器はカマド左側の床面上の出土である。なお、床面中央付近には山砂及び焼土の堆積が認められる。覆土の状況及び山砂の存在より、本住居跡は焼失後意図的に埋め戻された可能性が強い。

006号住居跡 (第87図, 図版21)

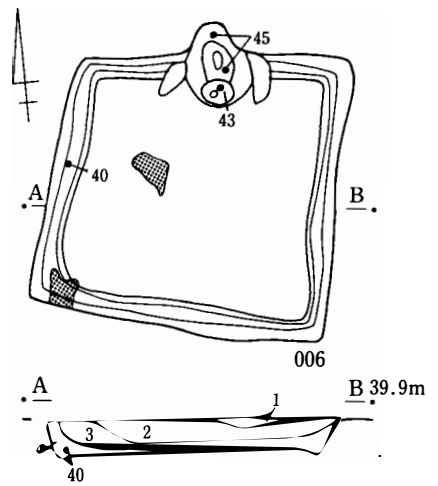
C 2 区に位置し、新期テフラ上面より掘り込まれる。規模は3.0×3.0mを測るが、やや不整形となる。壁はやや斜位に立ち上がり、壁高は35cmを測る。床面はソフトローム中に形成され、比較的良好である。周溝はカマドを除いて全周する。幅・深さとも一定していない。柱穴は検出されなかった。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。煙道部は階段状となり、焚き口部は燃烧部より若干深く掘り込まれる。遺物はカマド内に集中するが、40は正位で床面直上より出土した。また、西壁にささるような状況で鎌が1点検出された。

007号住居跡 (第88図, 図版21・22)

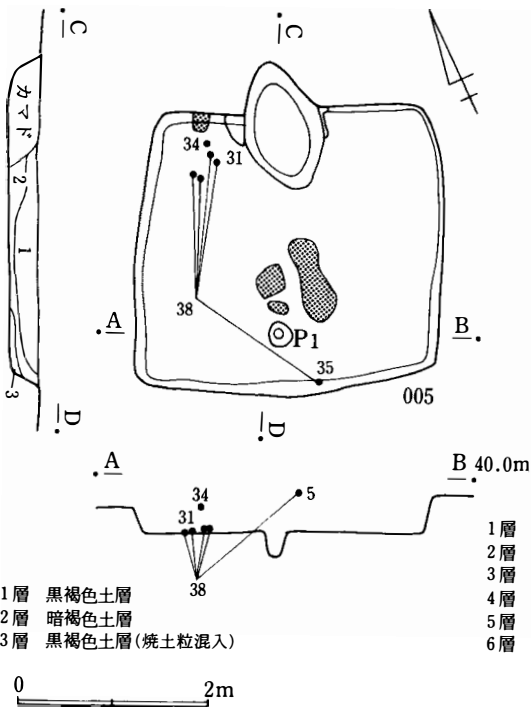
D 3 区, 調査区東端に位置する。新期テフラ上面より掘り込まれる。規模は3.1×2.7mを測り、長方形を呈する。壁はほぼ直立し、壁高は30cmとなる。床面はハードローム上面に形成され、比較的良好である。西側コーナー付近にピットが1本検出されたが、深さ6.5cmと小規模である。カマドは北壁中央に位置する。壁を半円状に掘り込み、焚き口部が円形に設けられる。



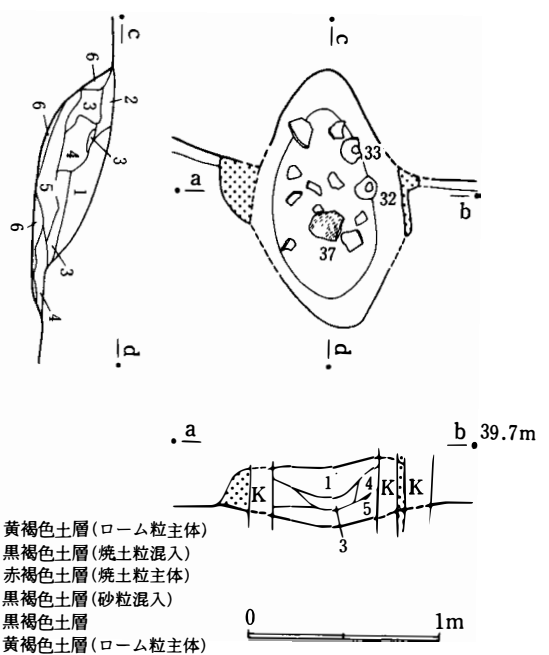
- 1層 褐色土層
- 2層 明褐色土層(ローム粒混入)
- 3層 暗褐色土層
- 4層 黄褐色土層(ロームブロック主体)



- 1層 黒褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 暗褐色土層
- 4層 黄褐色土層(ローム粒混入)



- 1層 黒褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 黒褐色土層(焼土粒混入)



- 1層 黄褐色土層(ローム粒主体)
- 2層 黒褐色土層(焼土粒混入)
- 3層 赤褐色土層(焼土粒主体)
- 4層 黒褐色土層(砂粒混入)
- 5層 黒褐色土層
- 6層 黄褐色土層(ローム粒主体)

第87図 004~006号住居跡

中山遺跡 (No.30)

床面からの掘り込みは浅い。袖は砂質粘土で構築され、焼土が底面より浮いて堆積する。遺物は床面より若干浮いているものの比較的豊富である。46・47の墨書土器は入子となって、西壁上方より滑り込んだ状況である。54も同様である。

008号住居跡 (第88図, 図版22・23)

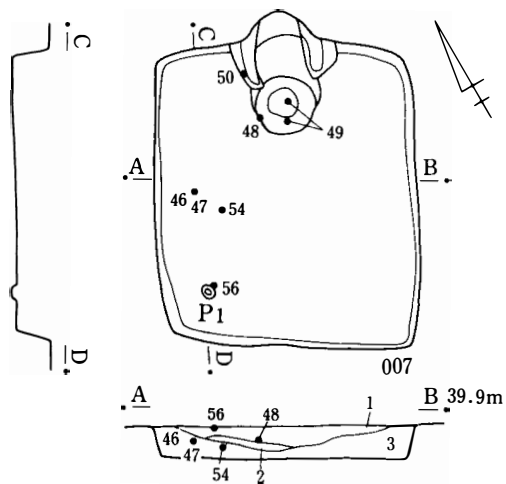
D 3区, 007号住居跡の北側 6 m程に位置する。新期テフラ上面より掘り込まれる。規模は3.8×3.1mを測り、横長の長方形を呈する。壁はほぼ直立し、壁高は40~50cmとなる。床面はハードルーム中に形成され、堅緻である。周溝はカマドを除いて全周する。幅15~20cm, 深さ6cmである。ピットは4ヶ所検出されたが、配置は不規則である。P₁~P₃が主あるいは補助柱穴となろう。P₄は南東コーナーに接し、径50cm, 深さ31cmの規模を有する。貯蔵穴であろう。カマドは北壁中央に位置する。壁外に90cm程掘り込み、三角形の掘り方を呈する。燃烧部は壁外に設けられ、床面より10cm程掘り込む。袖は砂質粘土を用い、壁に貼り付けるようにして構築される。遺物は床面から覆土上層にかけて多量に出土している。上層出土は壁際となり、以外は焼土上あるいは床面である。墨書土器は11点検出されているが、カマド左側に集中する。79は貯蔵穴付近に倒位で出土している。68, 78は北西コーナー部より転落した状況である。また、カマド左袖上から杯2点(63, 75)と皿1点(87)が皿を一番下にして重なって出土した。杯2点には墨書が認められ、最上部は「車智」と記される。注目される出土状況である。床面上には焼土及び炭化材がかなり遺存する。おそらく焼失したものであろう。

009号住居跡 (第89図, 図版23)

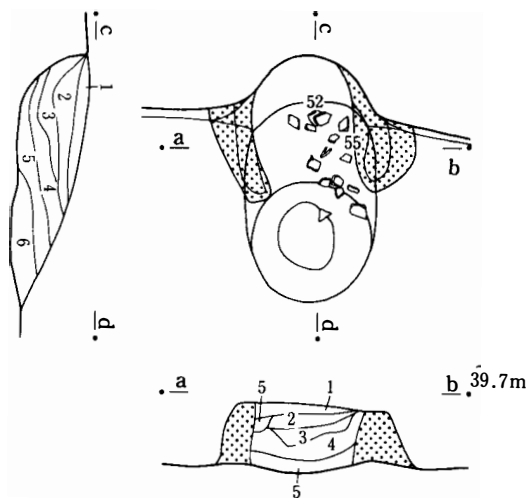
D 2区, 008号住居跡の西側 2 m程に位置する。新期テフラ上面より掘り込まれ、3軒が重複する。AとBとの新旧関係は、床面が15cm程の段差をもつこと及びBの覆土中にAの貼り床が認められなかったことよりBの方が新しいと判断できる。またBとCは、Cの周溝をBの周溝が切っていること及びCのカマドの痕跡がBの床面で確認されたことよりやはりBの方が新しくなるであろう。AとCの関係は不明である。いずれも1辺3~3.2mの正方形を呈する。周溝はB・Cに認められるが、幅・深さとも一定していない。柱穴は確認されなかったが、Bの南壁側に径80cm, 深さ11cmの浅いピット、Cの南東コーナーに径50cm, 深さ16cmのピットが設けられる。後者は貯蔵穴となるであろうか。カマドはいずれも北壁中央に位置するが、Cのカマドは痕跡のみである。AとBのカマドは完全に重複しており、先述の新旧関係も考えると、Aのカマドを意図的に利用してBのカマドを構築したことが想定される。遺物の出土は少ない。Bのカマド内に杯が2個体重なって検出された。

010号住居跡 (第89図, 図版24)

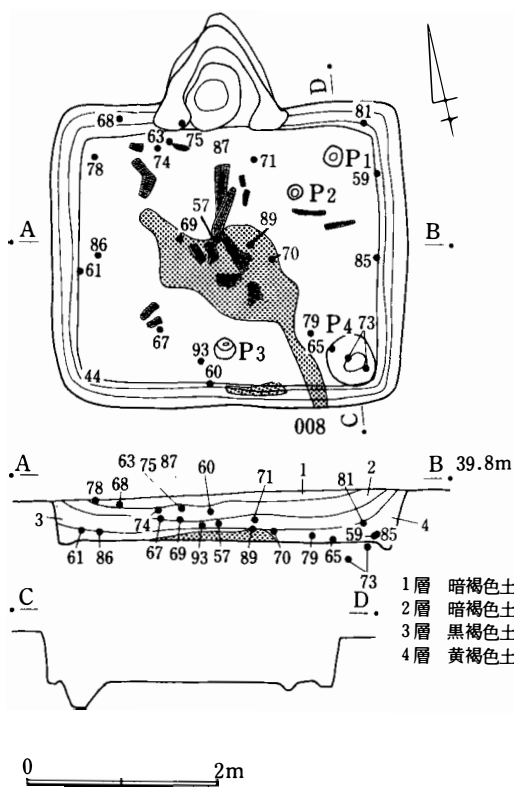
D 2区, 009号住居跡の北西 2 m程に位置する。新期テフラ上面より掘り込まれる。規模は3.4×3.0mを測り、長方形を呈する。壁はほぼ直立し、壁高は40cmとなる。床面はハードルーム中に



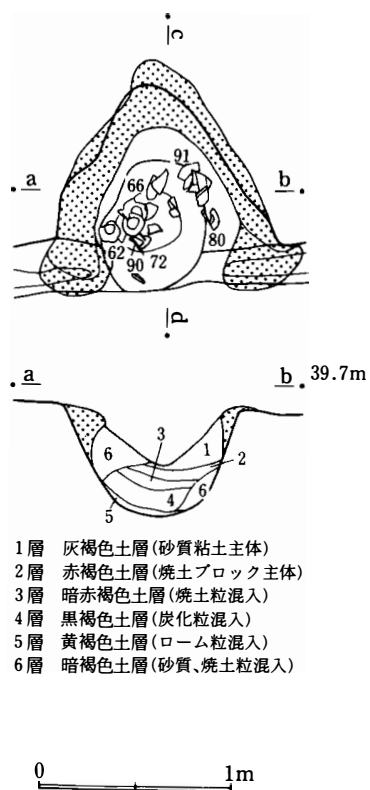
- 1層 暗褐色土層(ローム粒混入)
- 2層 黒褐色土層(炭化粒主体)
- 3層 黄褐色土層(ローム粒多く混入)



- 1層 黄褐色土層(ローム粒多く混入)
- 2層 褐色土層(焼土粒多く混入)
- 3層 赤褐色土層(砂質焼土粒)
- 4層 黒褐色土層(焼土粒多く混入)
- 5層 暗褐色土層(ローム粒多く混入)
- 6層 黄褐色土層(ローム粒主体)

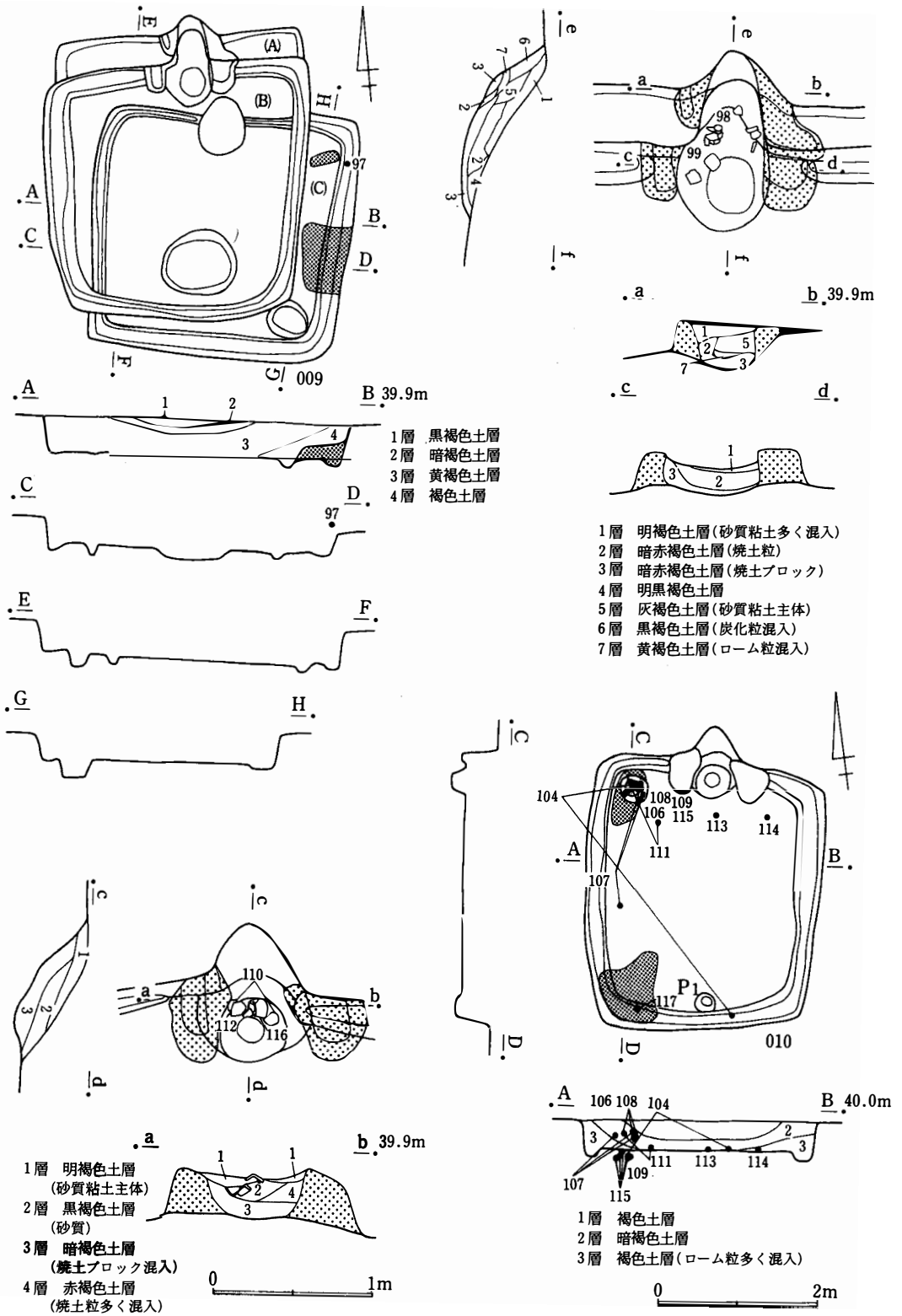


- 1層 暗褐色土層
- 2層 暗褐色土層(ローム粒混入)
- 3層 黒褐色土層(炭化粒混入)
- 4層 黄褐色土層(ローム粒多く混入)



- 1層 灰褐色土層(砂質粘土主体)
- 2層 赤褐色土層(焼土ブロック主体)
- 3層 暗赤褐色土層(焼土粒混入)
- 4層 黒褐色土層(炭化粒混入)
- 5層 黄褐色土層(ローム粒混入)
- 6層 暗褐色土層(砂質、焼土粒混入)

第88図 007・008号住居跡



第89図 009・010号住居跡

形成され、中央付近は堅緻である。周溝はカマドを除き全周する。幅20～30cm、深さ10cmとやや広い。柱穴は南壁周溝に接して1本設けられる。深さ15cmを測る。北西コーナーには径40cm、深さ20cmのピットが掘り込まれる。内部より土器が出土しており、貯蔵穴となろう。カマドは北壁中央に位置する。比較的遺存は良好で、砂質粘土の袖が大きめに構築される。遺物は貯蔵穴及びカマド周辺に集中する。

011号住居跡（第90図、図版24）

D1区に単独に設けられた住居跡である。規模は5.4×4.5mを測り、西辺がやや長い長方形を呈する。本集落の中では最大規模の住居跡である。壁は斜位に立ち上がり、壁高は30cmを測る。床面はハードローム上面に形成され、全体に堅緻である。周溝は幅20cm程で全周する。柱穴は対角線上に4本と南壁沿いに1本配置される。P₁～P₄は掘り方が大きく、深さも最浅P₁：35cm、最深P₃：55cmとなる。掘り方がやや楕円形を呈することより、すべて抜き取られた可能性がある。P₃は深さ27cmで、壁側に傾斜する。カマドは北壁中央に位置する。壁を30cm程三角形に掘り込み、煙道部を形成する。燃焼部の掘り込みはきわめて浅い。遺物はきわめて少なく、すべて覆土上層中である。P₁西側の壁際上層に土製の紡錘車が1点検出された。

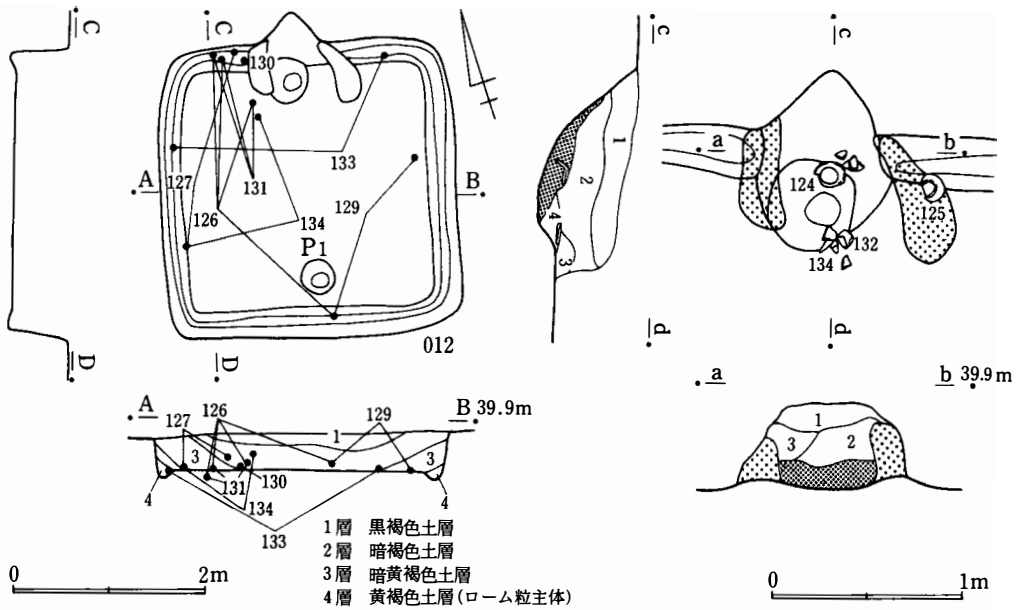
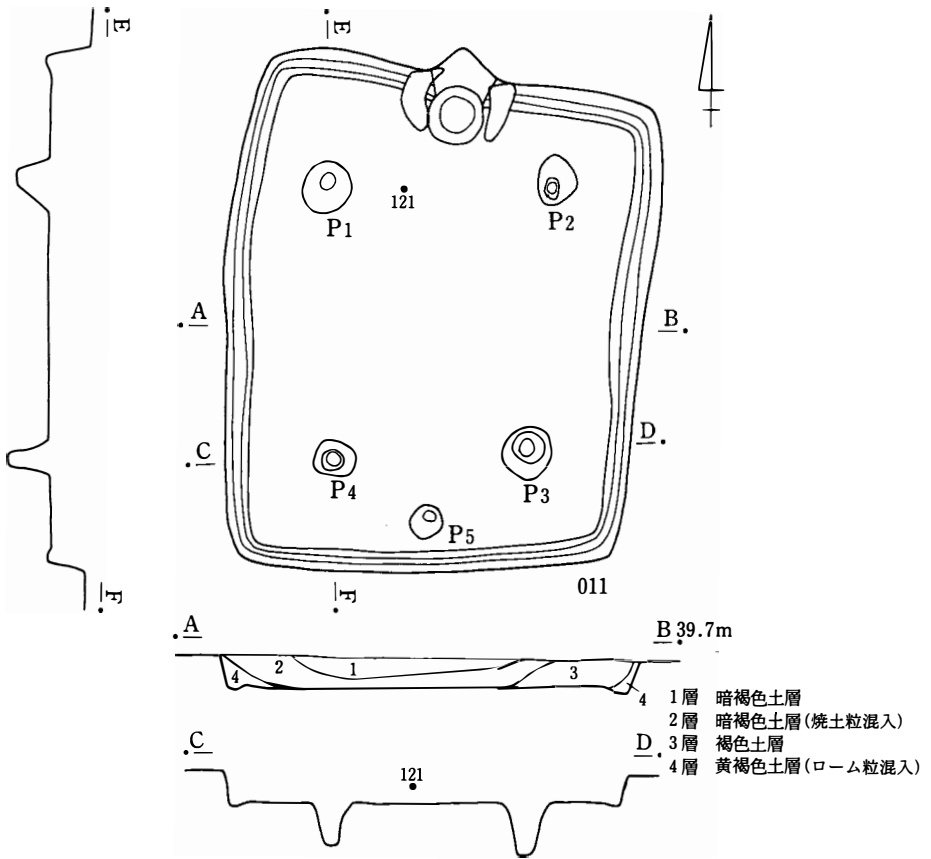
012号住居跡（第90図、図版25）

D2区、010号住居跡の西側3m程に位置する。新期テフラ上面より掘り込まれる。規模は3.1×3.1mを測り、正方形を呈する。壁はほぼ直立し、壁高は30～50cmとなる。床面はハードローム中に形成され、全体に堅緻である。周溝は幅15～20cmで全周する。柱穴は南壁側に1本設けられる。径33cm、深さ26cmを測る。やや壁側に傾斜する。カマドは北壁中央に位置する。壁を60cm程三角形に掘り込み煙道部を形成する。燃焼部は床面より20cm掘り込まれる。焼土は底面に接して厚く堆積する。遺物はカマド内及び左側に集中するが、かなり広範に接合する。ほとんど床面直上の状況である。124の杯が燃焼部内、125の杯が右袖上に倒位で検出された。

住居跡出土土器（第91～97図、図版30～34）

本遺跡より出土した土器は比較的多いが、後世の攪乱が著しい住居跡が主体を占めるため完形として器形を窺えるものがそれほど多くなく、推定復元に頼らざるを得ない状況である。ただ、008号住居跡は、いくつかのタイプの杯を含むとともに多くの墨書土器を出土した点で注目される。以下で各住居跡の土器を説明するが、杯に関しては記述の繁雑さを避けるためA～Fのタイプに分けて述べていく。他の器種は数量的に限定されるため各々説明する。この記述方法は、次節の馬場遺跡、次章の東野遺跡にも適用する。杯の分類基準は以下のとおりである。なお、分類図は終篇第3章第1節（第175図）を参照していただきたい。

杯Aは巻き上げ成形によるもので、体部外面全体にヘラケズリ調整を施す一群である。形態により、1：内面の体部と底部の境が不明瞭なもの、2：1と同様であるが若干大きくなるも



第90図 011・012号住居跡

の、3：内面の境が明瞭となり、体部が直線的に外傾するものの3種に分類できる。杯Bはロクロ成形によるもので、口径と底径の差が比較的少ないものである。1：口径11.9cm、底径7.8cm、器高3.6cmを平均法量とし、全体に扁平な器形を呈する。底部は回転糸切り後全面ヘラケズリを主体とする。2：1とほぼ同様であるが、若干大形となる。3：器高4.1cm前後を測り、箱形に近い形態を呈する。底部調整は、全面ヘラケズリされるものと糸切り痕を残すものの両者がみられる。静止糸切りが存在する。杯Cは、口径が底径の1.8~2.0となり、器形にバラエティーがみられる。内黒処理されるものが含まれてくる。1：体部が底部より内湾気味に立ち上がり、そのまま丸い口唇部に移行するものである。体部下端及び底部全面が手持ちヘラケズリされる。2：比較的大きめの底部より直線的に体部が外反するものである。3：底部より若干内湾気味に立ち上がり、その後直線的に外傾する。口唇部は僅かに外反する。杯Cのなかでは安定した形態を呈する。4：口径が底径の2.0前後で、器高が4.3cm前後を測る。底部は全面ヘラケズリ調整され、口唇部が外反する。杯Cのなかでは特異な形態を呈する。5：全体に大形となるもので、体部内面にはヘラミガキが施される。内黒となるものが多い。杯Dは口径が底径の2.0以上となるものである。杯C同様器形にバラエティーがみられるが、おおきく1：体部が直線的に外傾するもの、2：体部が内湾気味に外傾し、口唇部が若干外反するもの、3：2とほぼ同様であるが、口唇部が大きく外反するものの3種に分けられる。3は内黒となるものが多い。杯Eは、やや丸底状を呈する底部から体部が若干内湾気味に立ち上がった後、大きく外反する特徴的な形態を有する。底部は全面ヘラケズリとなる。杯Fは、底部が回転糸切りのままで無調整となる一群である。器形はバラエティーに富む。

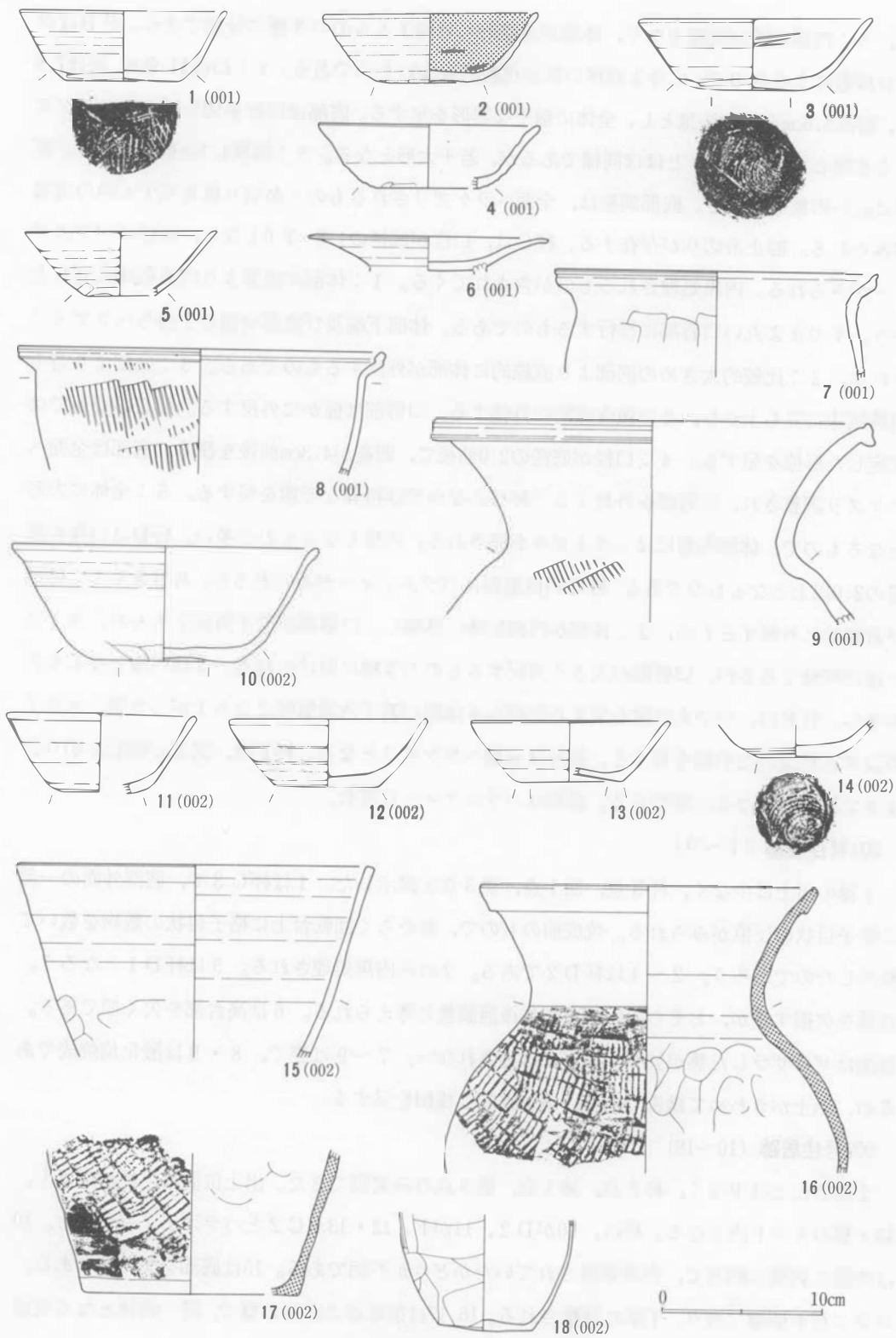
001号住居跡（1~9）

土器の出土は少なく、杯5点、皿1点、甕3点を図示した。1は杯C3で、底部外面の一部に格子目状の圧痕がみられる。焼成前のもので、おそらく回転台上に格子目状の敷物を敷いて整形したのであろう。2~4は杯D2である。2のみ内黒処理される。5は杯D1となろう。底部を欠損するが、おそらく回転糸切り後無調整と考えられる。6は高台部を欠く皿である。器面はザラザラした感が強く、ミガキは施されない。7~9は甕で、8・9は酸化焰焼成であるが、胎土がきわめて緻密であり、須恵器的な様相を呈する。

002号住居跡（10~18）

土器の出土は少なく、杯5点、鉢1点、甕3点のみ実測できた。出土位置は、杯が床面上、鉢・甕がカマド内となる。杯は、10がD2、11がF、12・13がC2とバラエティーに富む。10は内面の剝落が顕著で、内黒処理されていたかどうか不明である。15は底部を欠く鉢である。ロクロ目が明瞭に残り、丁寧に調整される。16.17は須恵器の広口の甕で、同一個体となる可能性が高い。18は底部がやや丸底状を呈する小形の甕である。

中山遺跡 (No.30)



第91図 住居跡出土土器(1)

003号住居跡 (19～23)

土器の出土は少なく、杯3点、皿1点、甕1点のみである。19は杯D1で、ロクロ目は弱く、やや大形となる。20は杯C3、21は破片であるが、杯Fとなろう。19はカマド右袖部、20は燃焼部内よりの出土である。22は比較的高い高台を有する皿である。23は口唇部を外方につまみ上げる甕である。胴部は球形を呈する。

004号住居跡 (24～30)

杯4点、高台付皿2点、鉢1点を図示した。25・26はカマド内の出土である。杯はF(24)、C5(25)、D1(26)と1点ごとにタイプが異なる。28は内黒の高台付皿で、高台部を欠く。底部外面に「郡上」の墨書が記される。30はカマド内煙道部より出土した鉢である。

005号住居跡 (31～38)

土器の出土は少なく、杯4点、皿1点、甕2点、甗1点を図示できたにすぎない。32・33はカマド内、38は床面上の出土である。杯にはC1(31)、C4(32)、E(33)のタイプがある。31の底部外面には「忠」の墨書がみられる。35は皿の高台部片である。36・37は甕で、37は酸化焙焼成となる。38は、その形態から、甕の底部を打ち欠いて若干の調整を施し、甗として再利用したのであろう。

006号住居跡 (39～45)

土器の出土は少なく、杯5点、甕2点のみ実測できた。39は杯A3で、体部が直線的に外傾し、口縁部で若干内湾する。41は杯C2、40・42は杯Fである。42は底部がきわめて小さいが、丁寧な整形である。44は口縁部がくの字状を呈する甕で、外面にカマド構築材が付着する。覆土内の出土である。45は酸化焙焼成のタタキを施した甕である。

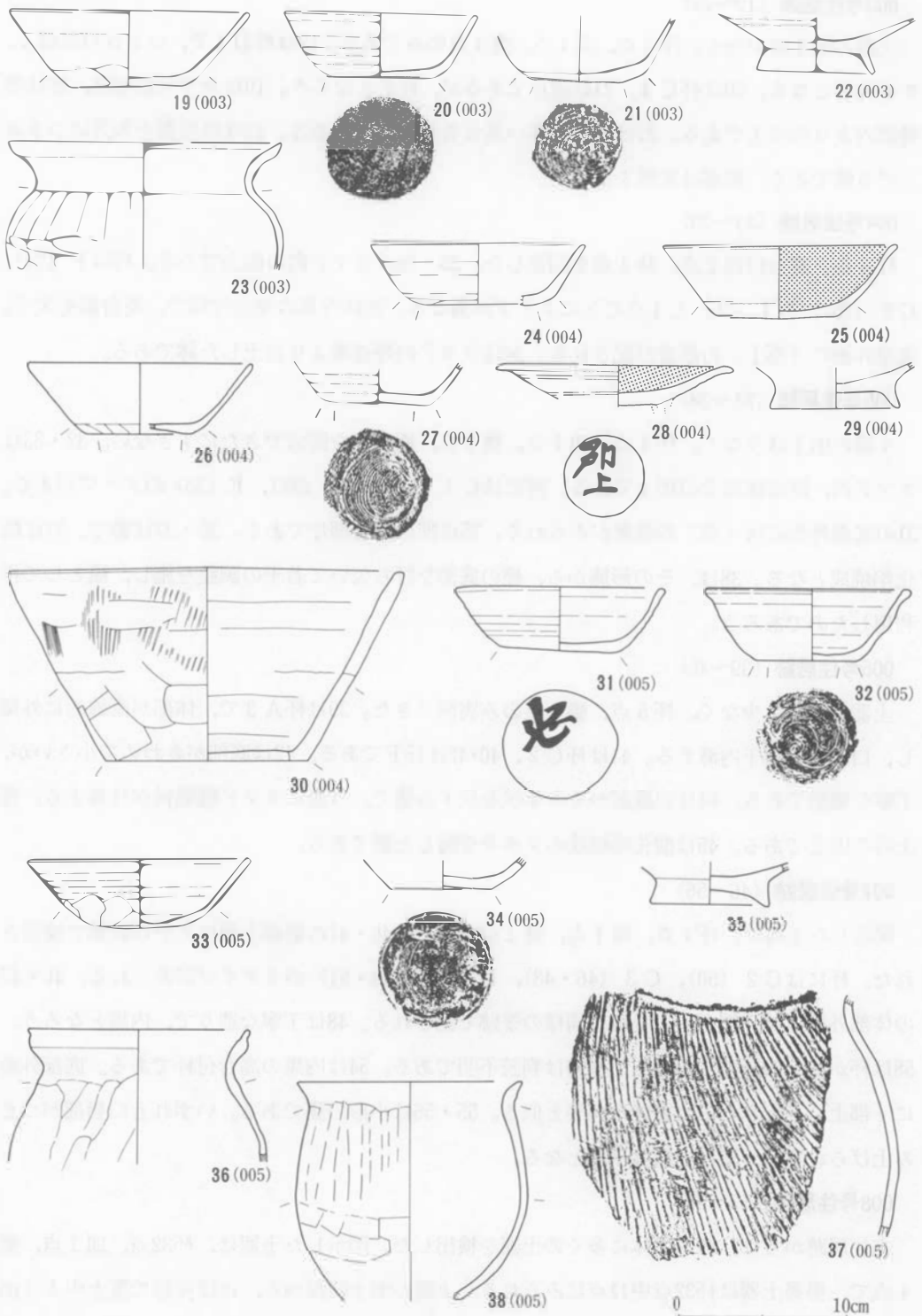
007号住居跡 (46～56)

図示した土器は、杯7点、皿1点、甕2点である。46・47の墨書土器は入子の状態で検出された。杯にはC2(50)、C3(46・48)、D2(47・49・51)の3タイプがみられる。46・47の体部外面には「郡上」の墨書が同様の筆跡で記される。48は丁寧な造りで、内黒となろう。58は杯か皿の口縁部片である。墨書は判読不明である。54は内黒の高台付杯である。底部外面に「郡上」と記される。書体は46等と似る。55・56は小形の甕である。いずれも口唇部がつまみ上げられるが、55の上端は平坦となる。

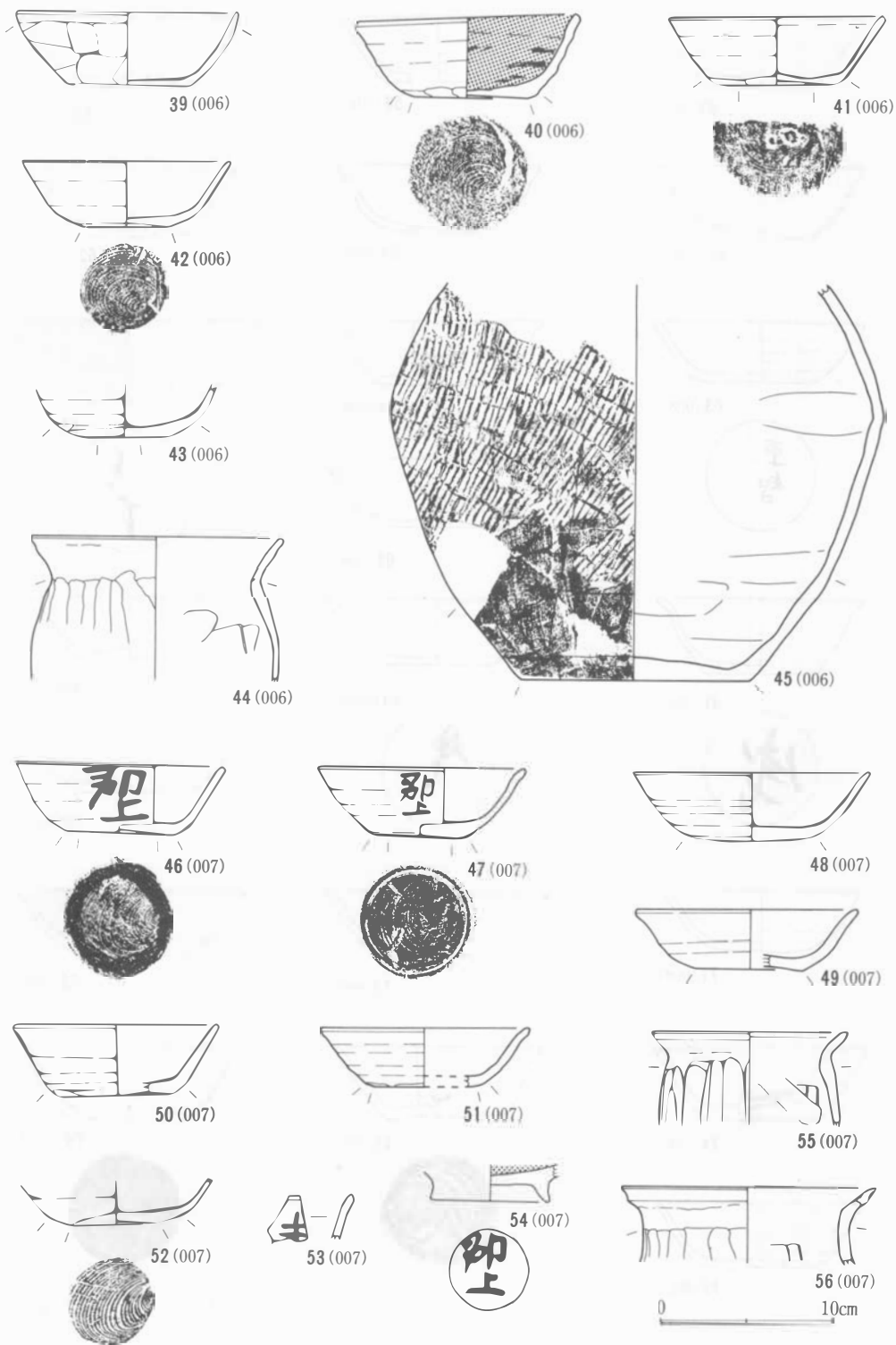
008号住居跡 (57～93)

本住居跡からは、杯を主体に多くの土器を検出した。図示した土器は、杯32点、皿1点、甕4点で、墨書土器は杯32点中11点にみられる。土器の出土状況から、ほぼ完形で覆土中より出土していることが窺える。また、遺存するカマド左袖上面より、87の皿の上に75の杯、その上に63の杯が正位で重ねられていた。きわめて注目される状況である。杯のタイプにはバラエテ

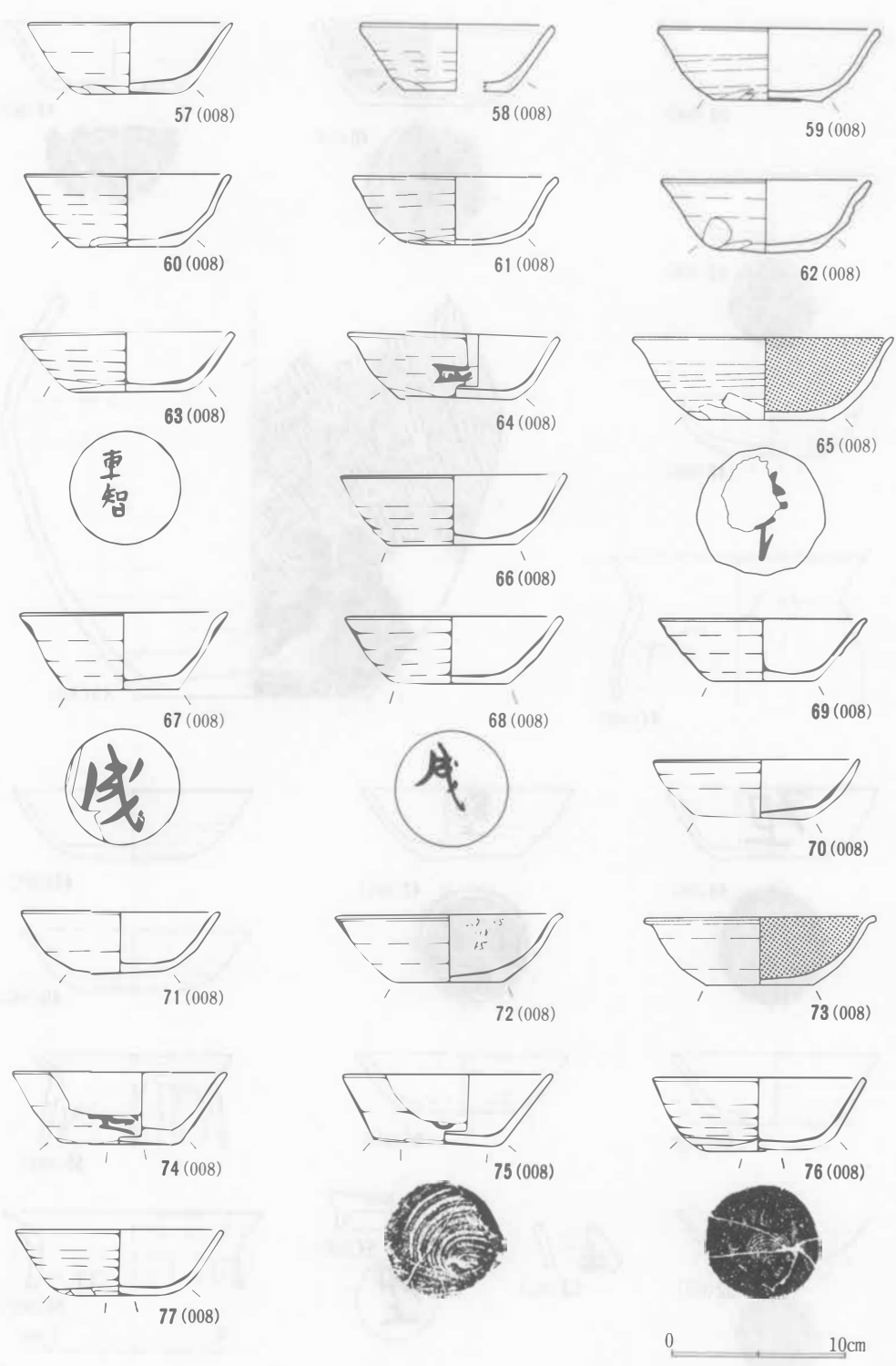
中山遺跡 (No.30)



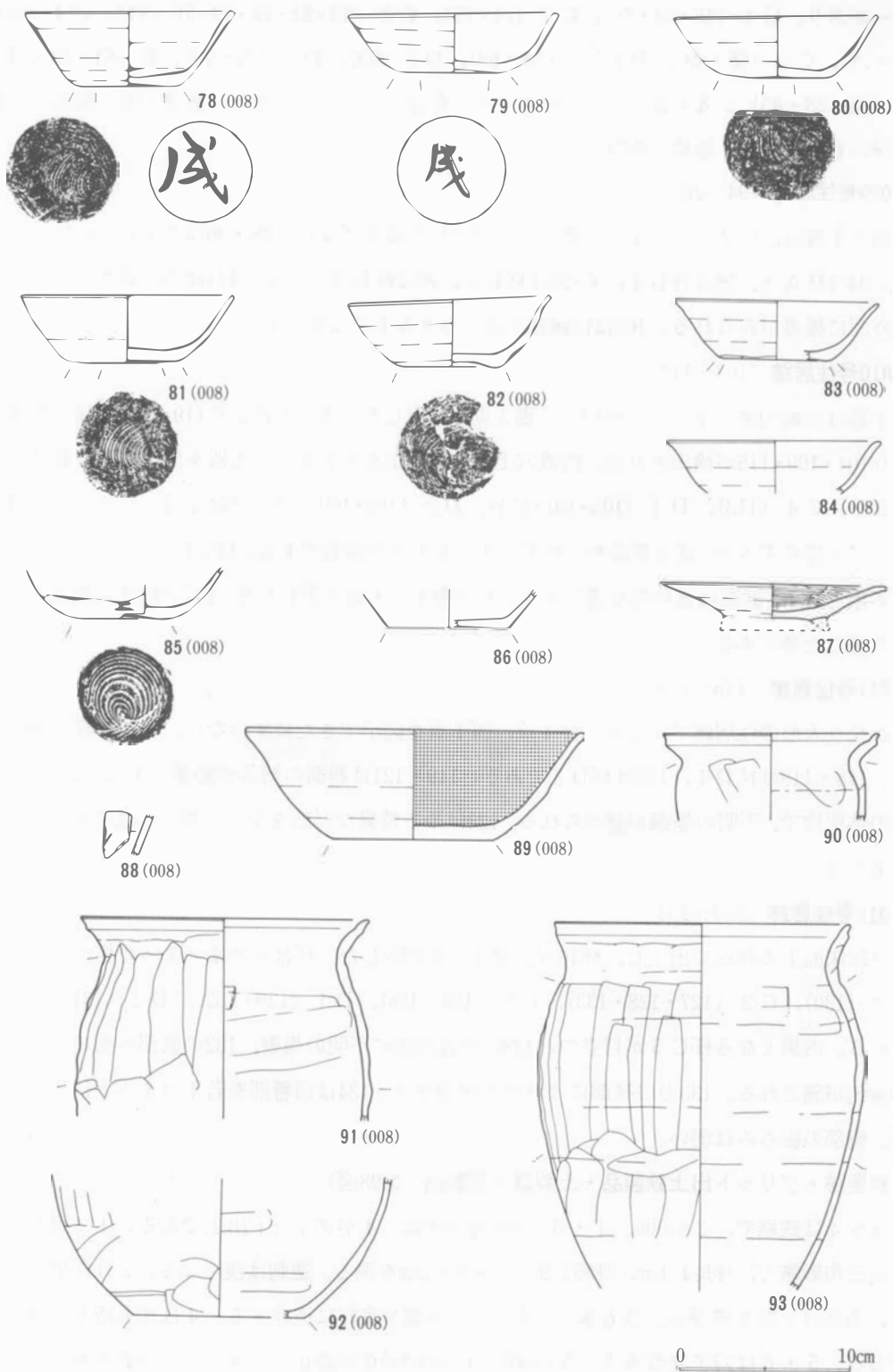
第92図 住居跡出土土器(2)



第93図 住居跡出土土器(3)



第94図 住居跡出土土器(4)



第95図 住居跡出土土器(5)

中山遺跡 (No.30)

ィーがあり、C 1 (66・68・70)、C 2 (74・75)、C 3 (63・64・76・77・79～81)、C 4 (60・67・78)、C 5 (65・89)、D 1 (57・58・69)、D 2 (59)、D 3 (72・73)、E (61・62・71)、F (82・83・85)とA・Bタイプを除きすべて存在する。この状況は、墨書土器と関連して興味深いものであり、後章で検討する。

009号住居跡 (94～102)

出土土器は、杯7点、皿1点、甕1点を図示したにすぎない。98・99はカマド内の出土である。94は杯A 3、96は杯D 1、97・98は杯D 2、99は杯D 3となる。101は皿の高台部片で、底部外面に墨書がみられる。102は口縁部を強くつまみ上げる甕である。

010号住居跡 (103～117)

土器は比較的多く出土し、杯12点、甕3点を図示した。カマド内より110・112・116、貯蔵穴より104・109・115が検出された。貯蔵穴上部の焼土上からも多くの土器を出土した。杯はC 3 (103)、C 4 (113)、D 1 (105・107・114)、D 2 (106・109)、E (104)、F (108・110～112)タイプが存在するが、底部無調整の杯Fが多くなる点特徴的である。116は胴部が直線的にすばまる甕である。底部は部分的な遺存より五孔を有するものと思われる。117は酸化焰焼成のタタキを施した甕である。

011号住居跡 (118～123)

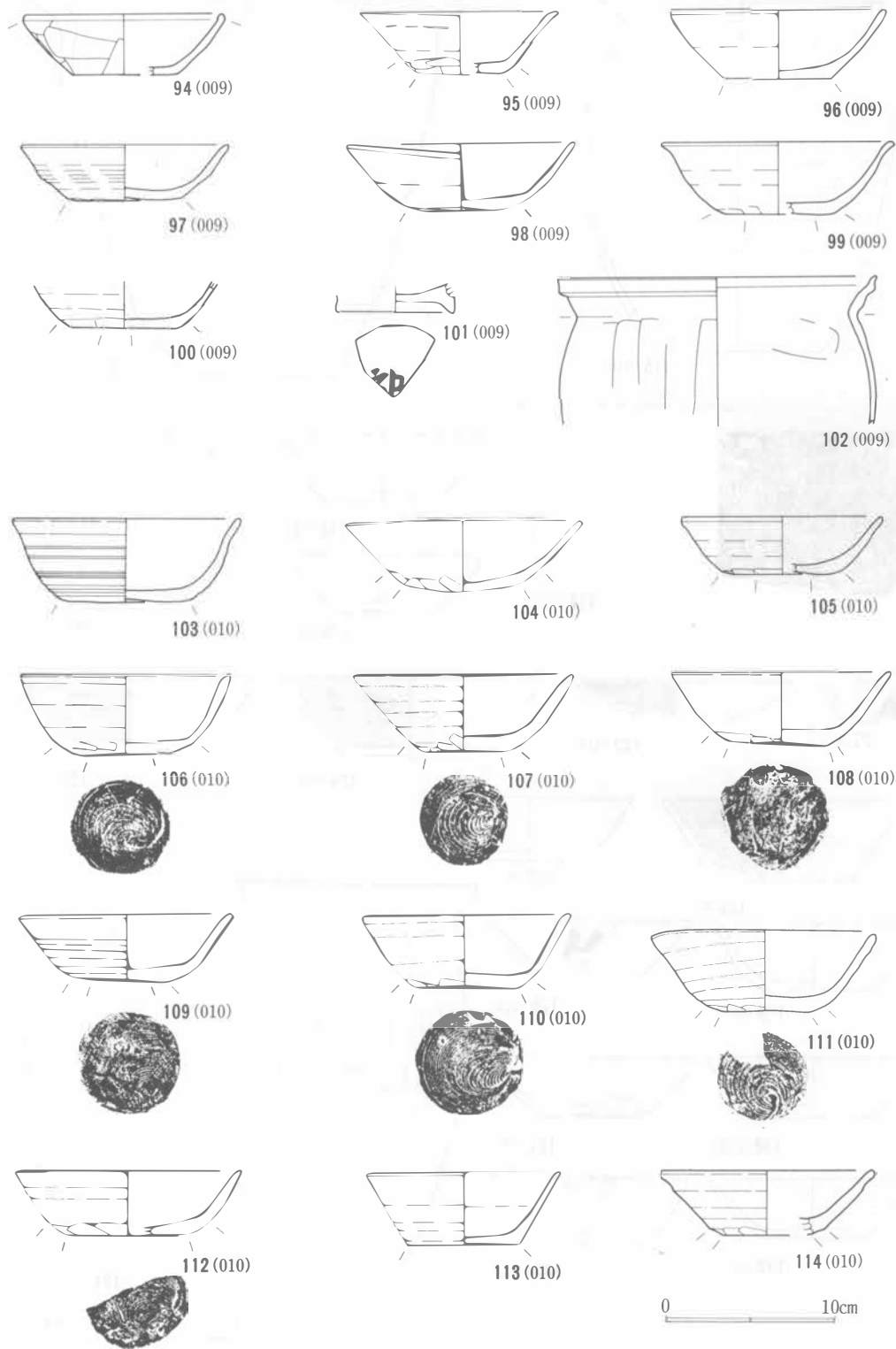
かなり大形の住居跡であるが、杯4点、皿1点を図示できたにすぎない。すべて覆土中である。118・119は杯D 1、120は杯D 2である。119・121は器面の剝落が顕著である。122は杯か皿の体部片で、不明の墨書が認められる。123はやや特異な形態を呈する皿で、高台が付くものであろう。

012号住居跡 (124～134)

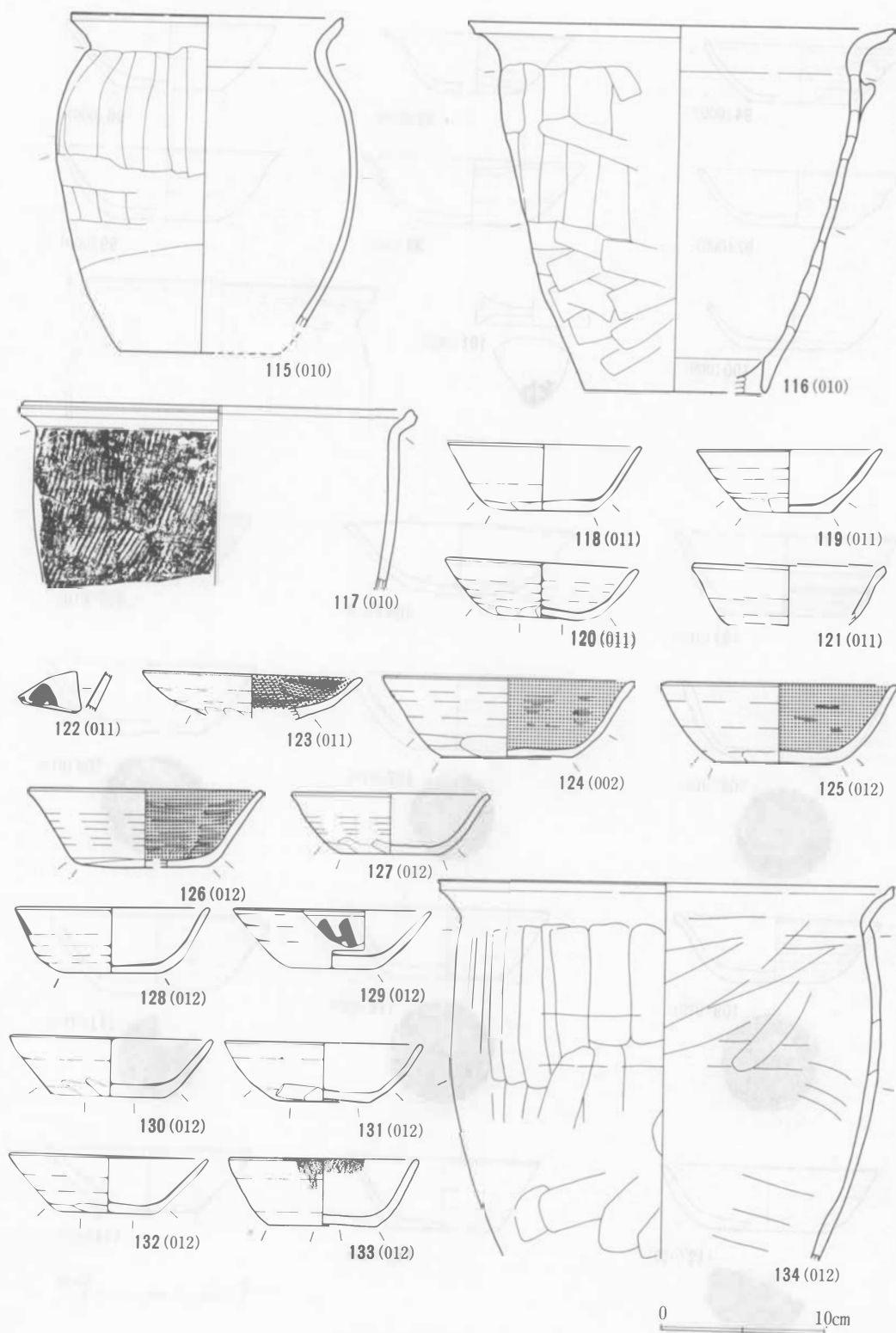
ほぼ床面上の状況で出土し、杯10点、甕1点を図示した。杯はややまとまった様相を呈し、C 2 (130)、C 3 (127・128・133)、C 5 (124～126)、D 1 (129・132)、D 2 (131)が認められる。内黒となる杯C 5が目立つ。129の体部外面に不明の墨書、132の底部外面には「+」の線刻が施される。133の口縁部には油煙が付着する。134は口唇部を若干つまみ上げる甕である。胴部の膨らみは弱い。

住居跡・グリット出土鉄製品・土製品・石製品 (第98図)

1～4は鉄鏃で、2が006、1・3が008号住居跡、4がグリット出土である。1は両丸造りの長三角形鏃で、身長4.1cm、身幅1.9cm、身厚0.2cmを測る。逆刺は浅くなる。2は扁平な茎片で、茎尻は丸味を帯びる。3も茎片であるが、木質が良好に遺存する。4は片丸造りの身部片である。5・6は刀子となろう。5が007、6が009号住居跡出土である。5は鋒部を欠く。現存長11.5cmを測る。関部は錆が激しく、形状は不明であるが、棟側に直角的な関を形成するも



第96図 住居跡出土土器(6)



第97図 住居跡出土土器(7)

中山遺跡住居跡出土土器観察表

挿図 番号	器 種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	杯	(12.6) 7.0 4.4	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ	R	小砂粒 長石粒	明褐色	良好	底部の一部に格子状 の庄痕あり
2	杯	13.2 4.8 4.3	2/6	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ 底部ヘラケズリ	不明	小砂粒多 長石粒、石英粒 酸化鉄粒	明褐色	良好	内黒 墨書不明
3	杯	14.6 6.3 4.5	6/6	体部内面ミガキ、外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	R	小砂粒多 長石粒	(外)暗褐色 (内)黒褐色	良好	内黒?
4	杯	(13.6) (5.6) 4.0	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ	R	小砂粒 長石粒 雲母粒	明褐色	良好	
5	杯	11.6 — 4.0	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒少	明褐色	良好	
6	高台付皿	14.6 7.0 2.2	3/6	体部内外面～底部ヨコナデ 底部貼り付け	不明	砂質 砂粒、小石多	(内)黒褐色 (外)暗赤褐色	普通	
7	甕	20.0 — —	1/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	明褐色	良好	
8	甕	22.0 — —	1/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面叩き目		小砂粒	黒褐色	良好	須恵器 酸化焰焼成
9	甕	26.6 — —	1/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面叩き目		小砂粒多 長石粒	明褐色	良好	
10	杯	(18.8) (8.6) 7.0	2/6	体部内面ミガキ、外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒少	明褐色	良好	内面剥落顕著
11	杯	(11.6) (5.5) 4.8	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	小砂粒 雲母粒	明褐色	良好	
12	杯	(12.2) 6.5 4.2	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後手持ちヘラケズ リ	R	小砂粒少 長石粒 石英粒	淡黄褐色	良好	
13	杯	(12.4) (6.6) 3.8	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラ ケズリ	不明	小砂粒多 長石粒	淡黄褐色	良好	
14	杯	— 4.7 —	1/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	砂粒少	赤褐色	良好	
15	鉢	(22.0) — —	1/6	体部内外面ヨコナデ 体部下半ヘラケズリ	不明	砂粒少	赤褐色	良好	
16	甕	20.9 — —	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面指オサエ 胴部外面叩き目		小砂粒	赤褐色	良好	須恵器 酸化焰焼成
17	甕	(13.3) — —	2/6	胴部内面指ナデ 胴部外面叩き目、下端ヘラケズリ		小砂粒 長石粒 雲母粒	褐色	良好	須恵器 酸化焰焼成
18	小形甕	— 5.9 —	3/6	胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ 底部ヘラケズリ		小砂粒多	赤褐色	良好	
19	杯	14.1 6.7 4.7	5/6	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ 体部下端～底部ヘラケズリ	不明	小砂粒少	明褐色	普通	内外面とも剥落顕著
20	杯	11.5 6.4 3.9	5/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後手持ちヘラケズ リ	R	砂粒多 長石粒 石英粒	淡褐色	良好	
21	杯	— 5.2 —	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	不明	小砂粒多	淡褐色	良好	内外面とも剥落顕著

中山遺跡 (No.30)

挿図 番号	器 種	法量(cm) □・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
22	高台付皿	7.0	5/6	体部内面ミガキ 体部外面～高台ヨコナデ 底部回転糸切り後回転ヘラケズリ	R	砂粒少	明褐色	良好	
23	小型甕	16.0	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒多 長石粒 雲母粒	赤褐色	普通	
24	杯	(12.9) (7.0) 3.7	1/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	不明	小砂粒	明褐色	良好	
25	杯	13.9 7.2 4.2	5/6	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒、小石多 長石粒、石英粒 酸化鉄粒	暗褐色	良好	内黒
26	杯	(13.3) 6.1 4.2	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒多 長石粒 雲母粒	淡褐色	良好	内面に炭化物付着
27	杯	6.6	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラ ケズリ	R	小砂粒多 長石粒	淡褐色	良好	
28	高台付皿	13.7	3/6	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ 底部ヘラケズリ	R	砂粒多 長石粒 雲母粒	明褐色	良好	墨書「郡上」 内黒 高台貼り付け
29	高台付皿	7.8	2/6	体部内面ミガキ 体部外面～高台ヨコナデ 底部回転糸切り後回転ヘラケズリ	不明	小砂粒少	明褐色	良好	
30	鉢	(23.5) 12.0 11.4	3/6	体部内外面ナデ 体部外面上半叩き目後、下半ヘラ ケズリ	不明	大砂粒多	(内)明褐色 (外)赤褐色	良好	
31	杯	12.4 7.0 3.8	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ	R	小砂粒 長石粒	明褐色	良好	墨書「忠」 被熱による剝離
32	杯	12.3 6.1 4.2	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラ ケズリ	R	小砂粒 長石粒	明褐色	良好	
33	杯	13.0 5.6 4.2	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ	L	小砂粒多 長石粒多	暗褐色	良好	
34	杯	6.0	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	小砂粒	明褐色	良好	
35	高台付皿	6.8	2/6	体部～高台ヨコナデ 底部回転糸切り後ナデ	不明	小砂粒	明褐色	良好	
36	甕	(12.8)	1/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒	明褐色	良好	外面にカマド部材付 着
37	甕		1/6	胴部内面ナデ 胴部外面叩き目		砂粒 石英粒、長石粒	赤褐色	良好	
38	甕	13.2 6.6 12.8	4/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒 石英粒、長石粒	暗褐色	良好	甕の底部を打ち欠い て使用
39	杯	12.4 7.3 4.4	6/6	口縁部～体部内面ヨコナデ 体部外面～底部手持ちヘラケズリ		小砂粒多 長石英 石英粒	明褐色	良好	
40	杯	13.4 6.8 5.0	6/6	体部内面ミガキ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	小砂粒多 長石粒 石英粒	明褐色	良好	内黒
41	杯	12.3 7.0 4.0	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒多 石英粒	明褐色	良好	
42	杯	12.2 5.2 3.9	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	砂粒	(内)明褐色 (外)暗褐色	良好	

挿図 番号	器 種	法量 (cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
43	杯	5.3	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	R	小砂粒多	暗褐色	良好	
44	甕	(14.7)	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒多	明褐色	良好	外面にスス及びカマド部材付着
45	甕	(13.4)	2/6	胴部内面ナデ 胴部外面叩き目後ナデ、下端ヘラケズリ		砂粒、小石多 長石粒	暗褐色	良好	
46	杯	12.3 6.3 4.0	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	明褐色	良好	墨書「郡上」
47	杯	12.3 5.5 4.0	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切後周縁手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	明褐色	良好	墨書「郡上」
48	杯	(14.0) 7.6 4.0	2/6	体部内外面ヨコナデ 店部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多 長石、石英粒	(内)黒褐色 (外)暗褐色	良好	内黒
49	杯	13.1 6.3 3.5	5/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多 長石、石英、酸化鉄粒	暗褐色	良好	内面剥落顕著
50	杯	12.2 6.8 4.1	5/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	R	砂粒多 長石粒	暗赤褐色	良好	
51	杯	(12.4) (6.1) 3.4	1/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒 石英粒	明褐色	良好	
52	杯	5.2	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	小砂粒	明褐色	良好	内面に墨痕
53	杯	— — —	1/6	ヨコナデ	不明	砂粒	明褐色	良好	墨書不明
54	高台付皿	6.8	2/6	体部内面ミガキ 底部手持ちヘラケズリ 高台部ヨコナデ	不明	小砂粒多	明褐色	良好	墨書「郡上」 内黒
55	小形甕	(11.3)	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒多 長石粒	褐色	良好	スス付着
56	小形甕	(14.8)	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒多 長石粒 石英粒	(内)暗褐色 (外)明褐色	良好	
57	杯	(11.9) (5.9) 4.2	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	不明	砂粒少	(内)暗褐色 (外)明褐色	良好	スス付着
58	杯	(11.5) (6.2) 3.9	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒多	(内)暗褐色 (外)明褐色	良好	器面荒廃
59	杯	13.1 6.4 4.2	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒少 酸化鉄粒	明褐色	良好	
60	杯	(12.0) (5.8) 4.2	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	不明	砂粒少 酸化鉄粒	明褐色	良好	器外面黒変
61	杯	12.1 6.3 4.0	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒 長石粒	明褐色	良好	
62	杯	12.2 5.9 4.3	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多 長石粒、石英粒 雲母粒	明褐色	良好	外面スス付着
63	杯	12.3 6.6 3.5	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	L	小砂粒	明褐色	良好	墨書「車智」

中山遺跡 (No.30)

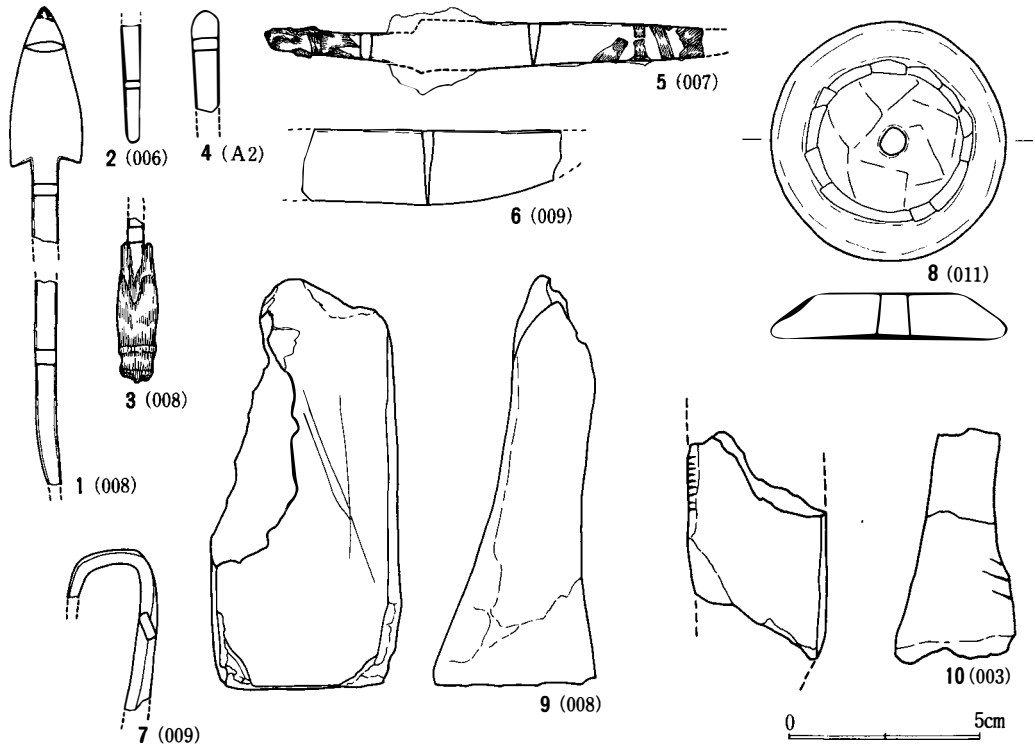
挿図 番号	器 種	法量 (cm) □・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
64	杯	12.5 6.6 3.7	4/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒	明褐色	良好	墨書「成」 底部黒斑
65	杯	15.1 7.4 4.7	4/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多 長石粒 石英粒	明褐色	良好	墨書「成」 内黒
66	杯	13.3 7.7 4.0	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	中砂粒多 長石粒多 石英粒	暗赤褐色	良好	器外面荒廃
67	杯	12.0 6.5 4.4	4/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	L	小砂粒多 長石粒 石英粒	(内)明褐色 (外)赤褐色	良好	墨書「成」
68	杯	12.5 6.5 3.9	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒 長石粒多	暗褐色	良好	墨書「成」 口縁部内外面に油煙 附着
69	杯	(12.0) (6.0) 4.0	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	L	小砂粒少	明褐色	良好	
70	杯	12.0 6.8 3.5	5/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒 長石粒 酸化鉄粒	明褐色	良好	
71	杯	11.7 5.9 3.4	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒多 石英粒多 長石粒	(内)明褐色 (外)暗褐色	良好	外面全体にスス附着
72	杯	(13.4) (6.4) 3.9	2/6	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	不明	やや軟質 小石少	明赤褐色	良好	
73	杯	(13.5) (6.3) 3.8	2/6	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒少	明褐色	良好	内黒
74	杯	12.4 6.4 4.2	4/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多 長石粒 石英粒	明褐色	良好	墨書「成」 底部黒変
75	杯	12.1 6.9 4.2	5/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	L	砂粒 長石粒	暗灰色	良好	墨書不明 一部還元焼成
76	杯	12.2 6.9 4.2	4/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	L	小砂粒 長石粒	暗褐色	良好	スス附着
77	杯	(12.1) (6.2) 3.8	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒少	明褐色	良好	
78	杯	(12.3) 6.1 4.5	4/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	L	小砂粒少	明褐色	良好	墨書「成」
79	杯	12.3 6.6 3.6	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少 長石粒 酸化鉄粒	明褐色	良好	墨書「成」
80	杯	12.0 6.7 3.6	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多 長石粒 石英粒	明褐色	良好	器面の剝落顕著
81	杯	12.4 6.1 3.8	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	明褐色	良好	
82	杯	11.9 6.1 4.1	4/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	R	砂粒多 酸化鉄粒多	暗赤褐色	良好	
83	杯	(12.0) (5.9) 3.4	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	小砂粒、石英粒 酸化鉄粒	赤褐色	良好	
84	杯	(12.6) — —	1/6	体部内外面ヨコナデ	不明	小砂粒少	明褐色	良好	

挿図 番号	器 種	法量 (cm) □・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
85	杯	5.6	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	R	小砂粒 長石粒 酸化鉄粒	明褐色	良好	墨書不明
86	杯	(7.2)	1/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	不明	砂粒	暗褐色	良好	
87	高台付皿	13.2	4/6	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ 底部ヘラケズリ	L	小砂粒少	(内)暗褐色 (外)明褐色	良好	高台貼り付け
88	杯	—	1/6	ヨコナデ	不明		明褐色	良好	墨書不明
89	杯	19.9 9.4 6.4	5/6	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	不明	砂粒少	暗褐色	良好	内黒
90	小形甕	(12.7)	1/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ		小砂粒多	褐色	良好	
91	甕	17.0	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		やや軟質 小砂粒	褐色	良好	内面剝落顕著
92	甕	10.0	3/6	胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒多	褐色	良好	
93	甕	14.7	5/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒	明褐色	良好	
94	杯	12.0 (6.2) 3.6	3/6	口縁部～体部内面ヨコナデ 体部外面～底部手持ちヘラケズリ		砂粒多 長石粒多 石英粒	褐色	良好	
95	杯	(11.2) (6.8) 3.6	1/6	体部内面～体部外面上半ヨコナデ 体部外面下半～底部手持ちヘラケ ズリ	不明	小砂粒少	明褐色	良好	
96	杯	(12.9) 6.3 4.2	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	明褐色	良好	
97	杯	(12.4) 6.8 3.4	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多	明褐色	良好	
98	杯	(13.7) 6.7 4.0	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	不明	砂粒多 長石粒	(内)褐色 (外)明褐色	良好	歪みが激しい。
99	杯	13.9 (6.4) 4.3	4/6	体部内面ミガキ、外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラ ケズリ	不明	砂粒多 長石粒多	暗褐色	良好	
100	杯	6.2	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	R	小砂粒多	暗褐色	良好	スス付着
101	高台付皿	(7.0)	1/6	体部内面ミガキ	不明	小砂粒少	明褐色	良好	墨書「部」か 内黒
102	甕	(19.1)	1/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部ヘラケズリ		小砂粒多 長石、石英粒 酸化鉄粒	(内)褐色 (外)明褐色	良好	
103	杯	(13.6) 7.5 5.0	3/6	体部外面ヨコナデ 体部内面粗いミガキ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒少 石英粒	暗褐色	良好	内黒
104	杯	13.8 7.0 4.3	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケ ズリ	不明	砂粒多 長石粒、石英粒 酸化鉄粒	赤褐色	良好	
105	杯	(12.0) (5.7) 3.4	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒	明褐色	良好	内面にスス付着

中山遺跡 (No.30)

挿図 番号	器 種	法量(cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
		口・底・高								
106	杯	12.2 5.3 4.7		5/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒少	明褐色	良好	
107	杯	12.9 5.2 4.6		5/6	体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	R	小砂粒少	明褐色	良好	内面荒廃
108	杯	12.8 5.8 4.2		5/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	不明	小砂粒少	明褐色	良好	口縁部歪み顕著
109	杯	12.3 5.6 3.8		4/6	体部内外面ヨコナデ 底部糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	R	小砂粒	明褐色	良好	内面荒廃
110	杯	12.2 6.0 4.2		4/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	砂粒多 長石粒	暗褐色	良好	
111	杯	13.3 5.2 4.8		6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	小砂粒 長石粒 酸化鉄粒	明褐色	良好	内面剝離顕著
112	杯	(13.0) 7.0 3.9		3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	砂粒多 雲母粒	明褐色	良好	
113	杯	(11.6) (6.7) 4.3		2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	やや砂質 小砂粒多	黄褐色	良好	
114	杯	(12.4) (5.2) 3.8		2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒多	明褐色	良好	
115	甕	16.6 — (20.8)		5/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後下半ナデ		砂粒、小石多 長石粒	茶褐色	良好	
116	甕	(26.0) 11.0 22.7		2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面粗いナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多 石英粒	茶褐色	良好	五孔
117	甕	(23.6) — —		1/6	口縁部～胴部内面ヨコナデ 胴部外面叩き目		小砂粒	明褐色	良好	
118	杯	(12.0) 6.0 4.0		2/6	体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒 長石粒	(内)明褐色 (外)褐色	良好	
119	杯	(11.4) (5.3) 3.8		2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒少 酸化鉄粒	(内)明褐色 (外)暗褐色	良好	器面剝落顕著
120	杯	(12.0) 5.7 3.4		2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	R	小砂粒多 長石粒 石英粒	明褐色	良好	底部外面に墨痕あり
121	杯	11.9 — —		3/6	体部内外面ヨコナデ	R	砂粒	黒褐色	良好	器面の剝落顕著
122	杯	— — —		1/6	ヨコナデ	不明	小砂粒	明褐色	良好	墨書不明 内黒
123	皿	(13.5) — 2.6		2/6	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ、下端手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒少	暗褐色	良好	墨書不明 内黒
124	杯	15.5 8.1 4.8		3/6	体部内面ミガキ、外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒 長石粒 石英粒	明褐色	良好	内黒
125	杯	14.4 7.7 4.8		5/6	体部内面ミガキ、外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	不明	砂質 小砂粒	明褐色	良好	内黒 器面剝落顕著
126	杯	(14.3) (8.1) 4.8		2/6	体部内面ミガキ、外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒多 長石粒	黒褐色	良好	内黒

挿図 番号	器 種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
127	杯	12.3 6.2 3.7	$\frac{5}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒 酸化鉄粒	明褐色	良 好	
128	杯	11.9 6.1 3.9	$\frac{5}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒多 長石粒、雲母粒 酸化鉄粒	褐色	良 好	内面剝落顯著
129	杯	12.2 5.3 3.5	$\frac{3}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒 長石粒 石英粒	明褐色	良 好	墨書不明
130	杯	12.4 6.9 3.6	$\frac{3}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒少	明褐色	良 好	
131	杯	(12.2) 5.9 3.5	$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	不明	砂粒 長石粒	明褐色	良 好	
132	杯	(12.1) 6.0 3.4	$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	不明	砂粒少 長石粒	明褐色	良 好	底部外面に「十」の刻線
133	杯	(11.7) 6.7 4.0	$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒少	明褐色	良 好	口縁部に油煙付着
134	甕	(28.0) — —	$\frac{2}{6}$	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多 長石粒 石英粒	褐色	良 好	



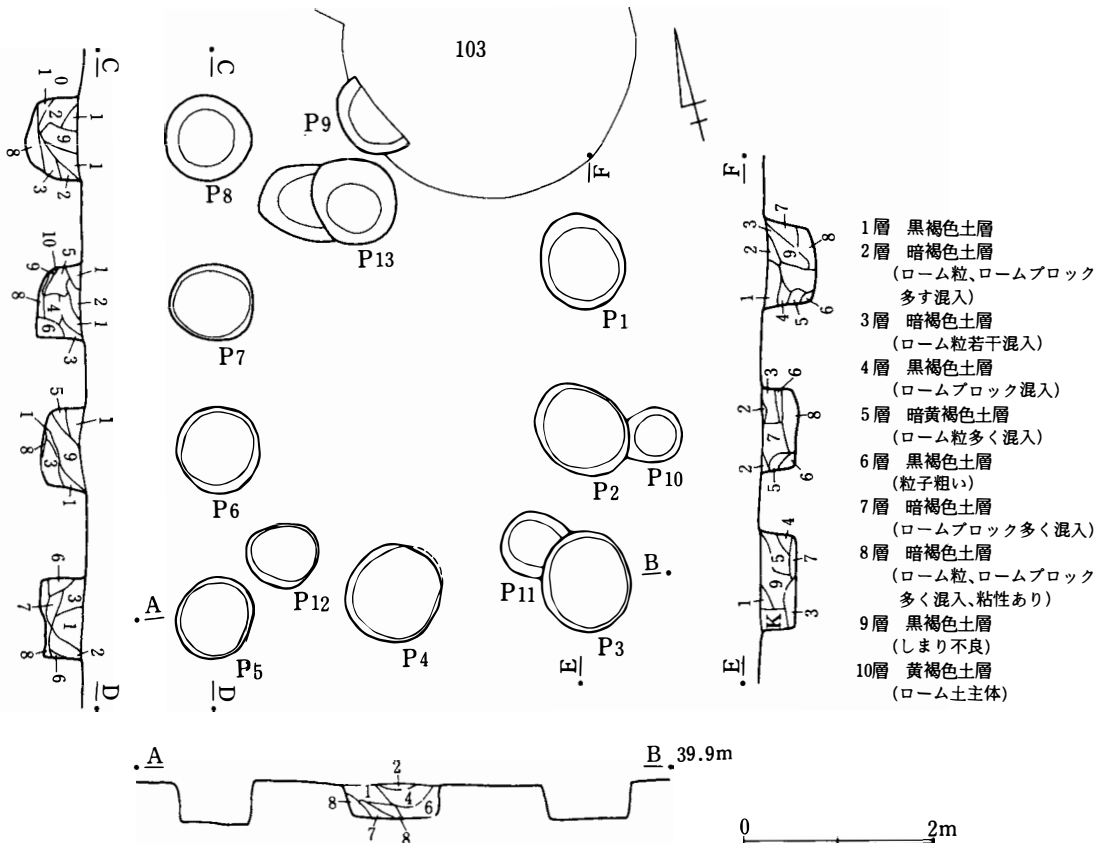
第98図 住居跡・グリット出土鉄製品・土製品・石製品

中山遺跡 (No30)

のと思われる。身はかなり細身となる。6は大きめの身部片である。7は009号住居跡より出土した鋸状の鉄製品である。断面は幅0.7cm, 厚さ0.3cmの長方形を呈する。8は011号住居跡出土の土製紡錘車である。扁平な台形状を呈し、上面がヘラケズリされる。底径6.2cm, 厚さ1.1cm, 重さ42gを測り、底面がやや上げ底となる。胎土は緻密で、長石・石英粒を若干含む。9は008, 10は003号住居跡より出土した砥石である。いずれも砂岩製である。9は表裏ともに使用痕が明瞭に認められる。10は両端を欠くが、側縁に数条の研磨痕が残る。

掘立柱建物跡 (第99図, 図版25)

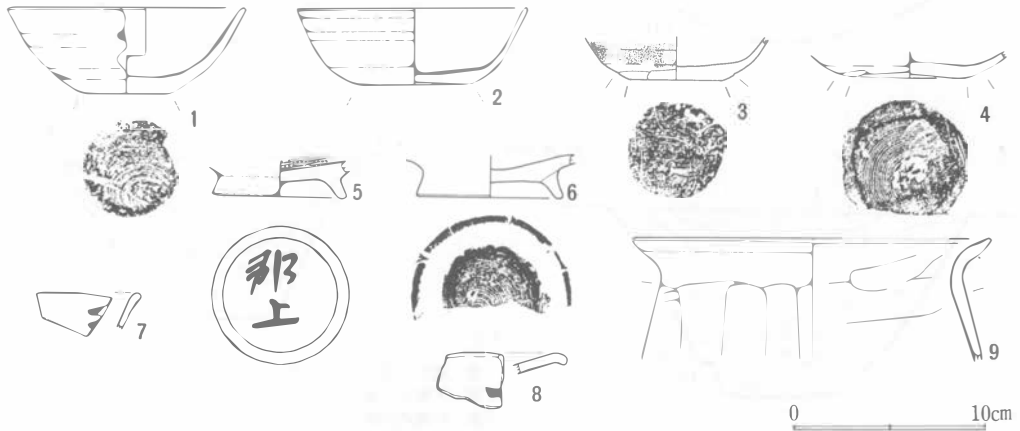
C3区に位置し, 103号土壌に切られる。建物の規模は3間×2間で, 大部分の住居跡と建物方向を同一にする。北東コーナーを103号土壌に切られるが, 桁行4.8m, 梁行3.8m前後を測る。掘り方は0.8~1.0mの円形を呈し, 深さは確認面より40~60cmである。埋土の底面上にはロームブロックを多く含む層があり, この上に柱を建てたものと考えられる。柱痕は確認できなかったが, 埋土の状況より引き抜かれたことが想定される。掘り方内より若干の土器が検出された。



第99図 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡出土土器 (第100図)

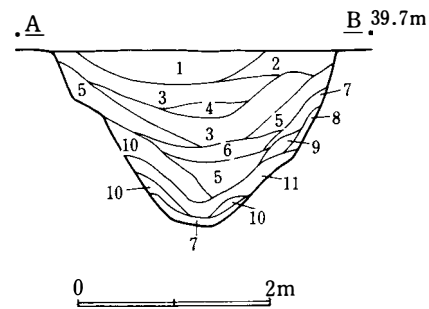
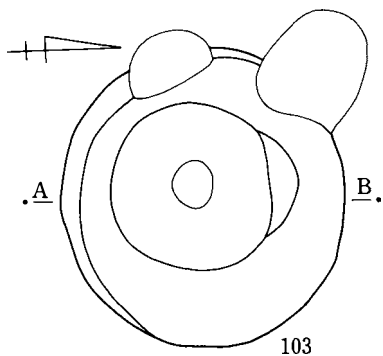
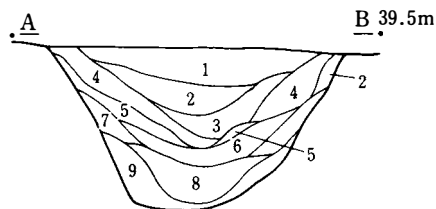
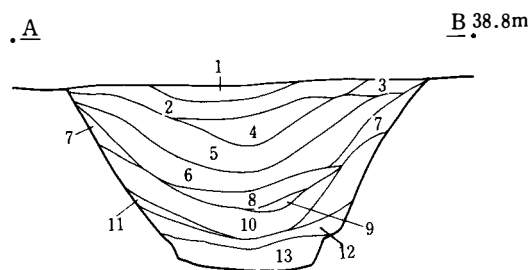
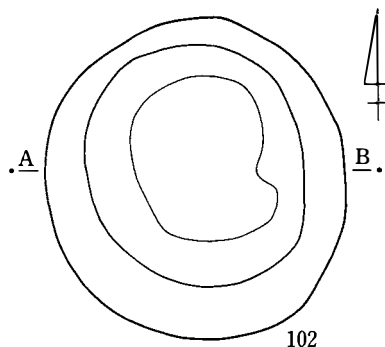
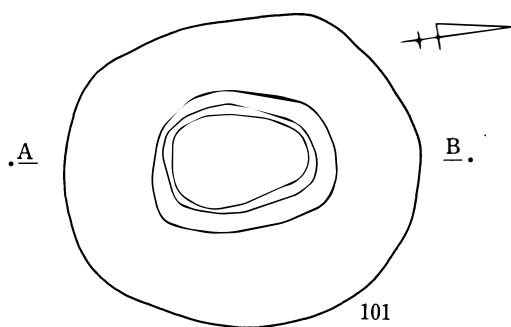
杯4点, 皿4点, 甕1点を図示した。出土位置は, P₃ (7~9), P₄ (4・6), P₁₁ (3), P₁₂ (1・2), P₁₄ (5) である。墨書は杯1点, 皿3点に記される。1は底部無調整の杯F。2は杯C 3となる。3の体部外面には油煙が付着する。5~8は杯か皿片で, 5の底部外面には「郡上」の墨書がみられる。9は口唇部を外方につまみ上げる甕である。



第100図 掘立柱建物跡出土土器

中山遺跡掘立柱建物跡出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	杯	12.5 4.8 4.5	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	R	砂粒少 長石粒	(内)明褐色 (外)褐色	良好	墨書不明 スス付着
2	杯	12.2 6.1 3.9	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後全面手持ちヘラ ケズリ	R	砂粒 石英粒	明褐色	良好	
3	杯	5.0	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端~底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	砂粒少	明褐色	良好	体部外面に油煙付着
4	杯	(6.1)	1/6	体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	不明	砂粒少	明褐色	良好	
5	高台付皿	7.1	2/6	体部内面ミガキ	不明	砂粒少	明褐色	良好	墨書「郡上」 内黒
6	高台付皿	7.8	1/6	底部回転糸切り	不明	砂粒少	明褐色	良好	
7	杯	—	1/6	—	不明	—	—	—	墨書不明
8	皿	—	1/6	—	不明	—	—	—	墨書不明
9	甕	(18.8)	1/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ	不明	砂粒多 長石粒	暗褐色	良好	



101

- 1層 褐色土層(ローム粒多く混入)
- 2層 黒褐色土層
- 3層 暗褐色土層
- 4層 黄褐色土層(ローム粒多く混入)
- 5層 黒褐色土層(ローム粒若干混入)
- 6層 暗褐色土層(ローム粒多く混入)
- 7層 暗黄褐色土層(ローム粒多く混入)
- 8層 暗黄褐色土層(ロームブロック多く混入)
- 9層 黄褐色土層(ローム粒、ロームブロック多く混入)
- 10層 暗黄褐色土層(ローム粒、ロームブロック多く混入)
- 11層 黄褐色土層(ローム土層)
- 12層 暗黄褐色土層(ロームブロック若干混入)
- 13層 黄褐色土層(ローム粒、ロームブロック多く混入、粘性あり)

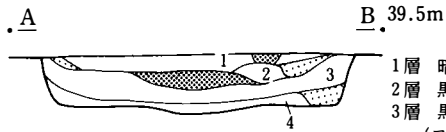
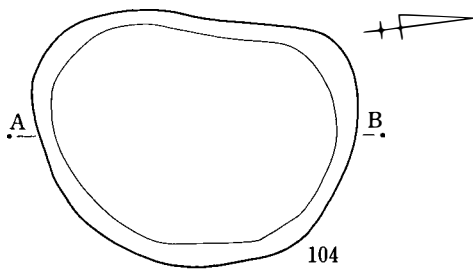
102

- 1層 褐色土層
- 2層 黒褐色土層
- 3層 暗黄褐色土層(ローム粒主体)
- 4層 黒褐色土層(ローム粒多く混入)
- 5層 黄褐色土層(ローム粒多く混入)
- 6層 暗黄褐色土層(ロームブロック多く混入)
- 7層 褐色土層(ローム粒、ロームブロック多く混入)
- 8層 暗褐色土層(ロームブロック多く混入)
- 9層 暗褐色土層(ローム粒、ロームブロック多く混入、粒子粗い)

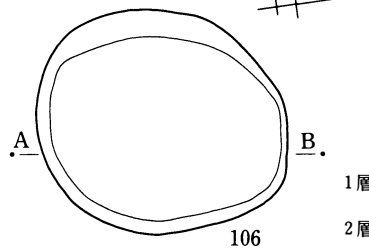
103

- 1層 褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 暗褐色土層(ローム粒若干混入)
- 4層 褐色土層(ローム粒多く混入)
- 5層 暗黄褐色土層(ローム粒多く混入)
- 6層 明褐色土層(ローム粒多く混入、粘性あり)
- 7層 褐色土層(ローム粒主体)
- 8層 黄褐色土層(ローム粒、ロームブロック主体)
- 9層 褐色土層(ローム粒、ロームブロック多く混入)
- 10層 黒褐色土層(ローム粒、ロームブロック若干混入)
- 11層 黄褐色土層(大ロームブロック主体)

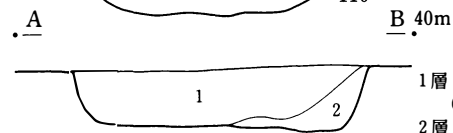
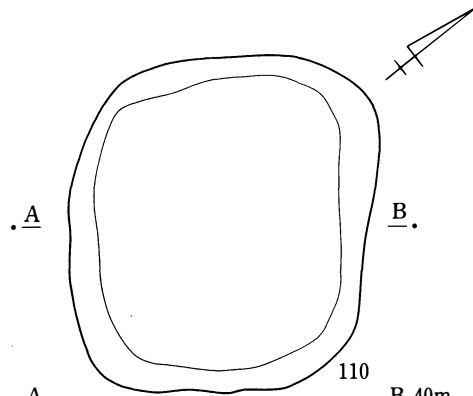
第101図 101~103号土坑



- 1層 暗褐色土層
- 2層 黒褐色土層
- 3層 黒褐色土層
(ローム粒混入)
- 4層 黄褐色土層
(ローム粒主体)

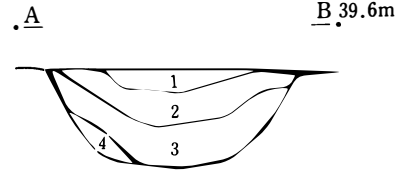
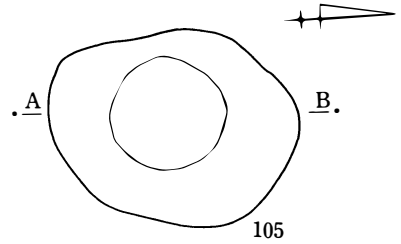


- 1層 暗黄褐色土層
(ローム粒主体)
- 2層 黒褐色土層
(焼土粒、炭化粒混入)

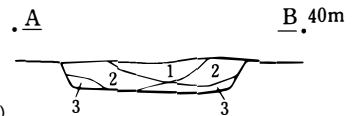
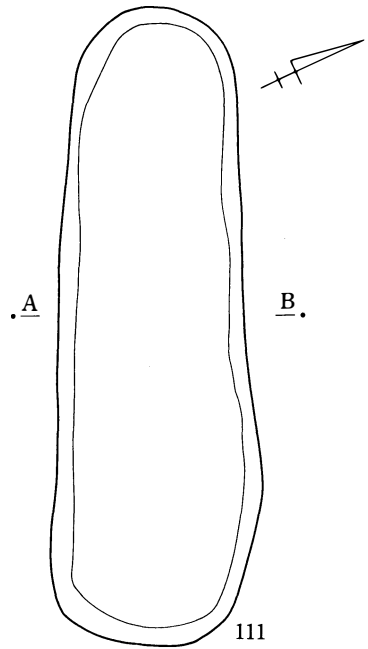


- 1層 黒色土層
(ロームブロック多く混入)
- 2層 暗黄褐色土層
(ローム粒主体)

0 1m



- 1層 黒褐色土層
(焼土粒、山砂混入)
- 2層 黒褐色土層
- 3層 暗黄褐色土層
(ローム粒、ロームブロック多く混入)
- 4層 黄褐色土層
(ローム粒主体)

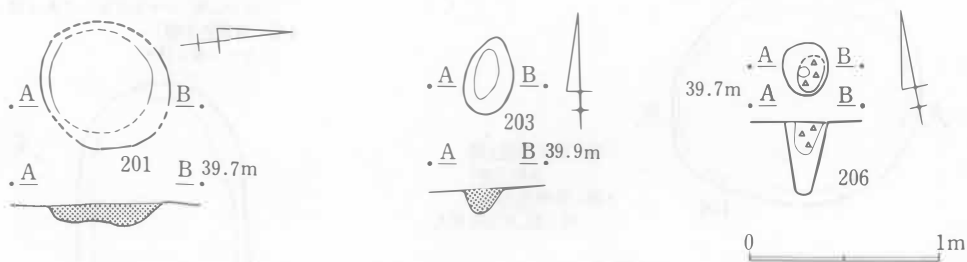


- 1層 褐色土層
- 2層 黒褐色土層
- 3層 黄褐色土層
(ローム粒主体)

第102図 104~106・110・111号土壌

土壌 (第101～103図, 図版26)

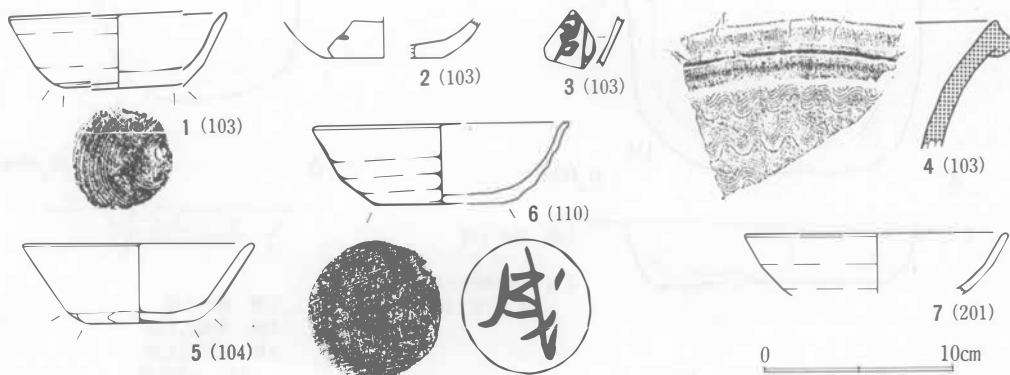
本遺跡からは、11基の土壌を検出した。101～103号土壌は径3～4mを測り、101が楕円形、102・103が円形プランを呈する。103号土壌は掘立柱建物跡を切っているが、それぞれの位置からみると住居跡に付随して配置されているようである。覆土中にローム粒・ロームブロックを多く含むことより、これらの土壌は埋め戻された可能性が強い。機能としては井戸のようなものが考えられる。104～106・110・111号土壌は性格不明で、形状は不定である。104号土壌の覆土中には焼土・山砂の堆積が認められる。110号土壌は方形を呈し、覆土は埋め戻される。墨書土器が覆土上面より正位で出土した。201・203号土壌は焼土を充填したものである。206号土壌は覆土上層に貝を含む。



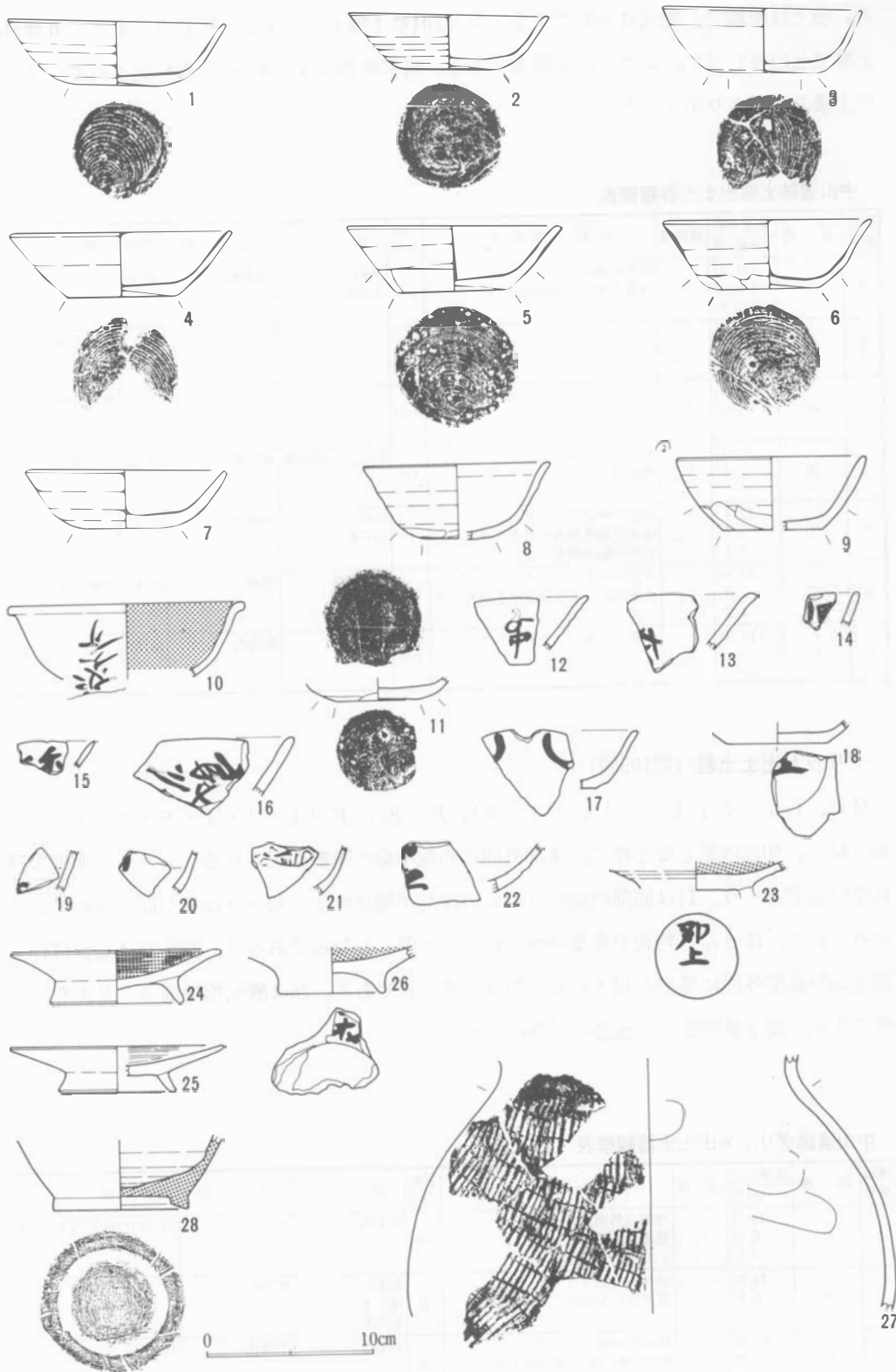
第103図 201・203・206号土壌

土壌出土土器 (第104図)

1～4は103号土壌覆土中出土である。1は杯Fで、器肉は全体に厚い。2・3は墨書土器で、3は小片であるが、「郡」と判読できる。4は須恵器の甕で、6本1単位の波状楕円描文が施され



第104図 土壌出土土器



第105図 グリット出土土器

中山遺跡 (No.30)

る。胎土は堅緻で、焼成は良好である。5は104号土壌より出土した杯D1である。6は110号土壌出土の杯C3で、ロクロ目が顕著である。底部外面には「成」の墨書が記される。7は201号土壌の上面より出土した。

中山遺跡土壌出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	杯	(11.5) (5.8) 3.8	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	不明	砂粒 長石粒	明褐色	良好	
2	杯	(4.4)	1/6		不明				墨書不明
3	杯	— — —	1/6		不明				黒書「郡」
4	甕	— — —	1/6	折り返し口縁 櫛波状文	不明	長石、石英粒多	青灰色	良好	須恵器
5	杯	12.4 5.7 4.1	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	L	砂粒 長石粒	明褐色	良好	
6	杯	13.8 7.0 4.2	5/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多 長石粒 石英粒	明褐色	良好	墨書「成」
7	杯	(14.0) — —	1/6	体部内外面ヨコナデ	不明	砂粒	明褐色	良好	

グリット出土土器 (第105図)

杯は、C1(7)、C3(3)、D1(5)、E(8)、F(1・2・4・6・9)タイプが認められる。10は内黒となる杯で、体部外面に判読不能な墨書が記される。おそらく倒位で書かれているであろう。11は底部内面に「井」の線刻が施される。12～21は杯か皿の小片で、墨書がみられる。ほとんど判読できないが、12は「子中」となるであろう。22～25は高台付杯で、22と25の底部外面に墨書が記される。22は「郡上」である。26は酸化焰焼成のタキを施した甕である。27は長頸瓶で、底部のみ遺存する。

中山遺跡グリット出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	杯	(13.1) (6.1) 3.8	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	砂粒少	明褐色	良好	口縁部内面に油煙付着
2	杯	11.8 6.8 3.4	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	R	砂粒 長石粒 石英粒	明褐色	良好	
3	杯	12.0 6.2 3.9	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	R	砂粒少	明褐色	良好	

挿図 番号	器 種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
4	杯	(13.3) (6.5) 3.8	$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	小砂粒	明褐色	良好	
5	杯	13.2 7.0 4.0	$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	砂粒 長石粒、石英粒 酸化鉄粒	明褐色	良好	
6	杯	12.7 6.2 4.1	$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端ヘラケズリ 底部回転糸切り	R	砂粒少 長石粒	明褐色	良好	
7	杯	12.2 6.2 3.5	$\frac{3}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	L	砂粒少	褐色	良好	底部外面「十」の線刻 (焼成後)
8	杯	(11.4) (4.4) 4.4	$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	不明	小砂粒	明褐色	良好	
9	杯	(11.4) (6.0) 4.3	$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	不明	少砂粒	明褐色	良好	
10	杯	(14.0) — —	$\frac{1}{6}$	体部内面ミガキ 体部外面ヨコナデ					墨書不明 内黒
11	杯	— 5.0 —	$\frac{1}{6}$	体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り			明褐色	良好	底部内面「井」の線刻
12	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書「子中」か
13	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書不明
14	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書不明
15	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書不明
16	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書不明
17	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書不明
18	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書「上」
19	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書不明
20	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書不明
21	杯	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書「郡上」カ
22	高台付皿	— — —	$\frac{1}{6}$						墨書「郡上」
23	高台付皿	(12.7) 8.0 3.0	$\frac{2}{6}$	体部内面ミガキ 体部外面～高台部ヨコナデ	不明	砂粒少	明褐色	良好	内黒
24	高台付皿	(13.0) (7.2) 2.7	$\frac{2}{6}$	体部内面ミガキ 体部外面～高台部ヨコナデ	不明	砂粒少 長石粒	(内)褐色 (外)明褐色	良好	
25	高台付皿	— 6.2 —	$\frac{1}{6}$		不明	小砂粒少			墨書不明

馬場遺跡 (No.31)

挿図 番号	器 種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
26	甕	— — —	2/6	胴部内面ナデ 胴部外面叩き目		砂粒 長石 石英粒	褐色	良好	
27	長頸瓶	— 8.2 —	2/6	胴部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	砂粒少	暗灰白色	良好	灰釉

2. 馬場遺跡

本遺跡は、中山遺跡と小支谷を隔てた比較的広い標高39m程の台地上に位置する。検出された遺構は、住居跡4軒と土壌4基である。比較的広い台地にもかかわらず住居跡が4軒しか形成されず、しかも東側及び南側に存する支谷を望む緩斜面に占地する特徴を有する。注目される墨書土器も検出されており、中山遺跡との関連が予想される。

住居跡

001号住居跡 (第106図, 図版35)

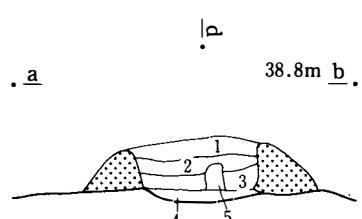
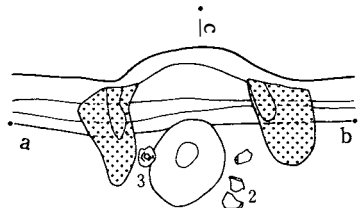
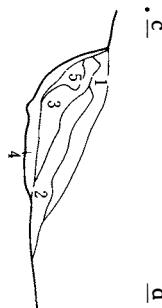
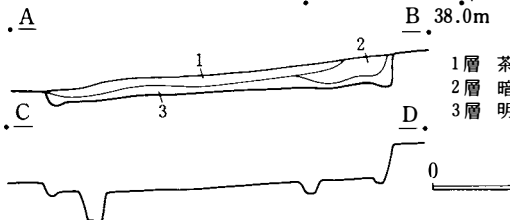
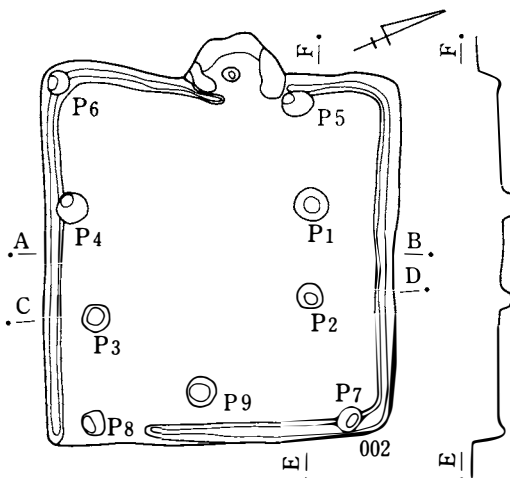
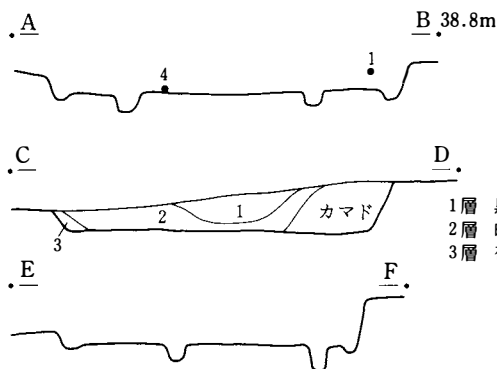
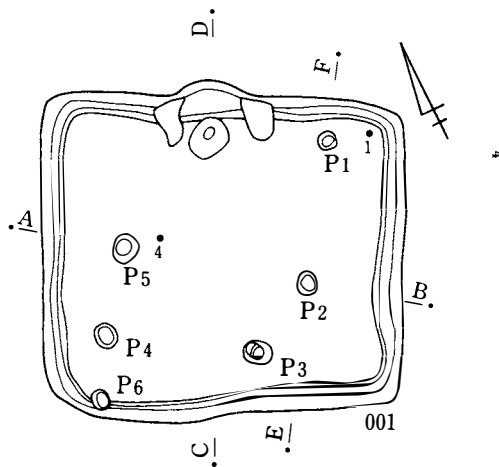
D3区, 調査区東端に位置する。規模は3.8×3.4mを測り、やや横長の方形を呈する。壁はやや斜位に立ち上がり、確認面より20~40cm掘り込まれる。周溝はカマド部分を含めて深さ5cmで全周する。床面は凹凸が顕著であるが、良好に踏み固められている。柱穴は不規則に6本設けられる。深さ13~32cmと一定でない。P₃は抜き取られたような掘り方を有する。カマドは北壁ほぼ中央部に位置する。壁への掘り込みは小さく、燃烧部も浅い。周溝を巡らした後にカマドを構築したようである。遺物の出土は少なく、床面上に杯と長頸瓶、カマド内に甕が2個体検出された。砥石再利用の紡錘車もみられる。

002号住居跡 (第106図, 図版36)

C3区, 001号住居跡の西側8m程に位置する。規模は3.9×3.7mを測り、ほぼ正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、斜面上に立地するため、確認面よりの深さは南東壁で10cm、北西壁で35cmを測る。床面は南東側に若干傾斜するが平坦である。柱穴間の中央部が良好に踏み固められている。柱穴は不規則であるが、壁に沿ってP₁~P₈の支柱穴とカマド対壁にP₉が配置される。斜面上に構築するためであろうか、南東壁側の柱穴が全体に深く掘り込まれている。カマドは北東壁ほぼ中央に位置する。壁への掘り込みは50cm程であるが、燃烧部の掘り込みはほとんど認められない。燃烧部中央に深さ8cmのピットが設けられる。焼土の混入が少なく、底面もそれほど焼けていない。遺物の出土はきわめて少なく、覆土中より若干の土器が出土したにすぎない。

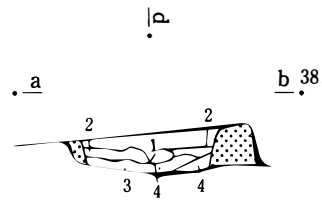
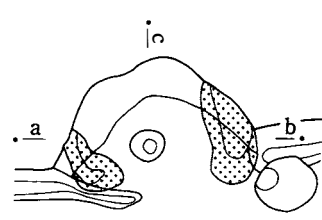
003号住居跡 (第107図, 図版36)

B・C2区, 002号住居跡の北西10m程に位置する。規模は3.9×3.1mを測り、横長の長方形



- 1層 褐色土層
- 2層 暗赤褐色土層(焼土粒、炭化粒混入)
- 3層 赤褐色土層(焼土ブロック主体)
- 4層 焼ロームブロック土層
- 5層 暗褐色土層(炭化物混入)
- 6層 茶褐色土層(ロームブロック、焼土粒混入)

- 1層 黒褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 褐色土層

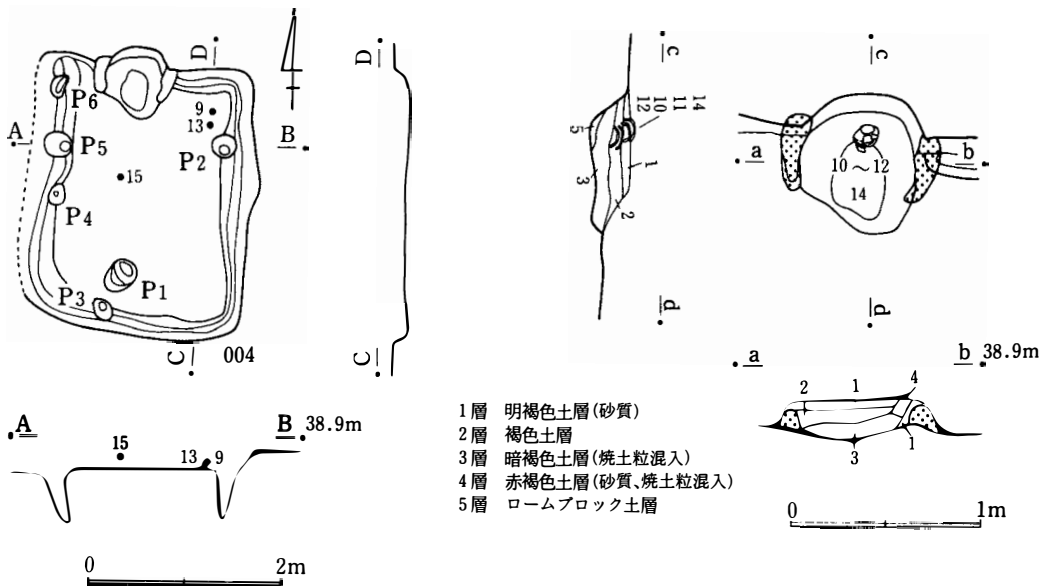
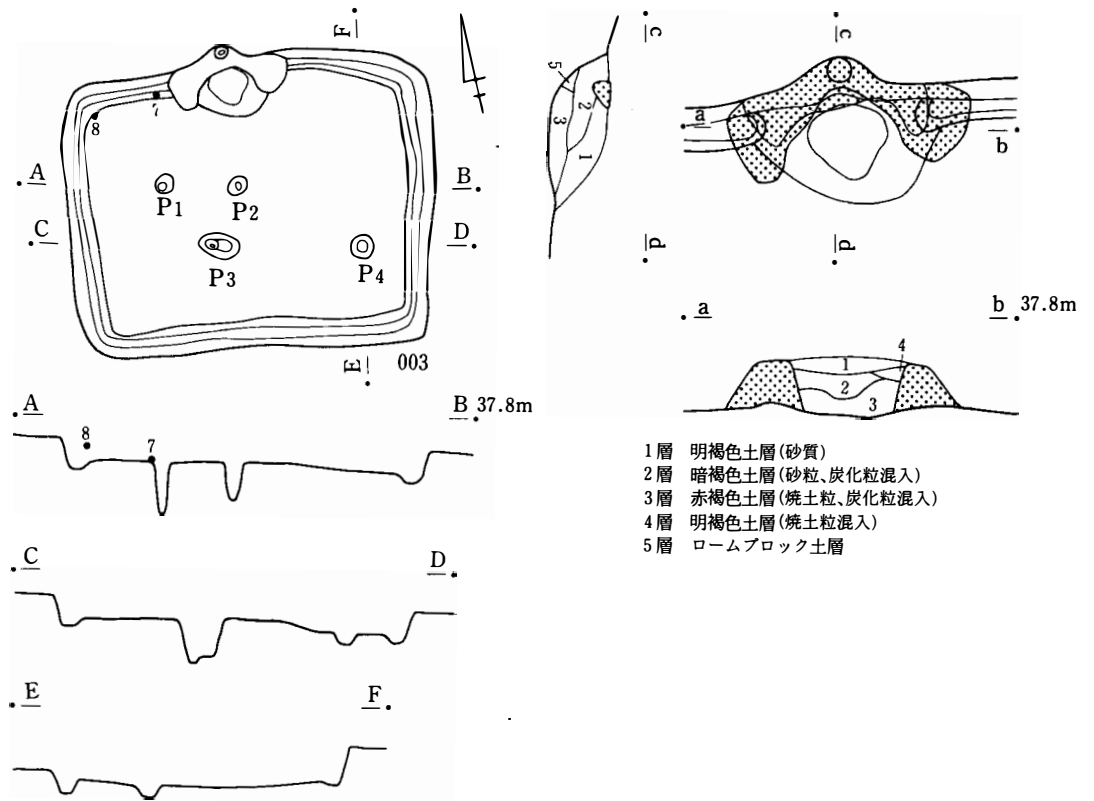


- 1層 明褐色土層
- 2層 赤褐色土層(焼土粒多く混入)
- 3層 暗褐色土層(焼土粒、炭化粒多く混入)
- 4層 明褐色土層(ローム粒混入)



第106図 001・002号住居跡

馬場遺跡 (No.31)



第107図 003・004号住居跡

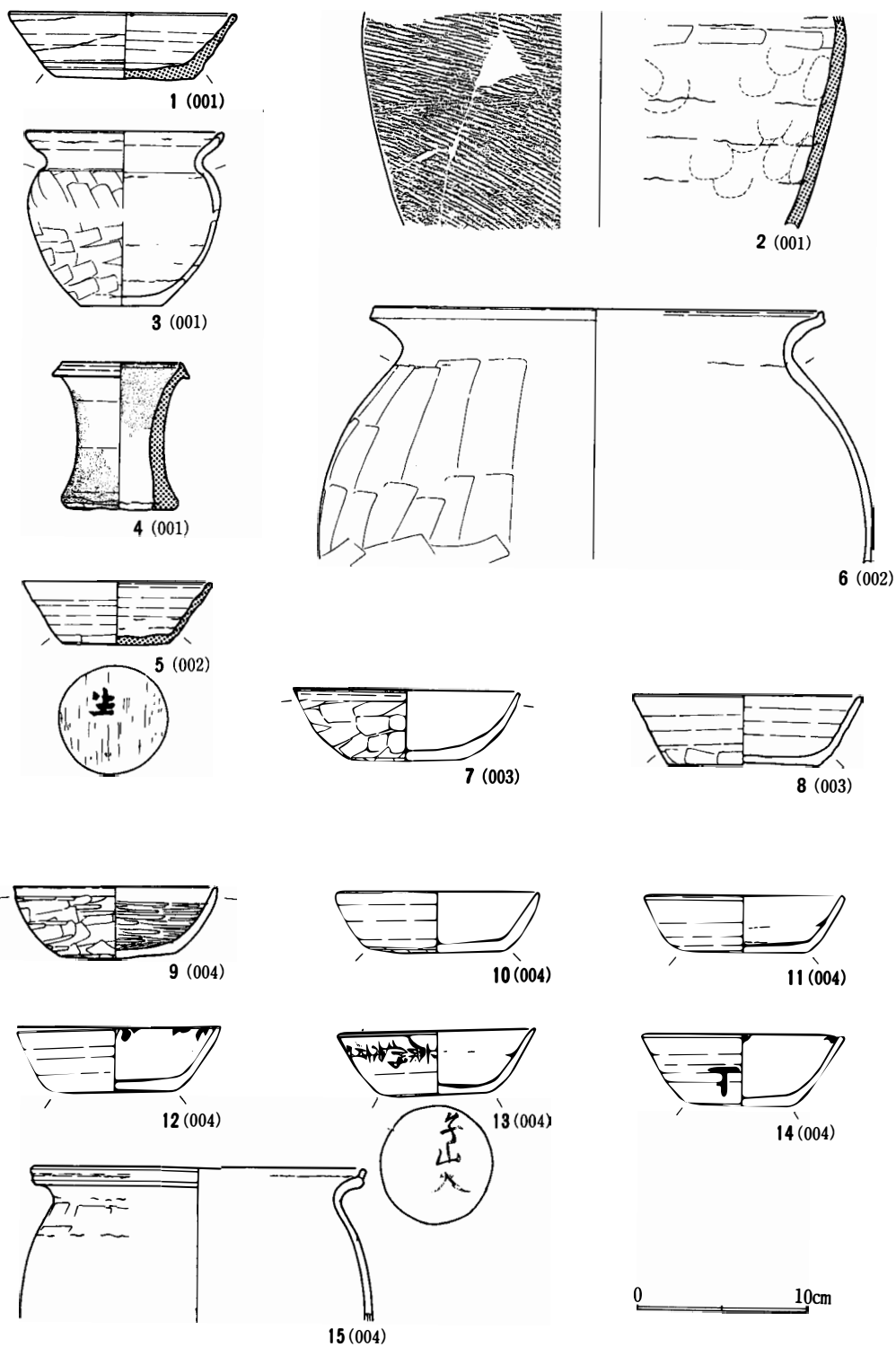
を呈する。壁はやや斜位に立ち上がり、壁高は確認面より20cm前後を測る。周溝はカマド部分を除き、深さ5～10cmで全周する。床面は平坦で堅緻である。ピットは中央付近に3本と東壁側に1本設けられるが、その位置より柱穴となるかどうか不明である。P₁～P₃は深く、P₄はきわめて浅くなる。カマドは北壁やや西寄りに位置する。遺存は良好で、天井部が若干認められる。壁への掘り込みは小さい。壁体及び底面はかなり熱を受けているようである。遺物の出土は少ないが、カマド左側床面上より杯が検出された。

004号住居跡（第107図，図版37）

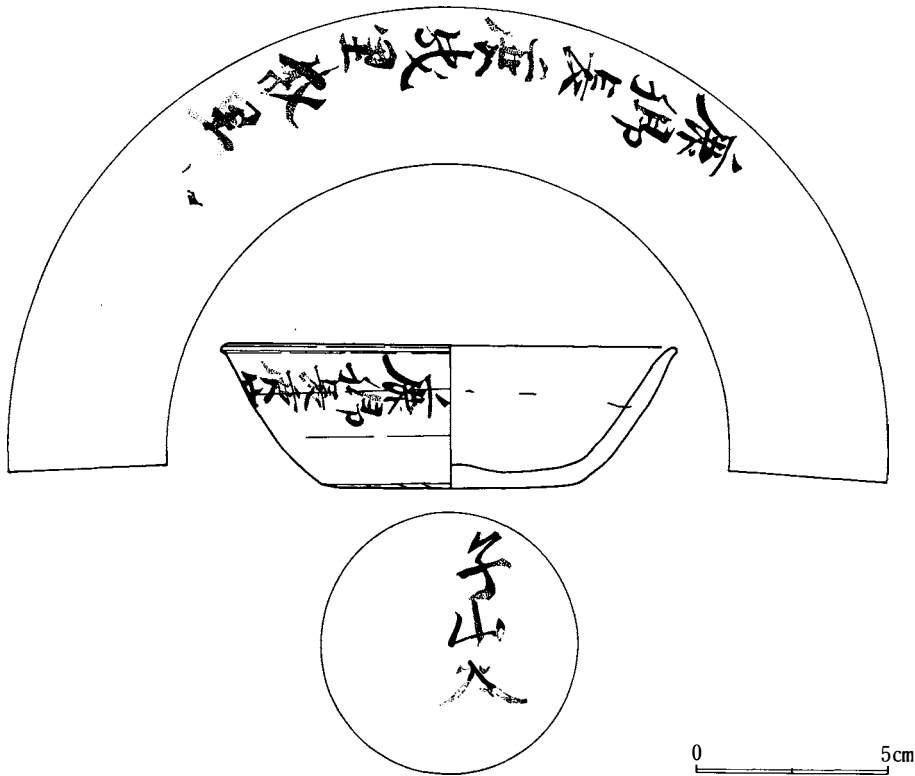
B2区，調査区西端の支谷を望む斜面上に位置する。規模は2.8×2.3mを測り、きわめて小規模な長方形を呈する。壁はやや斜位に立ち上がり、壁高は斜面上に立地するため確認面より西側で5cm，東側で15cmを測る。周溝はカマド部分を除き深さ5cm程で全周する。床面は平坦で比較的堅緻である。柱穴は、周溝内に5本，南壁側に1本設けられる。周溝内の相対するP₂・P₅は深さ50cm程で、他は20cm前後を測る。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。遺存はきわめて不良である。遺物は、小規模な住居跡にもかかわらず比較的豊富に出土した。北東コーナーより杯2個体，カマド内の煙道部にあたる位置より杯4点が伏せられた状態で重なって検出した。注目される出土状況であり、後章で詳しく検討する。

住居跡出土土器（第108図，図版39・40）

1～4は001号住居跡出土である。1は須恵器の杯である。全体に肉厚で、底部はヘラ切り後、全面回転ヘラケズリを施す。胎土中に長石粒を多く含むことより、常陸産と考えられる。2は須恵器のタタキを施した甕，3は小形甕となる。4は須恵器の長頸瓶で、口頸部のみ遺存する。胴部との接合面を研磨しており、何らかに再利用したのであろう。5・6は002号住居跡の覆土中より出土した。5は須恵器の杯で、器肉は薄く、ロクロ目が顕著である。口縁部は若干内湾気味となり、底部は全面手持ちヘラケズリが施される。2と同様胎土中に長石粒を多く含む。常陸産であろう。底部外面には「生」の墨書が記される。7・8は003号住居跡の床面より出土した。7は杯Aで、底部外面に篠竹様の痕跡が認められる。8は杯B2となるものである。9～15は004号住居跡出土である。北東コーナー床面上より9と13の杯が検出された。9は倒位，13は正位である。10～12・14はカマド内より検出された。4枚の杯が倒位で重なっており、下から12・10・11・14である。9は杯A，10・11は杯B1，12～14は杯C3で、12と14の口唇部内面には油煙が付着する。墨書は13と14に認められる。13は体部外面に「鹿郷長鹿成里成？里口」，底部外面に「子山口」と記される。14は体部外面に「上」が倒位で記される。先述の出土状況からすると、「上」は倒位で置かれることにより本来の意味を果たすのであろう。15は覆土中より出土した甕である。口唇部を強くつまみ上げる。



第108図 住居跡出土土器



第109図 004号住居跡出土墨書土器

馬場遺跡住居跡出土土器観察表

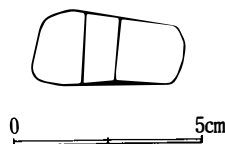
挿図 番号	器種	法量(cm) □・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
1	杯	13.2 8.0 3.9	$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り	R	砂粒 長石粒多	灰色	良好	須恵器
2	甕	— — —	$\frac{1}{6}$	胴部内面指ナデ 胴部外面叩き目		砂粒 長石粒	灰色	良好	須恵器
3	甕	(11.6) 4.7 (10.2)	$\frac{2}{6}$	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面丁寧なナデ 胴部外面～底部ヘラケズリ		砂粒少	赤褐色	良好	
4	長頸壺	6.9 — —	$\frac{2}{6}$	内外面ヨコナデ	R	砂粒 長石粒多	暗灰色	良好	須恵器 胴部との接合面を研磨し、再利用
5	杯	10.9 6.2 3.8	$\frac{4}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	L	大砂粒多 長石粒多 石英粒多	暗灰色	良好	須恵器 墨書「生」
6	甕	(26.5) — —	$\frac{2}{6}$	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒		良好	
7	杯	13.2 7.2 4.2	$\frac{6}{6}$	口縁部～体部内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 底部全面手持ちヘラケズリ		小砂粒少	黄褐色	良好	
8	杯	(13.4) 8.7 4.0	$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒少 長石粒	明褐色	良好	

馬場遺跡 (No.31)

挿図 番号	器 種	法量(cm)	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
		□・底・高							
9	杯	11.9 6.4 4.2	$\frac{6}{6}$	□縁部内外面ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ、外面～底部 全面手持ちヘラケズリ		砂粒少 長石粒、石英粒 雲母粒	暗褐色	良好	
10	杯	12.0 8.1 3.6	$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒 長石粒、石英粒 雲母粒	淡褐色	良好	
11	杯	11.5 7.4 3.4	$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒少 長石粒、石英粒 雲母粒	淡黄褐色	良好	
12	杯	11.8 6.8 3.7	$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒 石英粒 雲母粒少	黄褐色	良好	□縁部内面に灯明芯 痕
13	杯	12.0 6.7 3.8	$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒少	淡褐色	良好	墨書「鹿郷長鹿成里 成里口」、「子山口」
14	杯	11.8 6.4 4.2	$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少 長石粒少	淡赤褐色	良好	墨書「上」 □縁部内面に油煙付 着
15	甕	(19.4) — —	$\frac{2}{6}$	□縁部内外面ヨコナデ 胴部内外面ナデ		砂粒 石英粒多 雲母粒少	淡黄褐色	良好	

住居跡出土紡錘車 (第110図)

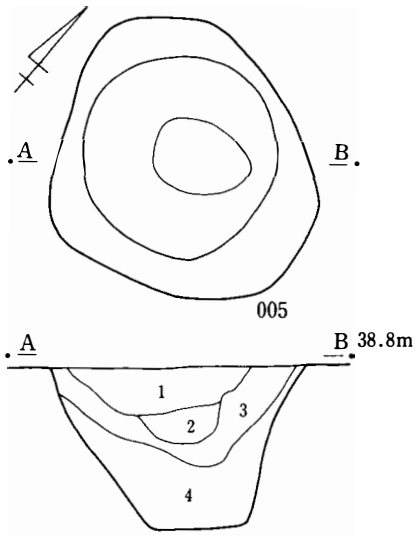
001号住居跡の床面上出土である。砂質凝灰岩製で、表裏面及び図上下側面が丁寧に研磨されている。長軸4.0cm，短軸3.2cm，最大厚2.0cm，孔径0.8cm，重さ35gを測る。形態及び研磨状況より、砥石に調整を施して紡錘車として再利用したのであろう。



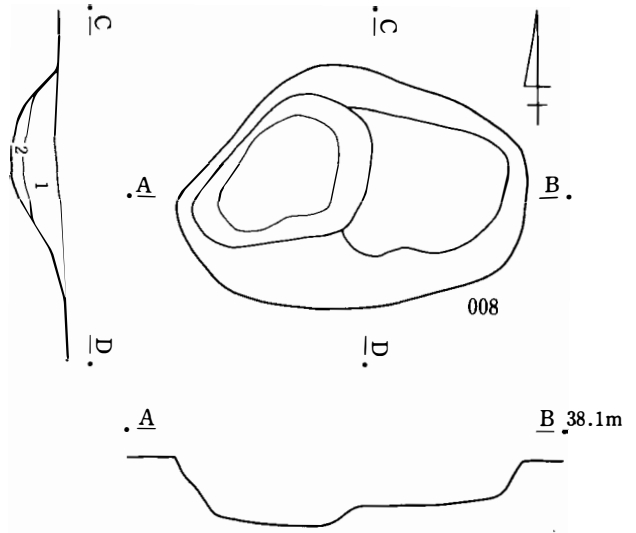
第110図 住居跡出土紡錘車

土壌 (第111図)

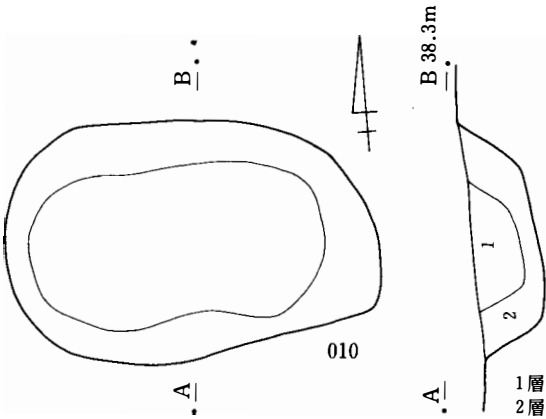
本遺跡からは4基の土壌を検出した。いずれも不整形プランを呈する。005号土壌は埋め戻されたようである。遺物の出土はなく、時期・性格とも不明である。



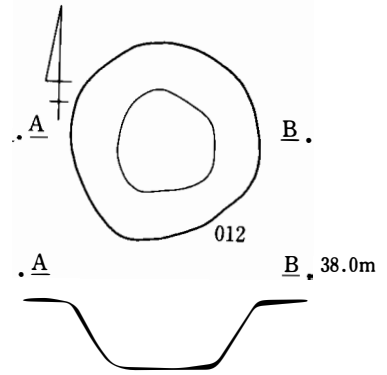
- 1層 明褐色土層(ロームブロック混入)
- 2層 暗褐色土層
- 3層 褐色土層(ロームブロック混入)
- 4層 暗褐色土層(ロームブロック多く混入)



- 1層 暗褐色土層
- 2層 明褐色土層(ローム粒多く混入)



- 1層 暗褐色土層
- 2層 明褐色土層



0 1m

第111図 土 墳

第 III 篇

ソ ウ ナ 遺 跡 (No.33)

遺跡コード 209-009

所 在 地 佐原市本矢作ソウナ85-6 他

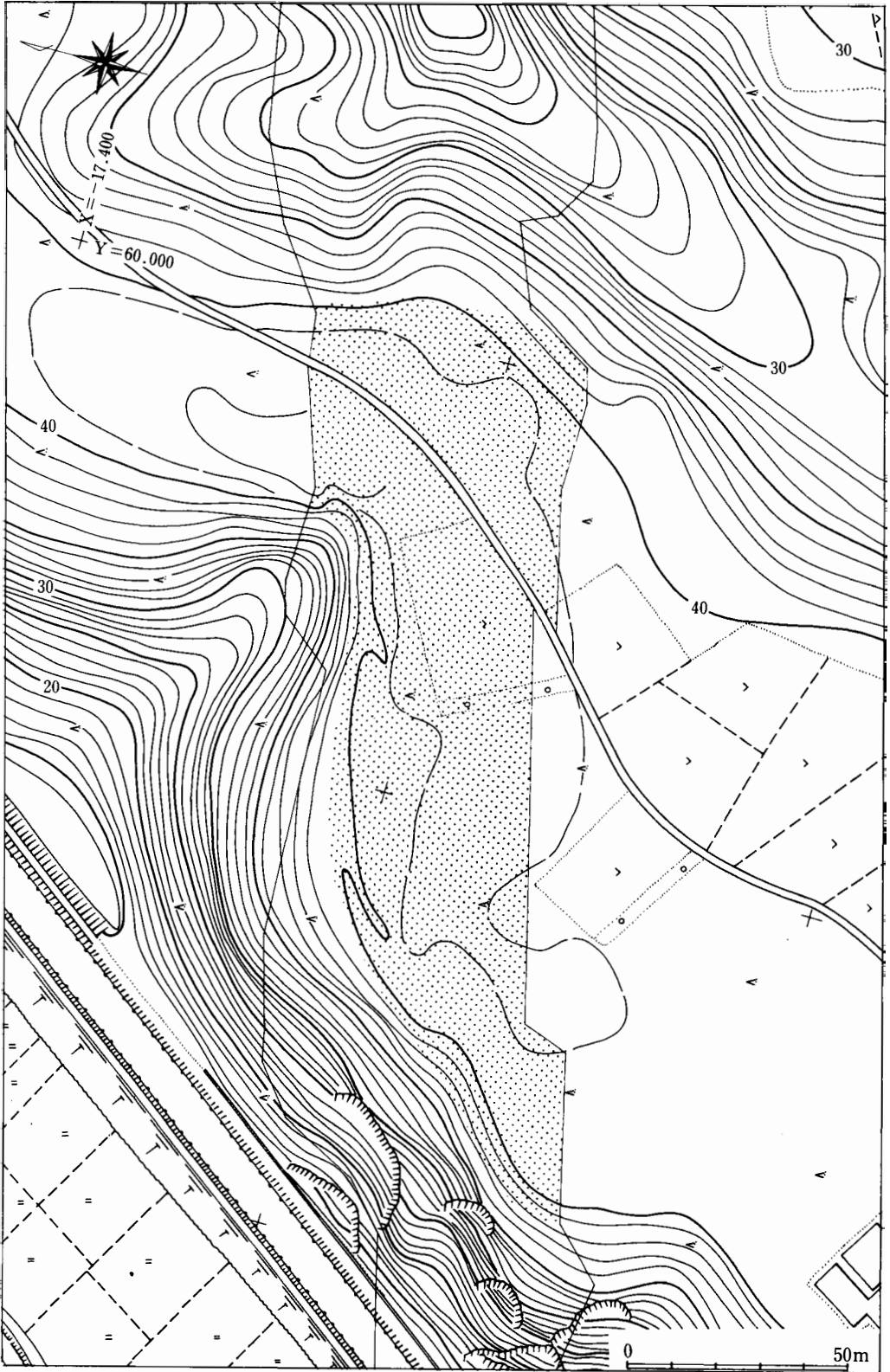
調査担当者 齋木 勝, 羽二生 保

東 野 遺 跡 (No.34)

遺跡コード 209-010

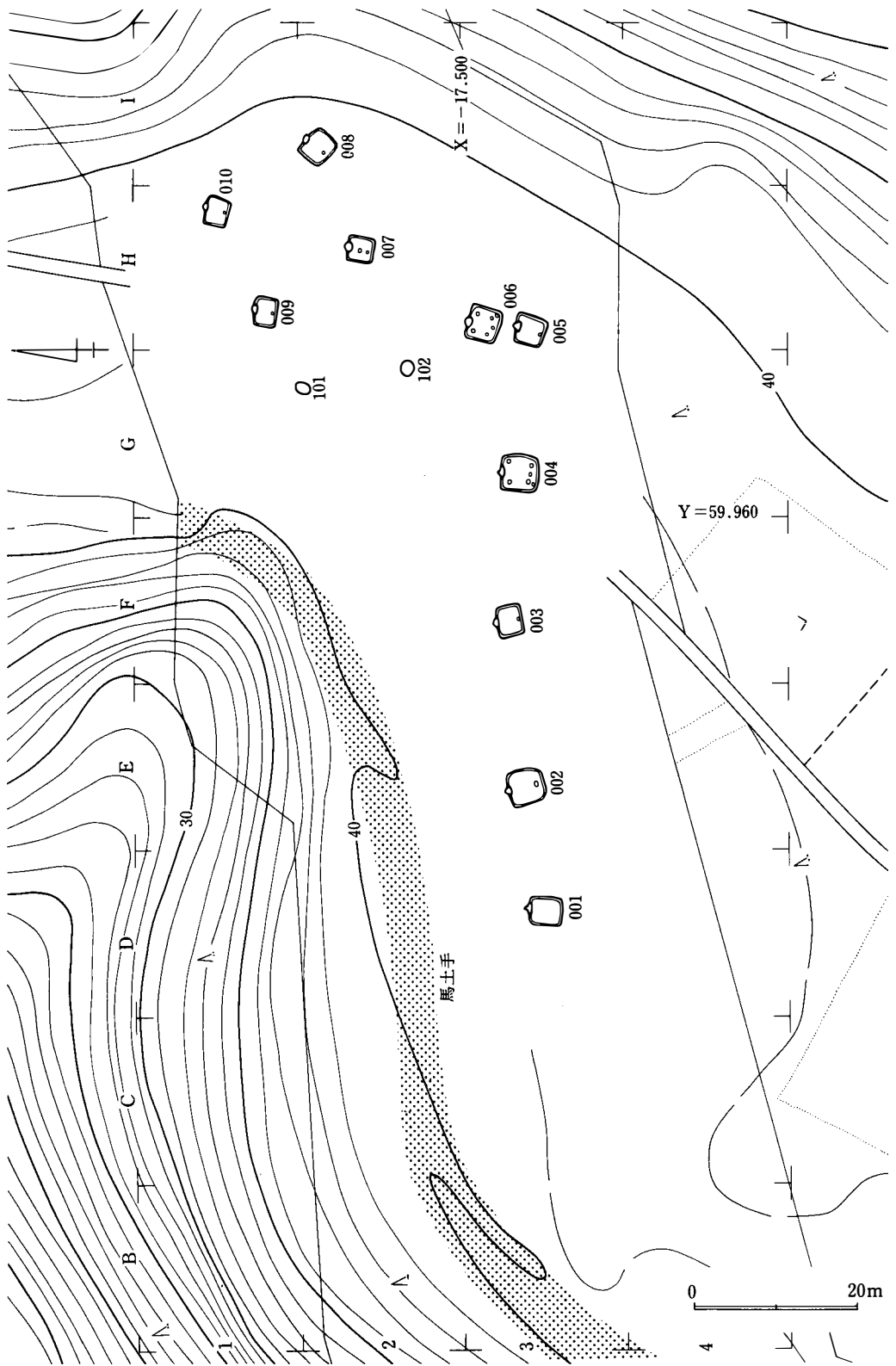
所 在 地 佐原市本矢作字東野40-2 他

調査担当者 齋木 勝, 羽二生 保



第112図 ソウナ・東野遺跡地形図

ソウナ遺跡 (No.33)・東野遺跡 (No.34)



第113図 ソウナ・東野遺跡遺構配置図

検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

本遺跡より縄文時代の土壌と思われる遺構が2基確認されている。またグリット中より早期～中期にかけての土器片が多数出土している。

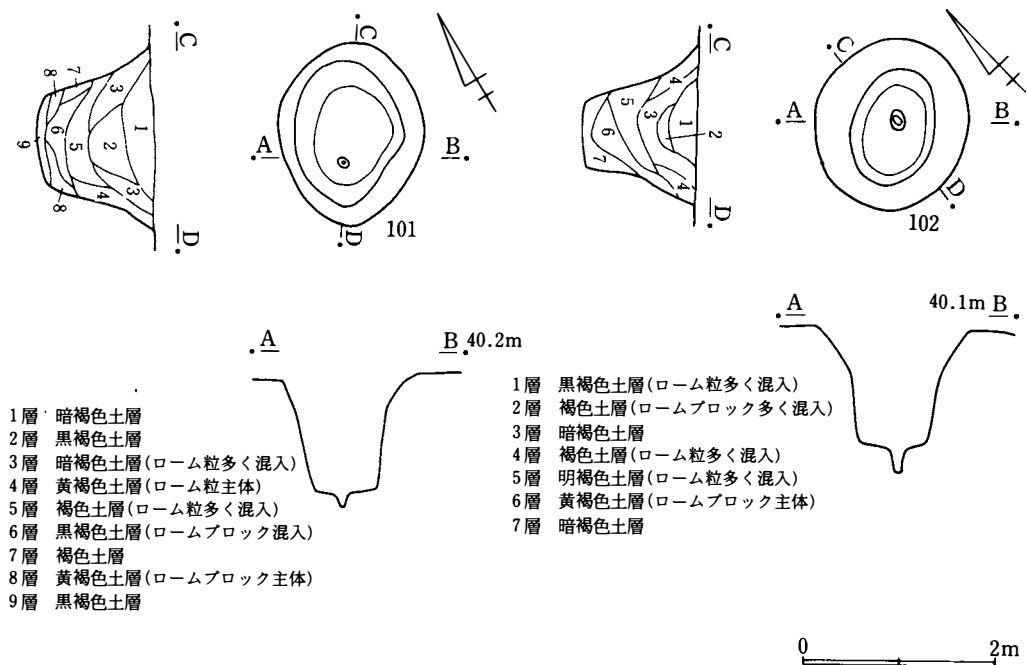
1. 検出遺構

001号土壌 (第114図)

G 1-43区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は1.9m×1.5mを測る。確認面からの深さは最深1.26mを測る。底面は平坦で、中央部に直径10cmの小ピットが1本穿たれる。覆土は自然堆積であろう。遺物は検出されなかった。

002号土壌 (第114図)

G 2-34区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は1.8m×1.6mを測る。確認面からの深さは最深1.3mを測る。底面は平坦で、中央部に直径20cmの小ピットが1本穿たれる。覆土は自然堆積であろう。遺物は検出されなかった。

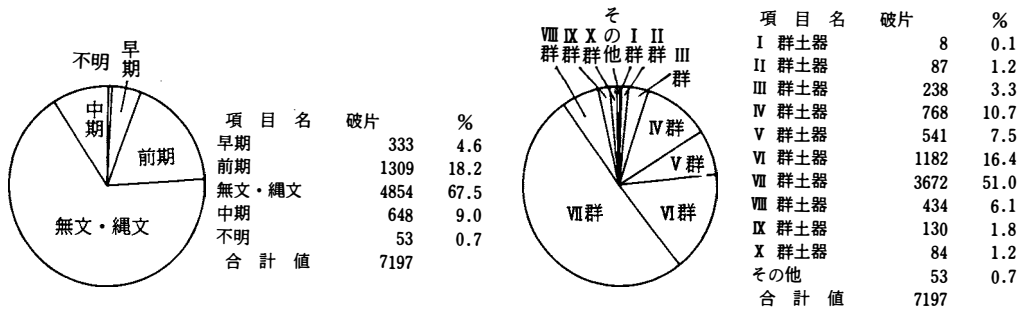


第114図 101・102号土壌

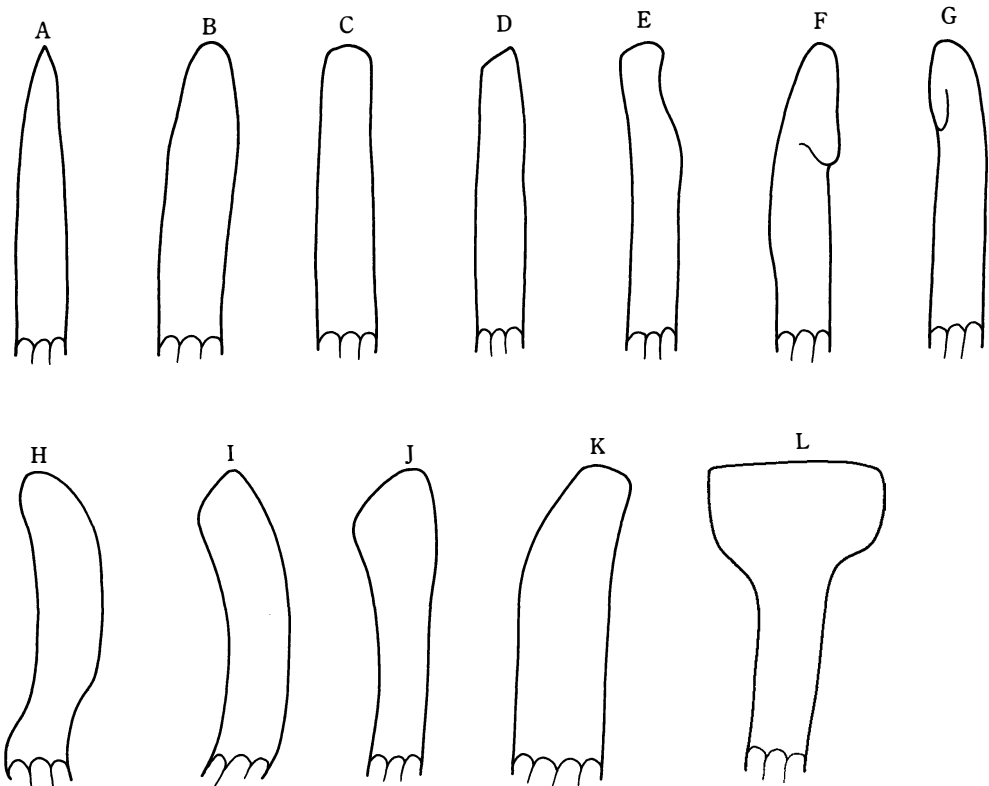
2. グリット出土縄文土器 (第117~127図, 図版51~53)

本遺跡から出土した縄文土器は7197点にのぼる。その内早期に属する土器は333点, 前期に属する土器1309点, 前期末~中期初頭に属する縄文土器1182点, 前期末~中期初頭に属する無文土器3672点, 中期の土器648点, 不明53点である。

これらの土器は細部観察により, 施文原体・施文技法・調整製作技法・胎土・器形などの諸



第115図 東野遺跡出土土器時期別割合



第116図 前期末~中期初頭無文土器口唇部形態模式図

特徴から類別が可能である。本報告に於いては主に施文原体・施文技法・調整製作技法等を中心として諸特徴を加味した上で群・類・種別を行い、代表例を記載することとする。

第Ⅰ群土器 早期初頭の撚糸文系土器

第Ⅱ群土器 早期中葉の沈線文系土器

第Ⅲ群土器 早期後葉の条痕文系土器

第Ⅳ群土器 前期前半の繊維土器

第Ⅴ群土器 前期後半の竹管文系土器

第Ⅵ群土器 前期末～中期初頭に属する縄文土器

第Ⅶ群土器 前期末～中期初頭に属する無文土器

第Ⅷ群土器 中期初頭の五領ヶ台式土器

第Ⅸ群土器 早期中葉の阿玉台式土器・加曾利E式土器

第Ⅰ群土器（1～3）

本群は全体の0.1%を占め8点出土した。文様は、縄文が施文されるものと無文のものに分けられる。縄文の施されている土器は3点でその他は無文土器である。1はLRの単節縄文が斜位に施されている。2は無文土器の口縁部破片である。口唇部から胴部にかけて数cmにナデによる整形を行ない、以下は胴部にケズリによる整形を行なう。3はナデによる整形が認められる。内面はいずれもケズリが行なわれている。胎土中に長石・石英等の白色微粒子が含まれている。

第Ⅱ群土器（4～20）

本群は早期中葉に属すると考えられる沈線文系土器群を一括した。全体の1.2%を占め87点出土した。文様等の諸特徴から三戸式土器と田戸下層式土器に分けられる。

第1類（4～13）

沈線文系土器前半期の土器と考えられるものを一括し、52片出土している。文様は細沈線・太沈線文・無文である。所謂、三戸式土器に比定できよう。

第1種（4～9, 12, 13）

沈線文を文様の中心にしているものである。4～5・9は口縁部の破片で、横位細沈線を口縁部直下から数条施し、以下胴部には幾何学文が施文される。4, 9には刺突文がみられ、特に9には三角状の刺突が2段に施文されている。6～8は胴部・底部付近の破片である。6は横位細沈線・幾何学文の重層によるものである。7・8は横位細沈線以下無文となる。以上の文様から考えると、これらの土器は口縁部から横位細沈線・幾何学文の重層をほぼ同間隔で施文され、底部が無文となる。口唇部形態は角頭状・外そぎ状を呈し、器形は口縁部から底部にゆるやかに移行する。12, 13のように鈍角な尖底で、所謂、砲弾形の尖底土器となろう。

第2種 (10・11)

太沈線文を文様の中心としているものである。口縁部から底部直上まで同一の文様が施文される。10は口縁部の破片で、口唇部形態が外そぎ状を呈する。11は底部付近の破片で太沈線文が顕著に認められる。いずれの土器も内面の整形がとても丁寧である。胎土中にやや大粒の長石・石英の粒子を含む。第1種土器の4・6～7・13の土器の胎土と類似する。

第2類 (14～20)

沈線文系土器中葉の土器と考えられるものを一括した。器形が窺えるもの1個体を除き、32片が出土した。文様は太沈線文・細沈線文を中心としている。付属的な要素として刺突文・貝殻文等が施文される。所謂、田戸下層式土器に比定できよう。

第1種 (14～16)

細沈線文を文様の中心としたものである。14・15は口縁部の破片で、14は縦位細沈線が、15はN字状に細沈線を施す幾何学文である。16は斜位細沈線を施した胴部破片である。

第2種 (17～19)

太沈線文を文様の中心にしているものである。19は唯一器形・文様構成が窺われるものである。口唇部形態が外そぎ状を呈する。器形は口縁部から胴部にかけてゆるやかに移行し、底部付近から急に直行する。底部は不明であるが、おそらく天狗の鼻状の尖底となろう。文様は、口縁部直下文様・胴部文様（幾何学文）・底部付近文様とに分けられる。口縁部文様は横位太沈線文（2条）・横位細沈線文・爪形状刺突文・横位細沈線文である。胴部文様は横位太沈線を4条施し、出来上がった空白部に格子文・刺突文・格子文をそれぞれ施文する。胴部文様と底部付近文様を分けるため横位太沈線をもちいて区画する。底部付近文様は斜位太沈線文を器面全体に施文する。17の太沈線文は胴部文様の一部、18は底部付近文様の一部であろう。

第3種 (20)

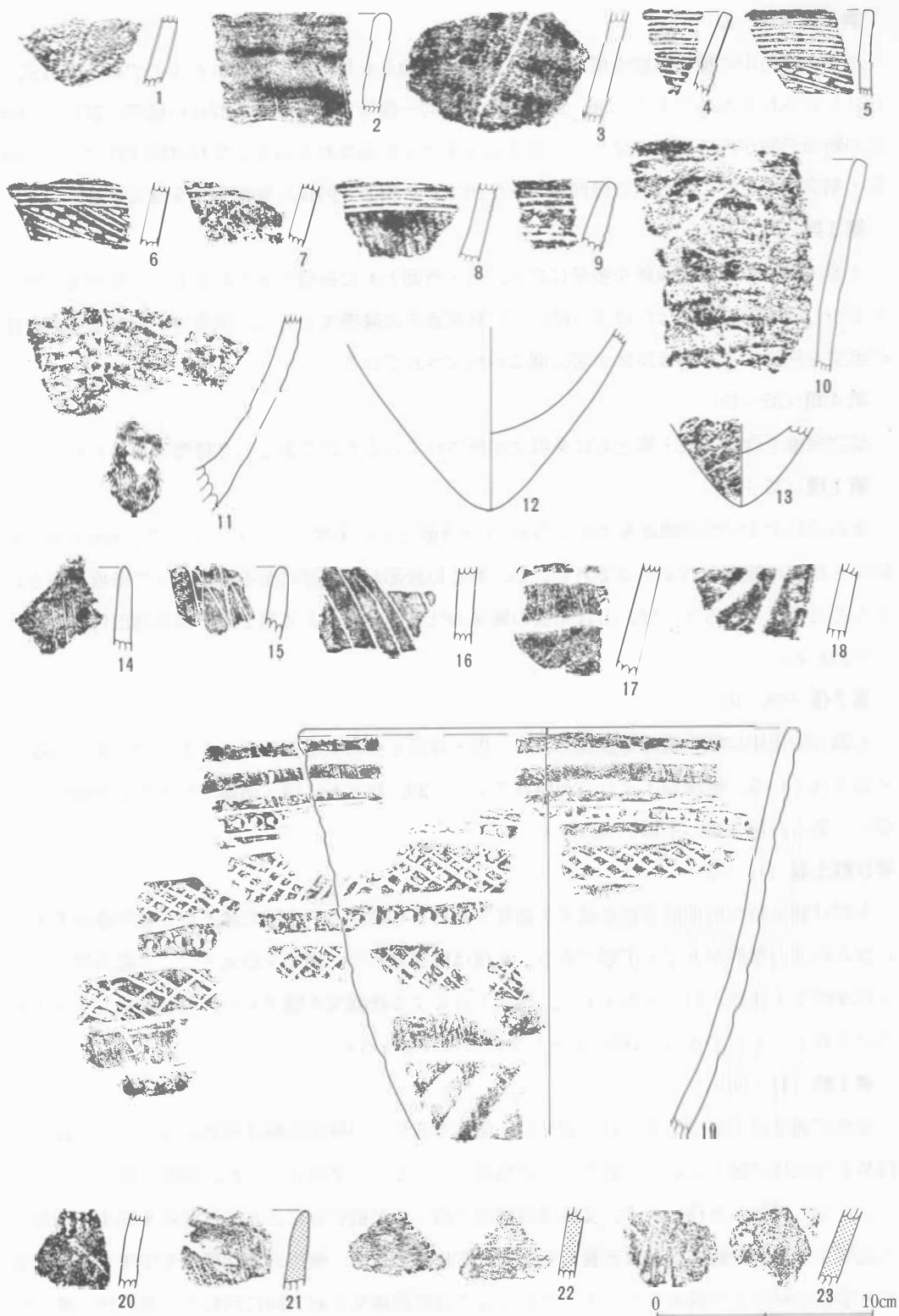
貝殻腹縁文が施されているもので1点のみ確認された。20は胴部の破片であり、貝殻腹縁文を縦位に施文する。土器の内・外面を丁寧に調整している。胎土は砂粒子を多量に含んでおり、第1種土器・第2種土器に類似する。

第Ⅲ群土器 (21～40)

本群は早期後葉に属すると考えられる条痕文系土器群を一括した。全体の3.3%を占め238点出土した。文様等の諸特徴から4つに分類した。

第1類 (21～25)

土器の胎土中に植物繊維を僅かに含み、内・外面ともに擦痕がみられるもの。21は口縁部の破片で縦位の沈線が施される。22～25は胴部の破片で内・外面ともに擦痕が顕著に認められる。この擦痕は胎土中に含まれた多量の砂粒子の移動によるものである。



第117図 グリット出土縄文土器(1)

第2類 (26～32)

土器の胎土中に植物繊維を僅かに含み、内・外面ともに条痕がみられるもので鶴ヶ島台式土器に比定されるものである。26, 27, 29～32は同一個体である。26, 27は口縁部の破片で口唇部の断面形態が内そぎ状を呈し、口唇部にはキザミが施されている。文様は細沈線文・太沈線文・刺突文を用いて菱形状の幾何学文を作出する。胴部も同様に幾何学文を施文する。

第3類 (33, 34)

土器の胎土中に植物繊維を多量に含み、内・外面ともに条痕がみられるもので隆帯文や縄文をもつものである。33は口縁部の破片で口縁部直下に隆帯文をもつ。隆帯上・口唇部に絡条体圧痕文を施文する。34は原体不明の縄文が施文されている。

第4類 (35～40)

植物繊維を含み、表・裏ともに条痕文が施されているものである。2種類に分けられる。

第1種 (35～38)

土器の胎土中に植物繊維を僅かに含み、内・外面ともに条痕がみられるもので、条痕が縦位・斜位・横位に施文されるものである。35, 38は口縁部から底部に至るまですべて条痕が施されるものと考えられるが、36, 37は条痕の施文の仕方等から考えて第2類土器の底部付近の破片と思われる。

第2種 (39, 40)

土器の胎土中に植物繊維を多量に含み、内・外面ともに条痕がみられるもので、条痕が縦位に施されている。焼成が不良なのか壊れやすい。39, 40ともに同一個体でいずれも底部付近の破片である。第3類の土器に類似する。

第IV群土器 (41～72)

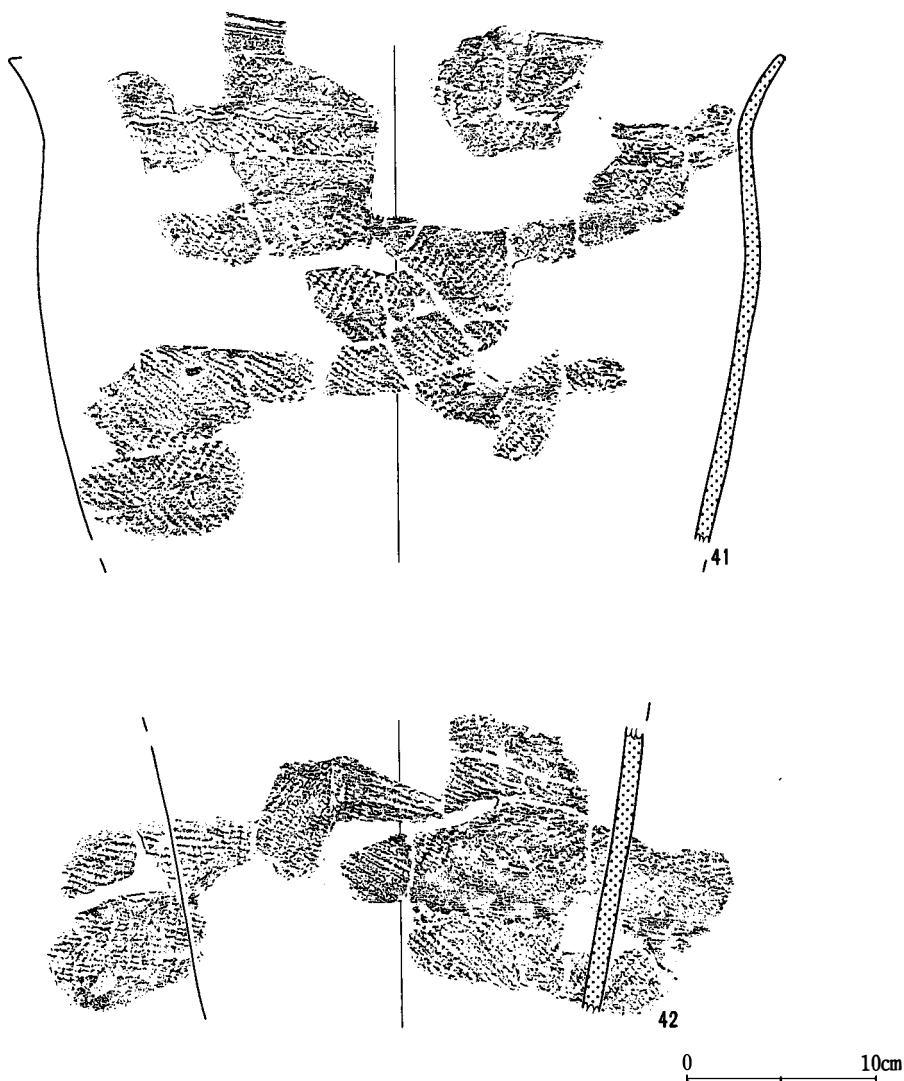
本群は縄文時代前期前半期に属する繊維土器群を一括する。土器の胎土中に植物繊維を多量に含み内面の整形がとても丁寧である。文様は縄文のもの、縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線文・連続爪形文を施すもの、櫛状工具による沈線文を施すもの、貝殻腹縁文を施すものに分けることができる。786点出土し全体の10.7%を占める。

第1類 (41～60)

文様が縄文の土器である。41, 42は同一個体である。口唇部形態は角頭状を呈し、口縁部が緩やかな波状口縁となる。口縁部から口頸部にかけてくの字状にくびれ、胴部で緩やかなふくらみをもち底部へと移行する。文様は口縁部に沿って半截竹管により平行沈線を施す。胴部から底部までは単節縄文(LRとRL)をそれぞれ結節させ、横位の羽状縄文を作出する。一部にS字状の結節文が横走する。また底部付近には結節縄文を異方向に回転させ菱形状の縄文部を作出する。43～50は縄文および撚糸文を施すものである。縄文原体は43, 46, 47, 49が単節

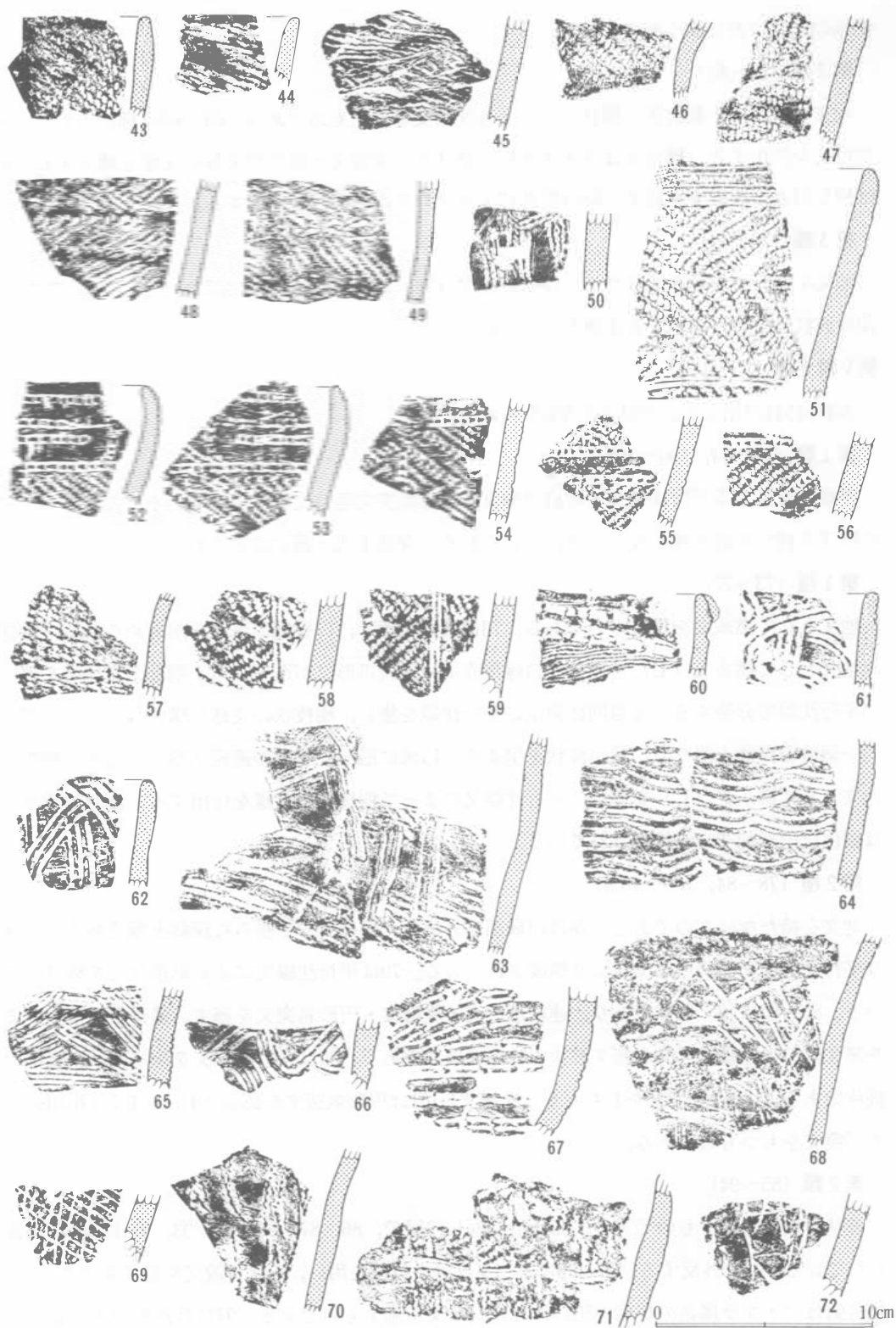


第118図 グリット出土縄文土器(2)



第119図 グリット出土縄文土器(3)

縄文 (RL) である。44, 45は無節縄文 (R) である。48は無節縄文 (R) と無節縄文 (L) を結節させる。49は撚り紐の一端を結節させS字状の結節文を作出する。50は撚糸文 (R) を縦位に施す。縄文を地文とし、半截竹管による連続爪形文・平行沈線文等を施すものである。51は単節縄文 (RL) による菱形状の文様を構成する。口縁部直下の胴部のくびれ部には半截竹管による平行沈線が施される。52~56は同一個体である。文様は単節縄文 (RL) を地文として口縁部直下に半截竹管による連続爪形文を施す。57~59はいずれも胴部の破片で、縄文と半截竹管による沈線文が認められる。58, 59は単節縄文 (RL) を地文とする。57は原体が不明である。60は口縁部直下に隆帯状の貼り付け文が施され、胴部は撚糸文 (L) が施される。



第120図 グリット出土縄文土器(4)

撚糸の条間は密で深く施文される。

第2類 (61～69)

地文を持たず半截竹管や櫛状工具により沈線文を施すものである。61～66は櫛状工具による櫛目文を作出する。櫛目文は3条1単位で波状文・曲線文・幾何学文等の文様を構成する。65は押し引きの沈線文を施す。68は竹管によりクロス格子目を作成する。

第3類 (70～72)

地文を持たず貝殻を工具として波状貝殻文(70, 71)、貝殻腹縁文(72)を施すものである。70は波状貝殻文と横走る沈線が認められる。

第V群土器 (73～114)

本群は541点出土し、全体の7.5%を占める。

第1類 (73～84, 100～102)

半截竹管による平行沈線文・連続爪形文・円形刺突文等の文様を用いているものである。更に地文を持つものと持たないものに分けられる。浮島I式土器に比定されよう。

第1種 (73～77)

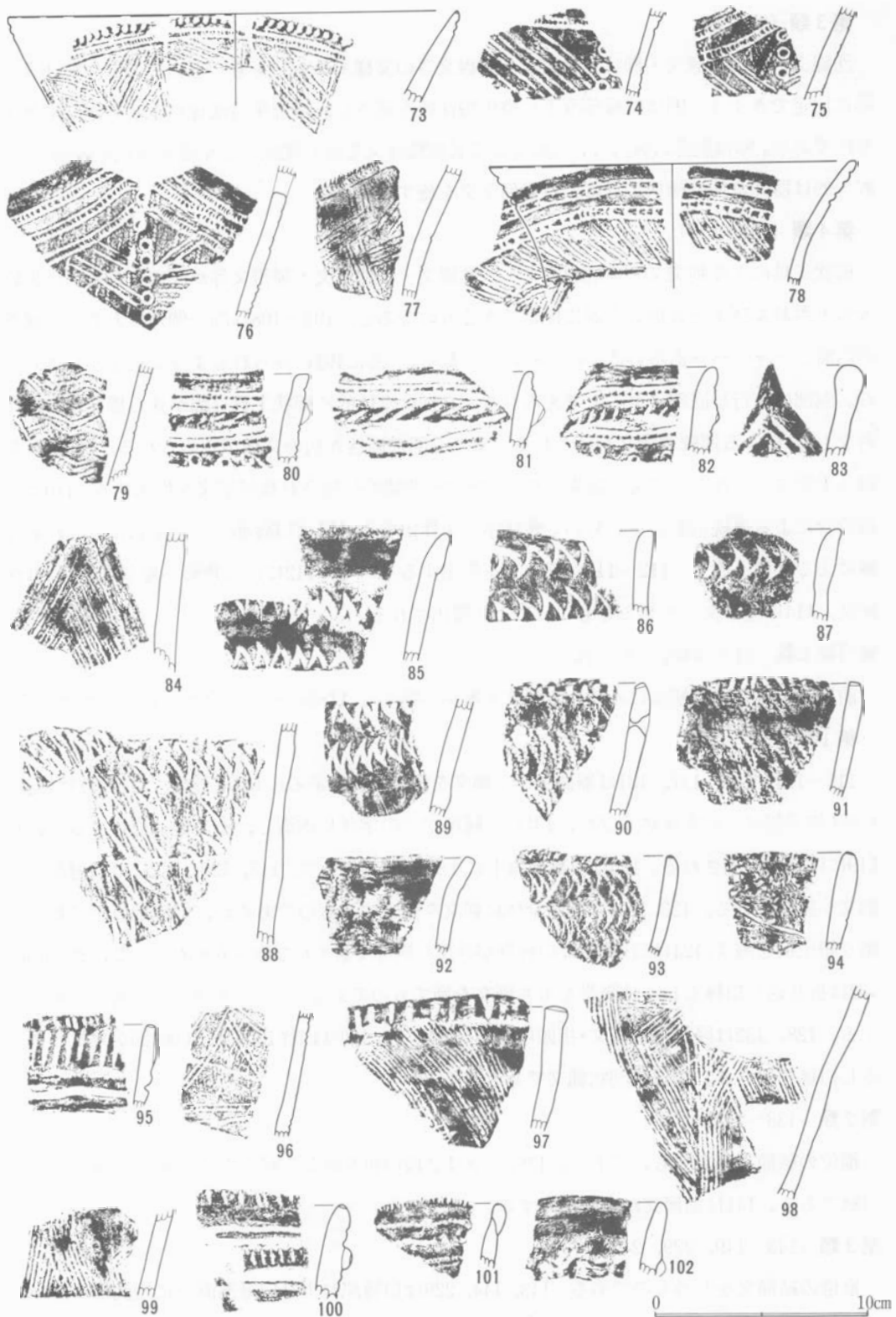
地文として撚糸文を持つものである。73は浅鉢土器で、口唇部にキザミが認められる。文様は地文として撚糸文(L)を施し、口縁部直下に連続爪形文が巡る。以下胴部の文様帯を縦位の平行沈線で分帯する。分帯間に斜位の平行沈線を施し、樹枝状の文様を構成する。74～77は同一個体の深鉢土器で、口縁が波状を呈する。口縁に沿って3条の連続爪形文が巡る。胴部は地文として撚糸文(L)を施し、平行沈線文によって樹枝状の文様を作出する。また波頂部には縦位に円形刺突文が施文されている。

第2種 (78～84, 100～102)

地文を持たないものである。78は口縁部が外反し、胴部でやや膨らむ深鉢土器である。文様は平行沈線文・連続爪形文により構成されている。79は平行沈線文による鋸歯状文を構成している。80～82は同一個体であり、連続爪形文・隆帯文・円形刺突文を施す。隆帯上にはキザミを施す。83は連続爪形文を施す波状口縁部の破片である。84は平行沈線文を施す波状口縁部の破片である。100は隆帯文をもちキザミを施す。101は円形刺突文が認められる。102は指頭による圧痕文をもつものである。

第2類 (85～94)

波状貝殻文を施すものである。85は折り返し口縁で、86, 87, 90, 91, 93, 94は口縁部が直行している。92は外反する。85～89はハマグリ等の貝殻を用い、波状貝殻文を施すものである。90～94はアナグラ属系の貝殻を用い、波状貝殻文を施すものである。94には沈線が1条認められる。浮島II式土器に比定されよう。



第121図 グリット出土縄文土器(5)

第3類 (95～99)

沈線文・磨消貝殻文・櫛状工具による条線文等の文様モチーフをもつものである。興津式土器に比定できよう。95は口縁部直下に縦位短沈線を巡らし、横位平行沈線により区画文を施すものである。96は胴部の破片で、地文として貝殻腹縁文を施し沈線により幾何学状に区画する。97～99は器面全体に櫛状工具による幾何学文を施す。

第4類 (103～114)

櫛状工具による刺突文・連続刺突文・太沈線文・細沈線文・隆帯文等が認められる。前期終末の土器および十三菩提式土器に比定できるものである。103～108は同一個体である。口縁部が内湾しキャリパーあるいはくの字状にくびれる。一部に103にみられるような把手がつけられる。胴部は直行し底部に至ると考えられる。文様は全体的に櫛状工具（幅が狭く櫛自体が細く密なもの）による連続刺突文が施される。また一部に渦巻き状の文様が認められる。109は浮島Ⅲ式土器にみられる三角文とは異なり、三角文が連続的に施され幾何学文を作出する。110は半截竹管による連続爪形文をもちいて幾何学文を作出する。111は口縁部がくの字状にくびれ細沈線による文様を施す。112～114は三角文を作出するもので、112には三角形の彫刻文、113は沈線文、114は隆帯文（キザミをもつ）により描出される。

第VI群土器 (115～149, 229, 243)

前期終末から中期初頭にみられる縄文土器を一括する。1182点出土し全体の16.4%を占める。

第1類 (115～132)

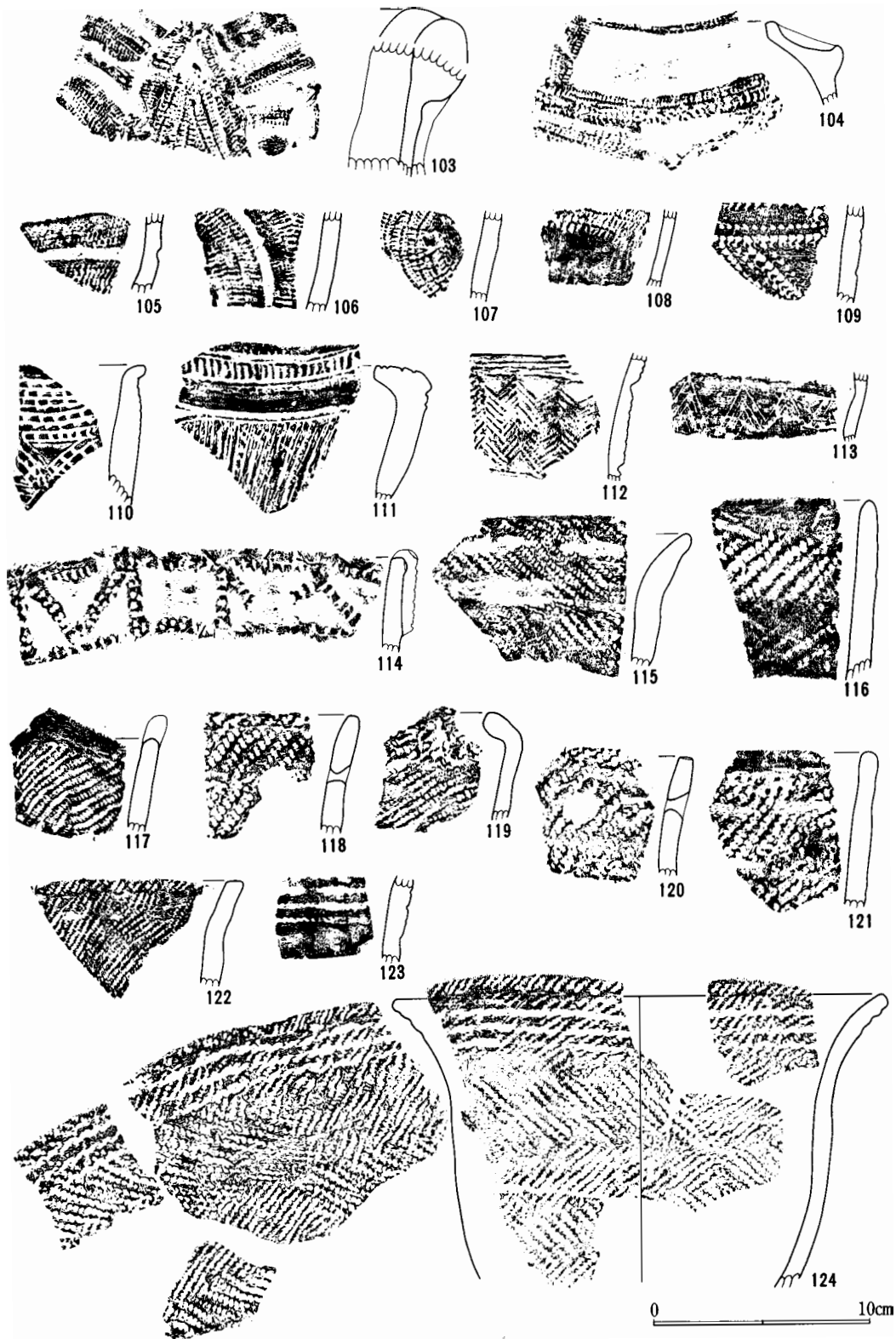
115～124, 126, 127, 131は器面全体に縄文を施すものである。115は外反、117は波状口縁、119は波頂部がくの字状にくびれ、131は口縁部がくの字状に内湾し、その他は直行する。118, 119には穿孔が施される。126は口縁部直下に1条の凹部をもつ。118, 120, 122には口唇部にも縄文が施文される。123, 124は器面全体に縄文を施文するものであるが、口縁部直下に数条の撚り紐圧痕を施す。124は口径23cm, 口縁部が外反し胴部で緩やかな膨らみをもつ。125, 128～130, 132は折り返し口縁もしくは隆帯をもち縄文を施すものである。125は2段の折り返し口縁を呈する。128, 132は隆帯上に縄文・指頭圧痕が施される。130は口径19.6cm, 口縁部が外反し折り返し口縁を呈する。胴部は羽状縄文である。

第2類 (133～142)

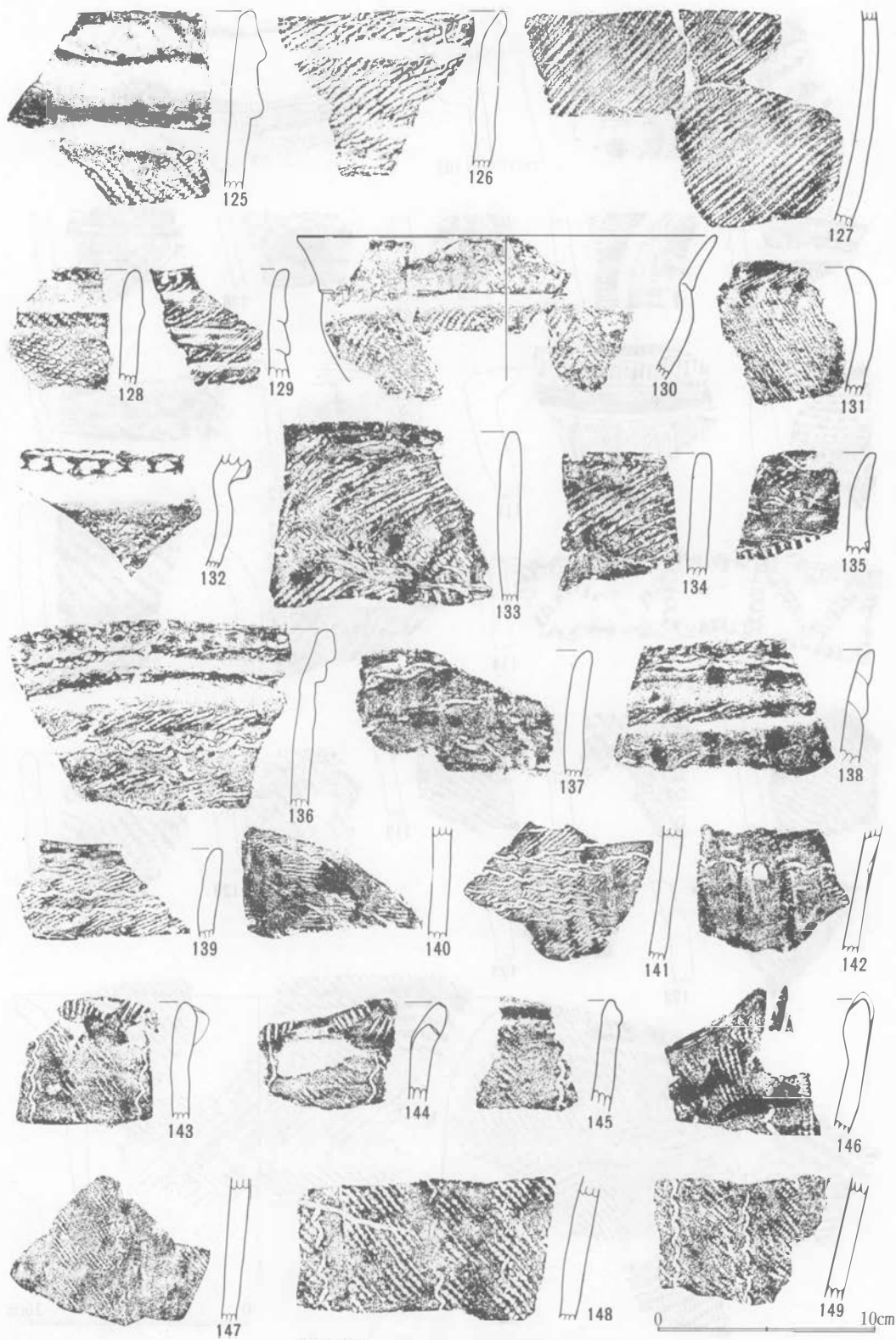
横位の結節文をもつものである。136, 138は2段の折り返し口縁となる。その他は直行する口縁である。141は結節文が多数横走する。

第3類 (143～149, 229, 243)

縦位の結節文をもつものである。143, 144, 229は口唇部および口縁部直下に短沈線が認められる。143, 144は結節文が縄文によるものではなく、沈線により作出されている事が注目され



第122図 グリット出土縄文土器(6)



第123図 グリット出土縄文土器(7)

る。243は沈線および円形刺突文が施され、五領ヶ台式土器との関係が認められる。

第VII群土器（150～185）

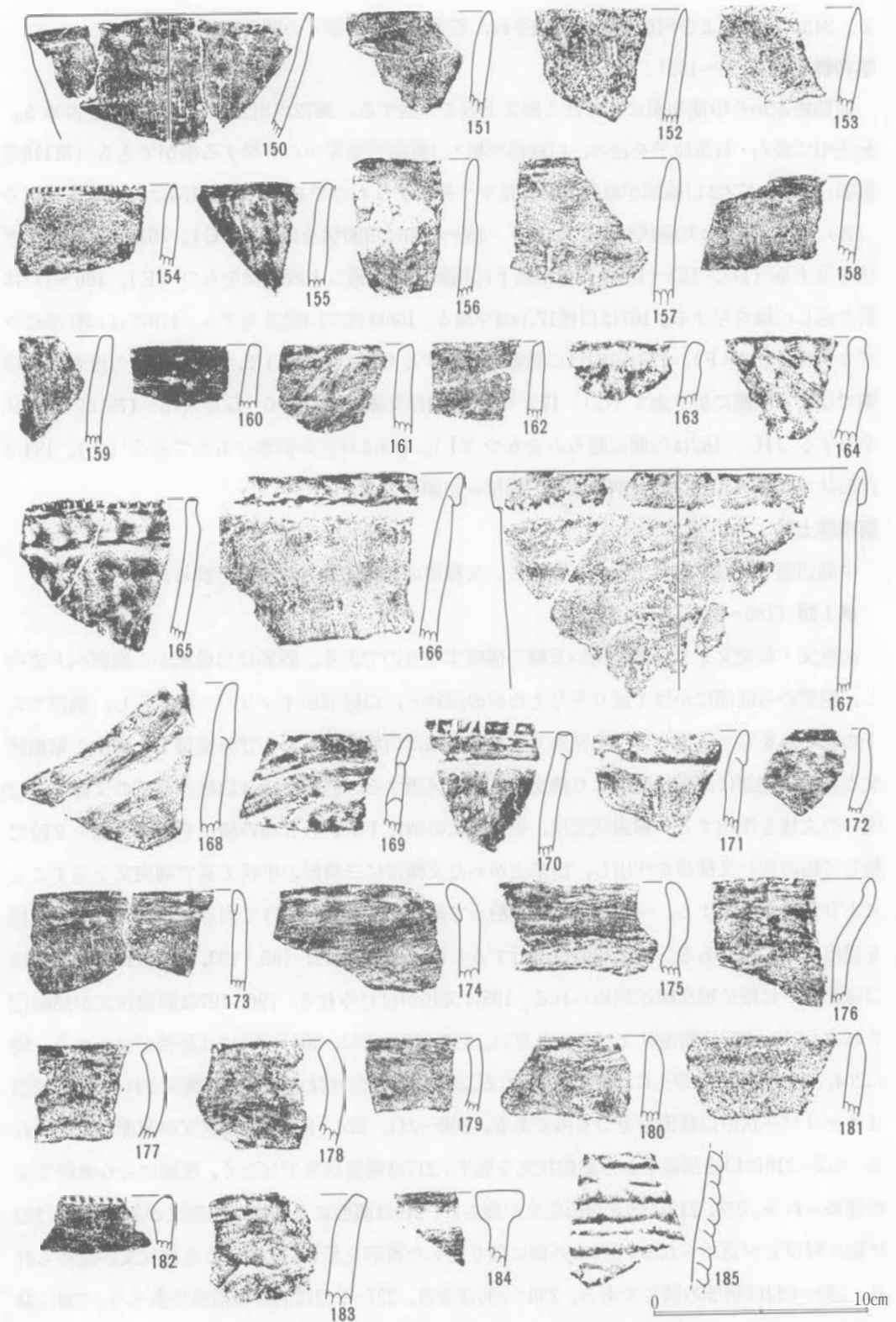
前期終末から中期初頭にみられる無文土器を一括する。3672点出土し全体の51%を占める。胎土中に長石・石英粒子を含み、口縁部形態・口唇部形態等から分類する事ができる（第116図参照）。150～172は口縁部が直行もしくはやや外反するものである。150～154は尖頭状を呈する（A）。155～158は丸頭状を呈する（B）。159～160は角頭状を呈する（C）。161～162は内そぎ状を呈する（D）。163～165は口縁部直下に指頭圧痕を施し1段の稜をもつ（E）。166～172は折り返し口縁を呈する。167は口径17.6cmを測る。168は波状口縁を呈する。170には口唇部にキザミが施される（F）。173～182は口縁部が内湾するものである。173, 174は内湾の度合いが極端ではなく内側に折り返す（G）。175, 180, 181は丸頭状を呈する（G）。176～179は内そぎ状を呈する（H）。182は内側に膨らみをもつ（I）。183は外反が顕著なものである（J）。184は台形状となる（K）。185は胴部破片で輪積みが顕著である。

第VIII群土器（186～247）

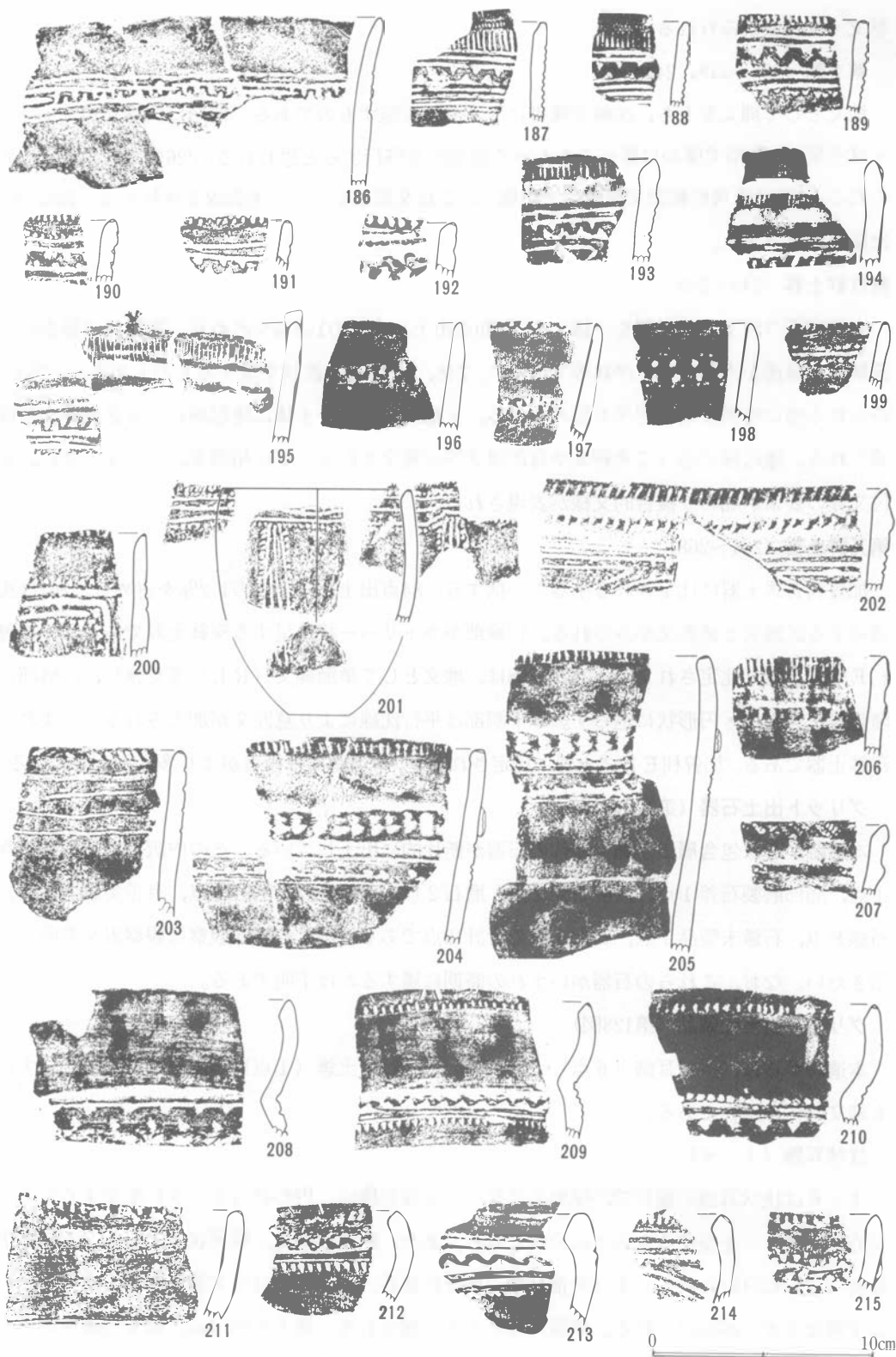
中期初頭の五領ヶ台式土器を一括する。文様等の諸特徴から二つに分けられる。

第1類（186～225, 230～242）

沈線文・刺突文を主体的に用い文様を構成するものである。器形は口縁部から底部へと直行し、胴部から底部にかけて反りを与えた形の深鉢と、口縁部がキャリパー状を呈し、胴部で若干の膨らみもち底部へと至る深鉢である。文様は口縁部直下および無文帯下に横位の鋸歯状文を持つ。胴部は鋸歯状文により無文帯を縦位区画する。底部付近は口縁部直下の文様とほぼ同一の文様を作出する。鋸歯状文は、まず無文の地に1条から3条の横位平行細沈線を2段に施して幅の狭い文様帯を作出し、出来上がった文様帯に三角形の串状工具で刺突文を施すことにより文様を描出する。一部には沈線に沿って細い竹管を押し付けて列点文を加えた複合文様を描出するものもある。186～207は直行するものである。187, 188, 193, 194, 195, 201には口縁部直下に縦位短沈線が認められる。195は突起が付けられる。196, 197は鋸歯状文が簡略化される。200～203は鋸歯状文がみられない。193, 194, 202, 204～207には隆帯が付される。特に204, 205は明瞭で隆帯上には刺突が施される。207は刺突文の代わりに縄文が施文される。208～225はキャリパー状の口縁部をもつものである。208～211, 224, 225は鋸歯状文が頸部に認められる。212～216は口縁部直下から鋸歯状文を施す。217は鋸歯状文ではなく、沈線により幾何学文が認められる。218, 219には三角形刻文が施され、219は裏面にも同様な彫刻文が施される。222は貼り付け文が認められる。223は外側に張りだした器形を呈し、沈線による波状文が認められる。230～242は胴部の破片である。230～236は後者、237～242は前者の器形であろう。239は貼り付け文と垂下する沈線文をもつ。241には渦巻き文がみられる。240, 242は底部の破片で鋸歯



第124図 グリット出土縄文土器(8)



第125図 グリット出土縄文土器(9)

状文・沈線文がみられる。

第2類 (226～228, 244～247)

地文として縄文をもち、沈線や隆帯により文様を施すものである。器形は口縁部がキャリパー状を呈し、胴部で僅かに膨らみをもって底部へと移行すると思われる。226には鋸歯状文がみられる。227は三角形刺突文を沈線下に施し、これを頂部として2条弧線文を加える。246, 247は隆帯が垂下する。

第IX群土器 (248～260)

中期中葉の阿玉台式土器を一括する。130点出土し全体の1.8%を占める。器形は口縁直下の深鉢や口縁部を内湾させた深鉢等であろう。248, 249の様に波状を呈するものもあるが、253にみられる様に特異な扇状把手も認められる。文様は口縁部を主体に隆起線による区劃縄文が構成される。隆起線に沿って角押文や有節線文等が施文される。更に指頭文、刻目文、突起、貼付文等の要素が加わり複合的文様が表現される。

第X群土器 (261～268)

加曾利E式土器に比定される土器を一括する。84点出土し、全体の1.2%を占める。261は沈線による区画文と渦巻文がみられる。口縁部がキャリパー状を呈する深鉢土器であろう。加曾利E I式土器に比定されよう。262～268は、地文として単節縄文(RL)等を施し、口縁部に隆起線文を楕円・円形状に巡らす。以下胴部は平行沈線により意匠文が加えられる。いずれも深鉢土器である。加曾利E II式土器に比定されよう。本遺跡では後者がより多く出土している。

グリット出土石器 (第129・130図)

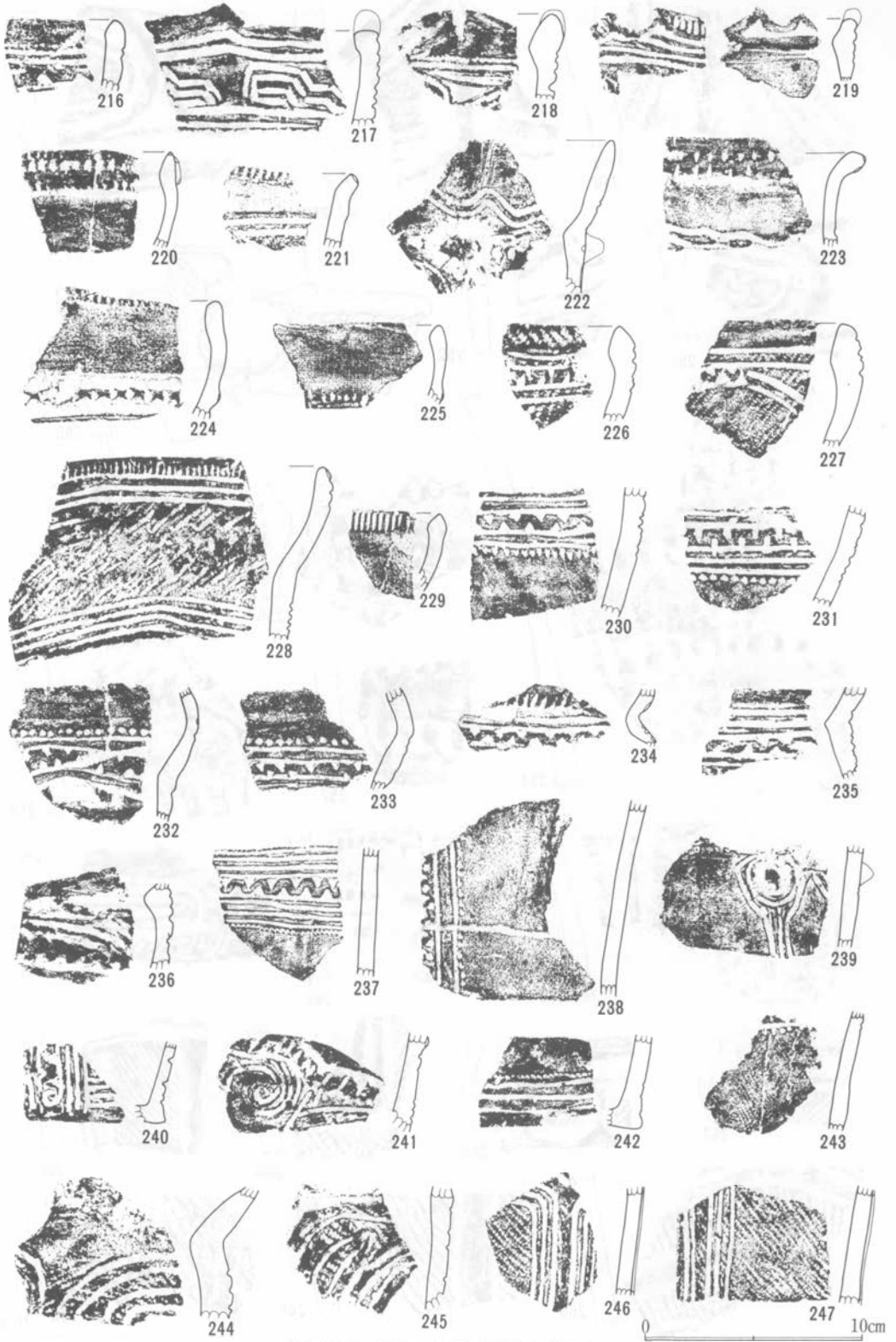
本遺跡からは包含層より縄文時代の石器が断片的に出土している。その内訳は局部打製石斧1点、局部磨製石斧1点、磨製石斧2点、磨石2点、敲石1点、凹石1点、有舌尖頭器1点、石鏃8点、石鏃未製品1点、石匙1点の合計19点である。個々の細部観察は観察表を参照して頂きたい。なお、これらの石器がいずれの時期に属するかは不明である。

グリット出土土製品 (第128図)

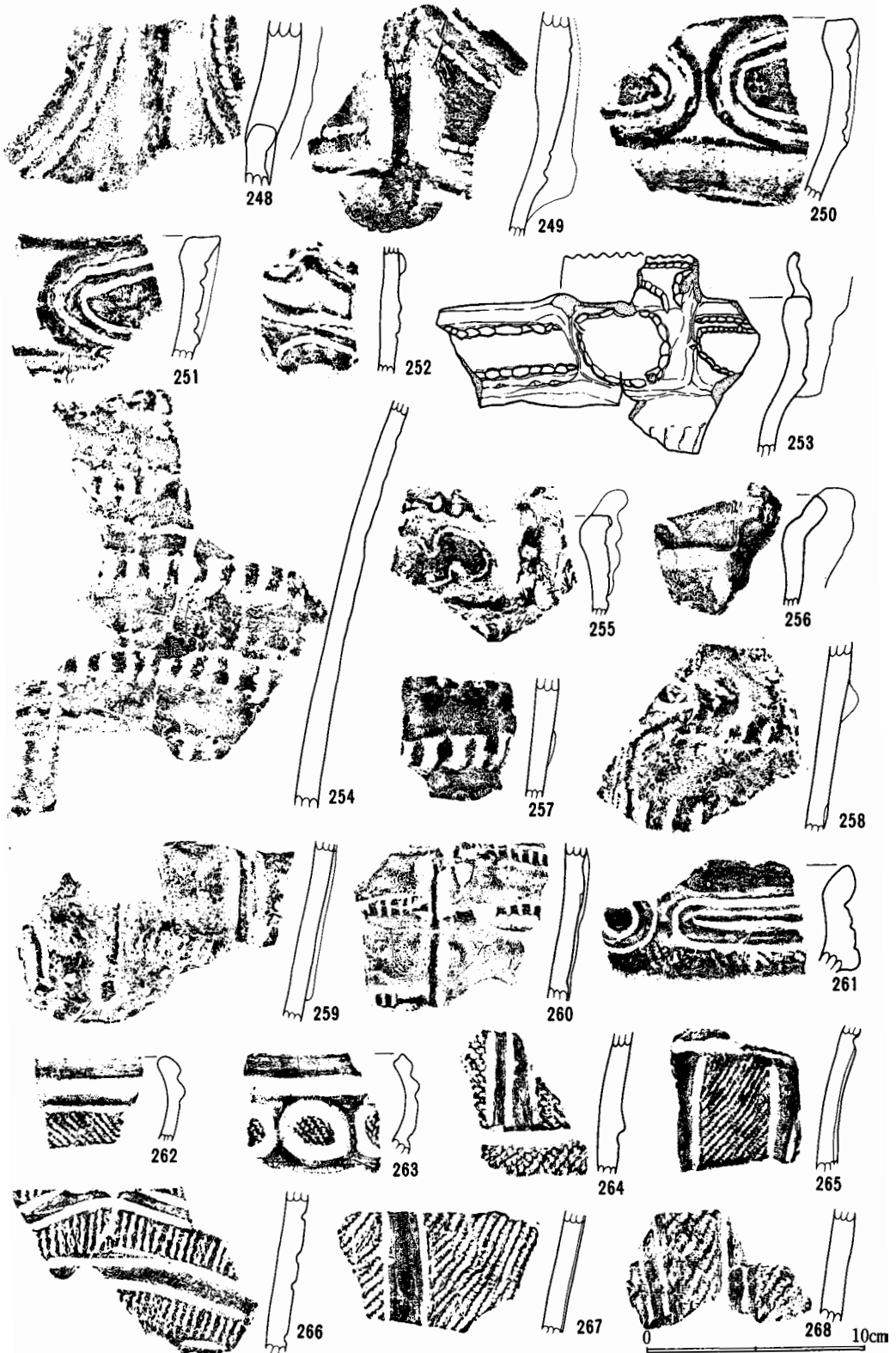
本遺跡からは、扶状耳飾(6点)・土製円盤(1点)・土錘(1点)が出土している。いずれも縄文時代の遺物である。

扶状耳飾 (1～6)

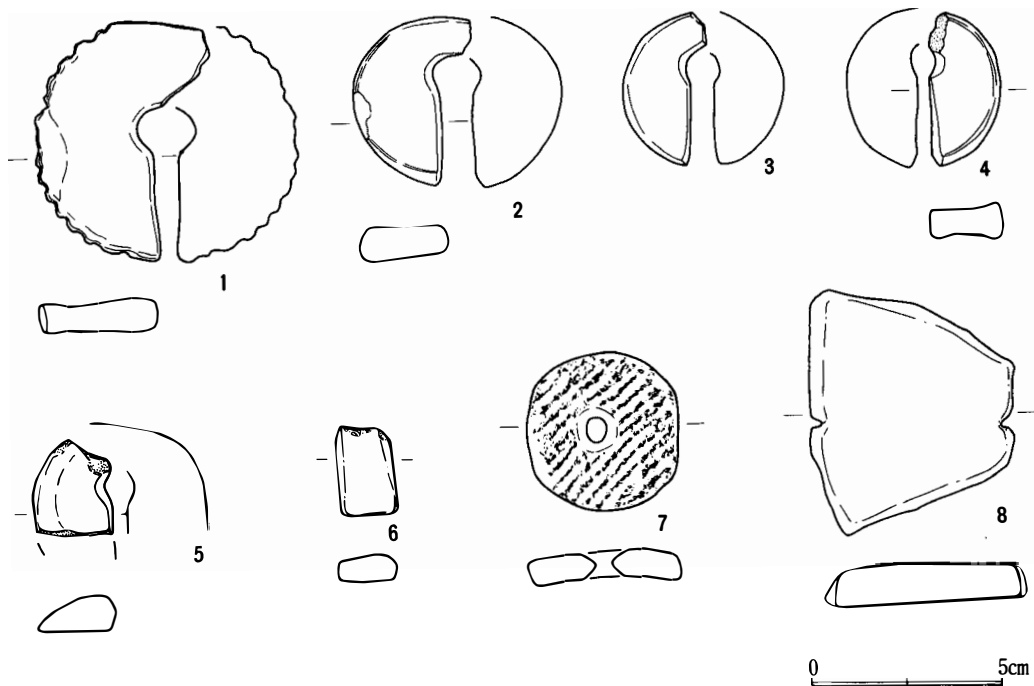
1～6は扶状耳飾の破片で、完形品はない。平面形態は、円形状(1～5)を呈するものと長方形状(6)を呈するものとに分けられる。また、断面形態は、扁平状(1～4, 6)と半球状(5)に分けられる。1は欠損品で、胎土に長石、石英、スコリア等を含み、内外面ともに丁寧なミガキがかけられる。側縁にはキザミが施される。最大長65.4mm、幅32.0mmを測る。2は整形が良好である。最大長43.0mm、幅23.2mmを測る。3, 4は整形が雑である。3は最大



第126図 グリット出土縄文土器(10)



第127図 グリット出土縄文土器(11)



第128図 グリット出土土製品

長39.0mm，幅17.5mmを測る。4は最大長39.4mm，幅17.5mmを測る。接合しないが同一個体の可能性が高い。5は整形が良好である。最大長24.1mm，幅20.4mmを測る。6は最大長22.7mm，幅16.0mmを測る。

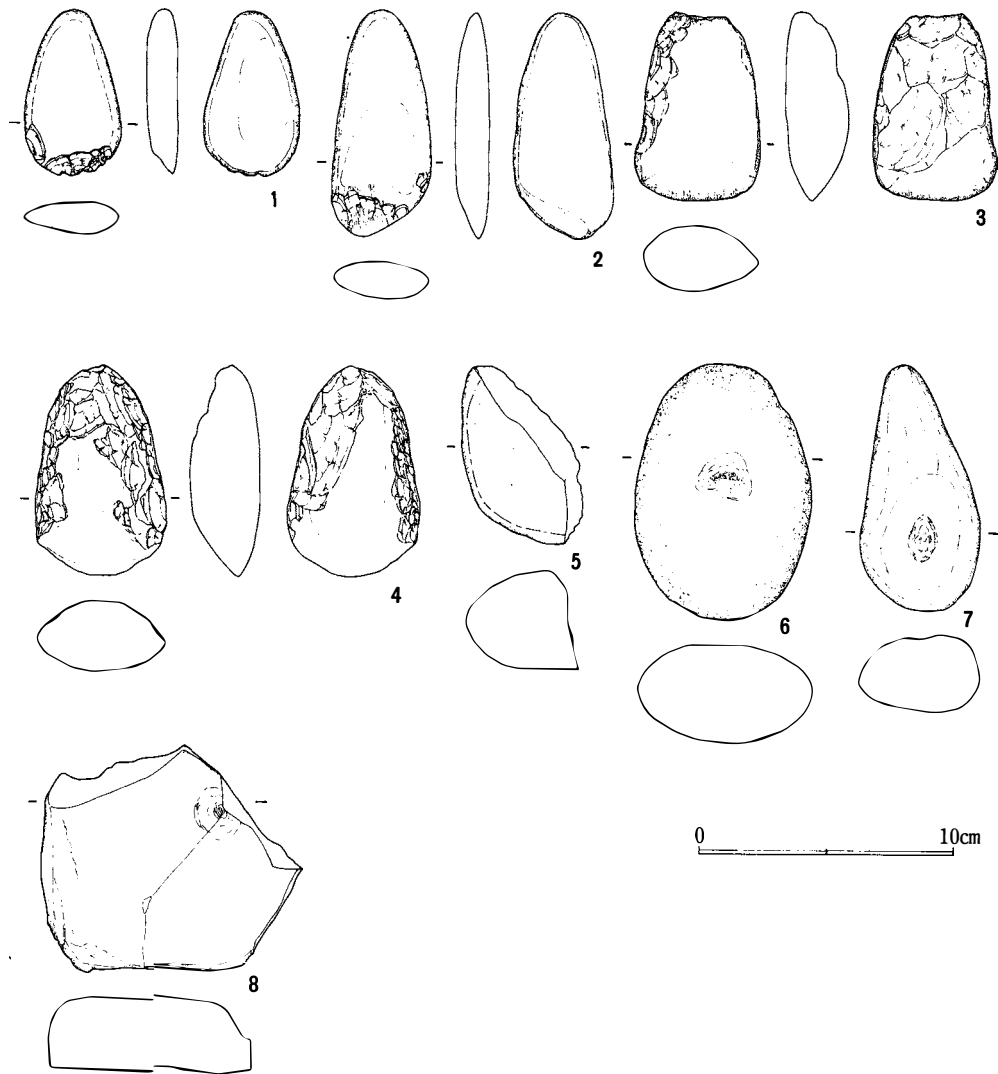
土製円盤（7）

1点のみ出土した。縁を粗割りし，円形に加工し，更に周囲を研磨する。中央部には両面から穿孔が穿たれる。前期終末～中期初頭の縄文土器を用いる。直径40.1mm，孔の直径7.8mm，厚さ6.9mmを測る。

土器片錘（8）

縄文土器の底部を利用し，周囲を台形状に加工して2ヶ所にキザミを施す。長径63.8mm，短径52.8mmを測る。

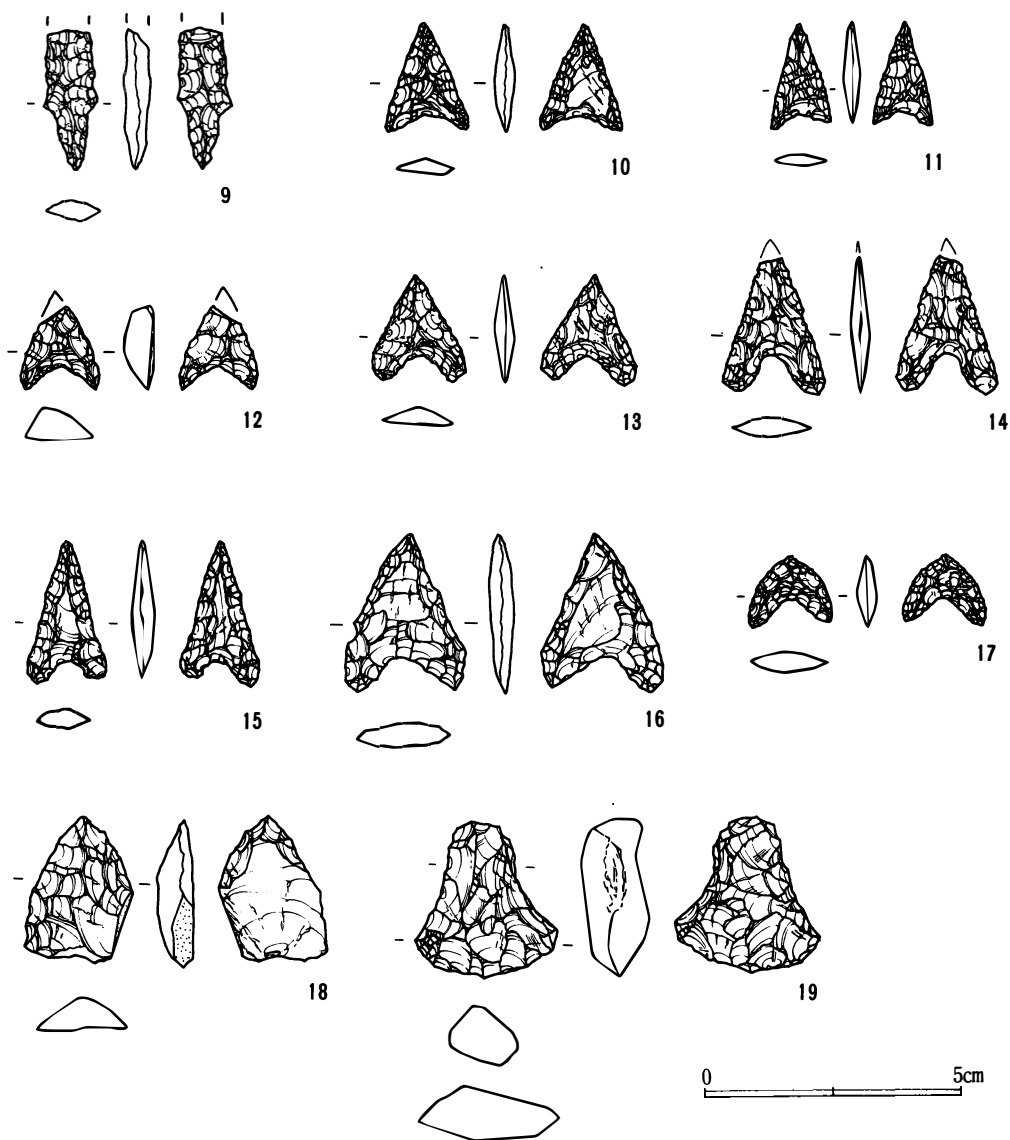
東野遺跡 (No.34)



第129図 グリット出土石器(1)

グリット出土石器観察表

挿 番 号	器 種	法 量 (cm, g)				石 材	調 整	出 土 位 置	遺 物 番 号
		長さ	幅	厚さ	重さ				
1	局部打製石 斧	64.80	37.75	12.40	44.3	ホルンフェルス	自然石の一部に打撃を加え刃部を作成する。刃部には細かな剝離が認められる。	E3-04	0001
2	局部磨製石 斧	89.35	39.75	14.30	80.1	緑 色 片 岩	縦長の自然石を用い一部に打撃を加え刃部を作成し更に磨きを加える。刃物は使用痕が顕著に認められる。	C4	0003
3	磨 製 石 斧	75.40	49.30	25.30	137.0	閃 緑 岩	全面的に打撃を加え形を定めた後刃部及び周囲を加工する。裏面は殆ど研磨されていない。	表採	0005
4	磨 製 石 斧	80.50	51.85	27.60	156.2	輝 緑 色	全面的に打撃を加え形を定めた後刃部及び周囲を加工する。調整が細かい。	F3-00	0001
5	磨 石	67.50	42.90	38.85	128.9	玄 武 岩	側縁を敲石として使用される。磨石の破片である	G2	0003



第130図 グリット出土石器(2)

挿図 番号	器種	法 量 (cm, g)				石 材	調 整	出 土 位 置	遺物 番号
		長さ	幅	厚さ	重さ				
6	磨石	99.20	69.70	39.45	395.5	花崗岩	側縁を敲石として使用される。また石の中央部に凹部が認められる。	C4	0003
7	敲石	95.60	48.30	34.60	197.5	砂岩	側縁を敲石として使用される。また石の中央部に凹部が認められる。	表探	0005
8	凹岩	86.70	102.65	27.80	342.5	砂岩	石皿の破片であろうか。依存状態が悪い。一部に凹部が認められる。	B4	0001
9	有舌尖頭器	27.45	11.15	4.95	1.3	頁岩	先端部が欠損する。細部の調整が両側縁に集中する。	006	0007
10	石鏃	21.00	11.35	3.75	1.0	黒曜石	えぐりが小さく二等辺三角形を呈する。裏面に主要剝離面を残す。最終的な調整は図上左側両側縁に集中する。	C3-31	0001

東野遺跡 (No.34)

挿 番 号	器 種	法 量 (cm, g)				石 材	調 整	出 土 位 置	遺物 番号
		長 さ	幅	厚 さ	重 さ				
11	石 鏃	20.60	11.85	2.60	0.5	チャート	えぐりが小さく二等辺三角形を呈する。最終的な調整は両側縁に集中する。	表探	0005
12	石 鏃	16.15	15.10	5.65	0.9	黒 曜 石	えぐりがやや大きく二等辺三角形を呈する。最終的な調整は両側縁に集中する。	C4	0002
13	石 鏃	20.75	18.40	3.55	0.9	チャート	えぐりがやや大きく二等辺三角形を呈する。裏面に主要剥離面を残す。最終的な調整は両側縁に集中する。	表探	0005
14	石 鏃	26.55	20.00	3.80	1.3	安 山 岩	えぐりがやや大きく二等辺三角形を呈する。最終的な調整は両側縁に集中する。先端部が欠損する。	C3-41	0001
15	石 鏃	27.70	15.85	4.30	1.4	珪 岩	えぐりがやや大きく二等辺三角形を呈する。両面に主要剥離面を残す。最終的な調整は両側縁に集中する。	C4-01	0003
16	石 鏃	30.30	24.25	4.70	3.3	砂 岩	えぐりがやや大きく二等辺三角形を呈する。両面に主要剥離面を残す。最終的な調整は両側縁に集中する。やや大きい。	B3-04	0001
17	石 鏃	13.85	16.50	3.45	0.4	黒 曜 石	えぐりがやや大きく弓状を呈する。最終的な調整は両側縁に集中する。	005	0001
18	石鏃未製品	28.25	19.30	7.00	4.1	チャート	図上左側に加工が集中する。先端部に調整が集中する。	C4-00	0001
19	石 匙	30.10	28.45	10.25	7.11	黒 曜 石	全体的に加工が施され、細部調整は刃部に集中する。小形の石匙であろう。	B4-14	0001

第 2 節 奈良・平安時代

本遺跡は、香西川によって侵食された北側に伸びる細長い台地の中央部に位置する。調査区内の遺構は、西側より入る小支谷の谷頭を取り囲むように配置される。該期の検出された遺構は住居跡10軒である。

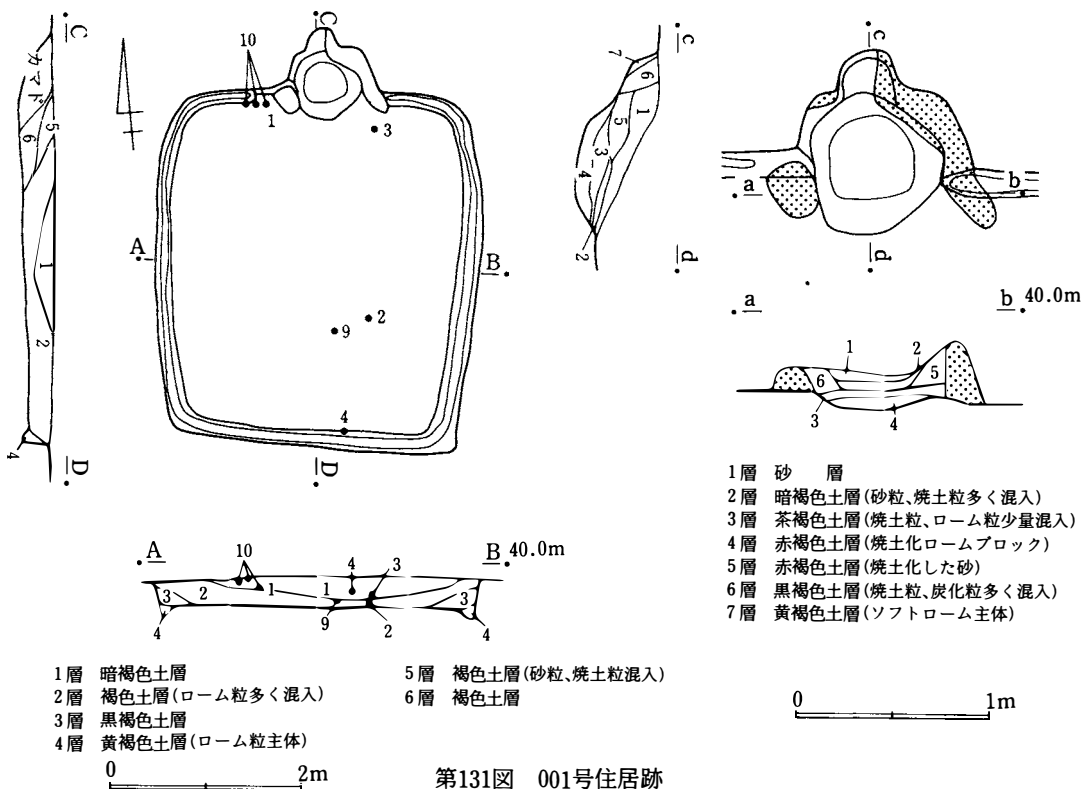
001号住居跡 (第131図, 図版43)

D 3 区, 調査区西端に位置する。規模は、3.7×3.4mを測り、南北にやや長い方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20~30cmを測る。周溝はカマド部分を除き深さ10cmで全周する。床面は平坦で堅緻である。柱穴は確認されなかった。カマドは北壁中央に位置する。壁を60cm程掘り込み、先端部は煙道を意識した幅30cmの掘り方が設けられる。燃烧部底面はよく焼けており、ロームブロックが焼土化している。

遺物の出土は多くないが、カマド両袖に接するように1・3の墨書土器が検出された。3は倒位である。

002号住居跡 (第132図, 図版44)

E 3 区, 001号住居跡の東側12m程に位置する。規模は4.6×4.4mを測り、やや隅丸の正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30~40cmを測る。周溝はカマド部分を除き、深さ10cm前後で比較的広く掘り込まれる。床面はほぼ平坦で、中央部が良好に踏み固められている。柱穴は南壁側に1本検出された。深さ14cmと浅い。カマドは北壁中央に位置する。壁を若干掘り込んで煙道を形成する。燃烧部が床面に位置する点、001号住居跡とは異なる。袖の遺存は不良である。住居跡の覆土にローム粒を多く含むことより、本住居跡は人為的に埋め戻され



たことが想定される。

遺物は覆土中より検出されているが、埋め戻された状況より一括遺物として考えられよう。

16の墨書土器はカマド煙道部内より甕とともに出土した。

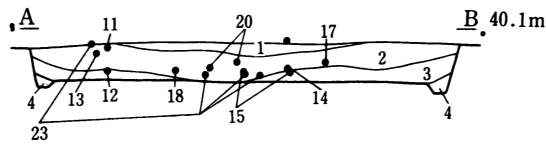
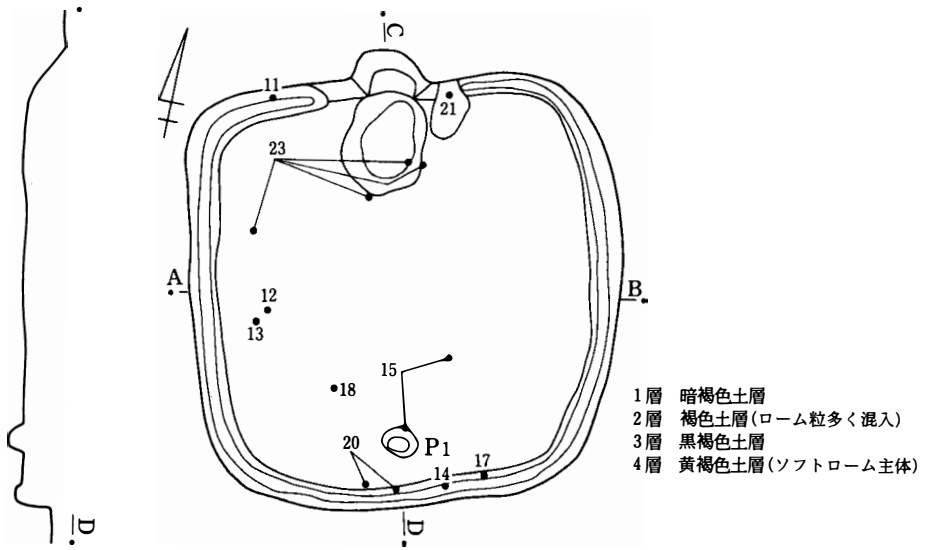
003号住居跡 (第133図, 図版44・45)

F 3区, 002号住居跡の東側16m程に位置する。規模は3.7×3.2mを測り東西にやや長い方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40cm前後を測る。周溝はカマド部分も含めて全周するが、掘り込みはきわめて浅い。床面はほぼ平坦であるが、中央部が堅緻で若干低くなる。柱穴は南壁側に深さ12cmで1本穿たれる。カマドは北壁中央部に位置する。壁を20cm程掘り込んで煙道部を形成し、燃焼部は周溝の位置に設けられる。002号住居跡同様本跡も埋め戻されたようである。

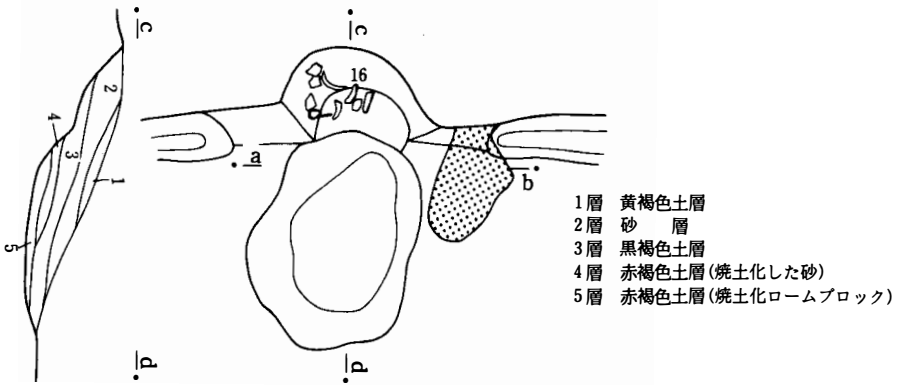
遺物の出土は少ないが、24・25の杯が床面直上、26～28の甕がカマド周辺の覆土上層に分かれて出土している。

004号住居跡 (第134図, 図版45・46)

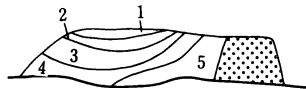
G 3区, 003号住居跡の東側14m程に位置する。規模は4.6×4.6mを測り、本遺跡では最も大きい住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は60cmと深くなる。周溝はカマド部分を



0 2m

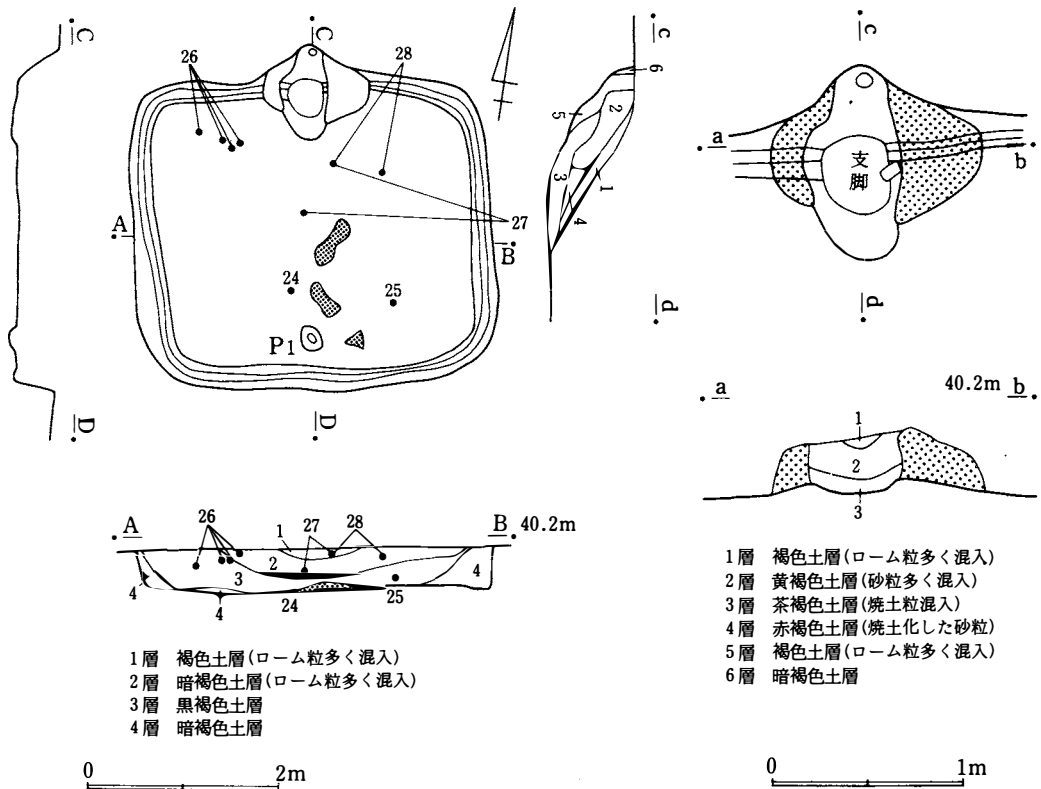


a b 40.1m



0 1m

第132図 002号住居跡



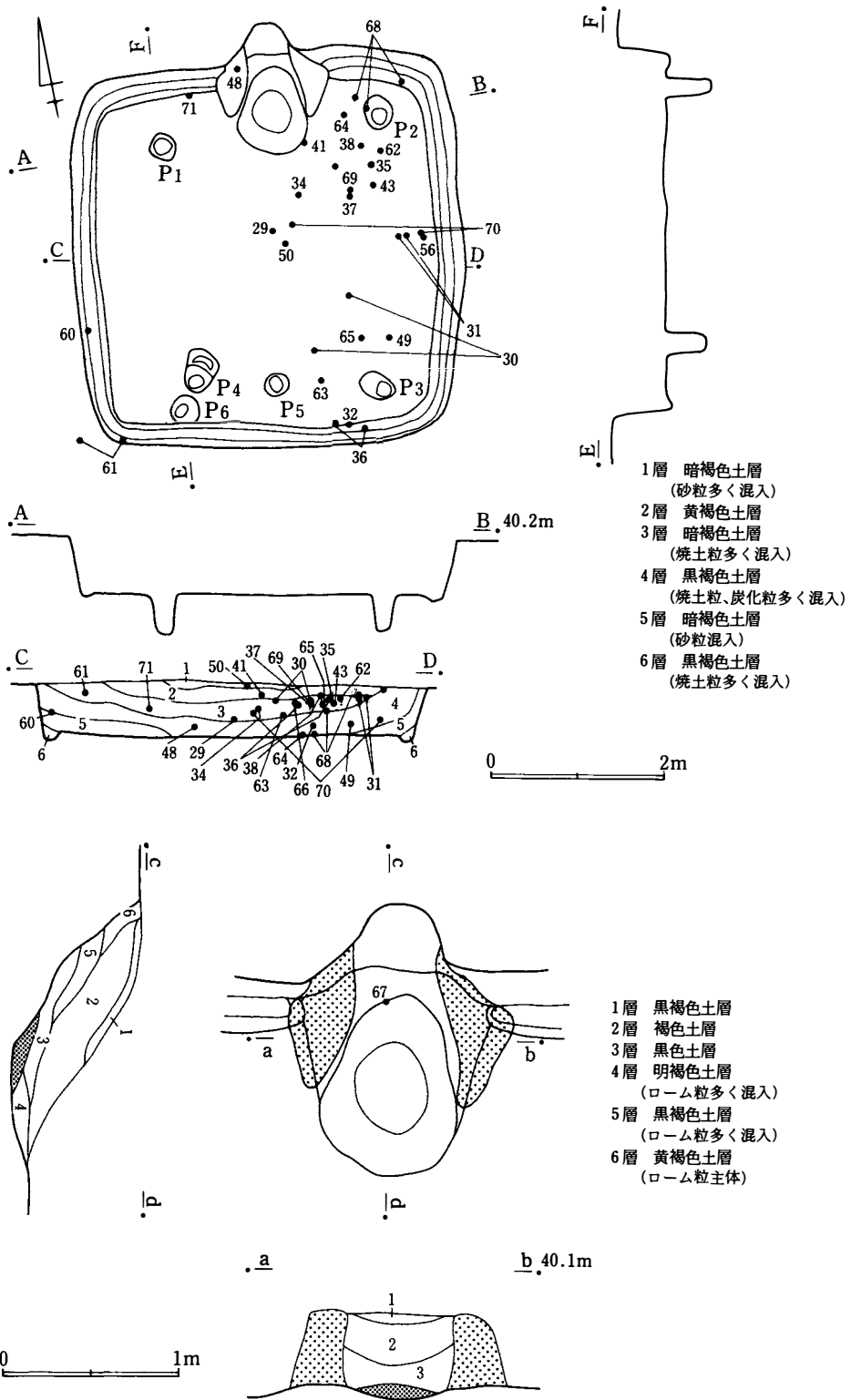
第133図 003号住居跡

除き、幅15~20cm、深さ7cm前後でしっかりと掘り込まれる。床面はほぼ平坦で、中央部が堅緻である。柱穴は対角線上に4本とP₃・P₄間にP₅、南壁に接してP₆が配置される。ほぼ同様の規模で、深さは40~55cm程である。P₅のみ浅い掘り込みである。P₃・P₄の掘り方からすると柱材を抜いたことが想定される。覆土中にローム粒を多く含むことより本跡も埋め戻されたものと考えられる。カマドは北壁中央部に位置する。壁を半円状に掘り込んで煙道部を形成し、燃焼部内に焼土が厚く堆積する。

遺物は杯を主体に多く検出されたが、北東コーナーの3層中にほとんど含まれる。11点出土した墨書土器の大部分もこの部位に集中する。埋め戻したことを前提として考えるならば、これらの土器群は一旦平坦となった所に廃棄され、その後埋土が沈下して3層中の出土となったのであろう。すなわち、多くの墨書土器を含む土器群は他の場所で使用されたことが窺えるのである。他に南西コーナーの覆土上層及び攪乱中より二彩の火舎片が出土したが、これも本跡に伴わないであろう。

005住居跡 (第135図, 図版46)

H 3区, 004号住居跡の東側14m程に位置する。規模は4.0×3.5mを測り、東辺が長い不整方



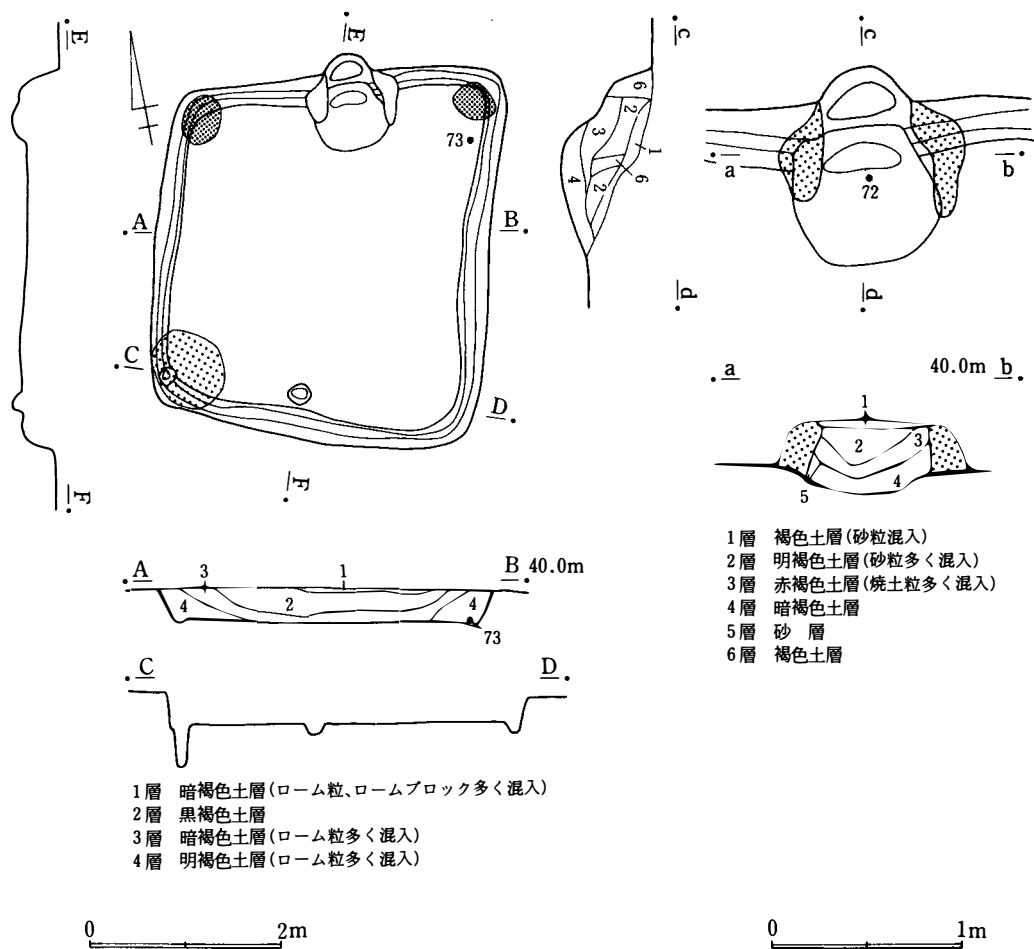
第134図 004号住居跡

形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は35cmを測る。周溝はカマド部分を除き深さ5cmで全周する。床面はほぼ平坦で、南側に若干攪乱を受ける。柱穴は南壁沿いと南西コーナーに接して2本検出された。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。壁を17cm程半円状に掘り込んで煙道部を形成し、燃烧部は壁に向かって深くなる。焼土はかなり浮いた層中に多く含まれる。

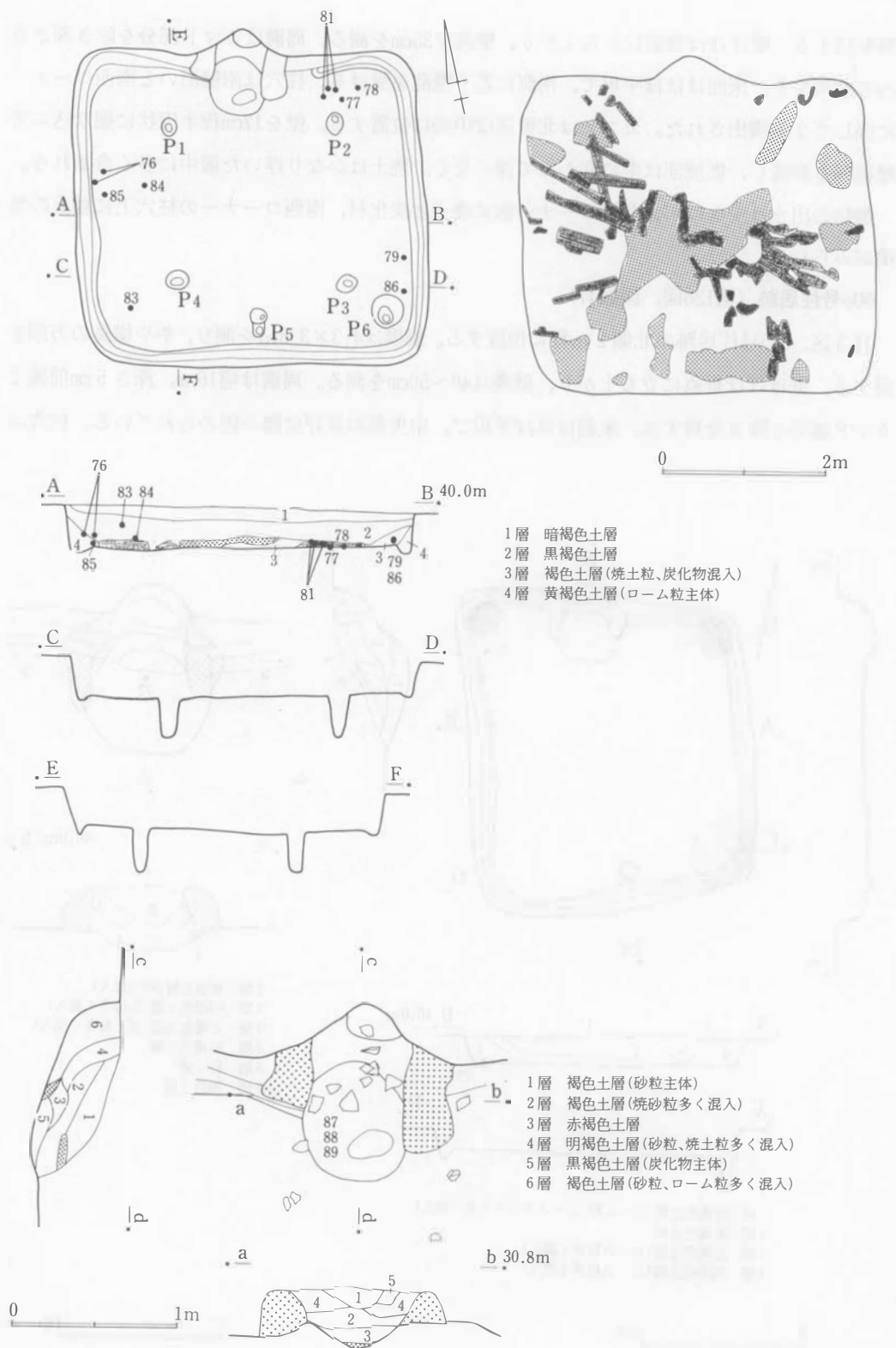
遺物の出土は少ないが、北壁コーナー部に焼土と炭化材、南西コーナーの柱穴上に粘土の堆積がみられる。

006号住居跡 (第136図, 図版47)

H 3 区, 005号住居跡の北側 2 m程に位置する。規模は4.3×3.8mを測り、やや横長の方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40~50cmを測る。周溝は幅16cm, 深さ5cm前後でカマド部分を除き全周する。床面はほぼ平坦で、中央部が良好に踏み固められている。柱穴は



第135図 005号住居跡



第136図 006号住居跡

対角線上にP₁～P₄と南壁沿い中央にP₅が配置される。いずれも深さ40～50cmで、楕円形プランを呈する。P₅は深さ11cmで外側に2段掘りされる。P₆の性格は不明である。カマドは北壁中央に位置する。壁を30cm程三角形に掘り込んで煙道部を形成し、燃烧部は内側に設けられる。焼土はブロック状に含まれる。

遺物の出土は比較的多いが、東側部分は床面上、西側は焼土上よりの検出である。位置的にみると、土師器杯は北東コーナー、須恵器杯・蓋はP₃北側の壁際、87～89の甕はカマド内の出土と器種で限定されそうである。床面上には焼土及び炭化材が全体に遺存する。柱穴内に柱材が遺存していないことより、柱を抜き取った後に焼き払ったものとする。また焼土が炭化材の上に堆積している状況から、この焼土は床面が焼けたものではなく、屋根上に置いていたものか周りから投げ込まれたものが焼けてできたものと想定される。

007号住居跡（第137図，図版48）

H 2 区に位置する。規模は3.3×3.3mを測り、隅がやや丸い正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は45～55cmと深い。周溝はカマド部分を除き全周するが、西辺のみ小規模となる。床面はほぼ平坦で、全体に堅緻である。柱穴は深さ35cmで南壁側に1本設けられる。中央に径50cmの皿状の浅い掘り込みが検出されたが、性格不明である。カマドは北壁中央に位置する。壁を35cm程三角状に掘り込み煙道部を形成する。燃烧部は長楕円形となる。

遺物は、カマド周辺及び壁際に集中する。すべて床面直上の出土である。

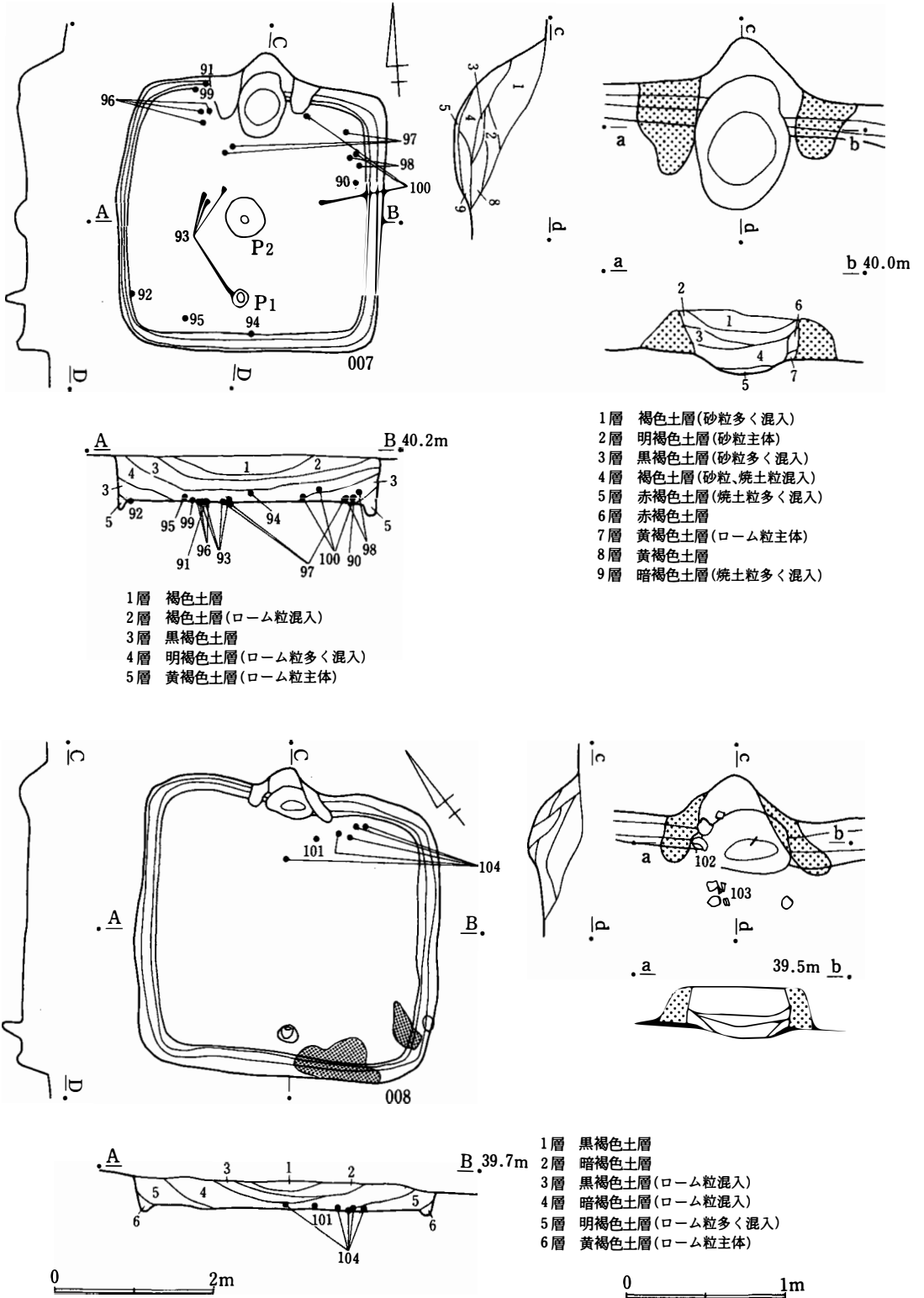
008号住居跡（第137図，図版49）

I 2 区，007号住居跡の北東10m程に位置する。他の住居跡とは若干向きを異なる。規模は3.8×3.5mを測り、やや横長の方形を呈する。壁は若干外傾し、壁高は35cm前後を測る。周溝はカマド部分を除き全周するが、南東壁に向かうにつれて徐々に浅くなる。床面はほぼ平坦で、中央部が良好に踏み固められる。柱穴は南西壁側に深さ16cmで1本検出された。カマドは北東壁中央に位置する。壁を30cm程三角形に掘り込んで煙道部を形成する。燃烧部は横長の小規模な楕円形を呈する。

遺物の出土は少ないが、図示した土器はすべてカマド内及びカマド前面の床面上よりの出土である。

009号住居跡（第138図，図版49）

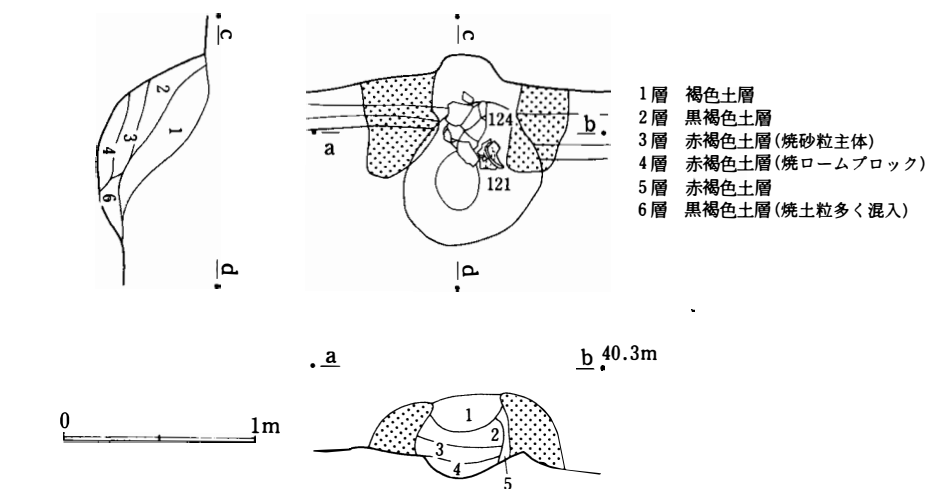
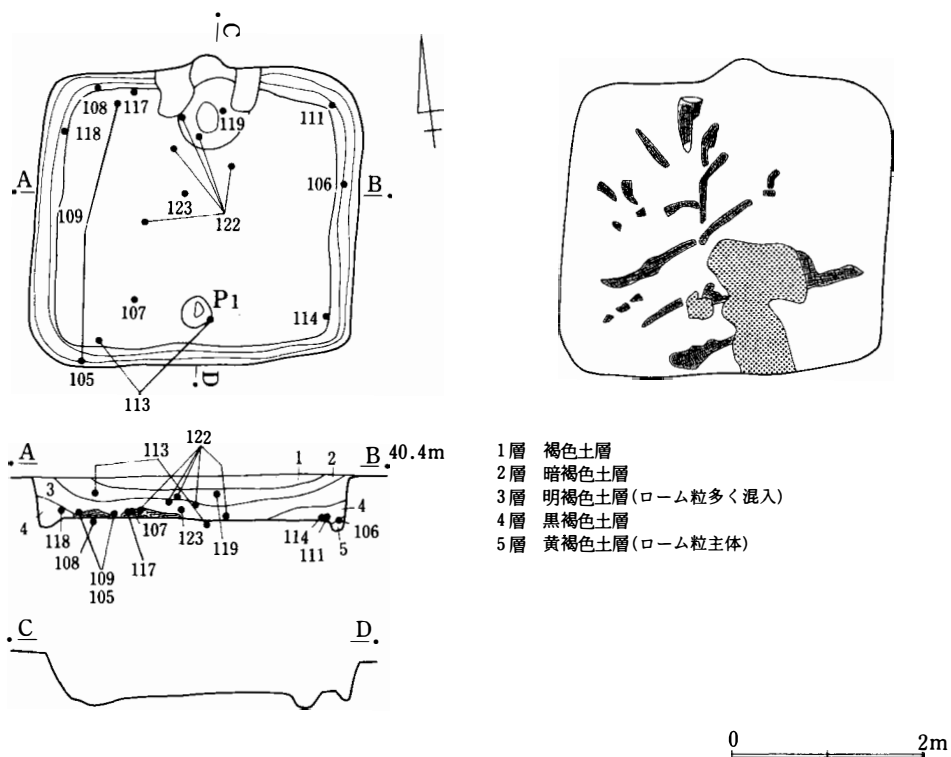
H 1 区，007号住居跡の北西10m程に位置する。規模は3.4×3.0mを測り、やや横長の方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40cm前後を測る。周溝は幅20cm、深さ5cm程で、カマド部分を除き全周する。床面はほぼ平坦で、全体に堅緻である。柱穴は南壁側に深さ18cmで1本検出された。覆土中にローム粒を多く含むことより、本跡は人為的に埋め戻されたと想定される。カマドは北壁中央に位置する。壁を若干掘り込んで煙道部を形成し、燃烧部は比較



第137図 007・008号住居跡

的深く掘り込まれる。袖の遺存は良好で、底面上には焼土化したロームブロックが堆積する。

遺物は比較的多く検出された。その分布から、杯類は壁際の床面直上、甕はカマド内及びカマド前面の焼土上に遺存する状況が窺える。「殖生」・「山加」の墨書土器は、南西コーナーの周



第138図 009号住居跡

東野遺跡 (No.34)

溝上出土である。床面上には全体に焼土及び炭化材の分布がみられる。これらの状況は006号住居跡例と同様であり、意識的に焼いた後埋め戻したものであろう。

010号住居跡 (第139図, 図版50)

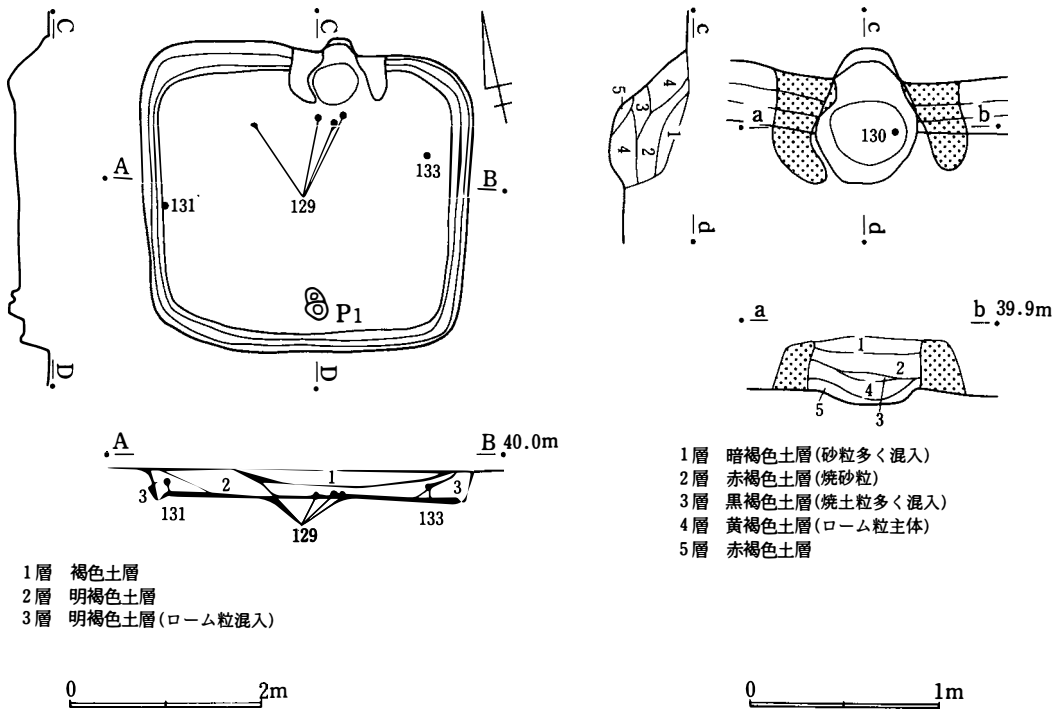
H 1 区, 009号住居跡の北東10m程に位置する。規模は3.5×3.2mを測り, やや横長の隅丸方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 壁高は30cm程を測る。周溝は深さ5cm程でカマド部分を除き全周する。床面はほぼ平坦で, 中央部が良好に踏み固められている。柱穴は南壁側に深さ14cmで1本検出された。掘り直したように2つのピットが重複する。カマドは北壁の若干東寄りに位置する。壁を20cm程台形上に掘り込んで煙道部を形成する。

遺物の出土は少なく, カマド周辺及び壁際に散在する。

住居跡出土土器 (第140~147図, 図版55~57)

001号住居跡 (1~10)

本住居跡では, 杯B・Cと甕が2点図示できた。2は杯B 1で, 厚い底部から体部が直線的に外傾する。口唇部はやや尖がり気味となる。1・5・8は杯C 1である。1は内面のロクロ目が強く, 外面にナデ状の丁寧なヘラケズリを施す点特徴的である。3・4・6・7は杯C 2である。3は口縁部の3ヶ所に欠損部が認められるが, この割れ口に油煙が付着することより,



第139図 010号住居跡

意識的に打ち欠いたものと考えられる。1と3の体部外面には「大」の墨書が記される。1の方がやや小さく、筆割れの部分が観察される。9は小形甕，10は底部を欠損する甕である。いずれも口唇部がつまみ上げられるが，9は外傾，10は内傾する。

002号住居跡 (11～23)

出土土器は，杯B・C 6点，長頸瓶1点，甕6点である。11・13は杯B 2である。11の底部外面には「申」の墨書がみられる。12は杯B 3で，底部がやや丸底状となる。ロクロ目は弱い。14～16は杯C 3で，底部は全面ヘラケズリされる。体部下端のナデが強いために底部が若干突出気味となる。16の体部外面墨書は欠損しているため確実ではないが，他の例より「國玉」と考えられよう。17は頸部片で，淡緑色の釉が全面にかかる。18～23は甕で，口唇部が上方につまみ上げられる。21は器肉が厚く，胎土中に雲母粒を多く含む点他の甕とは異なる。

003号住居跡 (24～28)

土器の出土は少なく，杯が2点と甕3点のみ実測できた。24・25は杯B 3である。ロクロ目は弱く，底部は静止糸切りとなる。24は体部と底部に墨書される。体部は破損のため不明である。27・28の口唇部は上方につまみ上げられる。28は胴部下半に粗いヘラミガキを施しており，特徴的な胎土とともに「常総型」の甕として捉えられる。

004号住居跡 (29～71)

本遺跡のなかでは最も多く土器が検出された。図示できた土器は，土師器杯29点・須恵器杯1点・須恵器蓋1点・高台付杯1点・二彩火舎1点・手捏2点・甕8点である。本住居跡は，廃棄後埋め戻され，その上に墨書土器を含む多くの土器が一括して捨てられている状況を想定したが，床面上で出土した土器との時期差は窺われず，埋め戻した後それほど期間を置かず土器群の廃棄行為が行われたことが考えられよう。杯のタイプにはかなりバラエティーがあり，B 1 (31)・B 2 (29)・C 1 (33, 38)・C 2 (32, 37, 39)・C 3 (30, 34～36, 41, 42)・D 1 (40)・F (43)が存在する。墨書土器は11点検出された。「國玉」と記されたものが圧倒的に多く，53・54も残存部分より同一の文字とすれば，計9点となる。杯C 2・C 3のみに記されるようである。58・59の須恵器は胎土中に長石粒を多く含む特徴があり，常陸産と考えられる。61は二彩火舎の体部片で，脚部を欠損する。素地は白色で，内外面に白色と緑色の釉がかかる。現存する底部も同様である。部分的に剝落あるいは磨耗しているが，発色・光沢とも良好である。施釉の順序は白色・緑色の順である。62・63は手捏土器で，比較的丁寧に整形される。62の底部には木葉痕が残る。64～71は甕で，66・71は須恵器である。70は底部に木葉痕を残し，胴部下半にヘラミガキを施す「常総型」の甕である。

005号住居跡 (72～74)

土器量はきわめて少なく，杯3点を図示できたのみである。72・73とも杯C 2である。72は

東野遺跡 (No.34)

厚い底部から体部が徐々に器厚を減少しながら直線的に立ち上がる。ロクロ目は比較的強い。74は底部外面に墨書がみられるが、破損しているため判読できない。

006号住居跡 (75～89)

出土土器は、杯10点、須恵器蓋1点、鉢1点、甕3点である。杯はCタイプのみ認められるが、C 2 (78, 80)・C 3 (76, 77)・C 4 (81)・C 5 (75) とバラエティーに富む。79は須恵器の杯である。ロクロ目は弱く、丁寧にヨコナデが施される。底部は回転糸切りの後周辺に回転ヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で、小石が若干含まれる。胎土及び調整等より北武蔵方面の産の可能性もある。82は底部外面に「丈部」の墨書が記される。86は須恵器の蓋で、つまみを欠損する。口縁端部に平坦な面を有する。胎土中に大粒の長石粒と雲母を含むことより、在地産と考えられる。87～89は口唇部をつまみ上げる甕である。87の胴部下半にはヘラミガキが施される。

007号住居跡 (90～100)

本住居跡では杯4点、高台付杯1点、甕6点が実測できた。90は杯A、91・92は杯B 3である。93は底部外面に「國玉」の墨書が記される。95～100は甕で、97は須恵器である。100は酸化焰焼成であるが、技法的には須恵器と同一である。95は小形となるものである。

008号住居跡 (101～104)

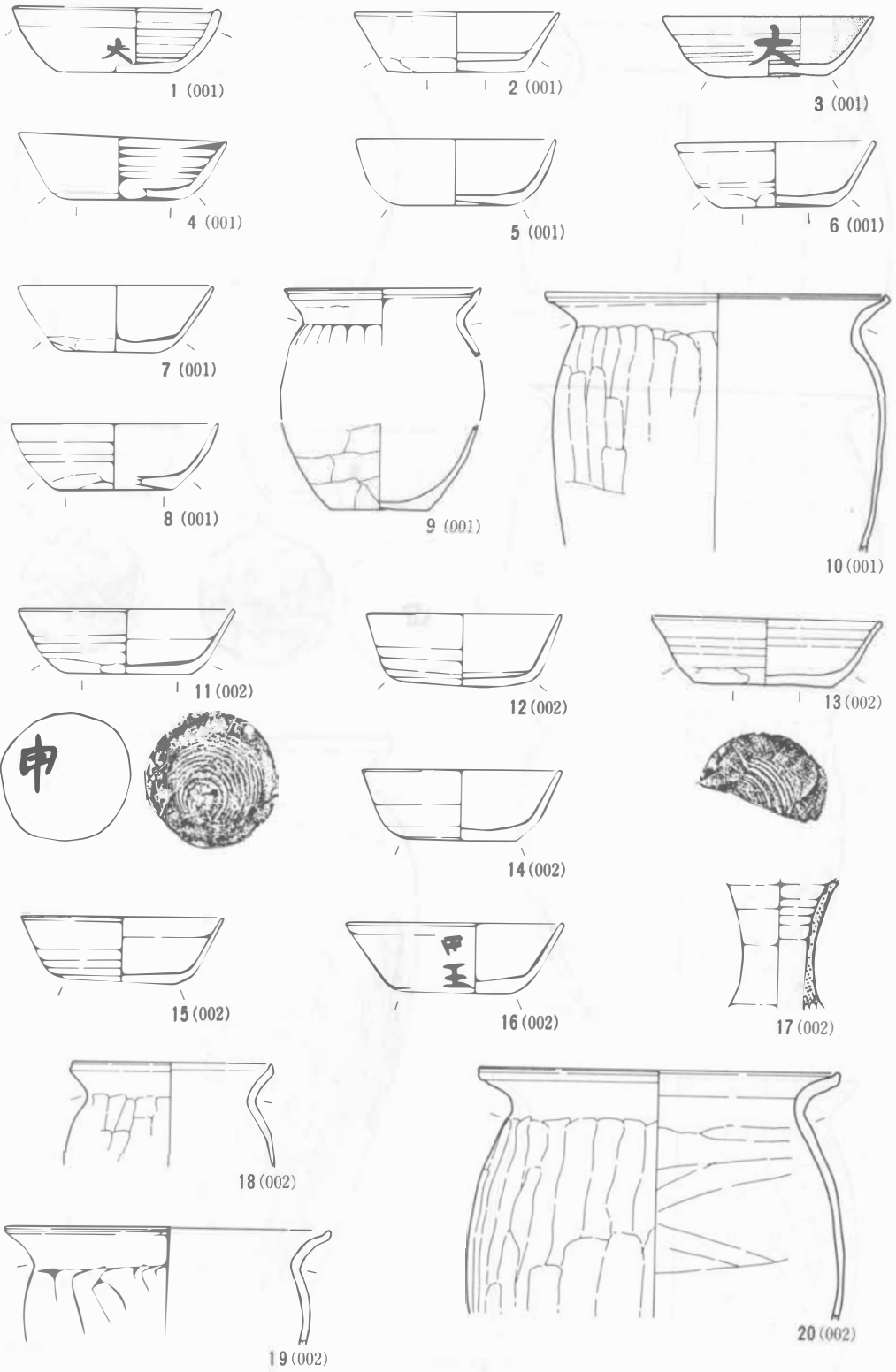
出土土器は少なく、杯2点と甕2点のみ図示できた。101は杯C 5、102は杯D 2となる。103・104は胴部下半にヘラミガキを施す「常総型」の甕である。口唇部は直立状につまみ上げられる。

009号住居跡 (105～128)

本住居跡は人為的に焼失したもので、土器は004号住居跡に次いで多い。図示できた土器は、杯7点、高台付杯2点、蓋1点、甕12点等である。杯にはB、Cタイプが認められ、105がB 1、106、108～110がB 3、107がC 1、111がC 3となる。墨書は105と109の体部外面に記される。109は明瞭に「埴生」と判読できる。105は墨書がきわめて薄いために明瞭ではないが、「山加」となるであろう。113・114は高台付杯で、113は須恵器である。形態的に若干異なるが、調整は同様である。115は土師器の蓋で、つまみを欠損する。口唇部の折れは短い、内面の稜は明瞭である。117～128は甕である。口唇部はすべてつまみ上げられる。118～120の胴部は肉厚がきわめて薄くなるのに対して、121～123の胴部は厚くなる。後者は胎土中に長石・雲母粒を多く含み、胴部下半にヘラミガキを施す「常総型」の甕である。

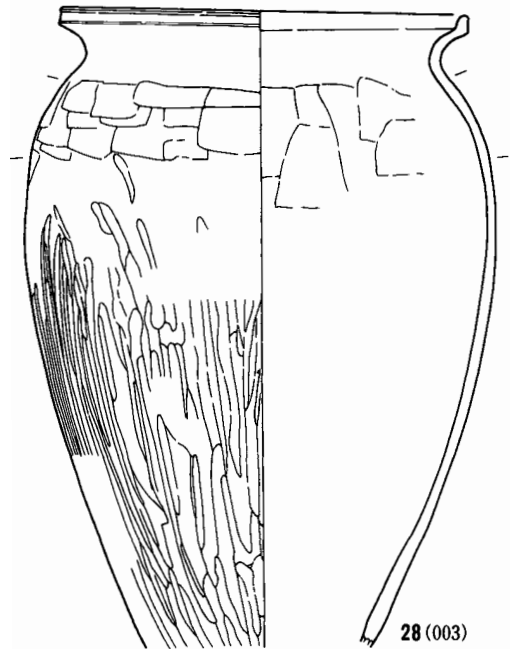
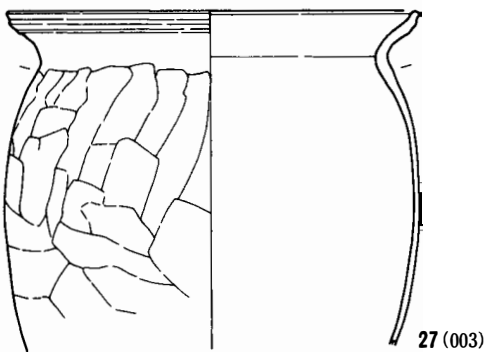
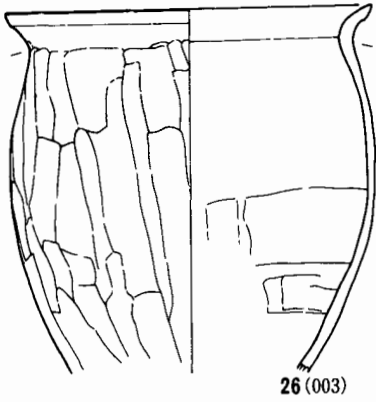
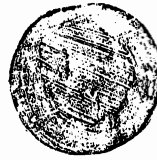
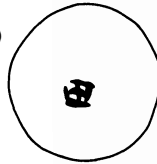
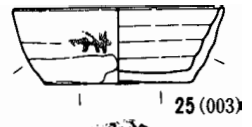
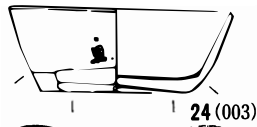
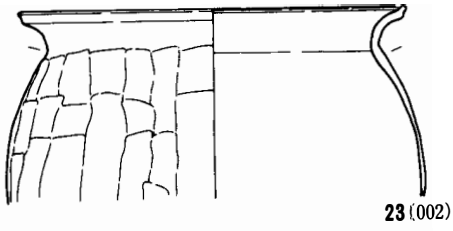
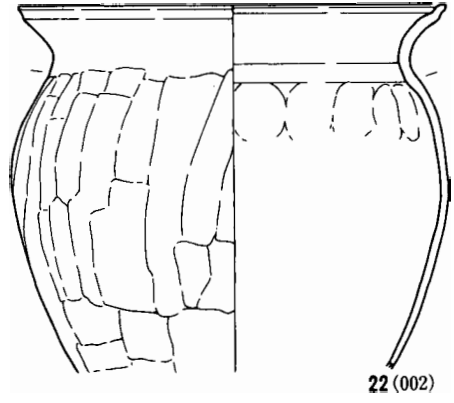
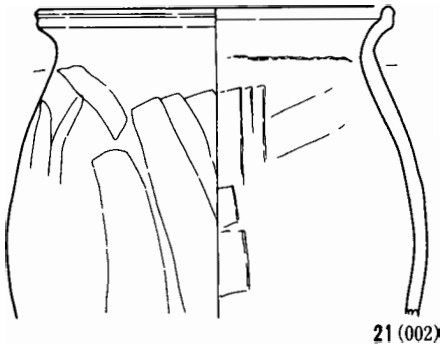
010号住居跡 (129～133)

土器の出土は少なく、杯4点と甕1点実測できたにすぎない。129は杯B 1、130、131は杯C 3である。129は底部が回転糸切り離して無調整である点を考えれば、杯Fの範疇に入るものであるが、形態よりあえてB 1とした。133は須恵器の甕で、斜位のタタキが施される。

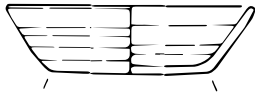


0 10cm

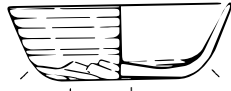
第140图 住居跡出土土器(1)



第141図 住居跡出土土器(2)



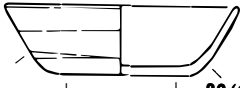
29 (004)



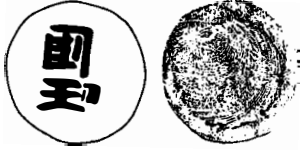
30 (004)



31 (004)



32 (004)



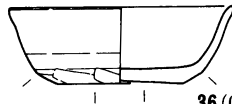
33 (004)



34 (004)



35 (004)



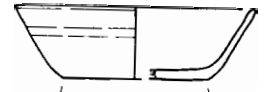
36 (004)



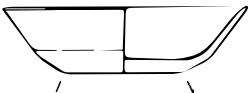
37 (004)



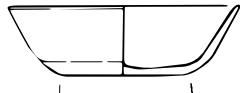
38 (004)



39 (004)



40 (004)



41 (004)



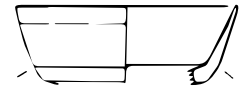
42 (004)



43 (004)



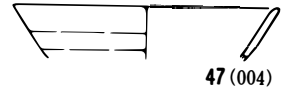
44 (004)



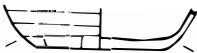
45 (004)



46 (004)



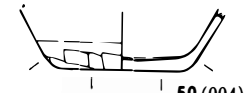
47 (004)



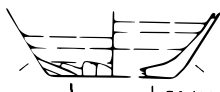
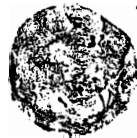
48 (004)



49 (004)



50 (004)



51 (004)



52 (004)



53 (004)



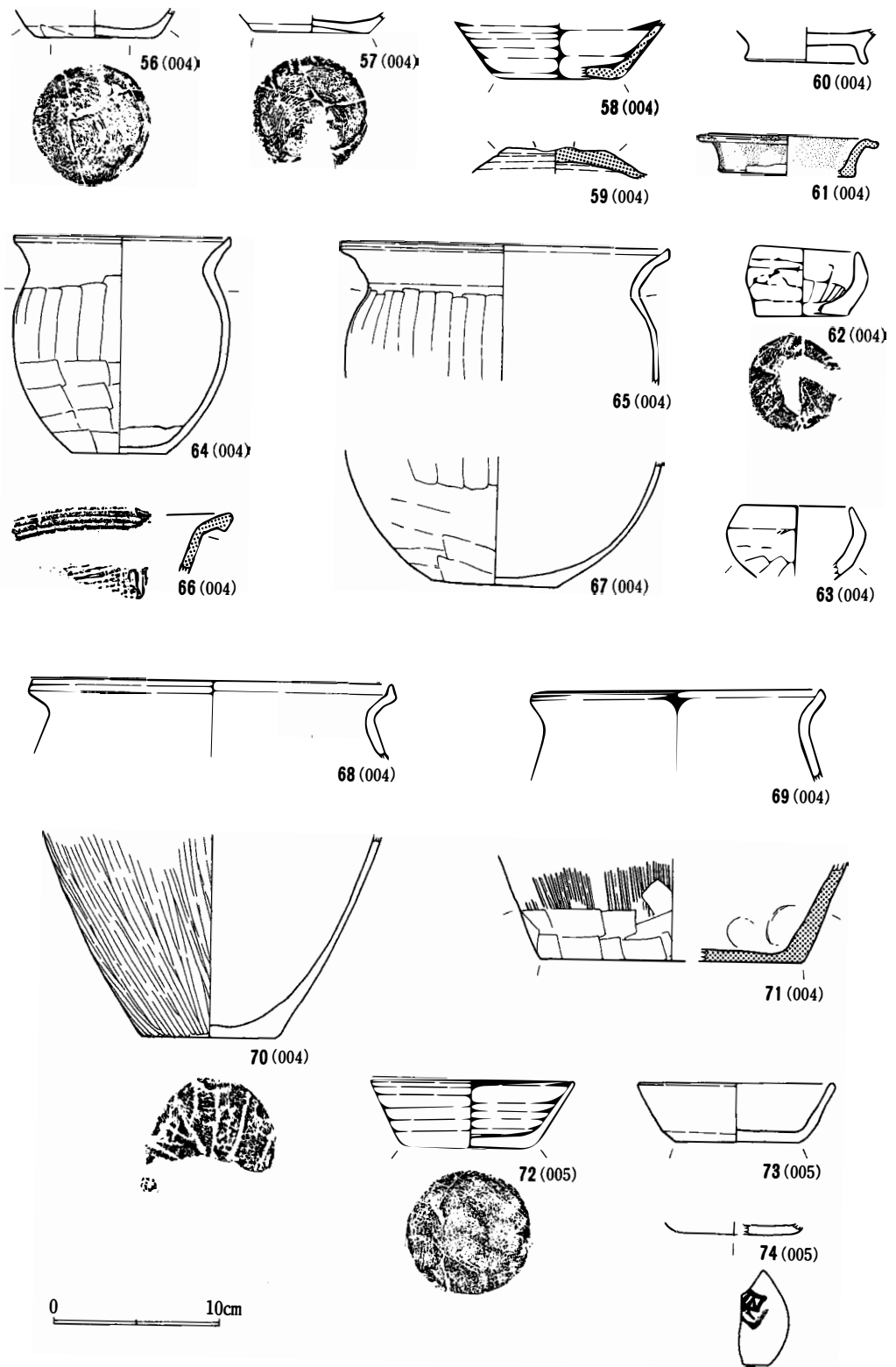
54 (004)



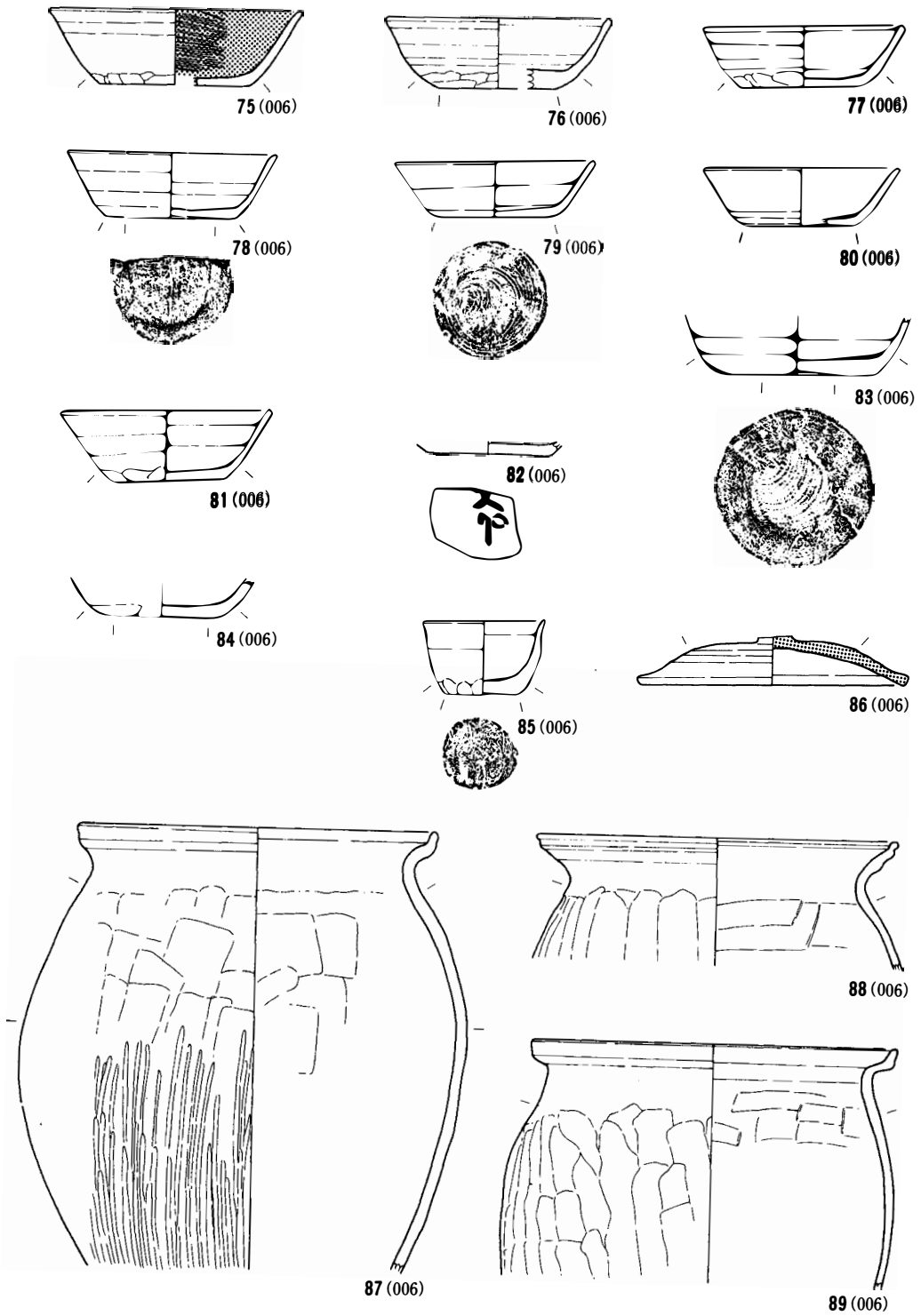
55 (004)



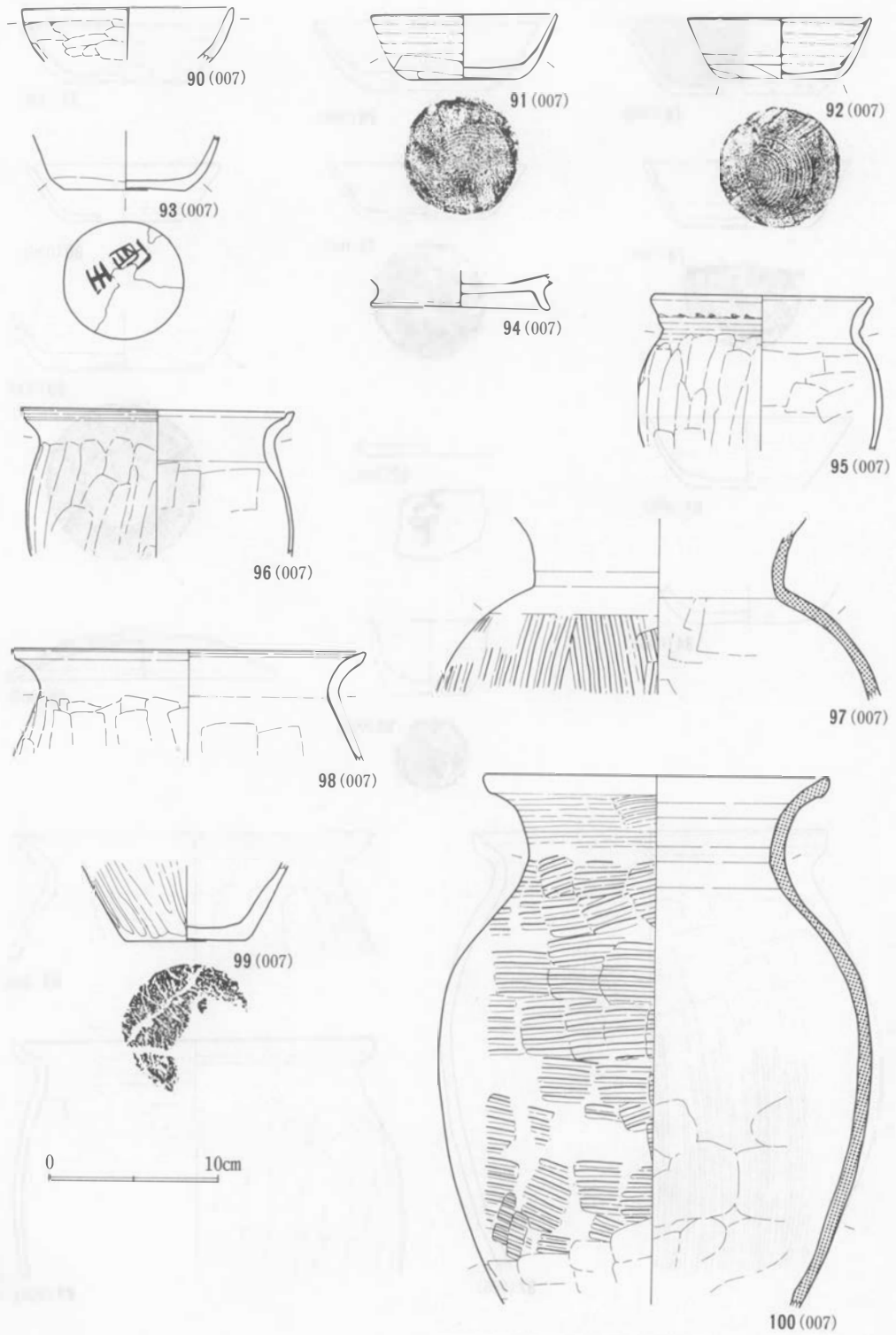
第142図 住居跡出土土器(3)



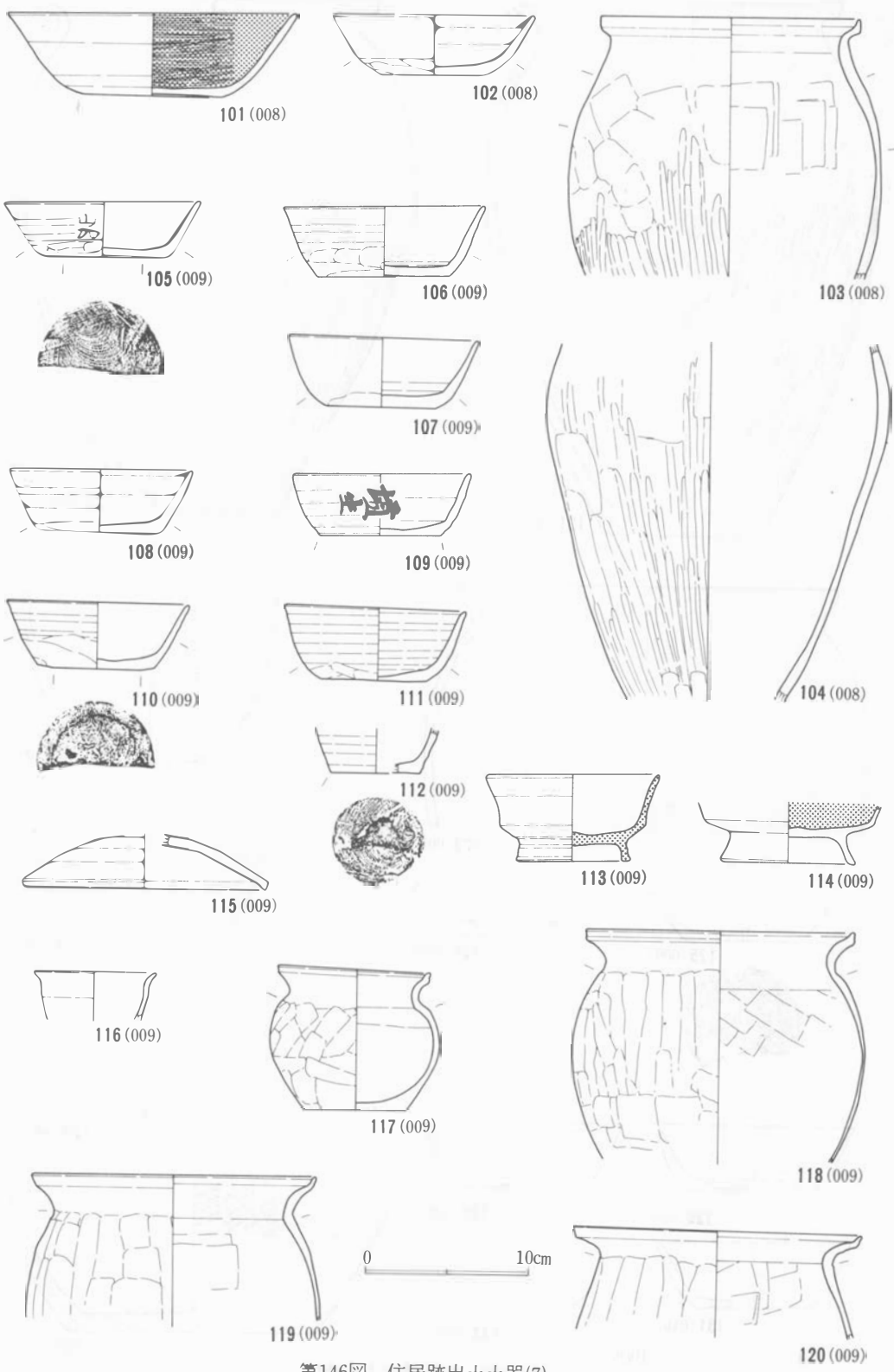
第143図 住居跡出土土器(4)



第144图 住居跡出土土器(5)

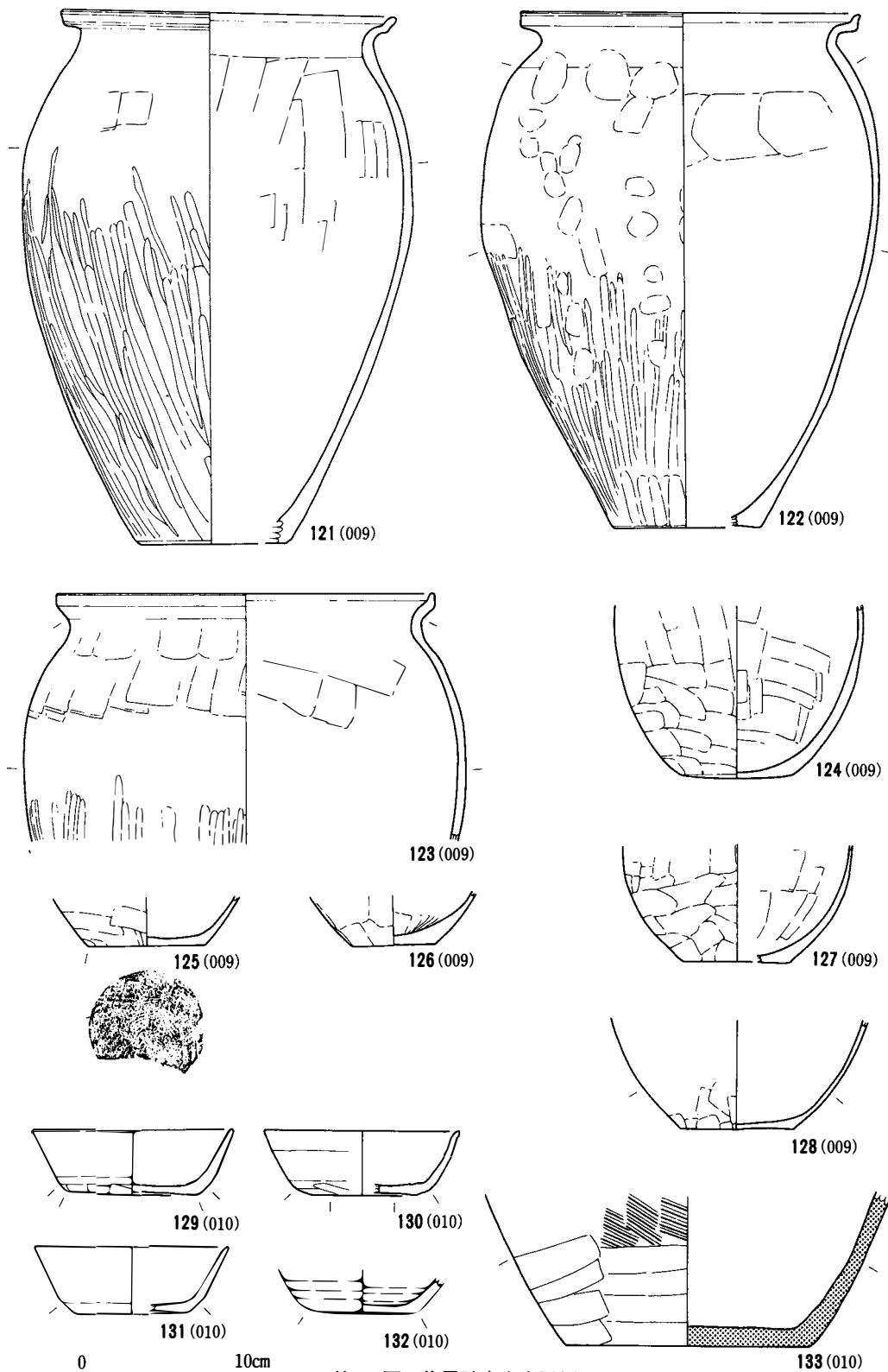


第145図 住居跡出土土器(6)



第146图 住居跡出土土器(7)

東野遺跡 (No.34)



第147図 住居跡出土土器(8)

東野遺跡住居跡出土土器観察表

挿図 番号	器 種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	杯	12.4 6.9 3.9	6/6	口縁部～体部内面ヨコナデ 体部外面手持ちヘラケズリ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	中粒砂多粗	橙褐色	良好	墨書「大」
2	杯	(12.4) (8.4) 3.7	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	L	中粒砂多	橙褐色	良好	
3	杯	12.5 7.0 3.65	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	L	中粒砂 雲母粒多	乳橙色	良好	墨書「大」 体部内外面スス付着
4	杯	12.4 7.4 3.8	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁回転ヘラケズ リ、座部回転糸切り	R	中粒砂多 酸化鉄粒少	橙褐色	良好	
5	杯	(12.0) (7.8) 4.0	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラ ケズリ	不明	中粒砂 酸化鉄粒多	橙褐色	良好	
6	杯	(12.0) (6.9) 3.9	1/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	中粒砂多 酸化鉄粒少	橙褐色	良好	
7	杯	11.6 6.1 3.9	4/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケ ズリ	L	中粒砂多 酸化鉄粒少 長石粒少	乳橙色	良好	
8	杯	(12.3) (7.2) 3.85	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	中粒砂多 酸化鉄粒少	橙褐色	良好	
9	甕	11.6 (5.6) —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ 胴部外面～底部ヘラケズリ		中粒砂多	暗褐色	良好	
10	甕	20.0 — —	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ		中粒砂多 酸化鉄粒少	橙褐色	良好	
11	杯	12.8 7.7 3.8	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	R	砂粒	赤褐色	良好	墨書「申」
12	杯	11.7 8.6 4.3	5/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒少	赤褐色	普通	
13	杯	(14.2) 8.0 3.9	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	微砂粒 雲母粒	淡褐色	普通	
14	杯	12.3 7.1 4.1	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	細砂粒	淡赤褐色	良好	
15	杯	12.0 6.6 3.9	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後全面手持ちヘラ ケズリ	不明	細砂粒多	淡黄褐色	普通	
16	杯	13.1 6.7 4.1	3/6	体部内外面ヨコナデ 座部全面手持ちヘラケズリ	不明	砂粒	淡黄褐色	普通	墨書「國玉」
17	長頸壺	— — —	1/6	内外面ヨコナデ	R	砂粒少	灰色	良好	灰釉
18	甕	11.8 — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		微砂粒	茶褐色	良好	
19	甕	(19.4) — —	2/6	口縁部～胴部内面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ		微砂粒	褐色	良好	
20	甕	(21.4) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		細砂粒多	(外)黒褐色 (内)黄褐色	普通	
21	甕	(19.2) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		大砂粒	赤褐色	普通	

東野遺跡 (No.34)

挿図 番号	器 種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
22	甕	22.4 — —	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		細砂粒多	赤褐色	普通	
23	甕	(20.4) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		微砂粒多	赤褐色	普通	
24	杯	11.9 7.7 4.4	5/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁回転ヘラケズ リ、底部静止糸切り	L	微砂粒少	淡褐色	普通	墨書「田」□
25	杯	11.0 8.2 4.0	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁回転ヘラケズ リ、底部静止糸切り	L	微砂粒	(外)茶褐色 (内)赤褐色	良好	墨書不明 スス付着
26	甕	(19.4) — —	4/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ		微砂粒	赤褐色	良好	
27	甕	21.6 — —	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		微砂粒	赤褐色	普通	
28	甕	21.4 — —	5/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ、外面上半ヘラナデ、 下半ヘラミガキ		中砂粒 長石粒・石英粒 雲母粒	乳褐色	普通	
29	杯	(13.0) 8.2 3.6	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒少	橙褐色	良好	
30	杯	(11.8) 6.6 3.9	4/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	R	小砂粒 長石粒、雲母粒 酸化鉄粒	橙褐色	良好	
31	杯	(12.0) (7.8) 3.6	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒 長石粒 石英粒	赤褐色	良好	
32	杯	12.2 7.4 3.8	4/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端回転ヘラケズリ、底部回 転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	R	長石粒 石英粒 酸化鉄粒	橙褐色	良好	墨書「國玉」
33	杯	(11.4) 7.2 3.5	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒少 長石粒	暗褐色	良好	
34	杯	12.2 6.8 3.8	5/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケ ズリ	R	砂粒 長石粒 酸化鉄粒	橙褐色	良好	墨書「國玉」
35	杯	11.7 6.8 3.9	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	粗砂粒多 長石粒、石英粒 酸化鉄粒	橙褐色	普通	墨書「國玉」
36	杯	(11.8) 6.4 4.0	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	R	小砂粒 長石粒、石英粒 酸化鉄粒	橙褐色	良好	墨書「國玉」
37	杯	12.3 7.1 3.6	4/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	小石粒 石英粒 砂粒多	橙褐色	良好	墨書「國玉」
38	杯	(13.0) (7.4) 4.4	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	不明	微砂粒	赤褐色	良好	
39	杯	(12.6) (7.4) 3.7	2/6	体部内外面ヨコナデ 座部全面手持ちヘラケズリ	不明	砂粒多 石英粒	暗赤褐色	良好	
40	杯	(12.8) 6.4 3.4	1/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒 長石粒 石英粒	橙褐色	良好	
41	杯	12.2 6.8 3.6	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒多 長石粒 酸化鉄粒	黄灰色	普通	
42	杯	(12.0) (6.8) 3.9	2/6	体部内外面ヨコナデ	不明	小砂粒多 長石粒	橙褐色	良好	

挿図 番号	器 種	法量 (cm)	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
		口・底・高							
43	杯	(11.0) (6.6) 3.8	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	砂粒少 長石粒	暗褐色	良 好	
44	杯	(11.2) (7.4)	2/6	体部内外面ヨコナデ	不明	小砂粒多	赤褐色	普 通	
45	杯	11.6 — —	4/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端回転ヘラケズリ	R	小砂粒 長石粒 酸化鉄粒	茶褐色	良 好	内面に油煙付着
46	杯	(13.2) — —	1/6	体部内外面ヨコナデ	不明	小砂粒多 長石粒 石英粒	橙褐色	良 好	墨書「國玉」
47	杯	(14.0) — —	2/6	体部内外面ヨコナデ	R	小砂粒多 長石粒	橙褐色	良 好	
48	杯	— 6.7 —	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	R	砂粒多 長石粒	橙褐色	良 好	墨書「國玉」
49	杯	— 7.0 —	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	砂粒少 雲母粒	暗褐色	良 好	
50	杯	— 6.9 —	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	砂粒 長石粒 石英粒	暗褐色	良 好	
51	杯	— 6.6 —	1/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	R	砂粒 石英粒	赤褐色	良 好	
52	杯	— — —	1/6	体部内外面ヨコナデ	不明	小砂粒多	明褐色	普 通	墨書「野□」
53	杯	— — —	1/6	体部内外面ヨコナデ	不明	長石粒 雲母粒多	橙褐色	良 好	墨書「國」か(玉)
54	杯	(7.2) — —	2/6	体部内外面ヨコナデ	不明	小砂粒多	明褐色	良 好	墨書(國)「玉」
55	杯	— — —	1/6	体部下端手持ちヘラケズリ	不明	長石粒	橙褐色	良 好	墨書不明
56	杯	— 7.2 —	2/6	体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒	赤褐色	普 通	
57	杯	— 7.0 —	2/6	底部回転糸切り	不明	小砂粒多	橙褐色	普 通	
58	杯	(7.4) — —	1/6	体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒多 長石粒 石英粒	灰褐色	良 好	須恵器
59	杯 蓋	— — —	3/6	体部内外面ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	R	やや粗 長石粒、石英粒 雲母粒多	灰褐色	良 好	須恵器
60	高台付杯	(7.4) — —	2/6	高台部ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ	不明	小砂粒少	黒褐色	良 好	
61	火 舎	(10.9) (8.3)	2/6	体部ロクロナデ 底部ヘラケズリ		密 軟質	素地は白色 釉は緑色と白色	良 好	二彩
62	手捏ね	6.1 5.7 4.0	5/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ、外面指ナデ 底部木葉痕		小砂粒多 長石粒	暗褐色	普 通	
63	手捏ね	(6.8) — —	2/6	口縁部～胴部内面ヨコナデ 胴部上半ナデ、下半ヘラケズリ		小砂粒多 長石粒 酸化鉄粒	橙褐色	良 好	

東野遺跡 (No.34)

挿図 番号	器 種	法量(cm)	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
		口・底・高							
64	小形甕	(13.0) 5.7 12.7	2/6	口縁部～胴部内面ヨコナデ 胴部外面～底部ヘラケズリ		やや粗 砂粒多 長石粒酸化鉄粒	(外)暗赤褐色 (内)赤褐色	普通	内面上半にスス附着
65	甕	(20.0) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒少 長石粒、石英粒 酸化鉄粒	橙褐色	良好	67と同一個体
66	甕	— — —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面叱き目		長石粒	暗灰色	良好	須恵器
67	甕	— 7.8 —	2/6	胴部内面ナデ 胴部外面～底部ヘラケズリ		小砂粒少 長石粒 石英粒	橙褐色	良好	
68	甕	(21.8) — —	1/6	内外面ナデ		密砂粒多 長石粒 石英粒	橙褐色	良好	
69	甕	(17.6) — —	1/6	内外面ナデ		小砂粒多 長石粒 石英粒	茶褐色	普通	
70	甕	— 18.0 —	2/6	胴部内面ナデ 胴部外面粗いヘラミガキ 底部木葉痕		砂粒多 長石粒 石英粒	橙褐色	普通	
71	甕	— (15.8) —	1/6	胴部内面指オサエ後ヨコナデ 胴部外面叩き目、下端ヘラケズリ 底部ナデ		長石粒 雲母粒多	暗灰褐色	良好	須恵器
72	杯	(12.4) 7.2 4.1	4/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	L	小砂粒	赤褐色	普通	
73	杯	11.9 7.4 3.5	5/6	体部外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒	明褐色 上半黒変	良好	
74	杯	— (6.8) —	1/6	底部ヘラケズリ	不明	砂粒	赤褐色	普通	墨書不明
75	杯	(14.7) (8.8) 4.4	1/6	体部内面ヘラミガキ 体部外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒	黒褐色 一部淡褐色	良好	内黒
76	杯	(13.4) (6.8) 4.2	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒	茶褐色	良好	
77	杯	12.0 7.3 3.5	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒	明褐色 上半黒色	良好	
78	杯	12.4 8.2 3.9	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	R	小砂粒	赤褐色	良好	
79	杯	12.0 6.8 3.3	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	R	小砂粒 大礫	灰色	良好	須恵器
80	杯	(12.2) (7.2) 3.5	1/6	体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒	明褐色	良好	
81	杯	12.5 6.5 4.2	4/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒	明茶褐色	良好	
82	杯	— (7.4) —	1/6	底部手持ちヘラケズリ	R	小砂粒	淡褐色	普通	墨書「丈部」か
83	杯	— 9.4 —	1/6	体部下端～底部周縁回転ヘラケズリ 底部回転糸切り	L	小砂粒	淡赤褐色	普通	
84	杯	— 6.2 —	1/6	体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	不明	小砂粒	赤褐色	良好	

挿図 番号	器 種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
85	鉢	7.3 4.3 4.3	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズミ 底部回転糸切り	R	砂粒少	褐色	良好	
86	杯 蓋	16.0 — 3.5	4/6	体部内外面ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	L	砂粒多 長石粒多 石英粒多	(内)暗灰色 (外)灰色	良好	須恵器
87	甕	21.2 — —	3/6	口縁部～胴部内面ナデ 口縁部外面ヨコナデ 胴部上半ナデ、下半ヘラミガキ		砂粒多 長石粒、石英粒 雲母粒	褐色	普通	
88	甕	21.3 — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒	赤褐色	普通	
89	甕	21.5 — —	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒	暗褐色	良好	外面にスス附着
90	杯	(12.6) — —	2/6	口縁部～体部内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ		小砂粒 雲母粒	赤褐色	良好	外面にスス附着
91	杯	(10.2) 7.0 3.9	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部静止糸切り	不明	小砂粒	明褐色	良好	
92	杯	11.0 7.2 3.8	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	R	小砂粒	明褐色	良好	
93	杯	— — 7.0	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面回転ヘラケズ リ	R	小砂粒多	赤褐色	良好	墨書「國」
94	高台付杯	— — 10.7	2/6	高台部ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ	R	砂粒少	淡赤褐色	良好	
95	甕	(13.2) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒 雲母粒	褐色	良好	スス附着
96	甕	16.3 — —	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒	褐色	普通	スス附着
97	甕	— — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面叩き目		砂粒多 石英粒	灰褐色	普通	須恵器
98	甕	(21.0) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒	褐色	良好	外面にスス附着
99	甕	— — 7.2	2/6	胴部外面ヘラミガキ 底部木葉痕		大砂粒多 長石粒 石英粒	(外)黒褐色 (内)褐色	普通	
100	甕	20.9 — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面叩き目、下端ヘラケズリ		やや砂質 砂粒少 雲母粒	褐色 黒斑	普通	
101	杯	17.6 7.6 5.3	6/6	体部内面ヨコナデ 体部外面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ	R	小砂粒	明褐色	良好	内黒
102	杯	(12.2) (6.2) 3.7	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケ ズリ	R	小砂粒	褐色	普通	
103	甕	15.8 — —	4/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ、外面上半ヘラ ナデ、下半内面ナデ		大砂粒多 長石粒 石英粒	乳褐色	普通	
104	甕	— — —	3/6	胴部内面ナデ 胴部外面上半ヘラナデ、下半ヘラ ミガキ		大砂粒多 長石粒 石英粒	乳褐色	普通	
105	杯	11.8 7.5 3.5	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	R	小砂粒少	淡褐色	良好	墨書「山加」

東野遺跡 (No.34)

挿図 番号	器 種	法量 (cm)	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
		口・底・高							
106	杯	(12.4) 8.2 4.2	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	淡褐色	良好	
107	杯	11.7 6.7 5.2	6/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	R	小砂粒少	淡褐色	良好	外面にスス付着
108	杯	(11.1) (7.4) 3.8	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒	褐色	良好	外面にスス付着
109	杯	10.9 7.4 3.7	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	砂粒	赤褐色 上部黒褐色	良好	墨書「殖生」
110	杯	(11.1) 7.1 3.9	2/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒少	淡褐色	良好	
111	杯	11.1 6.6 4.5	3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	淡褐色	良好	外面にスス付着
112	鉢	— 5.5 —	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	不明	小砂粒少	暗褐色	良好	
113	高台付杯	(10.) 7.0 5.2	3/6	体部内外面ヨコナデ 高台部ヨコナデ 底部回転ヘラ切り後回転ナデ	R	大砂粒多 長石粒	灰色	良好	須恵器
114	高台付杯	— 8.2 —	3/6	体部外面～高台部ヨコナデ 体部内面弱いヘラミガキ	R	小砂粒 雲母粒	赤褐色	良好	内黒
115	杯 蓋	14.7 — —	2/6	内面ヨコナデ後弱いミガキ 外面ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	R	小砂粒少 長石粒	赤褐色	良好	
116	碗	(7.4) — —	2/6	体部内外面ヨコナデ	不明	小砂粒少	淡褐色	良好	
117	小形甕	9.3 6.2 8.6	5/6	口縁部内外面ヨコナデ 胸部内外面ナデ 胸部外面～底部ヘラケズリ		小砂粒	赤褐色	普通	砂質粘土付着
118	甕	(16.4) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胸部内面ヘラナデ 胸部外面ヘラケズリ		小砂粒	褐色	良好	外面にスス付着
119	甕	(17.4) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胸部内面ヘラナデ 胸部外面ヘラケズリ		小砂粒 雲母粒少	褐色	良好	
120	甕	(17.6) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胸部内面ヘラナデ 胸部外面ヘラケズリ		砂粒	褐色	良好	
121	甕	19.3 (8.6) 32.5	5/6	口縁部内外面ヨコナデ 胸部内面ヘラナデ、外面上半ヘラナデ、下半ヘラミガキ		砂粒多 長石粒、石英粒 雲母粒	襍色	良好	外面にスス付着
122	甕	20.7 (8.7) 31.2	5/6	口縁部内外面ヨコナデ 胸部内面ヘラナデ、外面上半ナデ、下半ヘラミガキ		大砂粒多 長石粒、石英粒 雲母粒	褐色	良好	口縁部内面～胸部外面にスス付着
123	甕	(23.0) — —	2/6	口縁部内外面ヨコナデ 胸部内面ヘラナデ、外面上半ヘラナデ、下半ヘラミガキ		大砂粒多 長石粒、石英粒 雲母粒	褐色	良好	口縁内面にスス付着
124	甕	— 6.4 —	3/6	胸部内面ヘラナデ 胸部外面～底部ヘラケズリ		小砂粒少	赤褐色	良好	内外面部分的スス付着
125	甕	— 7.2 —	1/6	胸部外面下端ヘラケズリ 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ	L	小砂粒少	赤褐色	良好	
126	甕	— 5.2 —	1/6	胸部内面ヘラナデ 胸部外面～底部ヘラケズリ		砂粒	(内)暗褐色 (外)褐色	普通	

挿図 番号	器 種	法量(cm)	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
		口・底・高							
127	甕	— (6.6) —	$\frac{2}{6}$	胴部内面ヘラナデ 胴部外面～底部ヘラケズリ		小砂粒	褐色	普通	
128	甕	— 6.9 —	$\frac{2}{6}$	胴部内外面ナデ 胴部外面下端～底部ヘラケズリ		砂粒 雲母粒	褐色	普通	外面にスス附着
129	杯	12.2 7.8 3.8	$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	長石粒多 石英粒多	赤褐色	良好	内外面にスス附着
130	杯	(12.0) (6.6) 3.8	$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	長石粒多	赤褐色	良好	
131	杯	(11.8) (6.8) 4.0	$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケ ズリ	不明	長石粒多	暗褐色	良好	2次の焼成を受けて 黒変
132	杯	— 7.0 —	$\frac{2}{6}$	体部内外面糸切り後全面手持ちヘ ラケズリ	R	長石粒多 石英粒多	赤褐色	良好	
133	甕	— 15.0 —	$\frac{2}{6}$	胴部内外面指ナデ 胴部外面叩き目、下端～底部ヘラ ケズリ		石英粒多	灰褐色	良好	須恵器

住居跡出土支脚・石製品 (第148図)

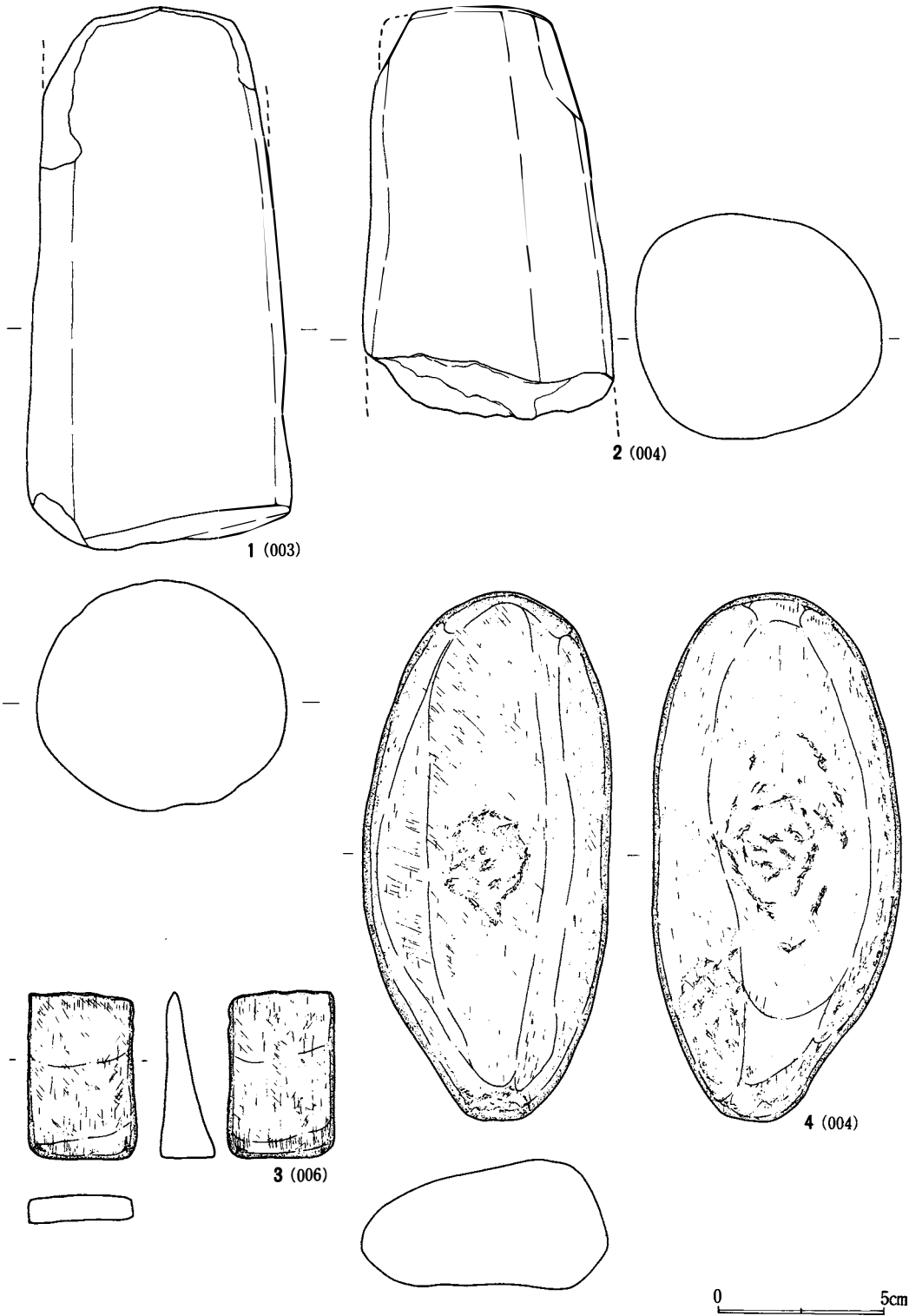
1は003号住居跡カマド内出土の支脚で、頭部を欠損する。丁寧にナデ整形され、胎土中に砂粒を多く含む。裾径7.8cmを測る。2は004号住居跡のカマド外右側より検出された。下半部を欠損するが、胎土は1より緻密となる。頭部付近にはカマド構築材の砂質土が焼土化して附着する。3は006号住居跡の覆土中より出土した凝灰岩製の砥石である。長方形を呈し、両面ともかなり使用されたようである。4は004号住居跡の東壁沿い床面直上より出土した砥石であろう。縄文時代の磨石を再利用したものと考えられ、全体が丁寧に磨がられている。石材は砂岩である。

住居跡・グリット出土鉄製品 (第149図)

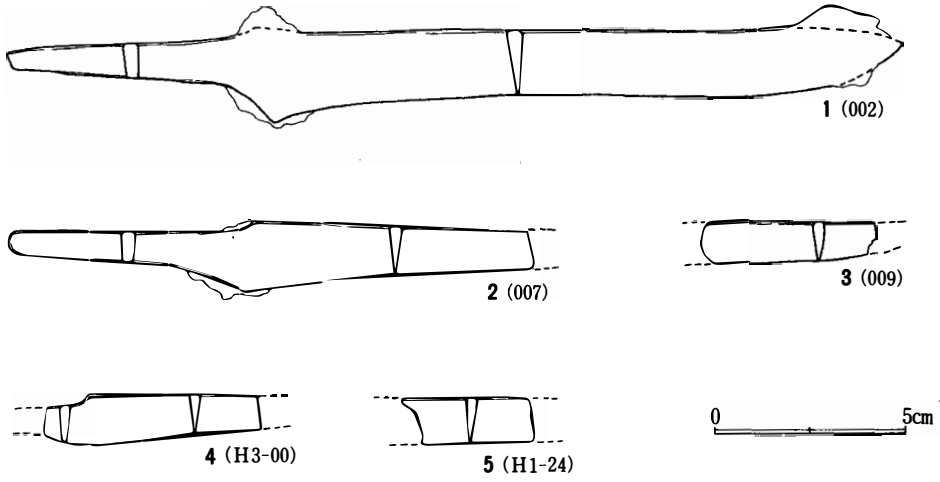
1は002号住居跡の覆土上層より出土した短刀である。11の墨書土器の上にはほぼ完形で遺存していた。おそらく土器とともに廃棄されたものであろう。全長23.4cm、身長16.5cm、棟厚0.4cm、身幅1.8cm、茎幅0.9cmを測る。茎は先細りとなり、茎尻は隅切りに近くなる。関部は錆のため明瞭ではないが、刃側が深く切れ込む両関造りとなろう。刀身部は平棟・平造りである。鋒も錆が激しいが、やや丸みを有するものであろう。2～5は刀子である。2は007、3は009号住居跡の覆土中より出土した。2は鋒部を欠損する。茎長6.3cmを測る両関造りである。4は棟側に直角の関が形成される。

グリット出土土器 (第150図)

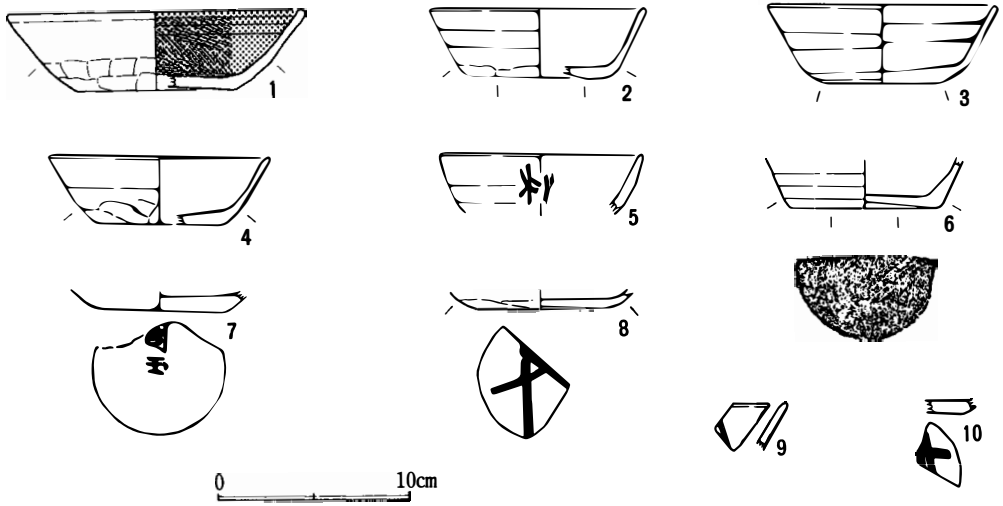
グリット出土で図示できた土器は杯10点のみである。墨書土器は5点認められる。1は内黒となる杯C 5、2は杯C 2、3・4は杯C 3となろう。6の底部には静止糸切り痕が残る。墨書土器は判読できるものが少ないが、5は「口女」、6は「國玉」である。



第148図 住居跡出土支脚・石製品



第149図 住居跡・グリット出土鉄製品



第150図 グリット出土土器

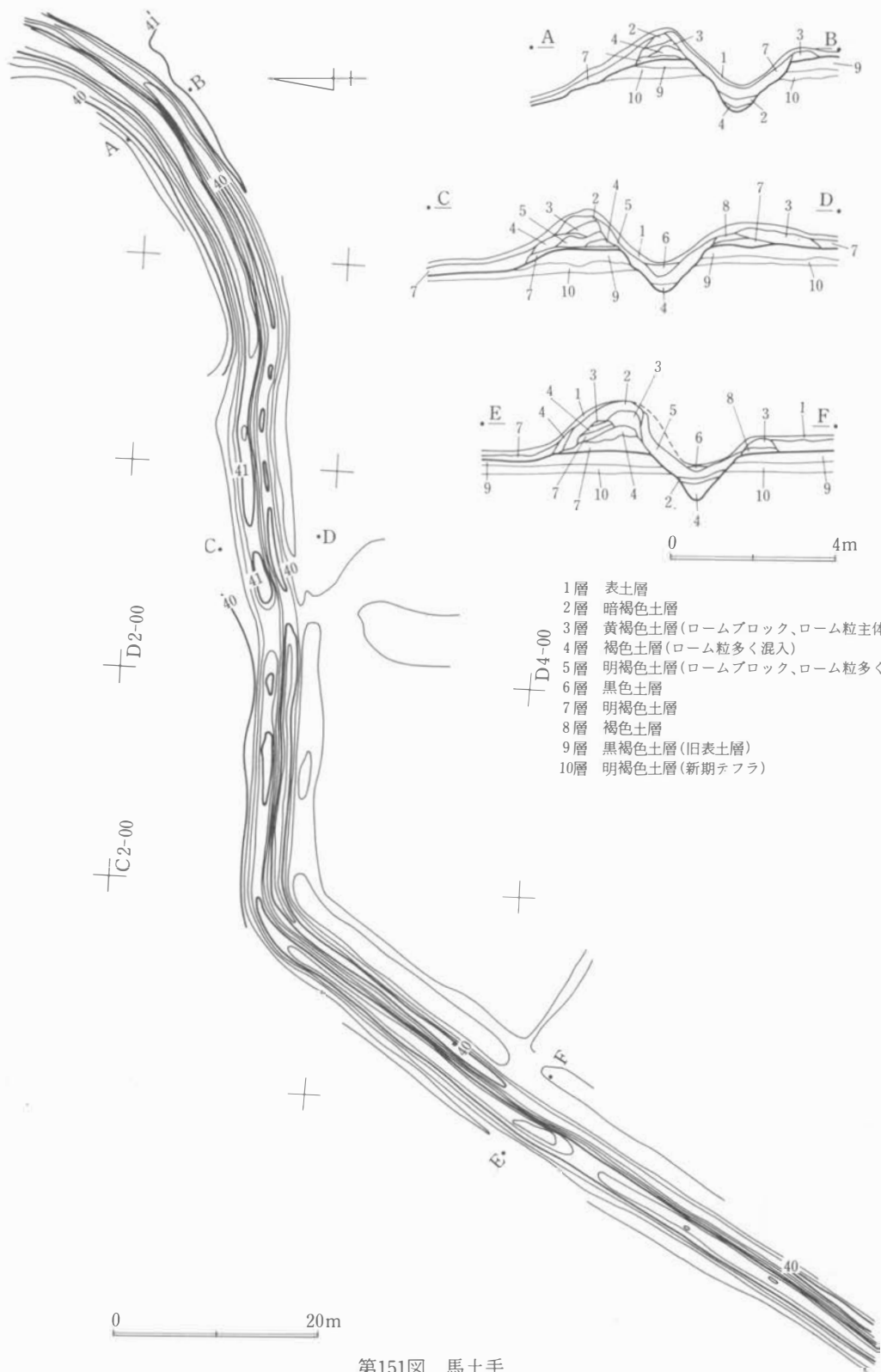
東野遺跡グリッド出土土器観察表

挿図 番号	器 種	法量 (cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
		口・底・高								
1	杯	(15.6) (8.4) 4.0		$\frac{2}{6}$	体部内面ヘラミガキ 体部外面ヨコナデ、体部下端～底 部全面手持ちヘラケズリ	不明	小砂粒	淡褐色	良 好	内黒
2	杯	(11.4) (7.4) 3.6		$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケ ズリ、底部回転糸切り	不明	小砂粒少	淡赤褐色	普 通	
3	杯	12.2 6.3 4.1		$\frac{6}{6}$	体部内外面ヨコナデ 底部全面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多	淡赤褐色	良 好	
4	杯	(11.6) (6.8) 3.5		$\frac{2}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部全面手持ちヘラケ ズリ	不明	小砂粒	暗赤褐色	良 好	
5	杯	(10.9) — —		$\frac{1}{6}$	体部内外面ヨコナデ	不明	小砂粒	淡赤褐色	良 好	墨書「口女」
6	杯	— (7.8) —		$\frac{3}{6}$	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁回転ヘラケズ リ、底部静止糸切り	L	砂粒多	明褐色	良 好	
7	杯	— (7.0) —		$\frac{2}{6}$	体部下端～底部全面回転ヘラケズ リ	R	小砂粒	淡赤褐色	良 好	墨書「國玉」
8	杯	— (6.7) —		$\frac{1}{6}$	体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り後全面手持ちヘラ ケズリ	R	小砂粒	赤褐色	良 好	墨書不明
9	杯	— — —		$\frac{1}{6}$	ヨコナデ	不明	小砂粒	明褐色	良 好	墨書不明
10	杯	— — —		$\frac{1}{6}$	ヘラケズリ	不明	小砂粒	淡褐色	良 好	墨書不明

第3節 馬土手 (第151図)

ソウナ遺跡として調査された馬土手であるが、立地的には東野遺跡が形成される台形の北側縁辺部に沿うように構築される。調査区内では全長120m程であるが、北側に続くようである。西側は斜面に入り込んでそのまま消失する状況である。

形態的には二重土手となるもので、間に溝が掘り込まれる。斜面側の土手は旧表土より現高で0.8～1.2m、平坦部側は0.4～0.6mと斜面部側が1段と高く盛られる。馬土手の構築は旧表土の整形から始まる。旧表土を幅2m程の範囲で残し、外側を削平して基底部とする。盛土はこの旧表土の上に積まれる。下層は山砂を主体とし、上層はローム粒及びロームブロックを多く含む土が主体となる。溝は旧表土から掘り込まれ、深さ1mの薬研状の断面形を呈する。遺物の出土はなかった。



第151図 馬土手

第 IV 篇

深 沢 遺 跡 (No.23)

遺跡コード 209—003

所 在 地 佐原市本矢作深沢1286-192他

調査担当者 齋木 勝, 高橋賢一, 羽二生 保

深 沢 第 1 遺 跡 (No.24)

遺跡コード 209—004

所 在 地 佐原市本矢作深沢1286-43他

調査担当者 高橋博文, 岸本雅人

深 沢 第 2 遺 跡 (No.25)

遺跡コード 209—011

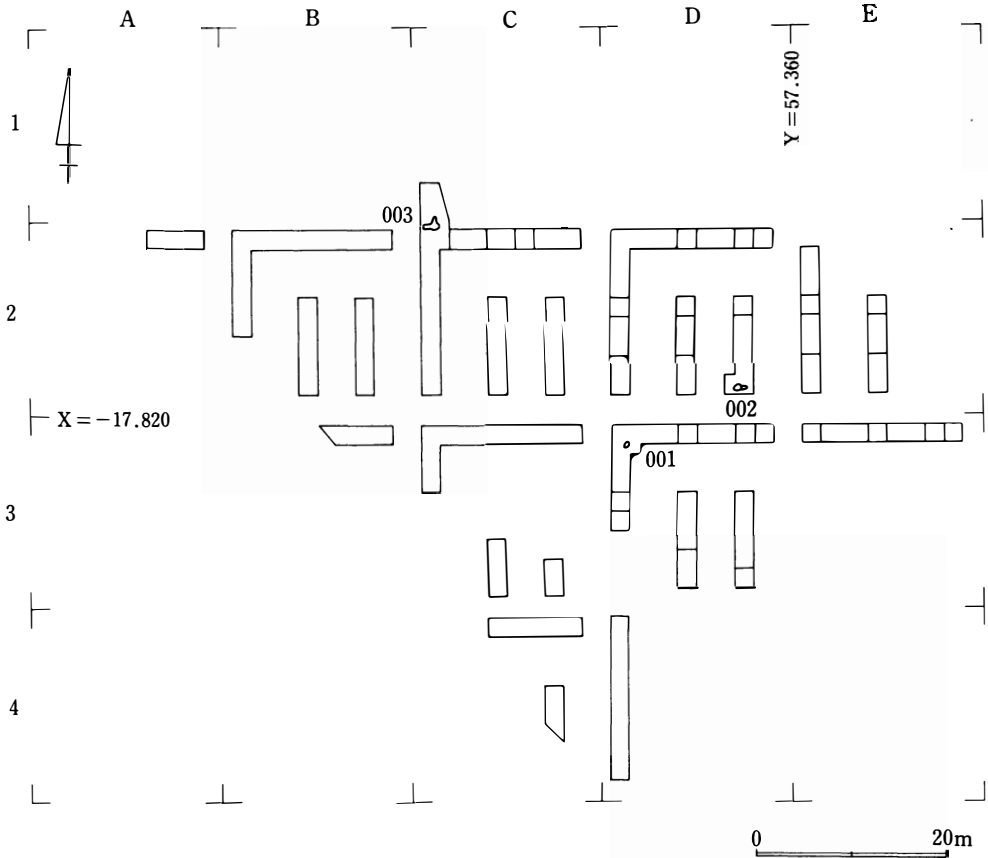
所 在 地 佐原市本矢作深沢1286-187他

調査担当者 池田大助, 岡田光広

検出された遺構と遺物

第1節 深沢遺跡

本遺跡からは、縄文時代早期の炉穴3基と包含層中より早期後半の土器が若干検出された。



第152図 深沢遺跡遺構配置図

炉穴（第153図，図版59）

001号跡

D3区北西端に位置する。長径1.0m，短径0.6m，深さ0.1mを測り，摺鉢状に浅く掘り込まれる。覆土は1層で，焼土はほとんどみられない。遺物の出土はなかった。

002号跡

D2区南西端に位置する。長径1.4mを測り，2基の土壇を連続させたような形態を呈する。

深沢遺跡 (No23)

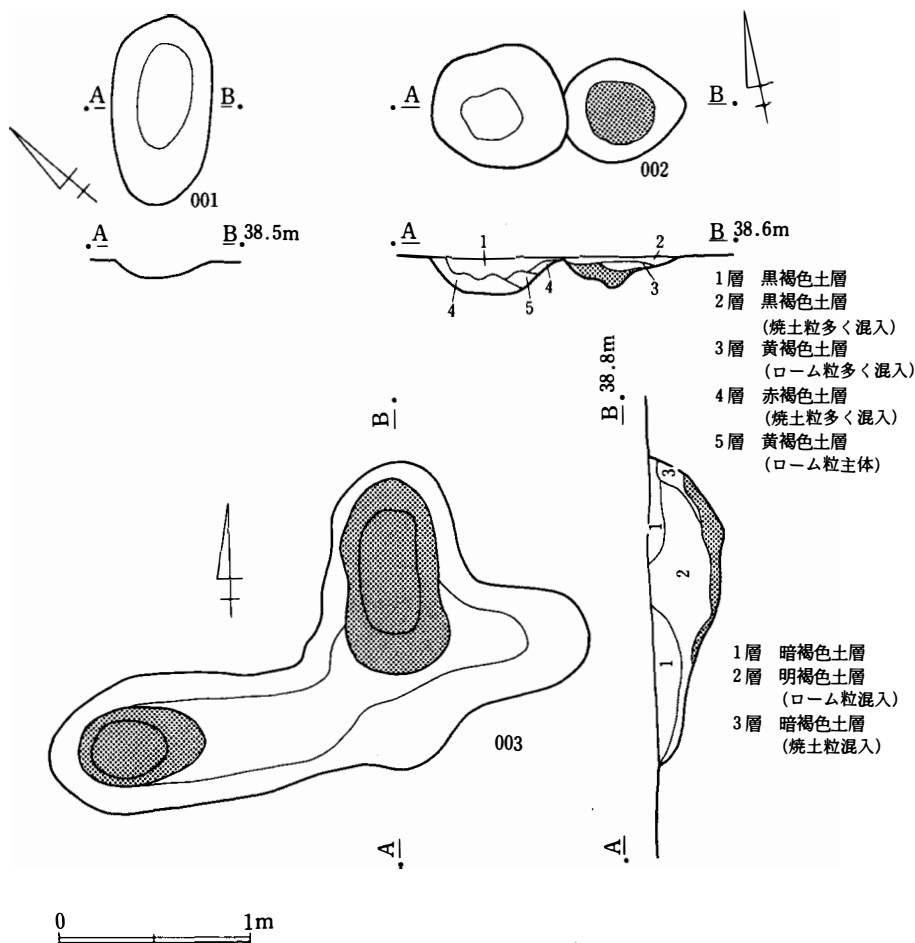
ローム面よりの掘り込みは西側で20cm, 東側で15cmである。おそらく足場と炉部を構成するものであろうが, 東側は焼土が多量に堆積していることから, 炉部として使用したことが考えられる。遺物の出土はなかった。

003号跡

C 2 区に単独で構築される。東西径2.9m, 南北径1.6mを測る。形状は, 足場を共用して炉部が北側及び西側に楕円形状に掘り込まれる不整形を呈する。足場は確認面より15cm掘り込まれ, 炉部にむけて徐々に深さを増している。炉部の深さはいずれも40cm程である。焼土の堆積は10cm程である。遺物の出土は少ないが, 西側炉部に縄文時代早期後半の子母口式土器の小片が若干みられる。

グリット出土縄文土器 (第154図, 図版59)

本遺跡出土の縄文土器は, 器形の窺えるものはない。早期後半の子母口式土器が主体的に出土している。



第153図 001~003号炉穴

第Ⅰ群土器（1）

早期中葉の沈線文系土器である。太沈線と細沈線により幾何学文を作出するものである。沈線に沿って刺突文が施される。砂粒子を含む。田戸下層式土器に比定されよう。

第Ⅱ群土器（2～30）

早期後半の子母口式土器を一括する。胎土に微量の植物繊維を含む。表面はミガキが多く、内面はヘラ削りによる擦痕が認められる。口唇部形態は、角頭状・内そぎ状を呈するものが多い。口唇部における装飾は、キザミ・刺突文・絡条体圧痕文等が認められる。文様は口縁部直下に集約されるものが大部分である。胴部は無文と考えられる。

第1類（2～17）

有文土器を一括する。細沈線文・貝殻腹縁文・連続刺突文等が認められる。

第1種（2～10）

細沈線文を文様の主体とするものである。2は細沈線により波状の文様を構成する。波頂部には円形文が施される。口唇部および裏面には絡条体圧痕文が施される。3は細沈線により幾何学文を作出する。細沈線間には【の字状の連続刺突文が施される。口唇上には半截竹管によるキザミが施される。4、5は口縁部直下から縦位の短沈線を巡らすものである。胴部以下は無文となろう。7～10は同一個体であろう。横位・縦位の細沈線により区画し、区画部を斜位の細沈線により文様を作出する。子母口式土器は、文様が口縁部直下に集約される場合が多く、胴部にまで文様が施文されることが少ない。今後子母口式土器を考えるうえで、2や7～10の土器は注意すべきであろう。4～6の土器は、文様構成の点から考えると基本的には第2種のグループとして取り扱うほうが良いのかもしれない。

第2種（11～17）

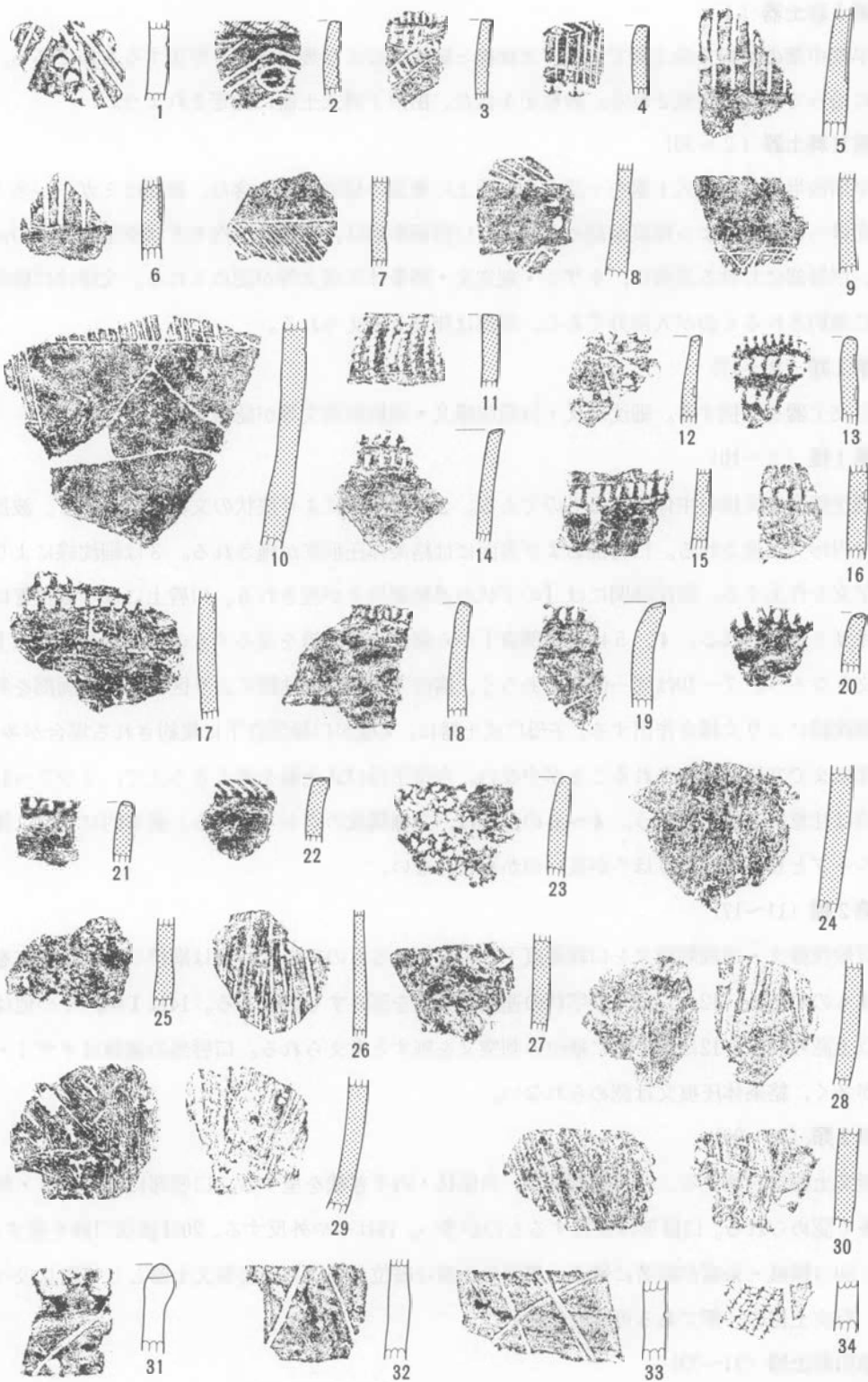
貝殻腹縁文・連続刺突文を口縁部直下に集約させるものである。11は縦位の貝殻腹縁文を巡らすものである。12～17は【の字状の連続刺突文を巡らすものである。14は1条、その他は2条以上認められる。12は数単位に縦位の刺突文を施すと考えられる。口唇部の装飾はキザミ・刺突が多く、絡条体圧痕文は認められない。

第2類（18～30）

無文土器を一括する。口唇部形態は、角頭状・内そぎ状を呈する。口唇部にはキザミ・刺突が多く認められる。口縁部は直行するものが多い。19はやや外反する。20は波状口縁を呈する。29、30は擦痕・条痕が顕著に残る。裏面の条痕は縦位が多い。一応無文土器として取り扱ったが、有文土器の一部である可能性が強い。

第Ⅲ群土器（31～33）

前期後半の竹管文系土器である。口縁部が張りだし、大胆なキザミが施される。文様は、口



第154図 グリット出土縄文土器

0 10cm

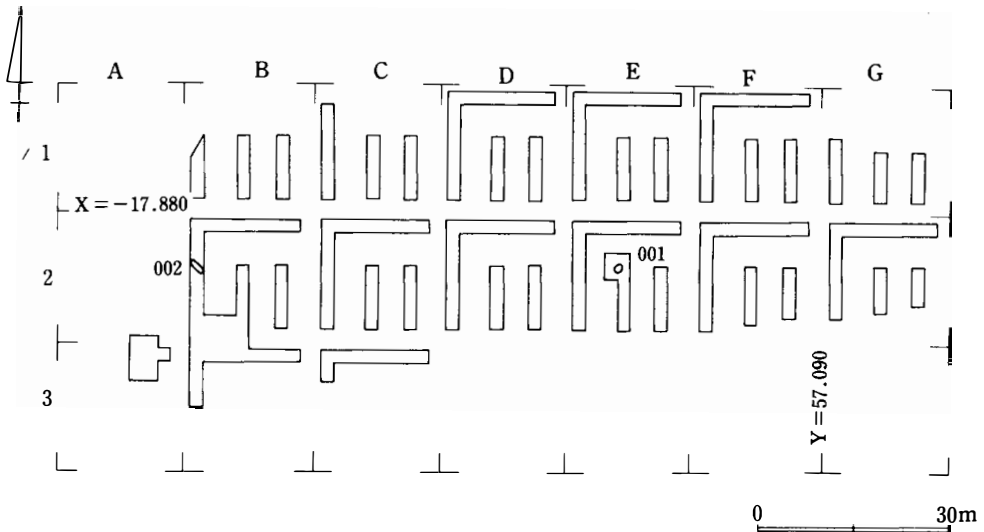
縁部直下から竹管による格子文を作出する。興津式土器の範疇に含まれよう。

第IV群土器 (34)

中期後半の土器である。34は単節縄文 (RL) を地文とし、磨消縄文帯を垂下させ区画文を作出する。加曾利E II式であろう。

第2節 深沢第1遺跡

本遺跡からは土壌が2基検出されただけである。遺物は、包含層中より旧石器時代から縄文時代にかけての石器が19点出土している。他に縄文時代前期浮島式土器の小片が若干みられるが、図示し得なかった。



第155図 深沢第1遺跡遺構配置図

土壌 (第156図)

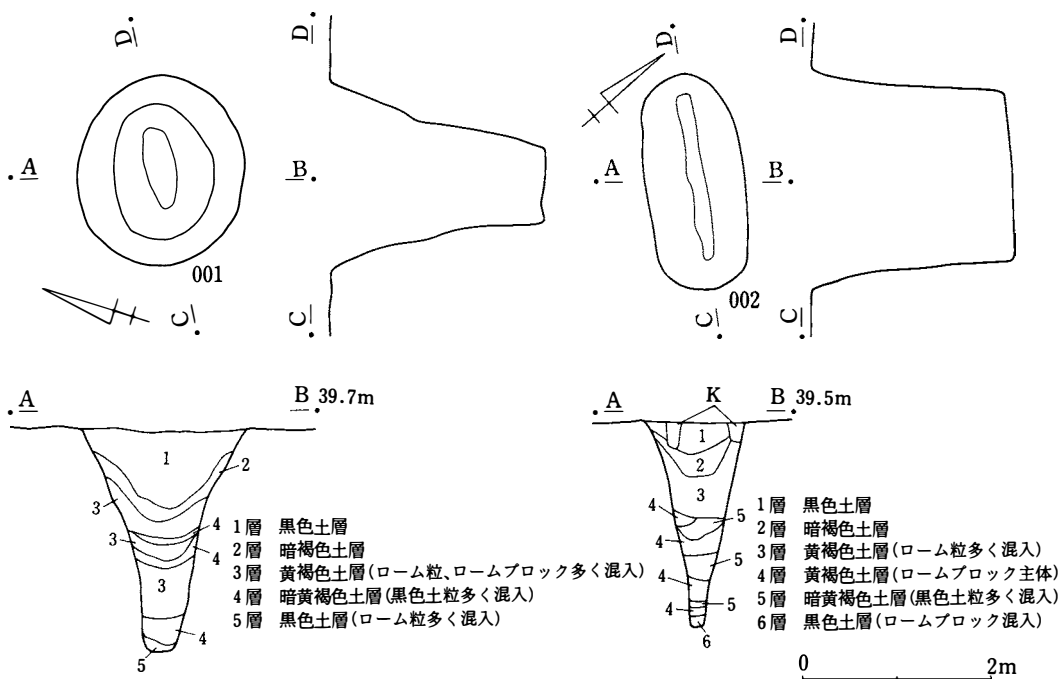
001号跡

E 2 区に位置する。長径2.0m, 短径1.8m, 確認面からの深さ2.3mを測り, 略円形プランを呈する。底面は長方形となり平坦である。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり, 中位より上部は斜位となる。覆土は黒色系の土とローム系の土が互層状に堆積する。遺物の出土はなかった。

002号跡

B 2 区に位置する。長径2.3m, 短径1.1mの楕円形プランを呈し, 確認面からの深さ2.1mを測る。底面は幅15~20cmときわめて細長くなる。壁は底面よりやや斜位に立ち上がる。覆土は001号土壌とほぼ同様である。遺物の出土はなかった。

深沢第1遺跡 (No.24)・深沢第2遺跡 (No.25)



第156図 001・002号土壌

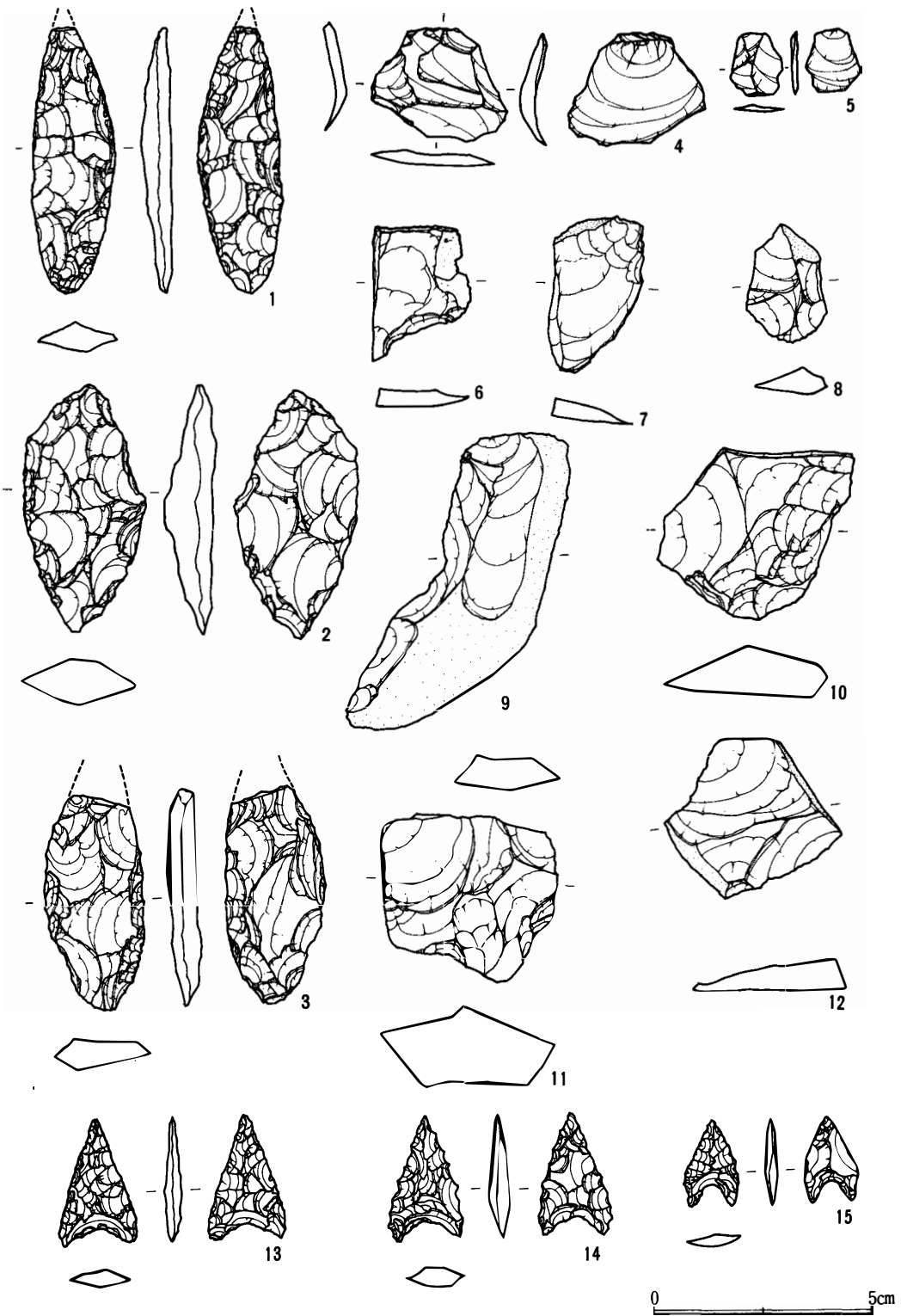
グリッド出土石器 (第157図, 図版60)

1～12は器面にロームが付着しており、旧石器時代の所産である可能性が強い。これらはD 1区, E 1～22区付近より集中的に出土している。出土層位は表土中からソフトローム直上にあたる。付近を拡張したが他の石器群はなかった。1～3は両面に面側縁からの細部調整を行う尖頭器である。2は一側縁に張りだしが認められ、あるいは有肩尖頭器となるのであろうか。1, 3は先端部を欠損する。4～10, 12は剥片である。11は石核となろう。打面を作出し、上下左右から剥片を剥ぎとっている。石材は5を除きすべて安山岩である。

13～15は縄文時代の石鏃である。13, 14は基部の挟りがやや小さく、形態は二等辺三角形を呈する。15は挟りが大きく、形態は五角形を呈する。

第3節 深沢第2遺跡

本遺跡は、確認調査の結果若干の土壌と縄文時代中期の土器小片が検出されたが、土壌はきわめて新しいものと思われるため図示せずに記するにとどめたい。



第157図 グリット出土石器

深沢第2遺跡 (No25)

グリット出土石器観察表

挿 番 号	器 種	法 量 (cm, g)				石 材	調 整	出 土 位 置	遺物 番 号
		長 さ	幅	厚 さ	重 さ				
1	尖 頭 器	61.00	19.50	6.85	7.7	安 山 岩	全体的に細かい調整剥離を施す。特に正面右側縁から基部にかけて細かな調整が認められる。先端部が欠損している。	D-1	0001
2	尖 頭 器	55.80	28.10	12.45	14.1	安 山 岩	有肩尖頭器?。右側縁に張りだした肩部が認められる。全体的に細かな調整剥離を施している。特に、正面左側縁に集中している。	D-1	0010
3	尖 頭 器	49.10	22.95	7.00	10.0	安 山 岩	全体的に細かい調整剥離を施す。特に、正面右側縁に集中する。先端部が欠損している。	D-1	0003
4	剥 片	25.20	31.65	3.00	2.6	ホルンフェルス		D-1	0008
5	剥 片	14.50	12.20	1.40	0.3	チャート		D-1	0004
6	剥 片	30.10	22.90	4.70	3.4	安 山 岩		E2-23	0001
7	剥 片	34.95	21.65	5.60	4.3	安 山 岩		E1-22	0002
8	剥 片	26.75	18.45	6.50	2.7	安 山 岩		E1-22	0002
9	剥 片	71.15	25.55	12.50	28.8	安 山 岩	縦長の剥片で、自然面を残す。	D-1	0013
10	剥 片	37.40	37.50	11.55	21.5	安 山 岩		E1-22	0002
11	石 核	36.85	40.10	17.85	29.6	安 山 岩	剥離面を作出した後、その面を利用して縦位の剥片を剥ぎとる。また、下位の方向からも剥離を行う。一部に自然面を残す。	D-1	0013
12	剥 片	35.70	36.15	9.60	11.4	安 山 岩		E1-22	0002
13	石 鏃	28.40	17.75	3.85	1.5	チャート	えぐりが小さく、二等辺三角形を呈する。細部調整は、両面に施している。	B2-00	0001
14	石 鏃	27.65	17.15	5.20	1.6	安 山 岩	えぐりがやや大きく、二等辺三角形を呈する。細部の最終的な調整は、図上左側の両側縁に集中している。また、両側縁は、ギザギザ状を呈する。	D-1	0012
15	石 鏃	19.2	12.10	2.90	0.5	玉 髓	えぐりが大きく、五角形を呈する。細部の最終的な調整は図上左側の両側縁に集中している。基部の調整は、たいへん丁寧である。	D-1	0009
	剥 片	28.35	27.15	5.00	5.5	安 山 岩		D-1	0013
	剥 片	29.55	23.00	7.00	5.5	安 山 岩		E1-22	0002
	剥 片	30.55	21.80	6.65	4.4	安 山 岩		D-1	0013
	剥 片	27.15	22.40	11.75	5.7	チャート		E1-22	0002

第 V 篇

小六谷台第 1 遺跡 (No.27)

遺跡コード 209—016

所在地 佐原市本矢作小六谷台1415-162他

調査担当者 池田大助, 岡田光広

小六谷台第 2 遺跡 (No.28)

遺跡コード 209—017

所在地 佐原市本矢作小六谷台1415-156他

調査担当者 池田大助, 岡田光広

山 王 遺 跡 (No.29)

遺跡コード 209—019

所在地 佐原市福田字山王454他

調査担当者 高橋博文, 岡田光広

検出された遺構と遺物

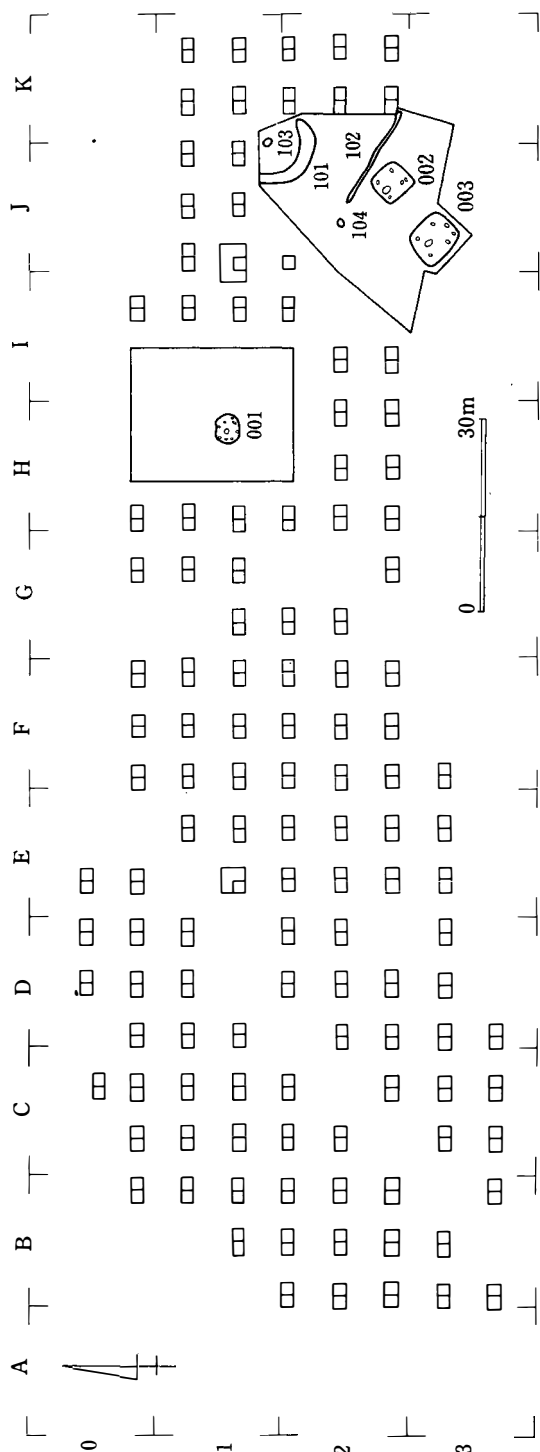
第1節 小六谷台第1・2遺跡

小六谷台第1・第2遺跡は同一台地上に位置するため、本報告では同一の遺跡として取り扱う。検出された遺構はすべて第2遺跡内、すなわち北側から舌状に伸びた台地の先端部に占地している。遺構としては、縄文時代の住居跡1軒、弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡2軒等である。

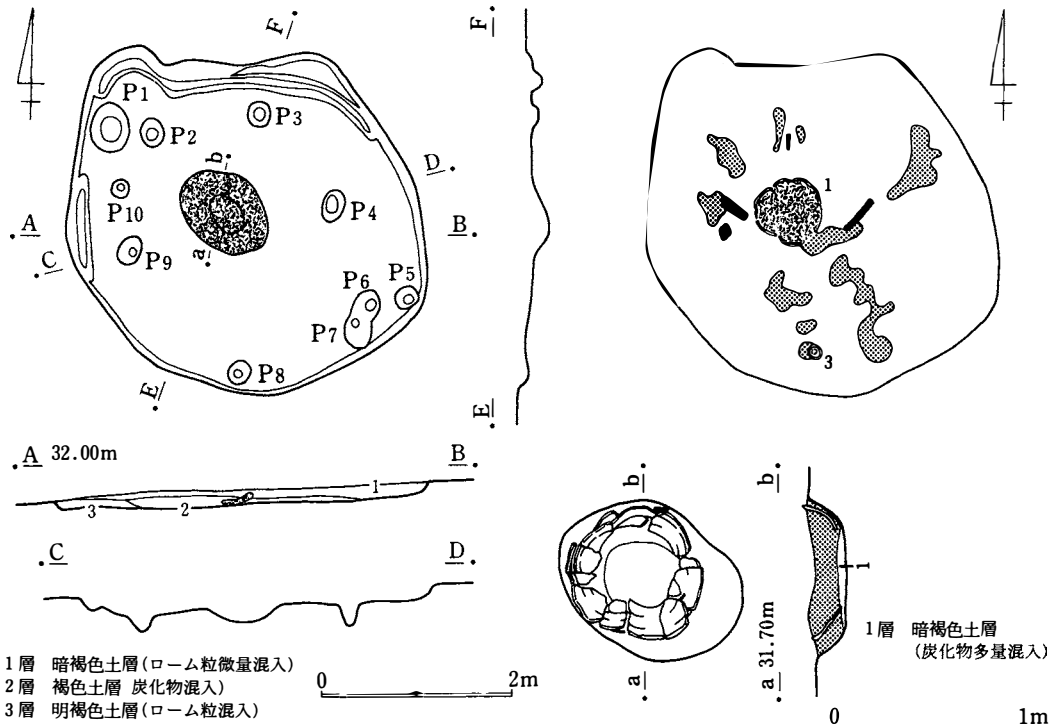
1. 縄文時代

001号住居跡（第159図，図版63）

H1区東側に位置する。長径4.2m、短径3.5mを測り、楕円形プランを呈する。北壁には、小さく張り出す部分とテラス状を呈する部分が見られる。壁高は確認面より15cm程で、北壁下と西壁下の一部に周溝が掘り込まれる。床面は平坦であるがやや軟質である。柱穴は壁沿いに9本検出された。いずれもしっかりした掘り込みで、深さはP9が最深24cm、P5が最浅6cmを測る。炉は床面ほぼ中央に位置し、径1.0×0.8m、深さ35cmである。炉内には胴下半部を欠く深鉢形土器が埋設されていた。床面からは焼土、炭化材が比較的多く検出されており、焼失住居と考えられる。



第158図 小六谷台第1・第2遺跡遺構配置図



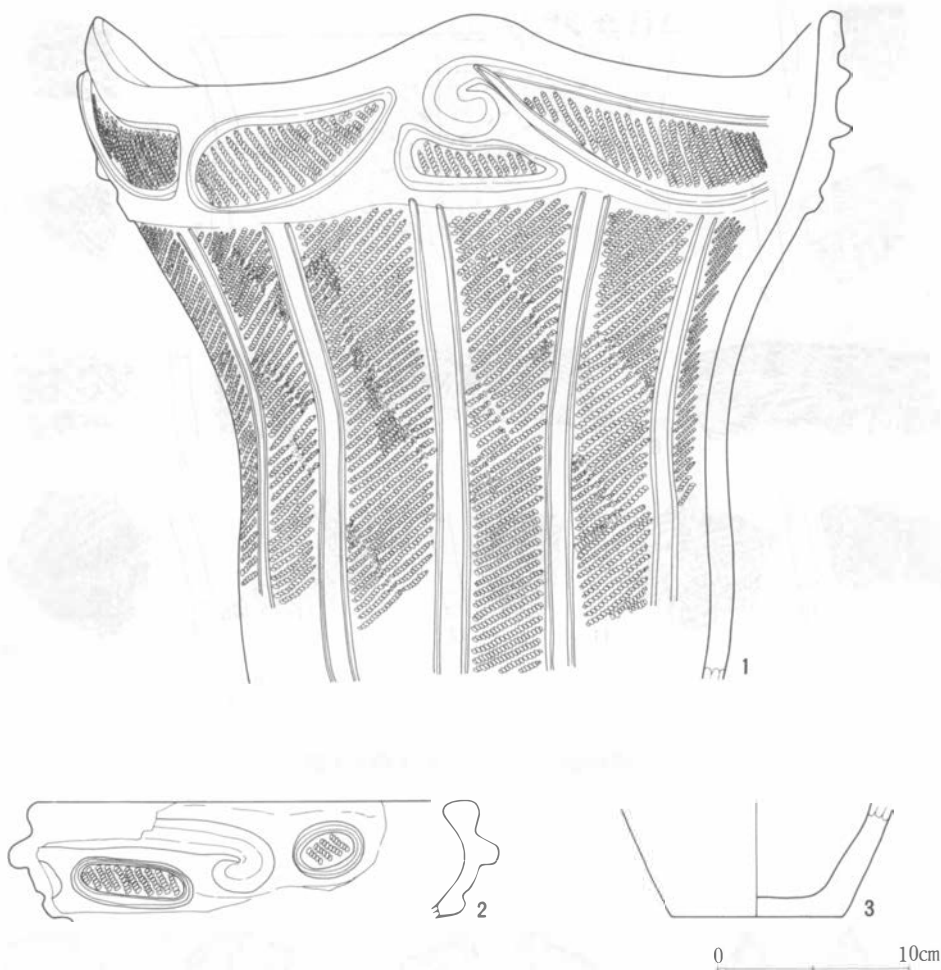
第159図 001号住居跡

出土土器 (第160図, 図版64)

1は炉体土器で、口径40cm、現存高34cmを測るキャリパー形の深鉢である。口縁部は波状を呈し、各波頂部下に渦巻文を配して隆帯とともに口縁部文様帯を形成する。胴部には磨消縄文帯が垂下し、地文に原体RLの単節縄文が施される。加曾利E II式土器である。2は内湾する器形の口縁部片である。隆帯は土器面と一体化し、高い隆帯を施しているにもかかわらず隆帯文土器的な印象は薄れる。やはりE II式の範疇であろう。3は底部片で、外面にはヘラによる縦位の整形痕を残す。胎土中に多量の雲母及び砂粒を含む。

グリット出土縄文土器 (第161図)

1は直立する口縁部で、撚糸文(L)を施す稻荷台式土器であろう。2は沈線と刺突により文様を構成する田戸下層式土器である。3は外そぎ状の口唇部形態を呈し、口縁部直下での字状にくびれ、胴部にやや丸みをもつ深鉢形土器である。口縁部直下に無文帯をもち、単節縄文(LR)を器面全体に施す。無文帯と縄文帯の境に2条の浮線が付せられ、さらに1条の沈線を巡らして幾何学文帯を作出する。幾何学文帯は2条の浮線を1つの単位として鋸歯状に貼り付け、浮線上には連続刺突文が施される。3～5は同一個体で口径19.7cmを測る。諸磯b式に比定できる。6・7は結節させた無節縄文を地文とし、ハマグリ等の貝殻を用いて波状貝殻

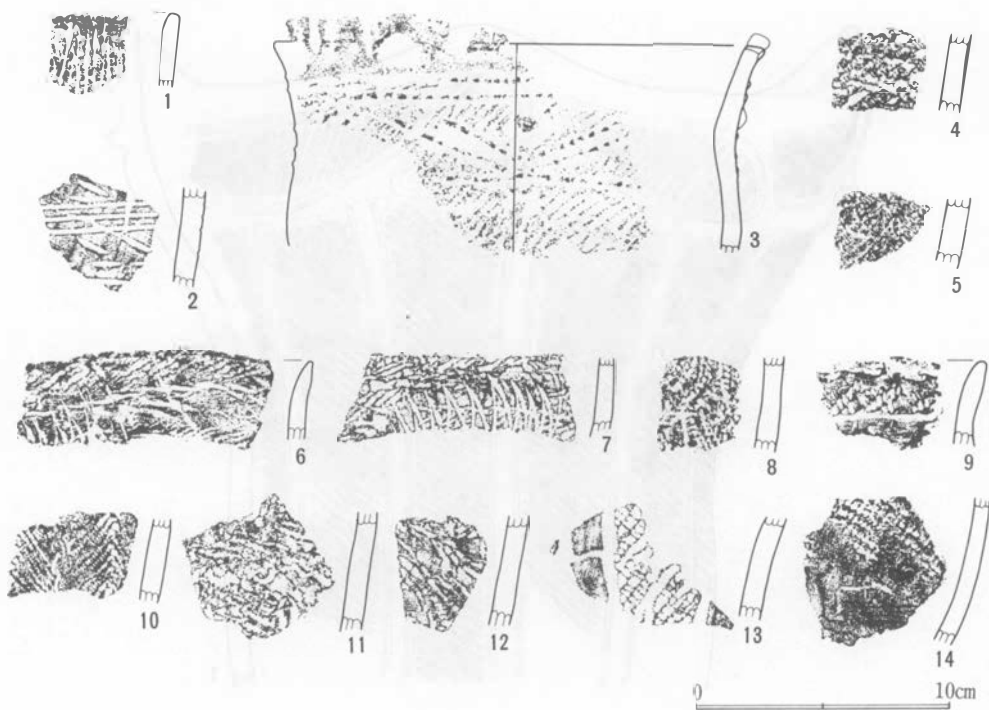


第160図 001号住居跡出土土器

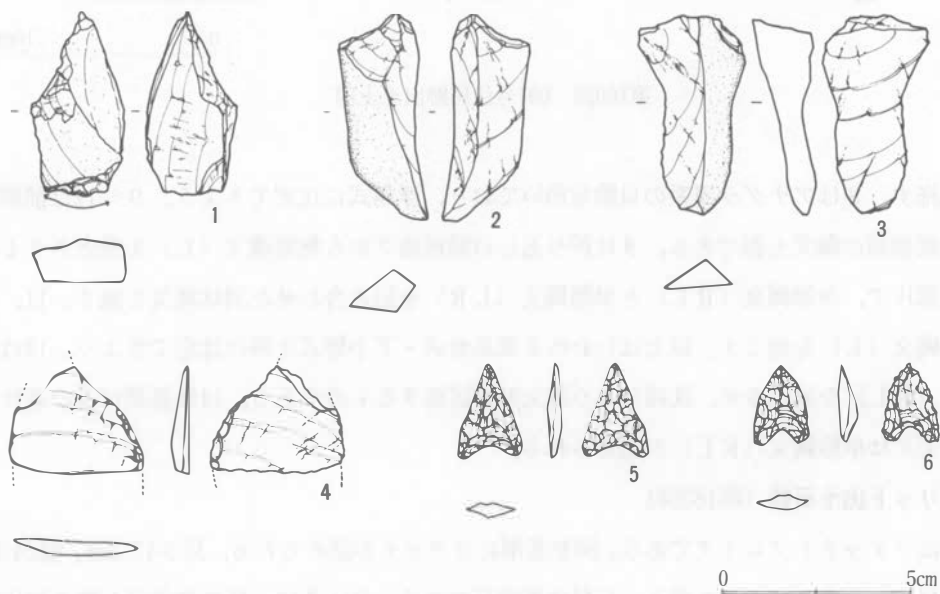
文を施す。8はアナガラ属系の貝殻を用いており、浮島式に比定できよう。9～12は前期末から中期初頭の縄文土器である。9は折り返し口縁部直下から無節縄文（L）を横走させる。10は胴部片で、単節縄文（RL）と単節縄文（LR）を組み合わせた羽状縄文を施す。11, 12は無節縄文（L）を施す。以上はいわゆる粟島台式・下小野式土器に比定できよう。13は単節縄文（RL）を縦走させ、沈線により縄文部を区画するものである。14は底部付近の破片で、図上部には単節縄文（RL）が認められる。

グリット出土石器（第162図）

1はリタッチドフリイクである。図左基部にリタッチが認められる。長さ47.3mm、幅24.5mm、厚さ11.8mm、重さ13.3gを測る。石材は黒曜石である。2・3は一部に自然面を残す剥片である。打面を作出し、縦長の剥片を剥いだ剝離面が認められる。2は長さ52.2mm、幅28.2mm、厚



第161図 グリット出土縄文土器



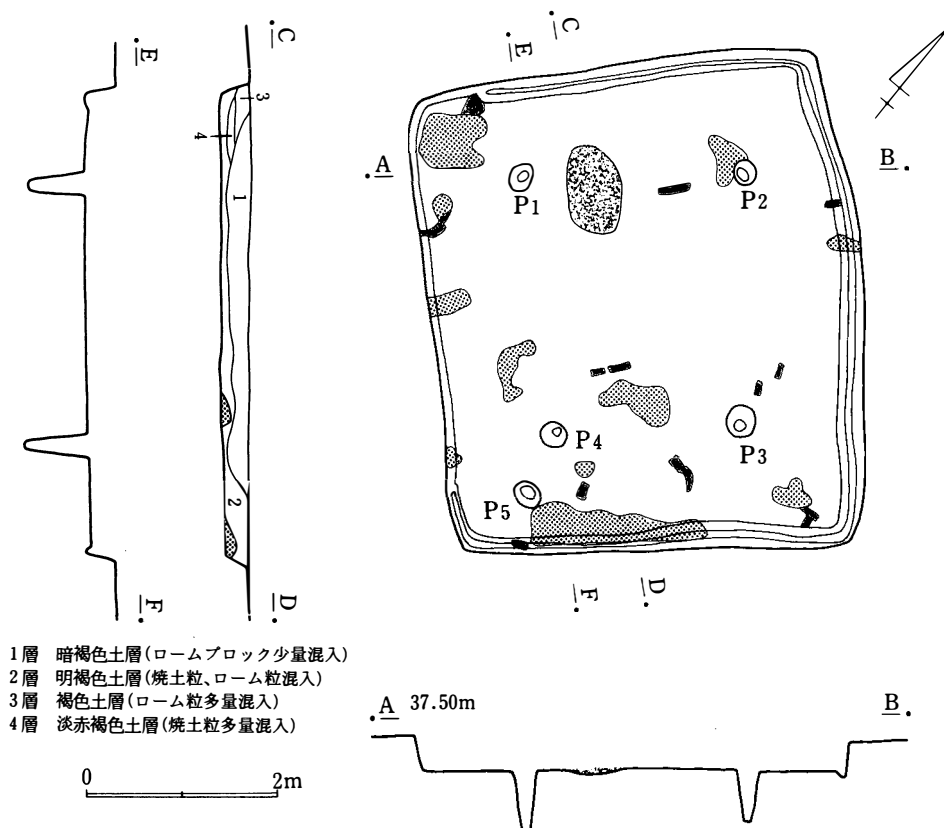
第162図 グリット出土石器(1～3小六谷台第1、4～6小六谷台第2)

さ16.6mm, 重さ13.2g, 3は長さ53.7mm, 幅18.85mm, 厚さ11.45mm, 重さ12.6gを測る。器面にロームの付着が認められ, 旧石器時代の遺物である可能性が高い。砂岩製である。4は頁岩製の石匙片であろう。つまみ部・刃部ともに欠損する。表裏ともに主要剝離面をそのまま残し, 図右側の右側縁に細部調整を施す。現存長27.7mm, 幅35.45mm, 厚さ4.7mm, 重さ4.9gを測る。5・6は石鏃である。5は挟りがやや小さい二等辺三角形を呈する。細部調整は両面に認められるが, 最終的には図左側の両側縁に集中する。長さ24.45mm, 幅12mm, 厚さ4.85mm, 重さ1.1gを測る。砂岩製である。6は挟りがやや大きい五角形を呈する。細部調整は両側縁に認められるが, 最終的には図左側の両側縁に集中する。長さ20.85mm, 幅15mm, 厚さ4.9mm, 重さ1.1gを測る。黒曜石製である。

2. 弥生時代終末～古墳時代初頭

002号住居跡 (第163図, 図版63)

J 2区に位置する。規模は4.5×5.0mを測り, 長方形のプランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 確認面より35～40cm程掘り込まれる。周溝は南東壁を除いて, 深さ7cm前後で検出

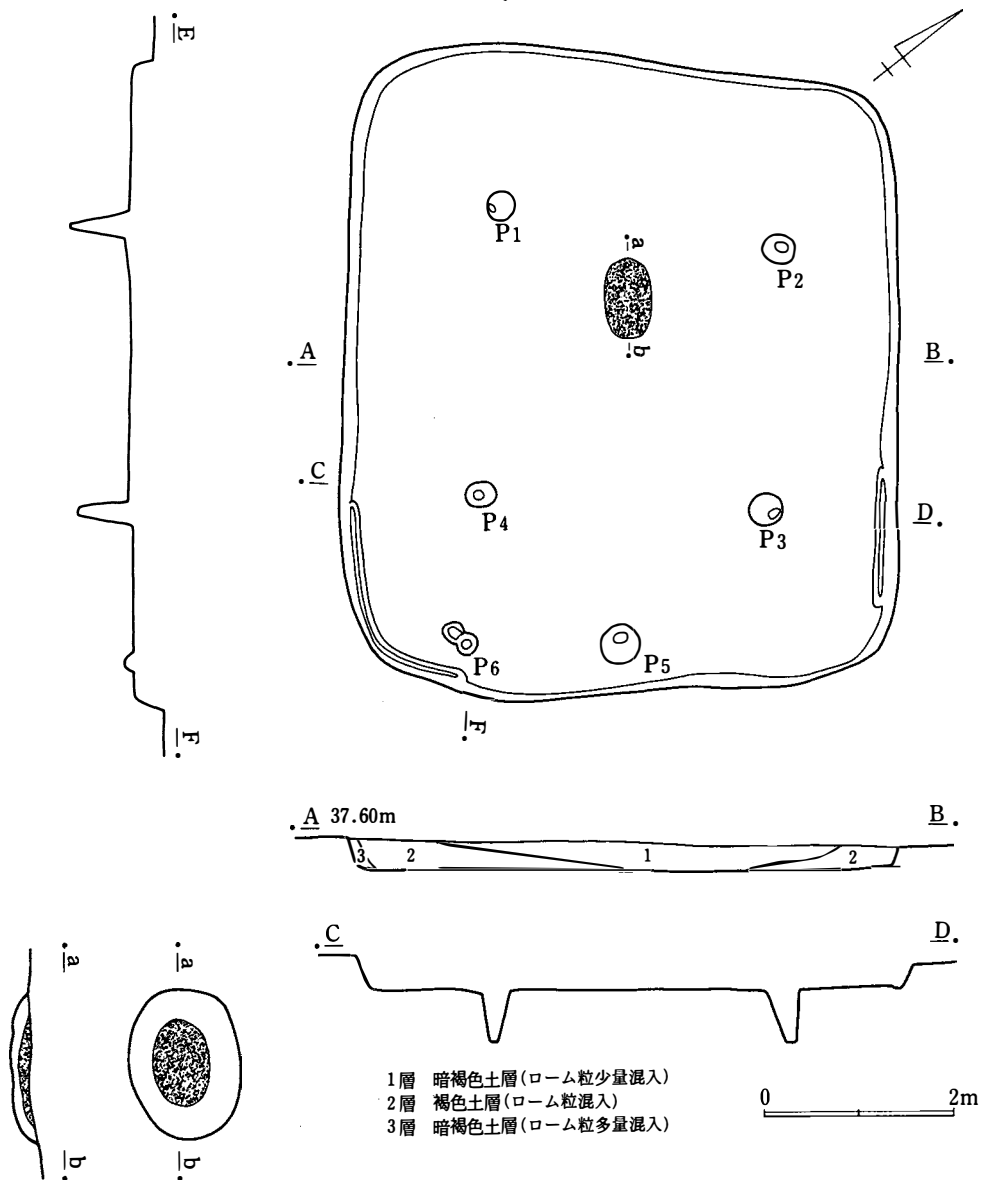


第163図 002号住居跡

小六谷台第1・2遺跡 (No.27・28)

された。床面は比較的平坦で、中央部を中心によく踏み固められている。柱穴は対角線上に4本検出された。深さはP1～P3が61cm、P4が69cmを測る。P4の外側には深さ8cmの浅い柱穴が掘り込まれる。炉はP1・P2間のP1寄りに設けられる。径0.9×0.6m、深さ8cmを測る。底面はそれほど焼けていない。

遺物の出土はきわめて少なく、古墳時代初頭の土師器片が若干みられるにすぎない。床面上には比較的厚く焼土が遺存しているが、炭化材は少なかった。



第164図 003号住居跡

003号住居跡（第164図，図版64）

J 3区，002号住居跡の南西6m程に位置する。規模は6.8×5.9mを測り，長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は確認面より30cmを測る。周溝は部分的に検出された。床面はほぼ平坦で，よく踏み固められている。柱穴は対角線上にP 1～P 4，南東壁沿いにP 5が掘り込まれる。深さはP 1～P 4が55～60cm，P 5が40cmである。P 1・P 3が内傾，P 5が外傾する掘り方を呈する。炉はやや西側に寄った位置に設けられる。径0.8×0.6m，深さ10cmを測る。焼土は浮いた状態で堆積し，底面はかなり焼けている。

遺物は，弥生時代終末の土器片を主体に土師器片が若干混じる。1の土器はP 3外側の壁沿いに床面密着の状態で出土した。

出土土器（第165図，図版64）

003号住居跡

1は甕の胴下半部で，底部は突出する。施文される原体は細かい撚糸（R）で，乱雑に施される。図上部外面にはススが付着し，暗赤褐色を呈する。胎土中に細かい長石粒を多く含む。底部には木葉痕が明瞭に残る。2は土師器甕の底部，3は高杯となろうか。3は床面直上の出土で，胎土中に長石・石英粒を含む。4～7は甕の口縁部片である。4・5は複合口縁で，附加条縄文（附加2条）を口唇部に施す。6は口唇部及び口縁部上端に附加条縄文（附加2条）を加える。7は複合口縁で，口縁部上半及び頸部上端にS字状結節文を3段施す。口唇部にも同一原体による結節文がみられる。胎土は6等と同様である。8～10は櫛歯状工具により文様を描くものである。11には結節文がみられる。9・11は無文部に赤彩が施され，10は胎土中に多量の雲母を含む。12～19は甕の胴部片である。12と13，18と19はそれぞれ同一個体である。12・13は附加条縄文（附加2条）の羽状縄文，14は細かい附加条縄文（附加2条）となる。15は単節縄文（LR）を軸棒に粗く巻き付けて回転施文させたものである。16～19は附加条縄文（附加2条）を原体とするが，17は軸縄と附加する縄の大きさがほぼ同一のもの，18・19はかなり細いものである。14・17・19には結節部が認められる。

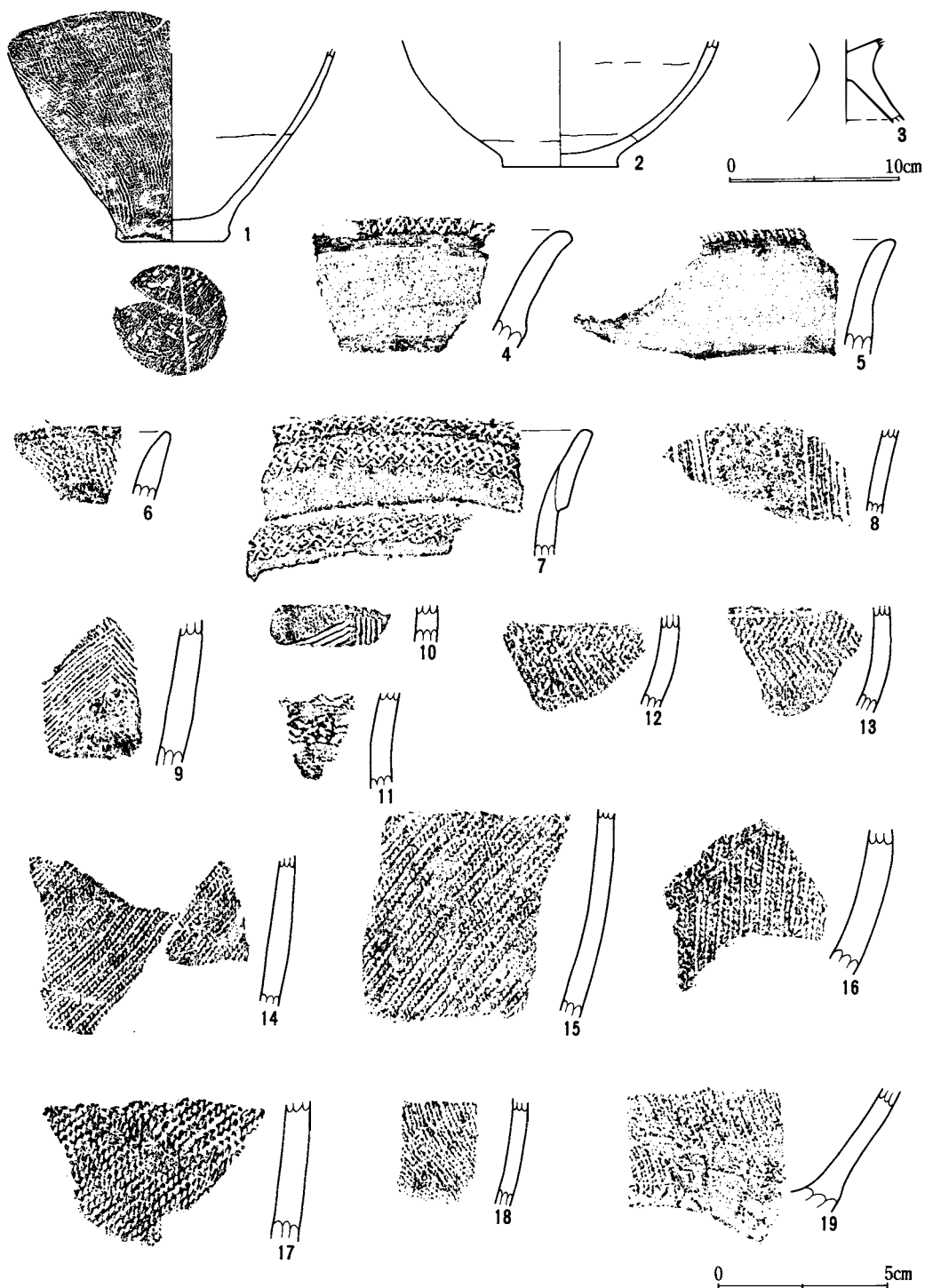
その他の遺構（第166図）

101号遺構

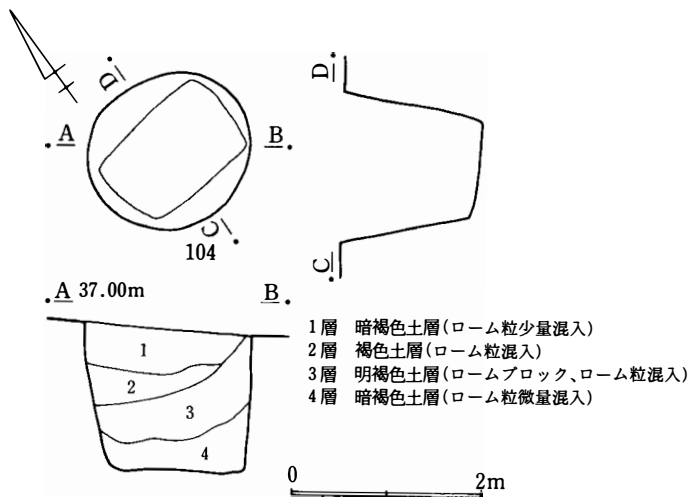
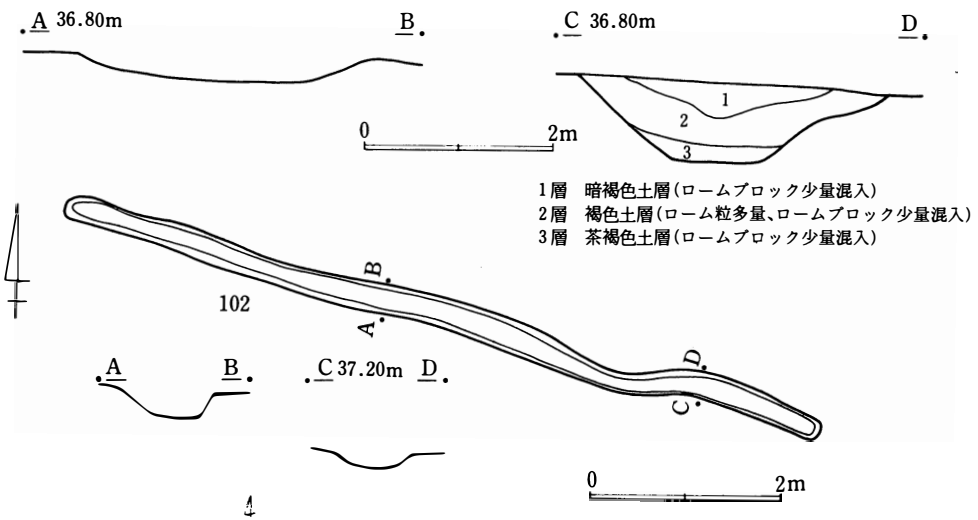
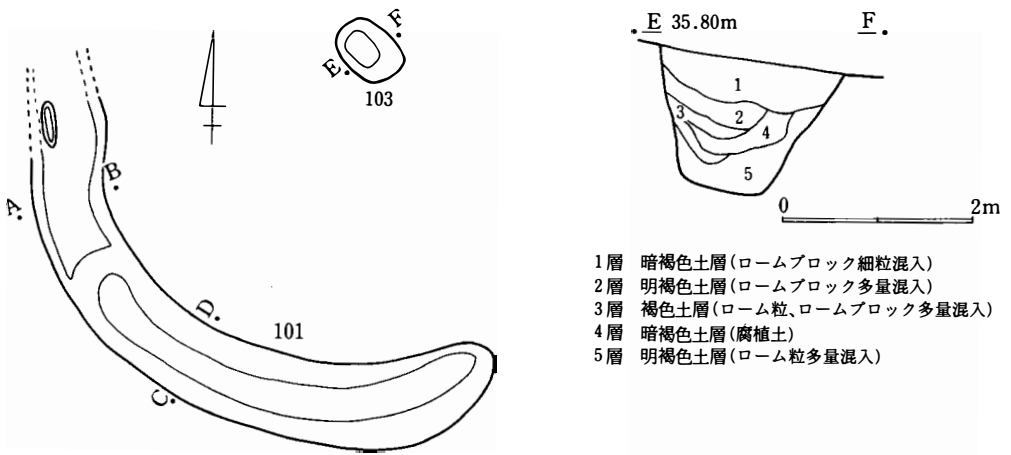
J 2区北東部に位置する半円形を呈する周溝状遺構である。内側に103号土壌が存在する。台地の肩部に位置するため北側に移行するにつれ徐々に深さを減じる。深さは最大40cmで覆土は自然堆積である。遺物の出土はなかった。

102号遺構

J 2区に位置する溝状遺構である。全長16.5m，深さ20cm程を測る。遺物の出土はほとんどみられなかった。



第165図 003号住居跡出土土器



第166図 101(1/160)・102(1/400)号溝状遺構、103・104号土壌

103号遺構

半円形を呈する101号遺構の中心に位置する土壌で、1.3×1.0mの規模の丸みをもつ方形プランを呈する。深さは70cmを測り、覆土中にはロームブロックを多く含む。出土遺物がなく詳細は不明であるが、土層の状況及び101号遺構との関係より主体部の可能性も考えられよう。

104号遺構

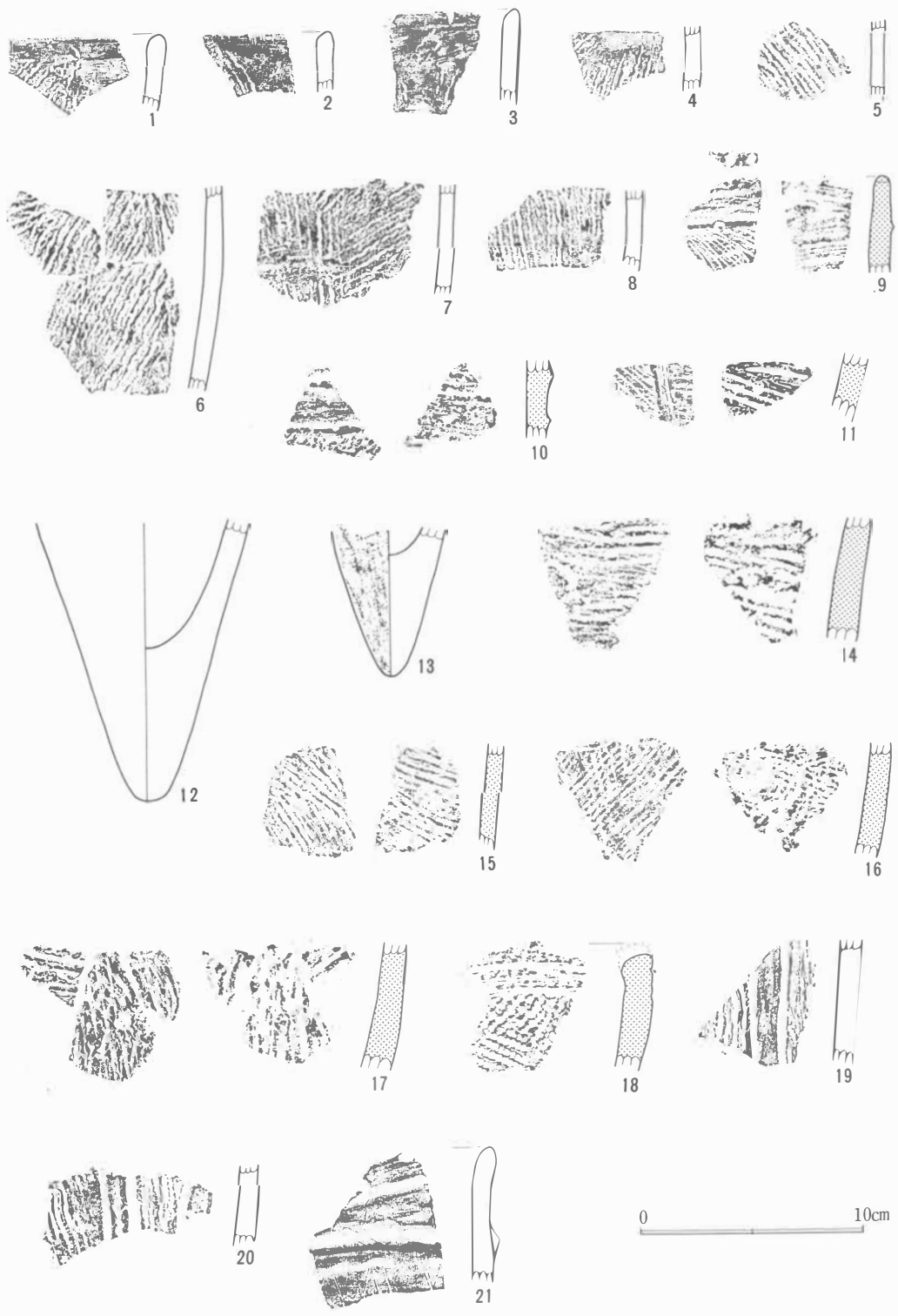
J2区中央に位置し、上面は円形、底面は長方形を呈する。径0.8m、深さ0.8mを測り、覆土は自然堆積である。遺物の出土はなかった。

第2節 山王遺跡

本遺跡からは遺構の検出はなく、グリット中より縄文時代早期から後期の土器片が若干出土したのみである。

グリット出土縄文土器 (第167図)

1～8は縄文時代早期前半の撚糸文系土器群である。1～3は口縁部片で、口唇部がややふくらみをもつ。口縁部直下は無文帯となる。胴部に斜位の撚糸文(R)を施す。4、6～8は胴部片で、撚糸文(R)が縦位・斜位に認められる。5は条間の狭い単節縄文(RL)を施し、内面がよく研磨される。稻荷台式土器の範疇に含まれるであろう。12・13は早期中葉の沈線文系土器群で、底部2点が確認された。いわゆる天狗の鼻状の尖底である。胎土中に砂粒子を多く含む、丁寧にミガキが施される。9～11、14～17は早期後半の条痕文系土器群である。9～11は細隆起線による区画文をもつ野島式土器である。9は口唇部にキザミを有し、横位の細隆起線により区画文を作出する。区画文内は斜位の集合沈線により充填される。胎土には少量の植物繊維を含む。裏面は横位条痕が施される。10・11も細隆起線文・集合沈線文を施すものである。14～17は表裏ともに条痕が施されるものである。15のみ植物繊維が少なく、薄手で堅緻であるが、他は厚く脆弱なものが多い。18は口唇部に橋状突起が付されていたと思われる。口縁部には細い竹管状の工具により平行沈線文を3条施す。以下は上帯が単節(LR)、下帯が単節(RL)の縄文原体を用いた羽状縄文が施される。胎土中には多量の植物繊維を含む。黒浜式土器に比定されよう。19・20はいずれも地文に撚糸を施し、沈線により区画された磨消縄文帯を垂下させる。加曽利E式土器であろう。21は僅かに波状を呈する口縁部片である。口縁部下には断面三角形の隆帯を貼り付け、胴部の沈線は細く鋭い。称名寺式土器に伴出するであろう。



第167図 グリット出土縄文土器

第 VI 篇

鳥ヶ丘第 1 遺跡 (No.35)

遺跡コード 209—013

所在地 佐原市九美上鳥ヶ丘12-120他

調査担当者 齋木 勝, 羽二生 保

鳥ヶ丘第 2 遺跡 (No.36)

遺跡コード 209—014

所在地 佐原市九美上鳥ヶ丘11-40他

調査担当者 羽二生 保

鳥ヶ丘第 3 遺跡 (No.37)

遺跡コード 209—008

所在地 佐原市大根字庚塚1787-2他

調査担当者 池田大助, 岡田光広

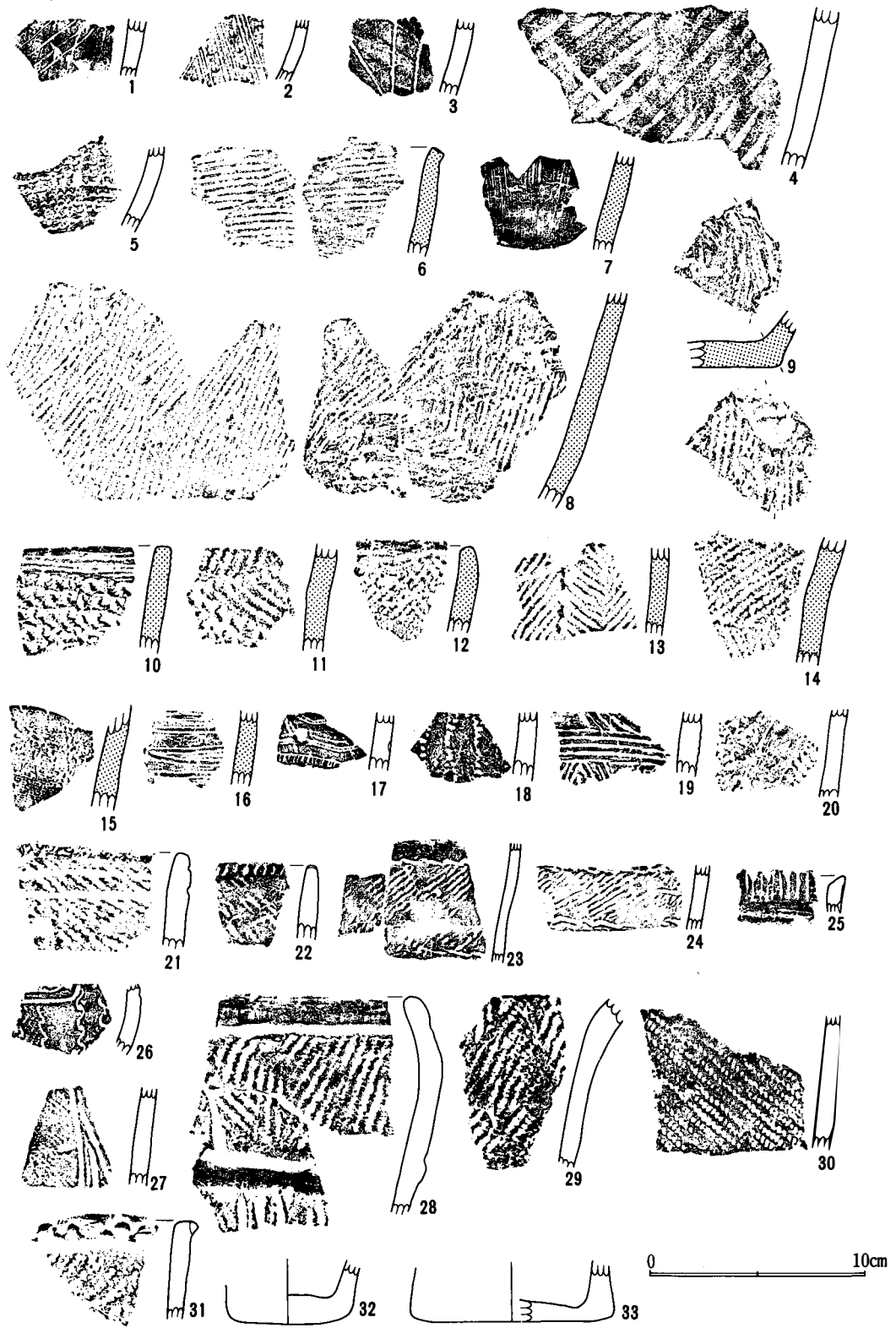
検出された遺構と遺物

第1節 烏ヶ丘第1遺跡

本遺跡からは遺構の検出がなかったが、グリット中から縄文時代早期から後期にかけての土器片が断片的に出土した。

グリット出土縄文土器 (第168図)

1～5は早期中葉の沈線文系土器群である。胎土中に粒子を多く含み、焼成は非常に良好である。内面は良好に磨かれる。文様は竹管による細沈線文・太沈線文を主体とし、刺突文・貝殻腹縁文がみられる。1～3は細沈線文を縦位・横位に施すものである。2は胴部の幾何学文文様部で鋸歯状の細沈線を重層させる。細沈線間にはコの字状の刺突文が施される。4は斜位の太沈線が器面を巡る。おそらく口縁部から底部まで同じ文様が施されるのであろう。5は底部付近の破片で、貝殻腹縁文を横位に施す。いずれも田戸下層式土器に比定されよう。6～9は早期後半の条痕文系土器群である。胎土中に植物繊維を多く含み、7を除き内外面とも条痕が施される。7は植物繊維の量が他の土器に比して少なく、内面に擦痕がみられる。縦位の細沈線が施される。子母口式土器であろう。6・8・9は内外面ともに条痕が多方向に施される。6の口唇部にはキザミが認められる。9は平底の底部片である。10～16は胎土中に植物繊維を多く含み、内面は丁寧に磨かれる。10は口縁部片で、口縁部直下に半截竹管による平行沈線が6条施文される。以下ループ文が5段形成される。11～14はRL・LRの単節縄文を組み合わせ、羽状縄文を作出する。羽状縄文の方向は横位(11・14)と縦位(12・13)がある。関山式土器である。15は波状貝殻文、16は半截竹管による平行沈線が施される。いずれも植物繊維を多く含む黒浜式土器であろう。17～20は胎土中に砂粒子が含まれ、内面が丁寧に磨かれる。17は地文に撚糸文(L)を施し、半截竹管による平行沈線文や連続爪形文がみられる。浮島I式土器であろう。18は波状貝殻文を横位に施す浮島II式土器である。19は半截竹管により器肉を浮線させるように平行沈線を施すもので、横位平行沈線の上下には三角文が認められる。十三菩提式土器となろう。20は貝殻腹縁文の周りを細沈線で区画し、はみでた部分を丁寧に磨削している。興津II式土器に比定される。21～24は前期終末から中期初頭に位置づけられる。21はLRの単節縄文を縦位に施文し、口縁部直下に2条の撚紐圧痕が加えられる。22は単節縄文(RL?)で、口唇部にキザミを施す。23・24は胴部片で、無節縄文(L)を横位に施文する。撚紐の末端を縛ったS字状の結節文がみられる。21・22は粟島台式土器、23・24は下小野式土器に比定されよう。25～27, 32, 33は中期初頭の五領ヶ台式土器である。25は口縁部直下に半截竹管による短沈線が施される。26は口縁部から胴部片で、胴部は単節縄文(RL)を縦位に施



第168図 グリット出土縄文土器

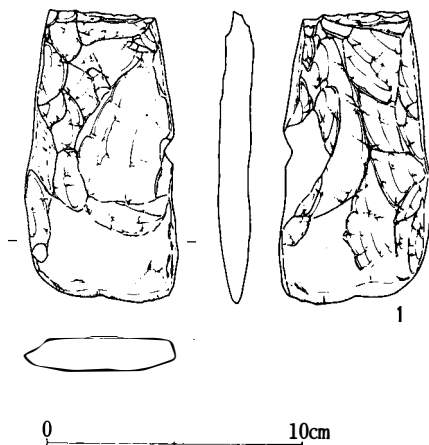
文する。結節文がみられる。27は単節縄文（LR）と沈線が施される。32・33は無文の底部で、33は底面で広がる形態をとる。胎土・整形・形態等から考えて本類土器の底部と考えられる。28～30は加曾利E式土器に比定される。28・29は同一個体で、地文に単節縄文（LR）を施し、口縁部直下に1条の沈線が巡らされる。口縁部文様帯は隆帯で区画する。30は単節縄文（RL）を施した胴部片である。31は口縁部直下に1条の隆帯を巡らし、隆帯上には指頭圧痕を施す。地文は単節縄文（LR）である。加曾利B式土器の粗製土器である。

第2節 鳥ヶ丘第2遺跡

本遺跡から遺構は検出されず、縄文時代前期から中期の土器片が若干出土したが、小片のため図示し得なかった。他に石斧が1点出土している。

グリット出土石器（第169図）

1は局部磨製石斧である。両側縁から荒割りを行い、長方形の定形石斧を作出する。図下部の両面に磨きを施して刃部を形成する。刃部一端には使用痕が認められる。長さ11.2cm、幅5.8cm、厚さ1.5cm、重さ146gを測る。石材はホルンフェルスである。



第169図 グリット出土石器

第3節 鳥ヶ丘第3遺跡

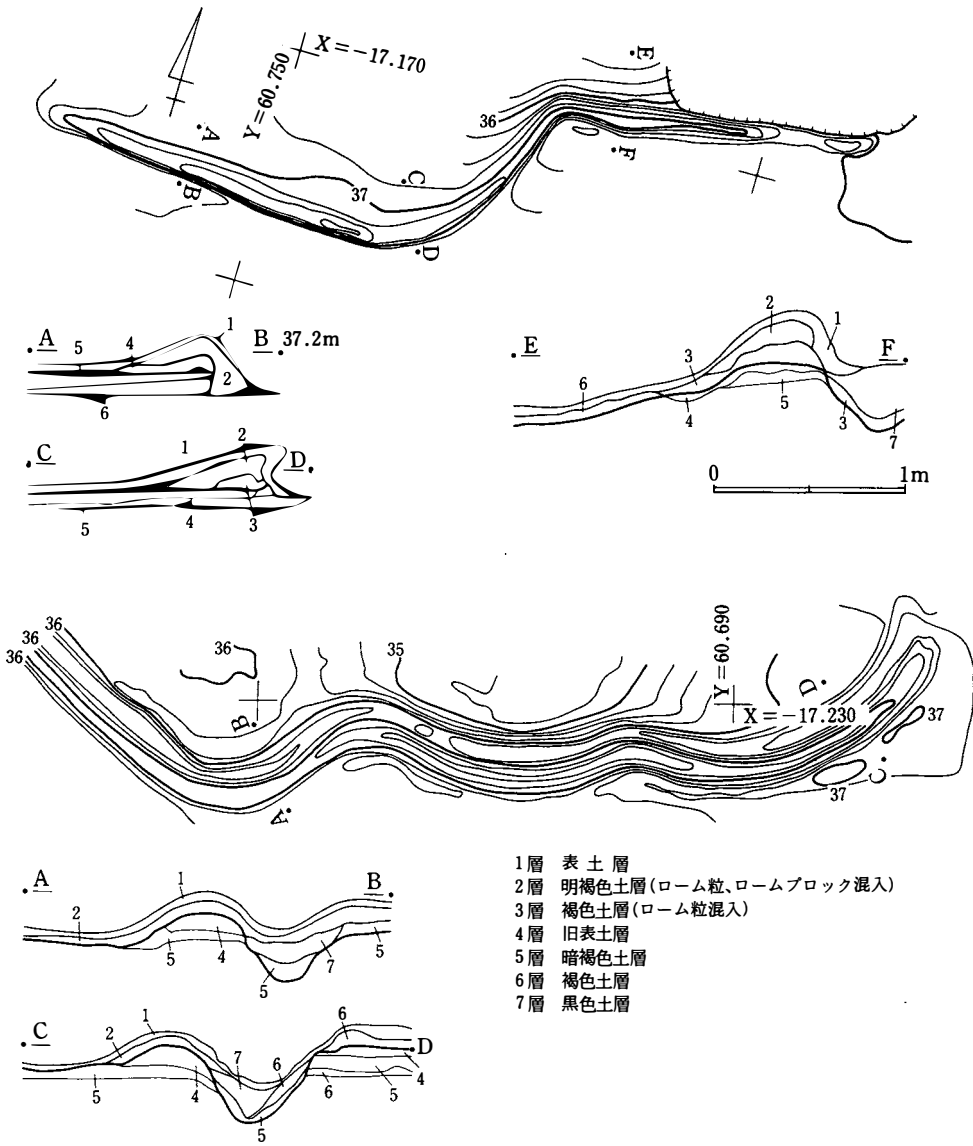
本遺跡の調査対象となった馬土手は、幅3m、見かけの高さ1～1.5m程で、北側から入る小支谷を望む台地縁辺及び鳥ヶ丘第2遺跡の位置する台地を横断するように構築される。途中途切れる部分もあるが、全長360m程である。途切れた部分は後世に攪乱されたものと考えられ、おそらく築造時には全体がつながっていたのであろう。今回の対象範囲はこのうちの現存する170m程である。

馬土手（第170図、図版66）

東西に2条現認されるが、前述したように当初はつながっていたものであろう。東側はかなり攪乱されているが、西側部分は比較的良好に旧状を維持している。構築方法は、旧表土を整形して概形を区画し、その上に土を盛り上げている。積みかたはきわめて単純で、盛土中にローム粒及びロームブロックを含むことより、南側に設けられる溝の掘り込みに際して得られた土を利用して構築したことが窺える。溝は馬土手の南側、すなわち台地平坦部側に旧表土を掘り込んで存在する。幅2m前後、深さは旧表土面より1～1.5mと規模は大きい。遺物の出土は

鳥ヶ丘第3遺跡 (No.37)

なかった。



第170図 馬土手 (1/600)

終 篇

考 察

第1章 縄文時代

第1節 中山遺跡出土の三戸式土器について

中山遺跡から出土した三戸式土器^(註1)は、前述した通り1個体のみである。(細片に至るまで注意深く観察したが三戸式土器は全く認められなかった。更に、現地におもむき踏査を行ったが1点も採集できなかった。)土器を観察した結果数多くの特徴が認められた。三戸式土器における主体的な文様は細沈線文土器である。周知の通り細沈線文土器は文様の表現が顕著で、土器の変遷・系列を考える上で重要な遺物である。近年の動向を顧みても細沈線文土器に主眼が置かれている事は言うまでもない。しかし、発掘調査の増加に伴いこの時期の資料が増し、細沈線文土器の比較検討だけでは沈線文系土器前半期の様相を把握するのは大変難しくなってきた。沈線文系土器前半期における太沈線文土器が注目され始めたのは、昭和55年の頃、常陸伏見遺跡・舟塚原遺跡の報告がなされてからである。つまり、常陸伏見遺跡において太い沈線をもつ一群の土器が三戸式土器(竹之内式土器)より下層から出土したとし、より古い土器群として「伏見式」を仮称している(小野1980)。また、西川氏は舟塚原遺跡の報告を発表され、三戸式土器の細分と地域性を考えられると同時に第171図23, 24の様な口縁部直下に短沈線帯を巡らす一群の土器に着目され、三戸式土器の中にも太沈線文土器が存在することを明らかにしている(西川1980)。これ以降太沈線文土器に対する論考は発表されず、従来までの「太い沈線文」=「田戸下層式土器」というイメージが強く根をおろしていた。これは沈線文系土器研究が細沈線文土器に主眼が置かれたことと良好な遺構・遺物が発表されていなかったことに起因している。本節では、中山遺跡の土器(第II群第1類土器)を中心に三戸式土器の一文様要素としての太沈線文の存在を明らかにし、更に中山遺跡における三戸式土器の特徴をあげまとめた。

1. 中山遺跡出土三戸式土器の特徴

先ず最初に中山遺跡出土三戸式土器の特徴をもう一度まとめてみたい。

- ① 胎土中に大粒の長石・石英を多量に含み、更に白色微細粒子・黒色微細粒子・雲母・スクリア等を含む。特に長石・石英粒子が目立つ。焼成は良好である。
- ② 器形は、口縁部が外反し胴部で若干のふくらみをもつ砲弾型土器である。
- ③ 口唇部形態は角頭状を呈する。
- ④ 外面整形はケズリ、内面整形は磨きである。
- ⑤ 土器片は、輪積み部での破損が多い。
- ⑥ 文様は、口縁部直下から底部直上まで横位の浅く太い沈線を巡らす。施文具は半截竹管で

器肉をえぐる（沈線内に砂粒子が移動した擦痕が認められる）。

- ⑦ 底部直上を部分的に磨き（表面を意識したものなのか？）文様を作出する。この文様は菱形を意識した帯状格子目文である。
- ⑧ 赤彩を施した可能性が強い。

以上のような特徴をもつ土器のうちで重要なものは特徴⑥と⑦である。特徴⑥のような口縁部直下から底部直上まで同一文様が施文されるもので浅く太い沈線が施文される土器は、凹線文土器と呼ばれ（小野1980）、細沈線文土器と区別して呼ばれる傾向にあった。両者を区別して呼称するのは沈線文系土器研究上たいへん有効的である。しかし、凹線文という用語はよく使われがちであるが、これほど曖昧な呼び方はない。つまり全ての沈線文は凹線文であると言うことができるのである。今後はこれらを統一し、「口縁部直下から底部直上まで太い沈線により同一文様・幾何学文を施す土器」を細沈線文土器と区別して「太沈線文土器」と呼称したい。太沈線文土器は、文様施文方向から横位のもの（横位太沈線文）・斜位のもの（斜位太沈線文）・縦位のもの（縦位太沈線文）・幾何学状のもの（幾何学状太沈線文）・格子のもの（格子太沈線文）とが考えられ、施文手法は器面に施文具を押し付けるものと器肉をえぐり取るものの両者が考えられる^(註2)。この分類に即して中山例を当てはめると、「器肉をえぐり取る横位太沈線文」の太沈線文土器と言うことができる。特徴⑦は細沈線文土器に普遍的に認められる文様である。太沈線文土器に普遍的にみられる文様は上記した文様である。言うまでもなく一地域、一時期の土器の器形と文様、更に文様の割り付けには一定のきまりがある。当土器の様に底部直上に文様を施すものは普遍的な文様と区別し例外的な文様と言えよう。今度の場合、例外的な文様が施文されていることによって従来までの考え方を新たにする必要があると言える。

2. 三戸式土器の一文様要素としての太沈線文

太沈線文土器にみられる土器の文様は、上記した様に横位太沈線文・斜位太沈線文・縦位太沈線文・幾何学状太沈線文・格子太沈線文とがある。

A. 横位太沈線文をもつもの（第171図1～9）

比較的多数の遺跡で出土している。千葉県中山遺跡(1)・同県石道谷津遺跡(4)・同県タルカ作遺跡(5)・同県捕込附遺跡(6)・同県庚塚遺跡(7, 9)・茨城県常陸伏見遺跡(2)・東京都們田遺跡(3)・埼玉県井沼方遺跡(8)等があげられる。器形は中山例の様に口縁部がやや外反するものと、常陸伏見例・們田例の様に直行するものがある。口唇部形態は角頭状・外そぎ状(3)が一般的で、口唇部にみられるキザミが認められないものが多い。但し、図版には示さなかったが今郡カチ内遺跡ではハの字状のキザミが施されているものがあり注意する必要がある^(註3)。内面整形が良好で、胎土中に大粒の長石・石英粒子を多量に含むもの(1・7・8)と小さな砂粒子を含むもの(9)とに分けられる。文様は口縁部直下から底部直上まで横位に太沈線が重層的に巡る。

また7・9の様に施文の仕方が多少異なる太沈線が施されるものもある。1の様に底部直上に例外的文様として、細沈線文土器にみられる普遍的文様が施文される例があるようである。

B. 斜位太沈線文をもつもの (第171図10~14)

東京都多摩ニュータウンNo.207遺跡(10)・埼玉県北宿西遺跡(11)・同県梅所遺跡(13)・千葉県庚塚遺跡(12)・同県今郡カチ内遺跡(14)等があげられる。器形は10の様に口縁部から直行ぎみに底部至るものがある。復元された資料が少なく伴然としない。口唇部形態は内そぎ状のものが多く、口唇部にみられるキザミは殆どない。内面整形は10・13にみられるように口縁部直下で横方向、胴部から底部直上までは縦方向のケズリが施される。胎土には小さな砂粒子を含むものが一般的である。文様は口縁部直下から底部直上まで斜位に太沈線が重層的に施文されるものである。10の様に1条描きで施すものと、11・12・14の様に短沈線により文様を施すものに分けられる。

C. 縦位太沈線文をもつもの (第171図25)

器形が復元されたものはない。25は埼玉県北宿西遺跡例で、口唇部形態は内そぎ状である。文様は縦位に短沈線が施されている。夏島貝塚(報文 FIG 13, 61)や庚塚遺跡(報文第18図260~262)等の様に田戸下層式土器として理解できるものもある。

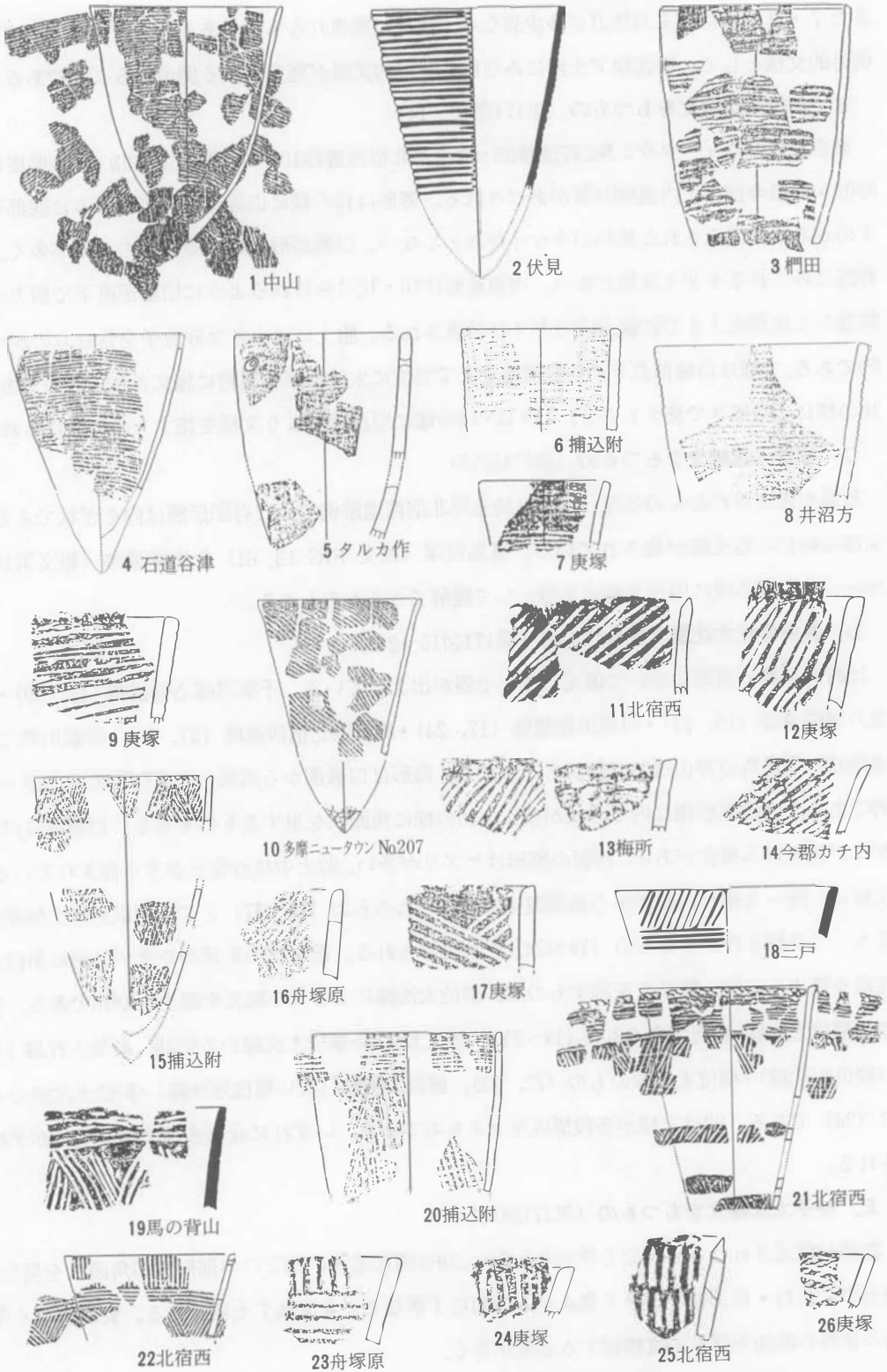
D. 幾何学状太沈線文をもつもの (第171図15~24)

比較的多数の遺跡に於いて復元可能な土器が出土している。千葉県捕込附遺跡(15, 20)・同県舟塚原遺跡(16, 23)・同県庚塚遺跡(17, 24)・埼玉県北宿西遺跡(21, 22)・神奈川県三戸遺跡(13)・同県馬の背山遺跡(19)等があげられる。器形は口縁部から底部へと直行するものが一般的である。口唇部形態は内そぎ状が多く、20の様に角頭状を呈するものもある。口唇部にはキザミが施される場合がある。内面の整形はケズリが多い。胎土中に砂粒子が多く含まれている。文様は、同一文様が口縁部から底部直上まで施されるもの(15~17)と2種類以上の文様要素をもって文様を作出するもの(18~24)とに分けられる。前者は山形状のモチーフ内に斜位太沈線を施すもの(15)、綾杉文を施すもの(16)、斜位太沈線による入り組文を施すもの(17)である。後者は横位太沈線・幾何学文のもの(19~21)、斜位太沈線・横位太沈線のもの(18)、縦位太沈線(太い縦位短沈線)・横位太沈線のもの(22, 23)、縦位太沈線(太い縦位短沈線)・斜位太沈線のもの(24)である。22は文様が多段構成をとるものである。いずれにせよ多種多様な文様が予想される。

E. 格子太沈線文をもつもの (第171図26)

器形が復元されたものがなく伴然としない。26は庚塚遺跡の例で口唇部形態が角頭状を呈し、胎土中に長石・石英粒子が多く含まれ、内面に丁寧なミガキを施す土器である。資料がなく今後の資料の増加を待ち再度検討する必要がある。

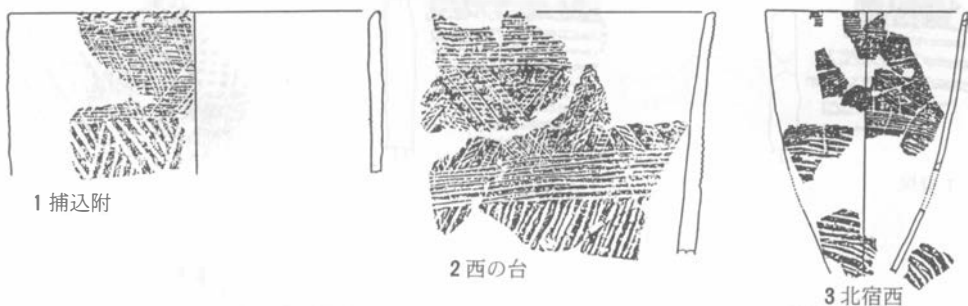
中山遺跡を代表するAの横位太沈線文土器は伏見式として考えても良いものである。ところ



第171図 各遺跡出土の三戸期太沈線文土器(報告書より転載：縮尺不同)

が底部直上に特徴⑦が施文されている。特徴⑦は三戸式土器特に庚塚遺跡で分類した庚塚Aタイプ（もしくは庚塚類）の胴部文様に良く認められる帯状格子目文である。口唇部形態、胎土、内面整形等の特徴から考えても同一時期の所産であると言える。胎土が二種類あることが若干気掛かりであるが、庚塚類にも胎土に二種類あるので問題はないようにも考えられる。Bの斜位太沈線文土器は口唇部形態、胎土、内面整形等庚塚Bタイプ（もしくは三戸類）や庚塚Cタイプ（もしくは舟塚原類）に類似する点が多い。Cの縦位短沈線が施されるものは前に述べたように田戸下層式土器に認められる文様要素であるが、北宿西遺跡例の様に口唇部形態が内そぎ状を呈していることや内面整形等からある程度推察できる。Dの口唇部形態、胎土、内面整形は三戸類、舟塚原類に類似する。更に23・24の様に口縁部直下に縦位短沈線を巡らす文様は、西川氏が指摘されるように舟塚原1類土器にみられる文様と同様である。また、捕込附遺跡、北宿西遺跡例の様に主体的に出土している土器が三戸式土器で、口唇部形態、口唇部に於けるキザミ、内面整形等三戸式土器との共通点が認められる。Eは類例が少なく伴然としないが、土器の諸特徴が庚塚類に類似している。総体的にみると各々の土器にはまとまった特徴が認められ、三戸式土器の細沈線文土器の諸特徴と合致すると言えよう。三戸式土器には大きく細沈線文土器と太沈線文土器が存在し両者が時間的前後関係にあるのではなく、共存し併用されたと推察できよう。ここで言う太沈線文土器とは器面に施される文様が全て太沈線によって構成されているものであり、三戸類（第172図1、2）や田戸下層式土器（第172図3）にみられる底部文様の太沈線文とは異なるということを付け加える。これらの太沈線文は土器の一部の文様であり、細沈線文土器の一バラエティーとして理解したい。

さて、ここで問題となるのは田戸下層式土器との区別である。新潟県室谷遺跡出土の横位太沈線文土器は、文様が横位細沈線文・横位太沈線文・横位細沈線文・刺突文という文様構成をとり田戸下層式土器として捉えられる。太沈線文が施文されている土器が細片もしくは部分的に出土するとこれらの土器を区別する事はたいへん難しい。各遺跡に於いて総体的に分析し土器の特徴から位置づけを考えなければならない。田戸下層式土器にみられる太沈線文の文様は、



第172図 底部付近文様としての太沈線文(報告書より転載、縮尺不同)

内外面の整形がたいへん丁寧な器面に大胆な沈線が施文される。更に、太沈線による幾何学文様が発展し、付属的要素として細沈線文・刺突文・貝殻腹縁文等が施文される。これを踏まえ三戸式土器と田戸下層式土器の顔つきの違い（胎土，整形等）を区別しなければならない。

3. 中山遺跡の三戸式土器の問題点

①太沈線文土器にみられる例外的文様（第173図1～3）

中山遺跡から出土した三戸式土器は、従来迄深く追及できなかった太沈線文土器にその編年の位置づけをある程度示唆してくれた。そればかりではなく太沈線文土器には例外的文様が施文されていることもあるという事を明らかにしてくれた。庚塚遺跡を整理中2点の太沈線文土器に刺突文・細沈線文が各々に施文されていることに気づいた。庚塚遺跡報告の時点ではさほど注意を以て観察しなかったが、振替ってみると非常に重要な意味をもつ土器であることが明らかとなった。改めて2例を紹介し更に茨城県大沼遺跡の資料を取り上げたい。

庚塚例1（第173図1，報文第16図207）口唇部形態が角頭状を呈し，内面ミガキ・外面ケズリの整形の後，横位太沈線文を施すものである。3条と4条の太沈線文の間に断面が長方形の細い竹管状工具による刺突文が施される。^(註4)

庚塚例2（第173図2，報文第15図183）口唇部形態が角頭状を呈し，内面ミガキ・外面ケズリの整形の後，横位太沈線文を施すものである。口唇部上には1条の細沈線が巡る。また，口縁部直下から縦位の細沈線が施文される。

大沼例（第173図3，報文第13図14）底部の破片で全体的な文様は不明であるが，中山例の様に底部直上に帯状格子目文を用いた菱形状の文様を作出していると考えられる。

以上の様な例をあげられるが何故にこのような例外的文様が施されたのだろうか？。製作者を意図し施文されたもの・土器の表面を現したのもの・祭祀的意味合いを意識し施文されたもの・単なるイタズラ描き等想像がつくが根拠のない空想にすぎない。今後十分な検討を通して例外的文様が施される訳を考えていく必要があるだろう。



第173図 太沈線文土器に施文される文様の例(報告書より転載、縮尺不同)

②出土状況の特殊性

中山遺跡では上記した様な土器が1個体出土したにすぎない。千葉県石道谷津遺跡・神奈川県黒川東遺跡でも横位太沈線文土器が単独で出土している。その他の遺跡の状況をみると多かれ少なかれ各種の三戸式土器が出土している。中山遺跡の土器には例外的文様が施文されたり、単独出土と言う興味深い事実が含まれており太沈線文土器の在り方が注目される。

③赤色物塗彩について

特徴⑥に示したように本土器には赤色物が塗彩されている可能性が高い。科学的分析に基づくものではないため断言できないが土器の器面に部分的に赤色物の付着が認められた。縄文時代早期の赤色物塗彩土器は田戸遺跡・城之台貝塚等で田戸上層式土器の破片に付着が確認されている。城之台貝塚では科学的な分析によりベンガラ（酸化第2鉄）が確認されている（領塚1982）。また、飛ノ台貝塚・野島貝塚・吉井城山貝塚等の早期後半の条痕文系土器にベンガラ（酸化第2鉄）の付着が確認されている。縄文時代早期後半には確実に赤色物を塗彩する行為があったと考えられるが、その前半期から中葉には現在の所確認されていない^(註5)。本三戸式土器には特徴⑦にみられる例外的な文様が施文されている事、他の三戸式土器を伴出せず単独で1個体が出土している事等の事実を踏まえ考え合わせれば、当土器に赤色物を塗彩した可能性が高い。当土器は祭祀的な意味を持つ器と考える事が可能である。

4. まとめ

沈線文系土器研究は発見より半世紀を過ぎているが、その報告が少なく未だに未解決な部分が多い。今回は中山遺跡出土の三戸式土器を中心に三戸式土器の文様要素としての太沈線文土器の存在を明らかにした。今後は三戸式土器の細沈線文土器と太沈線文土器との相互関係（更には今回は触れなかったが条痕文土器との三者の関係）を踏まえ編年的位置づけを考えていく必要がある。また、細沈線文土器の文様要素の消長と系統を考えるとともに太沈線文土器の文様要素の消長と系統を研究し土器自体の機能を明らかにする必要がある。

中山遺跡出土の三戸式土器は量的には1個体だけであったが、その土器には沈線文系土器前半期の土器研究に大きな役割を果たしていた。沈線文系土器前半期は従来までの土器文化を踏襲しながら他地方の土器文化を受け入れつつ独自の新しい土器文化を創造するまでの過渡期にあたる。その様相は我々が考えているよりも複雑であった事が想像される。その複雑さが一つの土器をとっても考えられる。沈線文系土器を製作した人々の行動様式を捉えるにはいろいろな方法を用いて考えなければならない。

第2節 馬場・天王宮両遺跡の縄文時代晩期土器について

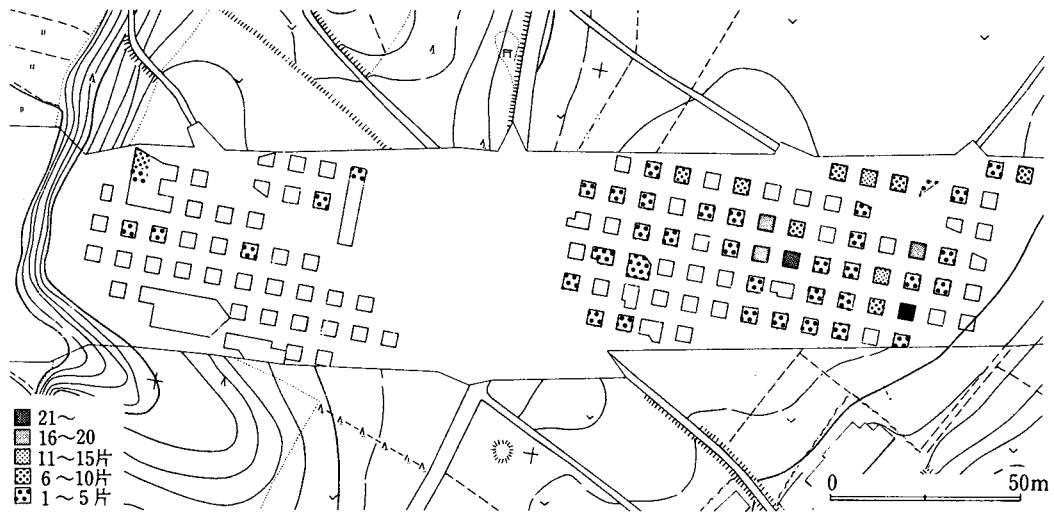
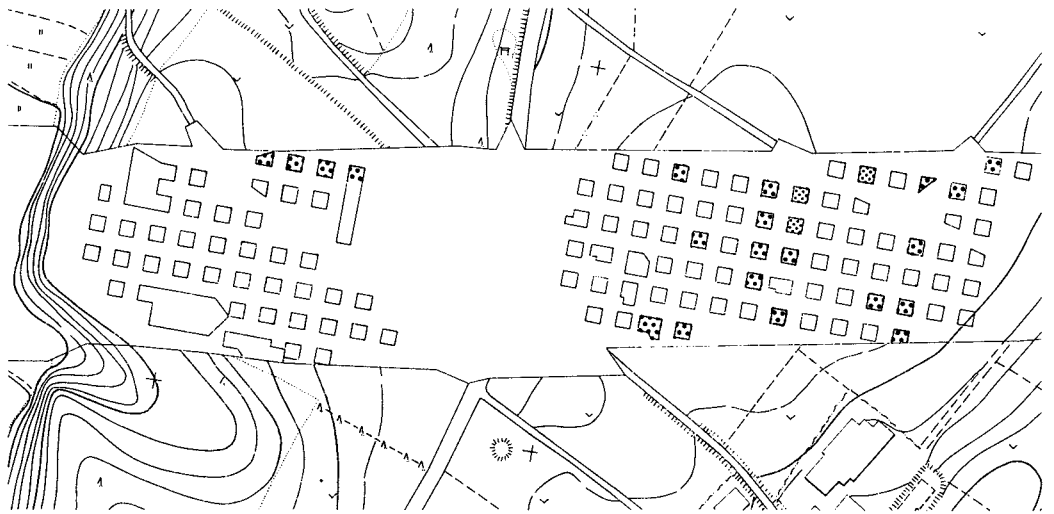
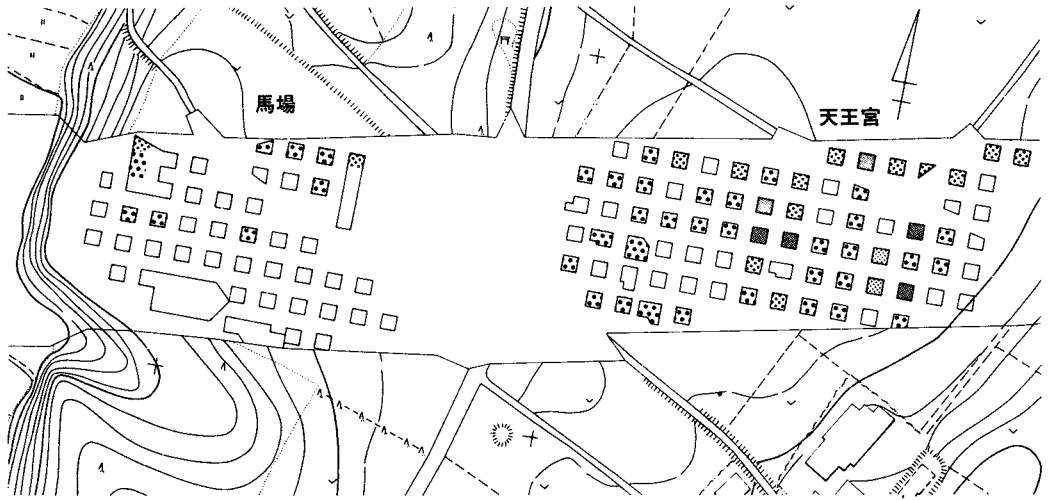
馬場遺跡・天王宮両遺跡は同一台地上に立地する遺跡である。前記したように両遺跡で出土する縄文時代晩期の土器は若干様相を異にしている。本節では両遺跡の土器に若干の考察を加え、遺跡の立地する台地の土器の分布状況をまとめる。

馬場遺跡から出土した晩期の土器は精製土器24点、粗製土器45点の合計69点という非常に少ない量であった。精製土器の全ては所謂千網式土器である。千網式土器に特徴的な浮線網状文が沈線により浮線化されているものである。また、第79図66にみられる口縁部直下のキザミは中部地方の水式にみられるものである。粗製土器には撚糸文、条痕文がみられるが、条痕文は千網式土器が出土する地点と若干別地点である。

天王宮遺跡からは精製土器62点、粗製土器253点の合計315点が出土している。精製土器の器種がはっきりしているものがなく伴然としないが、深鉢土器が大部分である。一部に壺形土器や浅鉢土器も存在すると思われる。第82図27は荒海貝塚1・2次調査の折りに出土した壺形土器(報文第26図7・西村1984)の様な土器の胴部破片であろう。また、精製土器の浮線網状文や変形工字文は完全に沈線化され沈線自体がシャープさをかく。更に沈線間に片突きの列点文が施文される等新しい様相を呈していると考えられる。荒海貝塚第六群土器第X類に良く類似する。粗製土器は縄文、撚糸文、条痕文、無文があり条痕文が多数を占める。原体が無節の縄文土器は類例が少ないため注意したい。条痕文土器で荒海貝塚第六群土器第XI類中には折り返し口縁や小突起等があるが当遺跡にはあまりみられない。当遺跡の土器は殆ど荒海式土器の範疇で捉える事ができる。

第174図に示したように台地の西側に千網式土器を出土した馬場遺跡があり、中央部には荒海式土器を出土した天王宮遺跡が立地している。馬場遺跡は全体的な遺物の分布が薄く、集中地点が調査区より北側の舌状台地上である可能性がある。精製土器と粗製土器の分布が若干異なる。天王宮遺跡は全体的に遺物が散布しているが、集中地点は2・3ヶ所に限定される。精製土器、粗製土器ともに同様な分布を示している。当台地上に於ける縄文時代晩期の遺物の分布は、千網期には台地の縁辺を点々と遺跡が存在し、荒海期になると台地のほぼ中央部を占拠し生活が営まれた可能性が高い。今回の調査では残念ながら生活遺構はなかったが隣接する畑地に多数の荒海式土器が散布しており生活遺構の存在が予想される。同一台地上に於いて千網期・荒海期の遺物が地点を異にして出土した例は少なく重要な位置をしめる。

最近北総台地に於いて晩期終末の遺跡が多数発見されその報告が相次いで発表されている。これらの遺跡群を考えていく上で重要なのは、当遺跡の様に河川上流域にみられる小規模遺跡の存在と龍正院貝塚、鳥羽貝塚、荒海貝塚を代表とする下流域の遺跡群との関係、更に後期に少なかった河川上流域の遺跡が晩期終末に小規模ながら点在するという事実である。



- 21~
- ▣ 16~20
- ▤ 11~15片
- ▥ 6~10片
- ▦ 1~5片

第174図 馬場・天王宮遺跡の晩期土器群分布状況(上、全体 中、精製土器 下、粗製土器)

考 察

- 註1 ここで言う三戸式土器とは竹之内式土器を含め広義の意味での三戸式土器を用いる。三戸式土器はその名称自体その名称が的確ではなく地域によって異なるタイプの土器が出土し始め、各研究者によって見解が異なる。
- 註2 土器の器肉を一部取るという表現は削る・そぐ・えぐる等の用語が考えられるが、ここでは西川氏の表現を用いた(西川 1983)。また沈線文の種類と施文手法を改めて論述するとしここでは深くふれない。
- 註3 今郡カチ内遺跡では日計押型文土器が供伴しており日計式にみられるキザミが施されたと考えられる。
- 註4 庚塚遺跡報告の際当資料を貝殻腹縁文として考えたが細い竹管状の工具を用いている事が判明した。ここに訂正する。
- 註5 現在整理中の畑ケ田新林遺跡から撚糸文系土器の器面に赤色物の付着が認められた。また、側高遺跡からは中山遺跡例と同様の太沈線文土器に赤色物の付着が認められている。両遺跡ともに現在鑑定中であり詳細は後日報告したい。なお、畑ケ田新林遺跡例は田形孝一氏の御教示によるものである。

引用文献

- 赤星直忠 1936 「古代土器の一形式としての三戸式土器について」『考古学』第7巻9号
- 石橋宏克他 1987 「庚塚遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ—大栄地区(2)—』(助千葉県文化財センター)
- 江里口省三 1982 「No207遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和56年度—(第2分冊)』(助東京都埋蔵文化財センター)
- 岡本 勇 1959 「三浦郡葉山町馬の背山遺跡」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第3号
- 小倉均・大塚和男 1986 『北宿西・北宿南遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第63集
- 小倉 均 1981 『大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第15集
- 小倉 均 1984 『梅所遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第43集
- 小野真一 1980 『常陸伏見』常陸伏見遺跡調査会
- 小宮 孟他 1985 「今郡カチ内遺跡」『東総用水』(助千葉県文化財センター)
- 佐々木克典他 1979 『櫛田遺跡 1978年調査概報』八王子市櫛田遺跡調査会
- 佐藤政則他 1977 「日立市大沼遺跡発掘調査報告書」日立市教育委員会
- 杉原荘介・芹沢長介 1957 『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学
- 高野安夫他 1985 『寺向、捕込附遺跡』山武考古学研究所
- 田村 隆 1985 『佐倉市タルカ作遺跡』(助千葉県文化財センター)
- 西川博孝 1980 「三戸式土器の研究」『古代探叢—滝口宏先生古稀記念考古学論集—』
- 西川博孝 1983 「竹管文」『縄文文化の研究』5 雄山閣
- 西村正衛 1984 『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—』早稲田大学出版部
- 西山太郎 1975 「石道谷津遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告』Ⅲ
- 馬目順一 1982 『竹之内遺跡』いわき市教育委員会
- 村田文夫他 1980 『黒川東遺跡』高津図書館友の会郷土研究部
- 領塚正浩 1982 「千葉県小見川町城ノ台南貝塚採集の早期縄文土器に就いて」『奈和20号』

第2章 古墳時代一小六谷台遺跡の検討

第1節 土 器

本遺跡では12軒の住居跡が検出され、住居跡内より比較的豊富に土器が出土している。土器の様相より、古墳時代中期から後期にかけての所産と考えられる。住居跡の構造と関連して、移行期の状況を良好に捉えられる資料である。ここではまず、先述した土器の分類に基づいて資料を検討し、その組成及び編年の位置づけを考えてみたい。なお、対象とする土器は実測図中の器形を窺えるものとし、共通して出土する器種を主体とする。

杯A 1としたものは、本遺跡の中で最も出土量の多い杯である。全部で31点で、002・004・008・009・011・012号住居跡で出土している。002・009号住居跡での出土割合がきわめて高く、他は数点のみ見られるにすぎない。赤彩が施される土器は31点中25点で、全体の81%を占める点特徴的である。法量的には口径18.6から11.1cmとばらつきがみられるが、009号住居跡では15cm前後に集中する。杯A 2は、002・009号住居跡で7点である。法量、口縁部形態でバラエティーが存在するものの、2軒の住居跡のみにみられるタイプである。杯A 3は3点のみで、008・011号住居跡で出土した。すべて赤彩される。形態的にA 1と類似する。杯A 4は、口縁立ち上がり部に明瞭な稜を有さずに口唇部が短く外屈する特徴的な形態を呈する。002・004・010号住居跡で4点みられる。002号住居跡例のみ赤彩される。当該期の集落ではあまり多くみられないものである。杯Bは004・005・007号住居跡で各1点ずつ出土している。口縁部形態はそれぞれ異なる。杯C 1は007号住居跡で2点のみみられる。口縁部が直立し、器肉が他に比して厚くなる。101は全面に赤彩が施される。杯C 2は15点出土しており、赤彩は認められない。007号住居跡で12点と主体を占め、他では009号住居跡で2点、005号住居跡で1点みるにすぎない。形態的に器高が深いものと浅いものの2種類が存在する。005・009号住居跡例は前者のみで構成され、古い様相を呈するものである。杯C 3は14点認められる。002・004・007・008・010・011・012号住居跡で出土し、011号住居跡で4点を数える以外はすべて1～2点含まれるにすぎない。杯C 2とは異なった出土状況を呈する点注目される。赤彩される割合は7点50%となる。

高杯A 1は006号住居跡で3点出土する。73は他の2点とはタイプが異なり、小さめの杯部にハの字状に広がる脚部を付したものである。この中では古い形態を呈する。高杯A 2は最も個体数の多い高杯で、006・009・011・013号住居跡より10点出土している。ただ、完形となるものは2点のみで、他は杯部か脚部のいずれかが欠損している。すべて赤彩は施されない。高杯Bは脚部片が2点ときわめて少ない出土量である。002号住居跡のみで検出され、本遺跡における高杯の衰退現象を示していると思われる。1点のみ赤彩が認められる。高杯Cは007号住居跡

考 察

において1点出土している。杯部は内黒となる。脚部がかなり長くなり、杯部が外反する口縁部を呈するタイプは、杯部内黒、外面赤彩が通例となる。千葉市以北の北総地域に限定され、年代的にも限られるものである。1つのメルクマールとして捉えられるであろう。

甕Aは、口縁部の形態によってA1・A2・A3の3タイプに分類したが、それぞれ数点ずつ各住居跡に普遍的に認められる。これらの形態的変遷を明確に捉えることは困難であるが、本遺跡のなかではA2としたコの字状の口縁部を呈する一群が若干新しい様相を有すると思われる。甕B1は006号住居跡で2点出土している。いずれも外面に刷毛目を施した後に弱いヘラミガキを加えるが、92の口縁部が若干コの字状を呈する点様相が異なる。胴部は長胴気味となり、最大径を上半部に有する。本遺跡出土の甕の中に刷毛目整形を残すものがきわめて限られていることから、最も古いタイプとして捉えられよう。甕B2は007号住居跡のみで5点検出された。長胴で、最大径を中位か上半部に有するものである。胴部のヘラケズリの幅は広い。甕Cは007号住居跡で2点みられる。胴下半部に縦位のヘラミガキを施し、胎土中に長石・石英粒を多量に含むことを特徴とする。本類の甕は、千葉県北部から茨城県・栃木県にかけて分布域を示すいわゆる「常総型」とよばれるものである。口縁部形態により時期的変遷が窺われることが想定されており、それによると素口縁からつまみ上げ口縁に移行しているようである。本例は資料的に少ないが、「常総型」甕の出現期段階の所産と考えられる。甕Dは1点のみで、鉢に類するものであるが、その法量より甕として分類した。

小形甕は形態的に3タイプに分類したが、器形がバラエティーに富む。小形甕Aでは、006・011号住居跡出土の外面に刷毛目を残す一群が最古と考えられる。B・Cの外面にヘラケズリを残し、やや長胴となる一群は後出の様相を呈する。小形壺も3タイプに分けられるが、ほとんどの住居跡で検出されており、形態的変遷はあまり窺われない。ただ、Cとしたものは前代からの器形を受け継ぐものである。

以上のように分類した土器の様相と各器種の伴出状況を基に検討した結果、本遺跡は大きくI～IVの4期に分けることができる。

I期：006・013号住居跡が本期に相当する。杯類はほとんど存在せず、高杯A1・A2が多く含まれる。部分的に刷毛目痕が残り、赤彩される資料がきわめて少ない点特徴的である。丸底を呈する小形壺C及び平底状の小形罎も多く認められる。小形甕Aもこの時期に存在するが、胴部外面に刷毛目痕を有する。他では、やや長胴となる甕B1が注目される。器形は後出的であるが、明らかにセットとして捉えられるものである。

II期：005・009・011号住居跡が本期に相当する。I期とは明瞭にセットが異なり、高杯Aの占める率が少なくなり、新たに杯A1が出現してくる。口径15cm前後とほぼ一定している。赤彩される割合は70%と高くなる。他に模倣杯と考えられる杯C2・C3が若干ながら認められ

る。杯C 2は器高が深く、初現的な様相を呈する。杯C 3は高杯A 2とともに011号住居跡のみに含まれるものである。甕はA 1・A 3が本期より出現する。他に小形甕A、小形壺A・B・Cがみられる。小形壺CはI期において顕著であり、本期で消滅する器種である。本期を住居跡ごとのセットでみると、011号住居跡ではI期に主体を占めた高杯A 2と口縁部が外反する杯C 3の存在が顕著である。Cタイプの杯がC 3のみで構成されることと、前代から続く高杯A 2の様相から、本住居跡がII期の中では最も古い土器群を伴出する。005号住居跡は資料が少なく、明瞭ではないが杯Bを含むことより若干新しい様相を示すようである。

III期：本期には002・004・008・010・012号住居跡の5軒が該当し、本遺跡の最盛期となる。II期に比して土器のバラエティーが豊富にもなるもののそれほどの差はなく、時期的に連続するものであろう。杯ではA 1を主体とし、新たにA 2～A 4が出現する。杯Cは、C 2・C 3が認められるが、C 3が主体となる。II期の011号住居跡例と比較して、法量的にばらつきがみられる。高杯はBが脚片であるが本期のみに存在する。甕では、口縁部がコの字状を呈するA 2が出現する点特徴的である。

IV期：本遺跡では007号住居跡1軒のみである。杯ではAタイプのものがみられなくなり、杯Cが圧倒的に多くなる。なかでも、須恵器杯身の模倣であるC 2が主体となり、III期とは隔絶した様相を呈する。高杯はCが1点のみ含まれる。時期・地域ともにある程度限定される器種で、メルクマールとなり得る資料である。甕では、B 2及びCの出現が特徴的である。特に「常総型」と称される甕Cは、胴部に膨らみを有し、口縁部が素縁となる古い特徴を示す。

以上、本遺跡をI～IV期に分けたが、I～III期はほぼ連続する状況を呈し、IV期はかなり時期差を有するものと思われる。

次に問題になってくるのは、各期に対する相対的な年代である。I期は高杯Aと甕B 1に特徴づけられる。高杯はいわゆる和泉期の特徴を如実に示すものである。甕B 1は刷毛目整形を残すものの、胴部が長胴となり新しい様相を呈するようになる。類例はほとんど認められないが、栃木県国分寺町烏森遺跡（田代1986）において古墳時代中期土器の甕Bと分類したものと比べて類似する。高杯の様相も同様であり時期的に併行するものであろう。報文では中期後半としており実年代の呈示はないが、本遺跡ではI期に5世紀の中葉という年代をあえて与えておく。II期は器高の深い椀形を呈する杯A 1の出現に注目される。I期にはほとんどみられない器種であり、確実に新しい様相であるが、高杯には前代のものが残る。前述したようにII期には若干の時期的な差が認められることと、次のIII期を考慮して5世紀の後半を中心とした年代を想定しておきたい。III期は杯A 1に法量のばらつきがみられ、小形のものが含まれるようになる。他の器種でもタイプの分化が顕著になり、組み合わせが複雑になる。その背景にはいろいろな要素が想定されようが、後述するカマドの出現も大きな要因として考えられよう。

考 察

この段階になると須恵器を供伴する例が比較的多く認められ、相対的に年代の想定が容易になってくる。本遺跡での検出はなかったが、土師器のセットとして同様の様相を示す遺構として柴町大畑Ⅰ遺跡（石田1985）SⅠ25・SⅠ16があげられる。それぞれTK208・TK23併行の須恵器をとまなっており、5世紀の後半から終末の年代が付与されよう。本遺跡のⅢ期は、Ⅱ期から連続する時期として同様の年代が考えられる。Ⅳ期はほぼ定形化した杯C2と「常総型」と呼ばれる甕C、短い口縁部を呈する甕B2の存在が特徴的で、セットとしてきわめて良好である。印旛村平賀遺跡群（村山1986）の土器と比較してみると、甕Cは鬼高Ⅲ期において出現し、甕B2は鬼高Ⅴ期に主体的にみられるタイプである。年代的にはⅢ期を6世紀中頃から後半、Ⅴ期は七世紀前半として考えている。本遺跡での甕Cはやや長胴となり、平賀のⅢ期よりは若干新しくなる。以上より、本遺跡のⅣ期は杯の様相を加味して6世紀の後半としておきたい。

第2節 住居跡群の変遷

本遺跡の調査範囲がきわめて限定されているために集落として捉えることは不可能であるが、Ⅰ～Ⅳ期に分けた土器群を住居跡に還元してみると比較的明瞭に住居の変化が窺われる。Ⅰ期とⅡ期は炉と貯蔵穴を有し、形態的な差はほとんどみられないが、005号住居跡は炉及び貯蔵穴の位置が異なっており、方位的には次のⅢ期により近くなる。土器の様相が違うこともこの点から肯首できよう。Ⅲ期は本遺跡が盛期となる時期で、カマドが導入される。住居の配置から、008・010・012号住居跡の東側に位置する3軒と002・004号住居跡の西側に位置する2軒の2つのグループに分けられそうである。これらは構造的にみてもかなり異なる。東側はカマドを東壁に有し、貯蔵穴がカマド右側に設けられるのに対して、西側は北壁にカマドが構築され、カマド対壁に大きめのピットが配置される。一方では、004・012号住居跡はカマドとともに炉が併設される状況があり、規模もきわめて大きい。おそらく、2つのグループにおいて核となるのであろう。杯の様相でも若干の差異があることから、両者は別個の集団として捉えたほうが適当と考える。Ⅳ期はかなりの時期差をもって1軒のみ存在するが、単独で形成されることは考えられず、北側の台地先端部に当該期の住居が展開する可能性が強い。

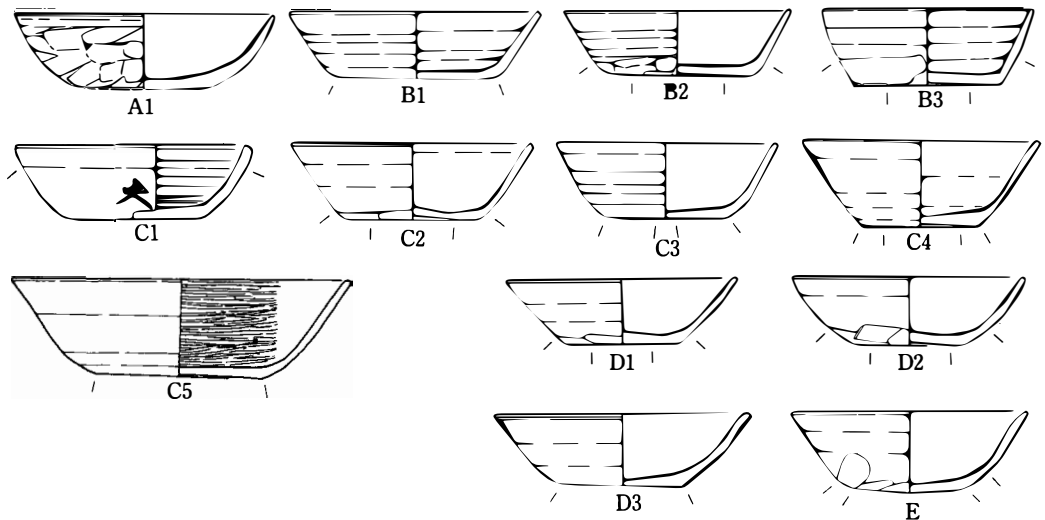
引用文献

- 石田広美 1985 「大畑Ⅰ遺跡の調査」『主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人千葉県文化財センター
田代 隆 1986 『烏森遺跡』栃木県文化振興事業団
村山好文 1986 『平賀』平賀遺跡群発掘調査会

第3章 奈良・平安時代

第1節 佐原市南部地域における土器様相

該期の住居跡は、中山・馬場・東野遺跡において26軒検出された。調査範囲が限定されているために集落としての様相を把握することはできないが、出土した土器は比較的良好であり、従来調査例のない佐原市南部地域の一端を示すものである。以下では、3遺跡をまとめて検討し、各遺跡間の共通点及び相違点を通して土器様相を簡単に述べていく。なお、検討する器種は第175図で分類した杯を中心とし、補足的に甕等を加味する。また、『房総における歴史時代土器の研究』（房総歴史考古学研究会1987、以下1987年研究とする）でほぼ土器編年が確立したと考えているので、これに対応して画期を設定していく。



第175図 中山・馬場・東野遺跡出土土器杯分類図

I期：馬場遺跡001号住，東野遺跡005・006号住がこの時期にあたる。伴出土器は少ないが、杯B2・C2が主体となる。いずれも形態的に須恵器模倣が強い。須恵器は、馬場遺跡001住，東野遺跡006住にみられる。馬場遺跡例は、胎土に長石粒を多く含むことより、常陸南西部産の可能性が強い。東野遺跡005住の72は法量的にやや小さいものの、整形・形態的に類似するものである。東野遺跡006住では、杯と蓋の2点が床面上より検出された。杯は、胎土が緻密ながらもやや砂っぽく、長石粒等の混和材を含む。底部は回転糸切り後周縁に回転ヘラケズリを施す。胎土・調整・形態より窯跡の特定は困難であるが、北武蔵の窯跡群の特徴を備えているものと

考 察

思われる。蓋は、胎土中に大砂粒・黒色粒を多く含み、焼成があまり良くない。おそらく在地産となろう。本期は、須恵器の様相、特に北武蔵の窯跡群産と考えられる杯より年代が捉えられるようである。胎土的に異質であるものの、形態からすると前内出1号窯と併行関係にありそうである。前内出窯期は、酒井清治氏によると750年を前後する年代を想定している(酒井1987)。他の須恵器も年代的に整合性が認められることより、本期を8世紀第3四半期として考えておく。

II期：東野遺跡002・003・007・009号住が本期となる。杯では、箱形を呈するB3が主体的になり、I期とは様相が異なる。一方では、I期にみられる杯B2、次期に主体となる杯C3も含まれており、混沌とした状況が窺える。時期的な特徴としても捉えられようが、002号住居跡のように廃棄を示す出土状況も大きな要因と考えられる。本期の年代は、須恵器が伴出しないが、特徴的な形態を示す杯B3によって示されるであろう。このタイプの杯は下総地方において顕著にみられるもので、年代的にも8世紀後半から9世紀初頭に限定されている。また、佐原市玉造上の台遺跡A区3号住居跡では大量の同タイプの杯が検出されており、年代としては8世紀後半を想定している(註1)。他の器種を加えたセットでは、八千代市北海道遺跡075号住居跡が類似する(阪田1985)。8世紀末から9世紀初頭の年代が与えられている。以上のことより、本期は9世紀第4四半期を中心とした時期に捉えておきたい。ただ、土器様相からするとI期と次のIII期との間の空白は認められない。

III期：馬場遺跡002・004号住、東野遺跡001・004・010号住がこの時期となる。扁平な形態を呈する杯B1とともに、Cタイプの杯が主体を占めるようになる。東野遺跡001号住は、古い様相を示す杯B1の存在と、杯Cでも底径が大きい杯C2が主体となることから、II期にきわめて近い時期と考えられる。また、東野遺跡004号住は次期に主体となる杯C3が多くなることより、やや新しいセットが窺われる。ただ、本住居跡は一括廃棄の可能性が強いため若干の疑問が残る。一方、「鹿郷……」の墨書土器を出土した馬場遺跡004号住は、杯B1とC3が混在する。カマド内の出土状況からすると、両者は同時に使用されており、古いタイプの杯が残ると考えて良さそうである。本期の年代としての根拠となるものはないが、IV期との関係より、9世紀第1四半期を与えておく。

IV期：東野遺跡008号住、中山遺跡004・006・008号住が本期にあたる。中山遺跡008号住居跡では、住居廃棄後の一括資料として多くの土器が検出された。杯C～Fまできわめてパラエティニーに富む状況である。III期に比して土器の様相が複雑になり、内黒土器・高台付皿が出現する点特徴的である。杯のなかで主体を占めるC3と内黒土器・皿のセットは、佐原市吉原三王遺跡023号住居跡の「……承和」と判読できる可能性をもつ一括土器群(栗田1986)及び八千代市北海道遺跡D048号住居跡の「承和五年」(838年)の紀年銘をもつ一括資料(阪田1985)と類

似するものである。これから考えると、本期は9世紀第2四半期に相当するが、全体の土器相からはより中葉に近くなるであろう。008号住居跡の一括資料のなかでは、杯C4・D3・Eの存在が目される。当該時期の下総地方ではほとんど類例を見ない形態であるが、上総・下総の接壤地帯に位置するいくつかの遺跡より同様のものがみられる。杯C4は、山武郡山武町野出山遺跡19号住居跡（武部1986）・東金市作畑遺跡173号住居跡（平田1986）、杯D3は香取郡多古町林遺跡61H（勝又1985）、杯Eは山武郡山武町荒追遺跡24号住居跡（武部1986）で出土している。特に林遺跡ではセットとしても類似する点が多い。この状況は、中山遺跡が立地する栗山河流域の特徴として捉えられると同時に、下総と上総の土器が交錯する地域的特性なのである。

第V期：中山遺跡001・003・005・007・011・012号住居跡が本期に相当するが、IV期との明瞭な変化は少なく、ほぼ連続する様相を呈する。杯はIV期同様バラエティーに富むが、底径が口径の半分以下となる杯D、特にD1・D2の占める割合が若干多くなる。全体の土器様相からみると、1987年研究で作畑遺跡VI～VII期としたものと類似する。ここでは猿投産の黒笹14・90窯式の灰釉が伴出している。灰釉の年代にまだまだ流動性があるものの、本期の年代を9世紀第3四半期を中心とした時期に考えておきたい。

第VI期：中山遺跡009・010号住居跡が本期で、この時期で住居跡が消滅する。杯はCタイプのもものが激減し、杯Dが主体となる。また、010号住居跡では底部無調整の杯Fの存在も顕著である。本期の年代は、根拠となるものがないが、前期から続く時期として9世紀第4四半期をあてはめておく。

以上のように中山・馬場・東野各遺跡の奈良～平安時代の土器を杯の分類からI～VI期にわけて考えてみた。杯のみの検討で、しかも出土状況に混沌としたものが存在するゆえに若干の危険性はあるが、基本的には妥当性を有するものとする。その結果、以下のことが把握できたので簡単に列挙しておく。あくまで調査範囲内に限定されるが、8世紀第3四半期において東野・馬場遺跡に住居跡が出現する。この両遺跡は9世紀第2四半期の前葉で消滅するが、馬場遺跡は住居跡の分布より大規模な住居跡群が形成されることはなかったようである。ただ、少ない住居跡ながらも注目される墨書土器が検出されることには重要な意味が含まれていると考えられる。これについては次節で検討する。東野遺跡は、8世紀後半から9世紀前半にかけて連続的に形成されるが、須恵器杯がほとんど認められない点特徴的である。柏市や我孫子市のある下総西部地域は、当該期の杯に占める須恵器の量が圧倒的に多い反面、本遺跡の位置する下総東部地域では土師器が主体となる。これは須恵器の供給源との関係が想定されているが（註2）、本遺跡の土師器杯の形態をみると、杯B及び扁平な杯Cの存在が顕著である。これは、須恵器の忠実な模倣と考えられ、本遺跡では8世紀後半の段階から須恵器の消滅状況が顕著と

考 察

なり、代わって模倣形態の土師器杯が盛行するようになるものと想定される。また、二彩火舎の出土は一般集落ではほとんどみられないものであり、その意味は大きいと思えるが、出土状況に曖昧な点があり、ここでは資料の呈示にとどめたい。

中山遺跡では、9世紀第2四半期後半から集落が形成される。谷を隔てて対峙する馬場遺跡とは若干の時期差をもって成立するが、土器の様相から同一の集団が移動したものとは考えにくい。住居跡群は9世紀第4四半期には消滅する傾向にあるが、多くは9世紀後半を中心とした時期に捉えられ、きわめて短期間に集落が形成されていたことが想定される。ただ、出土する土器の様相は前述したように複雑なものがみられ、下総の土器を主体とするものの杯C3・D3・Eのように上総北東部にみられる土器を伴出する例も窺われる。すなわち、本遺跡及び林遺跡を含めた栗山川流域は旧下総国の南端に位置し、上総の土器あるいはその影響をかなり受けていた地域であると言えよう。

第2節 墨書土器の様相

墨書土器は、中山遺跡で12軒中8軒、馬場遺跡で4軒中2軒、東野遺跡では10軒中8軒とほとんどの住居跡で検出されている。もちろん覆土中のものもありすべての住居跡に伴出する訳ではないが、墨書土器の保有率はかなり高いものと言えよう。

墨書土器を取り扱うにあたっては多方向からの検討が必要であることは言うまでもないが、その前提に考古資料としての側面からアプローチすることが重要である。従来の墨書土器に対する研究は、ともすれば文字内容の解釈に終始する状況が多くみられ、その出土状態等考古学的側面は軽視されがちであった。本報告では、主要な墨書土器の内容の検討とともにその出土状況に主眼を置き、墨書土器の使用等考古学的側面を検討していく。

1. 各遺跡出土の墨書土器

墨書土器の内容に関しては簡単に触れることにするが、馬場遺跡出土の第109図の墨書は内容的に注目されるものであり、詳細に検細に検討しておく。

004号住居跡より出土した体部に「鹿郷長鹿成里人×」、底部に「子山口」と記載された墨書土器は、底部に関しては不明と言わざるを得ないが、体部の文字内容についてはその記載様式により2通りの解釈ができよう。

- ① 鹿郷（郷名）＋長鹿成里（里名）＋成里人（人名）
- ② 鹿（郷名）＋郷長（職名）＋鹿成里（姓名）＋成里人（人名）

以上の解釈をそれぞれ検討すると、①は郷里制を如実に表したものとなる。すなわち、鹿郷＝香取郷（註3）、長鹿成里＝譚草里（註4）に相当するものである。ところで、『出雲国風土記』に「件郷字者、依靈龜元年式改里為郷」とある。これから、靈龜元年（715年）の式によ

り従来の里を改めて郷としたことがわかる。一方この土器の年代は、前述したように9世紀の第1四半期に含まれるものである。このことから、譯草里、後の譯草郷に通じる里名を1世紀程経た後世に記載するとは考えられない。すなわち、①の解釈は土器の年代と比較して無理があると考えられる。②は、自分の身分を直接的に表した記載方法であり、不自然さはないであろう。ただ、「鹿成里」という姓名が文献上に表れてこないために疑問が残るところであるが、「神成」に通じるようなものであれば、まったく可能性がない訳でもなかろう。以上の状況より、①の解釈は否定され、②の解釈により妥当性があるものとする。

中山遺跡では、総数41点の墨書土器が検出された。判読不明なものが多いが、「郡上」・「成」・「忠」・「車智」の4種類は明瞭である。このうち、「忠」・「車智」は1点のみの出土で、「郡上」・「成」が圧倒的である。「郡上」は004号住居跡において1点、007号住居跡で3点、「成」は008号住居跡で6点と両者が混在する状況は認められない。この中で注目されるものは、008号住居跡において一括出土した「成」の土器群である。64と79の「成」には同様な筆割れが観察され、67と78は底部全面に大きく記載する特徴がある。前者は杯C3、後者は杯C4に分類され、タイプ別に筆の特徴が窺われる。この状況が他の遺跡でも認められるかどうかは不明だが、土器の供給とも関連する現象であり今後の課題となろう。ここでは事実の呈示だけにとどめておく。

東野遺跡では、「大」・「申」・「國玉」・「田」・「丈部」・「埴生」・「山加」の7種類が明瞭に判読できる。時期的には、中山遺跡よりやや古く、9世紀を前後する時期に集中する。この中には「國玉」の出土量が圧倒的に多く、墨書土器を出土した8軒の住居跡中5軒にみられる。特に004号住居跡では8点が一括廃棄されており、「國玉」に特徴づけられる遺跡と言えよう。一方では、「丈部」・「埴生」のように意味の明瞭なものも存在する。八千代市北海道遺跡では8世紀第4四期の杯に「丈部乙刀自女形代」と記されてある。文献史料によれば、印旛郡の郡領は「丈部」姓であり、印旛郡を中心として「丈部」姓が広く分布していたことがわかり、この「丈部」は人名と理解できよう。「埴生」は和名抄に記載される埴生郡をさすと思われる。本遺跡の位置は、和名抄の香取郡に相当し、当然埴生郡には含まれない。ただ、埴生郡が香取郡に隣接する位置にあることからすれば、土器が移動したことも考えられる。印旛郡印西町にある大塚前遺跡では、「埴」とヘラ描きされた文字瓦が多く出土している（佐藤1973）。この「埴」は埴生郡をさすものであろうとし、瓦の様相を加味して印旛郡内に所在する当遺跡と埴生郡が密接な関係を有していたと想定している。「埴」の文字に注目すると、墨書とヘラ描きの違いはあるにせよ、きわめて類似した書体を示す。時期的にも8世紀終末期でほぼ同様である。この他にも一般集落でありながら、二彩の火舎が出土することもあわせて注目すべきであろう。

以上のように各遺跡より出土した墨書土器は、遺跡ごとに特徴的な様相が窺えるが、調査区の限定もあり全容を表すものではない。なお、これらの3遺跡については別の機会に触

れているので参照して頂きたい（栗田1987）。

2. 出土状況よりみた墨書土器の機能

各遺跡出土の墨書土器を出土状況よりみてみると、覆土中より出土する例が圧倒的に多い。すなわち、住居を廃絶した時点で原位置に残る状況はほとんどみられない。床面上の出土は総数45点の内11点と24%程を占めるにすぎない。覆土中出土の中では、中山遺跡008号住居跡・東野遺跡004号住居跡例が目される。これはいずれも焼失住居であり、埋め戻したものと考えられる。埋め戻す状況を考えれば、埋土中に大量の墨書土器が含まれることはありえないであろう。とすれば、住居を完全に埋め戻した後に中山遺跡では「成」、東野遺跡では「國玉」を含む杯群が一括廃棄されたのであろう。それらが覆土中層にまで入り込むのは、埋土自体が徐々に窪んでいった結果の現象であろう。この一括廃棄の目的は現段階では不明であるが、住居廃絶に伴う可能性も考えられる。

墨書土器の出土状況のうち注目されるものは、カマド内よりの出土例である。馬場遺跡では、004号住居跡のカマド内燃焼部底面より浮いた状態で杯が4点重ねられて出土した杯は。杯はすべて倒位に置かれ、その一番上に置かれた杯に「上」の墨書が施されている。この「上」は体部外面に倒位で記されており、杯を倒位に置くことによりはじめて文字の意味が明瞭になるのである。すなわち、杯の使用を考えて「上」の文字を記載したことが想定される。また、東野遺跡では002・004号住居跡のカマド内に墨書土器が検出されている。004号住居跡では「國玉」の墨書土器がカマド左袖上面に遺存する。これらの出土状況、特に馬場遺跡例はカマドに伴って意識的に行われた行為と考えられる。同様の状況は他の遺跡でも比較的多くみられるが、市川市和洋学園国分校地内遺跡において顕著にみられる（寺村1974）。調査された22軒の住居跡の内5軒のカマド内に馬場遺跡例と同様な出土状況を示す杯が検出された。それぞれ瓦を支脚の代用として立てている。005号住居跡では瓦上に杯が5枚、013号住居跡では瓦の脇に下部を白色粘土で固めた杯が重ねられている。016号住居跡では瓦上に灰釉の椀と杯3枚が倒位の状況で、022号住居跡では瓦上に杯が3枚重ねられる。022号住居跡の3枚には「國」・「長」のヘラ描きが認められる。

カマドの廃絶に伴う意識的な行為すなわちカマド祭祀については、従来よりその存在が想定されているが、具体的な様相はまったく不明である。それは、今泉氏が言うように（今泉1987）史料中におけるカマド祭祀の日常的な行為と調査によって確認された廃絶時の状態が必ずしも一致しないことに起因するかもしれない。火所としてのカマドに日常的な行事の際に特定の供物を捧げる行事が存在することは民俗的事例より指摘されており（坪井1976）、現在でも荒神様として台所が重要な機能を果たしている状況は多くみられるであろう。馬場遺跡004号住居跡カマド内出土の杯4点の内1点には灯明使用の痕跡がみられる。カマドが火の神として重要な位

置を占めるならば、日常的な祭祀に献火として灯明を使用したことは当然想定されよう。さらに推測を進めるならば、他の3点の杯は献上物を捧げるための容器とも考えられなくもない。一方、杯を伏せるという状況はいかなるものであろうか。水野氏は、奈良県郡山市稗田遺跡より出土した竈形代を検討し、中国の文献等を加味して竈神が家族の功罪を天帝に報告するのを防ぐ庚申信仰が存在していたことを示すものであるとした(水野1985)。再び推論を重ねることになるが、カマド廃絶という行為によって最終的に竈神的な存在を永久的に封じ込める必要がある、そこに始めて杯を伏せるという行為が意味を持つてくるのであろう。伏せる土器は杯以外でも良さそうであるが、おそらく日常のカマド祭祀に使用された杯(これは住居の廃絶に伴い携帯する性格のものではない)を利用したのであろう。

本例のみでカマド廃絶に伴う祭祀形態を想定することには危険が伴うが、火を受けていない杯がカマド内に遺存する状況が多く認められることはきわめて不自然であり、その背景には上記したような祭祀が存在することは充分考えられよう。これについては他の例を検討していきたい。さらに重要な点は、墨書土器の使用例の一端を具体的に呈示できたことである。従来より1文字あるいは2文字の意味不明な墨書に対しての解釈は文字のみにとどまり、無理な状況が多くみられる。本例は住居あるいはカマドの廃絶に伴う墨書土器を出土状況という考古学的な側面からアプローチすることにより始めてその意味を解釈する対象になったのである。すなわち、墨書土器を考究するには考古学的な属性を十分に検討する必要性があり、調査時においても詳細な出土状況を把握しなければならないことが明白になったのである。

註1 原田享二氏に御教示いただいた。

註2 下総北西部における須恵器の供給源は現在のところ常陸南西部地域が有力である。本遺跡とは地域的にかなり離れており、須恵器の供給が少ないのは当然であろう。その反面、須恵器を模倣した土師器の存在が顕著になってくる。

註3 香取を「鹿取」と表記する例は、『類聚符宣抄』第一諸神宮司補任仁和3年(887年)5月7日に「……下総國鹿取神宮司赴任之時……」とある。

註4 『和名類聚抄』によれば、香取郡には大槻・香取・小川・健田・磯部・譯草の6郷がみられる。

引用文献

今泉 潔 1987 『大井東山遺跡・大井大畑遺跡』 財団法人千葉県文化財センター

勝又貫行 1985 『林遺跡』多古町林遺跡発掘調査会

栗田則久他 1986 「千葉県吉原三王遺跡の墨書土器」『考古学雑誌』第71巻第3号

栗田則久 1987 「旧香取郡出土の墨書土器」『古代』第83号

酒井清治 1987 『埼玉の古代窯業調査報告書』埼玉県立歴史資料館

阪田正一 1985 『八千代市北海道遺跡』財団法人千葉県文化財センター

佐藤克巳 1973 「大塚前遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II』(財)千葉県都市公社

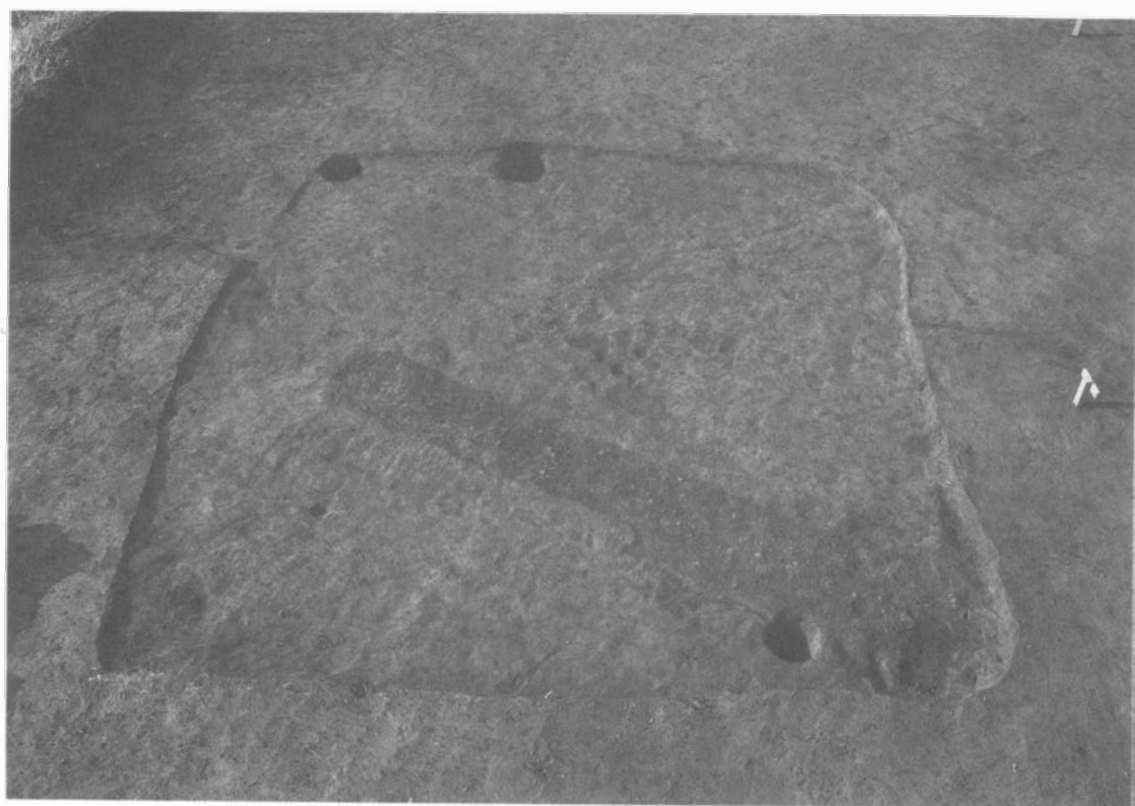
考 察

- 武部喜充 1986 『荒追遺跡群—発掘調査報告書—』荒追遺跡群調査会
坪井洋文 1976 「家の祭祀的構造（上）」『国学院大学日本文化研究所紀要』第37輯
寺村光晴 1974 『下総国分の遺跡』和洋女子大学
平田貴正 1986 『作畑遺跡発掘調査報告書』作畑遺跡調査会
房総歴史考古学研究会 1987 『房総における歴史時代土器の研究』
水野正好 1985 「招福・除災——その考古学——」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集

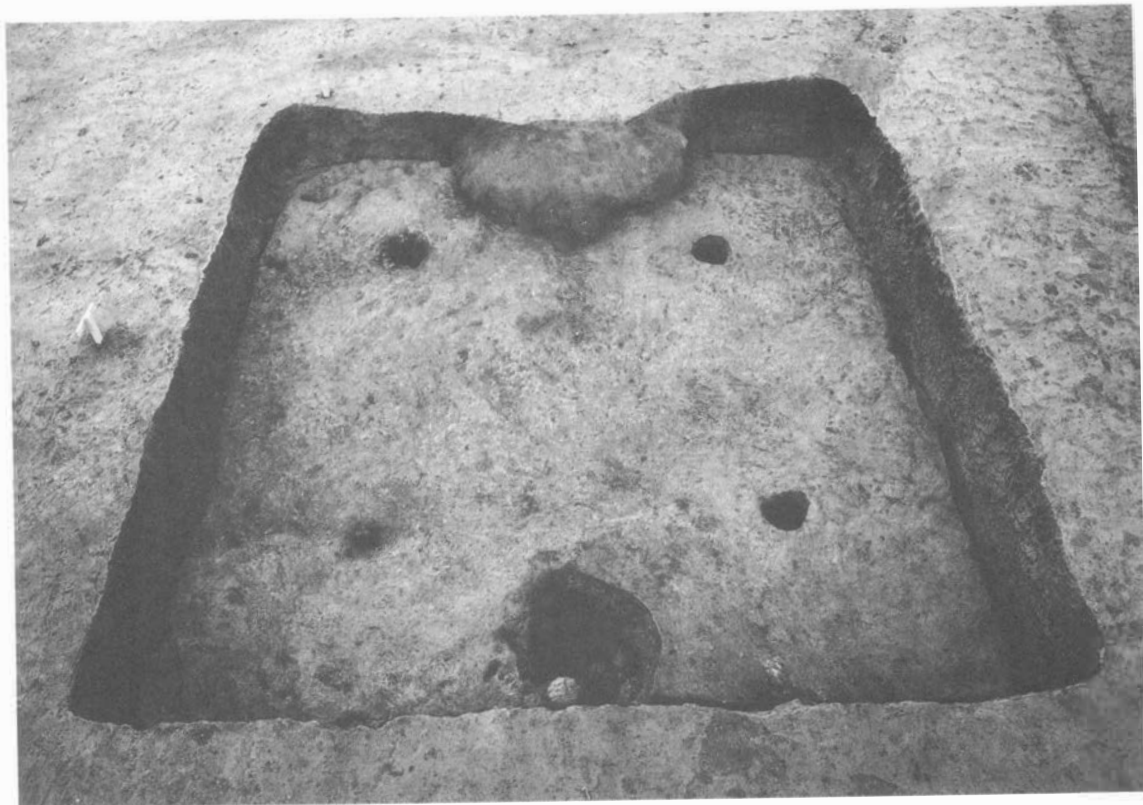
写真図版



1. 遺跡遠景



2. 001号住居跡



1. 002号住居跡



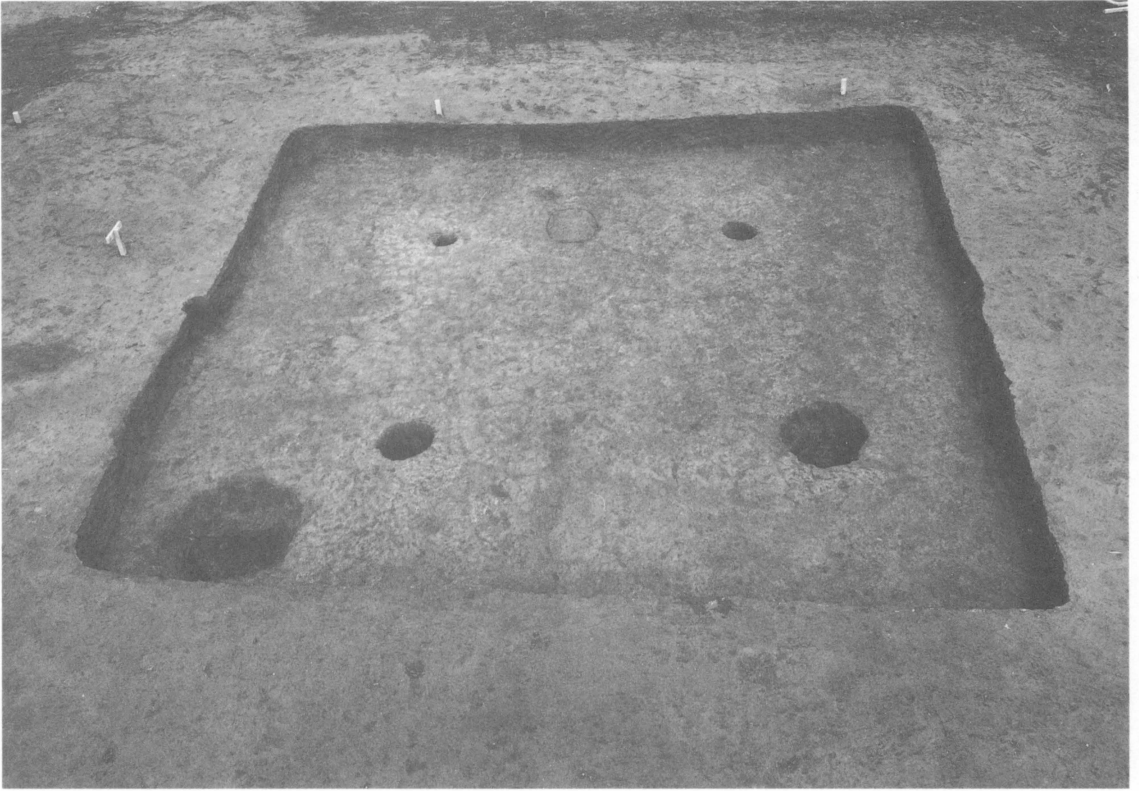
2. 004号住居跡



1. 004号住居跡カマド



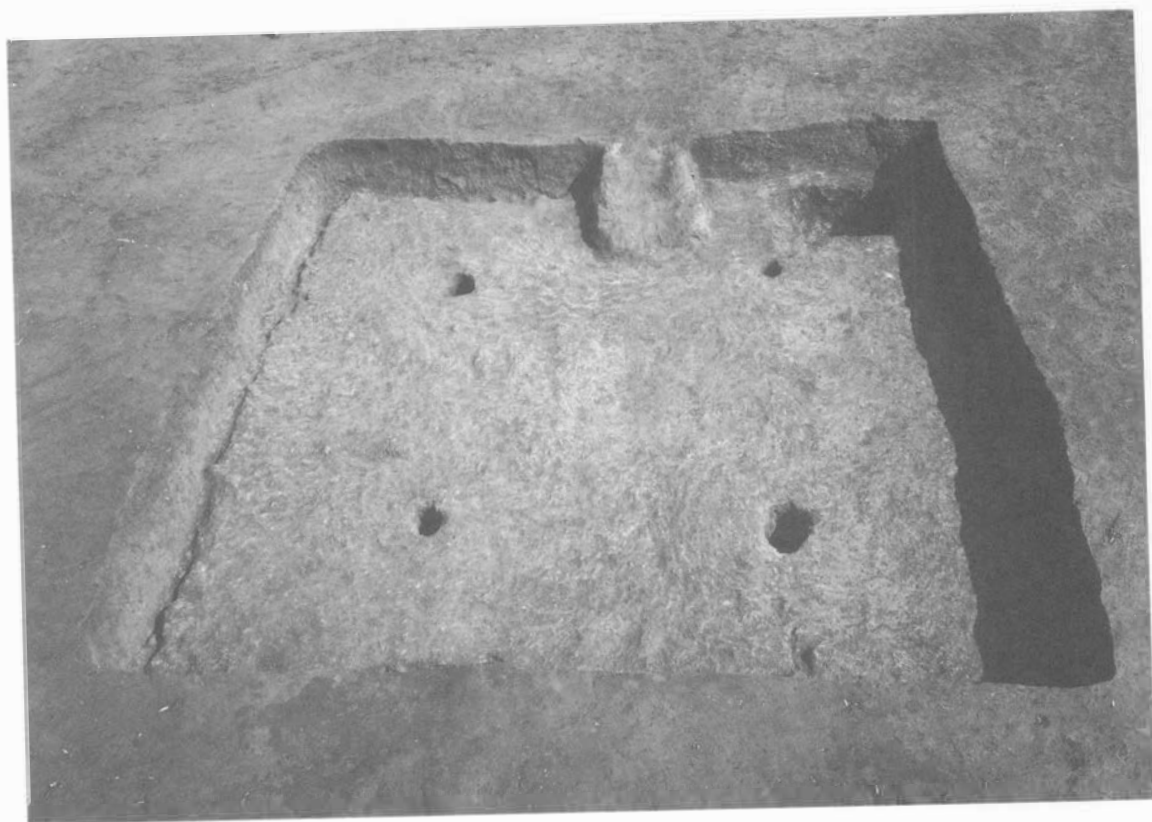
2. 005号住居跡



1. 006号住居跡



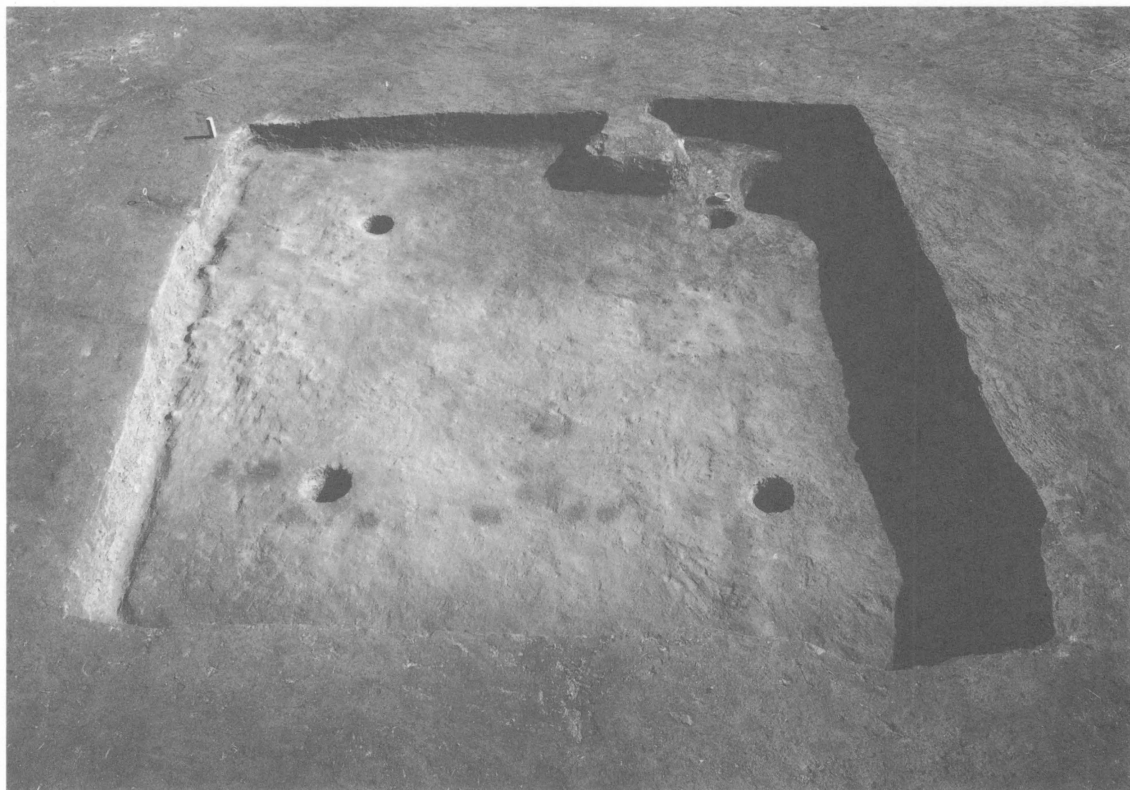
2. 007号住居跡



1. 008号住居跡



2. 009号住居跡



1. 010号住居跡



2. 011号住居跡



1. 012号住居跡



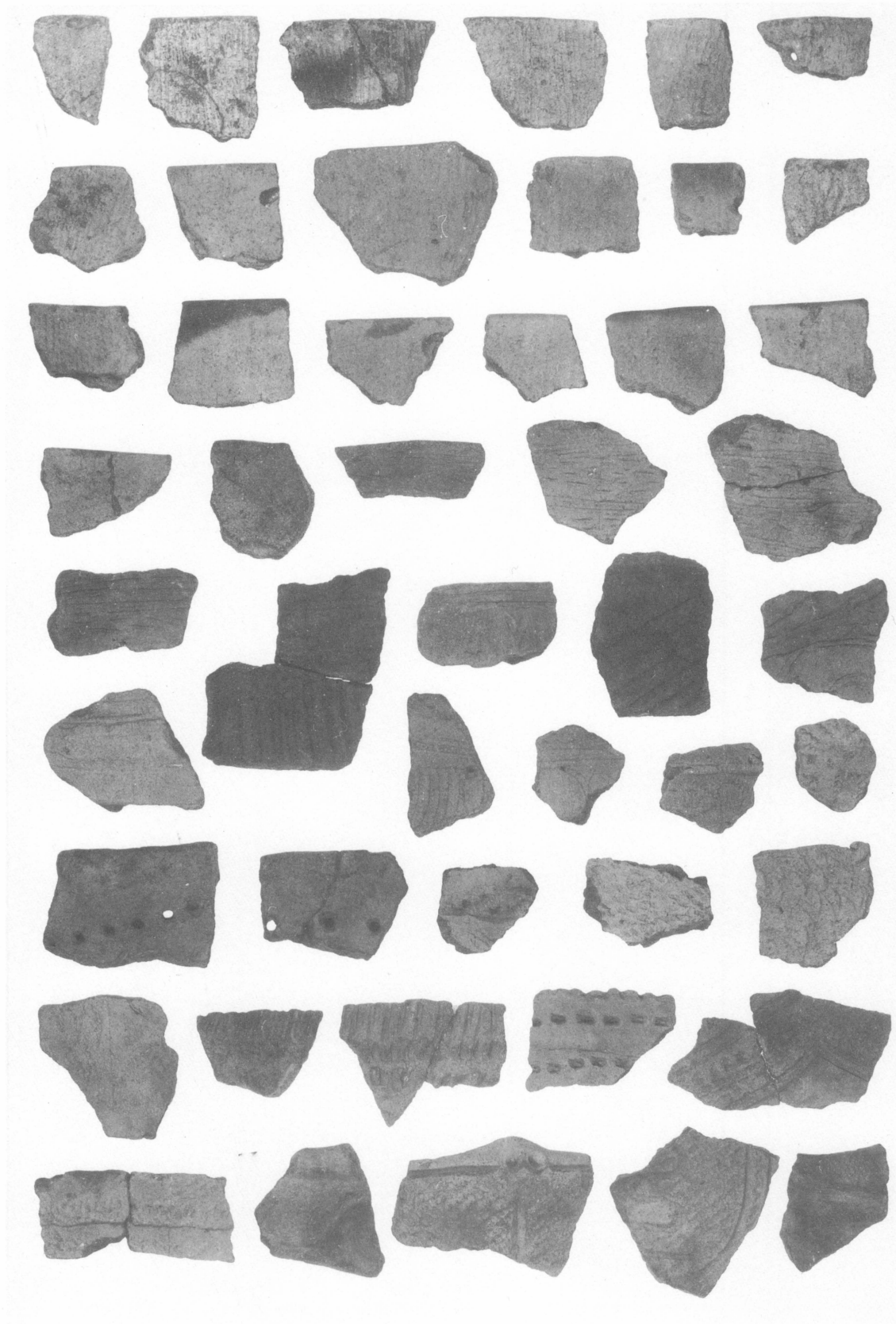
2. 013号住居跡



1. 101号土壇



2. 103・104号柵列状遺構



グリット出土縄文土器



4



5



8



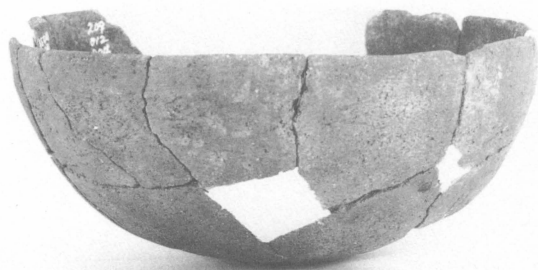
25



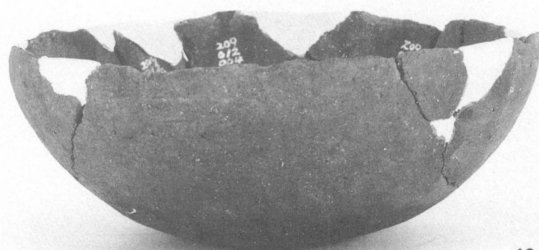
35



40



41



43



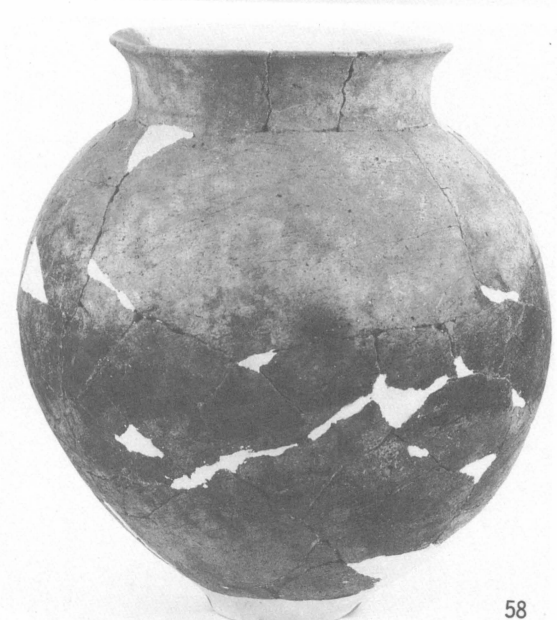
49



54



55



58



73



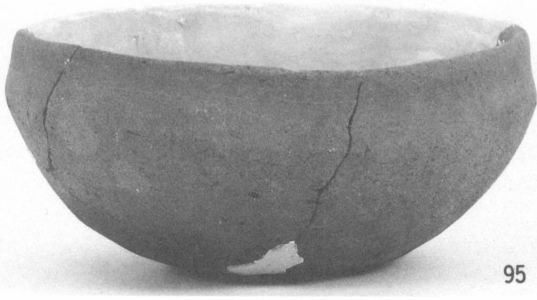
75



92



94



95



96



97



98



101



102



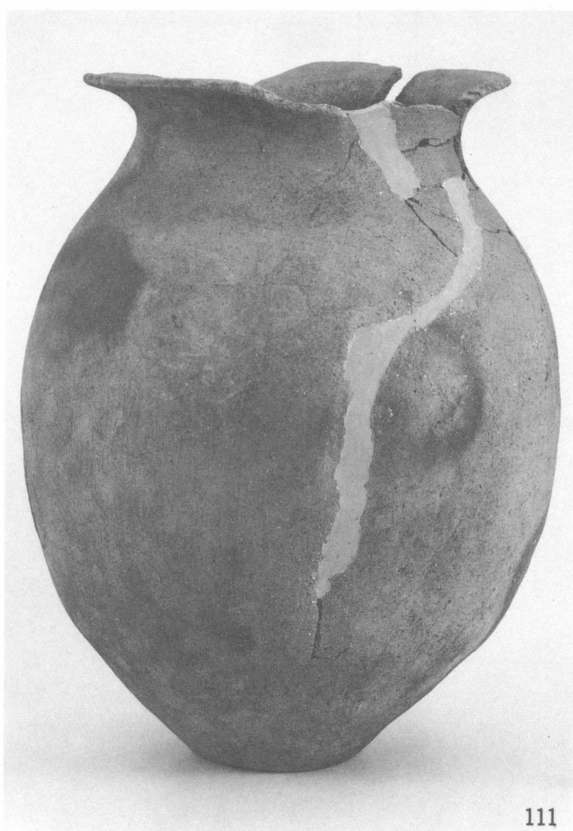
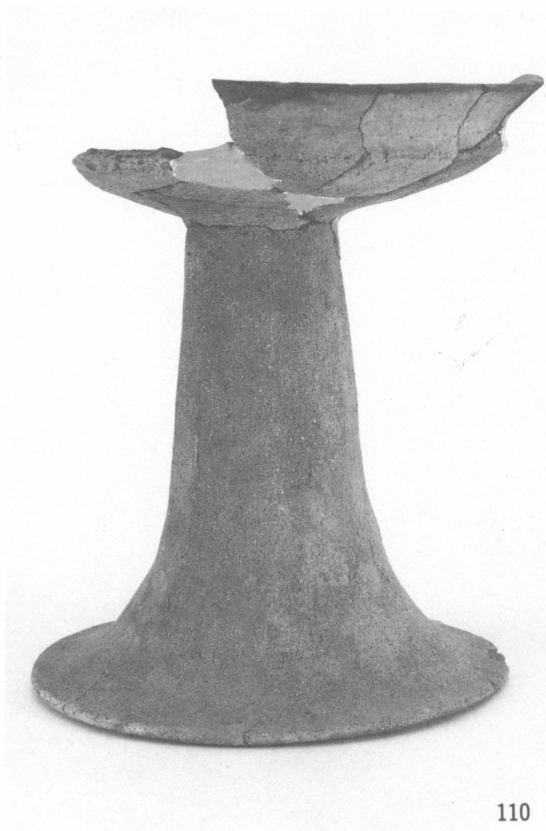
104



106



109





119



125



120



128



126



132



134



136



141



142



144



153



155



156



157



159



163



170



171



175



184



195



200

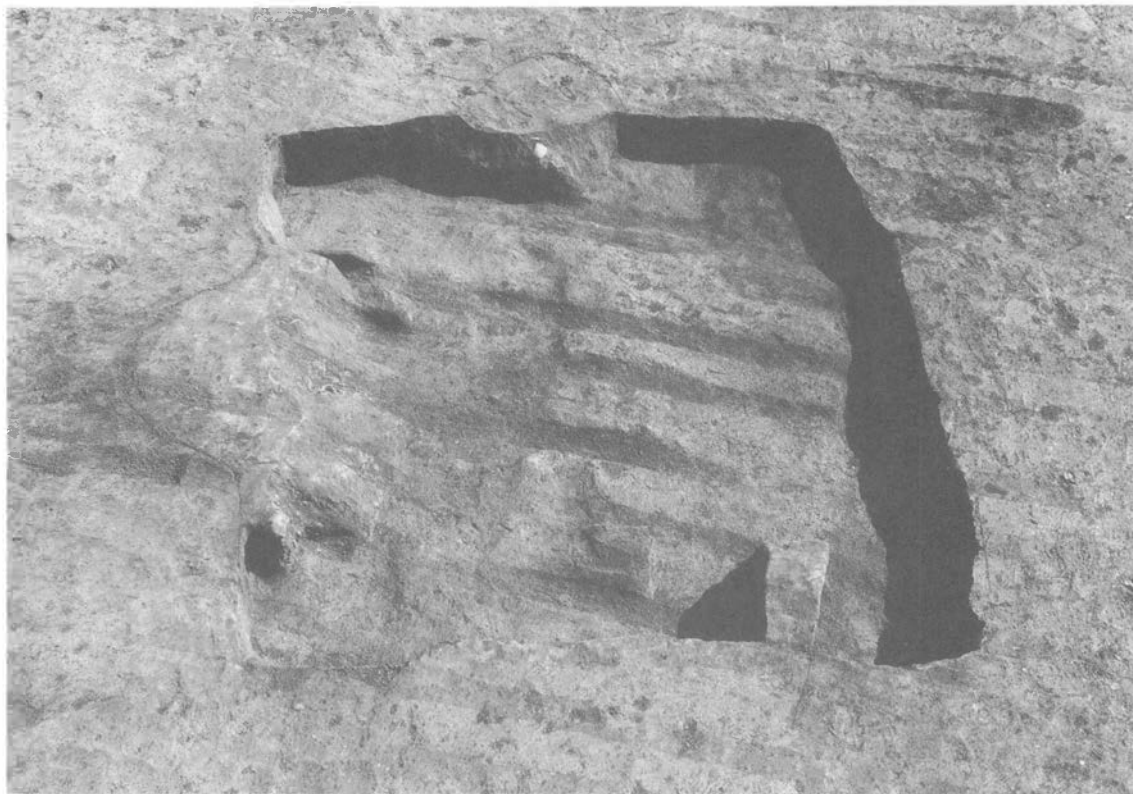




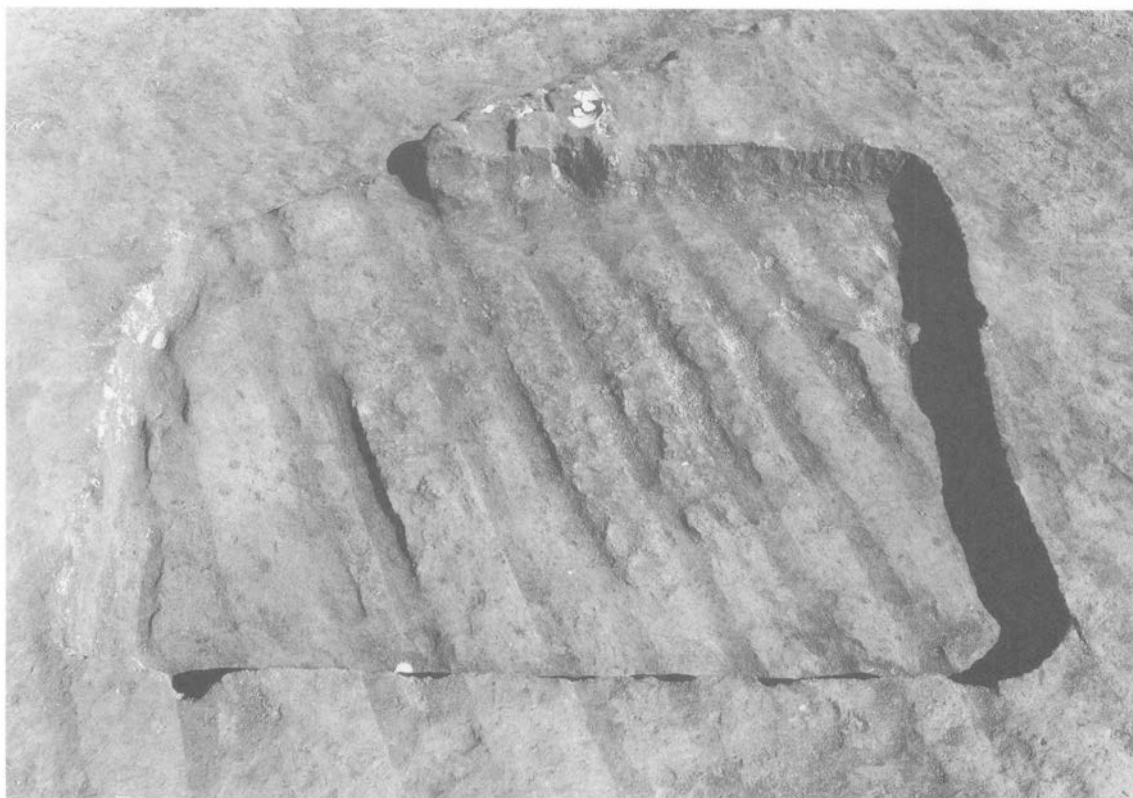
1. 遺跡遠景



2. 旧石器時代第1・第2ユニット石器出土状況



1. 001号住居跡



2. 002号住居跡



1. 003号住居跡



2. 005号住居跡



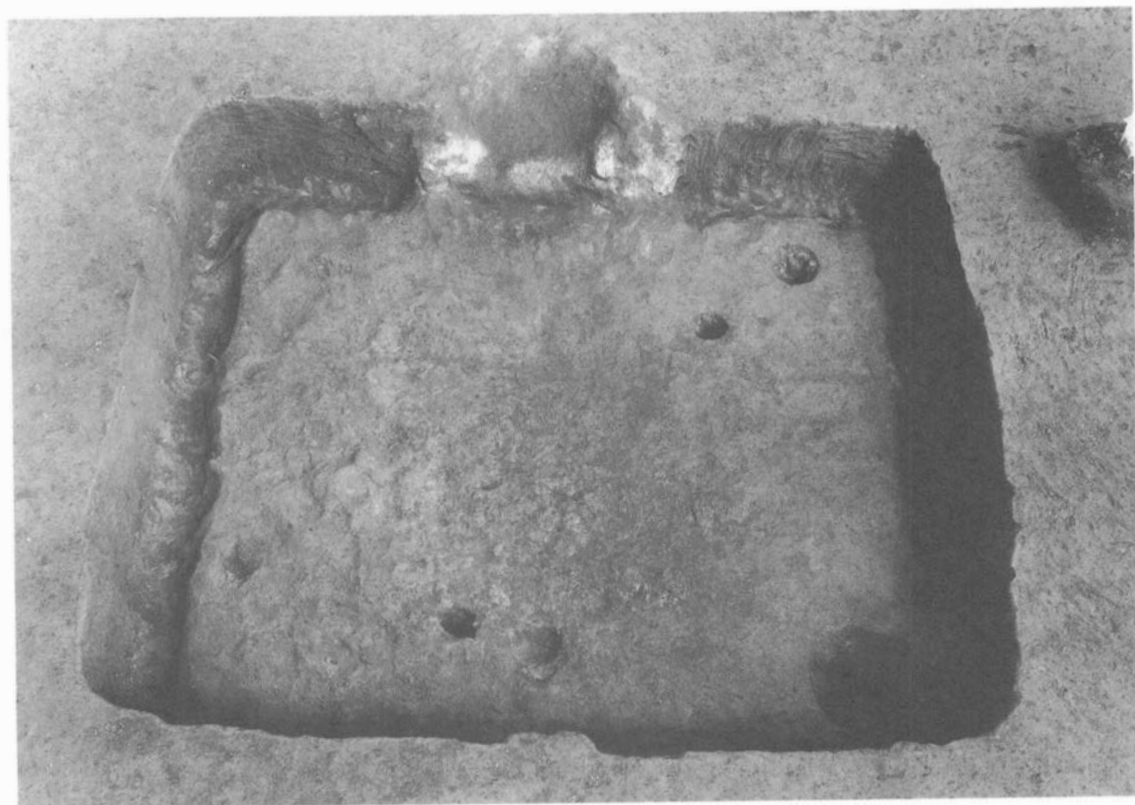
1. 006号住居跡



2. 007号住居跡



1. 007号住居跡遺物出土状況



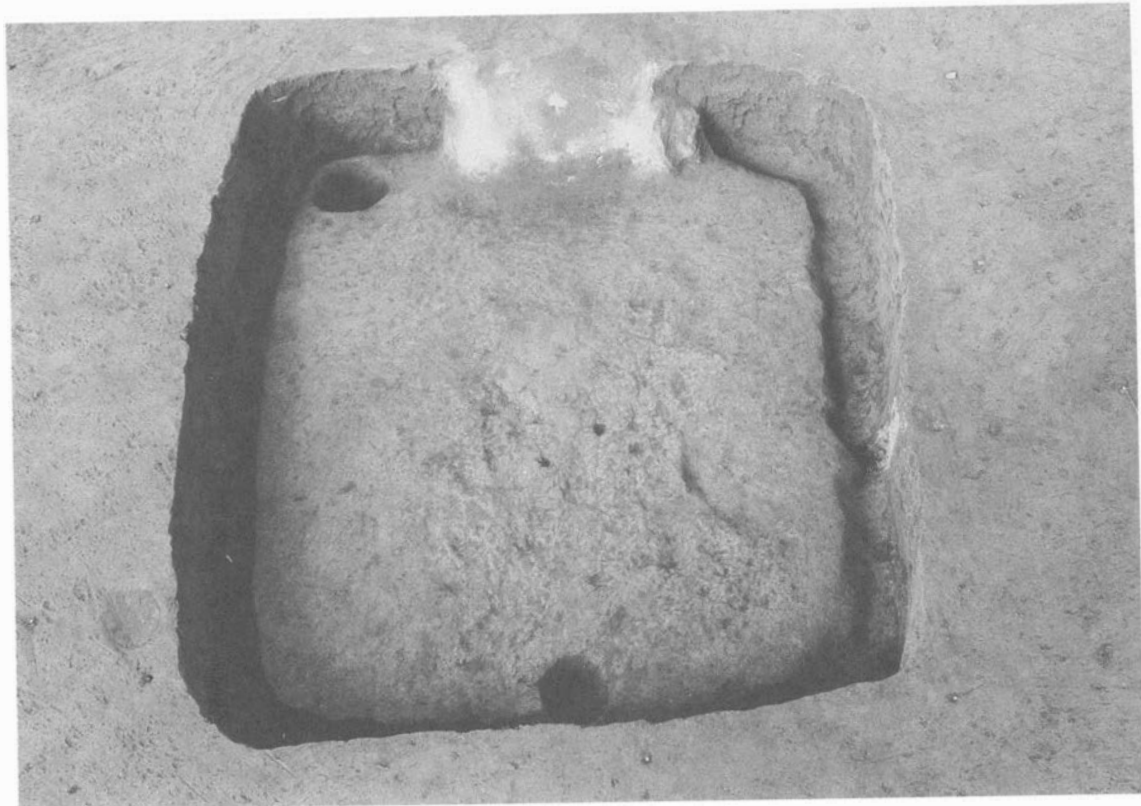
2. 008号住居跡



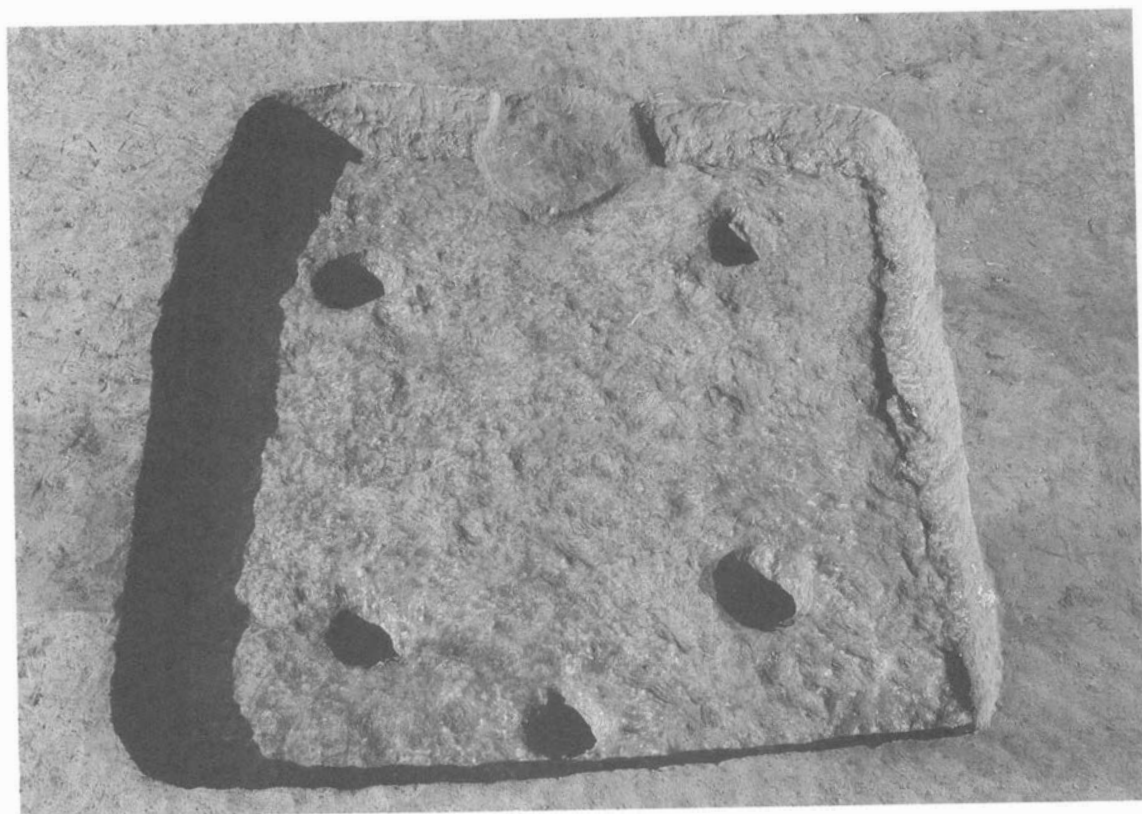
1. 008号住居跡カマド左袖上土器出土状況



2. 009号住居跡



1. 010号住居跡



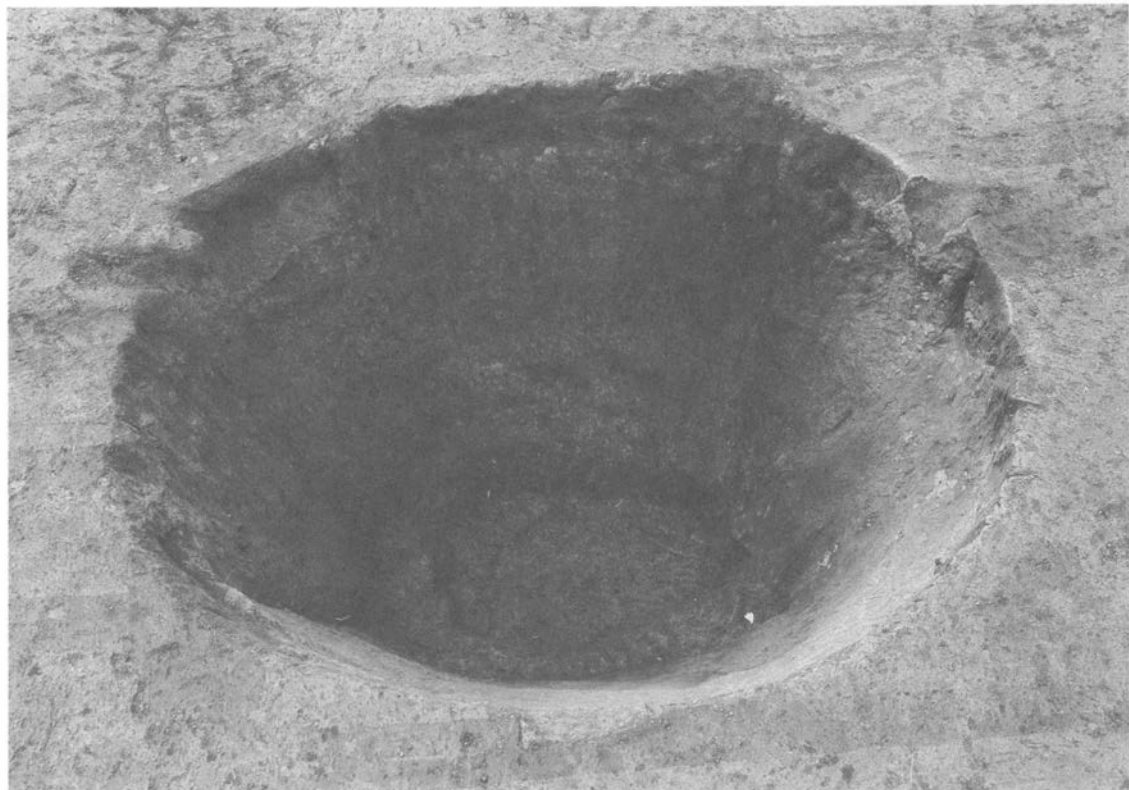
2. 011号住居跡



1. 012号住居跡



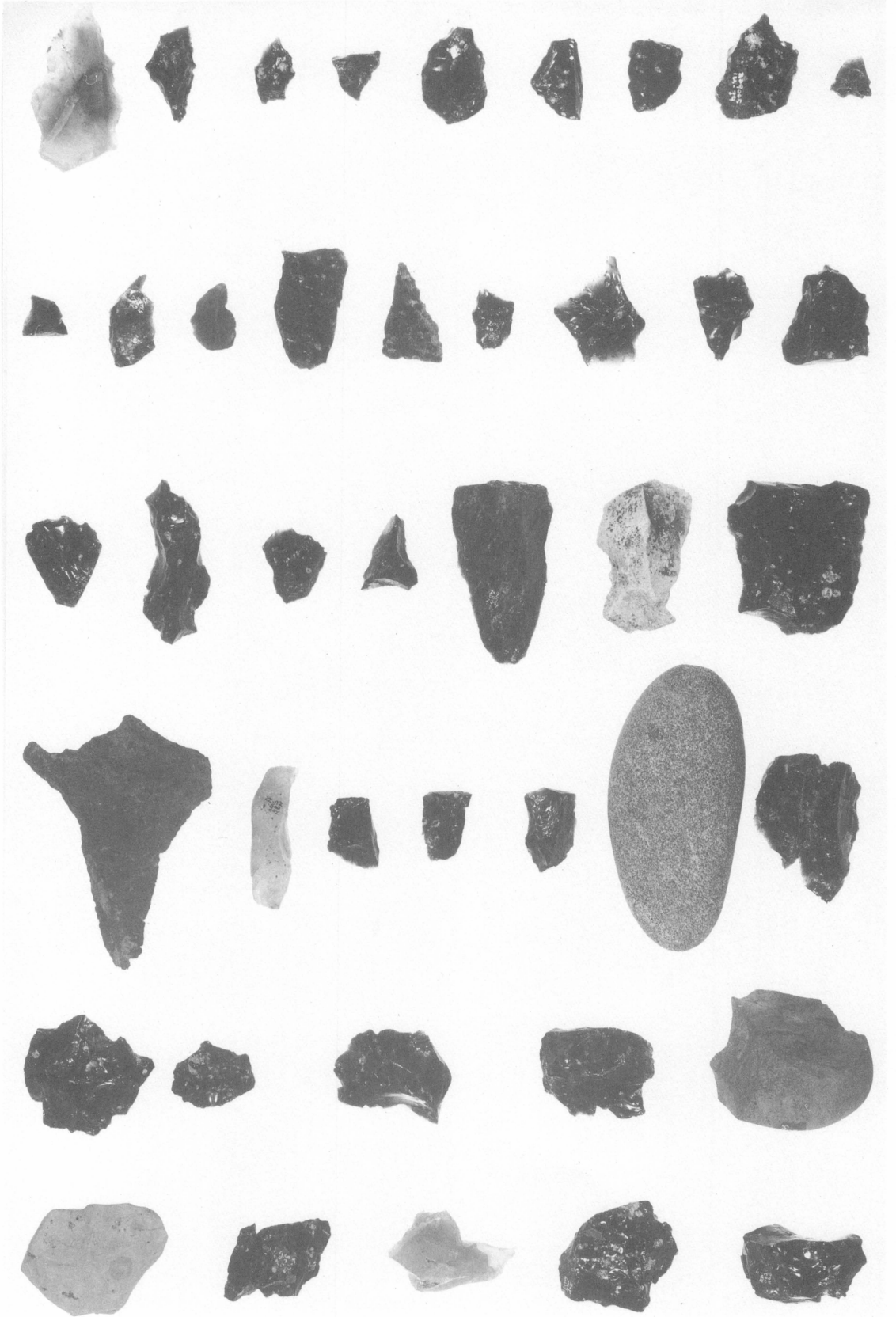
2. 掘立柱建物跡



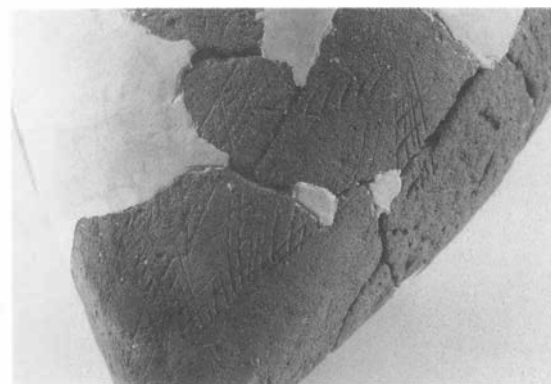
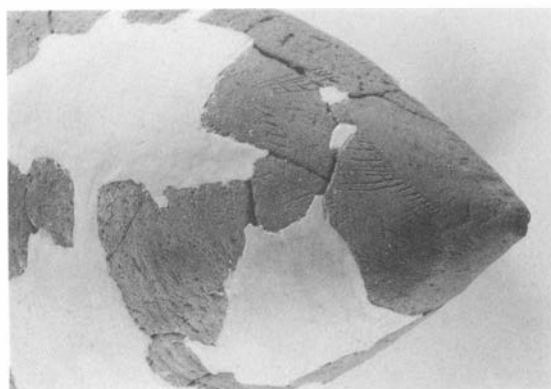
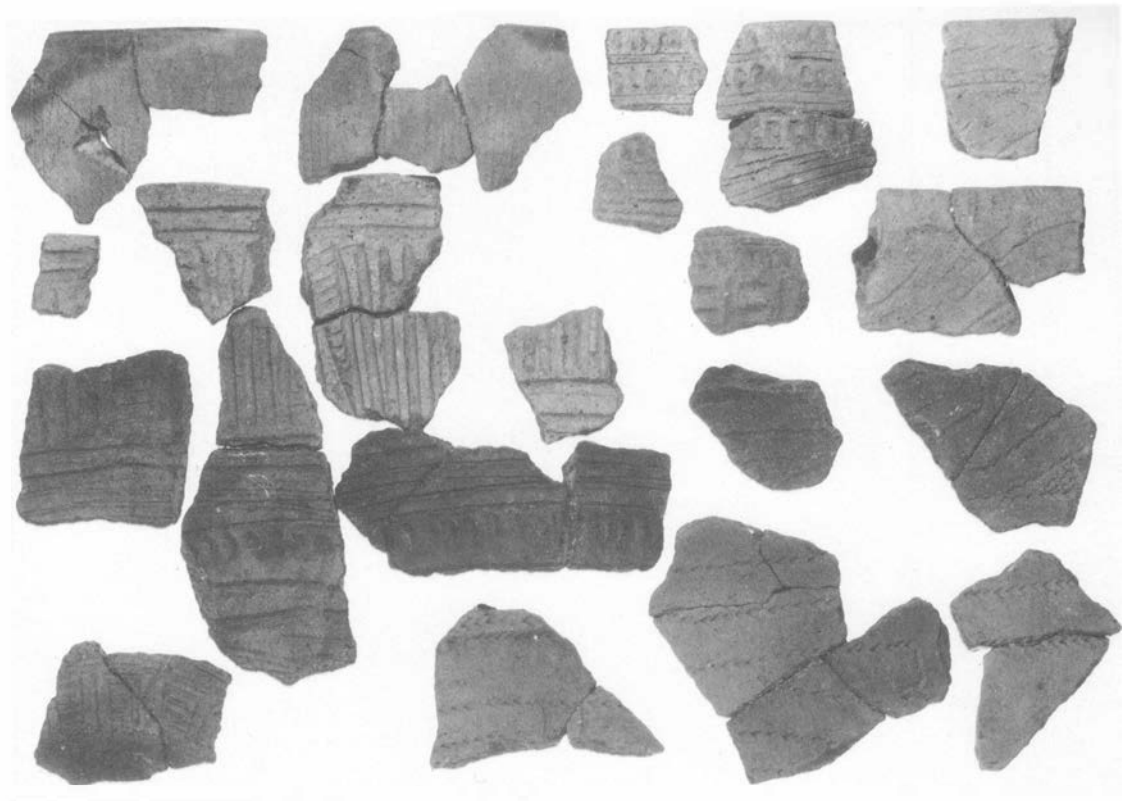
1. 101号土坑



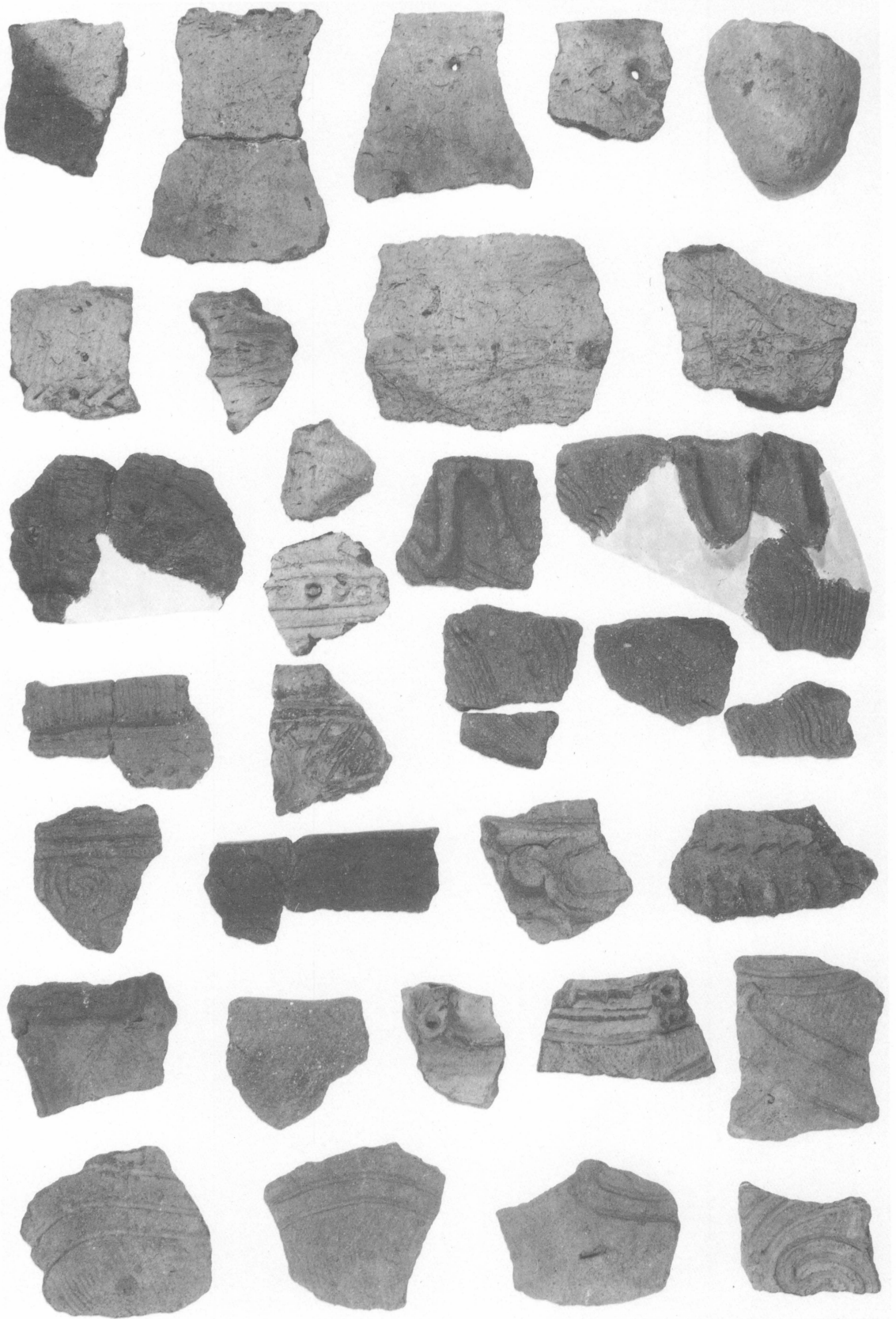
2. 110号土坑



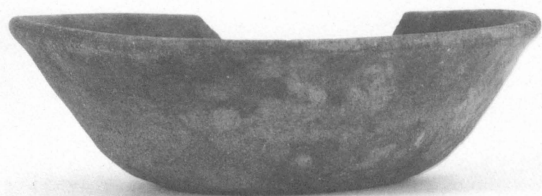
旧石器時代出土石器



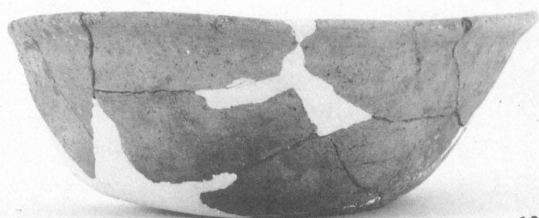
グリット出土縄文土器



グリット出土縄文土器



3



10



16



19



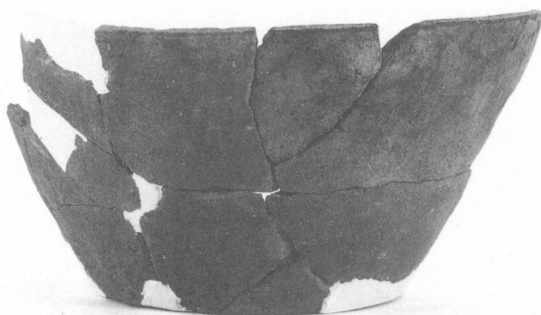
25



28



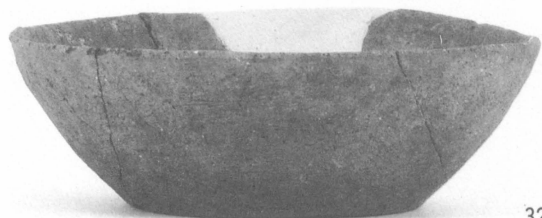
26



30



31



32



33



41



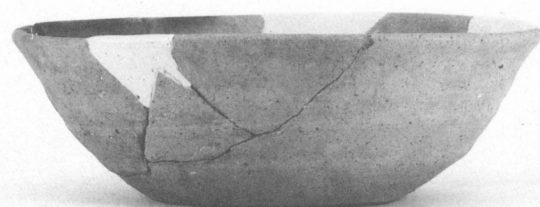
46



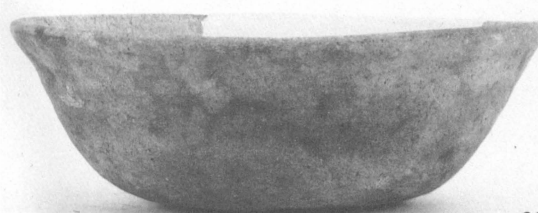
47



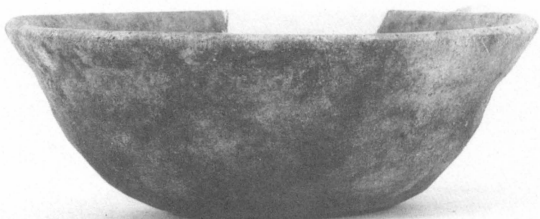
49



59



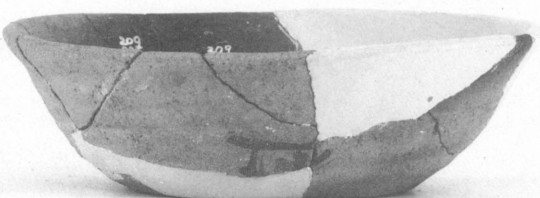
61



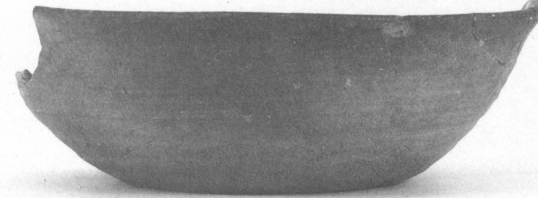
62



63



64



65



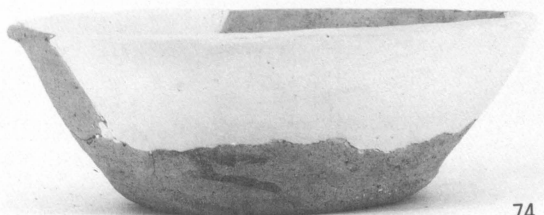
68



70



71



74



75



79



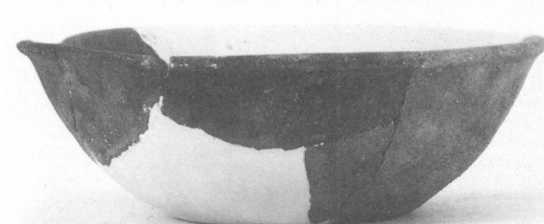
81



82



87



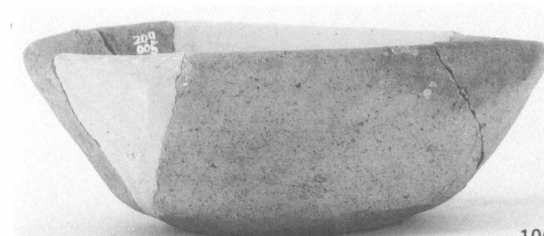
95



93



105



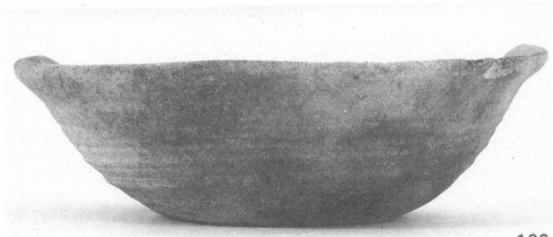
106



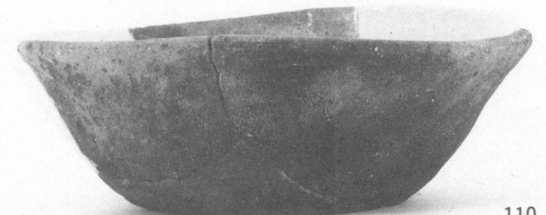
107



108



109



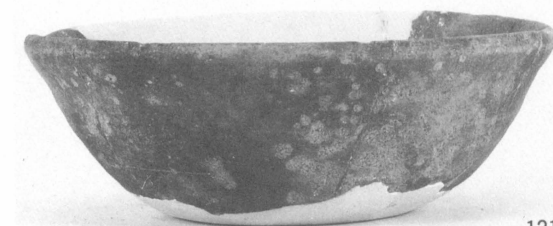
110



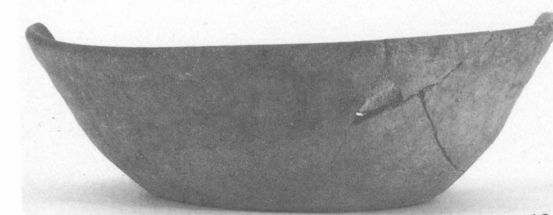
111



115



121



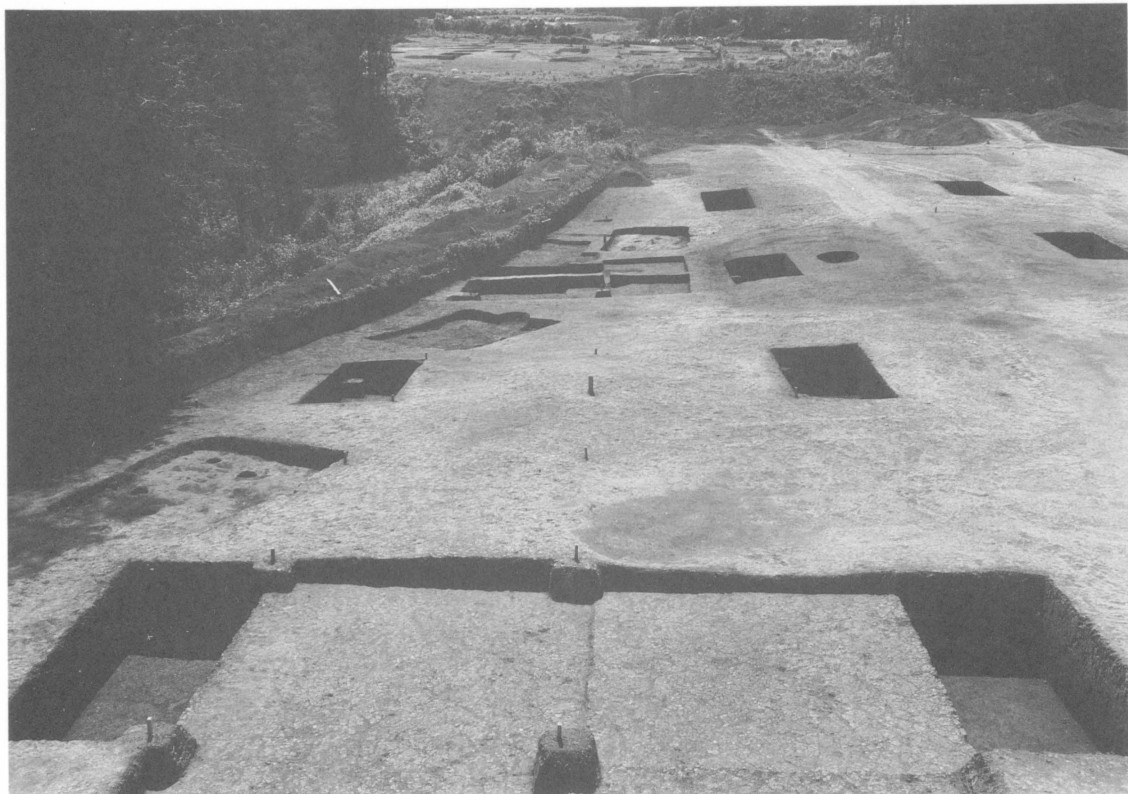
124



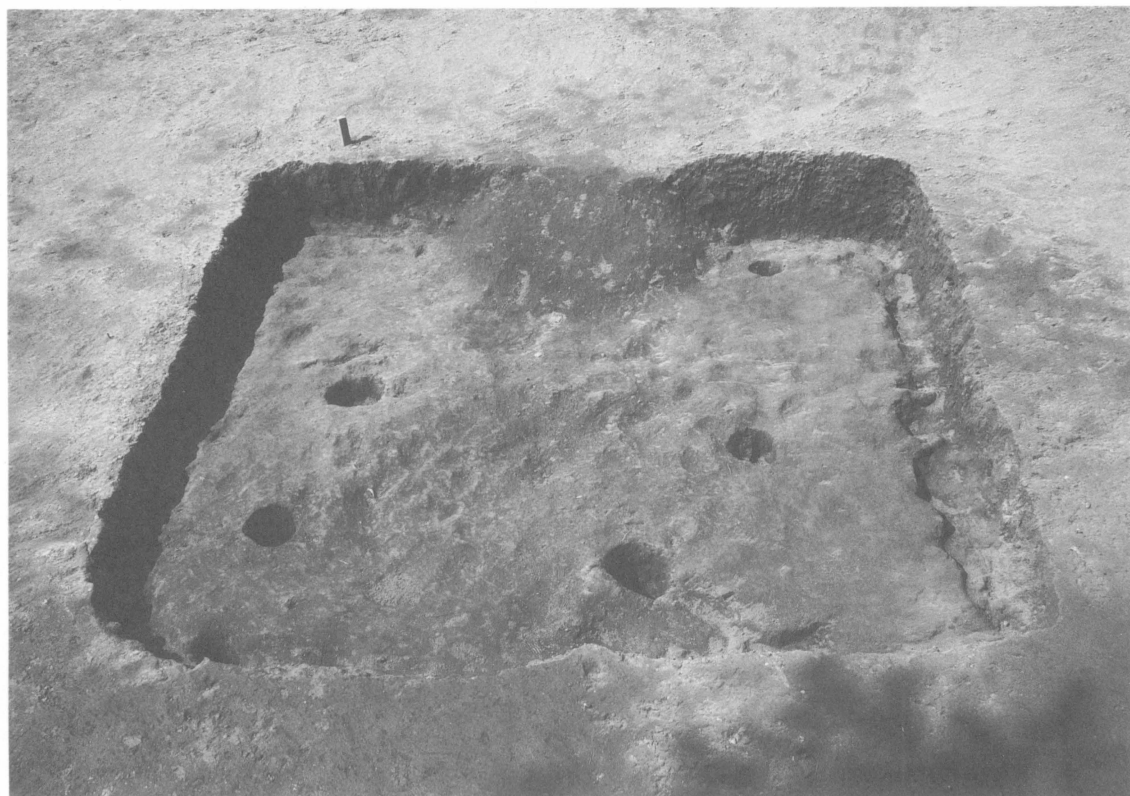
125



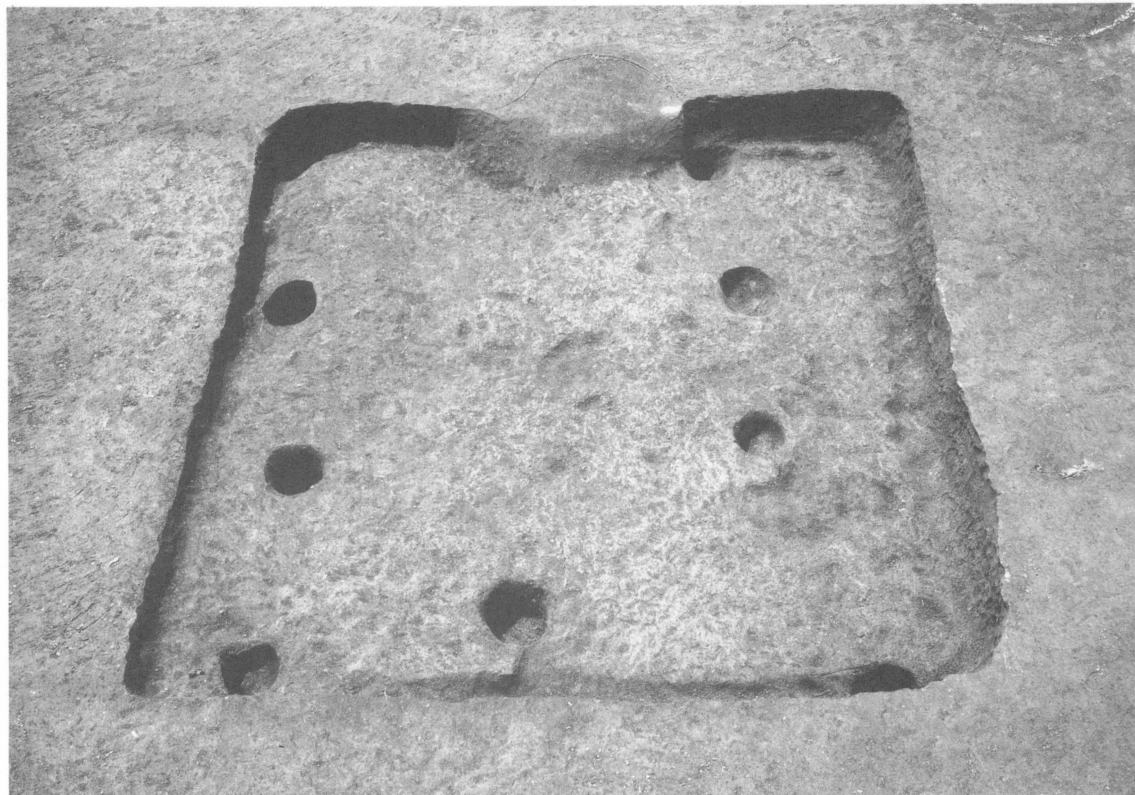
130



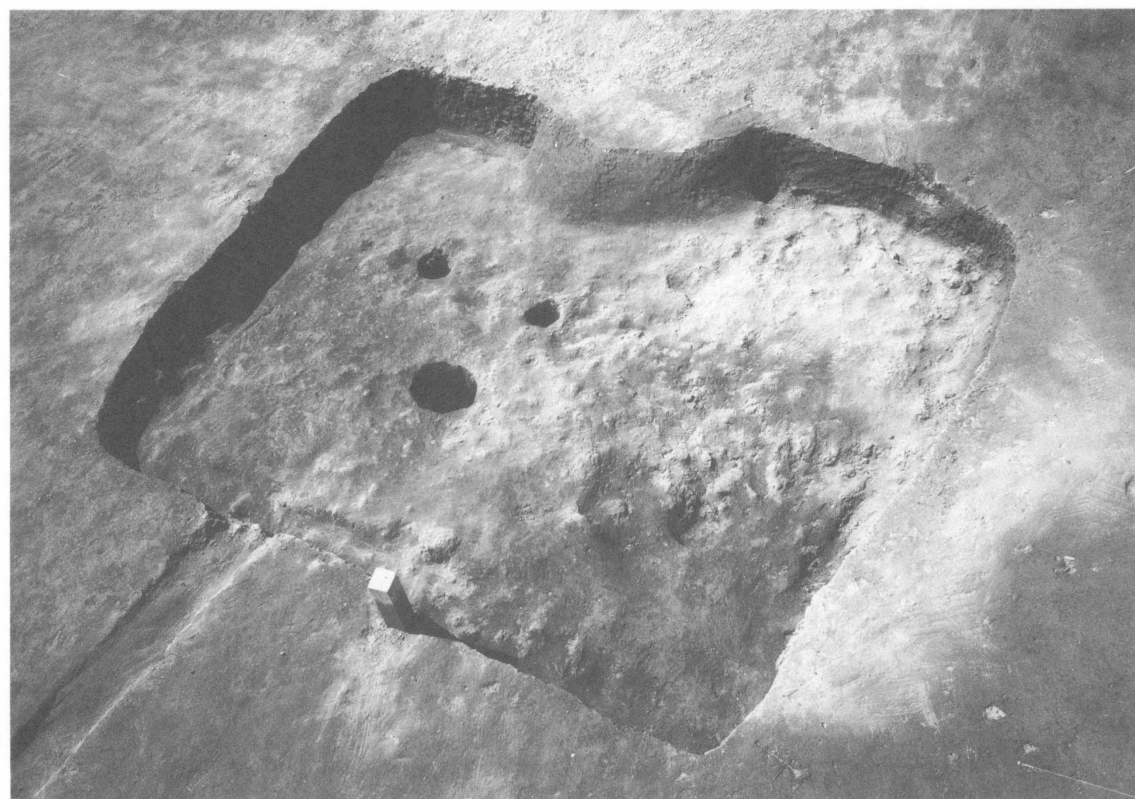
1. 遺構状況



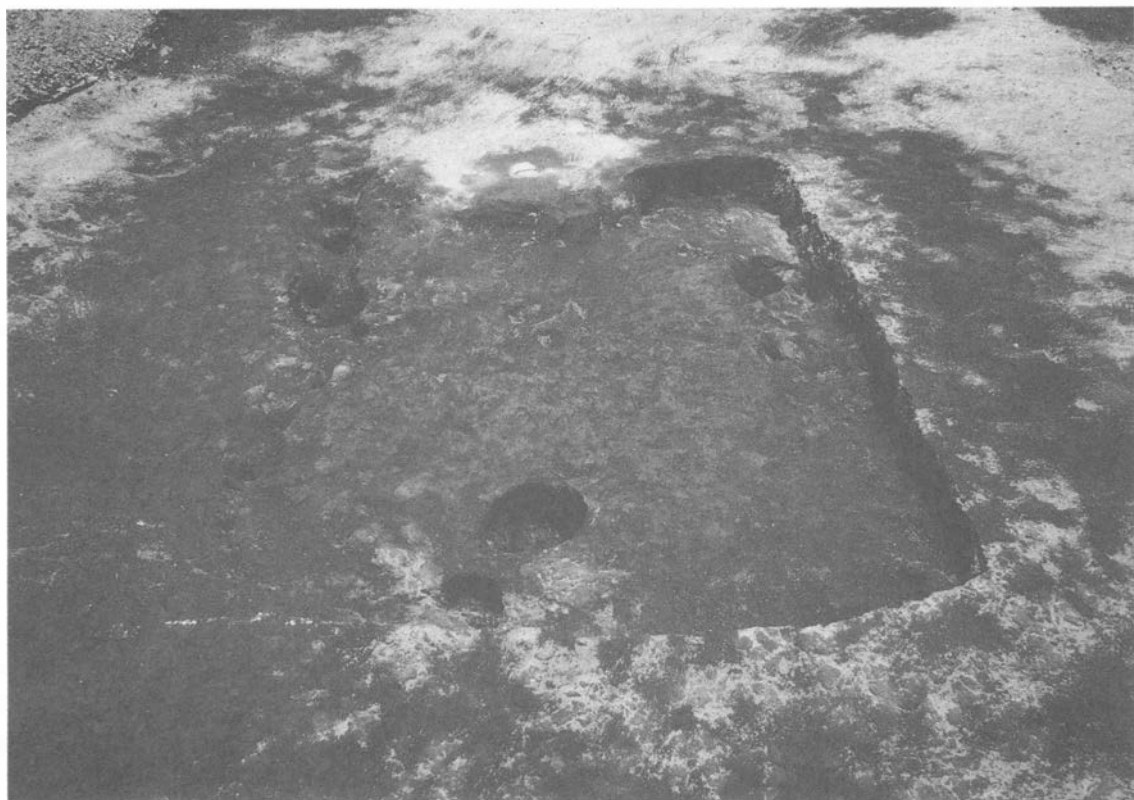
2. 001号住居跡



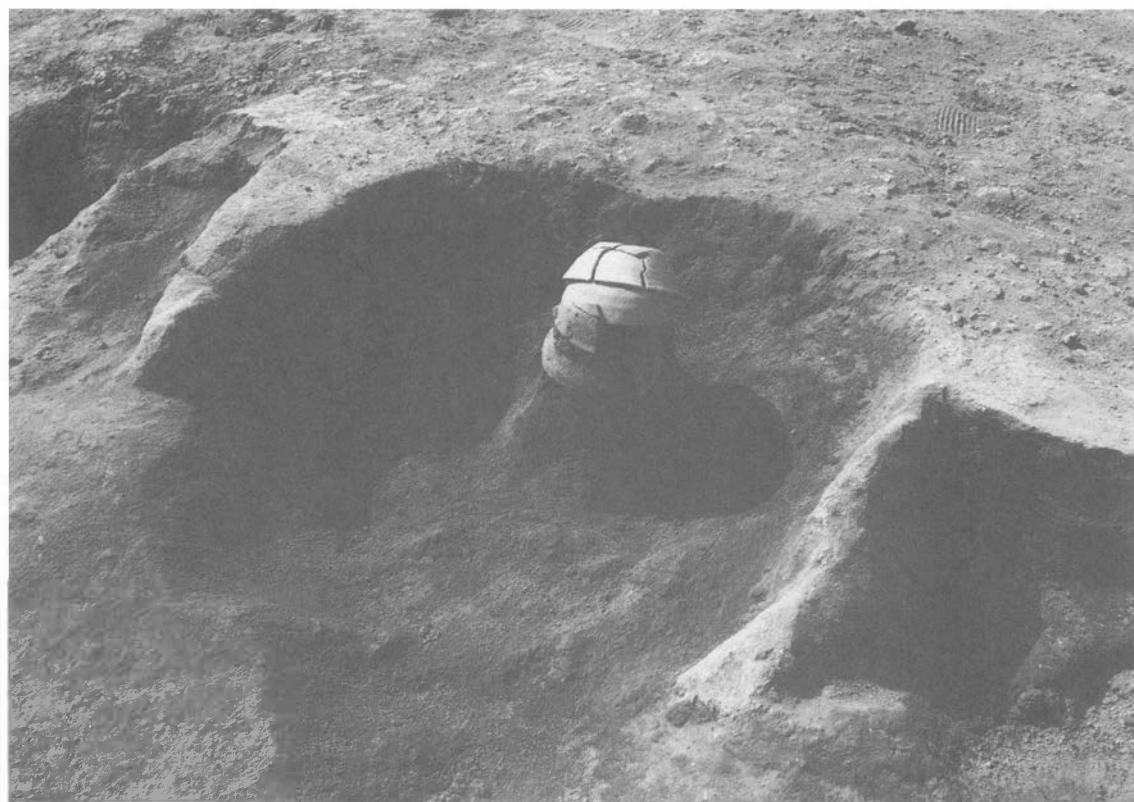
1. 002号住居跡



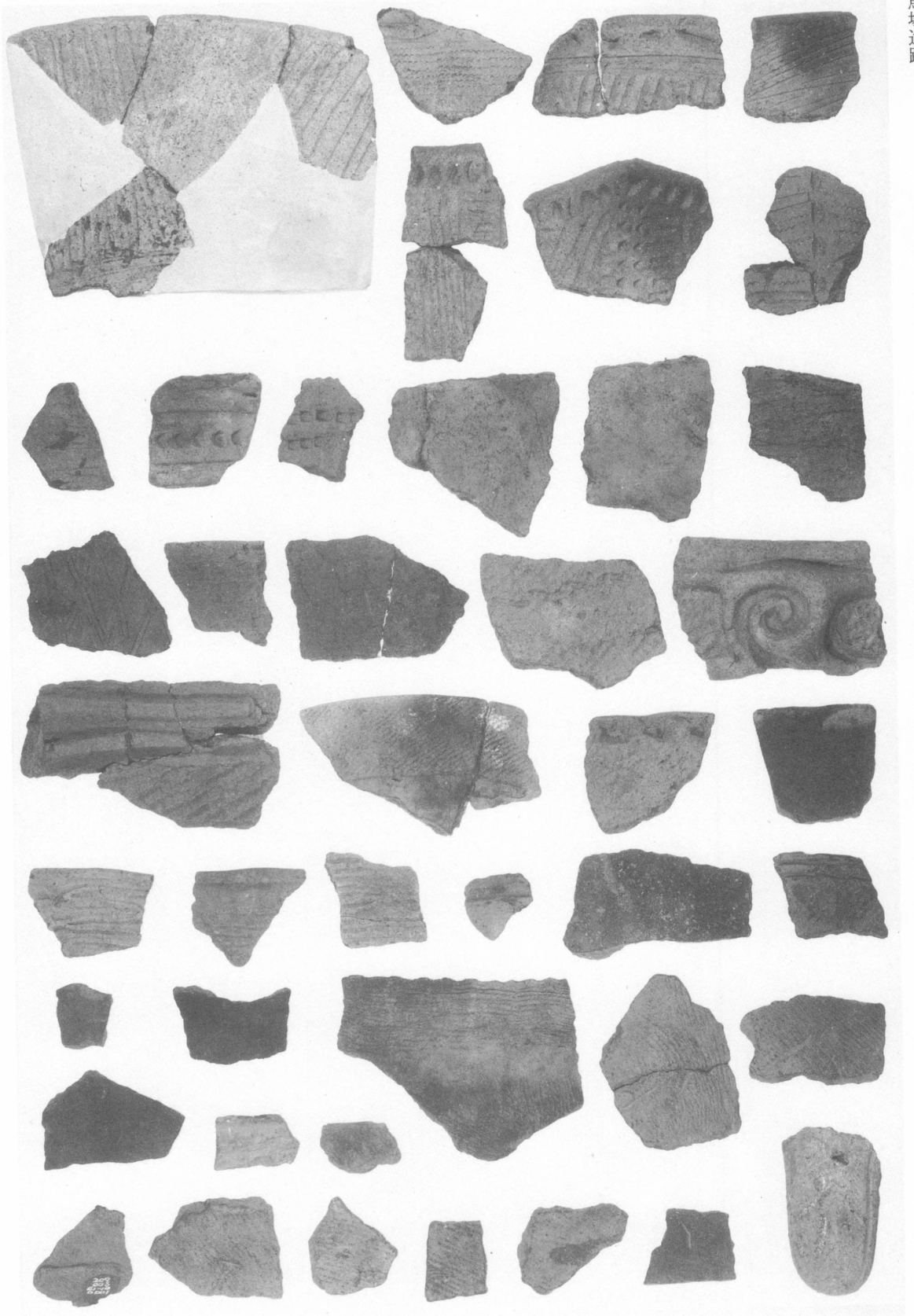
2. 003号住居跡



1. 004号住居跡



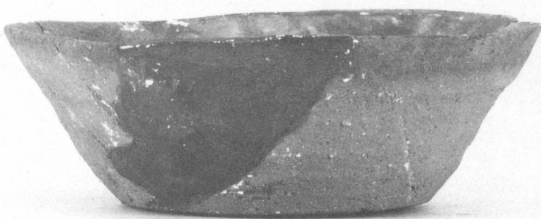
2. 004号住居跡カマド内土器出土状況



グリット出土縄文土器



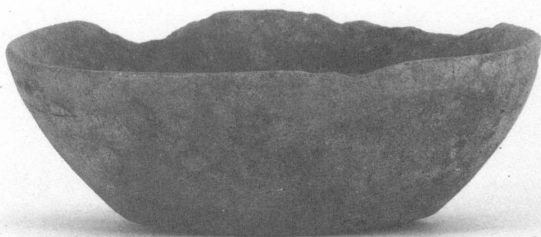
1



5



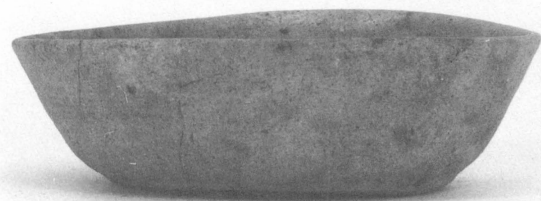
7



9



10



11



12



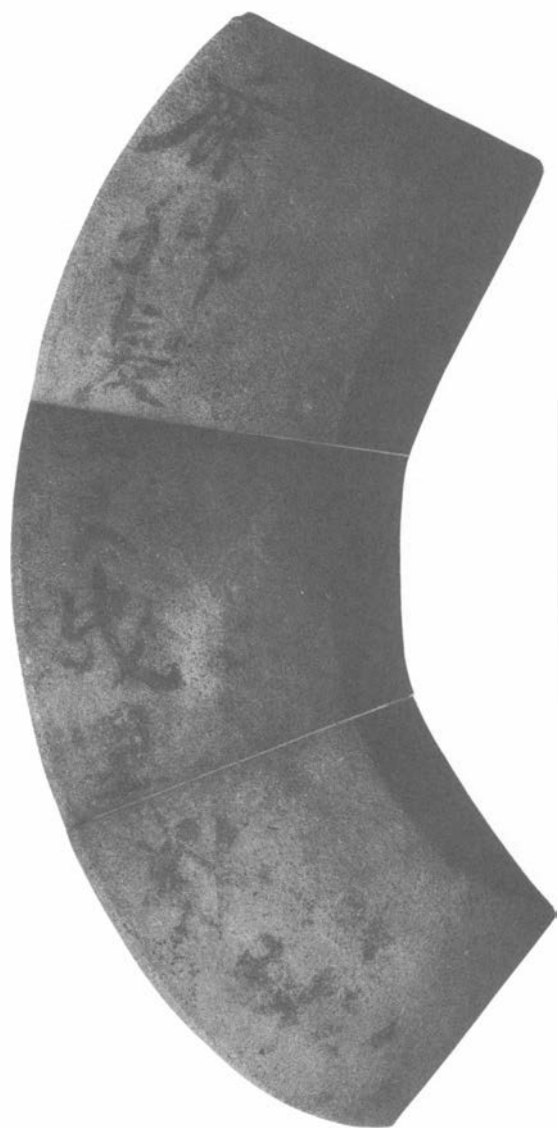
13



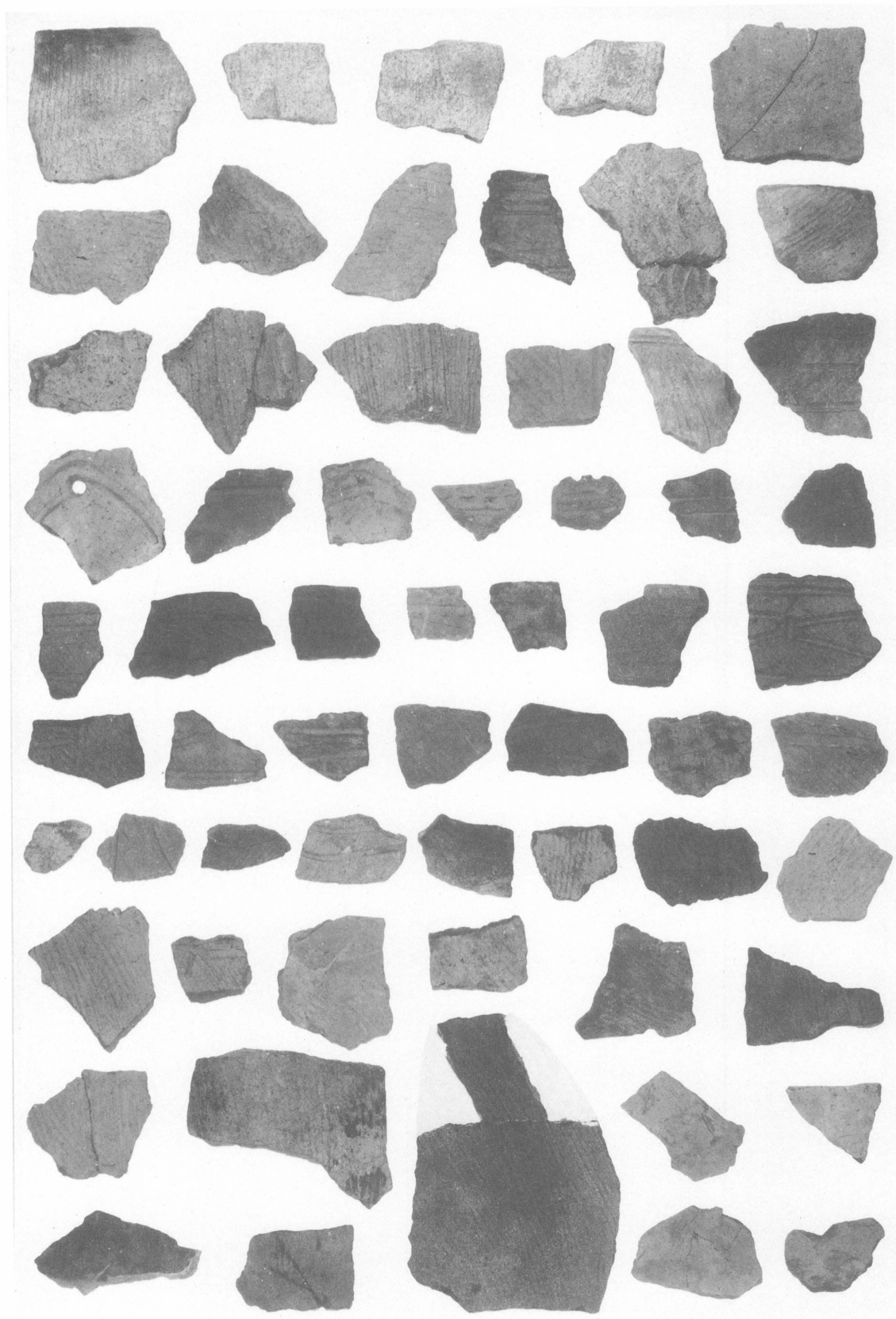
14



4



墨書土器（赤外線フィルム）



グリット出土縄文土器



1. 遺跡（馬土手）全景



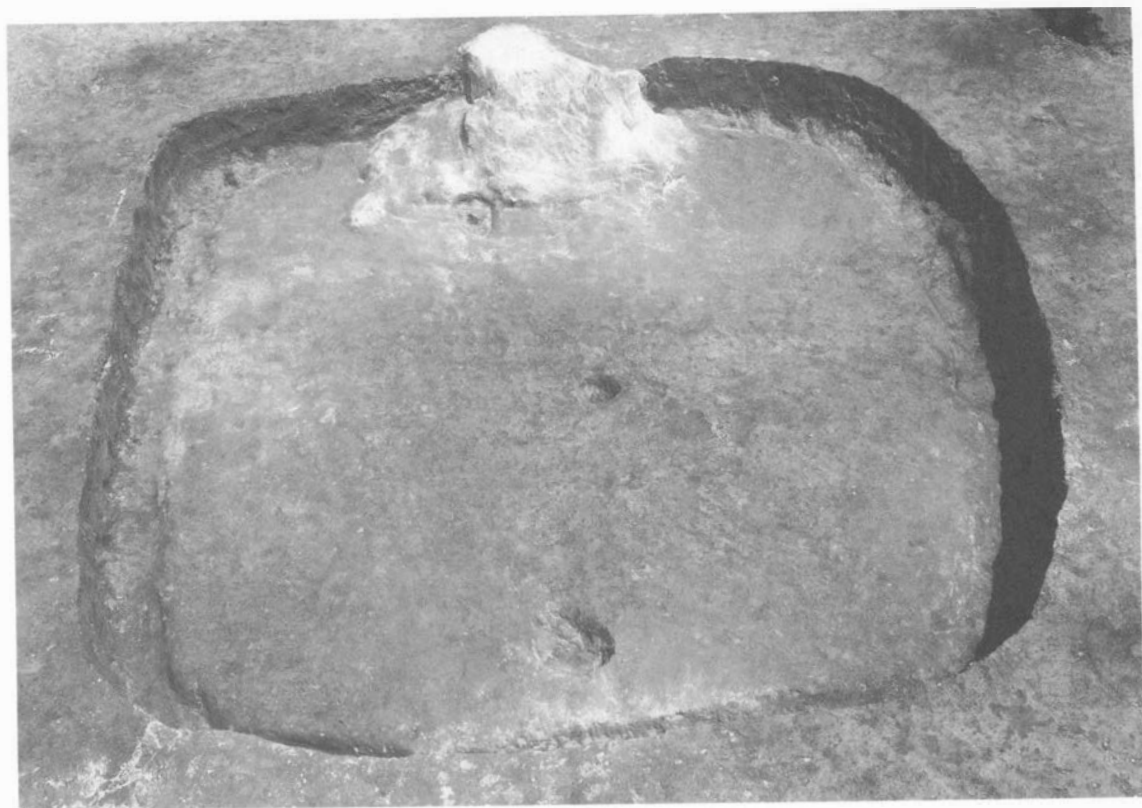
2. 馬土手断面



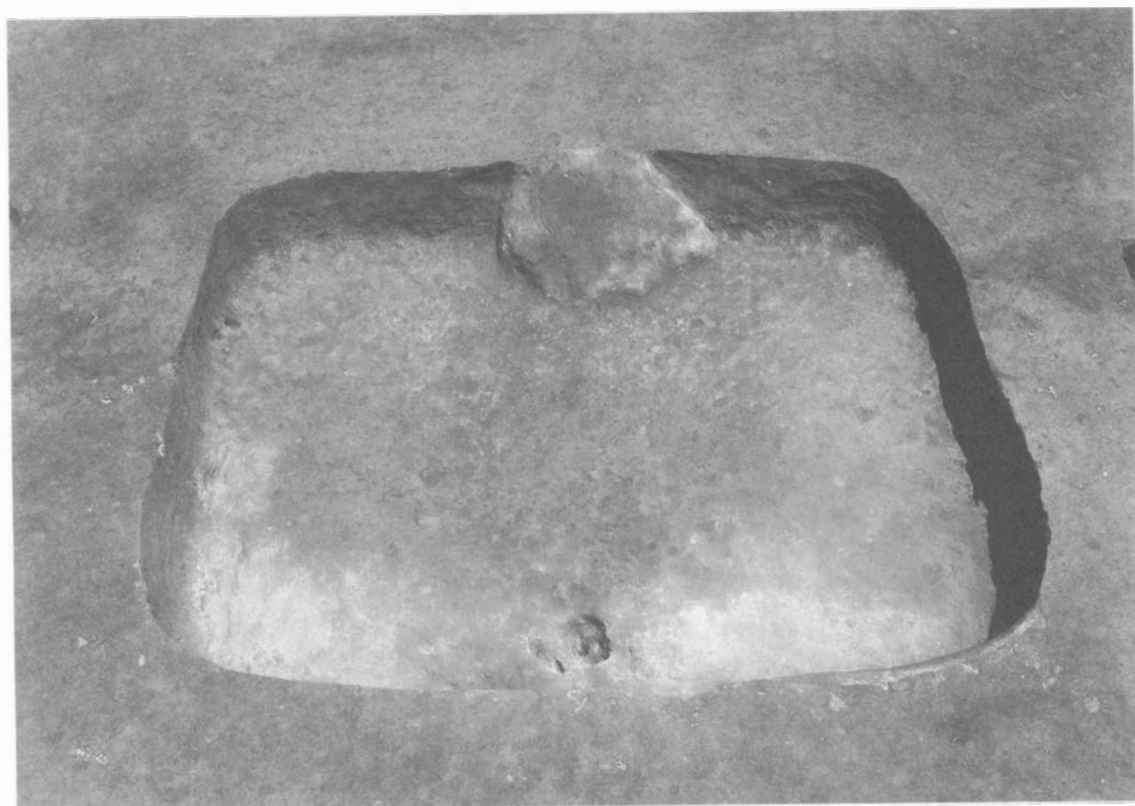
1. 遺跡遠景



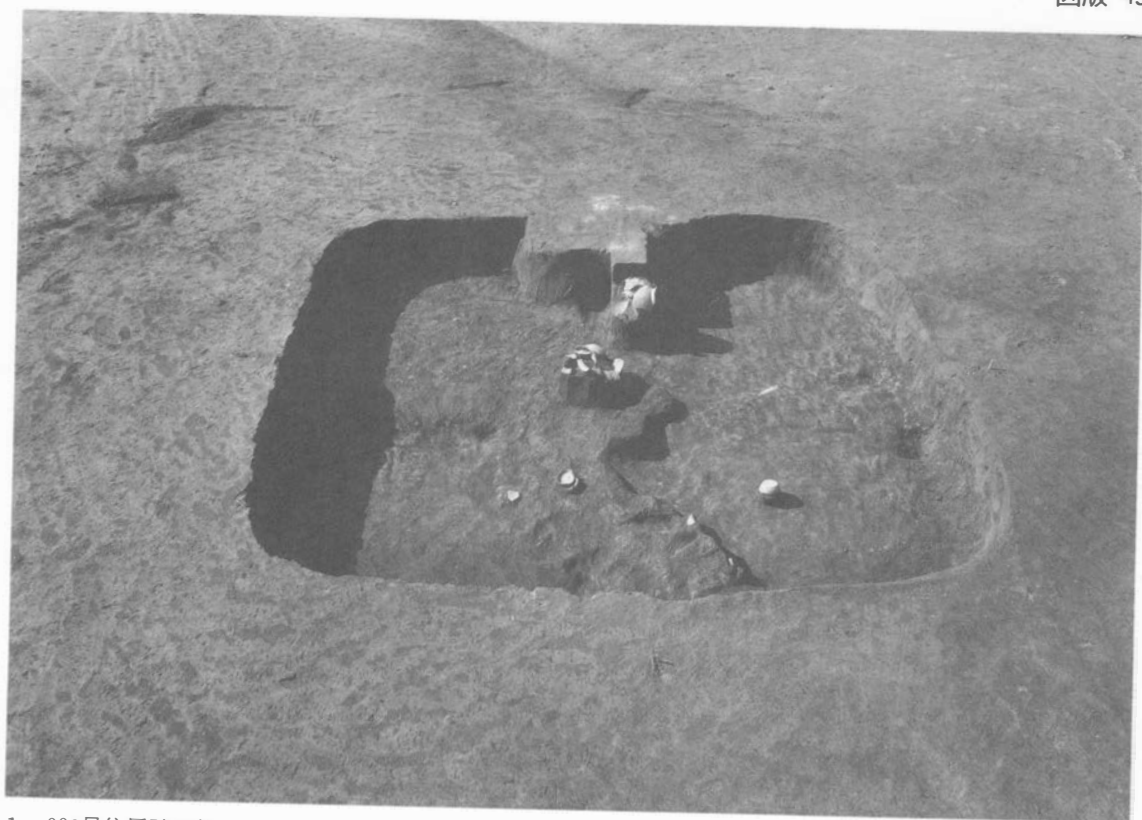
2. 001号住居跡



1. 002号住居跡



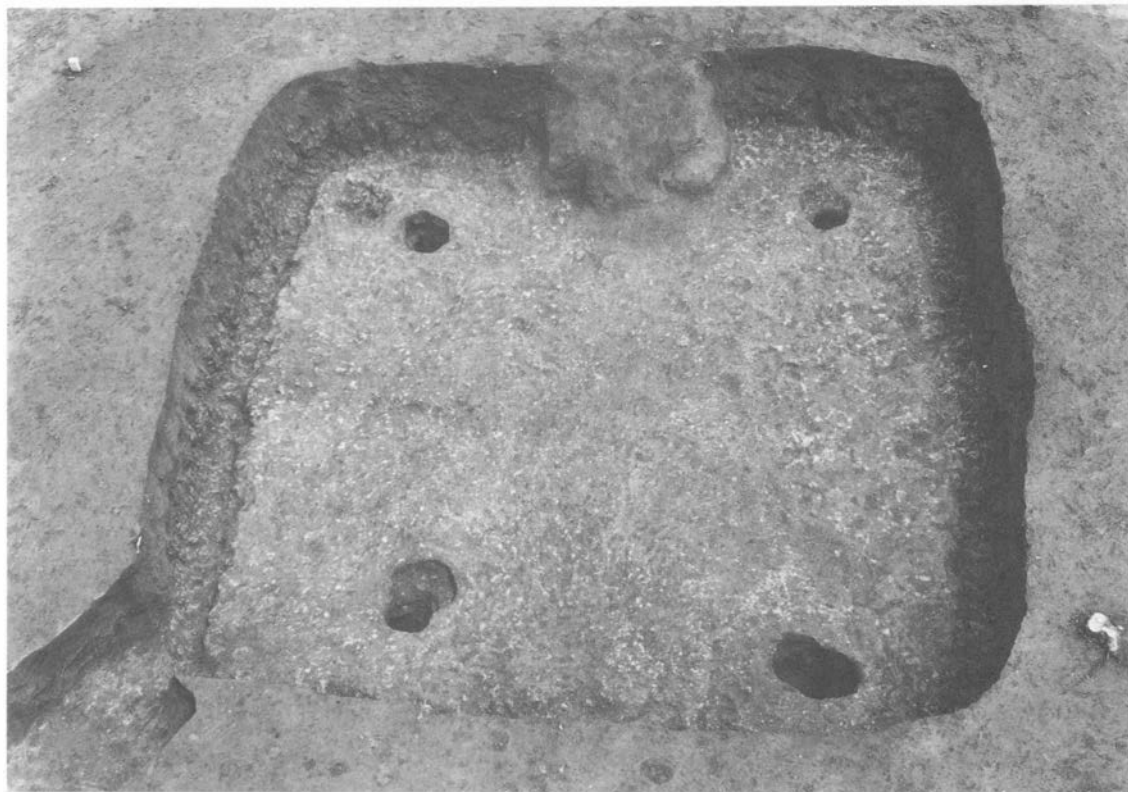
2. 003号住居跡



1. 003号住居跡遺物出土状況



2. 004号住居跡覆土中遺物出土状況



1. 004号住居跡



2. 005号住居跡



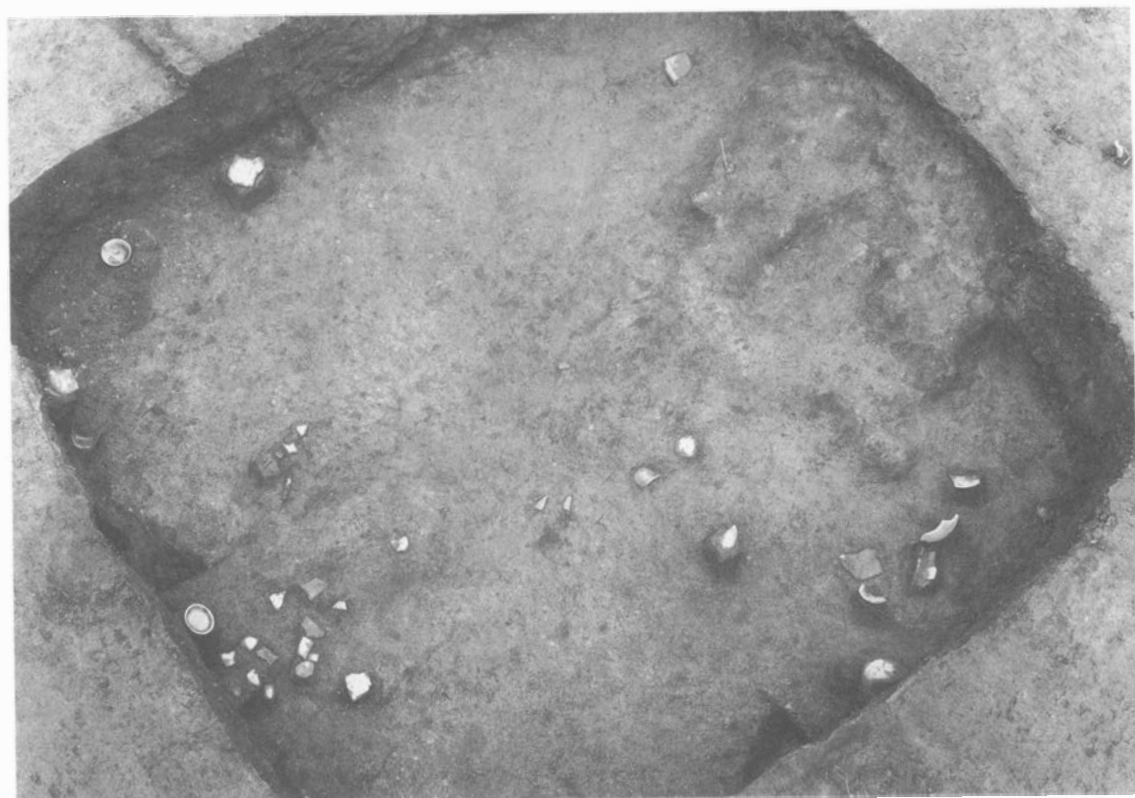
1. 006号住居跡



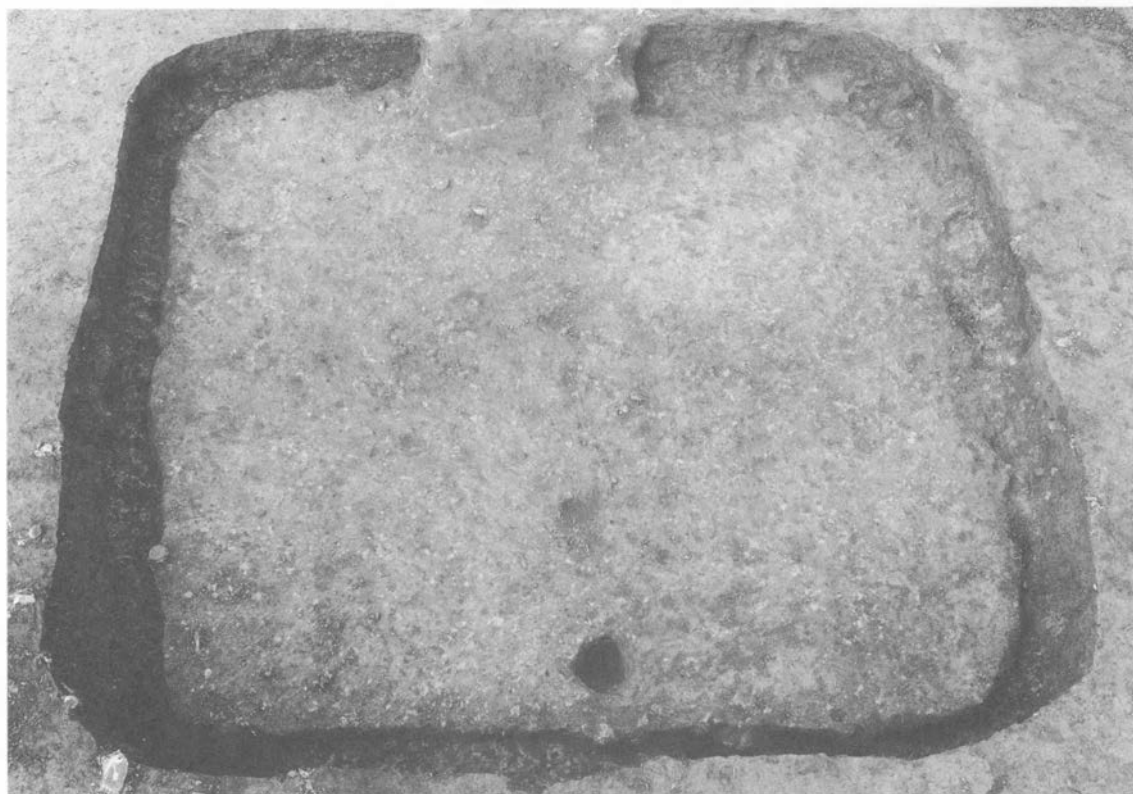
2. 006号住居跡炭化材・土器出土状況



1. 007号住居跡



2. 007号住居跡遺物出土状況



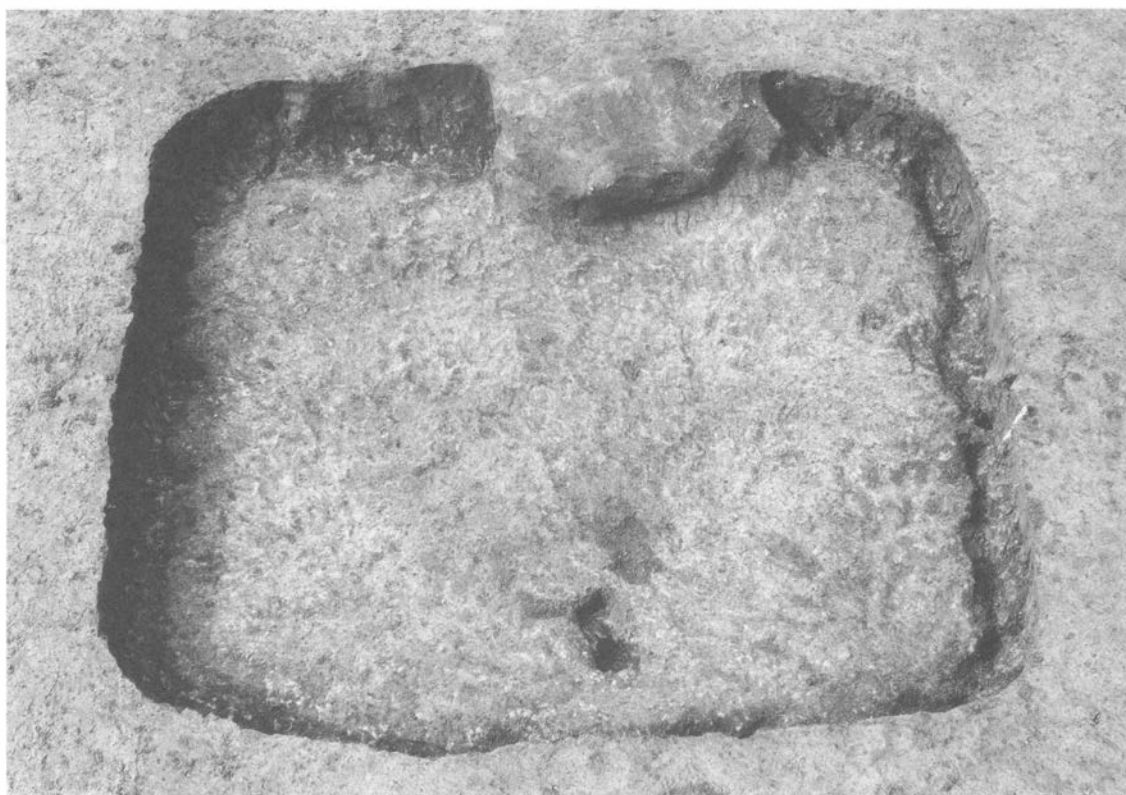
1. 008号住居跡



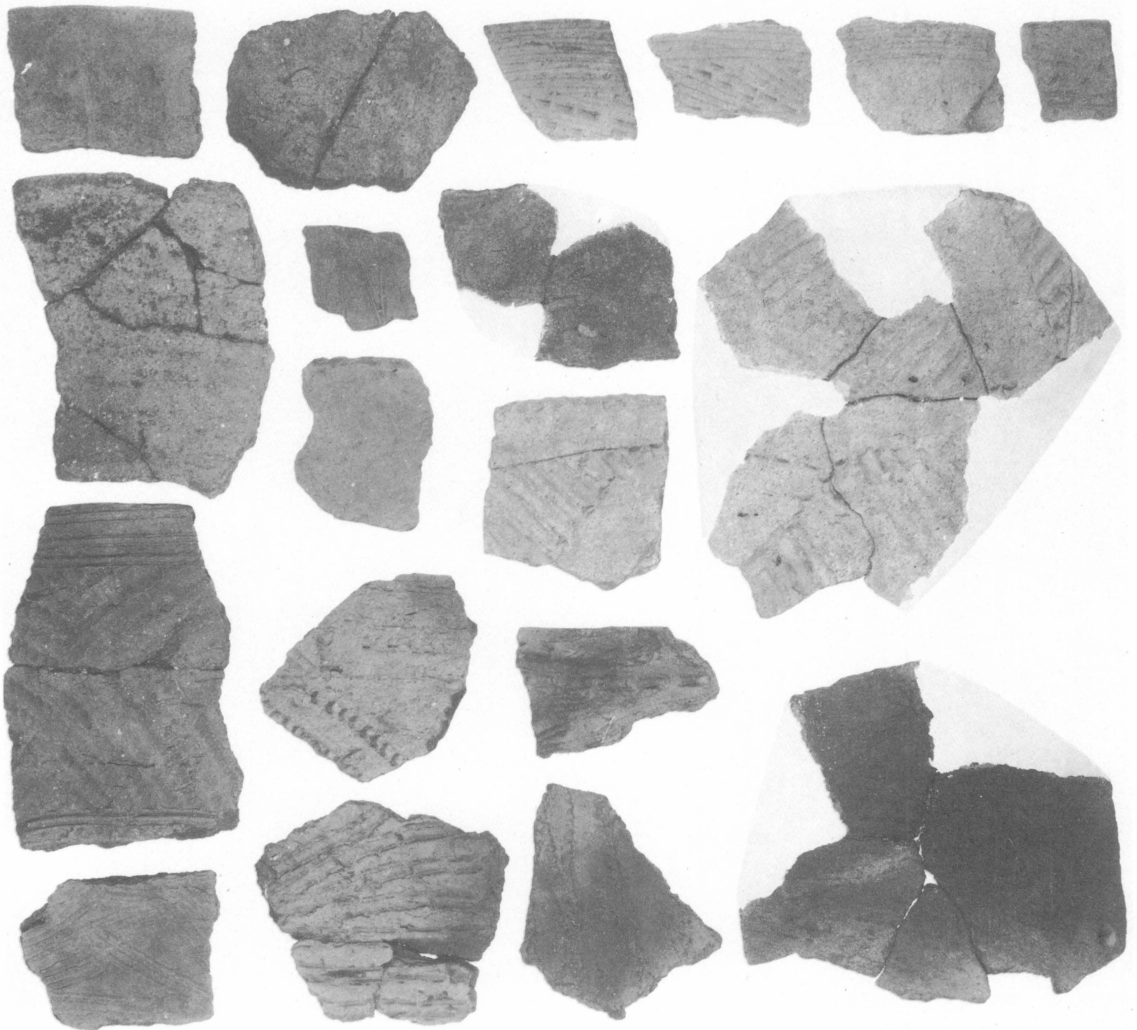
2. 009号住居跡



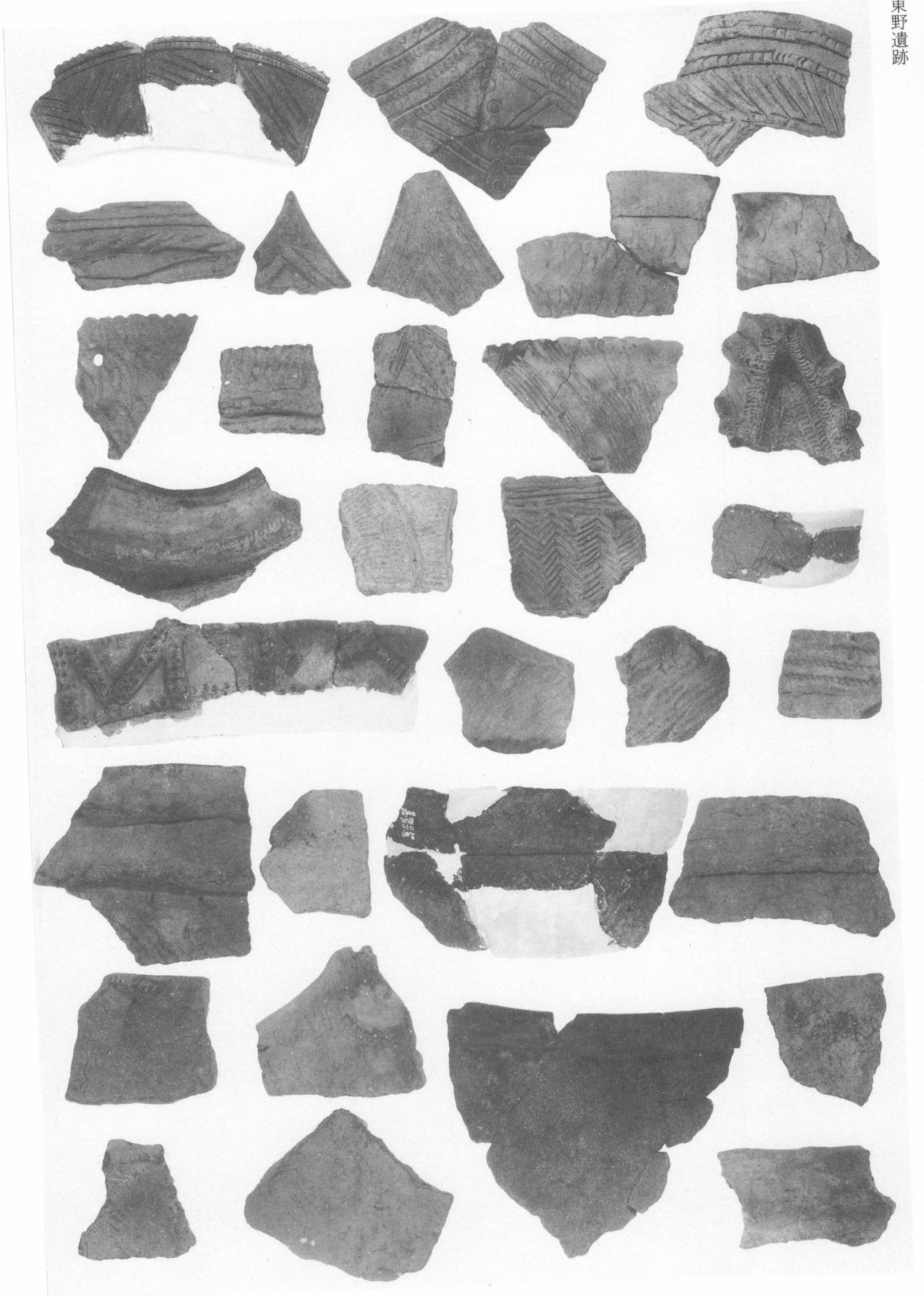
1. 009号住居跡炭化材・土器出土状況



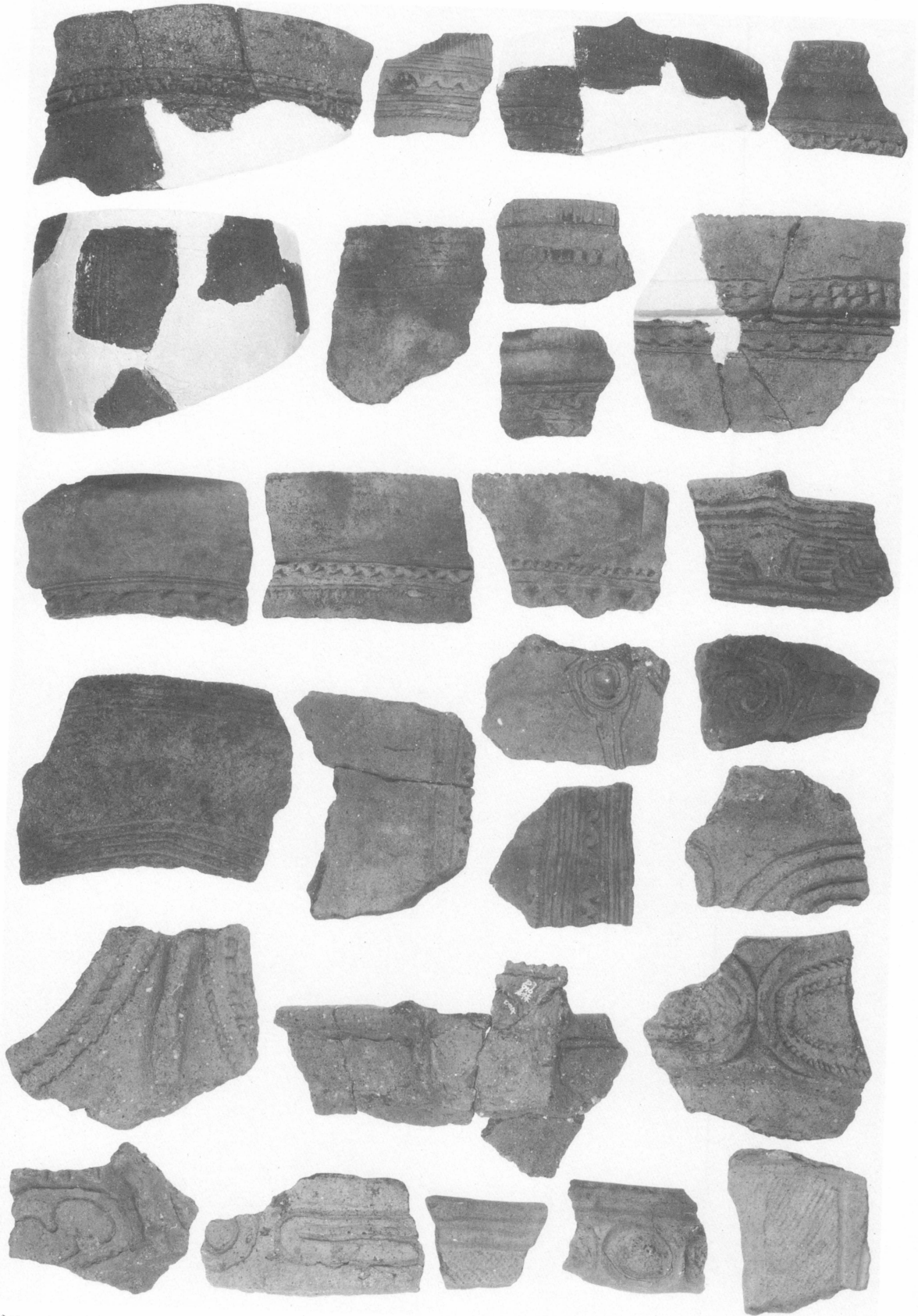
2. 010号住居跡



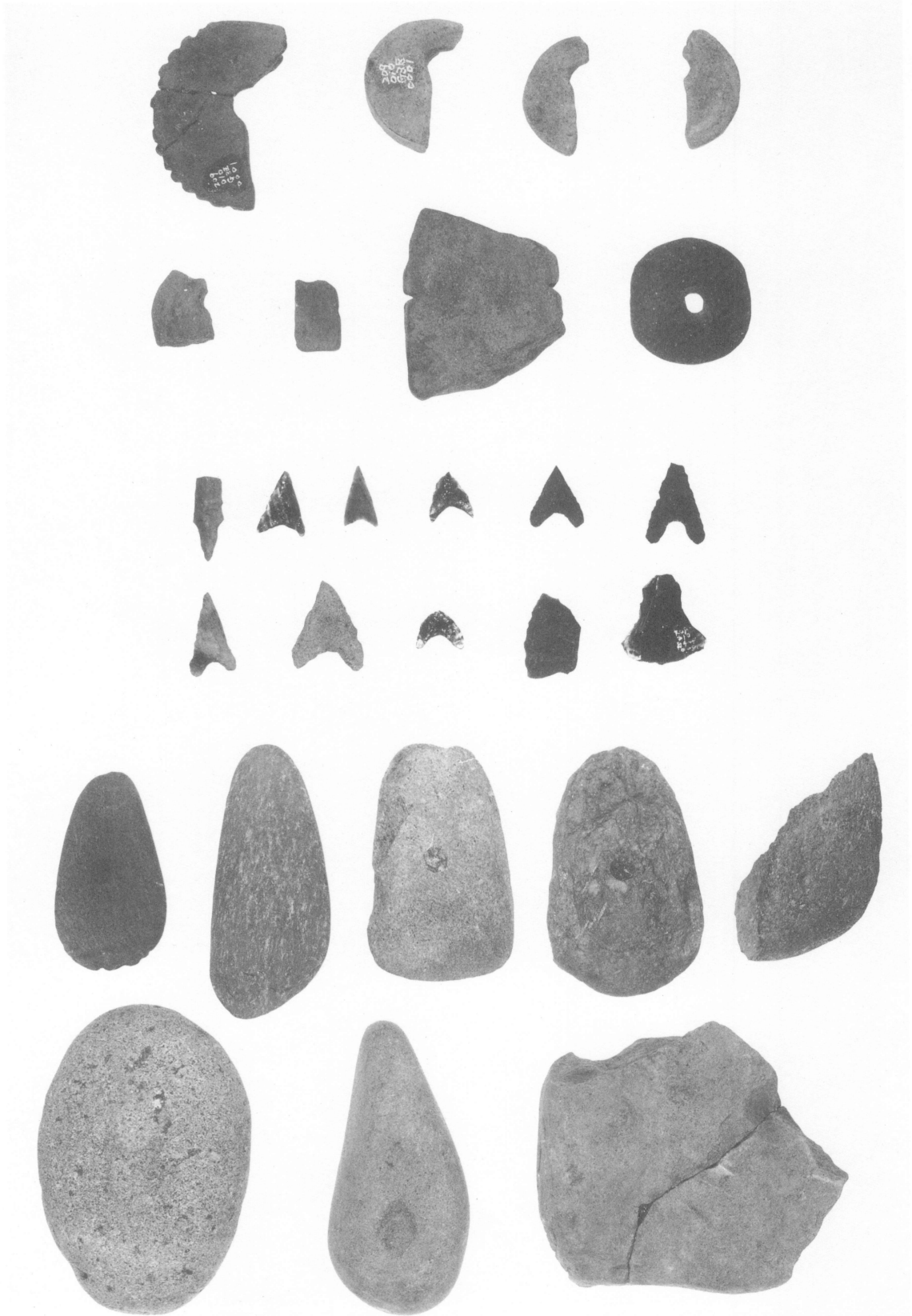
グリット出土縄文土器



グリット出土縄文土器



グリット出土縄文土器



グリット出土土製品・石器



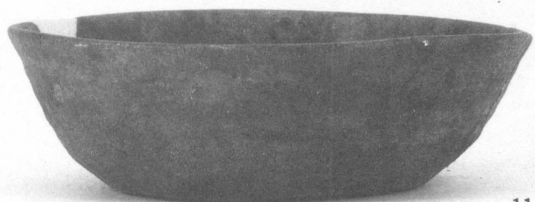
1



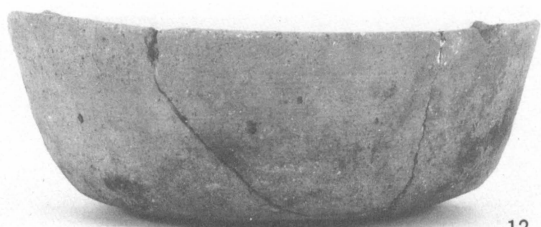
3



7



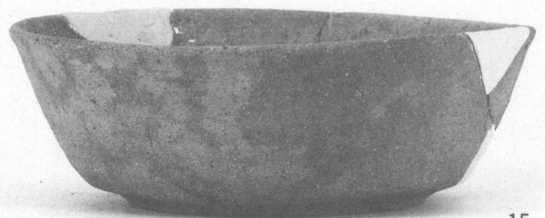
11



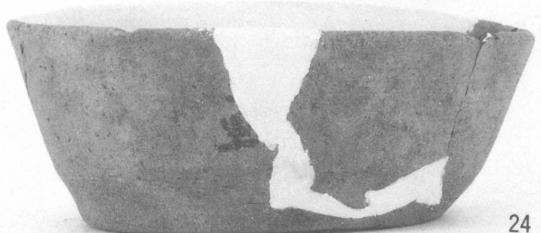
12



14



15



24



26



27



28



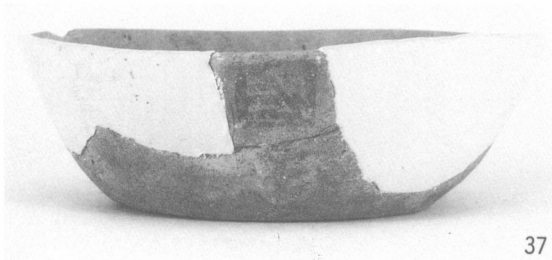
30



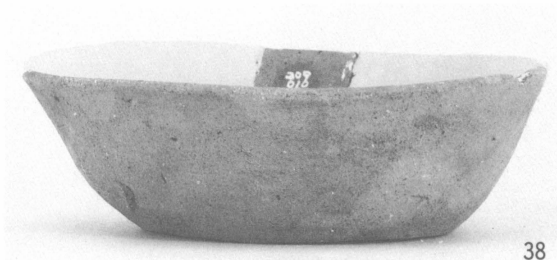
32



34



37



38



61



73



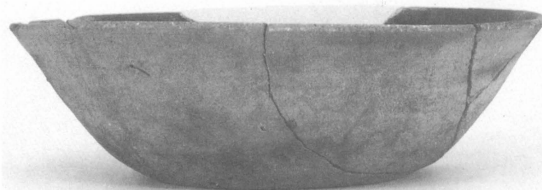
79



91



92



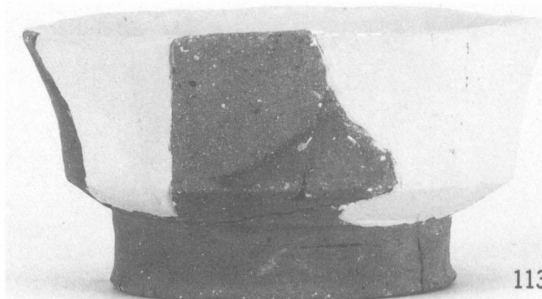
101



106



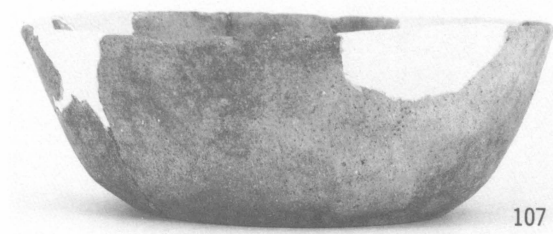
109



113



122



107



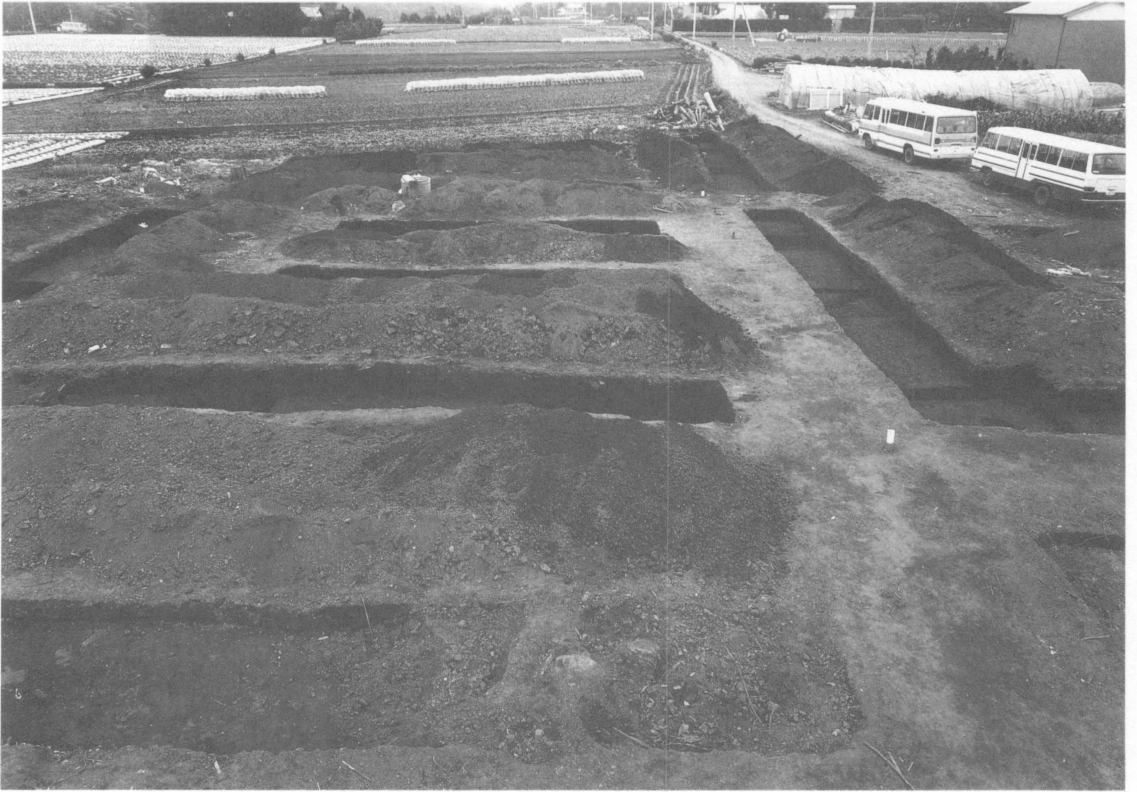
111



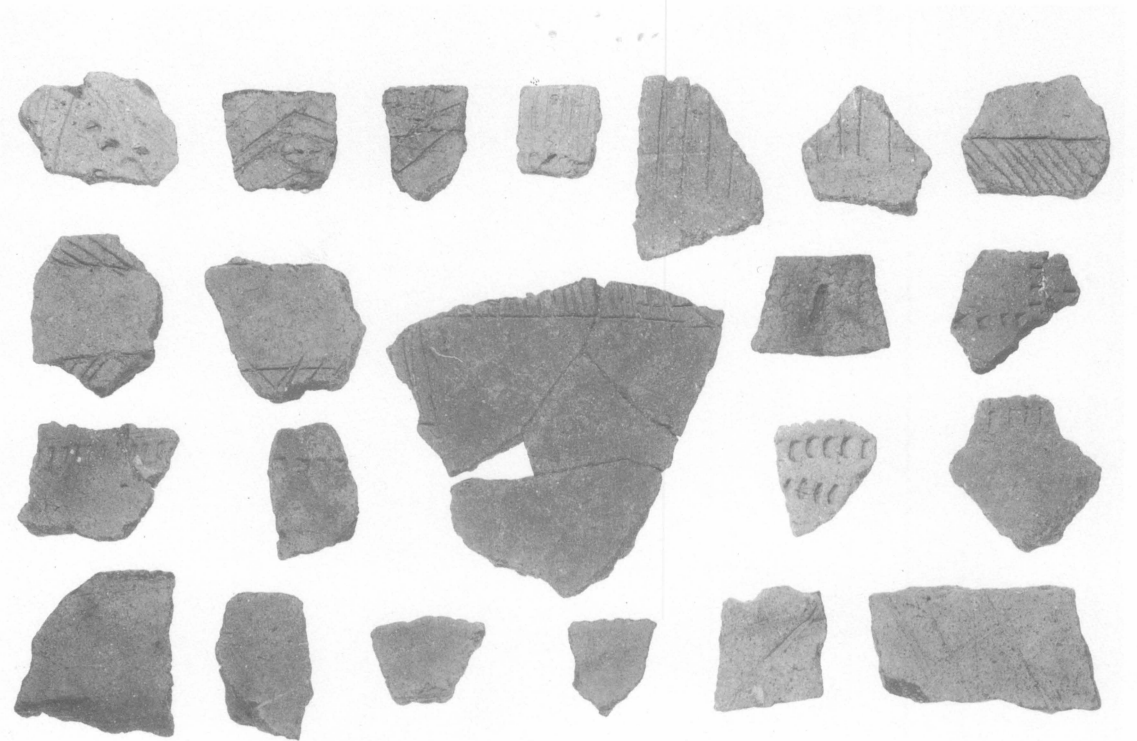
129



墨書土器 (赤外線テレビ撮影)



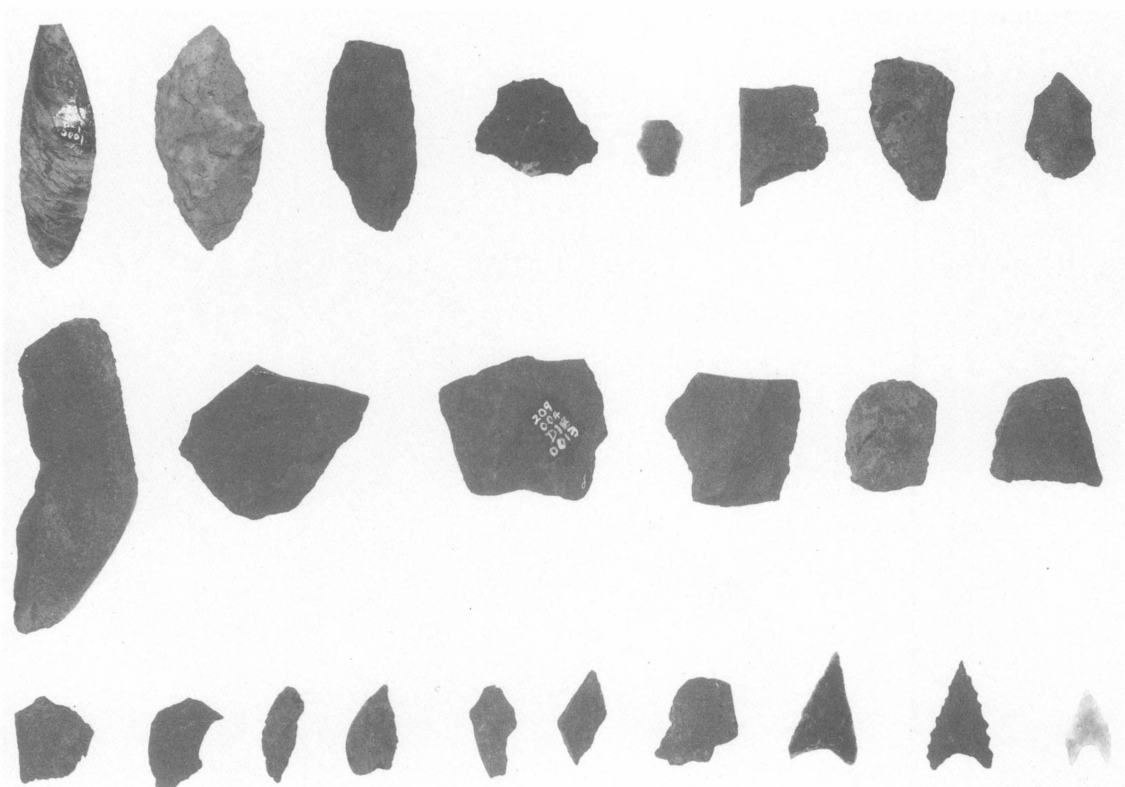
1. 遺跡全景



2. グリット出土縄文土器



1. 遺跡全景



2. グリット出土石器



1. 遺跡全景（深沢第2遺跡）



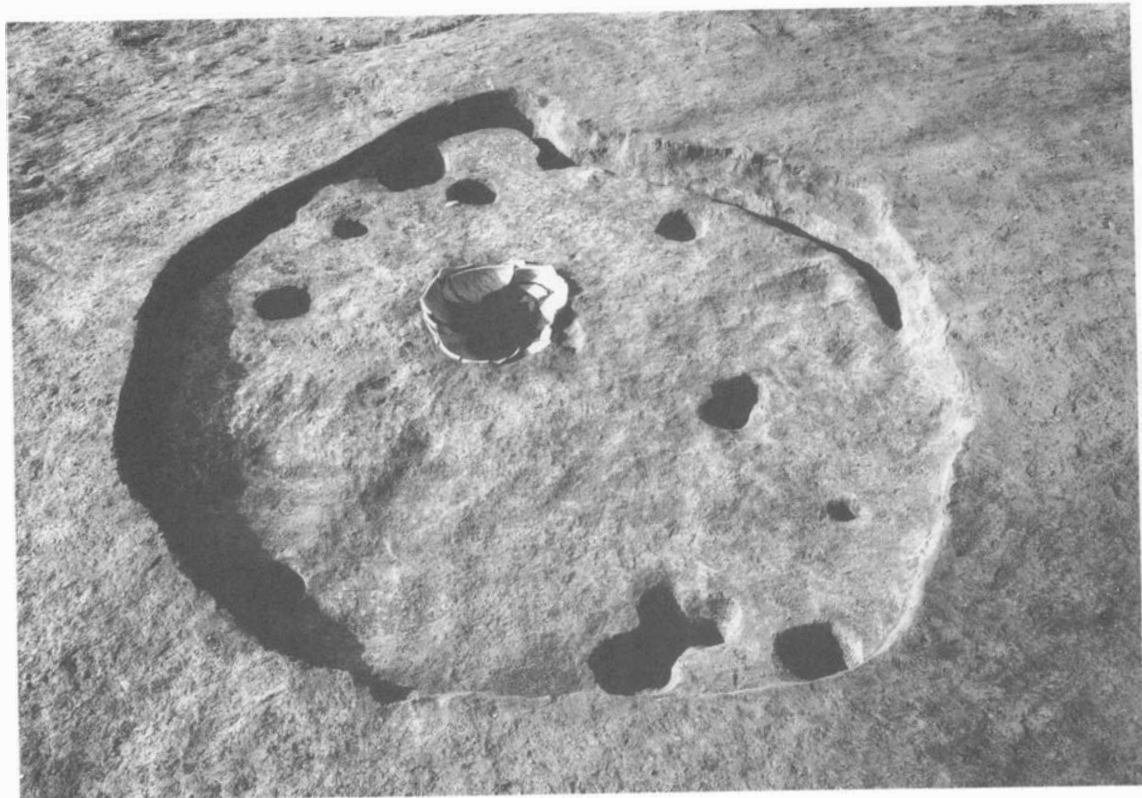
2. 遺跡全景（山王遺跡）



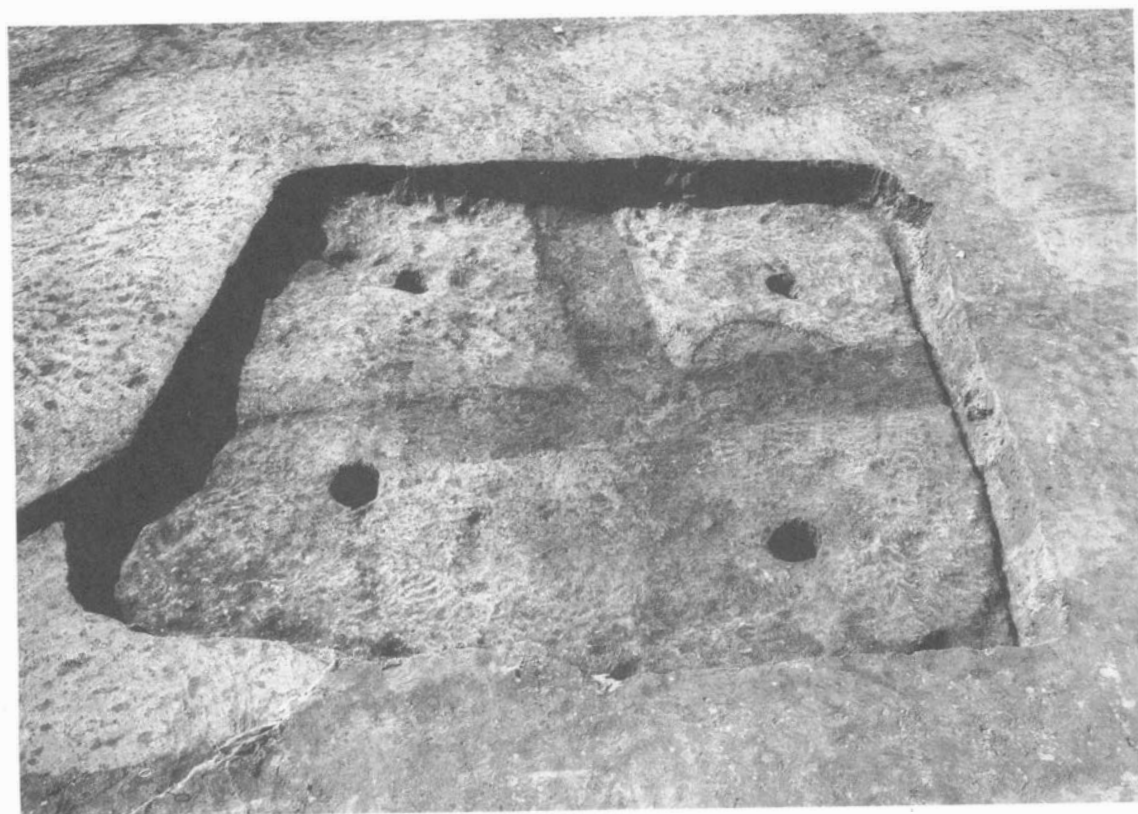
1. 遺跡遠景



2. 遺構状況



1. 001号住居跡



2. 002号住居跡



1. 003号住居跡



1 (001)

1 (003)

2. 住居跡出土土器



1. 遺跡全景 (鳥ヶ丘第1遺跡)



2. 遺跡全景 (鳥ヶ丘第2遺跡)



1. 遺跡全景



2. 馬土手断面

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書IV

印刷 昭和63年3月20日

発行 昭和63年3月30日

発行 日本道路公団東京第一建設局
東京都港区虎ノ門1-18-1 (03)502-7431

編集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2-10-1 (0472)25-6478

印刷 株式会社 太陽堂印刷所
千葉市末広1-4-27 (0472)22-1121(代)
